

小町田遺跡

国道122号(太田バイパス)道路改良工
事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

1984

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

小町田遺跡

国道122号(太田バイパス)道路改良工
事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

1984

序

昭和53年度は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が、旧前橋土木事務所の建物を借用して、嚙々の声をあげた記念すべき年でありま
す。設立された当初の、当事業団の組織・設備などきびしい状況のな
かであって、職員は埋蔵文化財の保護に使命感を燃やし、一体となっ
て遺跡の調査に取り組んできました。

国道122号バイパス建設地内における埋蔵文化財の発掘調査は、当事
業団発足後早々に着手した事業であり、発足当初の様々な困難を、一
つ一つ克服しつつすすめられてきた調査であります。ここに報告する
小町田遺跡もその一つです。調査報告書として、その成果をここに公
表するにあたり、その感慨もまたひとしおであります。

小町田遺跡は、水田地帯という低地帯にひろがる遺跡ですが、縄文
時代、古墳時代、奈良・平安時代と各時期の住居跡等が3層にわたっ
て発見され、群馬県平野部の低地帯における集落の研究をすすめる上
で貴重な資料を得ることができました。

これら資料は、地域の歴史を解明していく上で欠かせないものであ
りますが、今後、本報告書がそのための基礎資料として有効に活用さ
れんことを切に期待いたします。

発掘調査から報告書刊行にいたるまでの間、終始御指導、御協力を
いただいた県教育委員会、土木部等の関係諸機関、そして、直接調査
や整理に携わった担当者をはじめとする多くの方々に厚く感謝の意を
表し序といたします。

昭和59年12月

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎

例 言

1. 本書は、国道122号線太田バイパス建設に伴って実施した、小町田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は群馬県太田市竜舞字小町田・八叭に所在する。本調査区に接する東側部分を、太田東部地区圃場整備事業に伴い、県教育委員会文化財保護課が昭和53・54年度に発掘調査を実施しており、この地区に小町田遺跡の名称をあたえている。県教育委員会調査部分と本調査区は同一の遺跡と判断できるので、混乱をまねく名称をさけて「小町田遺跡」で統一した。
3. 発掘調査は、県土木部（道路建設課）の委託により、予備調査は県教育委員会文化財保護課が、本調査は群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。調査年月日は次のとおりである。

予備調査（分布・試掘調査） 昭和52年12月7日～同年12月16日

本調査 昭和54年1月10日～同年11月2日

4. 調査組織は次のとおりである。

事務担当 小林起久治、森田秀策、阿久津宗二、井上唯雄、飯塚喜代子、国定 均

調査担当 右島和夫 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員
(現在、勢多郡北橋村教育委員会指導主事)

藤巻幸男 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員

小島敦子 // //

調査員 小島純一 // 嘱託員
(現在 勢多郡粕川村教育委員会)

木津博明 群馬県埋蔵文化財調査事業団嘱託員

(現在 同事業団調査研究員)

5. 本書作成の担当は次のとおりである。

編集 小島敦子、藤巻幸男

本文執筆 右島和夫 II-3、III-2・3・4（遺構）、IV-2

小島純一 III-1（草創期）

小島敦子 II-1、III-2・3・4（遺物）

藤巻幸男 I-1・2・3・4、II-2・3、III-1、IV-1

遺構写真 右島和夫、小島敦子、藤巻幸男

遺物写真 佐藤元彦 群馬県埋蔵文化財調査事業団嘱託員

図版作成 内田京子、手賀瑞枝、宮崎由美子、新井サイ子、山田光子、吉本千保、須田幸子、大塚千織、須田まさえ、井野みゆき、新井悦子、荻原弘子、高橋順子、平沢あや女、小池信子（群馬県埋蔵文化財調査事業団）

岡屋紀子（国学院大学） 株式会社測研

6. 石器の石材鑑定は、下記の二氏に御協力いただいた。記して感謝いたします。

田中宏之 群馬県立博物館学芸員

飯島静夫 群馬県地質研究会

7. 火山噴出物の識別同定について、群馬大学教育学部教授 新井房夫氏の御協力をいただいた。

8. 本遺跡調査区周辺のボーリング調査について、県教育委員会文化財保護課主任 能登 健氏、および東京都立大学大学院 早田 勉氏に御指導・御協力をいただいた。
9. 発掘調査および本書の作成にあたり、下記の諸氏より御助言・御協力を得た。記して感謝の意を表したい。(敬称略)
新井和之、島田恭二、寺内敏郎、中里吉伸、檜崎彰一、能登 健、古屋雄貴、宮田 毅、岡屋紀子
太田市教育委員会
10. 夏期2週間にわたり、以下の学生発掘調査参加があった。
上守秀明、佐藤尚子、金丸真紀子、菊地由利子、久保秀康、桜井英幸、中村正明、橋本園美、宮下知良、村松 篤、芦田優子、窪田晃久、斎藤幸恵、斎藤真理子、杉山秀宏、鈴木瑛子、店橋初恵、林 正樹
11. 出土遺物・資料類は一括して群馬県埋蔵文化財センターに保管してある。
12. 発掘調査にあたって作業に従事し、また多くの便宜を図っていただいた地元の方々に感謝いたします。

凡 例

1. 挿図縮尺は特に指定のない限り以下のとおりである。

遺構	IV-1	(縄文時代)	住居址	1/60	土 壇	1/40、1/80
	IV-2～4	(古墳～平安時代)	住居址	1/80	カマド	1/60
遺物	IV-1	(縄文時代)	完形土器	1/6	拓本・石器	1/3
	IV-2～4	(古墳～平安時代)	壺・甕	1/4	坏	1/3
2. 遺構図の方位記号は磁北をあらわす。
3. 遺構図のうち、出土遺物および出土位置ドット(●)に付けられた数字は、遺物実測図の番号と一致する。
4. 縄文時代の遺構図(III-1)中の P₁・P₂ はピットナンバーを表わし、ピット内の数字は、床面からの深さ(単位:cm)を表わす。また、土層断面図のスクリーントーン部分は、耕作土・攪乱を示す。
5. 古墳～平安時代の遺構図(III-2～4)中の破線は復元した線を表わす。また、重複した遺構では、先出の住居址について述べる時、先出の遺構の平面プランを確認し得たときは、そのプランは実線とした。
6. 遺構出土遺物の番号は、遺構ごとに通し番号となっている。
ただし、縄文時代の土壇出土土器のみ、図版毎に通し番号にしてある。
7. 遺物実測中に使用したスクリーントーンは次の事項をあらわす。

	胎土に繊維を含む縄文土器
	黒色処理および細かな篋磨きが施された平安時代の土器
8. 本書III-2～5については、紙面の都合上、遺構と構物を各節ごとにまとめた。本文および遺物観察表にそれぞれ対応する頁を INDEX として掲げたので御活用願いたい。
9. 巻末の遺物写真の縮尺は統一されていない。

目 次

I	発掘調査と遺跡の概要	
1	発掘調査に至る経緯	3
2	調査の方法と概要	3
3	遺跡の位置と範囲	5
4	基本層序	5
II	小町田遺跡の生活環境	
1	小町田遺跡の地形環境	6
2	小町田遺跡と周辺の遺跡分布	10
3	小町田遺跡の変遷	14
III	検出された遺構と遺物	
1	縄文時代の遺構と遺物	21
	草創期	21
	早期	21
	前期	22
	中期	31
	後期	143
	遺構外出土の土製品	158
	遺構外出土の石器類	159
2	古墳時代の遺構と遺物	167
3	奈良時代の遺構と遺物	213
4	平安時代の遺構と遺物	233
IV	成果と問題点	
1	縄文時代	275
2	古墳～平安時代	279

文献目録

写真図版

遺構全体図

挿 図 目 次

第 1 図 小町田遺跡の位置…………… 4	第 54 図 114号住居址出土遺物 ……65
第 2 図 基本土層…………… 5	第 55 図 112号住居址 ……67
第 3 図 周辺の地形分類図…………… 7	第 56 図 20号住居址……………68
第 4 図 小町田遺跡の範囲とボーリング地点…………… 8	第 57 図 // 出土遺物……………69
第 5 図 遺跡と周辺の土層柱状図…………… 9	第 58 図 24号住居址……………70
第 6 図 周辺の遺跡分布図……………11	第 59 図 // 炉……………71
第 7 図 小町田遺跡遺構分布図 (1) ……15	第 60 図 // 出土遺物 (1) ……73
第 8 図 // (2) ……19	{ } { } { }
第 9 図 有舌尖頭器……………21	第 65 図 // // (7) ……79
第 10 図 早期の土器……………21	第 66 図 110号住居址 ……80
第 11 図 116号住居址 ……22	第 67 図 // 出土遺物 ……81
第 12 図 // 出土遺物……………22	第 68 図 21号住居址……………82
第 13 図 117号住居址 ……23	第 69 図 // 出土遺物 (1) ……82
第 14 図 // 出土遺物……………24	{ } { } { }
第 15 図 52号土壇……………25	第 71 図 // // (3) ……84
第 16 図 土壇 (88・89号土壇 87号土壇) ……26	第 72 図 22号住居址……………85
第 17 図 土壇出土遺物 (52・89・87・95号土壇) ……27	第 73 図 // 出土遺物……………85
第 18 図 遺構外出土土器……………29	第 74 図 25号住居址……………86
第 19 図 // ……30	第 75 図 // 出土遺物……………87
第 20 図 2号住居址……………31	第 76 図 107号住居址 炉 ……88
第 21 図 // 出土遺物 (1) ……31	第 77 図 // 出土遺物 (1) ……88
第 22 図 // // (2) ……32	第 78 図 // // (2) ……89
第 23 図 104号住居址 ……33	第 79 図 108号住居址 ……90
第 24 図 // 出土遺物……………34	第 80 図 // 出土遺物 (1) ……90
第 25 図 23号住居址……………35	第 81 図 // // (2) ……91
第 26 図 // 出土遺物 (1) ……36	第 82 図 111号住居址 ……92
第 27 図 // // (2) ……37	第 83 図 // 出土遺物 (1) ……93
第 28 図 106号住居址 ……38	第 84 図 // // (2) ……94
第 29 図 // 出土遺物……………38	第 85 図 113号住居址 ……95
第 30 図 102号住居址……………39	第 86 図 // 出土遺物 ……96
第 31 図 // 出土遺物……………39	第 87 図 118号住居址 ……97
第 32 図 103号住居址……………40	第 88 図 1・2・3号埋設土器……………98
第 33 図 // 出土遺物……………40	第 89 図 4号埋設土器……………99
第 34 図 119号住居址 ……41	第 90 図 5・6号埋設土器 ……100
第 35 図 // 出土遺物 ……43	第 91 図 Aブロック土壇群 ……102
第 36 図 105号住居址 ……44	第 92 図 9号土壇出土遺物の位置 ……103
第 37 図 // 出土遺物 ……45	第 93 図 Bブロック土壇群……………103
第 38 図 120号住居址 ……46	第 94 図 Cブロック // ……104
第 39 図 // 遺物出土状態 ……47	第 95 図 Dブロック // ……105
第 40 図 // 出土遺物 (1) ……49	第 96 図 Eブロック // ……105
{ } { } { }	第 97 図 Fブロック // ……106
第 46 図 // // (7) ……57	第 98 図 Gブロック // ……106
第 47 図 100・101号住居址……………59	第 99 図 Hブロック // ……107
第 48 図 100号住居址出土遺物 ……60	第 100 図 Iブロック // ……108
第 49 図 101号 // ……61	第 101 図 Jブロック内の土壇 ……109
第 50 図 121号住居址 ……62	第 102 図 Jブロック土壇群 ……110, 111
第 51 図 // 出土遺物 (1) ……63	第 103 図 ブロック以外の土壇 ……112
第 52 図 // // (2) ……64	第 104 図 土壇出土遺物……………117
第 53 図 114号住居址 ……65	{ } { } { }

第110図	土坑出土遺物	123	第172図	75号住居址出土遺物(2)	202
第111図	A'-21・22グリッド出土遺物	132	第173図	〃 (3)	204
第112図	遺構外出土土器(1)	133	第174図	〃 (4)	205
{	{	{	第175図	77・78号住居址出土遺物	207
第120図	〃 (9)	141	第176図	81号住居址出土遺物(1)	209
第121図	5号住居址	143	第177図	〃 (2)	210
第122図	〃 出土遺物(1)	144	第178図	82号住居址出土遺物	211
第123図	〃 〃 (2)	145	第179図	80号住居址 〃	212
第124図	115号住居址	146	第180図	11号住居址実測図	213
第125図	土坑	147	第181図	14号住居址 〃	213
第126図	〃 出土遺物(1)	148	第182図	16号住居址 〃	214
第127図	〃 〃 (2)	149	第183図	27号住居址 〃	214
第128図	後期遺物の集中出土地点	151	第184図	49号住居址 〃	215
第129図	遺構外出土土器(1)	153	第185図	52号住居址 〃	215
{	{	{	第186図	54号住居址 〃	216
第133図	〃 (5)	157	第187図	67号住居址 〃	220
第134図	遺構外出土の土製品	158	第188図	64号住居址 〃	217
第135図	遺構外出土石器	161	第189図	〃 カマド遺物出土状態図	217
第136図	〃	162	第190図	58・59号住居址実測図	218
第137図	遺構外出土石製品	163	第191図	69号住居址実測図	219
第138図	12号住居址実測図	167	第192図	70号住居址 〃	219
第139図	15号住居址 〃	167	第193図	1号溝土層断面図	220
第140図	42号住居址 〃	168	第194図	11・16・54・58号住居址出土遺物	222
第141図	53号住居址 〃	168	第195図	27号住居址出土遺物	224
第142図	65・66号住居址実測図	168	第196図	49号住居址 〃	225
第143図	68号住居址実測図	169	第197図	64号住居址 〃 (1)	227
第144図	〃 カマド遺物出土状態図	170	第198図	〃 〃 (2)	228
第145図	71号住居址実測図	170	第199図	67・70号住居址 〃	229
第146図	〃 貯蔵穴遺物出土状態図	171	第200図	1号溝出土遺物(1)	230
第147図	75号住居址実測図	171	第201図	〃 (2)	232
第148図	74号住居址 〃	172	第202図	1号住居址実測図	233
第149-1図	〃 カマド遺物出土状態図	173	第203図	6・7・13号住居址実測図	233
第149-2図	貯蔵穴周辺遺物出土状態図	174	第204図	8・9号住居址 〃	234
第150図	77号住居址実測図	175	第205図	8号住居址カマド遺物出土状態図	234
第151図	78号住居址 〃	175	第206図	10号住居址実測図	235
第152図	81号住居址 〃	176	第207図	29号住居址 〃	235
第153図	〃 カマド遺物出土状態図	176	第208図	17・18号住居址実測図	236
第154図	82号住居址実測図	178	第209図	30号住居址実測図	236
第155図	80号住居址 〃	178	第210図	32号住居址 〃	237
第156図	43号住居址 〃	179	第211図	47号住居址 〃	237
第157図	4～8号井戸実測図	179	第212図	34号住居址カマド遺物出土状態図	238
第158図	12号住居址出土遺物	180	第213図	〃 実測図	238
第159図	15号住居址 〃	182	第214図	33号住居址 〃	239
第160図	42号住居址 〃	183	第215図	37号住居址 〃	239
第161図	43号住居址 〃	184	第216図	40号住居址 〃	240
第162図	53号住居址 〃	186	第217図	41号住居址 〃	240
第163図	65号住居址 〃	187	第218図	51号住居址カマド遺物出土状態図	241
第164図	66号住居址 〃	188	第219図	〃 実測図	241
第165号	68号住居址 〃	190	第220図	56号住居址実測図	242
第166図	71号住居址出土遺物(1)	192	第221図	61号住居址 〃	242
第167号	〃 (2)	193	第222図	62号住居址 〃	243
第168図	74号住居址出土遺物(1)	195	第223図	63号住居址 〃	243
第169図	〃 (2)	197	第224図	72・73号住居址実測図	244
第170図	〃 (3)	198	第225図	76号住居址実測図	244
第171図	75号住居址出土遺物(1)	200	第226図	36号住居址 〃	245

第 227 図	45号住居址実測図	245	第 245 図	26・28・29・31号住居址出土遺物	258
第 228 図	48号住居址	245	第 246 図	32号住居址出土遺物	261
第 229 図	26号住居址	246	第 247 図	33・34号住居址出土遺物	262
第 230 図	35号住居址	246	第 248 図	35・36・38号住居址出土遺物	264
第 231 図	50号住居址	246	第 249 図	40号住居址出土遺物	264
第 232 図	55号住居址	246	第 250 図	41・44・47・48号住居址出土遺物	266
第 233 図	28号住居址	247	第 251 図	45号住居址出土遺物	268
第 234 図	31号住居址	247	第 252 図	51号住居址	270
第 235 図	38号住居址	247	第 253 図	56号住居址	272
第 236 図	44号住居址	247	第 254 図	55・72・76・83号住居址出土遺物	273
第 237 図	3号住居址	248	第 255 図	中期土器の時期区分(1)	276
第 238 図	1・2号井戸実測図	248	第 256 図	〃 (2)	277
第 239 図	1・2号掘立柱建物址実測図	249	第 257 図	古墳時代の土器変遷	280
第 240 図	3号掘立柱建物址実測図	250	第 258 図	賀茂遺跡における平安時代の土器変遷	281
第 241 図	1・3号住居址出土遺物	251	第 259 図	住居址の平面規模	282
第 242 図	8・9・14・17・18・19号住居址出土遺物	253	第 260 図	住居址の主軸方位	283
第 243 図	10号住居址出土遺物	255	付 図	遺構全体図	
第 244 図	6・7・13号住居址出土遺物	256			

写 真 図 版

縄文時代の住居址…………… P L 3～16

縄文時代の土坑…………… P L 17～25

埋設土器・グリッド…………… P L 25～28

縄文時代の遺物…………… P L 45～77

古墳時代の住居址…………… P L 29～38

奈良・平安時代の住居 …… P L 39～44

古墳時代の遺物…………… P L 78～85

奈良・平安時代の遺物…………… P L 85～90

P L 1-1	本調査前の状況(北から)		P L 10-3~4	106号住居址	全景他
2	1区・2区の調査(北から)		5	107号住居址	石囲炉
P L 2-1	基準土層(E-35グリッド西壁)		6	110号住居址	全景
2	基準土層(E-47グリッド西壁)		7~8	108・110号住居址	遺物出土状態他
3	埋没沼の土層堆積状態		P L 11-1-3	111号住居址	全景他
4	同 軽石層の埋積状態		4~8	112号住居址	全景他
5	遺構検出作業(南側部分)		P L 12-1-6	113号住居址	全景他
6	遺構検出作業		7	114号住居址	全景他
7	グリッド調査(2区)		P L 13-1	115号住居址	全景(南から)
8	排水作業(C-23グリッド周辺)		2	116号住居址	全景(東から)
P L 3-1	1~3区縄文遺構全景(南から)		3	117号住居址	全景(南から)
2~3	2号住居址	遺物出土状態	4	118号住居址	全景(東南から)
4~5	5号住居址	全景他	5	119号住居址	(南から)
P L 4-1~4	20号住居址	遺物出土状態	6~8	121号住居址	全景他
5~6	21号住居址	石囲炉他	P L 14-1~2	120号住居址	遺物出土状態他
7~8	22号住居址	遺物出土状態他	P L 15-1~8	同上	
P L 5-1~4	23号住居址	遺物出土状態他	P L 16-1~2	同上	
5~8	25号住居址	遺物出土状態他	P L 17-1	4号住居址	セクション
P L 6-1~8	24号住居址	全景他	2	6号土坑	
P L 7-1	同上		3	7号土坑	
2~5	100・101号住居址	全景他	4	8号土坑	
P L 8-1~3	同上		5	12号土坑(2号住居址内)	
4~6	100号住居址	遺物出土状態	P L 17-6	13・14号土坑(2号住居址内)	
7~8	101号住居址	集石・炉	7	15号土坑	
P L 9-1~4	102号住居址	全景他	8	16号土坑	
P L 10-1	104号住居址	(西から)	P L 18-1~8	9号土坑	全景他
2	105号住居址	(南から)	P L 19-1~2	22号土坑	全景他

P L 19—3	17・18・19号土塚	P L 29—1	古墳～平安時代の遺構群 (南 側)
4	24号土塚	2	〃 (中央部)
5	26・27号土塚	P L 30—1～2	12号住居址 全景他
6	26号土塚 浅鉢の出土状態	3～4	15号住居址 全景他
7～8	28号土塚 全景他	5～6	43号住居址 全景他
P L 20—1～3	31号土塚 セクション	7～8	42号住居址 全景他
4	32号土塚	P L 31—1～2	53号住居址 全景他
5	33号土塚	3～4	65・66号住居址 全景他
6	36号土塚	5	65号住居址 カマド
7	38・39号土塚	6	66号住居址 カマド
8	41号土塚	7～8	68号住居址 全景他
P L 21—1	42号土塚	P L 32—1～4	71号住居址 全景他
2	43号土塚	5～8	74号住居址 遺物出土状態他
3	44号土塚	P L 33—1～4	75号住居址 遺物出土状態他
4	45号土塚	5	78号住居址 全景 (西から)
5	46号土塚	6	77号住居址 全景 (西から)
6	49号土塚 一括土器出土状態	7～8	81号住居址 全景他
7	50号土塚	P L 34—1～2	同上
8	51号土塚 セクション	3～5	82号住居址 全景他
P L 22—1	同 全景	6	3号井戸
2	54号土塚 セクション	7	4～7号井戸
3	55・56・65号土塚	8	1・2号井戸
4	55号土塚 浅鉢出土状態	P L 35—1	11号住居址 カマド
5	56号土塚	2	10・11号住居址 掘り方全景 (南から)
6	57号土塚	3～4	16号住居址 全景他
7	59号土塚	5～8	27号住居址 全景他
8	60号土塚	P L 36—1～2	49号住居址 全景他
P L 23—1	74号土塚	3	52号住居址 全景 (南から)
2	83号土塚	4～5	54号住居址 全景他
3	84号土塚	6～7	67号住居址 全景他
4	85号土塚	P L 37—1～3	64号住居址 全景他
5	88・89号土塚	4	70号住居址 全景 (南から)
6	90号土塚	5～6	64号住居址 全景他
7	95・96号土塚	7～8	80号住居址 全景他
8	100号土塚	P L 38—1	58・59号住居址 全景 (東から)
P L 24—1	101号土塚	2～6	1号溝 全景他
2	102号土塚	P L 39—1～2	1号住居址 全景他
3	104号土塚	3	6・7・13号住居址 全景 (西から)
4	105・106号土塚	4	7号住居址 全景
5～6	108号土塚	5	8・9号住居址 全景 (西から)
7	110号土塚・5号埋設土器	6	8号住居址 カマド
8	111号土塚・6号埋設土器	7～8	9号住居址 カマド・重複する灰層
P L 25—1	113号土塚	P L 40—1～4	10号住居址 全景他
2	115号土塚	5	17・18号住居址 全景 (西から)
3	121号土塚	6	18号住居址 カマド
4	122号土塚	7	29号住居址 全景 (西から)
5～8	D-22グリッド 遺物出土状態	8	30号住居址 全景 (西から)
P L 26—1～3	D-20グリッド 遺物出土状態	P L 41—1～2	32号住居址 全景他
4～5	C-20グリッド 遺物出土状態	3～4	34 34号住居址 全景他
P L 27—1	1号埋設土器 (B-23グリッド)	5	39号住居址 全景 (西から)
P L 27—2	4号埋設土器 (D-26グリッド)	P L 41—6	発掘作業状況
3～8	C-24グリッド 遺物出土状態他	7～8	40号住居址 全景他
P L 28—1～2	C・D-24・25グリッド 遺物出土状態他	P L 42—1～2	41号住居址 全景他
3～4	D-24グリッド	3～4	51号住居址 全景他
5	C-48グリッド 深鉢形土器の単独出土	5	47号住居址 全景 (西から)

6～7	56号住居址	全景他	P L 68—1～4	遺構外出土土器	
8	60号住居址	全景（西から）	P L 69—1～4	遺構外出土土器	
P L 43—1～2	61号住居址	全景他	P L 70—1	有舌尖頭器	
3～4	63号住居址	全景他	2	石錐	
5～6	45号住居址	全景他	3	石鏃	
7～8	55号住居址	全景他	4	本遺跡出土黒曜石片の総数	
P L 44—1	31号住居址	全景（西から）	5	住居址出土土器	磨製石斧・敲石他
2	38号住居址	全景（西から）	6	住居址出土土器	剥片石器・打製石斧
3～4	44号住居址	全景他	P L 71—1	住居址出土土器	打製石斧
5	3号住居址	全景（西から）	2	住居址出土土器	磨石
6	1・2号掘立柱建物址	全景（南から）	3	住居址出土土器	磨石
P L 45	2・23・120号住居址出土遺物		4	土坑出土石器	打製石斧・敲石・磨製石斧
P L 46	117・120号住居址出土遺物		P L 72—1	土坑出土石器	磨石
P L 47	100・119・120・121号住居址出土遺物		2	遺構外出土土器	局部磨製石斧・磨製石斧
P L 48	20・24号住居址出土遺物		3	遺構外出土土器	剥片石器・小型打製石斧
P L 49	24・120号住居址出土遺物		4	遺構外出土土器	敲石
P L 50	21・22・25・108・120号住居址出土遺物		P L 73—1	遺構外出土土器	打製石斧
P L 51	完形・復元土器		2	遺構外出土土器	打製石斧
P L 52	//・//		3	遺構外出土土器	砥石・特殊石器
P L 53	//・//		4	遺構外出土土器	磨石
P L 54	//・//		P L 74—1	遺構外出土土器	磨石
—1	土製品・軽石製品他		2	石皿	
2	形象把手・土偶		3	多孔石	
3	土製円盤（グリッド出土）		4	石皿	
P L 55—1～4	住居址出土土器		P L 75—1	石皿	
	（2・23・103・104・106・116・117号）		2	石皿（5号住居址出土）	
P L 56—1～4	住居址出土土器（119・120号）		3	石棒（B—29G）	
P L 57—1～4	住居址出土土器		4	21号住居址石囲い炉に使用されていた石柱と石器	
	（100・101・105・112・110・24号）		P L 76—1	早期・前期の土器	
P L 58—1～4	住居址出土土器（24号）		2～9	特殊縄文集成	
P L 59—1～4	住居址出土土器（113・111・22・25号）		P L 77	縄文土器展開写真集成	
P L 60—1	住居址出土土器（5号）		P L 78	15・42・43・53・65号住居址出土遺物	
2～3	土坑出土土器		P L 79	66・68・71号住居址出土遺物	
	（87・8・105・62・57・28・122・77・78・79号）		P L 80	71・74号住居址出土遺物	
P L 61—1～4	土坑出土土器		P L 81	74・75号住居址出土遺物	
	（83・9・121・49・120・26・106・124・100号）		P L 82	75号住居址出土遺物	
P L 62—1～4	土坑出土土器		P L 83	75号住居址出土遺物	
	（22・115・120・44・34・12・13・27・54・6・102・125・108号）		P L 84	78・80・81・82号住居址出土遺物	
P L 63—1～3	土坑出土土器		P L 85	81・16・27・64号住居址出土遺物	
	（11・21・7・4・10・31号）		P L 86	67・80号住居址、1号溝出土遺物	
4	遺構外出土土器		P L 87	1・3・6・7・8・9・10号住居址出土遺物	
P L 64—1～4	遺構外出土土器		P L 88	18・28・29・32・34・38・40・41・44号住居址出土遺物	
P L 65—1～4	遺構外出土土器		P L 89	41・45・47・51・55・56号住居址出土遺物	
P L 66—1～4	遺構外出土土器		P L 90	63・72・76・77号住居址出土遺物	
P L 67—1～4	遺構外出土土器				

表 目 次

表—1	土坑一覧	124. 125	表—3	土坑出土土器一覧	166
表—2	住居址出土土器一覧	165. 166			

小町田遺跡

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 発掘調査に至る経緯

太田市街地内の交通渋滞を緩和する目的で計画された国道122号バイパスは、昭和52年に路線計画が発表された。それによると、竜舞地区で本線と分岐し、下小林地区を経由して北部環状線をこえ、只上地区で国道50号バイパスにとりつく路線である。

このバイパス建設工事に関連して、竜舞、下小林の2地区にわたる延長3kmの間については、埋蔵文化財包蔵地が含まれていることから、県教育委員会、土木部(道路建設課)、太田土木事務所の三者で協議、調整を図り県教育委員会が改めて分布調査を実施した。その結果、仮称A～G地点にいたる7地点、約30,000㎡の地域が調査対象地としてあげられた。しかし、表面採集による分布調査では各遺跡の遺構の有無、遺跡の範囲等で不明確な点も多いため、直接工事を担当する太田土木事務所と県教育委員会とで再度協議し、対象地7地点について試掘調査を実施することで合意、昭和52年12月になって、県教育委員会文化財保護課による試掘調査が行われた。その結果、次の6ヶ所について本調査を実施することで合意された。

地点	遺跡名	分布調査、試掘調査による対象面積	備考	
			実調査面積	
A	小町田	7,000㎡	6,300㎡	
B	—	—	—	試掘調査の結果、旧状は湿地帯と見られ、遺構確認されないため対象から除外。
C	賀茂	8,000		
D	—	2,500		C地点寄りに遺構集中、本調査に際してはC地点と総合し賀茂遺跡とする。
E	庚塚	3,100	3,100	
F	上	2,160	2,160	
G	雷	1,450	1,450	

以上の調整に基づいて、発掘調査は、昭和53年7月に発足した財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の事業として実施することとなり、県教育委員会、県土木部(道路建設部)、太田土木事務所、(財)埋蔵文化財調査事業団とで細部の調整をした後、群馬県知事と埋蔵文化財調査事業団理事長との間で委託契約が結ばれた。

調査は、昭和53年8月から昭和55年1月までの2年次にわたって実施することとなり、昭和53年度はE・F・G地点が発掘調査された。小町田遺跡は昭和54年1月から調査を開始した。

2. 調査の方法と概要

発掘調査以前に、調査区域はすでに上面を重機により削平されており、現状は雑草の生い茂る荒地であった。すでに床面付近まで削平された遺構も散見され、遺物の分布もほぼ全体にわたって認められた。また、調査区内にはかなりの湧水が認められ、抜本的な湧水対策の必要性が生じていた。

以上のことから、発掘調査は路線内の全面発掘を原則とし、重機により遺構確認面まで削平することにし

I 発掘調査と遺跡の概要

た。湧水対策としては、標高の低い北側の路線にそって重機による深掘りを入れることにした。しかし、路線の両側は全て水田であり、この排水溝は調査範囲内に組み込まざるをえなかった。また、深掘り部分の先行調査も現状では不可能であったため、深掘りは表土掘削と平行して行うことにした。

調査はまず西側から開始し、掘削土を順次東へ送りながら遺構の確認を行なった。遺構の調査は、ほぼ同一面で確認できる古墳～平安時代の遺構を先行し、それが終了した区域から縄文時代の遺構確認を行なっていった。当初、縄文時代の遺構も同一面で確認可能と思われたが、縄文時代の遺構確認面である黄灰白色シルト質土は地区によって起伏があり、また遺構覆土と地山の区別が困難なため、トレンチ調査や掘り下げが必要となった。そのため、実質的には2面調査を行なったことになる。湧水は予想以上に激しく、ポンプ3台をフル稼働しての調査となった。遺構からの湧水も認められ、特に井戸や土塚のなかには底面までの調査ができなかったものもある。なお、2区と3区の間で用水路を伴う生活道路があり、その部分は未調査となった。

図化記録のためのグリッド設定は道路中心杭を使用し、これを基準に5mグリッドを設定して、道路に直行する東西方向をX軸（西からA'・A・B……E）、道路に平行する南北方向をY軸（北から0・1・2……57）とし、グリッド名は北西コーナー杭を使用した。また、標高は調査区の西北250mにある水準点（標高30.80m）から3ヶ所の基準杭に移動し、これを使用した。

発掘調査は昭和54年1月10日から、右島・藤巻の2名で開始し、4月から小島を加えて3名体制となった。なお、4・5月にかけて小島・木津の2名が調査員として参加した。調査は湧水・台風・2面調査等の影響により、予定よりやや遅れて昭和54年11月2日をもって終了した。



3. 遺跡の位置と範囲 (第1図、第4図参照)

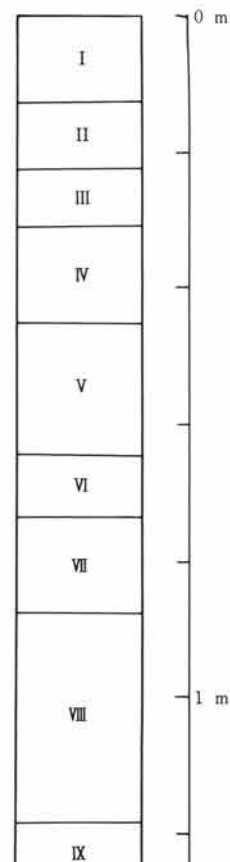
小町田遺跡は東武小泉線龍舞駅から東へ1km、休泊小学校の東南約0.5kmに位置する。所在は太田市龍舞字小町田・八吠である。本地区は北側を足尾山地、西側を足尾山地と連なる八王子丘陵および金山丘陵に画された渡良瀬川扇状地の南西部にあたり、南側に邑楽台地が近接している。足尾山地の南端には渡良瀬川が、また邑楽台地の南端には利根川が各々東流しており、いずれも本遺跡からは直線距離で約5km程である。

遺跡は渡良瀬川により形成された広大な沖積地の南西端部に位置する。本沖積地中には沖積土で埋没した(あるいは後世の開田により不明となった)微高地が多数存在するものと考えられる。そのうちのいくつかは、昭和49年から開始された太田市東部地区圃場整事業に伴う発掘調査により、明らかとなっている。本遺跡も同様な微高地上に立地する遺跡の一つである。調査区の南東は低台地となっており、調査区と同様の遺物の散布が認められる。低台地は南東を神明川により画され、対岸は邑楽台地となる。また、調査区に接する北東側は昭和53年太田市東部地区圃場整備事業に伴う発掘調査が行なわれ、縄文時代前期～後期、古墳時代後期～平安時代の遺構遺物が検出されている。北西側は路線内試掘調査により、遺跡でないことが確認されている。南西側はボーリング調査により微高地が下がることが確認されたが、分布調査では平安時代の土器が少量ながら採集されており、今後の調査で明らかにする必要がある。以上のことから、本遺構は南東の低台地から北西へのびる微高地上に立地する一連の複合遺跡と考えることができる。ただし、時期によりその占地場所を移動したであろうことは想像にかたくない。

4. 基本層序

前述のように調査区内は重機による削平がなされていたため、層序の検討は東西の壁面の良好な部分で行い、以下の層序を標準土層として把握した。なお、柱状図はE-35グリッド東壁の断面図を使用している。

- 第I層 灰褐色土 現水田耕土で、砂粒を多量に含む。
- 第II層 黄灰色砂壤土 砂粒を多量に含む粘質土で、流土あるいは搬入土と思われる。
- 第III層 黒褐色粘質土 FA 軽石や砂粒を含む土層で、古墳時代の遺構の覆土であるが、調査区南半や西側では層として把握できない。
- 第IV層 黒色粘質土 古墳～平安時代の遺構確認面である。また、下半部は縄文時代の遺物を包含する。調査区南半では層厚が薄い。
- 第V層 灰黄褐色粘質土 縄文時代の遺構確認面。南半では層厚が薄く、黄色を帯びる。また、調査区内では起伏が認められる。
- 接VI層 黄灰色粘質シルト 水性2次堆積ロームと考えられる土層で、調査区南半や西側では黄色化、粘土化している。
- 第VII層 青灰色粘質シルト やや黄色を帯びる。
- 第VIII層 青灰色粘質シルト 灰色粘質土を含む。
- 第IX層 青灰色砂層 滞水層である。



第2図 基本土層

II 小町田遺跡の生活環境

1. 小町田遺跡の地形環境

小町田遺跡は、現水田下の遺跡である。人々は弥生時代以来、農耕社会の中で自然と関わりあいながら生きてきた。居住域は微高地・台地に立地し、生産域のうち水田は沖積地にという土地利用の大枠は、自ら律せられてきたのである。しかし近代～現代の開発は、従前のペースをはるかに超え、水田化が進み、さらに現在では、沖積地の住宅地が進んでいるほどである。このような地形改変の中で、この水田下に立地する小町田遺跡の生活環境を考えるについては、地形の復元が必要である。特に本地域は河川地形が発達し、さまざまな地形要素が組み合わさっているので、地形の改変は自然的なもの、前述の人為的なものとの両者を考えなければならない。以上のような観点から、周辺の地形を概観し、小町田遺跡の地形環境を復元しよう。

群馬県東南支部は、関東平野の北西の隅にあたり、山地形の北部、西部とは対称的である。群馬県中央部に位置する赤城山は、秩父古生層を基盤とする第4紀火山である。数10万年の間火山活動を繰り返した結果、火砕流堆積物によって、秀麗な山体を形成し、その裾野は大きく広がっている。群馬県東辺には同じく秩父古生層を基盤とする足尾山地が栃木県側から伸びている。その西側に対峙するようにある八王子丘陵および金山丘陵は、東半分は足尾山地と同様に秩父古生層が基盤となっており、足尾山地とつながる地形である。西半分は溶結凝灰岩という火山性の地質を有しており、第3紀において火山活動が考えられるが、詳細は未だわかっていない。

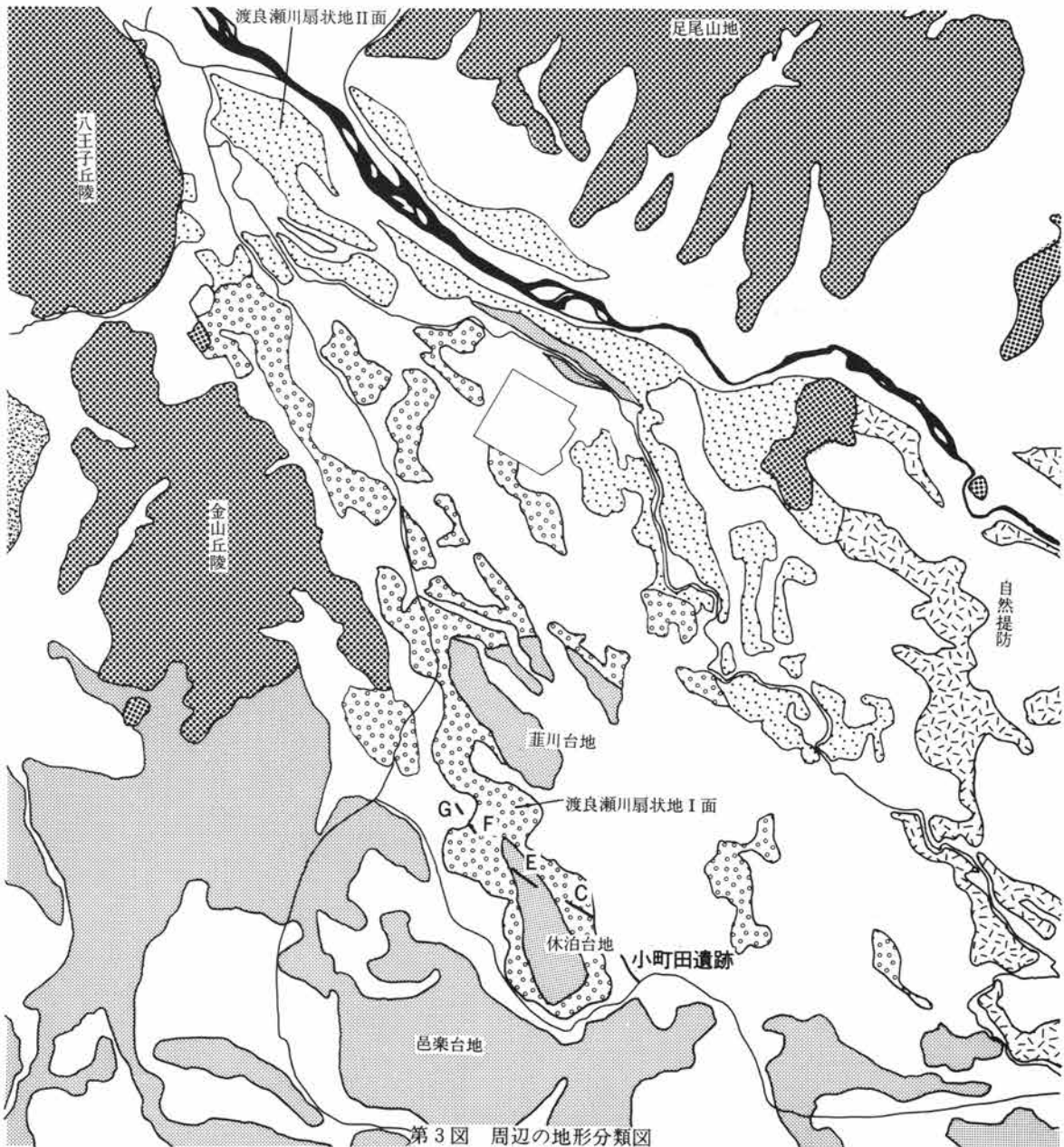
第4紀洪積世になると下末吉海進による古東京湾が、群馬県南東地域に入りこむ。この古東京湾に流れこんでいた古渡良瀬川が、活発な火山活動期であった赤城山の火砕流や泥流を運び、厚い砂礫層を堆積させたのが大間々扇状地である。この扇状地は、海退の進行により、中部ローム層以上をのせる西側のI面と、上部ローム層以上をのせるII面に分けられる。その崖線は現在早川の流路となっている。

邑楽・館林台地は、中部ローム層以上をのせる洪積台地で、その原形は砂と粘土の地層である。この地層が堆積したころは古東京湾が入りこんでいた時代で、古渡良瀬川が大間々扇状地の礫層を堆積させていた。この古渡良瀬川や古利根川は扇状地をぬけると、古東京湾に流れこんでいた。いわば、邑楽・館林台地は、利根川・古渡良瀬川の自然堤防帯あるいは三角州といった景観をみせていただろう。そして吹きよせられた火山灰質の砂が、有名な内陸古砂丘を形成した。その後、海退に伴って河川の侵食が進みローム層が堆積して台地化したといわれている。

さて、小町田遺跡のある、八王子丘陵・金山丘陵と足尾山地の間の地域は、沢口宏によれば「渡良瀬川扇状地」と呼ばれている。沢口は実地調査によって、本扇状地には、現成（沖積世）扇状地と洪積世扇状地とこれらとは異なる洪積台地の三者があることを示した。このうち洪積台地は葦川台地・休泊台地とよばれ、台地の核となっている。中部ローム層以上をのせるが、原形面はラミナの発達する特異な砂礫層である。同じバイパス路線内で調査された庚塚遺跡は、この部分に立地する。

扇状地は形成時期から2面に分けられている。I面は洪積世末期、上部ローム層上部をのせる旧扇状地面で、ところによって、YP層が鍵層として存在する。渡良瀬川右岸、丸山以南に分布し、沖積世の侵食によって分断されている。同年調査した賀茂遺跡では、砂礫層と、それを覆う上部ローム層およびローム層中のYP

層を確認した。この扇状地面は、台之郷や龍舞では前述の洪積台地をとり巻くように分布し1つの台地を形成している。庚塚遺跡とともに調査された上遺跡もこの地形面に立地すると考えられる。渡良瀬川扇状地II面は、沖積世に形成されたもので、関東ローム層は認められない。この面には旧河道を示す凹地形がよく残存している。足利市田中町・福居町以南では砂質の微高地からなる自然堤防も形成されている。しかし、小町田遺跡は水田下の遺跡である。周辺にも塚廻り古墳群や、塚井遺跡など同様の立地を示す遺跡があり、埋没地形が予想される。そこで、発掘調査後、遺跡の周辺でシンオールサンプラーにより、柱状土層を採取し、遺跡周辺の地形復元を試みた。遺跡内には、北西部に沼状の落ちこみが確認されたが、この沼状の落ちこみには完新世のテフラである浅間CとFAが埋土に挟在していた。これを指標にこの落ちこみの広がり、遺跡がのるシルト質の土壌の分布を調べようというのがこのサンプリング調査のねらいであった。第4図および第5図がサンプル採取地点と採取した土層柱状図である。A～C地点の柱状土層からは当初期待していたテフラ層は確認できず、沖積土が厚く堆積していた。調査区で確認された落ちこみと、この沖積層の時間的



第3図 周辺の地形分類図

II 小町田遺跡の生活環境

関係は明らかにし得なかったが、休泊台地と遺跡地の間には、谷地地形が想定できる。なお、沼状の落ちこみについては、サンプリング調査と併行して行なった周辺の聞きこみ調査により、以前には、所々にかなりの数があったという。

D・E地点の柱状土層は、調査区と同様のシルト質および砂質の土層であり、調査区は、やや東へ広がる微高地になっていると思われる。又、調査区は南北に長いが、その全域にわたって同様の地質を有しており、南北に長い微高地である。この黄色のシルト質の土層が、関東ローム層であるかどうかは、テフラも検出できず、明らかにし得ていない。

沢口によれば、扇状地礫層は、「標高27m付近から下流では後背湿地に埋没される」という。小町田遺跡が水田下に埋積されたことはこのことと照合する。しかし、小町田遺跡がのる微高地が、扇状地面であるかどうかは礫層を確認していないので不明である。むしろ、土質および、微高地の南北に長い形状からすれば、埋没した自然堤防であると考えられる。

ところで、どうして、微高地状の地形が、平安時代以後、埋積されたのだろうか。小町田遺跡の調査では、平安時代の住居址の床面が、流れによって破壊されたような形痕を残すものが検出されている。洪水で運ばれた土砂が、一帯を埋積したのであろうが、大泉町の台地には、埋没ローム台地の存在も報告されており、埋積する条件として、関東造盆地運動との関連も考えてみる必要がある。

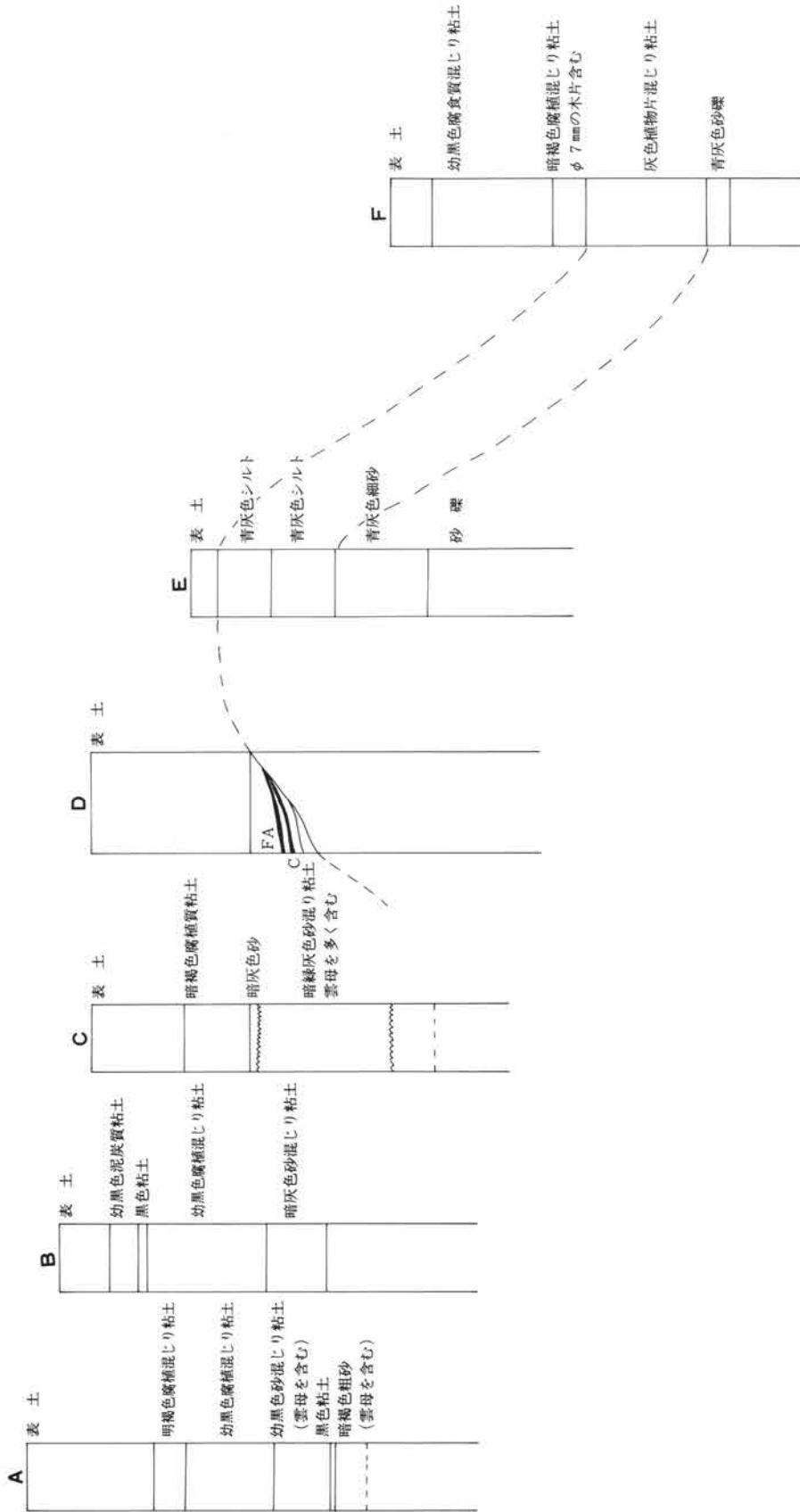
註1 本章については、次の各文献を参考とした。

- 1) 野村 哲編、1978 (文献7)
- 2) 木崎喜雄・野村哲・中島啓治編著 1977 (文献8)
- 3) 大地のあゆみ編集委員会編 1982 (文献9)

- 4) 沢口 宏 1966 (文献10a)
1977 (文献10b)
1978 (文献10c)
- 5) 堀口万吉 1983 (文献33)



第4図 小町田遺跡の範囲とボーリング地点



第5図 遺跡と周辺の土層柱状図 (ポウリングサンプルによる)

2. 小町田遺跡と周辺の遺跡分布

小町田遺跡では縄文時代草創期～後期の遺物、前期後半および中期後半を中心とする遺構、古墳時代後半～平安時代の集落が検出されており、長期にわたって生活に利用されてきたことが明らかになった。本遺跡周辺には丘陵・台地・微高地が点在しており、また広範な水田可耕地にも恵まれている。そしてこれらの環境は、各時代の特徴によって様々な利用がなされてきた。ここでは、周辺の遺跡分布を時代を追って概観しておきたい。

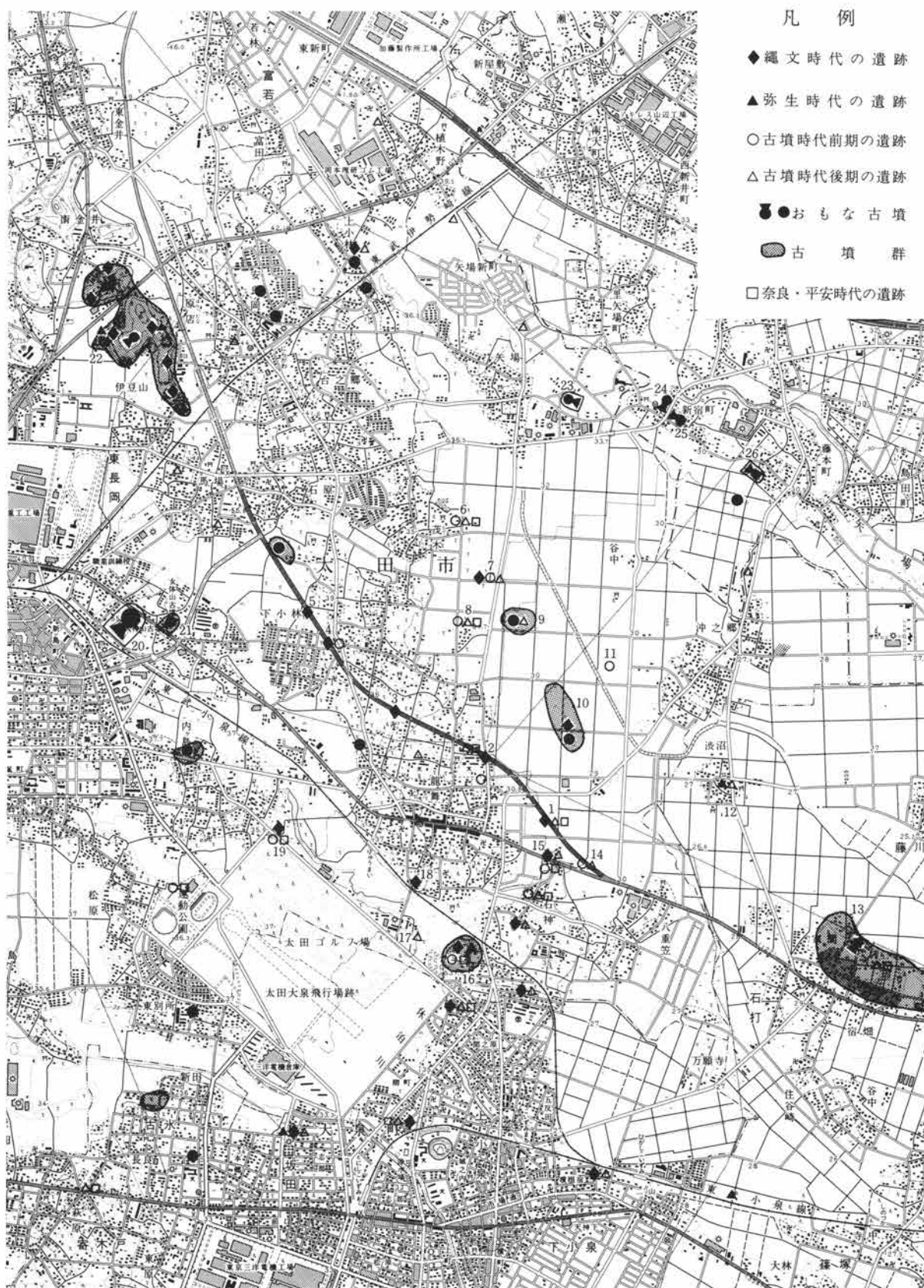
本遺跡周辺では旧石器時代の遺跡は未だ確認されていないが、邑楽台地では沖積層で埋没したローム層堆積微高地に立地する御正作遺跡で、黒曜石製のナイフ形石器を伴うユニット3ヶ所が調査されている。

縄文時代になると、まず草創期前半の尖頭器が金山丘陵東側に位置する3ヶ所の遺跡で採集されており、小町田⁽¹⁾遺跡でも有舌尖頭器が2点出土している。草創期後半は上遺跡⁽⁴⁾・間之原遺跡⁽¹⁶⁾、早期前半は小町田遺跡⁽¹⁾・焼山遺跡⁽²⁾をあげられるのみであり、いずれも土器片数点の検出にとどまる。早期後半は賀茂⁽²⁾・上⁽⁴⁾・間之原⁽¹⁶⁾・焼山遺跡⁽²⁾で比較的多量の遺物が出土しており、今後遺構が検出される可能性が高い。前期前半は小町田⁽¹⁾・賀茂遺跡⁽²⁾で遺物が出土しており、上⁽⁴⁾・間之原遺跡⁽¹⁶⁾では関山式期の住居址が検出されている。特に間之原遺跡では住居址が環状にめぐることが確認されており、本地域の先駆的な環状集落として注目される。前期後半は遺跡が急増する時期である。小町田⁽¹⁾・賀茂⁽²⁾・上⁽⁴⁾・清水田⁽⁷⁾・塚廻り⁽¹⁰⁾・15⁽¹⁶⁾・間之原⁽²²⁾・18⁽¹⁶⁾・19⁽²²⁾・焼山の各遺跡で遺構・遺物⁽¹⁾が検出されており、なかでも黒浜期の遺跡が多く、集落が認められている。中期前半はやや遺跡が減少し、特に初頭期は小町田⁽¹⁾・賀茂⁽²⁾・上遺跡⁽⁴⁾で少量の遺物が出土したのみである。中期後半になると再び遺跡は増加し、小町田⁽¹⁾・賀茂⁽²⁾・庚塚⁽³⁾・上⁽⁴⁾・雷⁽⁵⁾・15⁽¹⁶⁾・間之原⁽¹⁶⁾・18⁽²²⁾・焼山遺跡⁽²²⁾等をあげることができる。なかでも小町田遺跡⁽¹⁾では住居址23軒・土壇89基が検出されており、継続的な集落遺跡であることが判明している。後期前半は遺跡数が減少するものの、中期後半を引き継ぐあり方を示している。後期後半は遺跡数が急減し、雷⁽⁵⁾・塚廻り⁽¹⁰⁾・間之原⁽¹⁶⁾の各遺跡で少量の土器が出土するにとどまる。晩期の遺跡は、間之原遺跡⁽¹⁶⁾が認められるにとどまる。

弥生時代の遺跡は、渡良瀬川扇状地I面の渋沼遺跡⁽¹²⁾、邑楽台地の間之原遺跡他2ヶ所⁽¹⁶⁾、金山丘陵の焼山遺跡⁽²²⁾（3地点）など合計5遺跡が確認されているが、遺構の確認例は今のところない。また沖積層で埋没した微高地（以下微高地と記す）からの出土例がない点は注目する必要がある。

古墳時代になると遺跡は急増する。遺跡の多くは微高地や台地縁辺に立地し、継続的な集落が営まれるようになる。石田川期の遺跡は上⁽⁴⁾・宮免⁽⁶⁾・清水田⁽⁷⁾・上神原⁽⁸⁾・沖之郷⁽¹¹⁾・深町⁽¹⁴⁾・15⁽¹⁶⁾・間之原⁽²²⁾・19⁽²²⁾・焼山遺跡、和泉期の遺跡は賀茂⁽²⁾・清水田⁽⁷⁾・沖之郷⁽¹¹⁾・深町⁽¹⁴⁾・19の各遺跡があり、いずれも広大な沖積地を臨む葦川・休泊台地東縁や邑楽台地北縁に集中している。この時期に対応する古墳としては、矢場薬師古墳⁽²³⁾・女体山古墳⁽²¹⁾・太田天神山古墳⁽²⁰⁾がある。なかでも天神山古墳は毛野地域の中樞を司どる大首長の墓であり、本地域がその拠点といわれている。なお、本遺跡周辺で方形周溝墓の調査例はまだない。鬼高期になると遺跡は各台地一円に分布するようになる。前時期から継続する遺跡では遺構の面的な拡大が認められ、水田耕作を中心とする生産基盤の安定と拡大が想定できる。また、それらを背景とした多数の古墳群が、丘陵上・台地縁辺・微高地に分布している。

奈良・平安時代の遺跡は、そのほとんどは鬼高期から継続しているが、遺跡の規模はさらに拡大し、台地内部にまで居住域を拡げるようになる。休泊台地の分布調査では、鬼高期の土器が台地縁辺を中心に濃密な散布地点をブロック状に点在させるのに対し、国分期の土器は、台地縁辺にそってほとんど切れ目なく散布



第6図 周辺の遺跡分布図 (1/5万)

II 小町田遺跡の生活環境

していた。詳細な調査は行ない得なかったが、他の台地でも同様な傾向が予想される。

本地域の広大な水田地帯は圃場整備をほぼ完了しつつあるが、それに伴う発掘調査により、沖積層で埋没した微高地上の遺跡が予想以上に存在することが明らかとなった。また、それらのなかには旧石器時代にまで遡る遺跡や縄文時代の集落遺跡も含まれており、本地域での遺跡群研究はこれらの確認調査を前提に考えなければならない。

※ 本項中の()は下表のNoをさす。

No	遺跡名	概	要	文献
1	小町田遺跡	本遺跡。本調査区の東側を太田東部地区圃場整備事業に伴い、昭和53・54年の2年次に亘って122号線バイパスの東側を県教育委員会が調査。ほぼ同様の遺構が検出されている。なお、平安時代の溝や井戸からは、火鑽臼2点・木製陽物3点・木皿・曲物・カンピョウ製容器等が出土している。		1 4
2	賀茂遺跡	国道122号線バイパス建設に伴い、昭和54年から55年度にかけて県埋文事業団が調査。縄文時代前期黒浜期を中心とする住居5軒、竪穴状遺構1基、土壇13基、古墳時代住居7軒・溝3条、奈良時代住居6軒、平安時代住居48軒・溝4条を検出。また、古墳時代は和泉期から居住が認められるが、調査区の南側で石田川期の遺物がまとまって採集されていることから、石田川期からの継続的な集落である可能性も考えられる。		2
3	庚塚遺跡	国道122号線バイパス建設に伴い、昭和53年県埋文事業団が調査。中世～近世にかけての溝12条・井戸7基・土壇122基等を検出。他に、縄文時代中期中葉～後期前半および奈良・平安時代の遺物が出土しているが、遺構は検出されていない。		2
4	上遺跡	国道122号線バイパス建設に伴い、昭和53年県埋文事業団が調査。縄文時代前期関山期の住居2軒、中期中葉～後期初頭の土壇10基・埋設土器2基、石田川期住居3軒を検出。他に、縄文時代草創期後半～後期前半の土器、および鬼高期の土器が出土しており、周辺に遺構が存在する可能性が高い。		
5	雷遺跡	国道122号線バイパス建設に伴い、昭和53年県埋文事業団が調査。東へ緩傾斜する台地縁辺部にあたり、縄文時代早期後半条痕文系土器、中期加曾利E3式土器、後期堀之内II式・加曾利B式土器が少量検出された。東に位置する上遺跡と一連の遺跡となる可能性がある。		2
6	宮免遺跡	太田東部地区県営圃場整備事業に伴い、昭和50～51年にかけて県教育委員会が道水路部分を調査。低台地上の遺跡で、現況は桑園である。耕作等による攪乱が著しく、遺構は検出されていないが、古墳時代～平安時代の土器が出土している。		
7	清水田遺跡	太田東部地区県営圃場整備事業に伴い、昭和51年・52年次に亘って県教育委員会が調査。北西からつらなる台地端部微高地上の遺跡で、石田川期～国分期の住居が140軒検出され、継続的集落であることが判明している。平安時代の遺物では、緑釉土器・巡方等があり、また墨書土器も多数認められ注目される。他に、縄文時代前期黒浜期の土壇1基が調査されている。		3 a
8	上神原遺跡	太田東部地区県営圃場整備事業に伴い、昭和50～51年にかけて県教育委員会が道水路部分を調査。調査区は沖積地となっており、遺構は確認されていないが、西側の台地には石田川期～国分期の土器が濃密に分布している。		
9	塚井古墳群	太田東部地区県営圃場整備事業に伴い、昭和50年教育委員会が調査。上毛古墳総覧では7基の古墳が確認されているが、大半は消滅しており、2基の古墳が調査された。古墳は径10m前後の円墳で、7世紀頃の築造と考えられる。また、墳丘下から鬼高期の住居群が検出されている。		3 a
10	塚廻り古墳群	太田東部地区県営圃場整備事業に伴い、昭和52年県教育委員会が調査。沖積地のなかの微高地上に7基の古墳が確認された。墳丘径はいずれも18m前後である。そのうちの5基が調査され、多種多様な形象植輪を伴う帆立貝式古墳で構成される6世紀中頃の古墳群であることが判明した。なお、墳丘下から縄文時代前期黒浜式・諸磯C式土器、後期称名寺II式・加曾利B式・安行式土器、および石田川式土器が出土している。		3 b
11	沖之郷遺跡	太田東部地区県営圃場整備事業に伴い、昭和49年県教育委員会が調査。沖積地のなかの微高地上に石田川期の住居5軒と和泉期の土器溜りが検出されている。調査は小規模であるが、遺跡は20,000㎡に及ぶ規模が予想されている。		3 a

2 小町田遺跡と周辺の遺跡分布

No	遺跡名	概 要	文 献
12	渋沼遺跡	渋沼の集落をのせる微高地上の遺跡で、弥生土器・土師器が採集されている。遺物は大泉高校に保管されている。	
13	松本古墳群	邑楽台地縁辺にのる遺跡で、全長60mの八王子古墳を含む3基の前方後円墳と20基ほどの円墳で構成される、6世紀代の古墳群である。また、奈良時代の土器が広範にわたって採集されており、集落址が予想される。	
14	深町遺跡	微高地上に立地する遺跡で石田川期～鬼高期の土器のかなり広範な散布が確かめられており、集落址が予想される。昭和52年、国道122号線バイパス工事中に和泉期の住居3軒が確認された。	3 b
15		西側へ緩傾斜する台地で、縄文時代前期黒浜式、中期加曾利E2・3式、鬼高期～国分期の土器が濃密に分布しており、小町田遺跡と一連の遺跡となる可能性が高い。また、台地南端で石田川期の土器を採集している。	
16	間之原遺跡	土地区画整理事業に伴い、昭和55年から2次に亘って太田市教育委員会が調査。縄文時代前期関山2式期の環状集落址、古墳時代石田川期の住居群、6世紀後半～7世紀初頭の帆立貝式古墳を含む古墳群、平安時代の住居群等が検出されている。他に、縄文時代草創期後半（燃糸文）～晩期の土器、弥生時代の土器、鬼高式土器、貨泉・布泉を伴う墓塚等が検出されている。	12 27
17	大塚遺跡	土地区画整理事業に伴い、昭和55年7太田市教育委員会が調査。攪乱が著しく、遺構は溝が検出されたのみだが、周辺には古墳時代の遺物の散布が認められる。	12 27
18		分布調査で、台地縁辺部に縄文時代前期黒浜式土器、中期加曾利E3式土器の散布を確認した。	
19		土地区画整理事業に伴い、昭和54～55年にかけて太田市教育委員会が調査。縄文時代前期黒浜期の住居1軒、古墳時代和泉期住居1軒・土塚2基、平安時代住居29軒を確認している。	
20	太田天神山古墳	5世紀中頃の前方後円墳。全長210mは東日本最大規模である。主体部は組合せ式の長持形石館。	
21	女体山古墳	5世紀中頃の帆立貝式古墳。全長60mの規模を有し、天神山古墳に先行して構築された。	
22	焼山遺跡	丘陵上の遺跡で、はにわの会により総合調査がなされ、縄文時代草創期前半の尖頭器と思われるものをはじめ、田戸下層式、茅山式、黒浜式、諸磯a・b・c式、浮島式、加曾利E式、堀之内I式の各土器、弥生時代中・後期の土器、石田川式土器が確認されている。また、鉄剣を伴う4世紀代の方形台上墓様の墓址、および全長56mの前方後円墳を中心に円墳40基前後で構成される6世紀後半～7世紀の古墳群がある。	15
23	矢場薬師山古墳	4世紀後半の前方後円墳。	
24	矢場川41号墳	6世紀前半の前方後円墳。全長60～70m。	
25	矢場川39号墳	同上	
26	藤本観音山古墳	4世紀後半の前方後円墳。全長126m。	

3. 小町田遺跡の変遷

1) 縄文時代の小町田遺跡

小町田遺跡の初現は縄文時代草創期にはじまる。草創期前半に比定される有舌尖頭器 2 点が出土しており、1 点は 3 区北側の土坑内から、1 点は 2 区中央部の第 V 層上半部からの出土である。本遺跡が立地する南北に細長い微高地は、砂礫層を基盤に粘質シルト化した水性 2 次堆積ロームにより形成されており、比較的新しい地形と考えられるが、縄文時代草創期には安定した環境であったことが予測できる。また、早期前半に比定される土器も 2 点出土している。

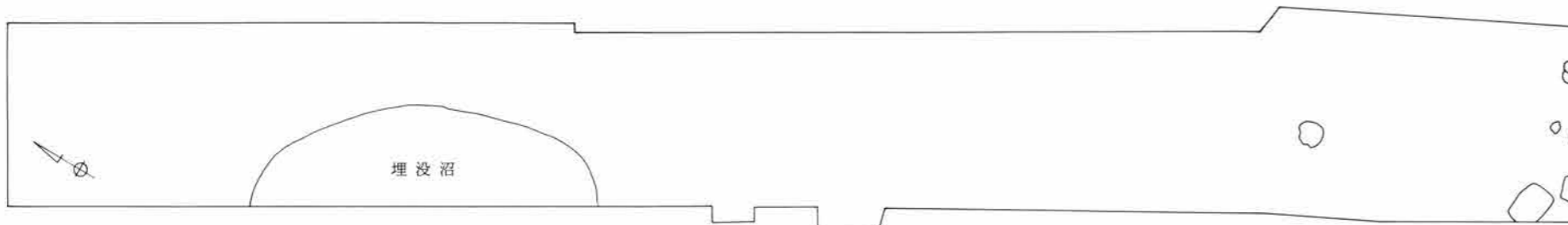
前期では、黒浜期の住居址 2 軒・土坑 3 基、および諸磯期と考えられる土坑 2 基が検出されている。遺構はいずれも前期後半のものであるが、土器は花積下層式土器から前期終末期のものまで、わずかづつではあるが継続的に出土しており、本遺跡が小規模な生活拠点、あるいは何らかの活動地として維持されていたと考えられる。分布は、遺構遺物ともに 3 区の範囲内にまとまっており、特に遺構は南東寄りに集中している。なお、3 区の南側に連なる低台地縁辺部にも黒浜式～諸磯式土器の分布が認められることから、前期の遺構分布がさらに南側へのびることが予測される。

中期になると、阿玉台Ⅲ式期から加曾利 E 3 式期にわたる継続的な集落が営まれる。遺構は、住居址 25 軒・掘設土器 6 基・土坑 103 基が検出されており、土器は五領ケ台式～加 E 4 式土器が出土している。五領ケ台土器は、2 号住居址から 1 点出土したのみである。

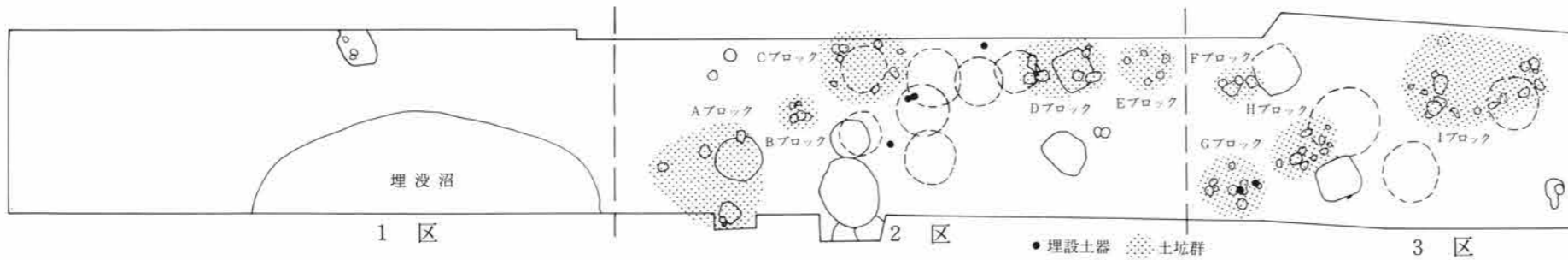
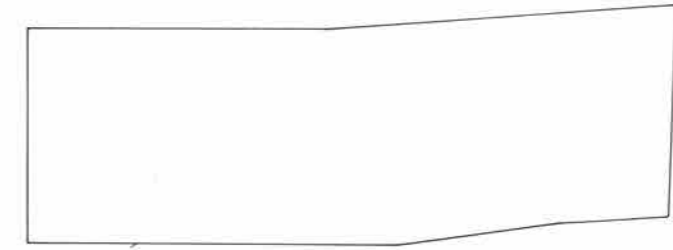
阿玉台・勝坂式土器は 1～4 区に分布しており、なかでも 2・4 区に集中が認められる。遺構は、阿玉台Ⅱ式期の土坑 3 基、同Ⅲ式期の住居址 1 軒・土坑 8 基、同Ⅳ式期の土坑 1 基がある。土坑の分布は A・D・E・G・J ブロックに認められるが、住居址は土坑の分布しない 1 区に選地している。以上のように、阿玉台期は遺構・遺物ともに 1～4 区にわたって分布しており、時期的にも、また分布のうえでも、中期集落の形成に先鞭を付けた時期といえよう。なお、本遺跡では大木 7 b～8 a 式土器が出土している。

加曾利 E 期は、本遺跡が集落遺跡として安定した時期である。加曾利 E 1 式期は住居址 6 軒・土坑 21 基があり、住居址は 2 区の南側に 2 軒、4 区に 4 軒が分布し、土坑は A・C～J ブロックに分布している。住居群は 2 群に分かれており、4 区がその中心と考えられるが、同 2 式期になると居住の中心が 2・3 区に移動する。同 2 式期の遺構は住居址 7 軒・土坑 9 基がある。住居址は 4 区に 1 軒残存するが、それ以外のものは 2・3 にわたって弧状に分布している。西側部分については不明であるが、分布調査では加曾利 E 式土器が路線にそってかなり認められることから、環状集落の可能性が予想される。土坑は E・E・F・H・J ブロック、およびブロック外に各々 1～2 基ずつ分布するが、同 1 式期に比べると著しく減少するようである。同 3 式期の遺構分布は 2 式期のものを引き継ぎ、さらに弧状分布が明確となる。遺構は住居址 10 軒・埋設土器 6 基・土坑 7 基があり、分布は 2・3 区に限定される。なお、埋設土器のうち、5 基は住居址の可能性が強く、これらを含めると住居址は 14 軒となり、弧状分布はさらに明確となる。同 4 式期は土坑 3 基が認められるのみであり、中期集落は経焉をむかえることになるが、小規模ながらも居住地あるいは活動地として継続・維持されていく。

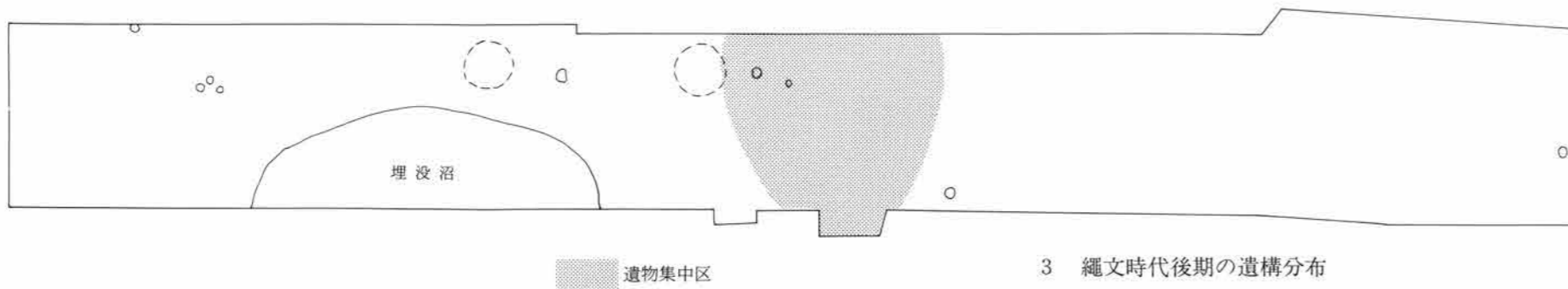
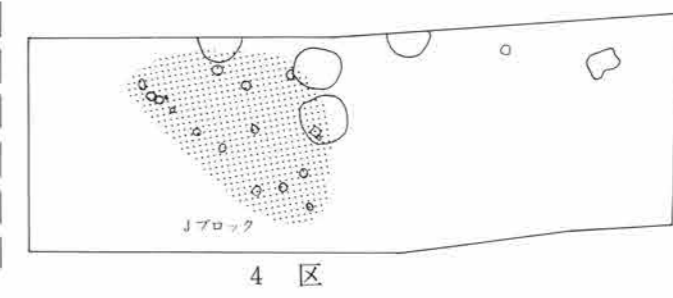
後期になると、2 区の北側から 1 区の範囲に選地が移動してくる。土器は称名寺 1 式～加曾利 B 1 式土器が出土しており、遺構は称名寺Ⅱ式期の住居址 2 軒・土坑 7 基、堀之内Ⅰ式期の土坑 1 基がある。土器も遺構と同様、称名寺Ⅱ式～堀之内Ⅰ式土器が主体となっており、堀之内Ⅱ式・加曾利 B 1 式土器は数点ずつの出土である。加曾利 B 期以降、本遺跡がふたたび居住地等に利用されるのは、古墳時代になってからである。



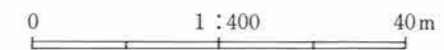
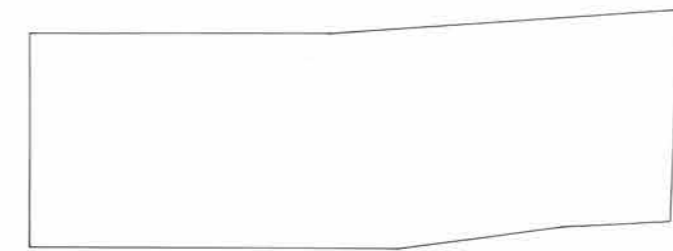
1 縄文時代前期の遺構分布



2 縄文時代中期の遺構分布



3 縄文時代後期の遺構分布



第7図 小町田遺跡遺構分布図(1)

(2) 古墳時代の小町田遺跡

縄文時代以降、長期にわたる空白期間を経て、本遺跡は、古墳時代後期に再び居住空間として利用される。本遺跡の南東に近接する深町遺跡^{註1}では、古墳時代前期に位置づけ得る小規模集落の存在が窺われるが、本遺跡調査区内では遺構は検出されなかった。

古墳時代に属する遺構は、竪穴住居址16軒、小型竪穴状遺構1、井戸址5基である。住居址は、時期的には、5世紀後半に位置づけられるものを初現とし、以降、粗密の若干の差はあれ、古墳時代の最終にまで及んでいる。

住居址の分布は、調査対象地の南北方向のほぼ中心に位置する12号住居址を北限とし、これより南へ帯状に認められる。南側部分については、53・52・43号住居址の占地状況に見られるように、調査地をこえて、さらにその南へと分布がのびていくことが予測される。昭和53年に実施された太田東部土地改良事業に伴う小町田地区の発掘調査は、今次の我々の調査地に隣接する東側部分を対象地としている。調査結果によれば、4軒の古墳時代後期に属する竪穴住居址が確認されており、東側へ行くにつれ、その分布が希薄になることが窺われる^{註2}。今次の我々の調査域に集落の中心があると考えて大過なからう。

最も古い段階の住居址は、71号住居址であり、地床炉を有するものである。調査地の南北の中心より位置する本住居址に近接する75・15・68住居址が、これに続く時期の住居址である。これらはカマドを有しており、後2者ではほぼ床面直上から榛名山二ツ岳の火山灰層（FA）が確認されている。これ以降、1時期2～3軒のきわめて小規模な単位で古墳時代終末にまで続いていく。

各小期ごとの住居址の分布域を見ると、その初現段階のものが、71号住居址周辺のみに限られるのに対し、その後のものは、71号住居址付近を中心しつつも、微高地全体にひろがりを見せるようである。



II 小町田遺跡の生活環境

小町田遺跡の古墳時代に属する住居址群は、本遺跡北方1kmに位置する塚廻古墳群^{註3}、あるいは北方2kmに位置する塚井古墳群^{註4}の形成時期とほぼ併行しており、古墳群の被葬者層を支えた経済的基盤の一翼を担った集落の一つとして位置づけ得るものであろう。

(3) 奈良時代の小町田遺跡

奈良時代に属する遺構は、竪穴住居址11軒、溝^{註5}址2条である。その分布は古墳時代のものをほぼ踏襲している。また土地改良調査地区小町田遺跡でも同様であった。

1号溝は、調査地南寄りをはほぼ南北に縦断する長大なものであった。本溝は我々の調査地を越えて、隣接する土地改良地域小町田遺跡でも調査地いっばいに確認されている。両者をあわせると長さ150m以上に及ぶものであった。27号住居址を除くと、奈良時代に属する住居址10軒は、すべて1号溝の西側に位置している。溝と集落との関係を考える上で示唆的である。

住居址の形状および出土遺物からするならば、27号・64号住居址が時期的に先行する。次の段階に11号・67号・70号・49号・52号・54号住居址が続き、さらに14号・16号・69号住居址が続くと考えられる。現在のところ、この第二段階の時期に1号溝の開鑿がなされたと考えている。

後述するが、奈良時代の住居址の規模・形状等は、きわめて斉一な内容を示しており、その配置関係や溝との関わりを考えた時、集落変遷の中で一定の画期として把えることができる。

(4) 平安時代の小町田遺跡

平安時代に属する遺構は、竪穴住居址38軒、小型竪穴状遺構1、掘立柱建物3棟、井戸址2基である。

この時期の前代にくらべての変化は、集落域の大幅な拡大にある。平安時代初頭の段階で、古墳・奈良時代の北の限界より約40m北へのび、さらに平安時代前半期の間に、1号・3号住居址の位置する北約120mにまで拡大している。また、27号住居址を除くと前代にはほとんど分布が見られなかった1号溝の東側部分で14軒の平安時代の住居址が確認されており、東側にも拡大していることがわかる。その要因としては、当時の水位の変動に伴う居住適地の拡大が想定されよう。

平安時代前半に位置づけられる32号住居址は、壁高36cmを残すきわめて遺存状態の良好なものであった。この住居址の覆土最上面にカマド部分の最下部を僅かに残して28号住居址が確認されている。28号住居址と同様に住居址の大半を後世削平された状態で確認されたものが12軒あり、時期的にはすべて平安時代後半に属するものである。この間に当地に急激な沖積作用があり、地表面がかなり上昇したことが推定される。平安時代後半期の住居址については、その後、完全に削平が及んでしまったものの存在も考慮しておく必要がおおいにある。

今次調査の小町田遺跡では、古墳時代後期初頭に集落の形成が開始され、その後、平安時代後期に至るまで、ほとんど途切れることなく、また極端な集落規模の拡大もなく続いたものであることが、明らかとなった。その集落形成開始の時期は、近接する賀茂遺跡^{註5}と共通しており、5世紀後半という時期を一つの画期として把えられる集落遺跡の一例とすることができよう。

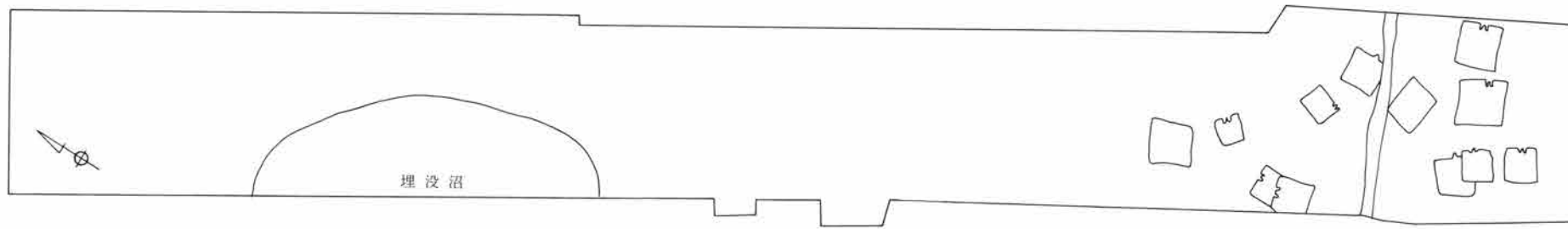
註1 石塚久則1980 未調査のため詳細は不明である。

註2 当遺跡の調査内容については石塚久則氏より多くの御教示を得ることができた。調査報告書が昭和60年刊行予定であるので、併読いただきたい。

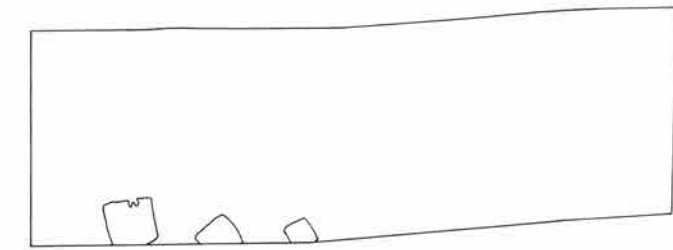
註3 石塚久則 1980

註4 石塚久則 1980

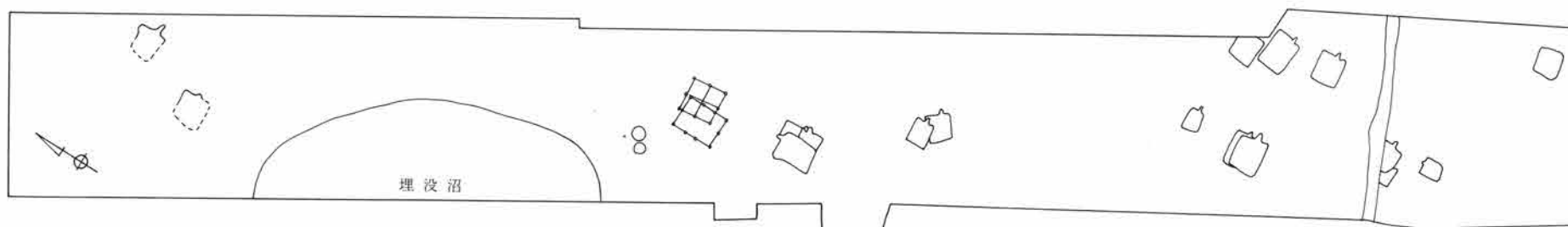
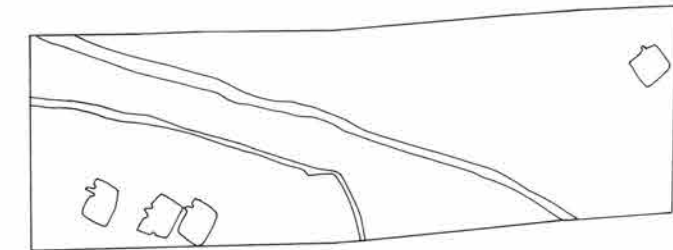
註5 石島和夫・藤巻幸男・小島敦子・1984



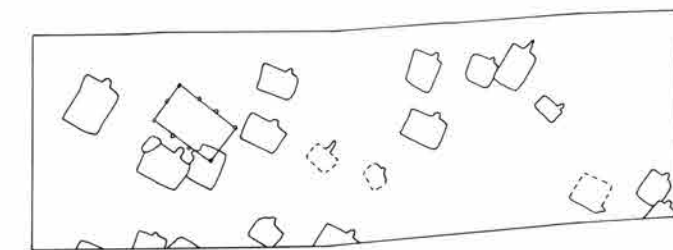
1 古墳時代の遺構分布



2 奈良時代の遺構分布



3 平安時代の遺構分布



第8図 小町田遺跡遺構分布図(2)

0 1:400 40m

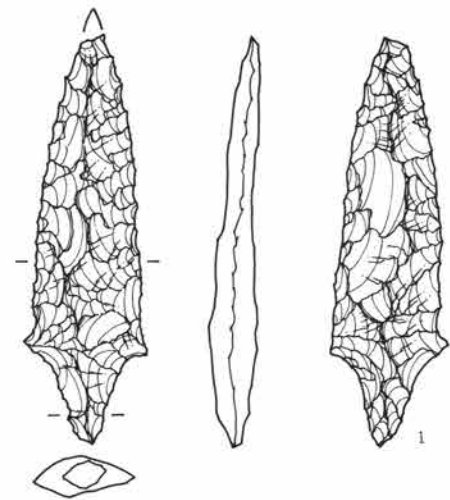
Ⅲ 検出された遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物

小町田遺跡では、前述のように草創期初頭～後期後半の遺物、および、前期～後期の遺構が検出された。遺構は住居址29軒、土壇117基があり、他に埋設土器6基がある。ここでは、これらを草創期～後期の5期に分け、それぞれに該当する遺構・遺物を各期毎に報告していきたい。なお、所属時期の不明確なものについては別項を設けた。また記述にあたっては、前項の1～4区を用いる。

草創期 (第9図1・2)

前半期に位置づけられる有舌尖頭器が2点出土した。出土位置は、1がC-23グリッド、2がC-43グリッドで、約100m程離れている。1は、21号住居址の柱穴確認のため、第V層中を精査中に検出された。2は第VI層まで掘り込んでいる落ち込み覆土中から検出された。いずれも先端部をわずかに欠損している。1は先端部に向かってしだいに細くなり、逆利はわずかに突出している。2は1よりもやや短かく、身の中程が緩やかにふくらんで、先端近くで急激に細くなる形態を呈する。中子は、2点とも基部端に向かって細くなり、すどく尖っている。また、表裏に入念な剝離が加えられており、特に両側縁は表裏からの交互剝離により、鋸歯状に作り出されている。1は現存部長さ5.46cm、重さ4.68g、2は現存部長さ3.78cm、重さ2.94gで、石材はいずれもチャートである。

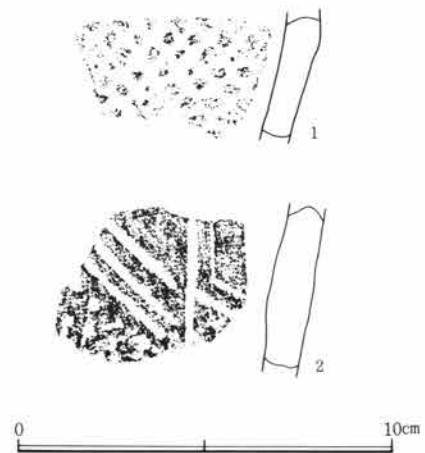


第9図 有舌尖頭器

早期 (第10図1・2)

早期では土器小片2点が出土している。1は楕円の押型文が施された土器で、24号住居址覆土中から検出された。節の切り合いが認められることから、重複して施文されていることがわかる。胎土には金雲母、砂粒を多量に含んでいる。焼成は良好で、くすんだ黄褐色を呈し、内面は丁寧に調整されている。

2は27号住居址覆土中から検出された。文様は、半截竹管による平行沈線を縦位に1条、斜位に2条施し、左下の区画内を刺突文で充填している。胎土には多量の砂粒を含む。焼成は良好で茶褐色を呈し、内面は丁寧に調整されている。田戸下層式土器と思われる。



第10図 早期の土器

III 検出された遺構と遺物

前 期

花積下層式～前期末葉の土器が出土しており、分布はB・C区に認められた。遺構は住居址2軒、土坑4基が検出されており、分布はC区南端に集中している。遺構の内訳は、黒浜式期の住居址2軒・土坑2基、諸磯式期の土坑2基、諸磯式期以前の土坑1基である。

1) 住 居 址

116号住居址 (第11図)

位置 A'—38～39グリッド。西側コーナーは調査区外のため、未調査である。

形状 南壁がやや長い隅丸台形状を呈するものと思われる。遺存状態が悪く、壁は不明確な部分が多い。規模は南北が3.82m、東西は北側で約3.6mである。

壁 上面を著しく削平されており、東壁、南壁は確認できなかった。検出できた壁は、北側で壁高15cm南壁では5cmほどで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床面 軟弱であるが、ほぼ平坦な面を呈す。

柱穴 ピットは20本検出されており、そのうち14本は壁柱穴である。壁柱穴の深さは、いずれも10cm前後である。その他のピットは深さ14～39cmと様々であり、主柱穴と思われるものはない。

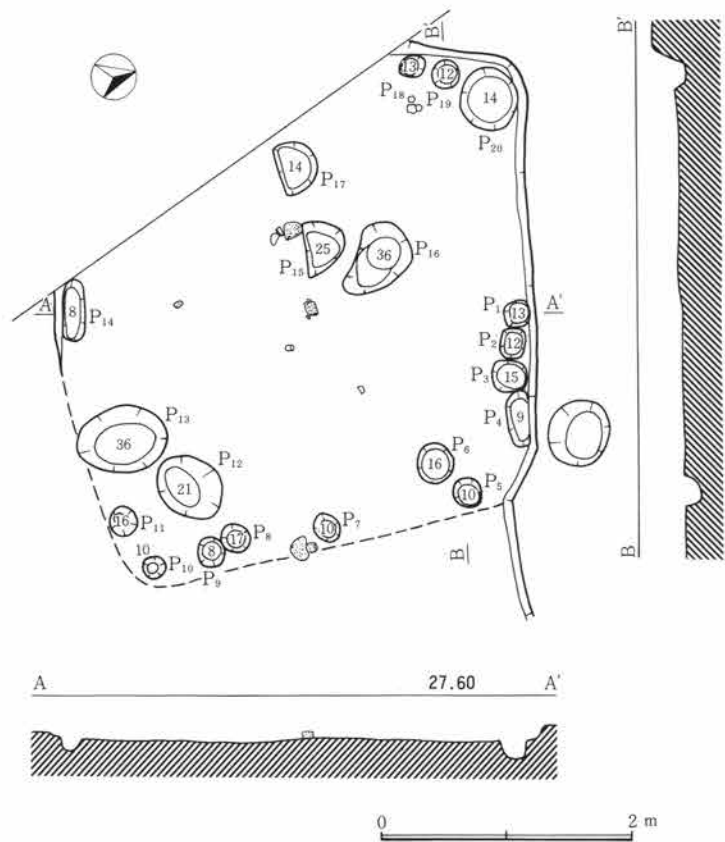
炉 未検出。

遺物の出土状態

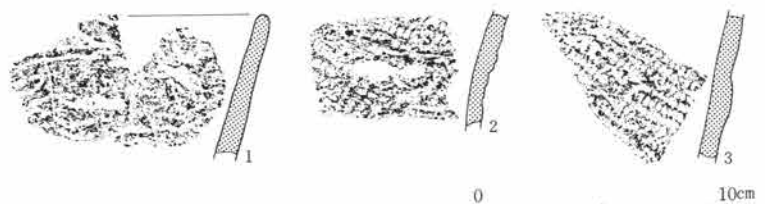
床面付近から黒浜式土器の小片が数点出土したのみである。また、覆土上層に礫が数点認められた。

出土遺物 (第12図 1～3)

いずれも黒浜式土器である。1は直線的に開く口縁部の破片である。口唇部は丸みをもつ。口唇下3cmほどを無文とし、以下に縄文RLを施している。2は羽状縄文が施された胴部破片で、原体はRLとLRである。3はRLの斜縄文が施された胴部破片である。



第11図 116号住居址



第12図 116号住居址出土遺物

所見

出土遺物から、本住居址は黒浜期の段階に相当する。

117号住居址 (第13図)

位置 A-39グリッド。116号住居址の南東約2mに位置する。南側は構造物があるため、未調査である。

形状 やや不定形な部分もあるが、隅丸方形を呈するものと思われる。規模は、東北方向が3.2mであり、小型である。

壁 東壁がややふくらんでいるが、その他は直線的にめぐっている。壁高は約20cmである。

床面 軟弱であるが、ほぼ平坦な面を呈す。

柱穴 未検出。

炉 未検出。

遺物の出土状態

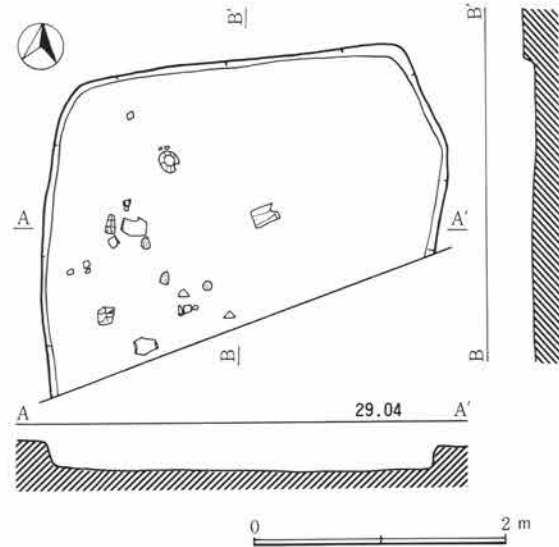
3個体の大型破片をはじめとする土器が、住居址の西半部分から床直の状態出土した。また、凹石や礫も床面から数点出土している。

出土遺物 (第14図1~15)

出土土器はいずれも黒浜式土器で、胎土に多量の繊維を含む。

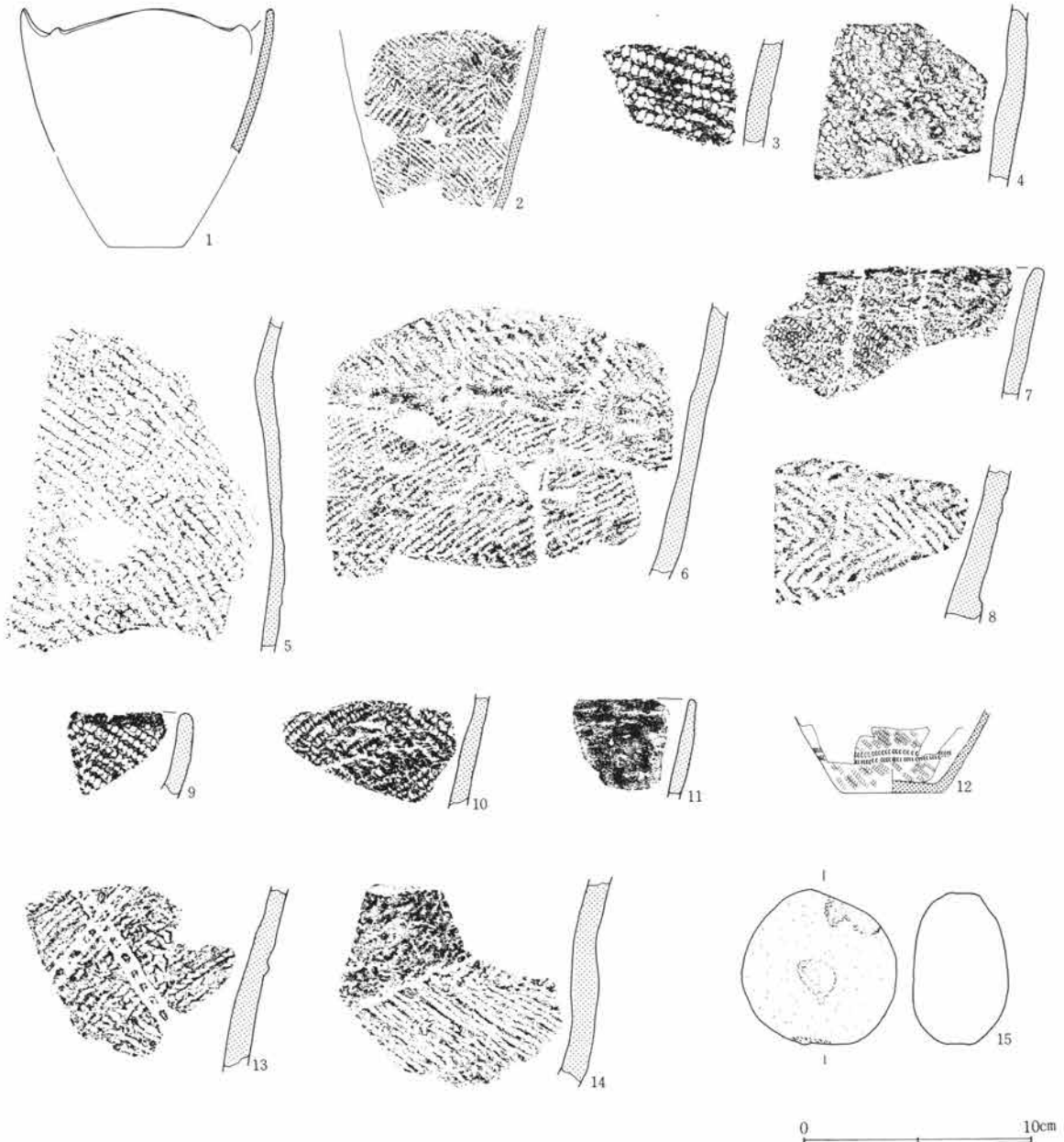
1・11は無文の土器である。1は緩く内湾しながら開く深鉢の胴上半部の破片で、ほぼ半周分が出土した。丸く湾曲した、4単位の低い波状口縁を呈し、波底部には山形の小突起が付く。器面は、内外面とも丁寧なナデが施されている。3~5は斜行縄文が施された土器である。5は胴部中程がくの字状に緩く折れる土器である。縄文は、3・4がRL、5はLRを全面に縦位施文している。なお、4・5は内面に研磨が施されている。2・6~10は羽条、あるいは菱形縄文が施された土器である。2は胴下半から上半に向かって直線的に開く深鉢の大型破片で、約 $\frac{1}{2}$ 周分が出土した。器面には、0段3条RLとLRによる羽状縄文が施されている。内面は研磨が施され、光沢をもつ。なお、羽状縄文の変換部分は菱形を呈する。6・8も羽状縄文が施された土器である。6は横位に3帯施文して条の方向を変えているが、8は一帯毎に変えている。10は菱形縄文を施した土器で、7・9も同様であろう。原体はいずれもRLとLRの2種類を用いている。12・13は爪形文で文様を施した土器である。12は底部付近の破片で、全周している。底部端までRLとLRで菱形縄文を施し、底面から3cmほどのところに爪形文を2条平行にめぐらしている。器面が磨耗しているため、爪形文間の磨り消しの有無は判断できない。13は爪形文で斜位にクロスする文様を施した土器で、地文はL縄2本とR縄2本を附加した、2種類の原体による羽状縄文である。14はL縄2本を附加した附加条原体で、羽状縄文が施された土器である。なお、この他に12片の小破片が出土している。

15は凹石である。一方の平坦面および周縁部の一部に、僅かな集合打痕が認められる。磨耗が著しいため研磨面は観察できない。



第13図 117号住居址

III 検出された遺構と遺物



第14図 117号住居址出土遺物（1・2・12は1/6）

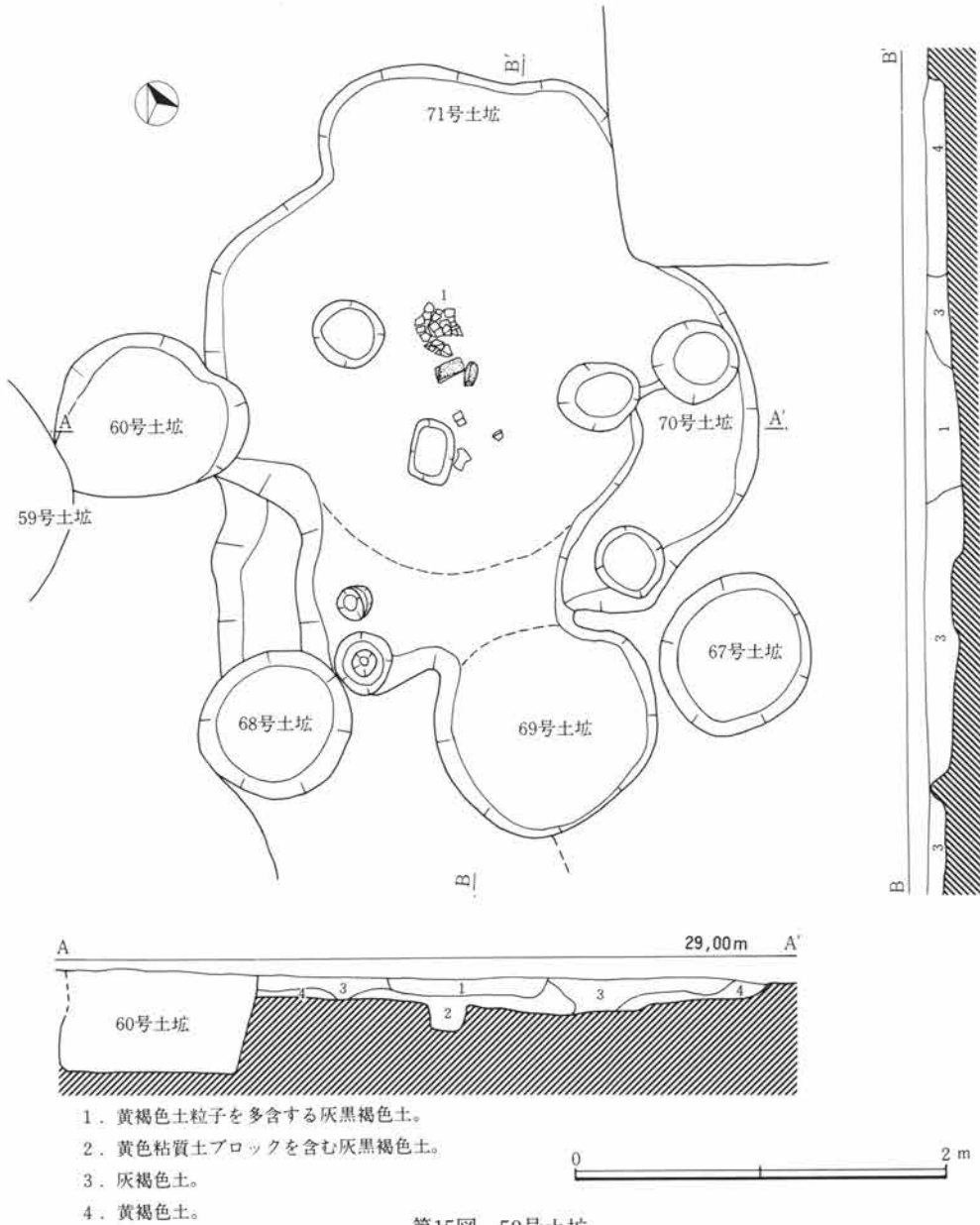
所見

出土遺物から、本住居址は黒浜期の段階に相当する。

2) 土 壇

52号土壇（第15図）

B-33グリッドに位置する。70・71号土壇等の中期の土壇群が重複しているため、原形は留めていない。埋積土③・④は中期遺構の覆土である。中央部のピットは、本土壇に伴うものと思われる。遺物は、ほぼ完形の土器1個体と土器片15点が、底面からかなり浮いた状態で検出された。また、底面から細長い碟2点が出土している。黒浜期の古い段階に比定されよう。



89号土坑 (第16図)

B-39グリッドに位置する。南側を88号土坑に切られており、また東側を部分的に攪乱されている。形状は円形を呈するものと思われ、径は約1.1mである。底面はほぼ平坦である。遺物は、深鉢形土器ほぼ1個分と数点の土器片が、底面から10~15cmほど浮いた状態で出土した。黒浜期の古い段階に比定されよう。

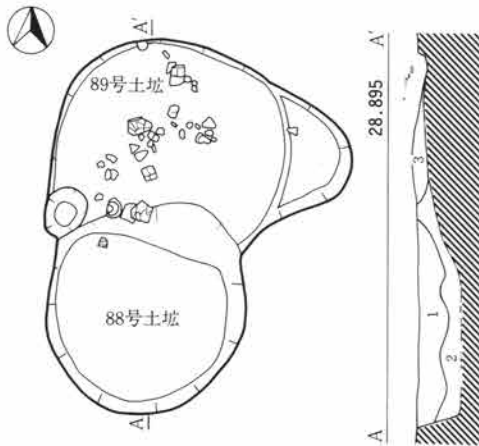
87号土坑 (第16図)

B-39グリッドに位置する。南半は未調査である。北側約1mに89号土坑が、東側約1mに90号土坑がある。また北側立ち上がり部分にピットが2つ重複している。形状は直径約1mほどの不正円形を呈すると思われる。遺物は、深鉢形土器の底部が1点出土したのみである。諸磯期。

95号土坑 (第16図)

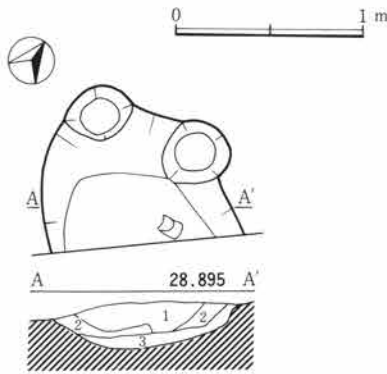
D-39グリッドに位置する。南半は構造物があるため、未調査である。西側で96号土坑と重複しており、

III 検出された遺構と遺物



1. 黒褐色土。
2. 黄褐色土混りの黒褐色土
3. 灰黄褐色土。

88・89号土坑



1. 黒褐色土。
2. 灰黒褐色土。
3. 黄褐色土を含む灰黒褐色土。

87号土坑

第16図 土坑

それを切っている。形状は径約1.2mの円形を呈すると思われる、底面は平坦で、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は諸磯式土器数点が底面からやや浮いた状態で出土している。

96号土坑

C-39グリッドに位置し、95号土坑に切られている。形状は円形を呈するものと思われる、底面は平坦で、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は出土していない。

出土遺物 (第17図 1~15)

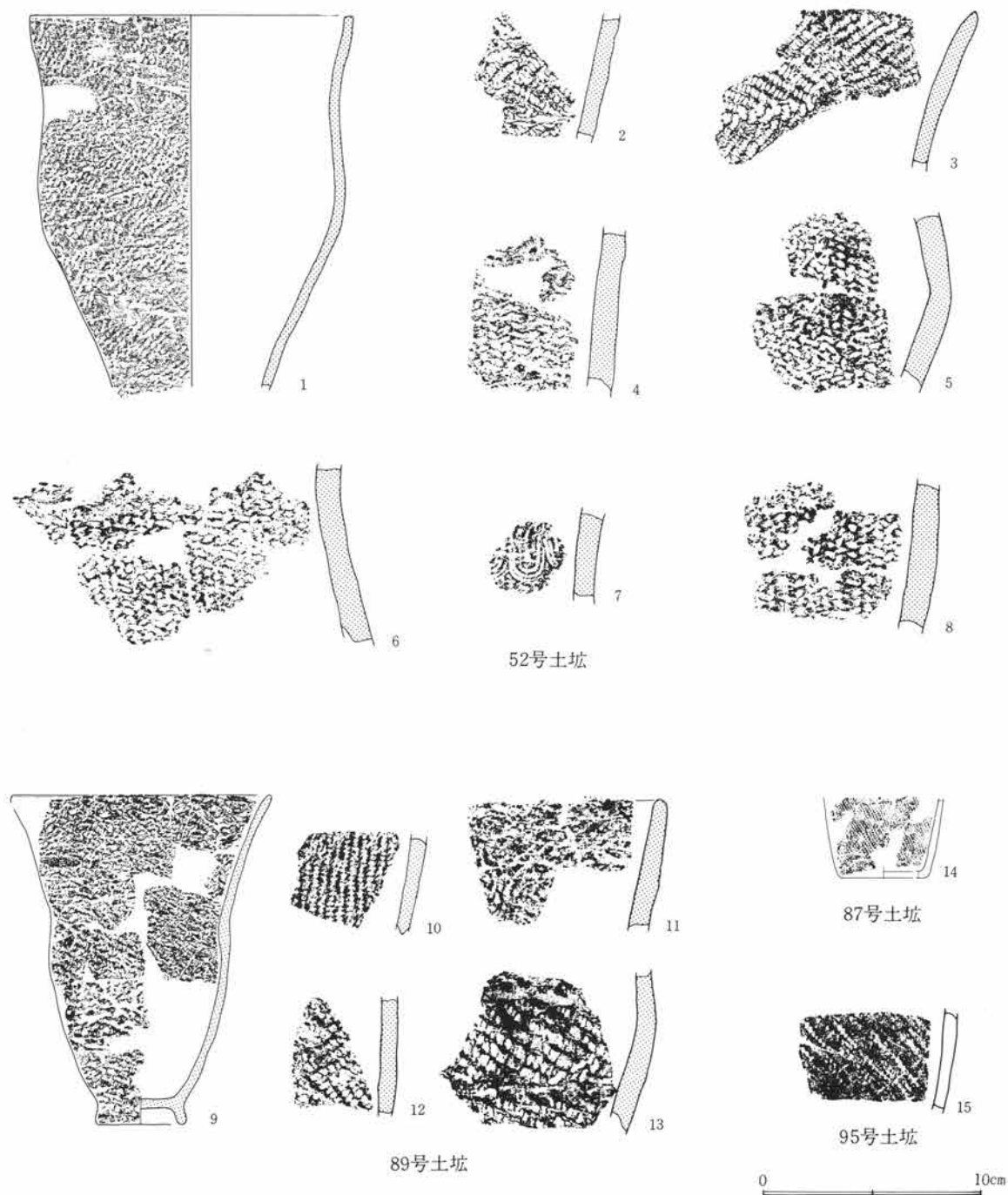
52号土坑 (1~8)

1は中央部分から一括出土した土器である。土圧により器形が著しく湾曲しており、土器復元は不可能であったため、図上で補正をしながら推定復元をした。底部を欠損しているが、他の部分はほぼ揃っている。器形は、頸部が弱く括れ、口縁部がやや内湾しながら開く深鉢形を呈する。器面には、粗いLRの斜縄文が全面に施されている。2は0段多条RLとLRで羽状縄文を施した土器である。短かい原体を使用しており、施文帯間に縄端部の結び目が認められる。3は結束羽状縄文が施された土器である。結束は第1種で、原体は0段3条RLとLRである。4~8はRRLの組紐が施された土器で、同一個体である。胴部中程が括れる器形を呈し、括れ部には櫛状施文具によるコンパス文が施されている。

以上の土器は、2が花積下層式土器、3~8が関山II式土器、1が黒浜式土器にそれぞれ比定される。なお、この他に土器片40点が出土しており、うち22点は組紐が施文された土器である。

89号土坑 (9~13)

9は、全体の約半周分の破片から図上復元をしたものである。器形は、胴部中程が僅かに括れ、口縁部がやや外反しながら開く深鉢形である。底部は上げ底で、外側に開いた安定した形態を呈す。器面にはRLのループ縄文を全面に施文している。器面がやや荒れているため、詳しい観察はできないが、原体は0段多条の比較的太いものを使用している。内面は丁寧に調整されている。10は条を縦位に施したもので、原体は0段多条RLである。11・13は単節の斜縄文が施された土器である。11はLR、13はRL。12はRLとLRで羽状縄文を施した土器である。



第17図 土壇出土遺物 (1・9・14は1/6)

られる帯状構成や鋸歯状構成とは異なっており、黒浜式の古式段階の土器に認められる重畳施文のものに類似している。また、相伴している土器片は黒浜式土器であり、組紐を施文した土器は認められない。以上のことから、出土土器は黒浜式土器の最も古い段階に位置づけられるものと思われる。

87号土壇(14)

出土遺物は1点のみである。全面にRLの単節斜縄文が施された底部破片で、諸磯a式土器であろう。

95号土壇(15)

RLの単節斜縄文が施された土器で、諸磯a式土器であろう。他に、同一個体破片が2点出土している。

III 検出された遺構と遺物

3) 遺構外出土土器 (第18図・第19図)

花積下層式土器 (第18図1～9)

いずれも胎土に多量の繊維を含み、器面調整はやや粗いものが多い。

1は外反しながらすばまる頸部の破片である。頸部に太い突帯をめぐらし、その上方および突帯上には貝殻背圧痕文を密に施し、以下にRLとLRによる羽状縄文を施している。羽状縄文の変換部分は菱形となるようである。2・3は捺糸圧痕文で口縁部に文様帯を構成する土器である。口縁はいずれも外反し、口唇部は2が外削ぎ状、3は内削ぎ状を呈し刻みを施している。2は捺糸圧痕文を斜位に数条施し、その間に刺し切り状の刺突文を施している。3は捺糸圧痕文を口唇下に2条平行してめぐらし、その間に鋸歯状の文様を施し、その下に同様の区画文を構成し、その中に蕨手文を施しているものと思われる。また、捺糸圧痕文で区画された空白部分は、刺し切り状の刺突文で充填されている。4～6は羽状縄文が施された土器である。いずれも0段3条の短い原体を使用しており、RLとLRの2種類の原体で羽状に施文している。4はやや外反する口縁部破片で、縄文は結束第1種RL・LRとLR・RLの2種類の原体を使用している。また口唇部にも縄文が施されている。7～9は縄文を縦位に施文した土器である。いずれも内面に粗い整形痕が認められる。7・8はRL、9はRLとLRを交互に施文して、鋸歯状の羽状縄文を構成している。

関山式土器 (第18図10～16)

胎土に多量の繊維を含み、器面は丁寧に調整され、研磨が施されたものが多い。

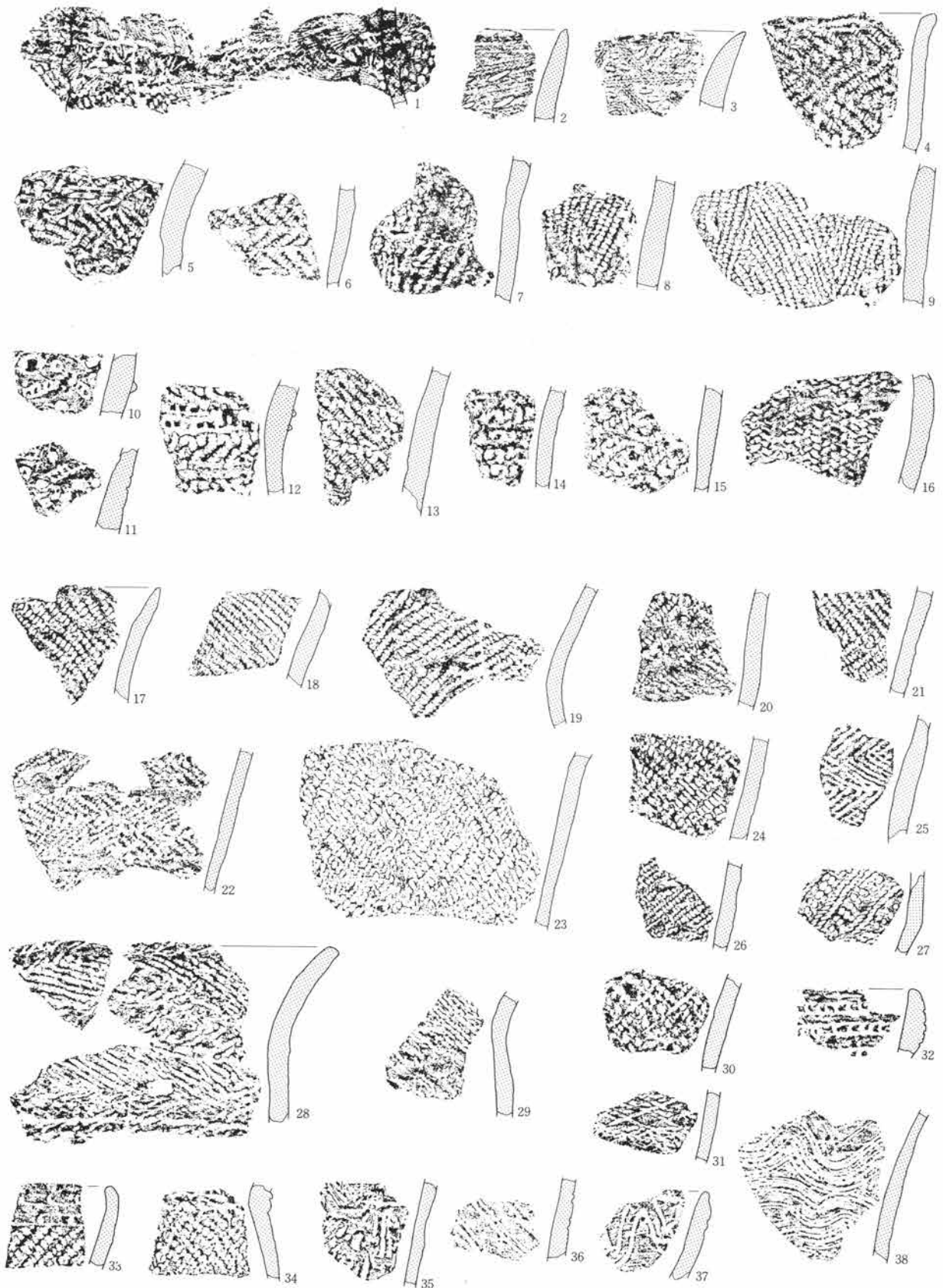
10・11は半截竹管による平行沈線間に刻みを施した、いわゆる梯子状文で文様を構成する土器で、所々に刺突文、竹管による円形刺突文、貼付文が施されている。12～14はループ縄文が施された土器である。いずれも0段多条縄を使用し、ループ部分を重畳施文している。12は頸部付近の破片で、刻みを施した隆線を横位に2条施している。15はR縄2本の結節縄文が施された土器である。16はRRLの組紐が施された土器である。

以上の土器は、10～15が関山I式、16は関山II式に比定される。なお、12は二ツ木式段階に含まれるかもしれない。

黒浜式土器 (第18図17～38)

胎土に多量の繊維を含み、器面調整が丁寧に研磨が施されたものと、粗いものがある。

17～19は単節の斜縄文が施された土器である。17は外反する口縁部破片で、口唇部は先細りとなる。縄文は17・18がRL、19がLRで、18は0段3条縄を使用している。20～24は単節の羽状縄文が施された土器である。20～22は結束第1種の羽状縄文が施されたもので、20・22はRL・LRとLR・RLの2種類の原体を使用している。また、施文の変換部分では菱形となる。21は0段3条RLとLRである。23・24は結束しないRLとLRによる羽状縄文で、23は菱形に構成している。25・28は無節の結束羽状縄文が施された土器である。結束は第1種である。28は強く外反する口縁部破片である。口唇部は平坦で、先端の鋭いヘラ状施文具による斜位の刻みが施されている。また、図の下端にも、同施文具による押し引き状の刺突が2条施されている。26～31は附加条が施された土器である。原体は、26が附加条第1種LR+R、27・30は附加条第2種で、27はRL+0段3条 $\frac{1}{2}$ で左巻、30は0段多条の複節RLR+Rで左巻。29はR縄2本を附加したもので、軸縄は不明、31は附加条第3種で附加条縄はL、軸縄は不明。32・33は口縁部に2～3条の爪形文を施した土器である。33は爪形文下にLRの縄文が施されている。34は胴部中程がくの字状に屈曲した土器で、屈曲部にコンパス文を施し、以下にRLとLRによる菱形縄文を施文している。35は貝殻背圧痕文が施され



0 10cm

第18図 遺構外出土土器

III 検出された遺構と遺物

た土器で、部分的に引きずった施文が見られる。36・37は半截竹管による平行線文を施した土器である。36は斜位の平行沈線、37は波状文が施されている。38は櫛状施文具で横位の波状文が施された土器である。なお、結束羽状縄文が施された20～22は、関山Ⅱ式に含まれるかもしれない。

諸磯式土器 (第19図1～11)

1～4は諸磯a式土器である。1・3は爪形文で区画文を構成する土器で、1は文様の連結部に円形文が施されている。地文は、1がRLとLRによる菱形縄文、3がRLの斜縄文で、3は爪形文間が磨り消され、円形刺突文が施される。なお、1の菱形縄文は、諸磯期ではまれである。2は半截竹管による平行沈線で区画文を構成し、区画内に対角線状に平行沈線が施される。地文はRLの斜縄文である。4は、4本を単位とする櫛状施文具で、口唇下に直線文以下に波状文を施し、その上に竹管による円形刺突文を縦位に施している。

5～11は諸磯b式土器である。5は波状口縁を呈する土器で、口縁部に幅広の爪形文を3条めぐらし、以下にRLの斜縄文を施している。6も波状口縁を呈するもので、口縁部に爪形文を4条めぐらし、以下に爪形文による文様が構成されている。また、口唇部にも爪形文が施される。なお、5・6の口縁部には、焼成前の円孔が施されている。7は口唇部が外反し、口唇下に低い肥厚帯をもつ土器で、肥厚帯下には2条の爪形文をめぐらし、その間に斜位の刻みを施している。8は浮線文が施された土器である。口縁部はくの字状に内折し、浮線文には矢羽根状に刻みが施されている。9は半截竹管による平行沈線で文様が施された土器である。10・11は櫛状施文具による条線で文様が施された土器で、10はRLの地文をもつが、11は無文地である。

浮島式土器 (第19図14)

1点のみ出土した。アナグラ属の貝殻腹縁による波状文が施された土器で、胎土には細砂を多量に含む。

前期末葉の土器 (第19図12・13・15)

12は細い半截竹管による平行沈線で文様が構成される土器で、三角形の印刻文が認められる。13はえぐったような刺突文が施された薄手の土器である。15はr縄による結節縄文を横位に施した土器で、胎土には細砂を多量に含む。



第19図 遺構外出土土器

中 期

遺物は、五領ケ台式～加曽利E 4式の土器群および石器が出土しており、分布は調査区の北側を除くほぼ全域にわたって認められた。遺構は、住居址24軒、土坑104基（時期不明なものも中期として扱った）、および埋設土器6基が検出された。時期別に見ると、阿玉台II式期土坑4基、同III式期住居址1軒・土坑8基（大木8a式期2基を含む）、同IV式期土坑1基、加曽利E 1式期住居址6軒・土坑22基、同2式期住居址7軒・土坑9基、同3式期住居址10軒・土坑4基・埋設土器6基、同4式期土坑3基である。遺構は1・2・3・4区の4つのブロックに分けることができ、また時期によって分布が異なっている。阿玉台式期の遺構は、1・2・3区に認められ、土坑が分布する2・4区には土器が密に分布している。加曽利E 1式期の遺構は、4区を中心に2・3区に認められるが、同2式期になると分布の中心が2・3区に移ってくる。この傾向は同3式期にも引き継がれ、1・4区に遺構は認められなくなる。また、埋設土器6基は全てこの時期である。同4式期では、土坑が2・3区に僅かに認められるだけである。

1) 住 居 址

2号住居址（第20図）

位置 D-9グリッド。東側の1部は調査区外のため、未調査である。後世の攪乱を受けており、状態は良くない。

形状 楕円形を呈すると思われるが、掘りすぎの部分もある。

壁 確認面からの深さは15～20cmほどあったが覆土と地山の区別が困難なため、明確な壁は検出できなかった。

床面 壁と同様の条件により、明確な面はおさえられなかったが、炉が検出されている。

柱穴 ピットは3本検出されているが、柱穴と思われるものはP₁の1本のみである。

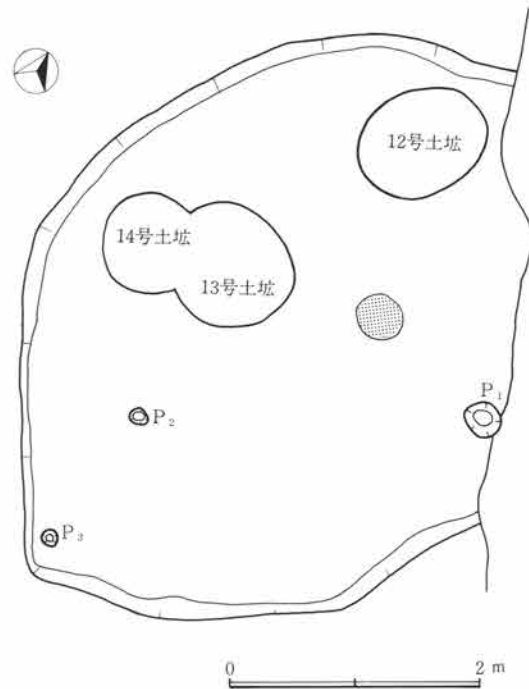
炉 ほぼ中央部分で検出された。直径は38cmで、床面が僅かに焼けている。

重複 12・13・14号土坑が重複しており、それらに切られている。

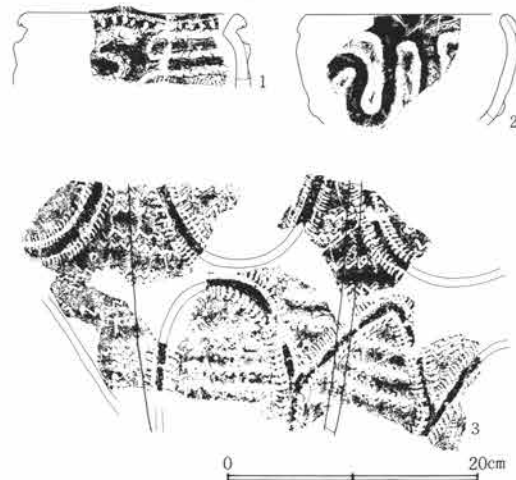
遺物の出土状態

床面および覆土中から、土器片・土製円盤等が少量出土した。

出土遺物（第21図・第22図）

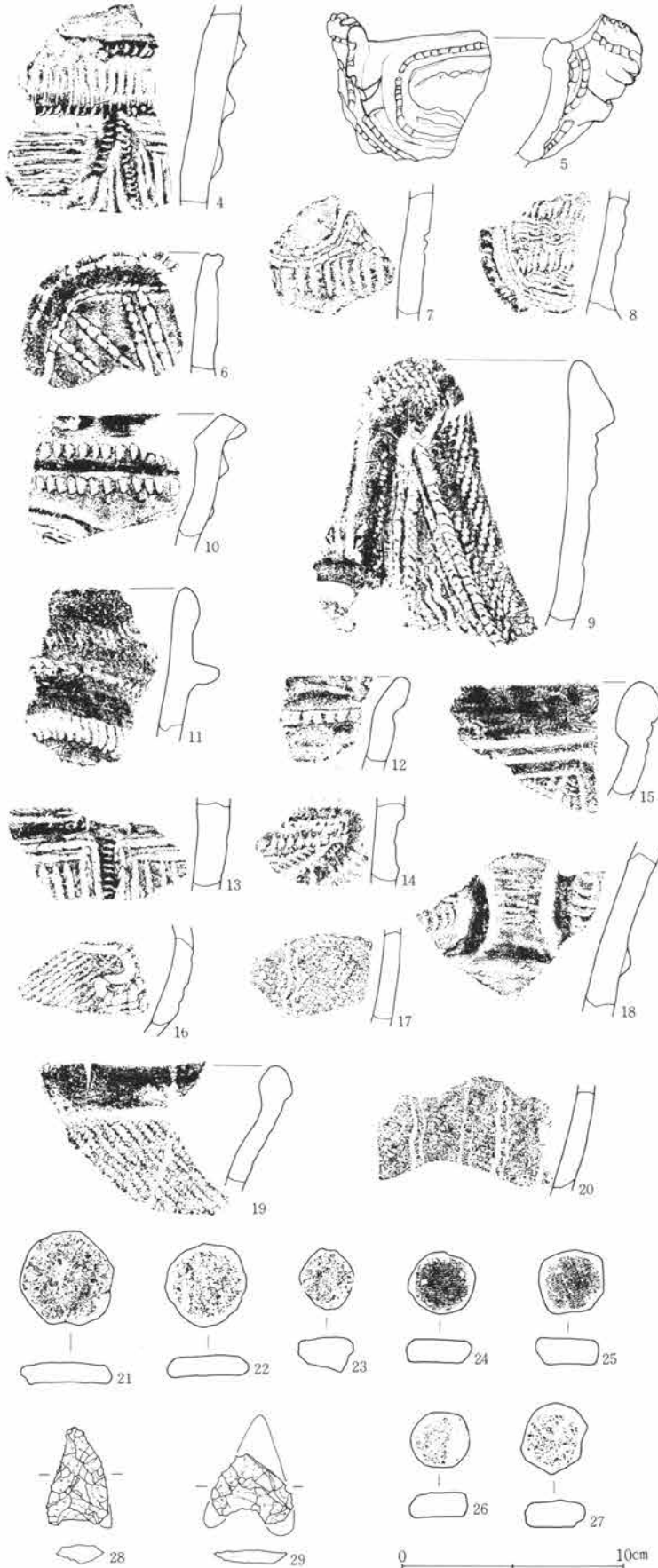


第20図 2号住居址



第21図 2号住居址出土遺物（1）

III 検出された遺構と遺物



第22図 2号住居址出土遺物 (2) (28・29は2/3)

4は五領ケ台式土器である。頸部付近の破片で、文様は半截竹管による刻みが施された隆帯で区画文を構成し、区画内を縦位あるいは横位の平行沈線で充填している。

6は一本づつの角押文で文様を施した阿玉台I b式土器である。区画内には2本の角押文で文様が施されている。また口唇部にも角押文が施されている。

5・7～9は阿玉台II式土器である。5・7は隆帯と2本単位の角押文で楕円形の区画文を構成し、区画内に波状文・爪形文を施している。5は口唇内側に段をもつ口縁部破片で、口縁には杵状の把手をもつ。8は胴部破片で、角押文を波状に施し、その下に幅広の爪形状押引文を施している。9は大型扇状把手の破片で、口唇下には幅広の肥厚帯をもち、2本の角押文で縁どっている。肥厚帯および器面にはRLの縄文が施されている。なお、角押文は7～9は半截竹管を使用しているが、5は1本の施文具である。胎土には、いずれも多量の金雲母を含む。

3・10～12は隆帯の両側を幅広の爪形状押引文で縁どる、阿玉台III式土器である。3は胴部が円筒状を呈する土器で、高い隆帯と押引文で、上半にU字状の区画文を、下半にはアーチ形と山形の区画文を各々施し、空白部分を横位の鋸歯状沈線で充填している。11も同様の土器である。10は口縁上端がくの字状に外折する土器で、図の下端に2条の角押文が施されている。12も口縁上端がくの字状に弱く外折する土器で、外折部外面に押引文が施されている。なお、10・12は胎土に金雲母を含む。

13は勝坂1式土器である。隆帯とペン先状施文具による2本の押引文で区画文

を構成し、区画内を同施文具による押引文で充填している。14・18は勝坂2式土器である。いずれも隆帯で区画文を構成し、区画内の隆帯にそって幅広の爪形文を施している。

1は大木7b式土器の口縁部破片である。小波状口縁を呈する土器で、口縁部が内湾し、上端がくの字状に外折する形態を呈す。口唇直下に刻みを施した隆帯をめぐらし、口唇部との間に0段3条Lの原体圧痕を1条施している。口縁部には隆帯による渦巻文と楕円区画文を施し、隆帯の両側をペン先状施文具による押引文で縁どっている。また、区画文下には無節Lが施されている。胎土に砂粒に多量に含み、焼成は良好で、橙色を呈す。また、内面は研磨が施されている。

16・17・19・20は大木8a式土器である。16は押引文で蕨手状の文様が施された胴部破片である。17・20は半截竹管による平行沈線で、縦位の波状文が施された口縁部破片である。19は弱く内湾する口縁部破片で、口縁上端を肥厚させ、以下に斜縄文を施している。縄文は16がLR、他はRLである。17・20は胎土に多量の砂粒と金雲母を含む。

2は口縁部が内湾する土器で、口縁上端に肥厚帯をめぐらし、幅広の隆帯で曲線的な文様が施される。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好で、橙褐色を呈す。土器の作りは1に近似するが、型式は不明である。

21～26は土製円盤である。21・22・24は胎土に多量の金雲母を含む。

石器は石鏃が2点のみである。いずれも欠損器で、調整はやや粗雑である。

所見

出土遺物から、本住居址は阿玉台III式期に比定されよう。

104号住居址 (第23図)

位置 D-55グリッド。

形状 隅丸方形を呈するものと思われるが、南側の立ち上がりが未検出である。東西の長さは3mである。

壁 検出できた部分では、壁高12～20cmで、傾斜をもって立ち上がっている。

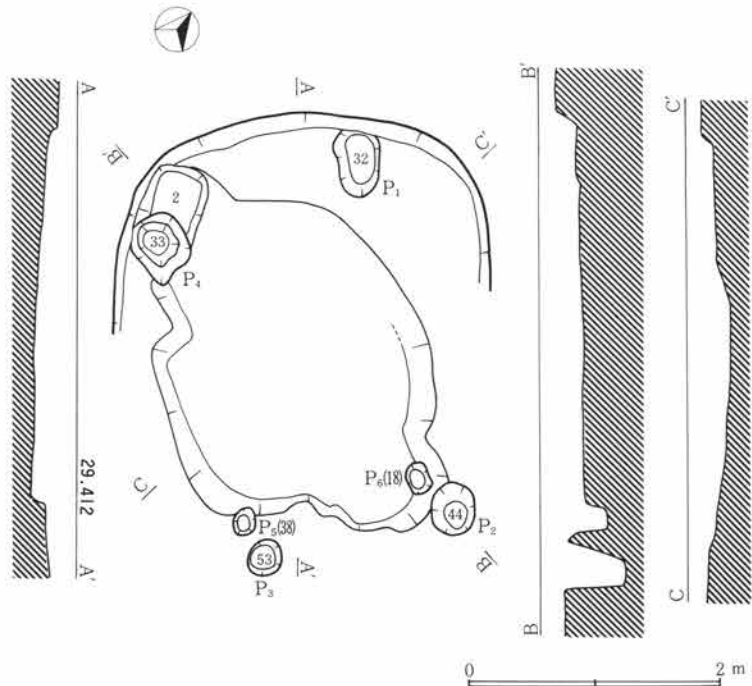
床面 ピットの内側に、不定形な楕円状を呈する掘り込みが検出された。底面はほぼ平坦で、緩傾斜をもって立ち上がり、住居址と同じ覆土で埋没している。北側の床面は平坦である。

柱穴 6本のピットが検出された。P₁～P₄が支柱穴になると思われる。

炉 未検出。

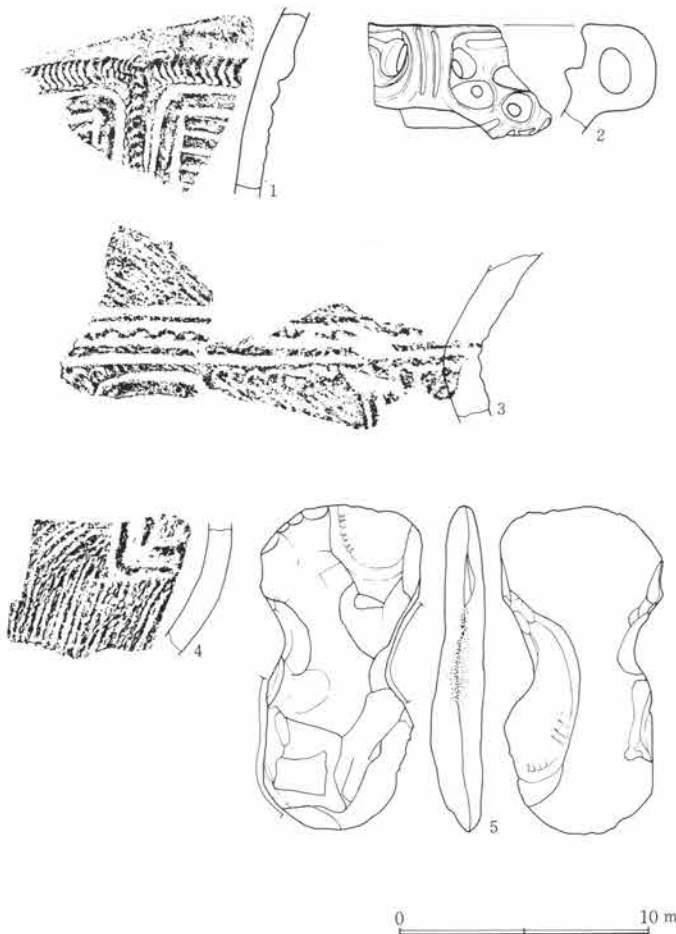
遺物の出土状態

少量の土器破片・石器が、床面および掘り込み底面からやや浮い



第23図 104号住居址

III 検出された遺構と遺物



第24図 104号住居址出土遺物

た状態で出土した。

出土遺物（第24図）

1は、爪形文を施した低い隆帯で区画文を構成し、区画内を半截竹管による平行沈線で充填した、勝坂3式土器である。2は、口縁部に隆帯で立体的な文様を施した、大木8a式土器である。3は頸部がくの字状に折れ曲がる土器で、頸部は半截竹管による平行沈線をめぐらし、そこから数条の平行沈線を垂下させている。また、頸部の平行沈線下に、半截竹管による刺突文を施している。大木8a式土器であろうか。縄文はRL。4はLの撚糸文を地文に、2条の平行する隆線で文様を施した土器で、加曾利E1式土器であろう。

5は、分銅形を呈する打製石斧である。石質はホルンフェルス。なお、この他に敲石1点が出土している。

所見

出土土器から、本住居址は加曾利E1式のなかでも古い段階に比定されよう。

23号住居址（第25図）

位置 B-27グリッド。B区の北端に位置し、東側約5mに120号住居址がある。

形状 当初、プランは不明であったが、柱穴

検出中に周溝が確認された。周溝は、北・東・西は隅丸形状にめぐっているが、南側は軸方向が変化している。周溝の幅は6～12cm、深さは3～18cmで、断続しながらめぐっている。また、周溝内あるいは断続部分には、ピット状の穴がいくつか検出された。軸方向が変化していることから、建て変えあるいは重複の可能性もあるが、形状はいずれも隅丸方形であろう。

壁 未検出。

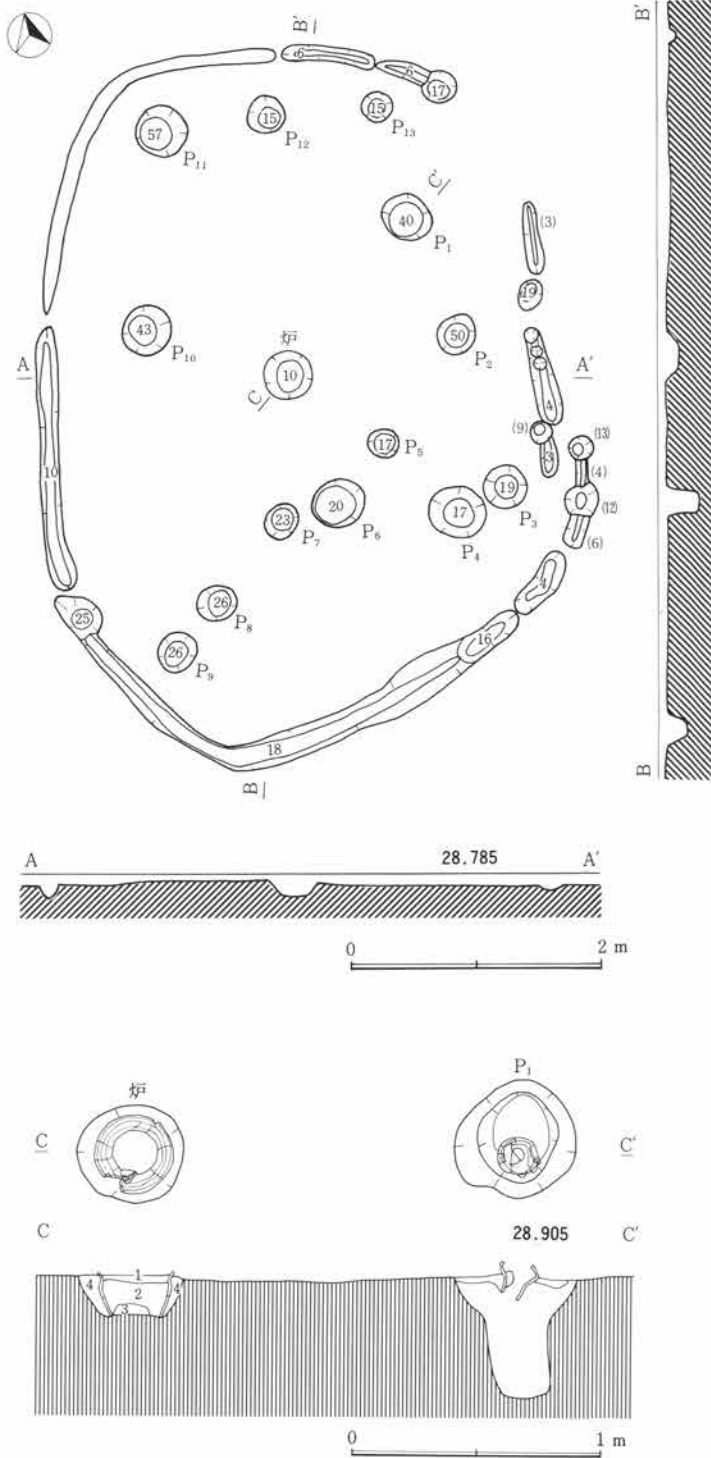
床面 軟弱であるが、平坦な面をなしている。なお、縁辺を除く床面直上には、鉄分凝集が認められた。

柱穴 13本のピットが検出された。深さが40～57cmのものもあるが、位置関係が不規則で判然としない。なお、P₁は上半が開く形状を呈し、そこから小型の深鉢が若干埋め込まれたような状態で検出された。

炉 深鉢形土器の胴上半部を使用した埋甕炉で、住居址の中央に位置する。埋甕内に焼土はほとんど認められなかったが、埋甕は強い加熱を受けており、外面に接する部分の土壌は焼土化していた。

遺物の出土状態

土器片が住居址南半の覆土中に集中して認められた。また、小型の深鉢（第26図3）が、P₁の上面に正位に若干埋め込まれたような状態で出土している。なお、第26図2は埋甕炉内から、4は炉のすぐ西側床面から、第27図13は炉の西側約1.2mの床面からそれぞれ出土した。



1. 黄白色粘質土をブロック状に含む黒灰色土。焼土、炭化物を含む。
2. 1と類似するが、焼土、炭化物が少なく黒みが強い。
3. 黒灰色土混りの、青灰色粘質土。
4. 黒灰色粘質土。焼土を多量に含む。

第25図 23号住居址

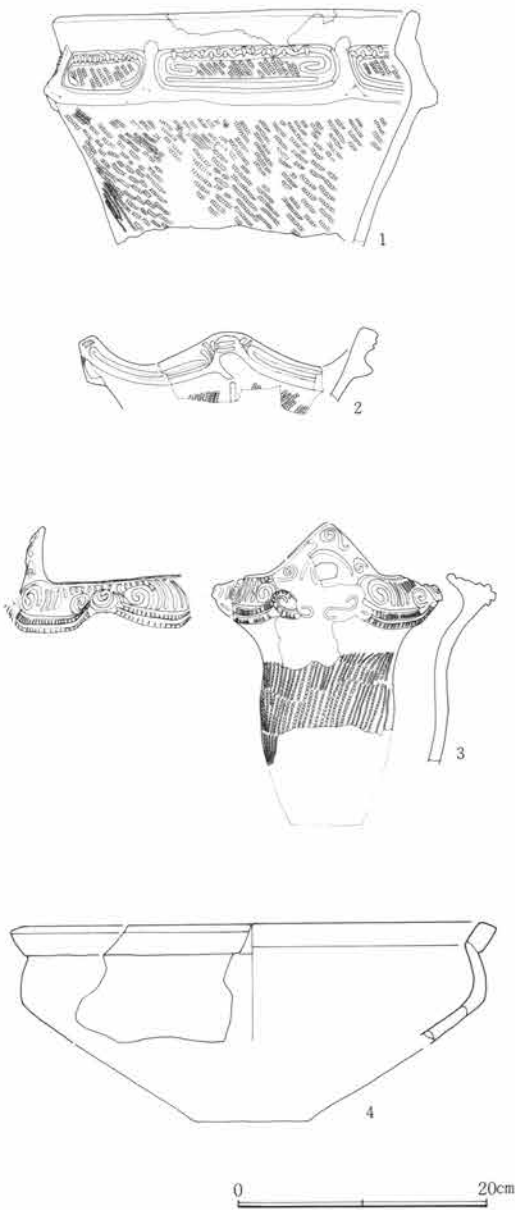
出土遺跡 (第26図・第27図)

1は炉に使用されていた土器である。頸部が直線的に開き、口縁部でいったん内傾し、口唇部がくの字状に外折する深鉢で、胴部は円筒状を呈すると思われるが欠損している。口唇部は無文で、口縁部を隆帯で7単位に分割し、各々の枠内に2本の沈線で楕円形の区画文を施し、上方の沈線間にだけ交互刺突を施して鋸歯文としている。口縁下の隆帯は突帯状を呈する。なお、図の正面の区画文のみは両側に渦巻文が施され、その左区画文は下方の内側沈線が省略されている。口縁部・頸部には縄文LRが縦位に施されている。

2は波状口縁を呈する深鉢形土器の口縁部破片である。口唇下に高い隆帯を1本めぐらし、その間に両端が連結した2本の沈線を施している。隆帯は波頂下で蕨手状を呈し、その上部と両側に短沈線を2本ずつ施している。また、波頂下には1本(2本か?)の垂下沈線が認められる。口縁下に施された縄文はLRである。

3は口縁部が強く内湾するキャリパー形の深鉢で、胴下半および口縁の一部を欠損している。口縁部には山形を呈する把手が一对付くものと思われるが、一つは欠損している。把手外面には渦巻文が施されており、下部には楕円形の透かし孔をもつ。口縁部は楕円形の区画文で2単位に構成される。区画内中央には、隆帯による突出した渦巻文を施し、その両側と区画内両端に沈線による渦巻文を施し、その間を縦位沈線で充填している。口縁部文様帯下端は刻みを施した2本の隆帯で画され、把手下の弧状の隆帯で連結され

III 検出された遺構と遺物



第26図 23号住居址出土遺物 (1)

ている。頸部は幅広く無文化し、胴部にはLの捺糸文を縦位に施している。胎土に砂粒をほとんど含まず、焼成は良好で黄褐色を呈す。また、内面には研磨が施されている。

4は、胴上部が強く内湾し、口縁部がくの字状に外折する浅鉢形土器の、胴上半部破片である。外面は荒れているため観察できないが、内面は研磨が施され光沢をおびる。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好で、外面は黄灰色、内面は黒色を呈す。

5～7は、幅の狭い突出した口縁部文様帯をもつ土器である。いずれも外反する波状口縁を呈し、頸部は無文である。5は波頂部に低い山形の突起を平行して2つ付け、波頂間に2本の沈線をめぐらし、その外側に刻みを施している。また、2本の沈線のうち1本は、端部が渦巻文となる。6は、波頂部に刻みを施した隆帯を弧状に施し、波頂間にも口唇下をめぐる隆帯を1本めぐらし、その外側に幅広の刻みを施している。7は、口縁部に2条の太沈線をめぐらし、波頂下突出部に弧状の太沈線を施し、その直下に刺突を施している。また、口縁部沈線外側にも刺突が認められる。

8～10は、口縁がキャリパー状を呈する深鉢の、口縁部・頸部の破片である。8・10は同一個体で、口唇下に隆帯を1本めぐらし、口縁部に2本の隆帯で文様が構成される。地文はLの捺糸文で、口縁部は横位、胴部は縦位に施文されている。9も2本の隆帯でアーチ状の区画文が構成され、頸部に2本の隆帯をめぐらして文様帯を区画している。地文はRLの縄文で、隆帯剝落部にも縄文が施文されている。

11・12は土製円盤である。11は無文部分、12はLの捺糸文を地文に沈線が施された土器を利用したものである。2点のみ出土した。

13は、定角式磨製石斧の欠損品を利用した敲石である。石器は1点のみである。

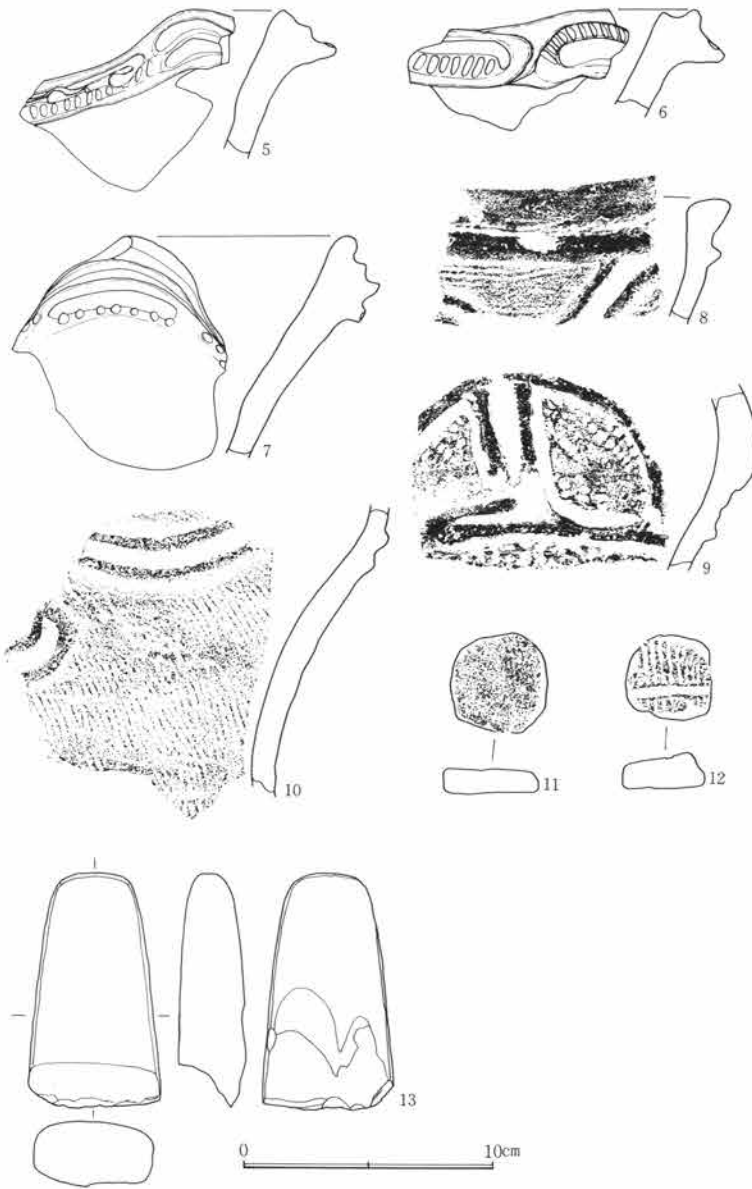
所見

本住居址は、炉に使用されていた土器、およびP₁に埋め込まれていた土器から、加曾利E1式の古い段階に比定できる。覆土出土の土器も、その特徴から同時期と思われる。なお、本住居址の南約2mのところから、無頭石棒の完形品が横たおしの状態で出土している。

106号住居址 (第28図)

位置 D-47グリッドに位置する。東側半分は排水溝により切断されている。南側約5.5mに103号住居址

1 縄文時代の遺構と遺物



第27図 23号住居址出土遺物 (2)

渦巻文を施し、頸部にも1本の隆帯をめぐらしている。地文は縄文LRである。

2は、口縁部がくの字状に内折する浅鉢形土器の口縁部破片で、口縁部には隆帯による楕円形の区画文が施されている。器面は、内外面とも研磨が施され、光沢をおびる。

3・4は、キャリパー状を呈する深鉢形土器の口縁部と頸部の破片で、同一個体である。口縁部には、沈線による同心円状の文様を施し、頸部には1本の隆帯をめぐらしている。また、口縁から頸部に2本の隆帯を垂下させている。地文はRの捺糸文である。

5は、口縁部に隆帯によるS字文が施された土器で、文様下には縄文RLを縦横に交互して施文に羽状縄文を構成している。

6は、胴上部が内湾する浅鉢形土器の破片である。口唇部は外側に突出し、上面に平坦面をもつ。胴上半部には、隆帯による弧状の文様が施されている。器面は、内外面とも研磨が施されており、焼成は良好で黄褐色を呈する。

がある。

形状 東西を長軸とする楕円形を呈するものと思われる。形状・規模とも、103号住居址に近似するものと思われる。

壁 良好な壁面が検出された。壁高は20~30cmで、やや傾斜しながら立ち上がっている。また、南西壁際に周溝が検出された。幅は10~25cmと狭く、深さは5~10cmで、周溝内にピット状の小穴が数個検出された。

床面 平坦な面を呈し、ピット列の内部ではやや堅い部分も認められた。

柱穴 9本のピットが検出された。主柱穴にはP₁・P₂・P₃が相当しよう。

炉 未検出。

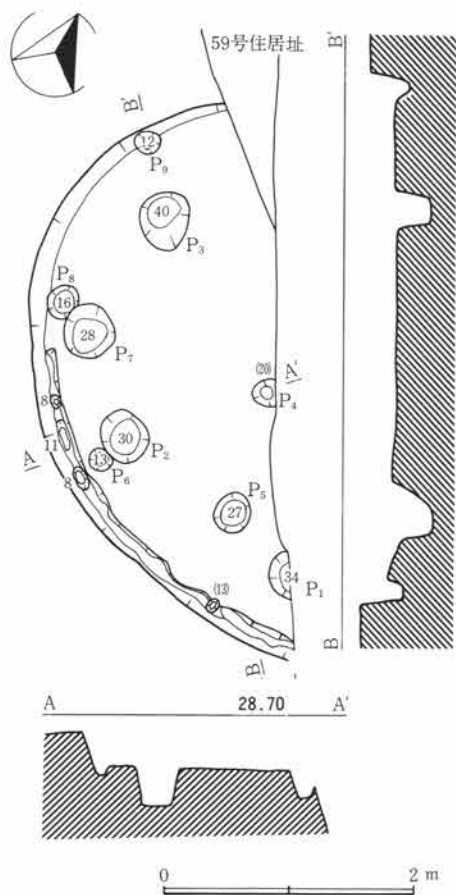
遺物の出土状態

出土遺物は少なく、いずれも覆土中から出土した。

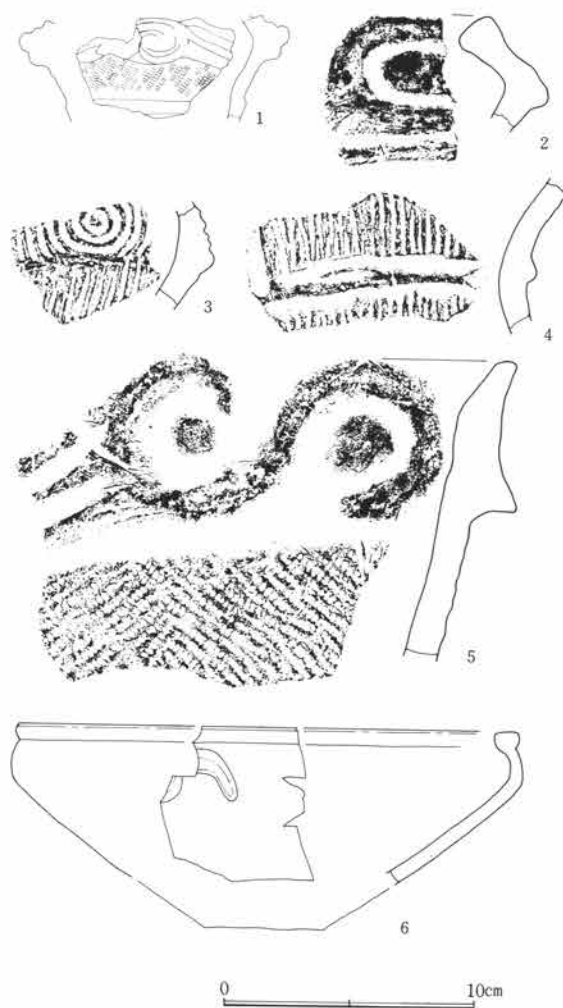
出土遺物 (第29図)

1はキャリパー状を呈する深鉢形土器の口縁部破片である。文様は、口縁部に2本の隆帯による突出した

III 検出された遺構と遺物



第28図 106号住居址



第29図 106号住居址出土遺物 (1・6は1/6)

所見

本住居址は、出土遺物から加曾利E 1式の古い段階に比定される。

102号住居址 (第30図)

位置 D・E-51グリッド。106号住居址同様、東側半分を排水溝により切断されている。また、北西壁をトレンチにより切断されている。

形状 直径約4.5mの円形あるいは楕円形を呈するものと思われる。

壁 確認面での壁高は10~20cmほどで、外傾しながら立ち上がっている。

床面 ほぼ平坦な面を検出できたが、軟弱である。

柱穴 3本のピットが検出された。主柱穴はP₁・P₃が相当するものと思われる。また、トレンチにより切断された北西壁に、ピット状の落ち込みが確認されたが、本住居址に伴うものではない。

炉 未検出。

遺物の出土状態

深鉢形土器4個体と三脚付ミニチュア土器および土器破片が、床面から5~10cmほど浮いた状態で出土した。深鉢形土器のうち、1個体は北側から、3個体は住居址中央部からまとまって出土しており、一括投棄

1 縄文時代の遺構と遺物

された状態を呈する。遺物量はそれほど多くはないが、吹上パターンと認定できよう。なお、三脚付ミニチュア土器は、中央部の深鉢形土器の直下から出土した。

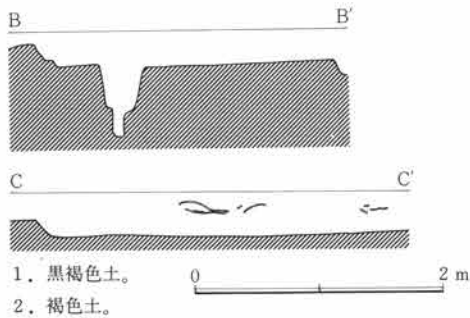
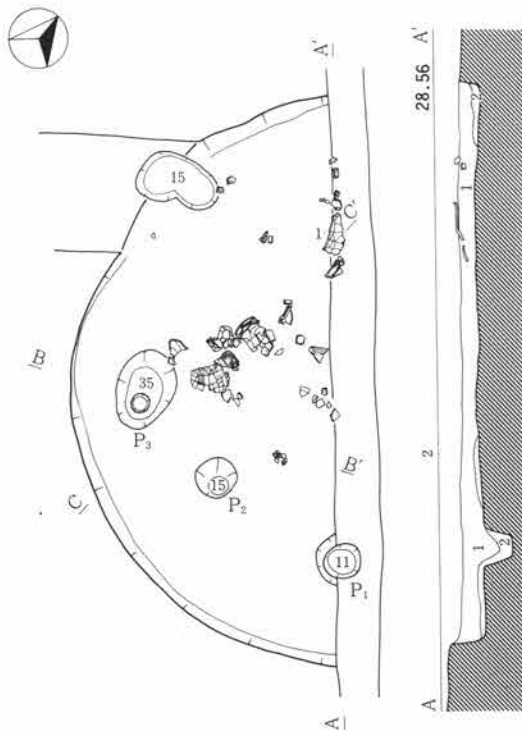
出土遺物（第31図）

本住居址からは、復元可能な土器4個体と三脚付ミニチュア土器1個をはじめとする土器が出土しているが、第31図1以外の土器は現在所在不明となっている。そのうち2個体（P L 9-3）は、口縁部に隆帯でS字文、渦巻文を施こした、ほぼ完形の土器である。これらについては、所在が明らかになりしだい報告したい。

1はキャリパー状を呈する深鉢で、口縁部に2本の隆帯による渦巻文と楕円区画文で口縁部文様帯が構成されている。地文は縄文LRで、隆帯施文前に施されている。

所見

本住居址の時期は、出土土器から加曾利E1式の段階に比定できよう。



第30図 102号住居址



第31図 102号住居址出土遺物

103号住居址（第32図）

位置 D-49グリッド。北約5.5mに106号住居址、南東約5mに102号住居址があり、105号住居址とは西約1mに近接している。

形状 ほぼ南北に長軸をもつ楕円形を呈する。規模は、南北5m、東西4.3mである。

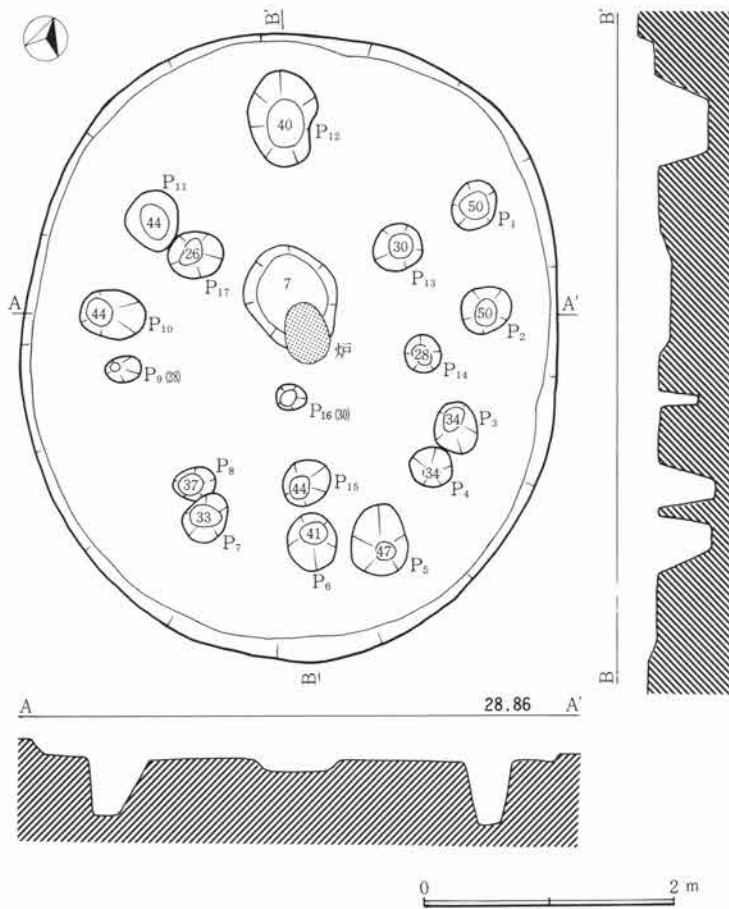
壁 上面が削平されているため壁高は10cm前後であるが、良好な壁面が検出された。壁面が著しく外傾する部分があるが、これは掘りすぎである。

床面 平坦な面を呈する。全体に軟弱であるが、炉の東側と南側、および住居址南西部分では、堅い床が検出できた。

柱穴 合計17本のピットが検出された。深さは26~50cmとバラツキはあるが、いずれも良好である。主柱穴はP₂-P₅-P₇-P₁₀-P₁₂の5本が考えられるが、その他のパターンも考えられることから、建てかえが想定される。

炉 住居址の中央やや北寄りに位置する。80×70cm、深さ7cmの掘り方が確認され、焼土は南側にややぐずれて認められた。

III 検出された遺構と遺物



第32図 103号住居址

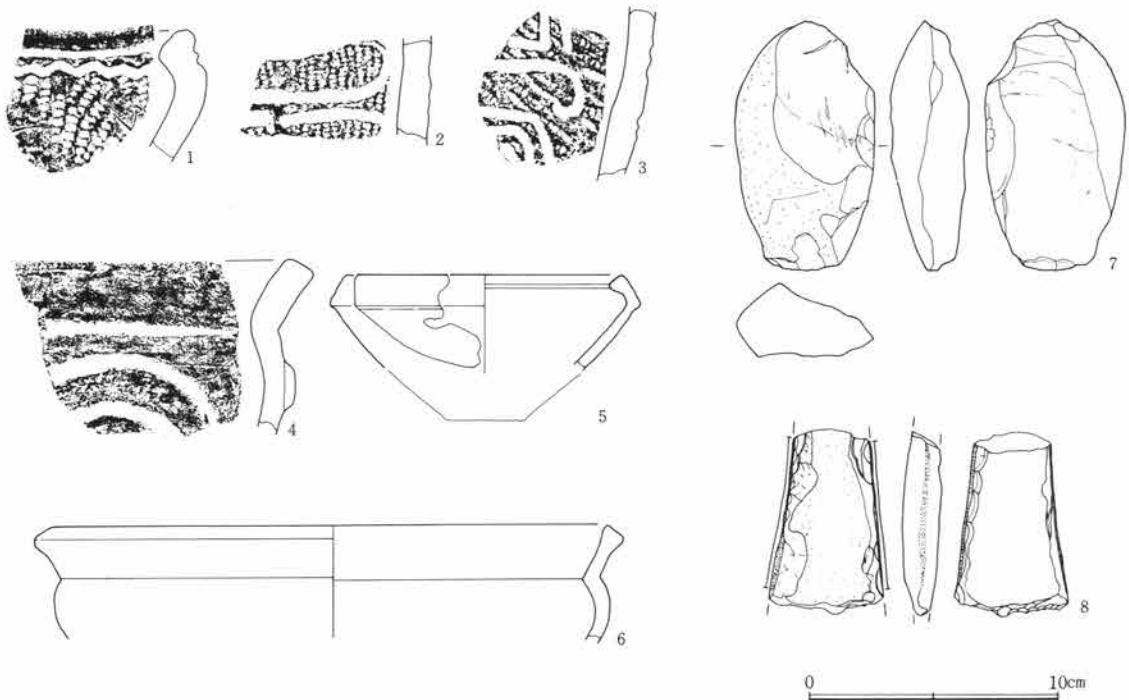
遺物の出土状態

出土遺物は少なく、いずれも床面からやや浮いた状態で出土している。胴下半部を欠く浅鉢形土器(6)が、炉の直上から一括状態で出土した。また、浅鉢の破片(4)は炉内からの出土である。

出土遺物 (第33図)

1～3は縄文LRを地文に、沈線で文様が施された深鉢形土器の破片である。1は内湾する口縁部破片で、口唇下に1本の沈線と波状沈線が施される。2・3は胴部破片である。

4～6は浅鉢形土器である。4・6は胴上部が内湾し、口縁部がくの字状に外折する土器で、4は胴上部に幅広の隆帯で文様が施されている。5は口縁部がくの字状に内折する土器で、内折部外側はやや突出ぎみとなっている。内面と口縁部外面には、塗彩痕が



第33図 103号住居址出土遺物 (5・6は1/6)

認められる。

7は敲石である。大型剥片を素材に、右側縁と下端に調整剥離が施されている。

8は打製石斧である。上端部および刃部を欠損している。礫の表皮部分の剥片を素材に、両側縁に剥離を施して形状を整え、敲打による歯つぶしを施している。

なお、この他に磨製石斧破片2点、礫器1点、土製円盤2点が出土している。

所見

本住居址の時期は、出土遺物から加曾利E1式の段階に比定されよう。

119号住居址 (第34図)

位置 D-26グリッドを中心に検出された。南約2mに120号住居址、南西約5.5mに23号住居址がある。

形状 南東壁以外は検出されていないが、柱穴の配置から径約5mほどの円形を呈するものと思われる。

壁 南東壁以外は検出できなかった。

床面 周辺部はピット検出作業等によりやや掘りすぎてしまったため、床面が下がっている。中央付近はほぼ平坦な面を呈し、部分的に堅い床面も確認されている。

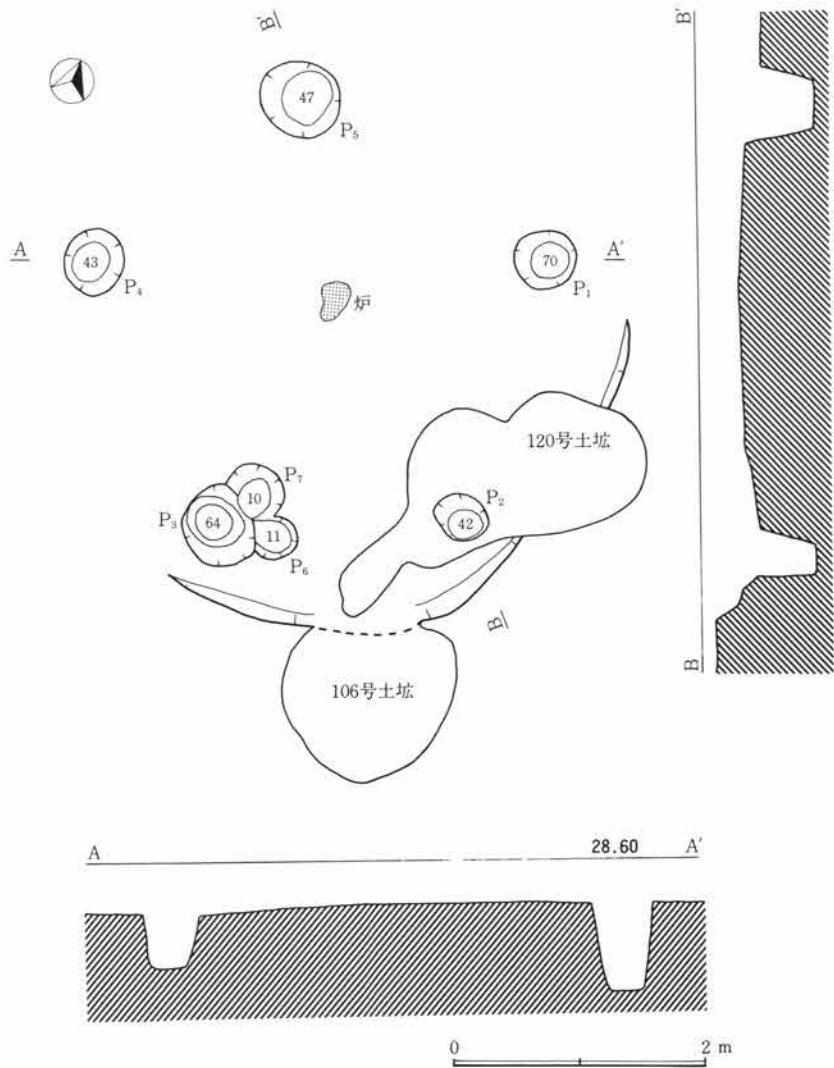
柱穴 P₁-P₂-P₃-P₄-P₅の5本柱である。P₆・P₇は浅い皿状を呈する。

炉 中央の床面に僅かな焼土が検出された。

重複 105・106・120号土壇と重複している。各遺構の覆土での切り合い関係は確認できなかったが、出土遺物では105号土壇が最も古く、次いで106・120号土壇であり、本住居址が最も新しい時期のものと考えられる。

遺物の出土状態

遺物は住居址中央部に集中して認められた。深鉢形土器の大型破片(第35図1・2・3)は、覆土の比較的上層から出土したが、床面からも浅



第34図 119号住居址

III 検出された遺構と遺物

鉢（第35図10）や小破片（第35図9）が出土している。

出土遺物（第35図）

1はキャリパー状を呈する深鉢形土器の口縁部で、約半周分が出土した。口縁には橋状把手を伴う山形の把手が4単位付けられている。把手の上端には沈線による渦巻文が施され、橋状把手裏側には円孔が施されている。文様は口唇直下に隆帯を1本めぐらし、口縁部に2本の隆帯による渦巻文や区画文を施し、頸部に2本の隆帯をめぐらして口縁部文様帯を区画している。また、橋状把手下に2本の隆帯を垂下させて、頸部隆帯に連結している。口縁部文様を描く隆帯は橋状把手に連結されており、両者が一体となる文様構成がとられている。また、各隆帯間や橋状把手の正面・側面には沈線が施されている。なお、隆帯の大半は剝離しており、剝離部には縄文が施文されている。縄文はRLである。胎土に細砂を多量に含み、焼成はややあまく、色調は黄褐色を呈す。内面は研磨が施されている。

2はキャリパー状を呈する深鉢の、頸部以下の破片である。文様は、頸部に幅広く無文帯をおいて3本の沈線をめぐらし、胴部に2～3条の沈線を垂下させている。胴部には縄文RLが縦位に施文されており、沈線間の縄文は磨り消されている。

3もキャリパー状を呈する深鉢形土器で、口縁から胴上半部の約 $\frac{1}{2}$ が出土した。口縁には、1と同様、橋状把手を伴う山形の把手が4単位付けられるものと思われる。橋状把手の上下端部および山形把手には円孔が施されている。また把手の左端にも小さな突起が見られる。口縁部に、橋状把手の上下端部を連結するように、1本ずつの隆帯をめぐらし、頸部に幅広い無文帯をおいて、その下端に隆帯を1本めぐらしている。頸部・胴部には縄文RLが施されている。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好で、色調は灰白色を呈す。また、内面は丁寧な研磨が施されている。

4は胴上半部が内湾し、口縁が外反ぎみに開く浅鉢形土器で、胴上半部の約半周分が出土した。胎土に多量の砂粒を含み、焼成はややあまく、黄褐色を呈す。なお、器面が著しく荒れている。

5は深鉢の底部で、縄文RLの縦位施文を地文に、2～3本の沈線による懸垂文が施されている。文様は、底部端にまで施されている。

6・7・9は内湾する口縁部破片である。6・7は隆帯による立体的な文様が構成される土器で、交互刺突による鋸歯状文や隆帯上の刻みが特徴的である。9は2本の隆帯でクランク文が構成される土器で、頸部に隆帯をめぐらして文様帯を区画している。地文は縄文LR。

8・10は浅鉢形土器である。8は口縁部がくの字状に外折し、外折部に鋸歯文が施されている。10はくの字状に内折した胴上半部に隆帯で文様が施された土器である。文様部地文はLの撚糸文である。いずれも内面には研磨が施されている。

なお、石器は打製石斧の欠損品が1点出土している。

所見

土器のうち、6・7は加曽利E1式の古い段階、3・9は同1式の新しい段階、1・2は同2式の古い段階に比定されるものと思われる。本住居址の時期は加曽利E2式の古い段階に比定しておきたい。

105号住居址（第36図）

位置 C-49グリッド。北東約1mに103号住居址が近接する。

形状 径約5mの円形を呈する。

壁 上面を著しく削平されており、壁は高い部分で5cmほど検出されたにすぎない。壁下には周溝がほぼ



第35図 119号住居址出土遺物 (6~10は $\frac{1}{2}$)

III 検出された遺構と遺物

全周するが、西側の一部に断続する部分があり、出入口部に相当する可能性がある。周溝の規模は、幅18~25cm、深さ20cm前後であるが、西側付近では小規模になっている。

床面 ほぼ平坦な面を呈するが、全体に軟弱である。

柱穴 ピットは14本検出されたが、支柱穴はP₁-P₂-P₃-P₄-P₅の5本が相当すると思われ、P₁とP₅の間に未検出の1本を加えて、6本柱になるものと思われる。また、P₁₂・P₁₃は出入口部に関連する可能性が考えられる。

炉 住居址中央部の床面に、わずかに焼土が認められた。掘り込みは認められない。

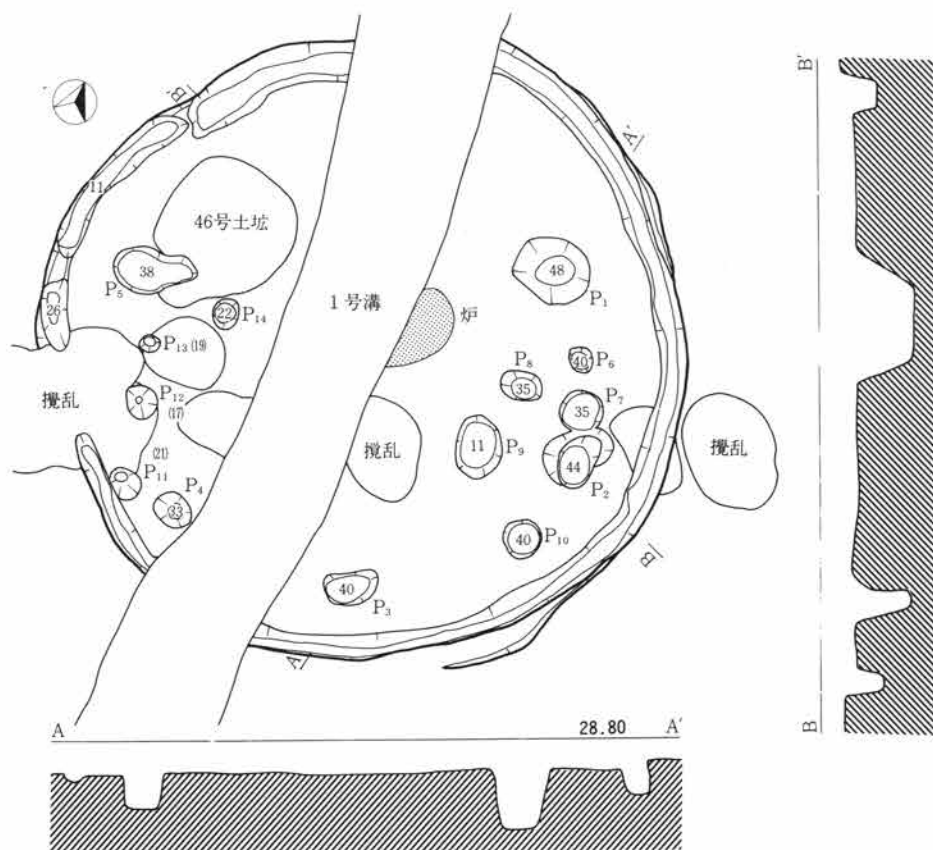
重複 住居址中央部を1号溝により南北に、また近世の溝により東西に切られている。また、住居址内西北部に46号土壇が重複しており、本住居址を切っている。

遺物の出土状態

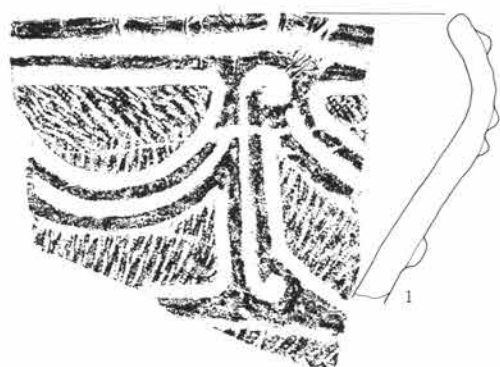
出土遺物は、少量の土器破片、石器破片2点、土製円盤1点のみであるが、いずれも床面直上からの出土である。

出土遺物（第37図）

1は内湾する口縁部破片である。口唇直下および頸部に隆帯を1本づつめぐらして口縁部文様帯を区画し、区画内には両端部が渦巻状を呈する2本の隆帯を縦位に施し、その上端から2本の隆帯を両側に弧状に施している。地文は直前段反撚RRLで、上端部は横位、以下を斜位に施文している。



第36図 105号住居址



第37図 105号住居址出土遺物

2・3は深鉢形土器の胴部破片である。2点ともLの撚糸文を地文に、2本の隆帯で文様が構成される。4は口縁が小波状を呈する土器で、口縁部には隆帯と沈線による渦巻文が構成され、以下に縄文LRが施される。

5は、Lの撚糸文が施された胴部破片を利用した、土製円盤である。

所見

出土土器のうち、2・3は加曽利E1式に比定されようが、1に見られる弧状文による文様の連結や、4に見られる沈線による渦巻文の施文は、加曽利E2式土器に一般的に見られる要素である。以上のことから、本住居址の時期は、加曽利E2式の古い段階に比定したい。

120号住居址（第38図）

位置 D-32グリッドを中心に検出された。2区の最南部に位置し、南約2mにほぼ同時期の119号住居址が近接する。

形状 東西4.55m、南北4.40mの隅丸方形である。

壁 本住居址も上面を著しく削平されており、特に本住居址は多量の遺物が集中していたため

に、かろうじて立ち上がりが検出できた。壁高は西側で18cm、東側で10cmをはかり、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床面 東壁付近にやや凹凸が認められるものの、全体的にほぼ水平で良好な床面である。

柱穴 4本柱である。P₂は他に比べて規模が大きく、またやや西側に寄っている。P₄は、上半部に二次的な掘り込みがなされ、そこから大型深鉢の胴上半部大型破片が外面を上にしてかぶせた状態で出土した。

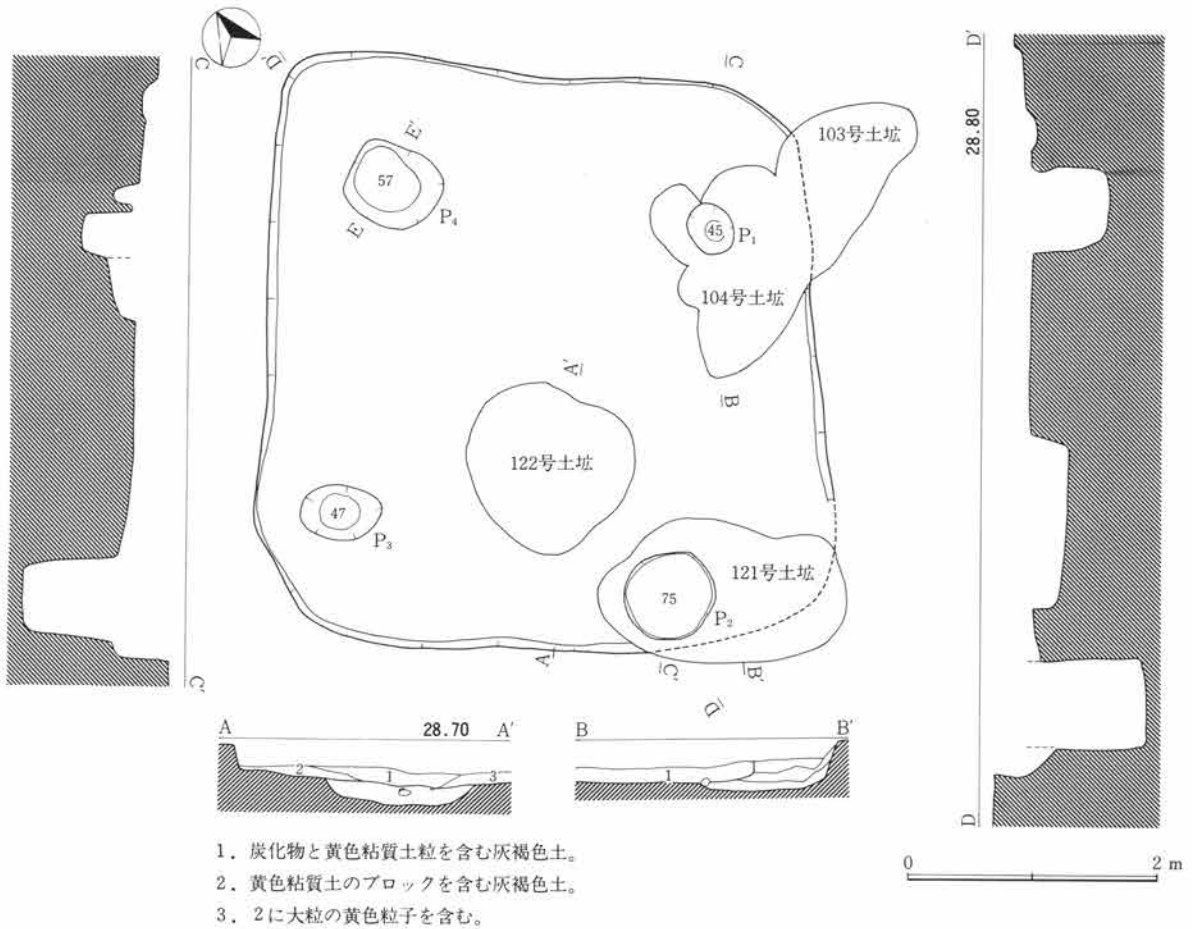
炉 未検出。

重複 103・104・121・122号土壇が重複しており、切り合い関係は121・122号土壇→120号住居址→104号土壇→103号土壇である。

遺物の出土状態（第39図）

器形復元可能な土器20個体をはじめとする多量の遺物が、住居址の中程、各柱穴の内側に集中して出土した。完形土器や一部欠損の土器(6~8)は、横たおしの状態で床面に密着して出土しており、その他の欠損品や大型破片は床面直上あるいはやや浮いた状態で出土している。また、それとは異なった出土状態を示すものに、床面倒置土器とP₄上面出土の大型破片がある。前者はP₁の北東70cmのところに位置し、口唇部を床面に密着し直立している。土器は口縁部が大きく外反するやや小型の深鉢形土器(15)を使用している。底部を欠損しているが、これは後世の削平による可能性も考えられる。P₄出土の土器(3)は、前述のようにP₄上面の浅い掘り込み内から、外面を上にしてかぶせたような状態で出土しており、把手の一部が床面上にわず

III 検出された遺構と遺物



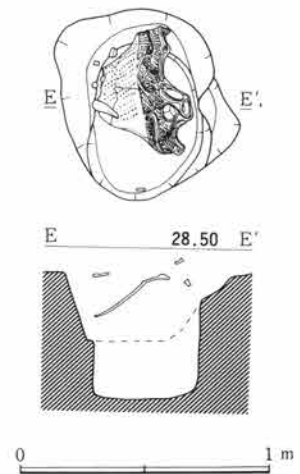
第38図 120号住居址

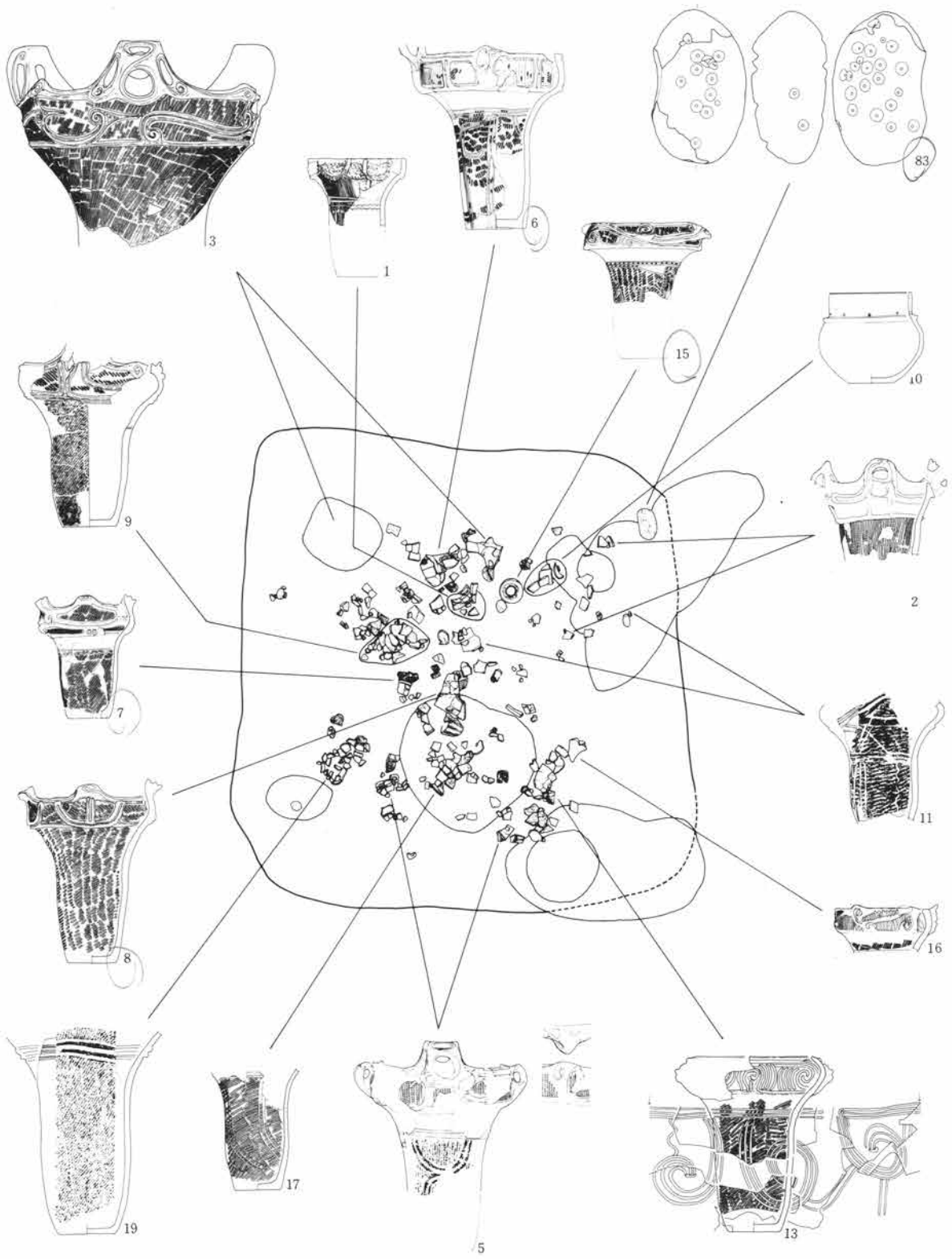
かに出ている。土器は箱状把手をもつ大型の深鉢形土器の胴上半部半周分の大型破片であるが、P₄の南東1.3mの床面直上から出土した大型破片と接合した。以上のことから、床面倒置土器は床密着出土土器と、P₄出土土器は床面直上出土土器との同時性が認められる。これらのことから、本住居址の廃絶とその後を追ってみると、まず住居の廃絶と同時あるいは直後に、炉周辺に土器3個体、北東寄りに1個体とその南側に1個体を倒置し、その後やや窪地化した時点で、多数の一部欠損土器・大型破片等を一括投棄。引き続いて、小破片や礫・剥片等を投棄したものである。

出土土器 (第40図～第46図)

本住居址からは、深鉢形土器20個体以上、有孔鏝付土器1個体、浅鉢形土器2個体をはじめとする多量の土器、ミニチュア土器1個、耳栓状土製品1個、滑車形耳飾り1個、土製円盤2個、石鏃1点、磨製石斧破片1点、打製石斧3点、磨石4点、石皿破片1点、敲石1点、剥片石器1点の他、剥片類、礫等が出土している。

1は頸部から外反し、口縁がほぼ直立する深鉢形土器の大型破片である。口縁部には、低い粘土帯で楕円形と円形状の区画文を交互





第39図 120号住居址遺物出土状態

III 検出された遺構と遺物

に配し、区画内を先端の鋭いヘラ状具による斜位の刺突文で充填している。頸部には幅広く無文部をおいて2本の沈線をめぐらし、その下に2本の波状沈線を施している。地文は櫛状施文具による縦位の条線である。

2は胴部が円筒状を呈し、口縁部がゆるく内湾しながら開く深鉢形を呈す。口縁には箱状把手が4単位付けられ、各把手間を太い突帯で連続している。突帯の中央にはつまみ上げたような突起が付けられている。また、突起上面と把手外面には1本の沈線が施こされており、把手上端部では渦巻状を呈する。把手下には把手幅と平行する隆帯を2本垂下し、頸部下をめぐる隆帯に連結している。胴部にはLの捺糸文を縦位に施している。

3はキャリパー状を呈する大型の深鉢形土器で、胴上半部の $\frac{3}{4}$ が出土した。口縁には箱状把手および突出した渦巻文が3単位付けられる。箱状把手には、渦巻文を伴う沈線とS字状の沈線が施されている。口縁部には2本の細い隆帯によるS字状の文様と弧状の文様を連結して施し、下端に1本の隆帯をめぐらして口縁部文様帯を区画している。各文様の両端部には剣先状文を伴う渦巻文が配されており、箱状把手間の突出した渦巻文と、2本の隆帯で連結されている。なお、各隆帯は沈線で縁どられている。口縁部および胴部には縄文RLが縦位施文されている。

4は弱いキャリパー状を呈する深鉢形土器で、胴上半部の $\frac{1}{4}$ が出土した。口縁には山形状の把手が4単位付けられているものと思われる。口唇直下をめぐり沈線が把手外面で渦巻文を描いている。把手下には隆帯による楕円区画文が施され、その隆帯の左方は把手間にのびて、突出した渦巻文を形成している。また、渦巻文下に2本の隆帯を垂下させ、区画文を構成している。区画文を構成する隆帯は沈線によって縁どられ、区画内は縦位の沈線で充填されている。

5はキャリパー状の深鉢で、口頸部は $\frac{1}{2}$ 、胴部は $\frac{1}{3}$ が出土した。口縁には箱状把手と橋状把手が1対づつ施されている。口唇直下をめぐる沈線は、橋状把手上で渦巻文を描いている。口縁部には各把手をつなぐように隆帯による弧状の区画文を構成し、下端に隆帯をめぐらして口縁部文様帯を区画している。頸部には無文帯をおいて2本の隆帯をめぐらし、胴部には2本の隆帯で「X」状の区画文が構成されるものと思われる。なお、口縁部・胴部には隆帯貼付前にLの捺糸文が縦位に施されている。

6は胴部が円筒状で頸部が強く外反し、口縁部が直立する深鉢で、口縁の $\frac{1}{2}$ および胴下半の一部を欠損している。口縁には大形の把手とつまみ状の把手が付けられるが、大型の把手は欠損している。口縁部は上下端に隆帯をめぐらして文様帯を区画し、把手間に中程が連結した2本の隆帯を施して区画文を構成し、区画内を縦位の沈線で充填している。頸部には無文帯をおいて3本の沈線をめぐらし、胴部には3本の沈線による懸垂文や2本の沈線による弧状文・渦巻文・剣先文等の文様が施されている。また、口縁部および胴部には縄文RLを縦位にまばらに施文している。

7はキャリパー状を呈する小型の深鉢で、部分的に欠落部はあるがほぼ完形である。口縁には把手が4単位付けられ、口唇直下をめぐる沈線が把手上で渦巻文を描く。口縁部には各把手間に隆帯による渦巻文を施し、各渦巻文を2本の弧状隆帯で連結している。また、弧状隆帯と口縁部文様帯を区画する隆帯を3本の短隆帯で連結している。頸部には無文帯をおいて1本の沈線と波状沈線をめぐらし、胴部には縦文RLのみが施される。口縁部区画内の縄文もRLである。

8はキャリパー状を呈する深鉢で、口縁の一部を欠損する以外は完形である。口縁には把手が4単位付けられ、口唇直下をめぐる沈線が把手上で渦巻文を描く。口縁部は隆帯によって区画され、把手を中心に2本の隆帯による楕円状の区画文を構成し、把手下に2本の隆帯を垂下させている。器面には縄文RLが施されるが、口縁部では横位、胴部では縦位に施文している。



第40図 120号住居址出土遺物(1)

0 20cm

III 検出された遺構と遺物

9もキャリパー状を呈する深鉢で、胴上半部の $\frac{1}{2}$ を欠損している。口縁には大型の把手が付くがこれも欠損している。口縁部は隆帯による渦巻文等で構成され、頸部をめぐる2本の隆帯で画されている。器面には全面に縄文RLが施されるが、口縁部では横位、胴部では縦位に施文している。

10は胴部が球状にふくらみ、口縁部が直立する有孔鏝付土器である。口縁から底部にかけて約 $\frac{1}{4}$ を欠損している。口縁部は他に比べてやや薄手になっており、口唇部は丸みを持つが、上面は平坦である。鏝は口縁部に対して垂直な面をもつように付けられており、端部は尖がっている。孔は鏝の直上にほぼ等間隔に施されており、現存部では6つであるが、おそらく9つ施されていたものと思われる。穿孔は水平に行なわれている。底部は安定した大きな平底である。胎土には砂粒を多量に含み、焼成は良好で、内外面とも橙白色を呈す。また、全面に入念な研磨が施され、光沢をおびる。なお、孔内面および器面の一部に赤色の塗彩痕が認められることから、本来は全面に赤色の塗彩が施されていたものと思われる。

11はキャリパー状を呈する深鉢の大型破片である。口縁部に低い隆帯で文様を施し、頸部に幅広く無文帯をおいて3本の沈線をめぐらし、胴部には3本の平行沈線と1本の波状沈線を垂下させている。地文は0段多条RLの縄文で、口縁部には横位、頸部以下には縦位に施されている。

12は湾曲が弱いキャリパー状を呈する深鉢で、胴上半部の $\frac{1}{2}$ が出土した。口唇下および頸部に低い隆帯をめぐらして口縁部文様帯を区画し、区画内に2本の隆帯によるクランク状の文様を施し、空白部を縦位の沈線で充填している。なお、クランク状文の端部は、剣先文を伴う渦巻文となっている。胴部には縄文RLが縦位に施文されている。

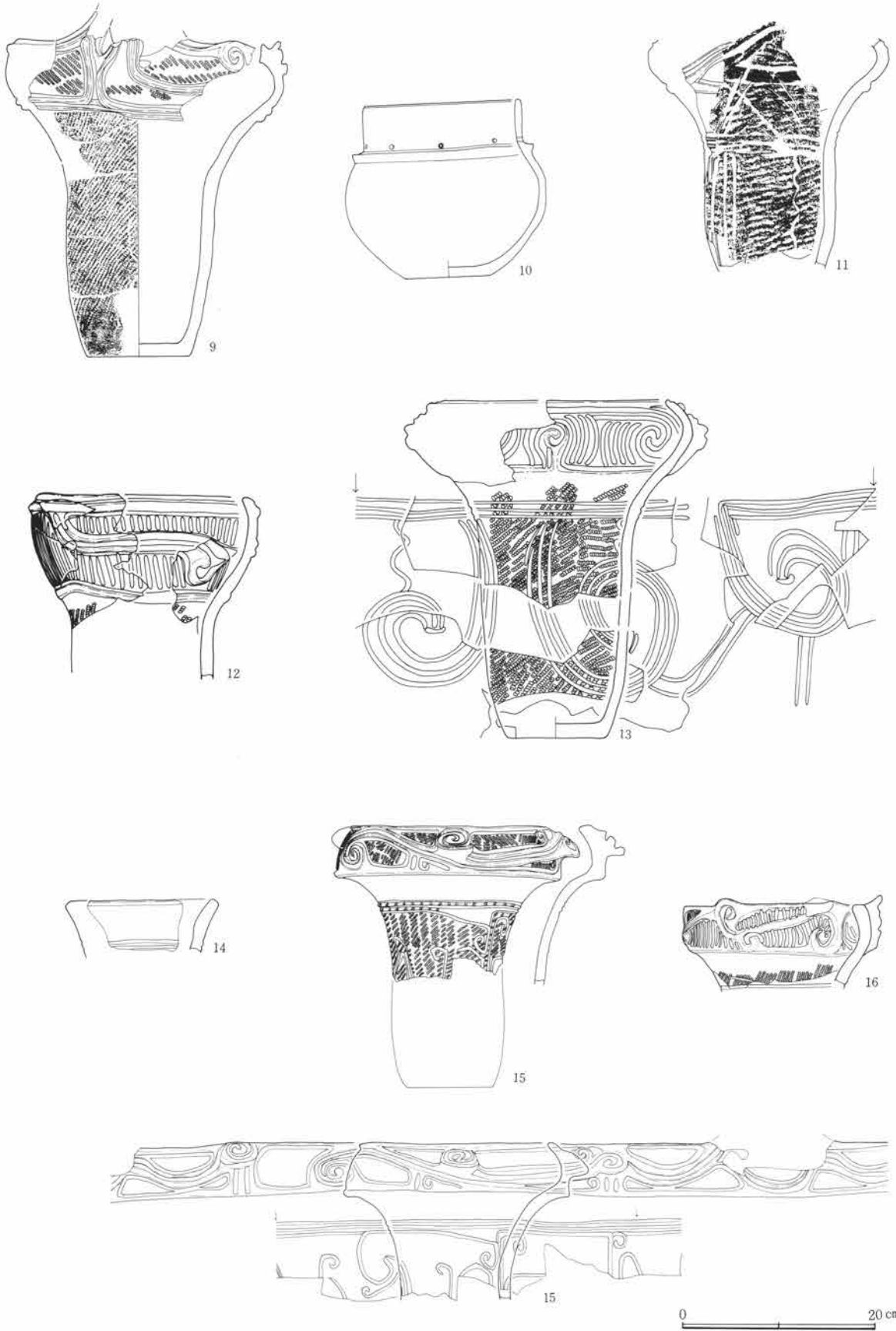
13もキャリパー状を呈する深鉢で、口縁部 $\frac{1}{2}$ および胴部 $\frac{1}{4}$ を欠損する。口縁部文様帯には隆帯による突出した渦巻文を4単位施し、その間に沈線による入り組み状の渦巻文を同じく4単位施し、各々の渦巻文の間に同心円状の沈線を施して充填している。頸部には無文帯をおいて3本の沈線を施し、胴部には3本の沈線によるJ字状の渦巻文を3単位施し、一部に2本の平行沈線や波状沈線を垂下させて文様帯を構成している。胴部の縄文はRLの縦位施文である。

14は口縁部が外反する小型の深鉢の口縁部破片である。口縁部は無文で、頸部付近に数条の沈線が施されている。

15は胴部が細く、頸部が強く外反して大きく開き、口縁部がくの字に折れて内湾する深鉢で、胴部下半および口縁の一部を欠損している。口唇部には幅広く平坦面が形成されている。口縁部文様帯には上方に突出した渦巻文を4単位配し、その間にも渦巻文を施しながら、2本の細い隆帯で連結している。また、突出した渦巻文のうち2つは、直下に3本の隆帯を施こしている。空白部は沈線で縁どられて区画文化され、一部に渦巻文が配される。頸部には無文帯をおいて3本の沈線をめぐらし、胴部には沈線で所々で、渦巻文を配した不規則な文様が施こされている。地文はRLの縄文で、口縁部には横位、胴部には縦位施されている。

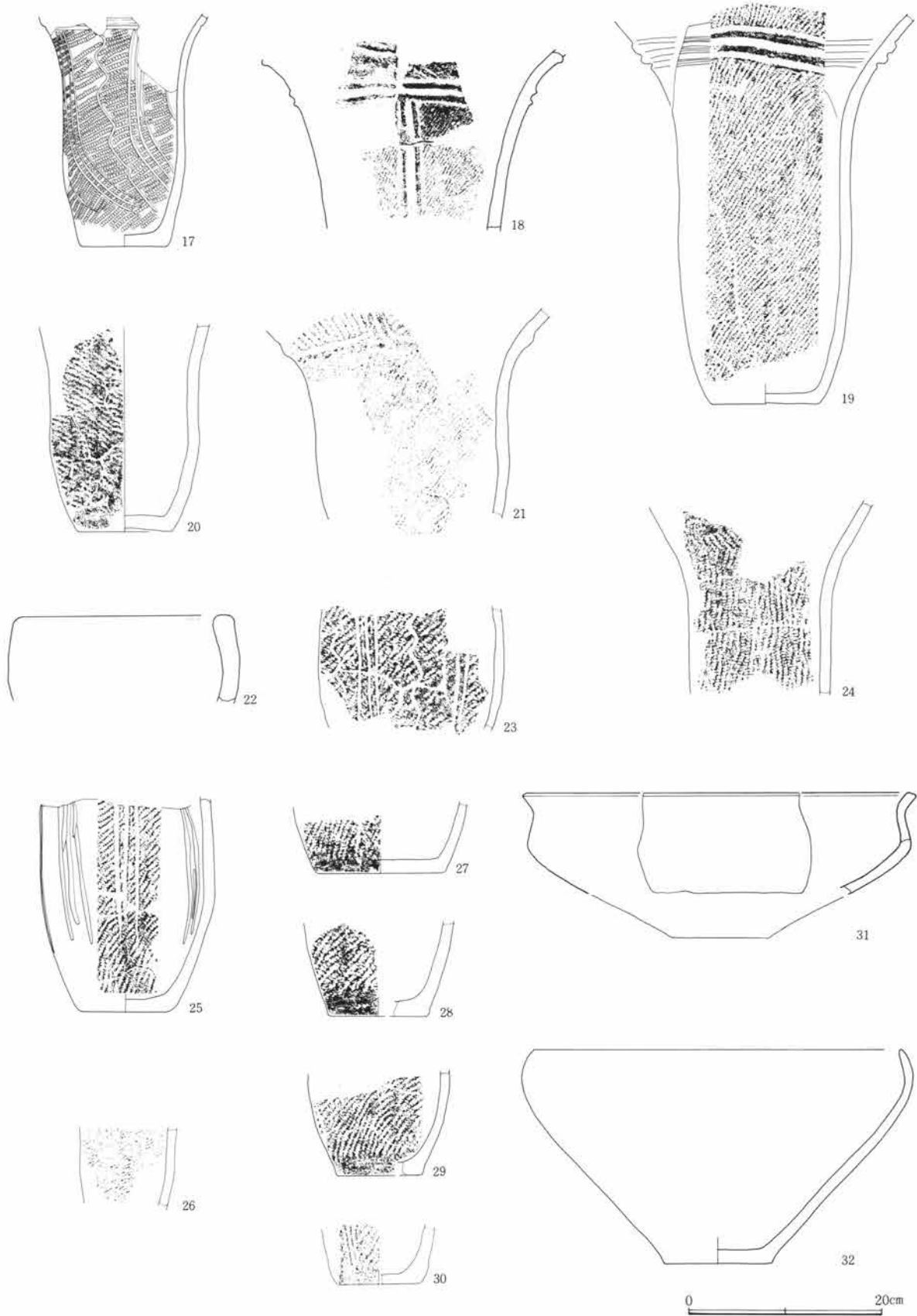
16は口縁部が弱く内湾する深鉢で、頸部以上の $\frac{2}{3}$ が出土した。口縁部には隆帯による渦巻文をS字状に連結して施し、空白部を縦位の沈線で充填して文様帯を構成している。また、渦巻文は口唇上に突出して施されており、渦巻文の付根部分にも小さな渦巻文が施されている。頸部には無文帯をおいて沈線がめぐらされており、頸部下半には縄文RLが縦位に施文されている。

17は胴部下半がやや丸みをもち、上半が外反する深鉢の胴部で、頸部以上を欠損する。頸部下に隆帯と沈線をめぐらして胴部文様帯を区画し、胴部に3本の平行沈線と1本の波状沈線による懸垂文を各々5単位施している。懸垂文は胴部中程以下は左側に片流れ状に施されている。地文は縄文RLである。



第41図 120号住居址出土遺物 (2)

III 検出された遺構と遺物



第42図 120号住居址出土遺物 (3) (22は1/3)

18～21・24は、胴部上半が外反する深鉢の胴部である。18・19は胴上部に2本の隆帯をめぐらして頸部無文帯を形成し、18は胴部に2本の隆帯による懸垂文を施している。21は口縁部に2本の隆帯で文様を施し、その間を縦位の沈線で充填する土器で、頸部無文帯は形成されない。19・21は隆帯の両側を沈線で縁どられるが、18は隆帯のみである。縄文は、20がLR、他はRLで、いずれも縦位に施文されている。なお、18は頸部無文帯に縄文は施されていない。

22は口縁部がやや内湾する鉢形を呈すると思われる小型無文土器の口縁部破片である。内外面とも整形が粗く、研磨は施されていない。焼成は良好である。

23は胴部の大型破片で、3本の沈線と2本の沈線による懸垂文を交互に施し、その間に1本の波状沈線を垂下させている。地文は縄文RLである。

25は3本の沈線による懸垂文が9単位施された深鉢の胴部で、地文には縄文RLが縦位に施文されている。

26は小型の深鉢形土器の胴部破片で、全面に細かい縄文RLが縦位に施文されている。

27～30は深鉢の底部である。いずれも縄文RLが縦位に施文されており、30には3本の沈線による懸垂文が施されている。いずれも安定した底部形態である。以上の深鉢形土器は、いずれも胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好で、内面は研磨が施されたものが多い。また胴部は二次的焼成を受け、淡色化している。

31は、胴上部で内折し、口縁が外傾する浅鉢の大型破片である。胎土には砂粒を多量に含むが、内外面とも入念に研磨が施されている。焼成は良好で、内外面とも橙褐色を呈す。なお、塗彩は認められない。

32は口縁部が内湾する浅鉢で、各部の破片からの図上復元である。内外面とも整形が粗く、研磨も不明瞭である。胎土には砂粒を多量に含み、焼成は良好で、外面は赤褐色、内面は黒色を呈す。

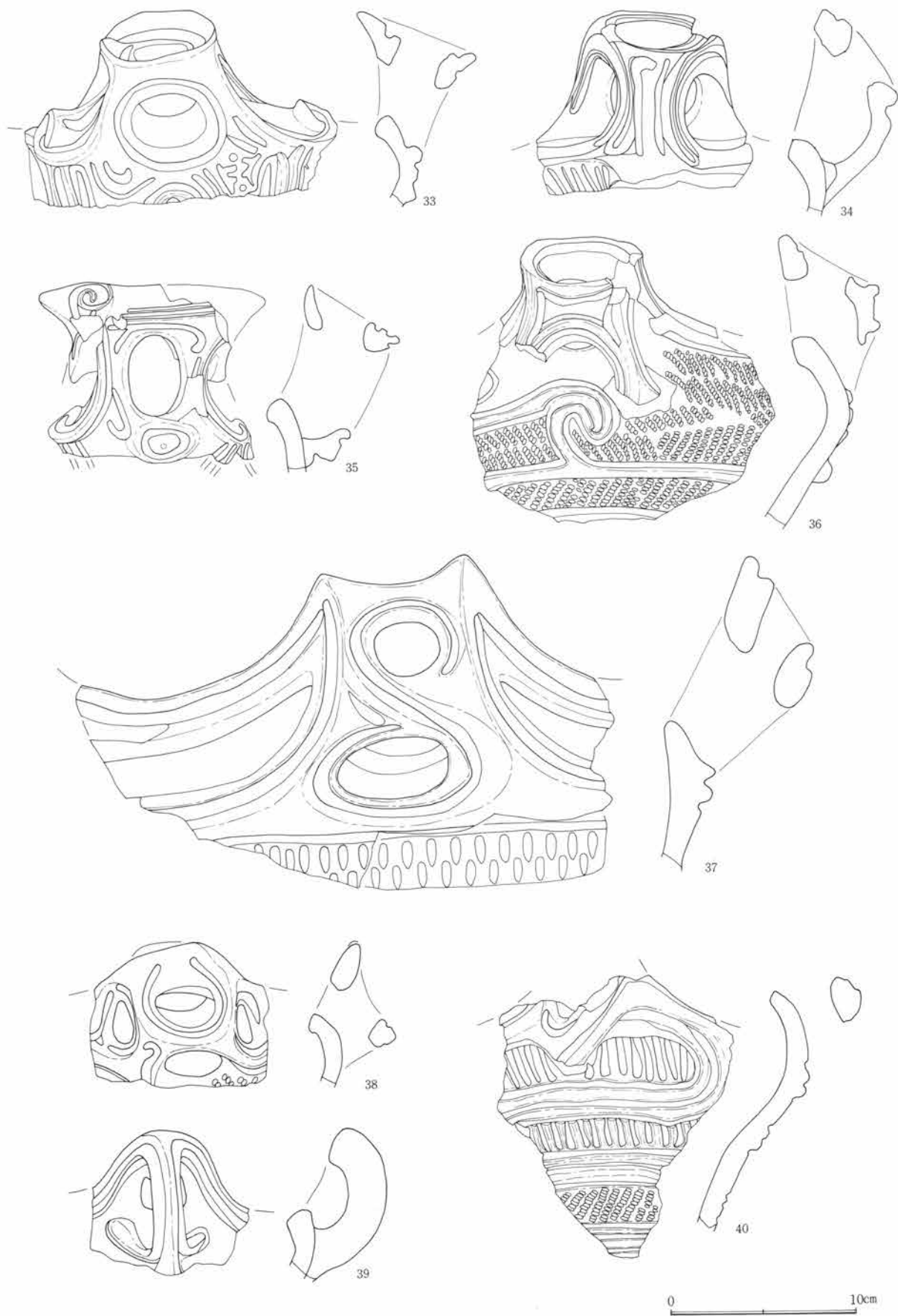
33～38は箱状把手をもつ深鉢形土器の口縁部破片である。33・35の把手は薄手の作りで端部が襞状を呈し、所々に渦巻文が配される。33は口縁部に隆線と印刻状の深い沈線で弧状の文様が施されている。34～38の把手は比較的厚手の作りで、把手の透し部は沈線で縁どられるが、渦巻文はほとんど見られない。34は正面に透しがなく、他のものと異なる。36は口縁部に隆帯による渦巻状の文様が施される。地文は縄文RLで、口縁部には横位、頸部には縦位に施されている。37は正面の透し部を縁どる沈線がS字状を呈し、口縁部は列点状の刺突で充填されている。38は口縁部に縄文RLが施されている。

39・40は橋状把手を伴う舌状の把手が付くもので、40は口縁部に2本の隆帯によるクランク文を施し、空白部を縦位の沈線で充填している。また、頸部には0段3条のRLの縄文を縦位施文している。

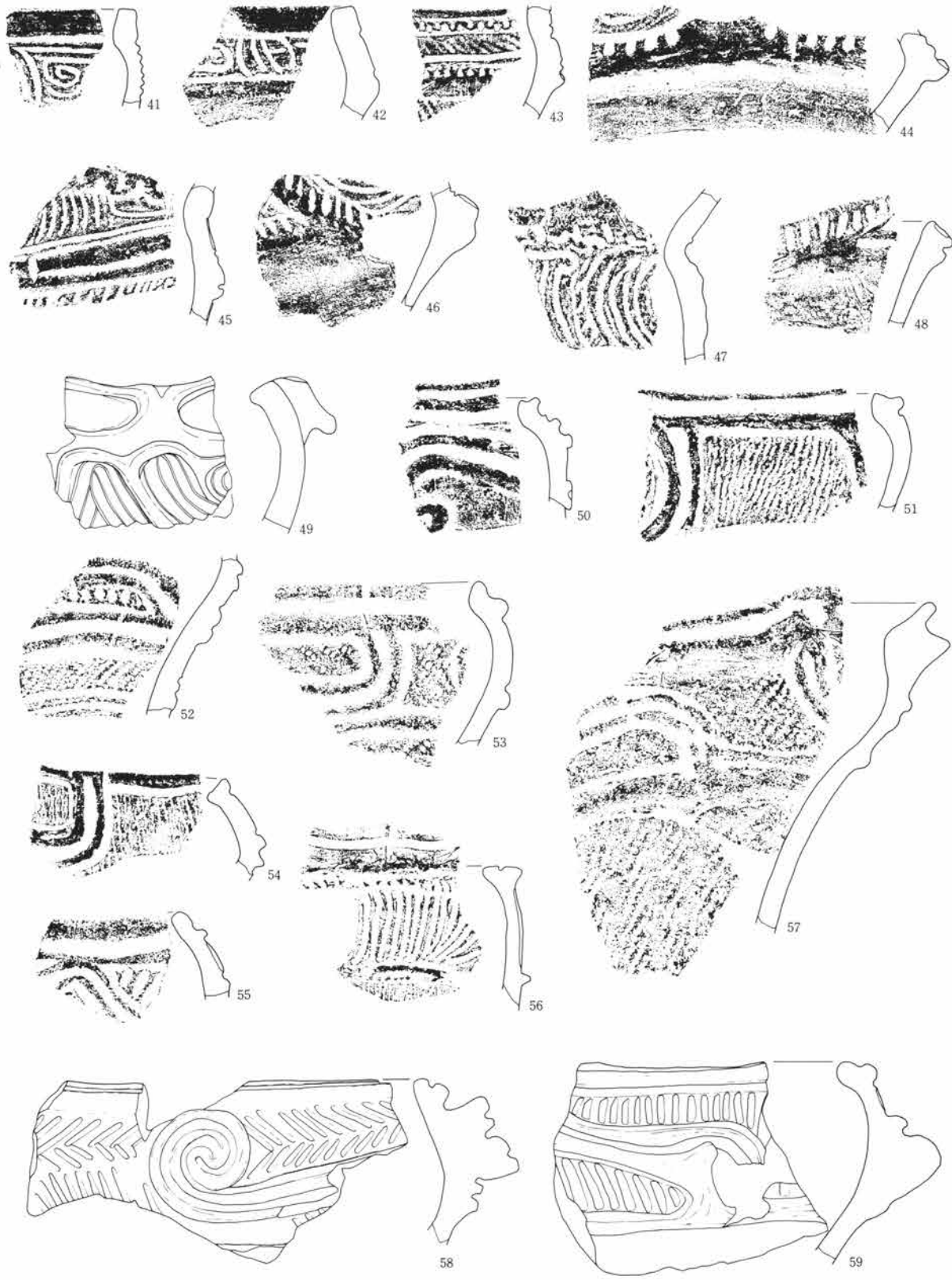
41～43は口縁部に沈線で文様を施す土器である。41は内湾する口縁部に直立する口唇が付く土器で、口唇上端に平坦面をもつ。文様は、口唇下に無文部をおいて、口縁部に渦巻文が施される。42・43は口縁がくの字状に内折する土器で、口唇上端に平坦面をもつ。43は口唇下に沈線間に交互刺突をした鋸歯文をめぐらし口縁下に刻みを施した隆帯をめぐらしている。また、口縁部・頸部には縄文RLを縦位施文している。44～46は胴上半部がくの字に内折する浅鉢形土器と思われる。文様は胴上半部に隆帯によるS字状文を構成し、空白部を沈線で充填している。頸部には隆線による鋸歯文がめぐっている。なお、44では一部に縄文RLが施されている。47は頸部が強く括れる深鉢で、胴部に刻みを施した隆線で弧状の区画を施し、区画内を沈線で充填している。48は波状口縁を呈する土器で、口唇下を断面三角形に肥厚させ、その間に縦位の沈線を施して口縁部文様とし、頸部以下に縄文RLを縦位施文している。また、波頂下に横位の短沈線が施されている。49は内湾する口縁部破片で、口縁上端に2本の隆帯をめぐらし、中程でつまみ上げたような突起となる。口縁部には隆帯による弧状の区画文が構成され、区画内は半截竹管による半隆起線で充填されている。

50は2本の隆帯によるS字文が、52～54・57はクランク文が施された口縁破片である。52は頸部に無文帯

III 検出された遺構と遺物



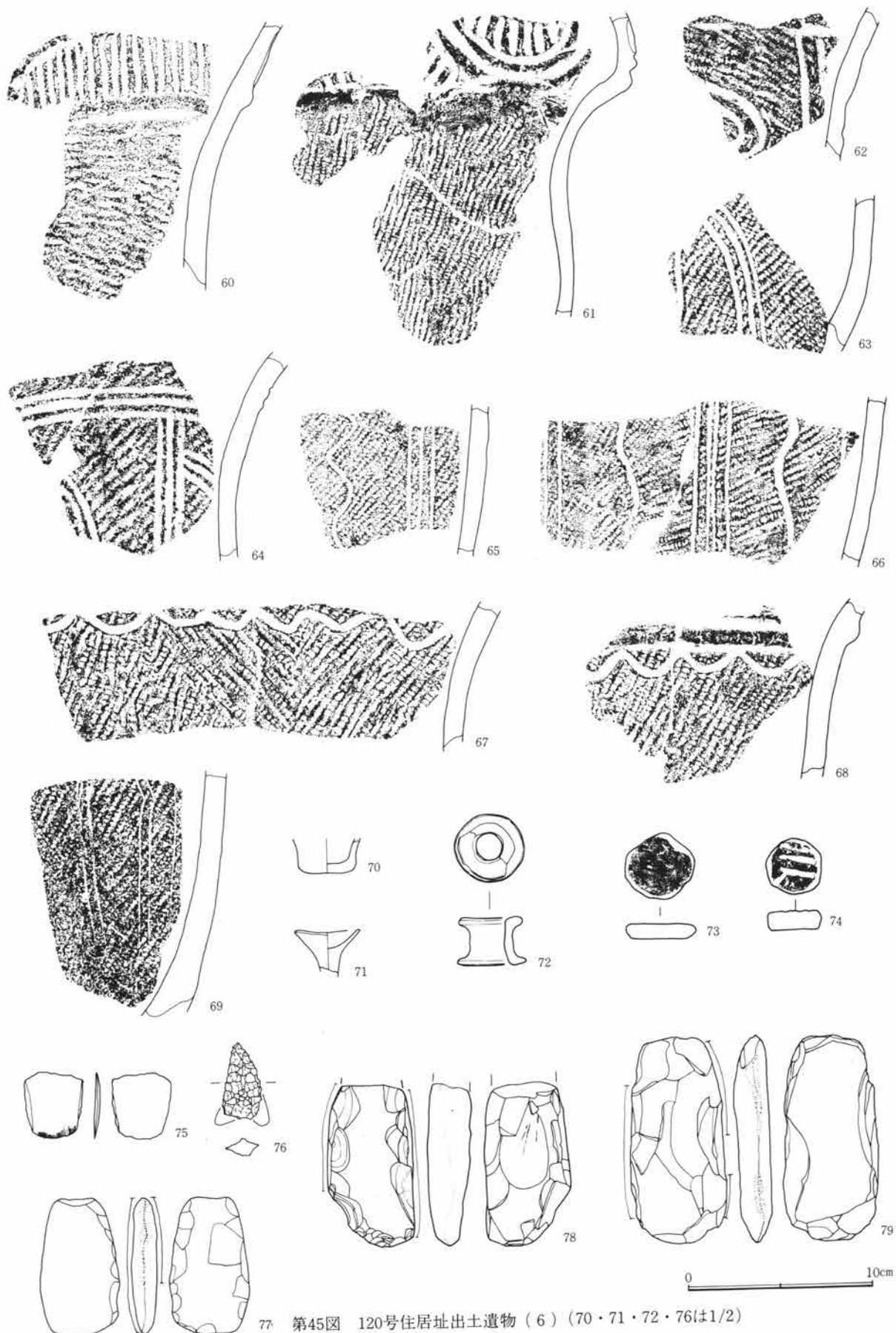
第43図 120号住居址出土遺物 (4)



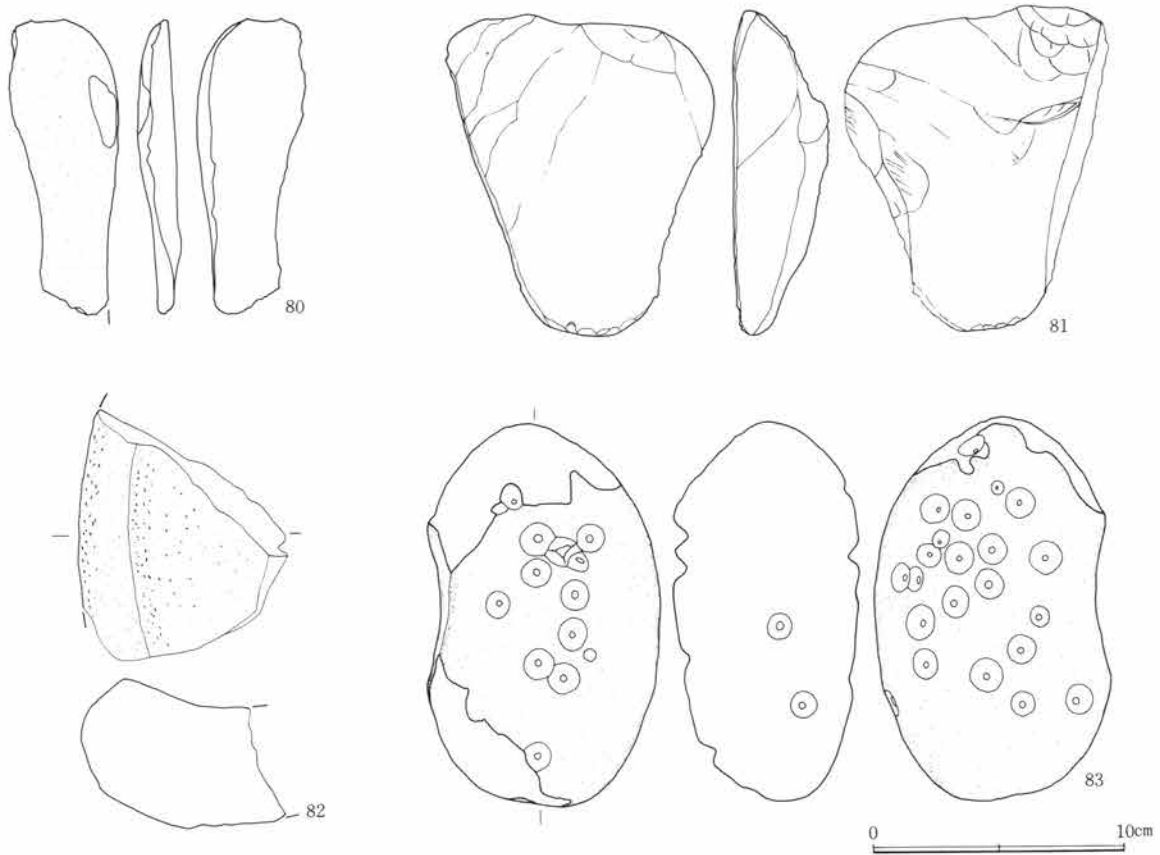
0 10cm

第44図 120号住居址出土遺物 (5)

III 検出された遺構と遺物



77 第45図 120号住居址出土遺物(6)(70・71・72・76(±1/2))



第46図 120号住居址出土遺物(7)(83は1/6)

をもつが、57では認められない。地文は50がR、54がLの撚糸文、52は0段3条のRLの縄文、53・57は縄文RLである。なお、53では口縁部が横位、以下が縦位に施文されている。52・57は縦位施文である。56は口縁上端で内湾する土器で、口唇には幅広く平坦面を形成し、1本の沈線をめぐらしている。口縁部は縦位の沈線で構成され、頸部に隆線を1本めぐらし、以下に条線を施している。58～59は口縁部文様帯は隆帯による突出した渦巻文を施し、その間を矢羽根状あるいは縦位の沈線で充填した土器で、口縁部文様帯は隆帯で区画される。60・61は口縁部に2本の隆帯で文様構成し、その間を縦位の沈線で充填する土器である。口縁部文様帯は隆帯で画され、以下に60はLR、61はRLの縄文を縦位に施している。

62～69は胴部破片である。62～66は3本の沈線による懸垂文が施されたもので、62・65・66はその間に波状沈線を垂下させている。地文は62がLR、他はRLの縄文で、いずれも縦位に施文している。67・68は頸部をめぐり隆帯下に波状沈線を施した土器で、胴部には縄文RLとLRを縦位に交互施文して羽状縄文を構成している。69は半截竹管による平行沈線で懸垂文を施した土器で、地文は縄文RLの縦位施文である。

70は手づくね成形によるミニチュア土器で、上半部を欠損している。71は盃状を呈する土製品で、下半部を欠損している。70同様、手づくね成形によるもので、上端部は歪んでいる。70・71とも胎土に砂粒を多量に含み、研磨は施されていない。72は滑車状を呈する耳飾りで、上面の一部を欠損している。細砂を少量含む良質の粘土を使用しており、研磨が施されている。73・74は土器破片を利用した土製円盤である。

75～83は石器である。75は磨製石斧の刃部破片で、刃部には縦方向の使用痕が認められる。76は石鏃で、両脚部を欠損している。77～79は打製石斧である。78は基部を欠損している。いずれも短冊形を呈する小型

III 検出された遺構と遺物

品で、長さに比べて幅が広い。80は両面に研磨痕をもつ剥片石器である。81は敲石、82は石皿の破片である。83は大型円礫を使用した多孔石で、一部を欠損している。両面に多数の錐揉み状凹穴が施されており、側面にも2つ認められる。

所見

本住居址出土土器には、床面密着出土の一括土器とやや時間をおいて一括投棄された土器とがあるが、その間に明瞭な型式差は認められない。深鉢形土器は大小の把手をもつものが多く、なかでも箱状把手が特徴的である。口縁部文様はほとんどが4単位構成をとるが、3単位のもの(3)もある。文様は隆帯で連結された渦巻文やクランク文、区画文で構成される。渦巻文は文様が連結される傾向が強く、剣先文を伴うものもみられる。また、頸部無文帯をもつものもたないものがあり、前者は胴部に懸垂文や渦巻文を伴う多様な文様が施されるが、後者は縄文のみ施されたものが大半である。地文は縄文を主体とするが、捺糸文・条線文のものもある。以上の特徴から、出土土器は加曽利E2式の古い段階に位置づけられようが、2・33・35・41～50・54は加曽利E1式の段階に比定されると思われる。箱状把手の多用や頸部無文帯をもたない土器が多い点は、本遺跡の地域性を表わしているとも言えよう。また、有孔鏝付土器やミニチュア土器・耳飾りが伴出しており、注目しておきたい。

100号住居址 (第47図)

位置 A'-21グリッド。西側は調査区外のため、未調査である。

壁 北側と東側の一部が検出されている。確認面での壁高は10～15cmで、やや斜状に立ち上がっている。

床面 検出できた範囲はわずかで、ほぼ平坦である。

柱穴 本住居址に明らかに伴うものは1本のみである。

重複 24号・101号住居址と重複しており、101号住居址を切っており、24号住居址に切られている。

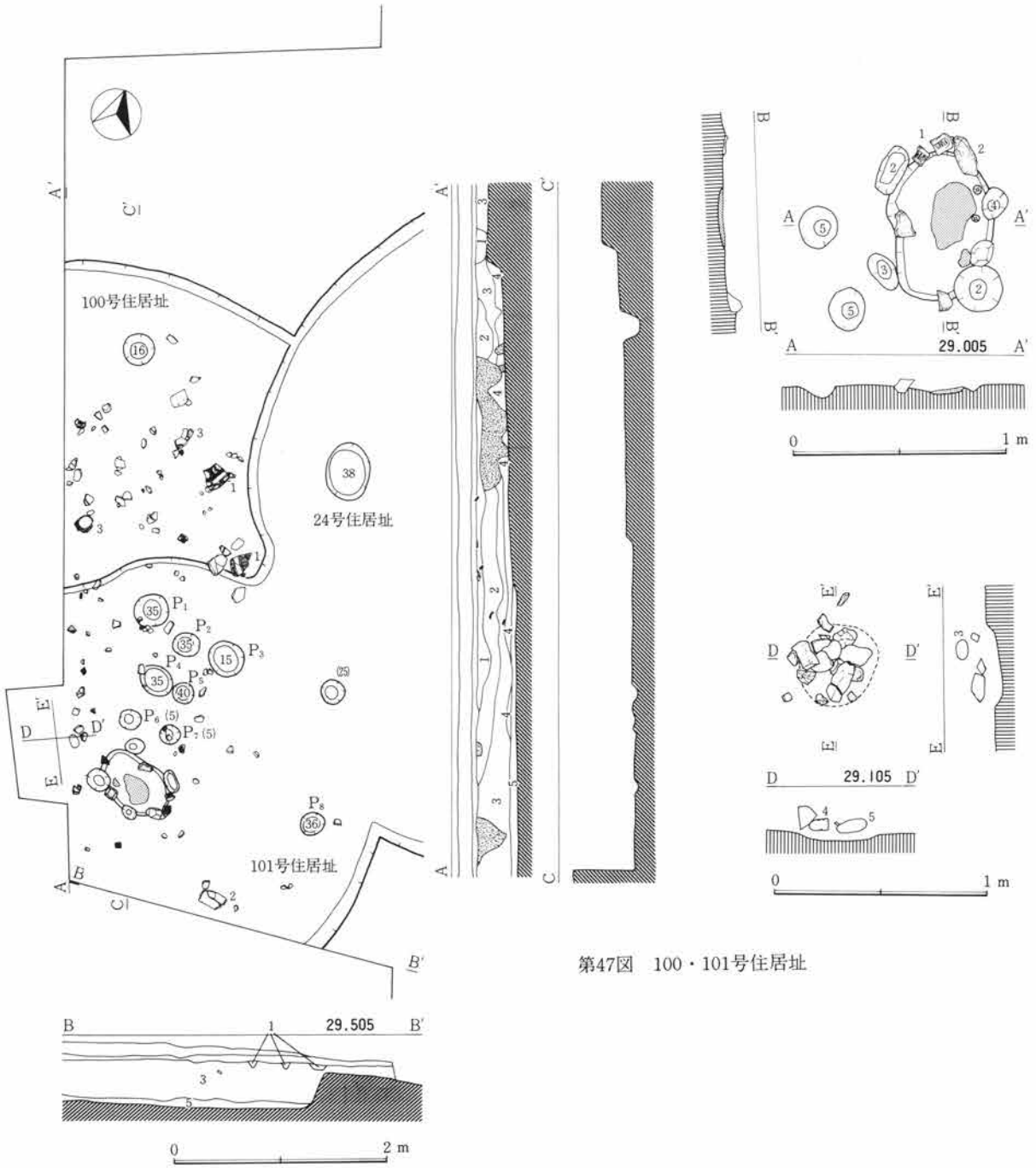
遺物の出土状態

復元可能な深鉢3個体をはじめ、土器片・石器等が出土しており、大半は床面から10～20cm程浮いた状態で出土している。床面からは深鉢2個体(第48図1・3)が出土しており、1は北壁寄りの3ヶ所に分散した状態で、3は胴部が床面に正位に密着した状態で、口縁部はそのやや北側床面上から各々出土した。

出土遺物 (第48図)

1～3はキャリパー形の深鉢で、1は口縁の一部と胴下半部を欠損、2は胴上半の大型破片、3は口縁の $\frac{1}{2}$ と胴下半を欠損している。いずれも口縁部を隆帯と沈線による渦巻文と楕円区画文で構成し、頸部に無文帯をもつ。口縁部文様は、1が現存7単位推定10単位、3が8単位、2は4単位と思われる。1・3は口縁部の渦巻文を右巻・左巻に交互に施し、上下を区画する隆帯と接する部分に刺突を施している。これは、前段階の土器にみられる2本の隆帯による接続の名残りである。2では渦巻文を連結する隆帯と口縁部文様帯を区画する隆帯の接する部分に数個の刺突を施している。胴部文様は各々異なっている。1は3本の沈線と1本の波状沈線による懸垂文を交互に4単位施している。2は2～3本の沈線で渦巻文が施されるらしい。3は3本の沈線による片流れした十字状の文様でほぼ2単位に構成される。また、3では沈線のクロスする部分や沈線にそって渦巻文が施されている。地文は3点とも口縁部区画内および胴部に施され、頸部は無文である。1・2は縄文RLを口縁部には横位、胴部には縦位に施している。3は口縁部が縄文RL、胴部は条線である。いずれも焼成は良好で、内面は研磨が施されている。

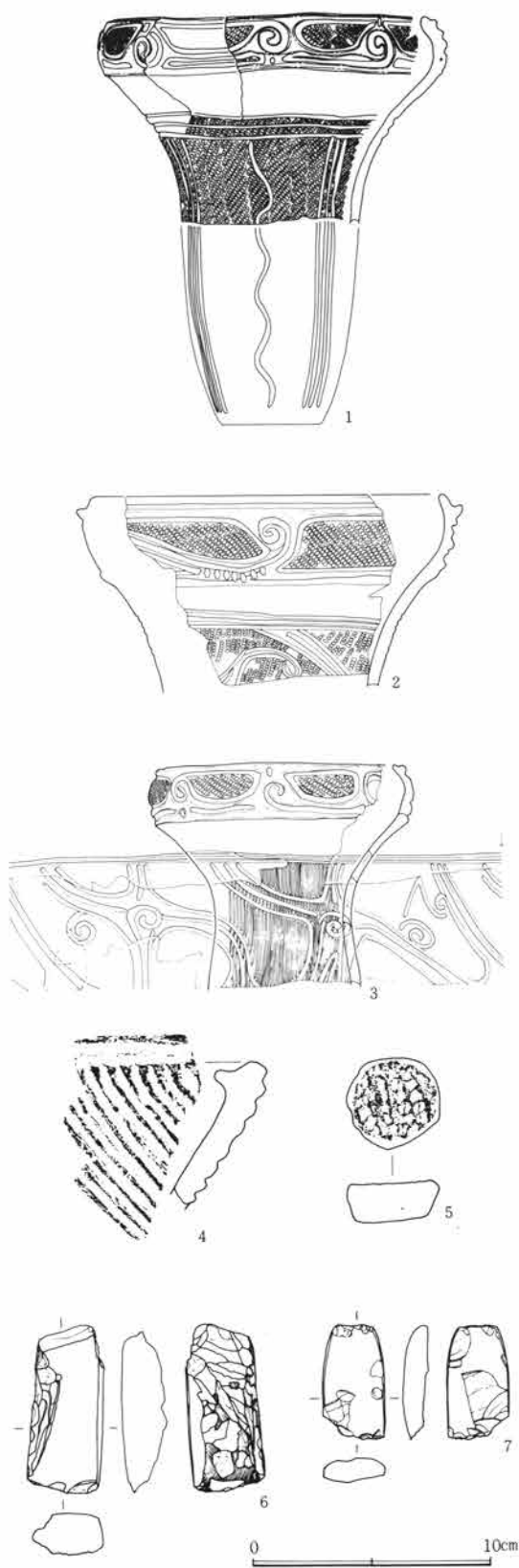
4はいわゆる垂弧文土器の口縁部破片である。口唇内面にかえし状の突帯をめぐらし、口縁部には半截竹



第47図 100・101号住居址

1. 軽石を多量に含む黒みの強い黒褐色土。
2. 軽石を少量含む黒褐色土。
3. 褐色土。
4. 黄白色粘質土をブロック状に含む黄褐色土。
5. 黄白色粘質土と黒色粘質土の混土。

III 検出された遺構と遺物



第48図 100号住居址出土遺物(1~3は1/6)

管による半起隆帯を斜位に施している。

5は土器破片を利用した土製円盤である。縄文RLRが施されている。

6は定角式磨製石斧の破片を再調整したもので、楔として使用したものであろう。7は小型磨製石斧で、刃部および頭部は打撃によるつぶれが著しい。

所見

本住居址は、床面密着出土土器から加曾利E2式期に比定されよう。なお、1・3は器形・文様構成・口縁部文様の手法・調整・胎土・焼成等が著しく近似しており、同時成作の可能性が強い。

101号住居址(第47図)

位置 A'-21グリッド。

壁 北側でわずかに5cmの立ち上がりが検出された。

床面 軟弱であるが、ほぼ平坦な面を呈す。

柱穴 8本のピットが検出されたが、主柱穴は不明である。

炉 中央部と思われる部分で検出された。長軸75cm短軸40cmの長方形の浅い掘り込みが検出され、底面に焼土がわずかに認められた。縁辺部には円形状・方形の浅い小ピットと、焼けた土器片や石皿片・礫が認められることから、石囲い炉と思われる。また、炉の西側20cmのところから、焼けた磨石や礫が集石状にかたまっており、これらが炉石として使用されていたのであろう。

遺物の出土状態

覆土の大半を100号住居址に切られており、出土遺物は炉に使用されていた土器片と石皿片、および集石中の磨石2点と台石1点のみである。

出土遺物(第49図)

1は深鉢の口縁部破片で、隆帯による区画内を縦位の沈線で充填している。

2は石皿の破片で、側面および底面は平坦に整形されており、底面には錐揉み状の凹穴が多数施されている。

3・4は磨石である。いずれも両平坦面に研磨面と集合打痕が認められる。



5は台石である。両平坦面に浅い打痕が広範囲に認められる。

所見

本住居址の時期は、炉辺出土の土器から加曾利E2式の段階に比定されよう。

121号住居址 (第50図)

位置 D-24杭を中心に位置する。

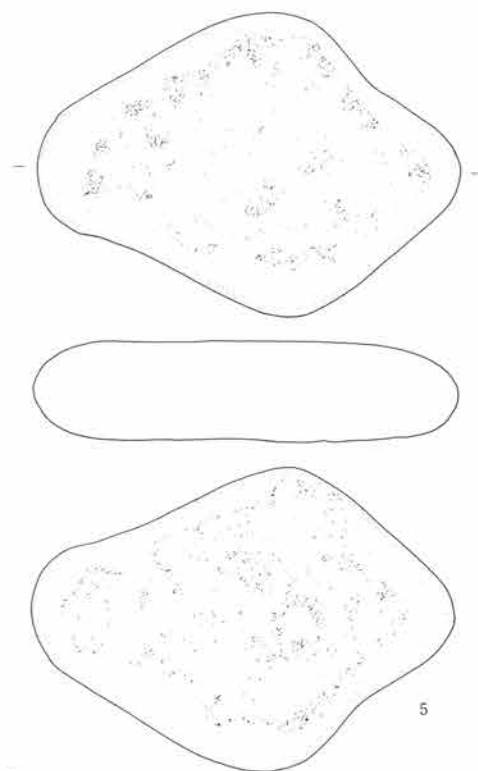
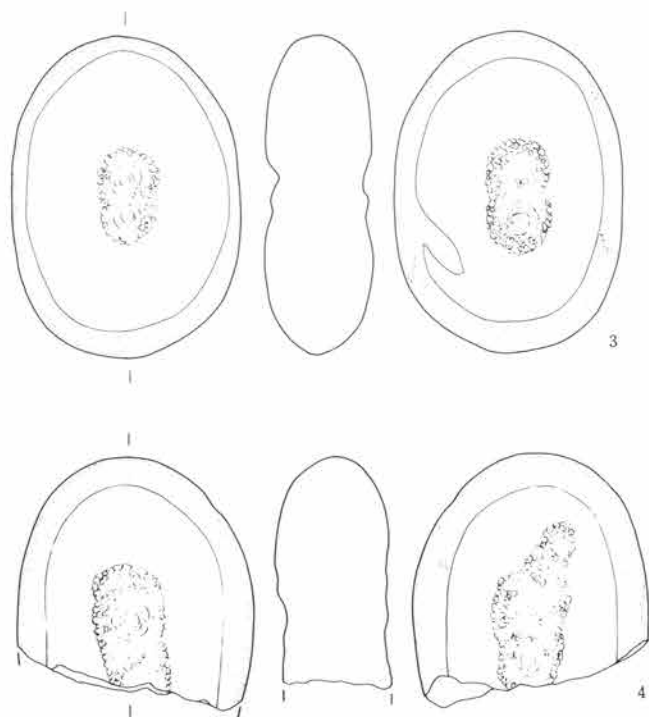
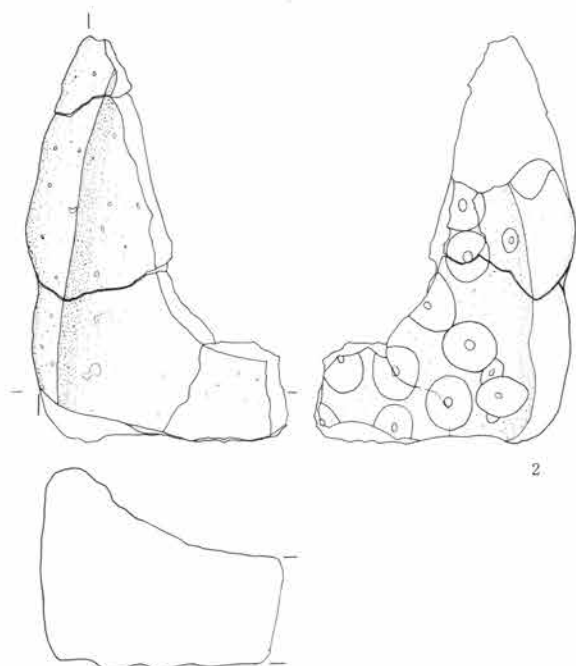
形状 壁は確認できなかったが、柱穴の配置からほぼ東西に長軸をもつ楕円形と思われる。なおこの軸線は24号住居址とほぼ一致する。

壁 未検出。本地区では地山と覆土の識別は困難である。

床面 軟弱であるが、ほぼ平坦な面を呈する。

柱穴 重複するものも含めて9本のピットが検出されたが、P₁-P₂-P₃-P₄-P₅-P₇の6本が主柱穴である。

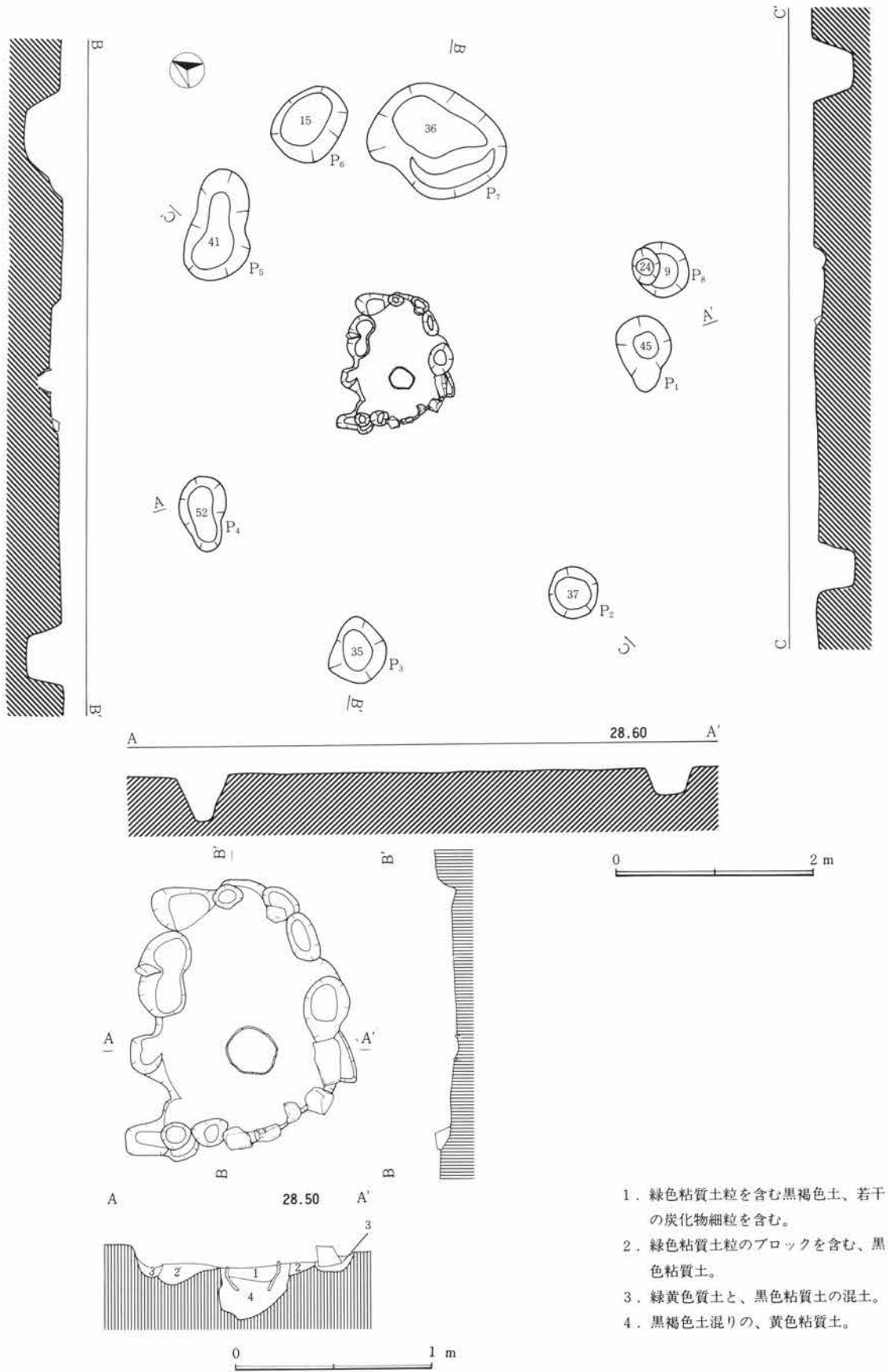
炉 石囲い埋甕炉が住居址の中央に検出された。炉石は小礫7つが認められるのみで他は抜き取られており、抜き取った痕の窪みが縁辺に



0 10cm

第49図 101号住居址出土遺物

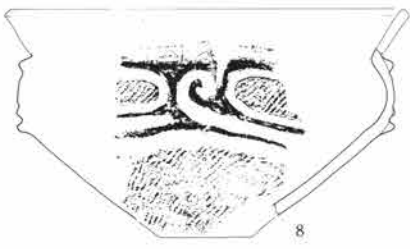
III 検出された遺構と遺物



1. 緑色粘質土粒を含む黒褐色土、若干の炭化物細粒を含む。
2. 緑色粘質土粒のブロックを含む、黒色粘質土。
3. 緑黄色質土と、黒色粘質土の混土。
4. 黒褐色土混りの、黄色粘質土。

第50図 121号住居址

1 縄文時代の遺構と遺物



第51図 121号住居址出土遺物 (1)(5は1/3)

認められる。炉の規模は長軸1.3m短軸1.0mで、隅丸長方形を呈する。炉内を床面から15cmほど掘りくぼめ、中央部よりやや西寄りに深鉢の口頸部を埋設し、土器の口唇がややのぞくところで平坦面を築いている。なお、焼土は検出されていない。

重複 P₃の西1mに21号住居址炉が、P₁の南3mに22号住居址炉があり、いずれも重複すると思われる。土層の切り合い関係は不明だが、出土土器は本住居址のものが最も古い。なお、本住居址の北側と南側に近接して、倒置土器が出土している。(第115図3・8)

遺物の出土状態

覆土中から多量の土器がいずれも破片状態で出土した。

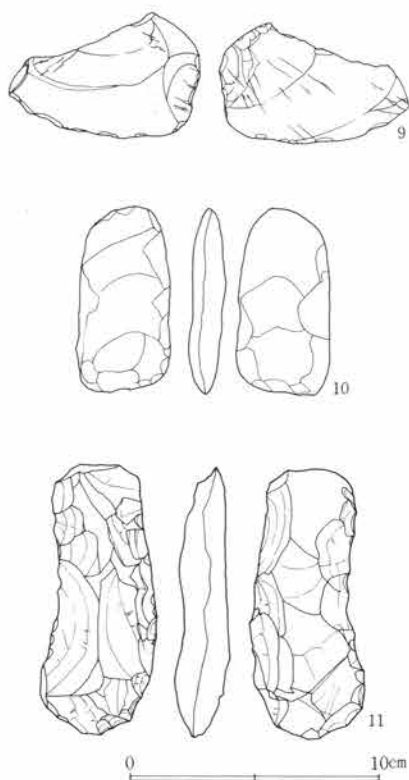
出土遺物 (第51図・第52図)

1は炉の埋甕に使用されていた土器である。キャリパー形の深鉢で、胴部は打ち欠かれている。口縁部を隆帯と沈線による渦巻文と三角形あるいは楕円状の区画文で構成し、頸部に無文帯をおいて1本の幅広隆帯をめぐらしている。また、口縁部区画内は縄文RLで充填される。渦巻文は5つ。

2は頸部が強く開き、口縁部が直立する深鉢の大型破片である。口縁部の下端に隆帯をめぐらして区画し、その間に数本の平行沈線を横位に施し、沈線間の隆起した部分を1本おきに交互刺突して鋸歯文とし、胴部にはLの捺糸文を縦位に施している。

3はキャリパー形の深鉢で、口縁の1/3および胴下半を欠損する。口縁部は隆帯と沈線による渦巻文と楕円区画文で4単位に構成し、頸部に無文帯をおいて2本の沈線をめぐらし、胴部には2本の平行沈線と波状沈線を一単位として、渦巻文下に4単位懸

III 検出された遺構と遺物



第52図 121号住居址出土遺物(2)

垂している。地文はRLの縄文で、口縁部には横位、胴部には縦位に施している。

4は深鉢の胴部破片で、縄文RLの縦位施文を地文に、2本の平行沈線と波状沈線による懸垂文が施されている。

5は頸部がわずかに外反し、口縁部が直立ぎみに立ち上がる深鉢の口頸部破片である。口縁部に断面が円形の植物の茎状のものによる刺突文を縦位に平行して2列施し、口縁部下にも同様の刺突文を1列めぐらして文様帯を区画し、頸部には幅広く無文帯をおいて断面三角形の隆帯をめぐらしている。なお、口縁部には縄文LRが施されている。

6は口縁部がやや内湾しながら開く深鉢の口縁部破片である。口唇下と頸部に交互刺突による鋸歯状文をめぐらし、その間を縦位の条線で充填している。なお、口唇下鋸歯状文の直下には1本の沈線がめぐっている。

7は胴部上半が外反する大型深鉢の胴部で、3本沈線と波状沈線による懸垂文が4単位施されている。地文は縄文RLの縦位施文である。

8は頸部がくの字に折れて口縁部が外傾する浅鉢型土器の胴部破片である。胴上半に隆帯と沈線による渦巻文と楕円区画文

で、文様帯を構成し、楕円区画内と胴下半部には縄文RLを縦位に施している。焼成は良好で赤褐色を呈し、内面は入念に研磨が施されている。なお、底部は摩耗が著しい。

9は礫の表皮部分の剝片を素材としたスクレイパーで、下端に細かな調整を施して刃部としている。

10・11は打製石斧である。2点とも短冊形を呈する小型品である。

所見

本住居址の時期は、出土土器から加曾利E2式の新しい段階に比定される。ただし、2は加曾利E1式土器である。また、5・6は器形・文様構成が他と異なる。6は連弧文の系統を引く土器であろう。5は砂粒を少量含む良質な粘土を使用した黄橙色を呈する土器で、やはり異系統の土器と思われる。

114号住居址(第53図)

位置 A-35グリッド。北側3mに111号・112号住居址が近接する。

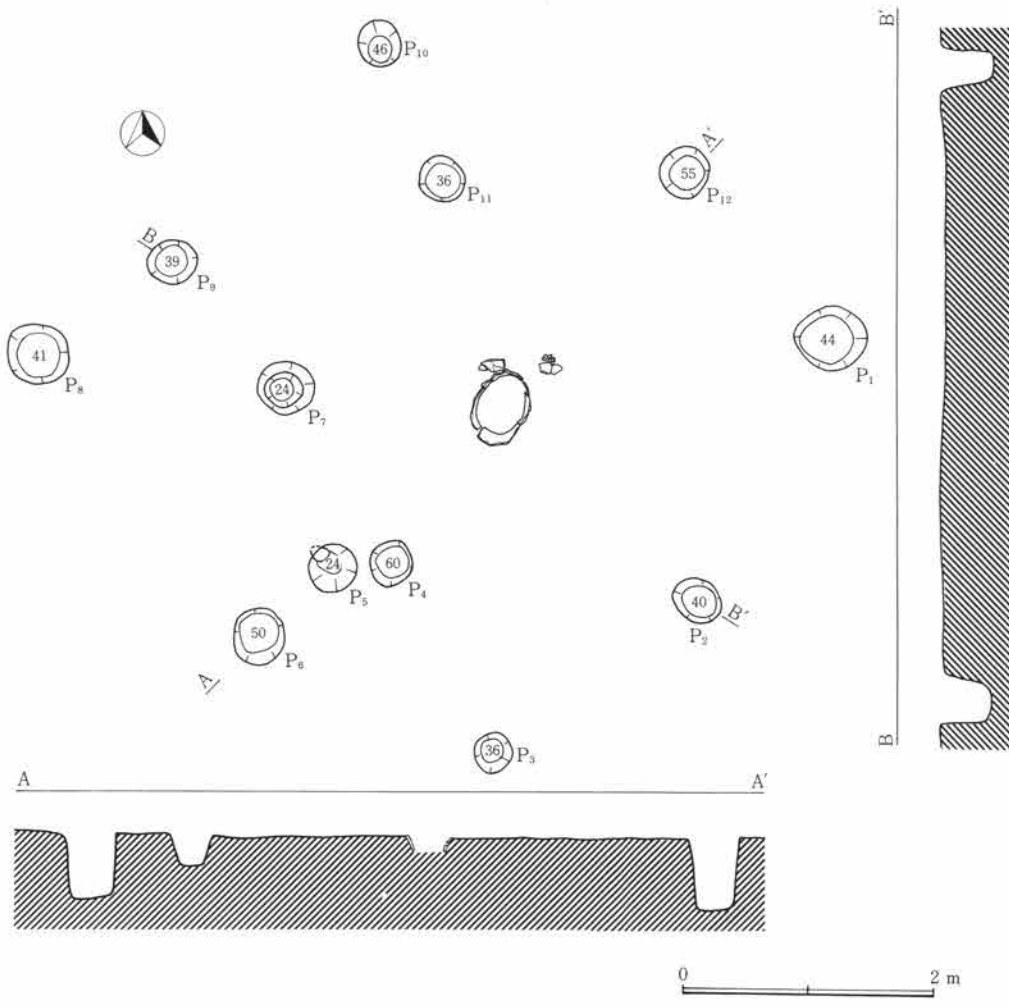
形状 壁が検出されておらず、不明である。

壁 未検出。

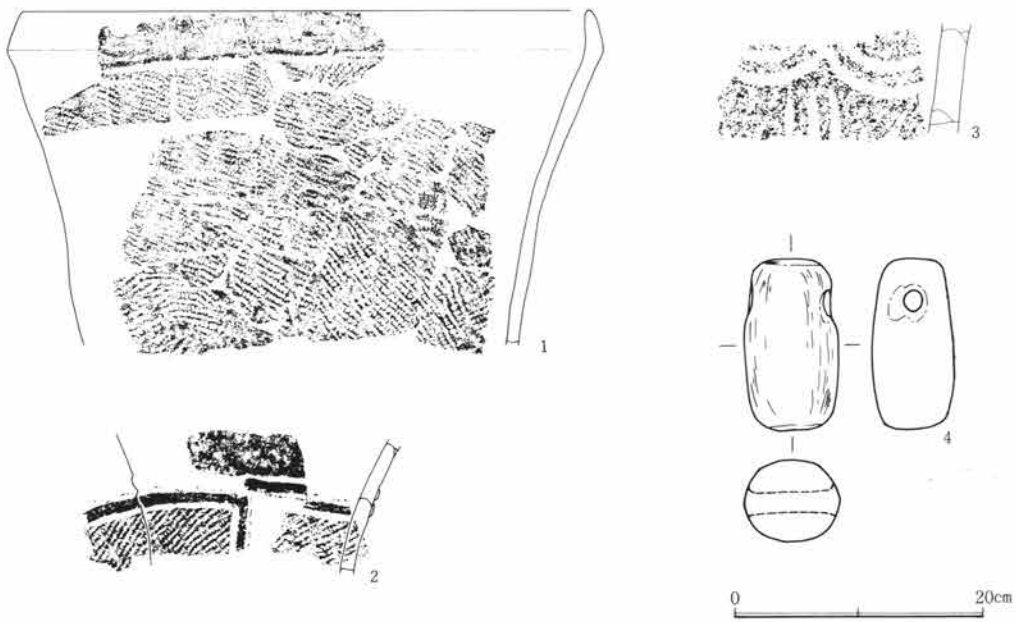
床面 炉の面から推定して床面を調査したが、良好な床面は確認できなかった。

柱穴 合計12本のピットを検出した。主柱穴としては、配置状況からP₁₀-P₁₂-P₂-P₃-P₆-P₉が考えられるが、やや間伸びしており確定できない。

炉 深鉢の胴上半部を埋設した埋甕炉で、ピット群のほぼ中央に位置する。使用された土器は口縁部文様をもたない特異な大型深鉢(第54図1)で、土圧によってかやや歪んでいる。なお、焼土は検出されていない。



第53図 114号住居址



第54図 114号住居址出土遺物（3は1/3、4は1/2）

III 検出された遺構と遺物

重複 上面に古墳時代の住居址が重複しており、覆土の大半は削平されている。

遺物の出土状態

炉辺部床面から少量の土器片（2・3）と土製垂飾り(4)が出土した以外は、遺物はほとんどない。

出土遺物（第54図）

1は炉に使用された土器である。胴上半が外反し、口縁部がくの字状に弱く内折する大型の深鉢で、口縁部は無文帯とされ、胴部には全面に縄文RLが施されている。

2は頸部から外反する深鉢で、頸部に無文帯をおいて2本の低い隆帯をめぐらし、胴部には同隆帯による懸垂文が施される。胴部の縄文はRL。

4は土製垂飾りである。長さ5.4cmで、両端部がやや丸みをもつ円筒状を呈し、断面形は楕円形である。上方の長軸方向に径5mmほどの円孔があげられている。胎土は砂粒を少量含み、焼成は良好で、黒灰色と黄橙色の部分がある。器面調整は良好で、部分的に研磨が施されている。

所見

本住居址の時期は、出土土器から加曾利E2式の新しい段階に比定される。

112号住居址（第55図）

位置 A-33・34グリッド。111号住居址が東側に接している。

形状 北壁がやや短い隅丸方形を呈する。規模は南北5.2m、東北は南壁寄りで5.0m、北壁寄りで4.4mである。

壁 壁高は15cmほどで、斜状に立ち上がっている。また、南壁東側壁下に小規模な周溝が部分的に検出された。

床面 平坦に構築されており、中央付近にはやや堅い床面が認められたが、全体的には軟弱である。

柱穴 7本のピットが検出された。主柱穴は、やや変則的だが、P₁-P₂-P₃-P₄-P₅の5本と思われる。いずれも57~78cmの深さをもつ良好な柱穴である。P₆・P₇は浅いピットで、いずれも地山混りの土で埋め戻され、さらに上面に貼り床がなされている。用途不明である。

炉 ほぼ中央に位置する。床面に焼土がわずかに残在している。

重複 111号住居址が東側に接する位置にあるが、壁が検出されていないため判然としない。出土土器では111号住居址の方が新しい。

遺物の出土状態

住居址中央部の覆土中から、少量の加曾利E2式土器の破片とミニチュア土器破片・打製石斧1点が出土している。

所見

本住居址の時期は、出土遺物から加曾利E2式の段階に比定される。

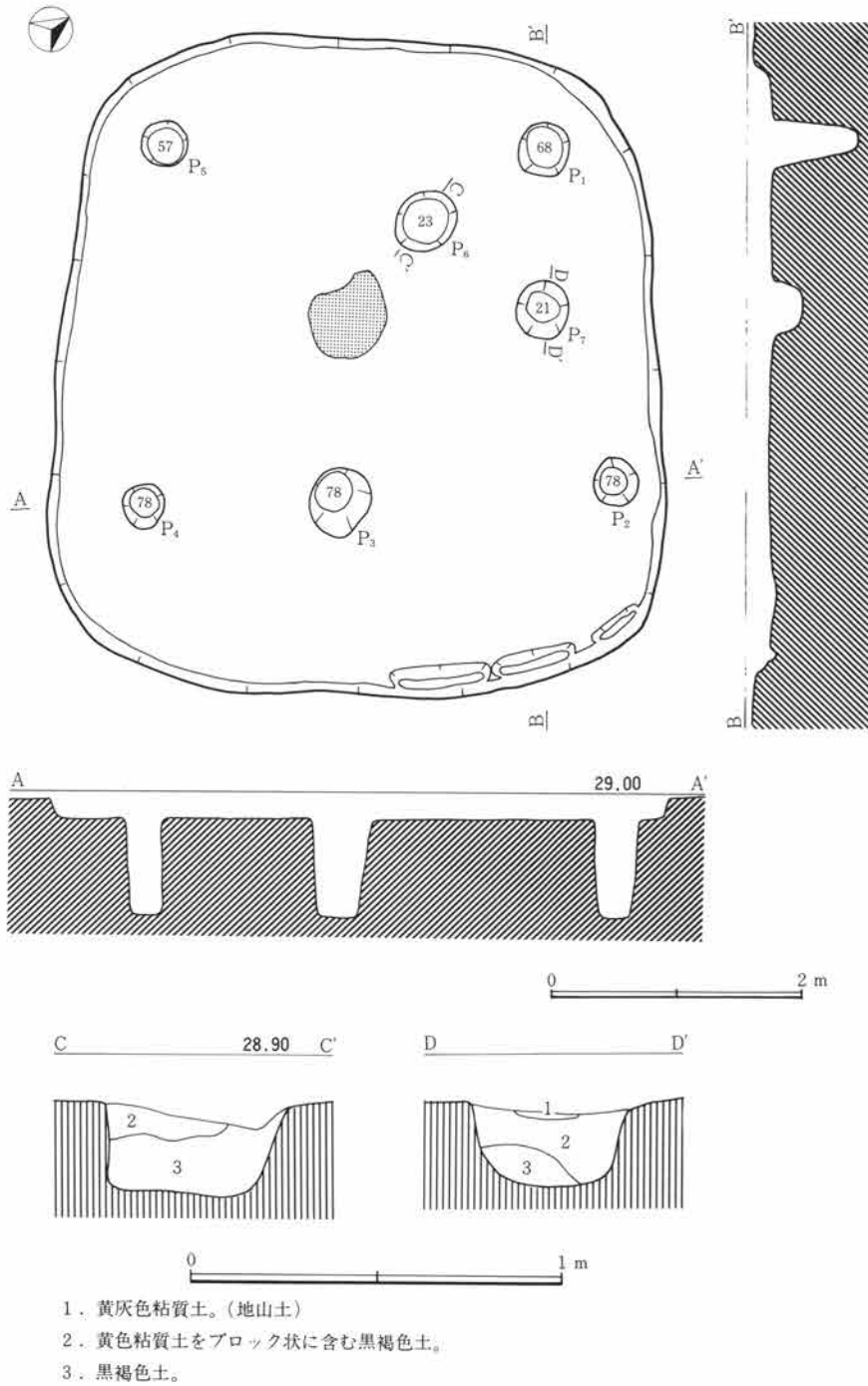
20号住居址（第56図）

位置 B-23グリッドを中心に位置する。

形状 不明。

壁 本住居址の床面レベルで、この地区で壁を検出するのは不可能である。

床面 倒置土器と埋壟のレベルから床面を推定し調査したが、良好な床面は検出されていない。



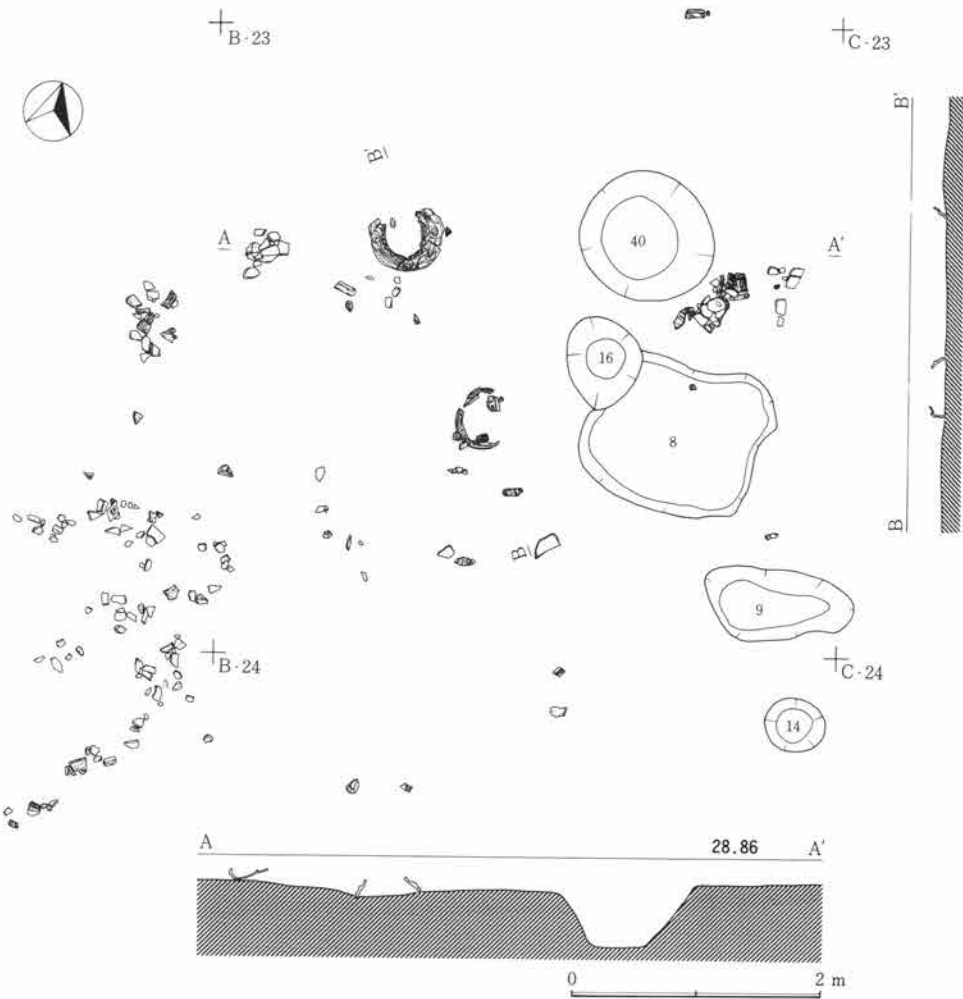
第55図 112号住居址

柱穴 検出できない。

炉 未検出。

埋甕 B-24杭の西側1mほどの位置に、口縁部まで正位に埋め込まれた状態で埋甕を検出したが、担当の不注意により掘り出されてしまい、正確な位置を測量することができなかった。埋甕には、小型深鉢(第57図3)の胴上半部を使用していた。

III 検出された遺構と遺物



第56図 20号住居址

重複 南側で国分期の住居址と重複し、東側で21号住居址との重複が想定される。また、床面倒置土器の東側に時期不明のピット・土壇がある。

遺物の出土状態

床面倒置土器が1mの間隔をもって2個体出土している(第56図)。いずれも大型の深鉢を使用しており、胴部を欠損しているが、これは後世の削平による可能性が強い。また、B-24杭付近を中心とする覆土中から土器片が出土している。

出土遺物 (第57図)

1・2は床面に倒置されていた土器で、2点とも口径50cm内外の大型深鉢である。

1は頸部が強く外反し、口縁部が内湾ぎみに開く深鉢で、口縁部の $\frac{1}{4}$ および胴部を欠損している。口縁部は太い隆帯による渦巻文と逆台形状の区画文で6単位(現存4単位)に構成し、頸部に3本の沈線による波状文をめぐらしている。地文は太いLの燃糸文で、口縁部には横位、頸部には縦位に施している。また、口縁部隆帯は沈線による縁取りがなされている。

2も1とほぼ同様の器形を呈するが、より直線的である。口縁部の $\frac{1}{4}$ および胴部を欠損している。口縁部は隆帯と沈線による渦巻文と三角形の区画文で4単位(現存3単位。渦巻文2つで1単位となる。)に構成し、頸部に2本の沈線による波状文をめぐらし、下端に隆帯をめぐらして胴部と区画している。地文はLR

の縄文で、口頸部とも横位にまばらに施されている。

3は埋甕に使用されていた土器である。口縁部がわずかに内湾しながら開く深鉢で、胴上半部の $\frac{1}{2}$ 強が出土した。文様は口縁部を隆帯と沈線による渦巻文と楕円区画文で構成し、渦巻文下に2本の沈線による懸垂文を施している。なお、楕円区画文内中央にも渦巻文が配されている。文様単位は現存部では4単位だが、おそらく6単位に構成されると思われる。地文はLRの縄文で、口縁部・胴部とも横位に施されている。

所見

本住居の時期は、出土遺物から加曽利E2式から3式への過渡的な時期に比定されよう。2は口縁部と胴部の文様帯を隆帯で区画して、頸部帯を明確に残している。1も頸部帯が意識されているが、3では消失している。沈線間の磨り消しは行なわれていないが、加曽利E3式的様相が強い。なお、今回調査した住居址では、埋甕をもつ住居址のなかで最も古い例である。



第57図 20号住居址出土遺物

24号住居址 (第58図・第59図)

位置 A-21・22、B-21・22グリッド。東側に108号・110号住居址が接近している。

形状 ほぼ東西方向に長軸をもつ楕円形である。北半の壁は検出できなかったが、支柱穴と壁との間隔から推定して、長軸8m短軸7.2m内外と思われる。

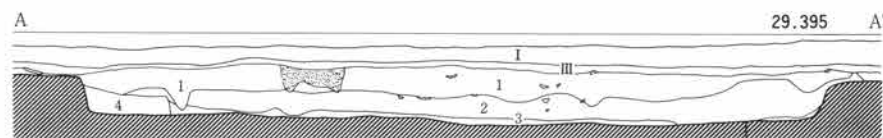
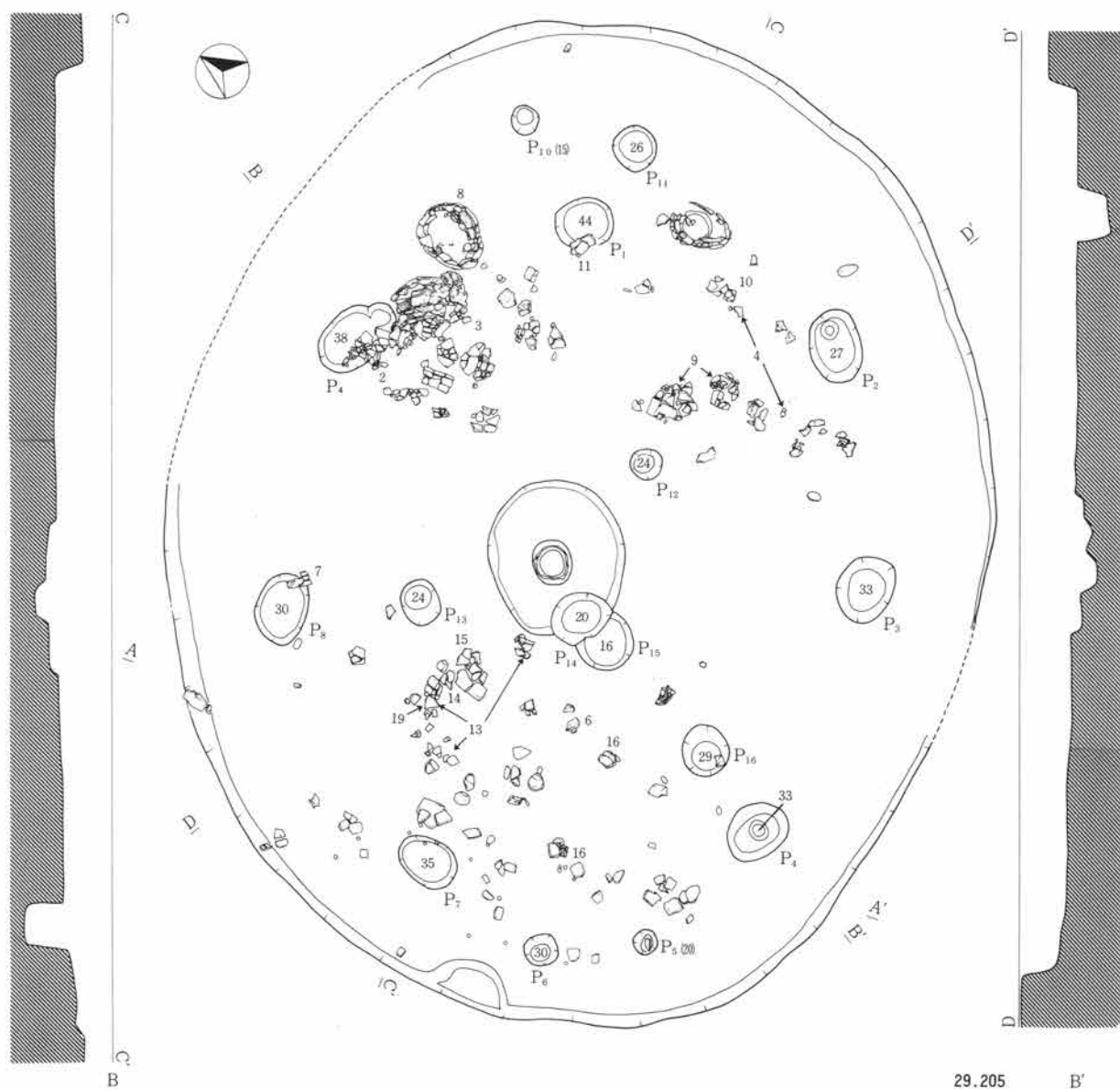
壁 南西側約半分は確認できたが、北東側は検出できない。壁高は、検出できた部分で15~30cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床面 平坦な面を呈する。地山の硬質化が著しく、詳細な調査は不可能であった。

柱穴 ピットは16本検出されたが、支柱穴はP₁-P₂-P₃-P₄-P₇-P₈-P₉の7本である。深さは27~44cmまでのものがあり、いずれも柱穴間をつなぐラインに長軸をもった楕円形を呈し、等間隔に配置されている。また、P₂・P₄・P₉には柱穴内あるいは柱穴と重複して、直径15cmほどの小ピットが伴っている。支柱を支える補助柱あるいは根詰め杭であろうか。P₅・P₆は出入口施設に関連するピットであろう。また、P₁₂-P₁₃-P₁₆はP₁₄・P₁₅を中心に二等辺三角形に配置されており、炉と関連する施設が考えられる。

炉 深鉢の胴上半部を使用した埋甕炉で、住居址の中央に位置する。埋甕を中心に長軸1.35m短軸1.12mの落ち込みが検出され、落ち込みの縁に沿って浅いピット状の小穴が確認された(第59図)。また、

III 検出された遺構と遺物



1. 黒灰色土。軽石を少量含む。
2. 黄灰色土。軽石を少量含む。
3. 黄色粘質土と灰色粘質土の混土。
4. 黄白色粒質土。

0 2 m

第58図 24号住居址

セクション観察により、落ち込みの内側は地山混りの土で埋め戻されており、黒色土は縁辺にドーナツ状にめぐっていることが判明した。以上のことから、炉は石囲いが施されていた可能性が強く、縁辺に沿って検出された浅い小ピットは炉石が抜き取られた痕と考えられる。なお、埋甕内充填土およびドーナツ状にめぐる黒色土中に焼土の混入が認められる。

重複 西側で100号・101号住居址と重複している。覆土での切り合い関係は不明であるが、出土土器から本住居が最も新しい。

遺物の出土状態

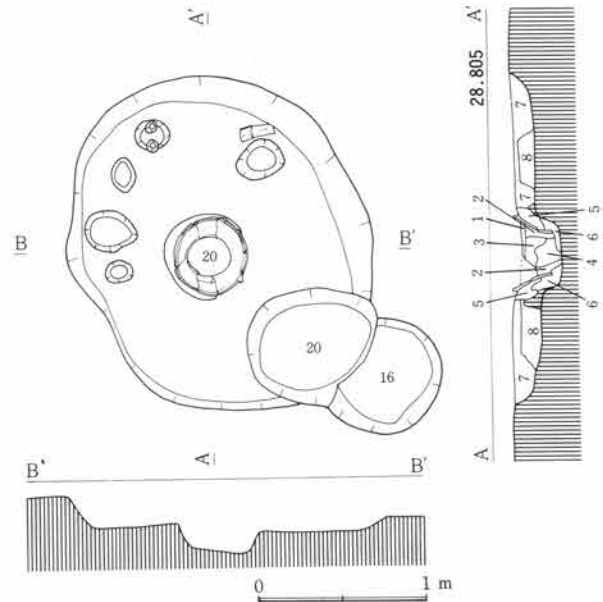
覆土中から多量の土器破片が、少量の石器や礫とともに出土した。床面直上からは復元可能な土器や大型破片が主に出土しており、それらは東側と西側の2群に分かれて認められる。西側からは深鉢5個体(6・7・13~15)をはじめとする土器が出土しており、東側からは深鉢5個体(2・4・9~11)の他に、3個体の土器が床面密着状態で出土している面に倒置した状態で出土している。また、そのすぐ西から大型深鉢(2)の完形品が、口縁を下にして押しつぶされた状態で出土している。本来は8と共に床面に倒置されていたと考えられる。もう1つは、P₁とP₂の間から底部を打ち欠かれた浅鉢(17)が、正位で床面に若干埋め込まれた状態で出土した。なお、本住居址出土遺物はいずれも柱穴の内側に集中している。

出土遺物(第60図~第65図)

1は炉の埋甕に使用されていた土器である。頸部がやや括れ、口縁部がわずかに内湾しながら開く深鉢で、胴下半は意図的に打ち欠かれている。口縁には隆帯による渦巻文を伴うと思われる突起が4単位付くが、欠損している。口唇直下に1本の突帯をめぐらし、突起下に3本の沈線による懸垂文が施される。胴部の縄文はRLの縦位施文である。

2は底部から弱く内湾しながら開く深鉢で、隆帯による楕円区画文で口縁部文様帯を構成している。器面には全体にRLの縄文が縦位に施されている。

3は床面に密着して出土した大型土器である。胴部が弱く張り、頸部がくの字状に屈曲して口縁部が内湾しながら開く深鉢で、胴下半から底部の一部を欠損している。文様は、口唇下に無文部において交互刺突による鋸歯文を1帯めぐらし、口縁部上半に3本の沈線による連弧文を11単位(著しく摩耗した未接合破片があるため、現存部9単位)めぐらし、その下に連弧文をもう1段意図されているが、頸部帯と接するため簡略化している。頸部には低い隆帯による鎖状の文様をめぐらして文様帯を区画し、その下に3本の沈線による10単位(現存部6単位)の連弧文を、上下に半単位ずらして2段めぐらし、下段波底下に沈線区画の磨り消し縄文帯を垂下させている。なお、口縁部・胴部の上段連弧文の波頂下には渦巻文が配されている。地文



1. 焼土混りの黒灰褐色土。
2. 焼土混りの、黒灰色粘質土。
3. 焼土混りの、黄色粘質土と黒灰色粘質土の混土。
4. 黄褐色粘質土。
5. 焼土混りの黒灰色粘質土。
6. 黄色粘質土と黒灰色粘質土の混土。
7. 軽石混りの黒褐色土。焼土が少量混じる。
8. 黒灰色土混りの黄色土。しまって硬い。

第59図 24号住居址 炉

III 検出された遺構と遺物

は縄文RLで、全面縦位に施されている。

4は底部から直線的に開く深鉢の大型破片である。口縁は3単位の波状を呈し、波頂部は楕円形を呈す。口唇直下に断面三角形の低い隆帯をめぐらし、頸部に無文帯をおいて2本の沈線をめぐらし、胴部には波頂下に3本の沈線による懸垂文を施し、その間に2本の波状沈線を垂下させている。胴部の縄文はRLの縦位施文である。

5は小形深鉢の胴部で、上端に交互刺突による鋸歯文をめぐらして文様帯を区画し、そこから2本の沈線による懸垂文を垂下させ、中程に三角形の文様を加えている。地文は縄文RLの縦位施文である。

6はキャリパー状の深鉢で、胴下半と口縁部の一部を欠損している。口縁には2単位の把手が付くが欠損している。口縁部は把手を境に隆帯による弧状の区画文で2単位の構成し、区画内中央に渦巻文を施し、その間を縦位の沈線で充填している。胴部には把手下および渦巻文下に3本の沈線による懸垂文を施し、その間に斜位・横位の平行沈線を施している。胴部にはLの撚糸文が縦位に施されているが、各沈線間は磨り消されている。

7は底部から直線的に開き、胴上部でいったん内折し、頸部で外折して直線的に開く深鉢の大型破片である。口縁部は2本の隆帯で区画され、その間を縦位の沈線で充填して文様帯とし、頸部には2本の沈線による渦巻状あるいは円形状の文様を施して下端に2本の沈線をめぐらし、胴部にも2本の沈線による渦巻状の文様や波状懸垂文が施されている。頸部・胴部の地文は縦位の条線である。

8は床面に倒置されていた土器である。口縁部が弱く内折する大型の深鉢で、胴下半を欠損する。口縁部は低い隆帯による渦巻文と楕円区画文で8単位の構成し、胴部には渦巻文下に上端の連結した3本の沈線による懸垂文が施されている。なお、口縁部隆帯は沈線で縁取られている。地文はRLの縄文である。

9は胴部中程が弱く括れ、口縁部がやや内湾しながら開く深鉢で、全体の約 $\frac{1}{3}$ を欠損する。口縁部を隆帯による渦巻文と楕円区画文で5単位の構成し、胴部には3本の沈線による懸垂文を6単位施している。口縁部楕円区画文内は縦位の沈線で充填される。胴部の地文は縄文LRの縦位施文である。

10は口縁部が弱く内湾する小型の深鉢の胴上半部破片である。文様は口唇下に2本の沈線をめぐらし、下に条線を地文として沈線による文様が施されるが、器面が荒れているため不鮮明である。

11も10と同様の器形を呈する土器で、文様は口唇下と頸部に鋸歯状文をめぐらして文様帯を区画し、その間を沈線による菱形状の区画文で構成している。地文は縄文LR。

12は口縁に山形の突起をもつ小型土器で、全面に縄文LRが施されている。

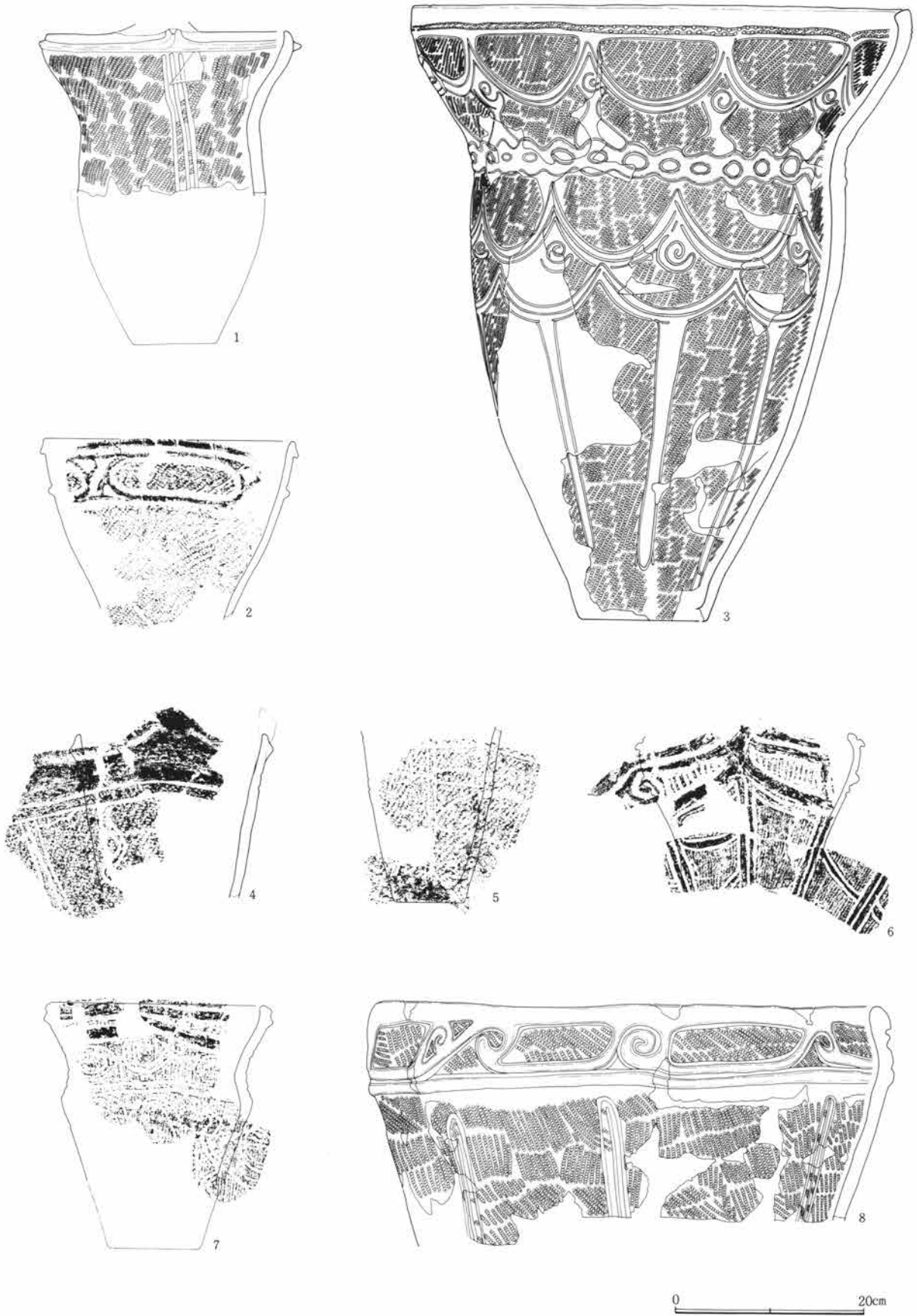
13は深鉢の胴下半部で、ほぼ全周する。文様は、細かな縄文RLを地文に、2～3本の沈線による懸垂文が施される。懸垂文は、波状を呈するものや上半の渦巻文から垂下するものもある。

14・15は頸部がくびれ、口縁部が強く開く深鉢形を呈す。14は縄文RLを地文に、口唇部から3本の沈線による懸垂文を3単位垂下している。15は指頭状施文具による斜位の整形痕が全面に認められる。

16は有孔罎付土器の系統をひく浅鉢で、口縁部と胴下半部を欠損している。器形は口縁部が直立し、胴上半部が強く張り出す形態を呈し、孔は2個1対で口縁部直下の罎に8単位施されている。文様は胴上半部に、沈線区画の無文帯による渦巻文を連結しながら7単位施し、渦巻文間上部に円形文をあてはめている。沈線区画外は、細かな縄文RLで充填されている。

17・18は胴上半でいったん内折し、頸部で外折して口縁部が開く無文の浅鉢の口縁部・胴部の破片である。内外面とも丁寧に研磨が施されて光沢をもち、17の内面と18の外面の一部に塗彩痕が認められる。

19は手づくねのミニチュア土器で、約 $\frac{1}{3}$ を欠損する。底部は丸く、頸部が括れる形状を呈す。胎土に砂粒



第60図 24号住居址出土遺物 (1)

III 検出された遺構と遺物

を含まず、焼成は不良で摩耗が著しい。

20は底部から弱く内湾しながら開く浅鉢の胴上半破片である。口唇下に低い隆帯をめぐらした無文の土器で、内面および口縁部外面は研磨が施されている。塗彩痕は認められない。

21～29・32は深鉢の底部である。いずれも安定した平底で、胴部に向かって弱く内湾しながら開くものが多い。21～28には2～3本の沈線による懸垂文が施されている。また、21・22・25・26・29には縄文LR、23・24には縄文RLが縦位施文されている。27・29には縦位の条線が施されている。なお、27の底面には網代痕が認められる。30・31は浅鉢の底部であろう。

33～69は深鉢の口縁部破片である。

33～53は、渦巻文と楕円区画文で口縁部文様帯を構成する土器である。文様は33～39は隆帯で施されるが、40～53は隆帯と沈線を組み合わせて施している。36・37は変形した渦巻文が施される土器で、楕円区画文は認められない。39は口唇部に文様帯をもつ波状口縁のもので、大木8b式土器であろう。43は渦巻文が円形化している。52・53も波状口縁の土器で、文様は沈線で施される。なお、34・35は頸部に無文帯をもつ。41・42・44・48は渦巻文下に2本の沈線による懸垂文が施される。50は渦巻文下に3本の沈線による懸垂文が施され、沈線間の縄文は磨り消されている。地文は34～39・41～44・46・48・51・53がRL、45・49がLR、40がRLR、52がLRの縄文で、大半は口縁部には横位、胴部には縦位に施文される。なお、口縁部区画内は縄文で充填されるものの他に、刺突文によるもの(33・34)、縦位沈線によるもの(44・47・48)がある。

54は口縁部が内湾しながら開く、波状口縁の土器である。文様は頸部をめぐる2本の沈線で分けられ、口縁部には波頂下に渦巻文が施され、胴部にはアーチ状の区画文が施される。地文は縄文RLで、口縁部には横位、胴部には縦位に施されている。

55も口縁部が内湾しながら開く深鉢の胴上半部破片で、口唇下に2条の沈線をめぐらし、以下に2本の沈線による懸垂文や、剣先文を伴う渦巻文が施される。地文はLRの異束縄文であろう。

56・57は口縁部文様帯を喪失した段階の土器である。56は沈線によるアーチ状の区画帯を垂下させた土器で、区画内には縄文RLを充填している。57は0段多条RLの縄文を、口唇下のみ横位、以下を縦位に施し口唇下に幅広く無文部をおいて、2本の沈線をめぐらしている。

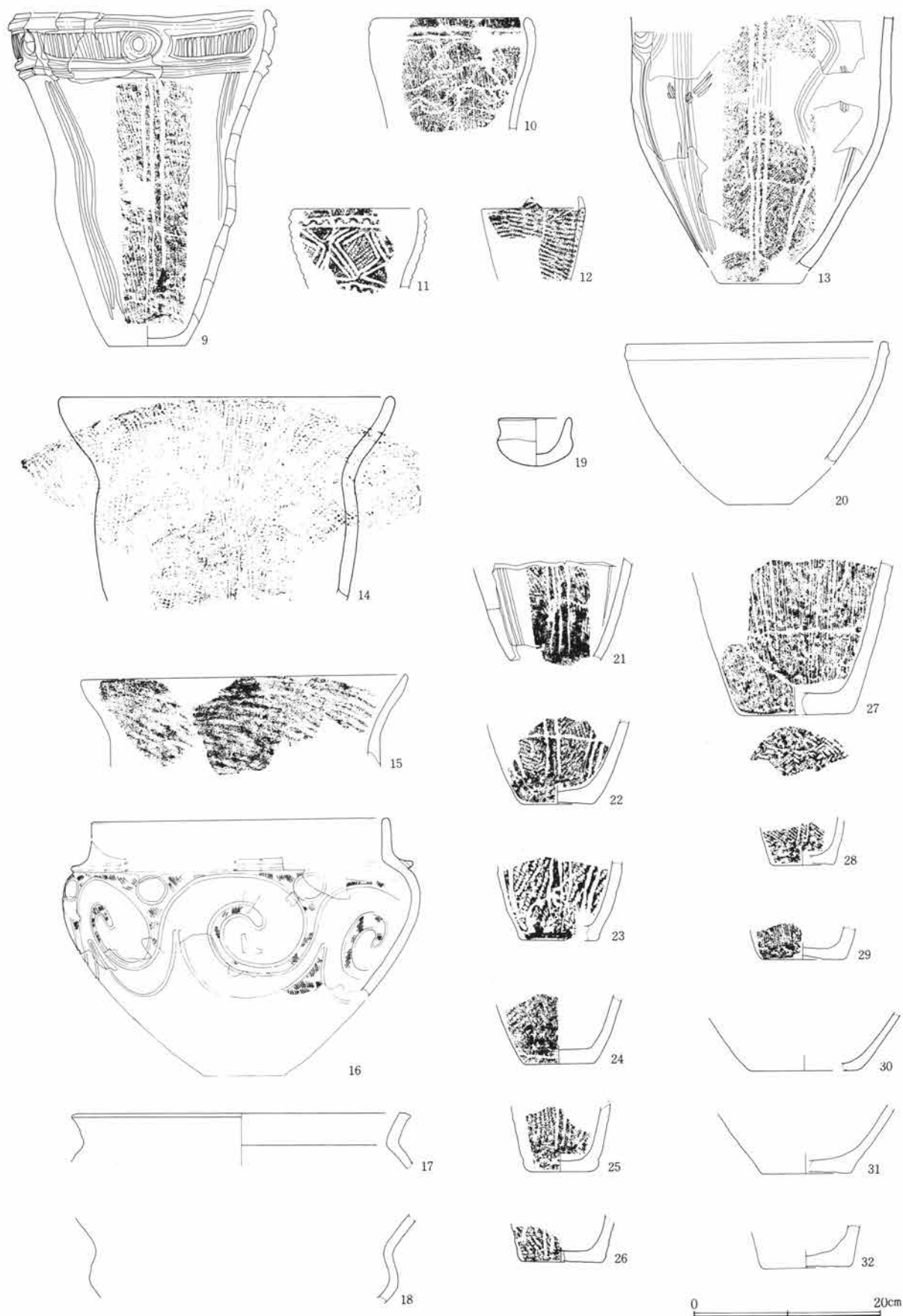
58～59・61～64は条線を地文とする土器で、いずれも口縁部文様帯が見られない。58は口唇上に1本、口唇直下に2本の沈線をめぐらし、以下に条線を曲線的に施している。62は口唇下に3本の沈線をめぐらし、以下に波状懸垂文や渦巻文を施している。59は頸部が括れ、口縁部が外反する土器で、頸部に刺突を伴う2本の沈線をめぐらしている。61・63は波状懸垂沈線を施した土器である。64は内湾する口縁部破片で、文様は56と同様である。

65～68は縄文のみが施された土器である。いずれも口縁部が直線的に開く深鉢で、文様をもつ土器とは器形が異なっている。縄文は65がLR、66・67はRL、68は不明である。

69は外反する口縁部破片で、半截竹管による集合沈線で弧状の文様が施され、頸部に平行沈線をめぐらしている。重弧文土器であろうか。

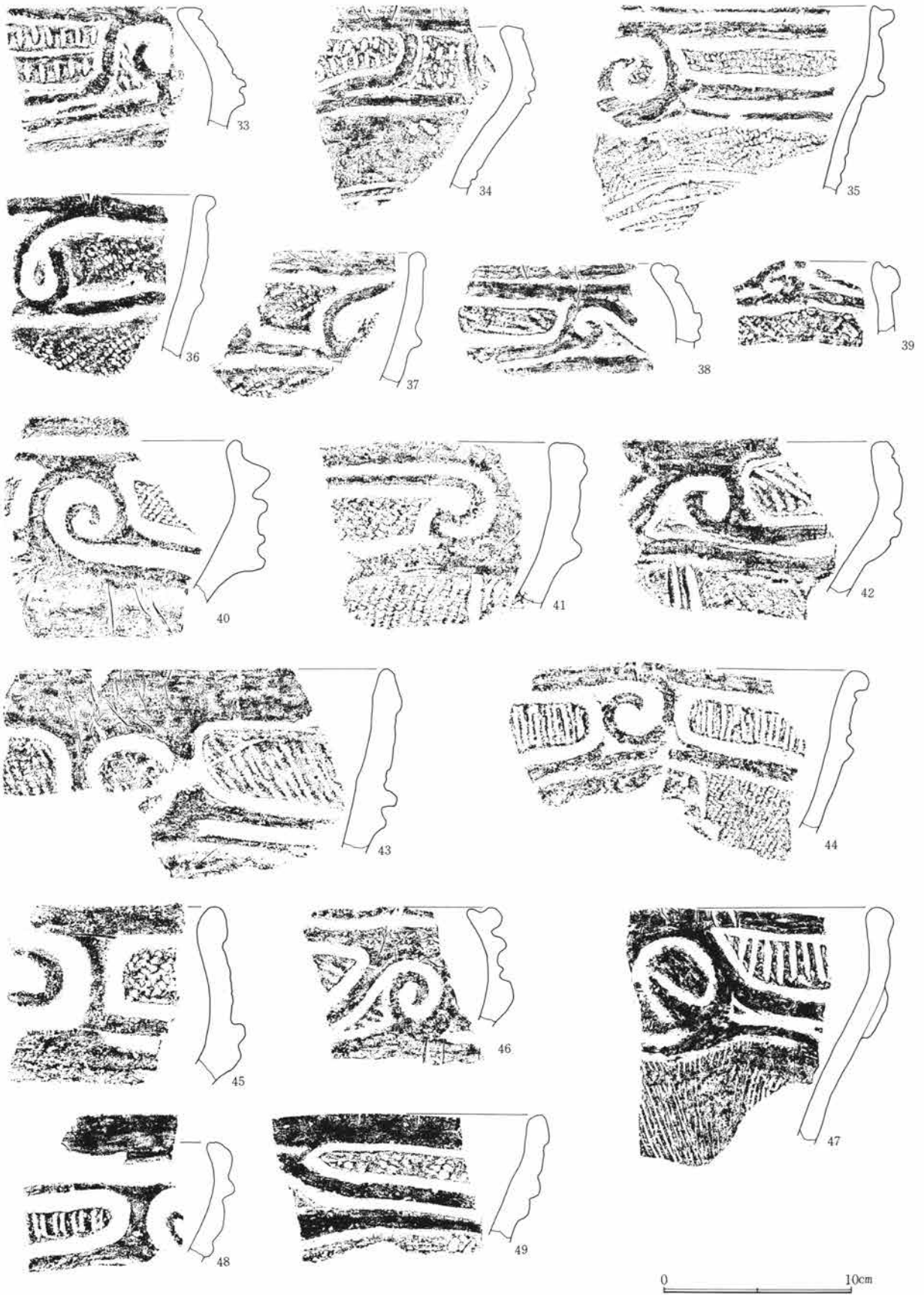
70～86は深鉢の胴部破片である。70～74は縄文を地文とする土器で、2～3本の沈線による懸垂文が施される。72は文様の連結部に渦巻文が施されている。縄文は70・73・74がRL、71が0段多条複々節LRRLR、72が0段3条RLである。

75はLの捺糸文を地文とする土器で、胴部括れ部に刺突を伴う2本の沈線をめぐらし、その下に3本の沈線による連弧文を施している。



第61図 24号住居址出土遺物 (2) (19は1/3)

III 検出された遺構と遺物



第62図 24号住居址出土遺物 (3)

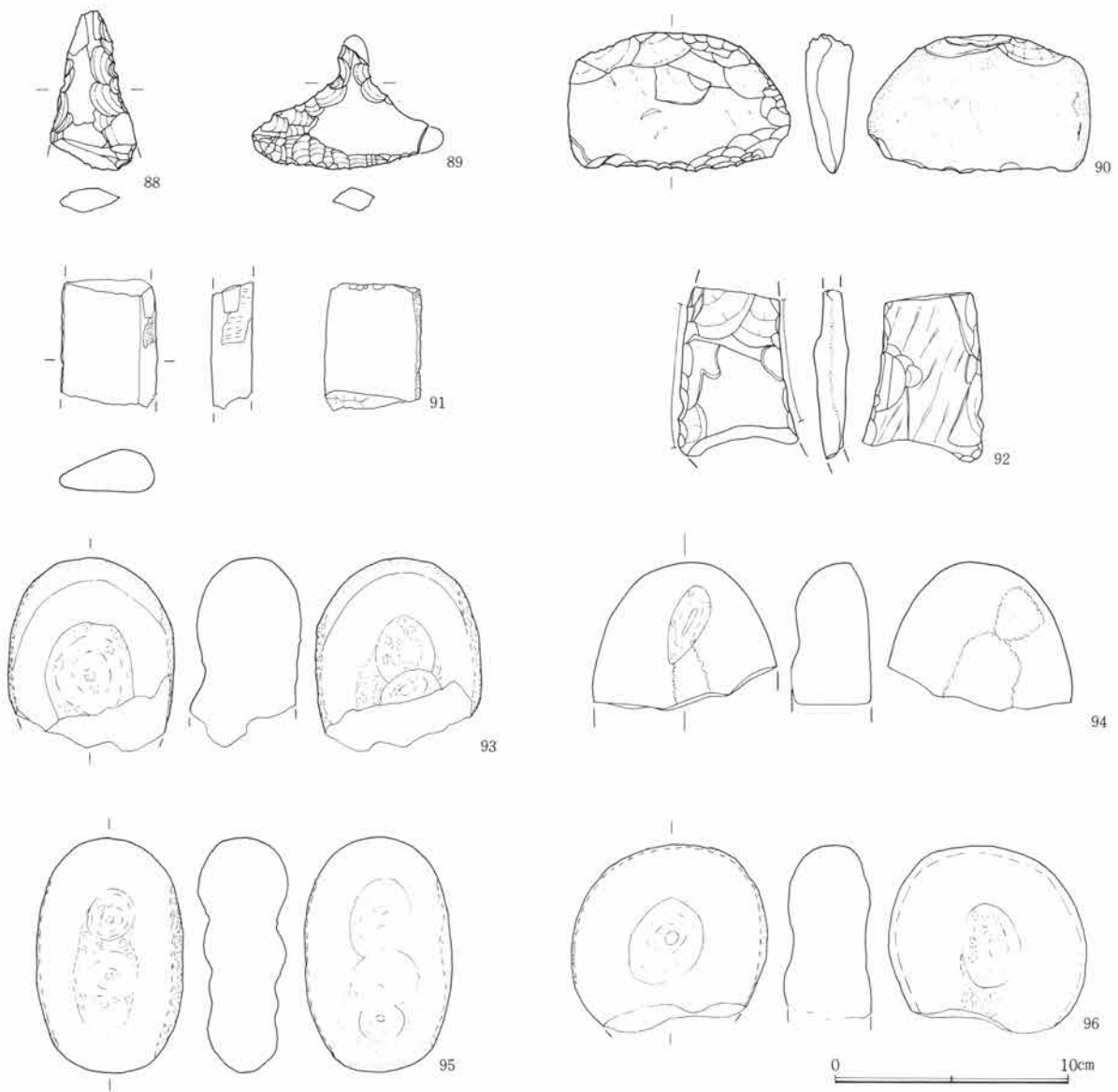


第63図 24号住居址出土遺物 (4)

III 検出された遺構と遺物



第64図 24号住居址出土遺物 (5)



第65図 24号住居址出土遺物（7）

76～86は条線を地文とする土器である。76～79は2本の沈線による渦巻文が施される。80～84・86は2～3本の沈線による懸垂文や波状懸垂文が施される土器で、81では懸垂文間を2本の沈線で連結している。85は括れ部に交互刺突による鋸歯状文が施されている。連弧文土器であろう。

87は胴部中程がくの字状に強く内折する鉢浅で、胴上半部に沈線による渦巻文が施されている。

88～96は石器である。88は槍先形尖頭器の先端部破片と思われる。両面とも両側縁から荒い調整剝離が施されている。89はつまみ部をもつ横長の石匙である。周縁部には入念な調整が施されている。90は表皮部分の剝片を素材とした横長の剝片石器で、刃部は一定方向からの剝離で形成されている。91は両側縁部に細かな敲打痕を残す石器で、いわゆるストーンリタッチャーであろう。92は打製石斧の欠損品である。93～96は磨石である。93・94・96は欠損品である。いずれも両平坦面に深い集合打痕と研磨面が認められる。

なお、これらの他に打製石斧6点、磨石6点、礫器3点、石鏃1点、土製円盤2点、および多量の土器破片が出土している。

III 検出された遺構と遺物

所見

本住居址の時期は、炉埋甕および床面密着出土土器から、加曾利E 3式の古い段階に比定される。P₁₂—P₁₃—P₁₆は前述のようにP₁₄・P₁₅を中心に二等辺三角形に配置されており、また炉の南側をとり囲む位置にあることから、上屋構造との関連よりもむしろ、炉との関連が考えられる。

110号住居址（第66図）

位置 B-21グリッド。

形状 直径4.55mの円形を呈する。

壁 全周しており、壁高は15~25cmでやや傾斜をもって立ち上がっている。

床面 平坦で良好な床面が検出された。

柱穴 ピットは合計10本検出されたが、主柱穴はP₁—P₂—P₃—P₄—P₅—P₆の6本である。

炉 住居址の中央よりやや北西寄りに位置する。80×70cmの不正方形の浅い掘り込みが認められ、底面から焼土が検出された。

また、周縁部に小ピット状の浅い窪みが検出されたことから、石囲い炉であった可能性が強い。

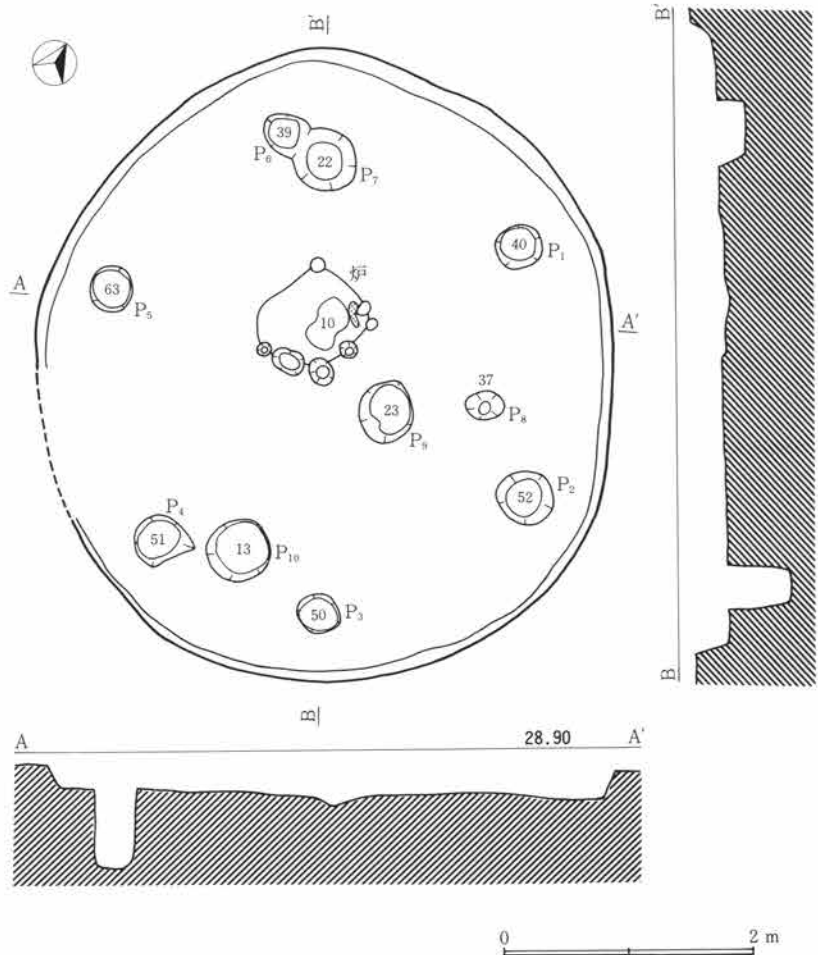
重複 東南で108号住居址と重複する。108号住居址床面は、本住居址床面より30cmほど高く、炉は本住居址炉の東南約1mに位置する。

遺物の出土状態

覆土中から少量の土器破片や石器が出土した。また、磨石が床面に埋め込まれた状態で1個出土している。

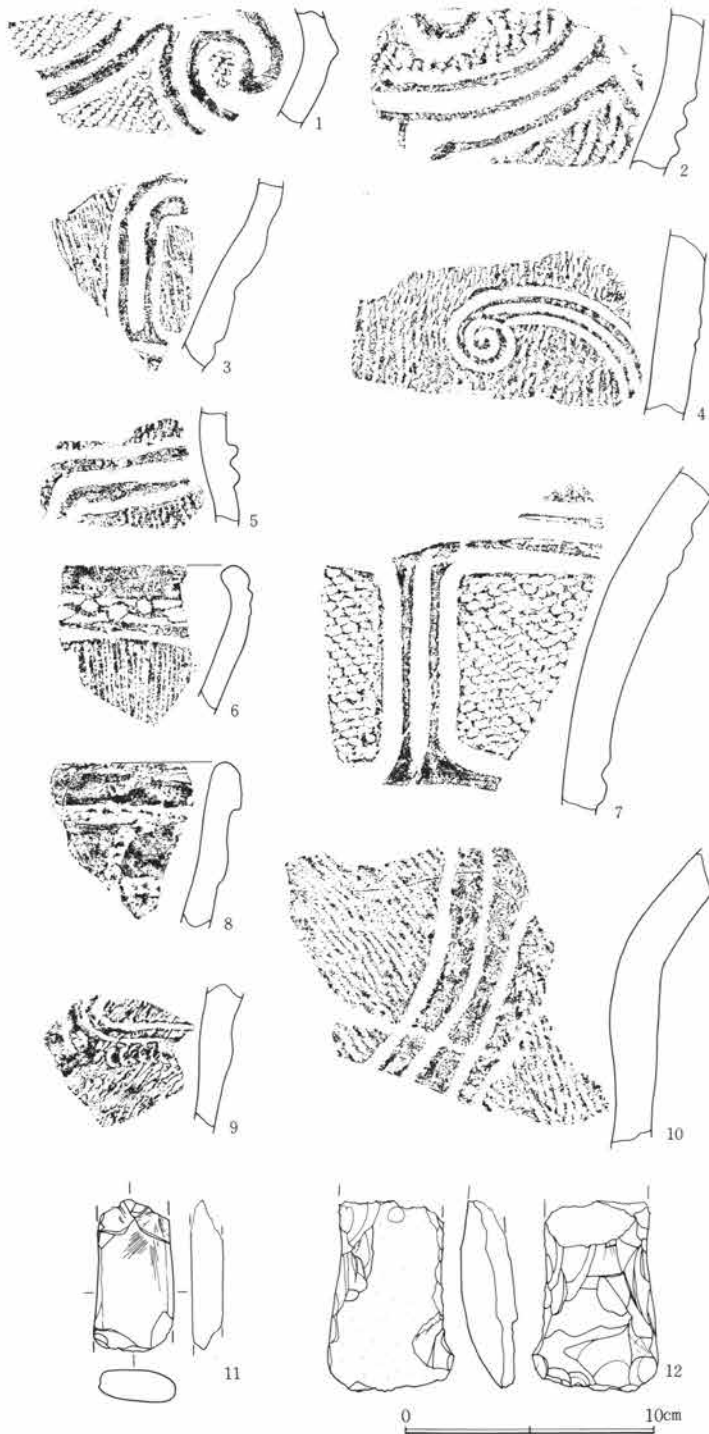
出土遺物（第67図）

1~3・5は、2~3本の隆帯で渦巻文やクランク文を施した土器である。地文は1がRL、2がLRの縄文の縦位施文、3・5がRの燃糸文である。



第66図 110号住居址

1 縄文時代の遺構と遺物



第67図 110号住居址出土遺物

所見

本住居址出土土器のうち、8・9は阿玉台IV式、1～5・7は加曾利E 2式、6・10は加曾利E 3式の古い段階に比定されよう。いずれも少量の出土であり、これらの土器から本住居址の時期を明確にすることはできないが、加曾利E 3式の新しい段階に比定される110号住居址より古いことは確実である。

4は3本の平行沈線で曲線的な文様を施した胴部破片で、文様の端部には渦巻文が付けられる。地文はLの撚糸文である。

6は内湾する口縁部破片で、口唇下3本の沈線をめぐらし、上方の沈線間に交互刺突による鋸歯文を施し、以下に縦位の条線を施している。

7は3本の沈線で区画文を施した胴上半部の破片である。地文に縄文LR Lが縦位に施されているが、沈線間は磨り消されている。

8・9は半截竹管による爪形文が施された土器である。8は口唇直下に肥厚帯をもつ土器で、肥厚帯直下に爪形文をめぐらし、そこからクランク状に爪形文を施している。9は爪形文を伴う低い隆帯で楕円形の区画文が構成され、隆帯の内側に半截竹管による平行沈線をめぐらしている。なお、器面には反撚りRRの縄文が施されている。

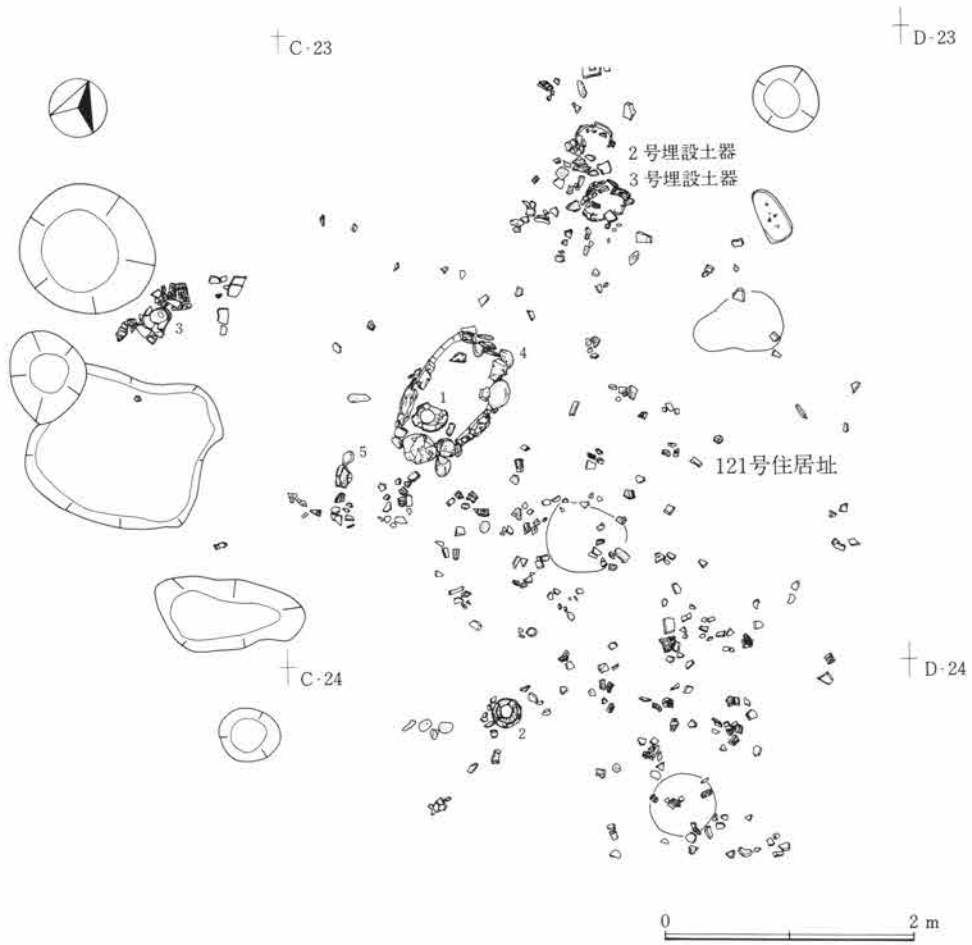
10は磨消し縄文帯が施された胴部破片である。縄文はLRである。

11は細長い扁平な磨製石器で、上下を縦方向からの圧力で欠損している。用途は不明。

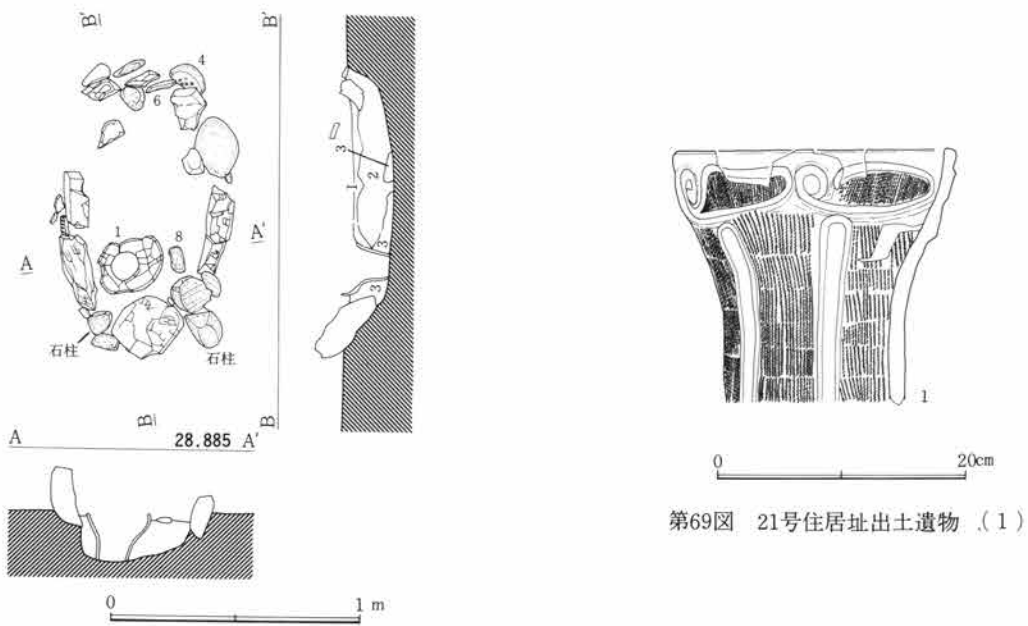
12は短冊形の打製石斧である。外面に自然面の反りを利用したもので、装着部を欠損している。

なお、これらの他に磨石3点が出土している。

III 検出された遺構と遺物

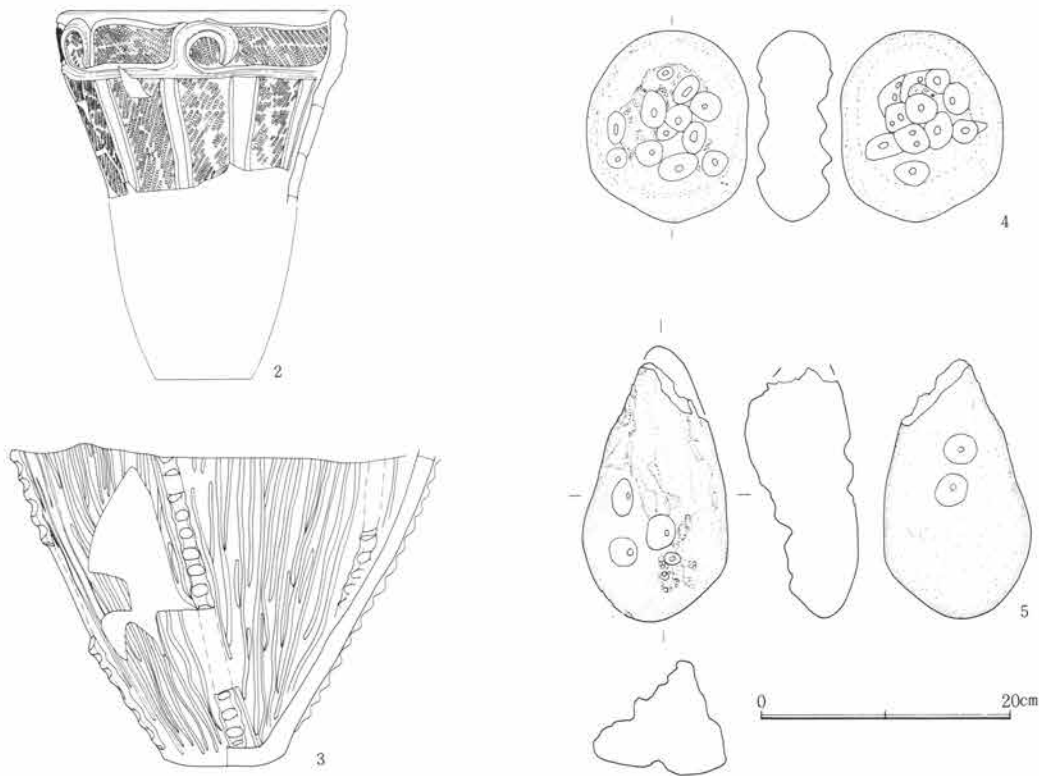


第68図 21号住居址



第69図 21号住居址出土遺物 (1)

1. 黒褐色土層。
2. 灰褐色土層。焼土粒を含む。
3. 明灰褐色土層。



第70図 21号住居址出土遺物（2）

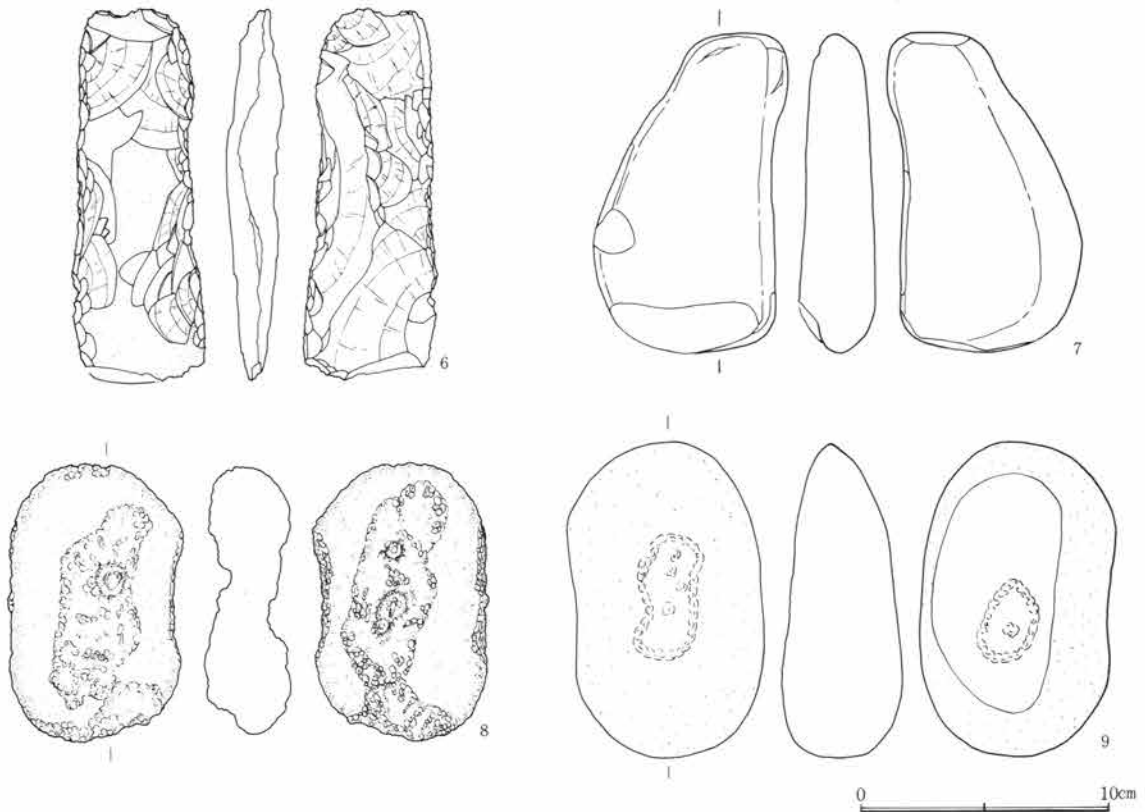
21号住居址（第68図）

C-23グリッドを中心に位置する。西側に20号住居址、東側に121号住居址が近接している。明確に住居と認定できるのは炉のみである。炉は長方形に組まれた石囲い埋甕炉で、規模は長軸1.2m・短軸0.7mである。炉石には角礫・円礫・石器が使用されており、特に南半部は板状の角礫を立ててしっかり組まれており、両コーナーには石柱が配されている。石柱は2本とも上半部を欠損しているが、東側の石柱は欠損部が南側へ倒れた状態で残っていたため、復元することができた。東側石柱は長さ45cmの棒状を呈する石英斑岩の円礫を使用したもので、炉石より15cmほど突出して設置されている。西側石柱は点紋緑色片岩を棒状に調整したもので、現存部20cmほどで打ち欠かされている。埋甕はこの石柱をもつ南半部に設置されている。北半部は円礫・石器を中心とする比較的小さな礫で組まれており、南半部とは対比的である。また、南側コーナーには多孔石が配置され、石柱と対峙している。なお、西側の炉石は部分的に抜き取られている。炉面下から深さ15cmほどの掘り方が検出された。底面は埋甕の底と同レベルである。焼土は、掘り方の埋土中にブロック状に少量認められたが、炉面では検出されていない。

炉の周辺からは多量の土器破片や石器が出土した。住居範囲が想定できるような出土状態は認められないが、炉の南東約2mから倒置土器（第70図2）が、炉の南西約2.5mからは深鉢胴下半部（第70図3）が、また炉の南西50cmから多孔石（第71図5）が、各々炉とほぼ同一レベルから出土している。これらを本住居址に伴うものと考え、直径約6mほどのプランが想定できる。なお、炉の北側約2mから埋設土器2個体が検出されたが、検出面が本住居址炉よりもやや低く、また炉の北に位置していることから、本住居址には伴わないものと考えている。

また、炉面下20cmまで下げて柱穴検出調査にあたったが、検出できなかった。

III 検出された遺構と遺物



第71図 21号住居址出土遺物 (3)

出土遺物 (第69図～第71図)

本住居址に確実に伴うものは、炉石に使用されていた石器類と炉内埋甕であるが、炉と同一レベル出土の倒置土器、深鉢、多孔石も含めて報告しておきたい。

1は炉の埋甕として使用されていた土器である。口縁部が弱く開く深鉢で、胴下半を打ち欠かれている。文様は口縁部を隆帯と沈線による渦巻文と楕円区画文で5単位に構成し、胴部には上端がアーチ状に連結した沈線区画の無文懸垂帯を7単位垂下させている。地文はLの捺糸文である。

2は床面レベルから倒置状態で出土した土器である。器形は、口縁部が弱く開く深鉢で、胴下半部を欠損している。文様は、口縁部を隆帯と沈線による渦巻文と楕円区画文で5単位に構成し、胴部には幅の狭い磨消縄文帯を10単位垂下させている。地文はRLの縄文で、口縁部には横位、胴部には縦位に施している。

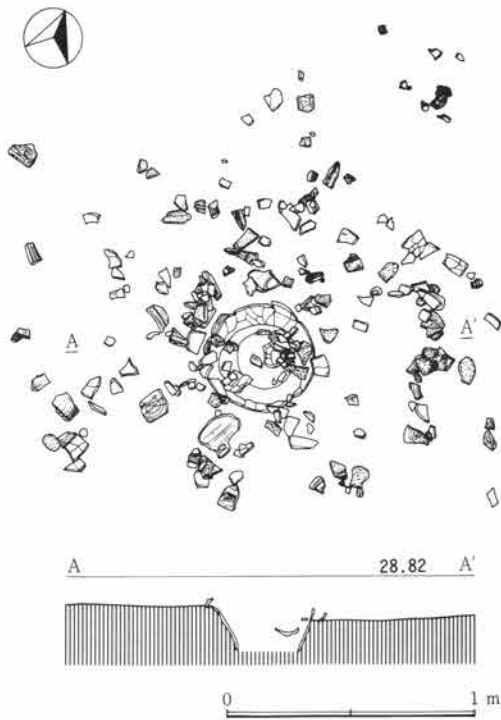
3も床面レベル出土の土器である。縦位の沈線文が施された深鉢の胴下半部で、刻みを施した隆帯による懸垂文が7単位施されている。

4・5は多孔石である。4は炉石として使用されていたもので、完形品である。径15cmほどの平らな円盤を利用し、両平坦面に錐揉み状の凹穴を重複しながら多数施している。5は炉の南西床面から出土したもので、端部を欠損している。断面形が三角形を呈する細長い円盤を利用したもので、2側面に錐揉み状の凹穴が2・3個施されている。なお、凹穴は各々の側面に直交する方向から施されている。

6～9は炉石として使用されていた石器である。6は短冊形の打製石斧、7は敲石、8・9は磨石である。

所見

本住居址の時期は、炉内埋甕から加曽利E3式の段階に比定されよう。なお、2・3も同一時期ととらえることができ、本住居址に伴う可能性が強い。



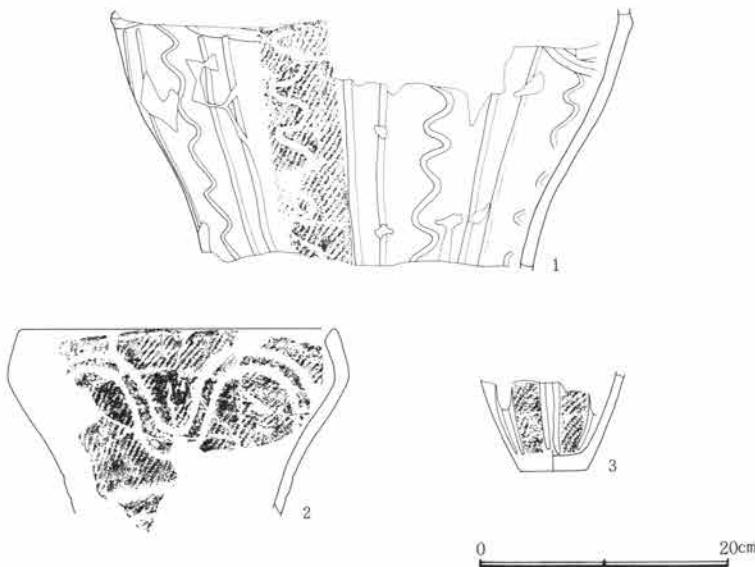
第72図 22号住居址

型の深鉢の底部（第73図3）が出土している。

出土遺物（第73図）

1は炉に使用されていた土器である。胴上半が緩やかに開く大型の深鉢で、口縁部と胴下半部を打ち欠かされている。口縁部文様帯下端を隆帯で区画し、胴部には幅広の磨消し縄文帯と波状沈線を交互に垂下している。地文は0段3条RLで、口縁部区画内は横位胴部には縦位に施している。

2は胴上半が弱く外反しながら開き、口縁部が弱く内折する深鉢の大型破片である。文様は胴上半部に2本の沈線による波状文をめぐらし、胴部中程に2本の沈線をめぐらして文様帯を区画している。地文は縄文



第73図 22号住居址出土遺物

22号住居址（第72図）

位置 D-25グリッド杭を中心に位置する。北側に121号住居址、南側に119号住居址がある。

形状 不明。

壁 検出できない。

床面 床は黒褐色土中にあるため、明確な面は検出できない。

柱穴 検出できない。

炉 埋甕炉である。大形深鉢の口縁部および胴下半部を打ち欠いたものを使用している。埋甕の上半部は加熱を受けているが、焼土は検出されていない。

重複 119号・121号住居址と重複するものと思われるが、切り合い関係は不明である。両住居とも床面が本住居址よりかなり低く、出土土器では古い。

遺物の出土状態

炉を中心に径2mほどの範囲から、多量の土器破片が床面からやや浮いた状態で出土した。また、炉内から小

RLの縦位施文で、各沈線間の縄文は磨り消されている。連弧文系統の土器であろう。

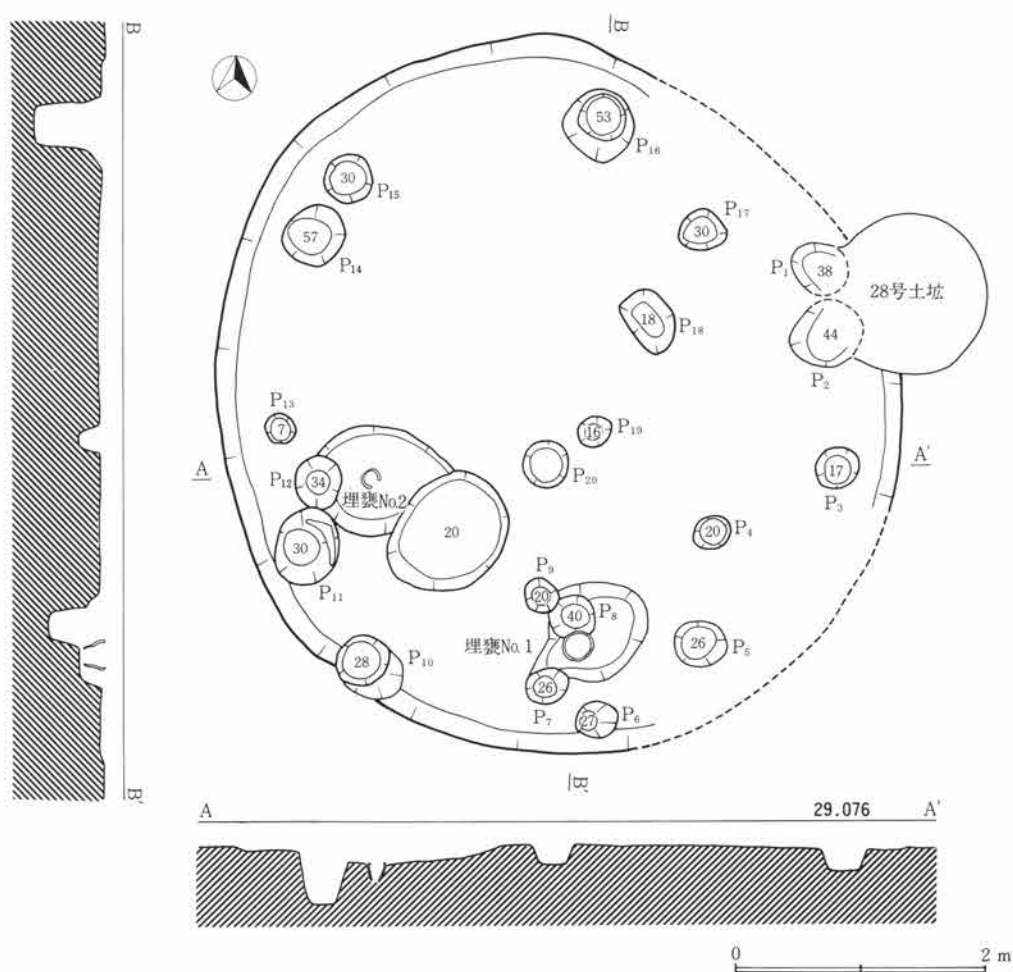
3は小型深鉢の胴下半部で、磨消縄文帯による懸垂文が施されている。地文は縄文RLの縦位施文である。

なお、石器は磨石2点、打製石斧1点が出土している。

所見

本住居址の時期は、出土土器から加曾利E3式の新しい段階に比定される。

III 検出された遺構と遺物



第74図 25号住居址

25号住居址 (第74図)

位置 B-19グリッド杭を中心に位置する。2区の最北に位置し、最も近い24号住居址とは8m離れている。

形状 径5.6mの円形を呈する。

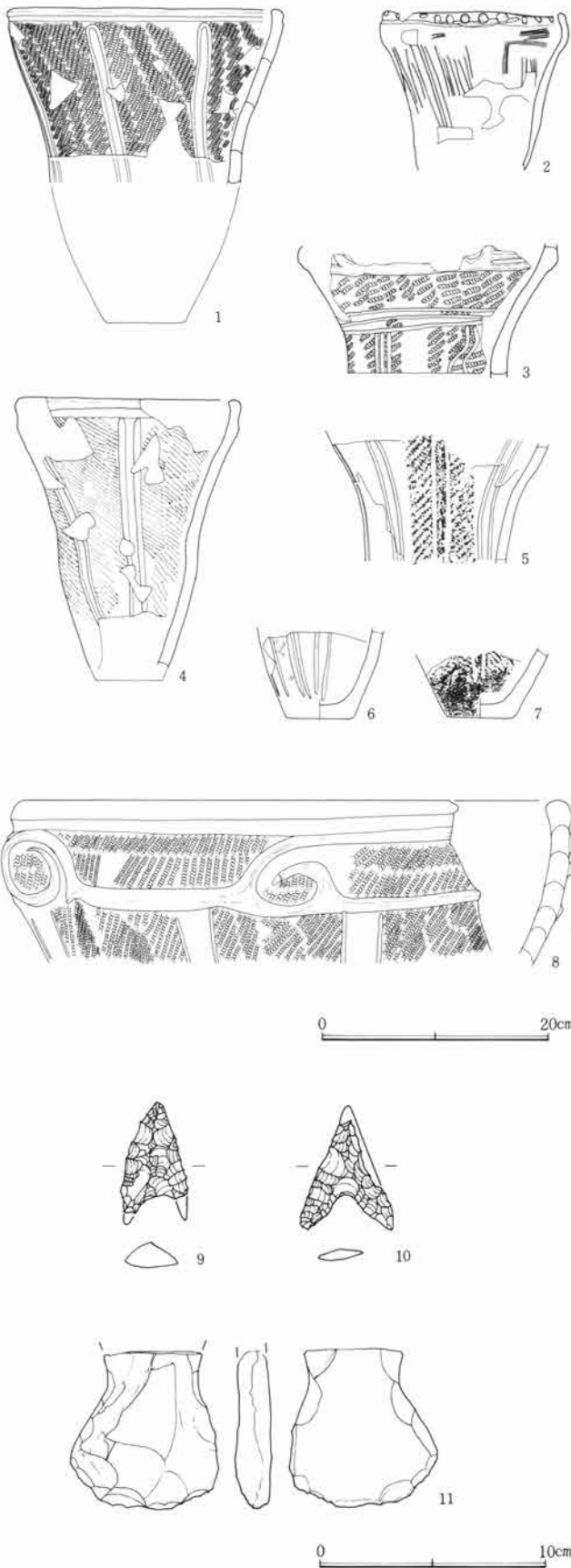
壁 西半の半周分と東側の一部をかりうじて検出することができた。壁高はいずれも5cm未満である。

床面 平坦な面を呈する。地山の黄灰白色シルト質土を床面としており、軟弱である。

柱穴 合計20本のピットが検出された。支柱穴はP₁₀-P₁-P₃-P₅-P₇-P₁₁-P₁₄の7本と思われるが、重複あるいは近接するピットが多く、建て直し等が行なわれた可能性が高い。

炉 未検出。

埋葬 2ヶ所検出された。1つは南東の壁から70cm内側に位置する。これを1号埋葬とする。埋葬は径80cm、深さ20cmの円形土壇状の掘り方内に埋設されており、埋葬の北側に若干重複するようにピットが検出された。埋葬はこのピットに切られていないので、埋葬埋設以前のピットである。もう1つは南西の壁から1m内側に位置する。これを2号埋葬とする。1号埋葬から2mの位置にある。埋葬は長径1.2m・短径0.9m・深さ15cmの楕円形を呈する浅い掘り込み内の中央部底面に埋設されていた。また、この掘り込みの東側に重複して長径1m・短径0.85m・深さ20cmの落ち込みが検出されている。なお、埋葬には相方とも胴下半を打ち欠いた深鉢を使用している。



第75図 25号住居址出土遺物（9・10は2/3）

重複 東側で28号土壇と重複しており28号土壇を切っている。

遺物の出土状態

覆土中から多量の土器破片と少量の石器類が出土した。

出土遺物（第75図）

1は1号埋甕である。胴部中程が弱く括れ、口縁部がやや内湾する深鉢で、胴下半部を欠損する。文様は口唇直下に沈線を1本めぐらし、その直下から沈線による上端がアーチ状に連結した磨消し縄文帯を8単位垂下させている。地文は縄文RLの縦位施文である。

2は2号埋甕である。口縁部が内湾する小形の深鉢で、1号同様胴下半を欠損している。文様は口唇下に1本の沈線をめぐらし、その間に指頭状の刺突文を施し、胴部には条線を粗く施している。本土器は成形・調整が粗く、器面には凹凸が認められる。

3は胴部が弱く張り、頸部がくの字状に屈曲して、口縁部が内湾ぎみに開く深鉢で、胴下半を欠損している。文様は口縁部に縦位の沈線を施し、頸部に若干の無文部をもうけて、胴部に隆帯によるアーチ状の区画文を10単位施し、その間を縦位の沈線で充填している。胴部の懸垂隆帯は交互に押圧が施されて弱い波状隆帯となっている。この土器は、主に信濃地方に分布する格子目文（籠目文）土器の系統を引く土器である。

4は胴部中程が弱く括れ、口縁部がわずかに内湾する深鉢で、全体の約半分の部分を欠損している。文様構成は1と同様であるが、磨消し縄文帯の上端は連結していない。地文は無節縄文Lの縦位施文である。

5は口縁部がキャリパー状を呈する深鉢で、頸部の $\frac{1}{4}$ と胴上半部の $\frac{3}{4}$ が出土した。口縁部は隆帯と沈線による渦巻文と楕円区画文で構成され、頸部に無文帯をおいて3本の沈線を施し、胴部には3本の沈線と2本の波状

III 検出された遺構と遺物

沈線による懸垂文を交互に3単位づつ施している。胴部懸垂文は各々口縁部渦巻文下に施されていることから、口縁部も6単位構成をとるものと思われる。地文は縄文RLの縦位施文である。

6は胴上半部が外反する深鉢の胴部大型破片で、文様は沈線で区画された磨消し縄文帯で構成されている。地文は縄文RLの縦位施文である。

7は口縁部が内湾する大型深鉢で、口頸部の $\frac{1}{2}$ が出土した。文様は口縁部を隆帯と沈線による渦巻文楕円状の区画文で構成し、胴部には幅広の磨消し縄文帯を垂下させている。地文は縄文RLで、口縁部・胴部ともに縦位に施している。

8・9は石鏃である。8は両脚部、9は先端部から側縁部にかけて欠損している。いずれも無茎で基部にえぐれが入るが、8は側縁が丸くえぐれが浅いのにに対して、9は側縁が直線的でえぐれが深い。調整剝離は2点とも入念に施されている。

3は撥形の打製石斧で、装着部を欠損している。

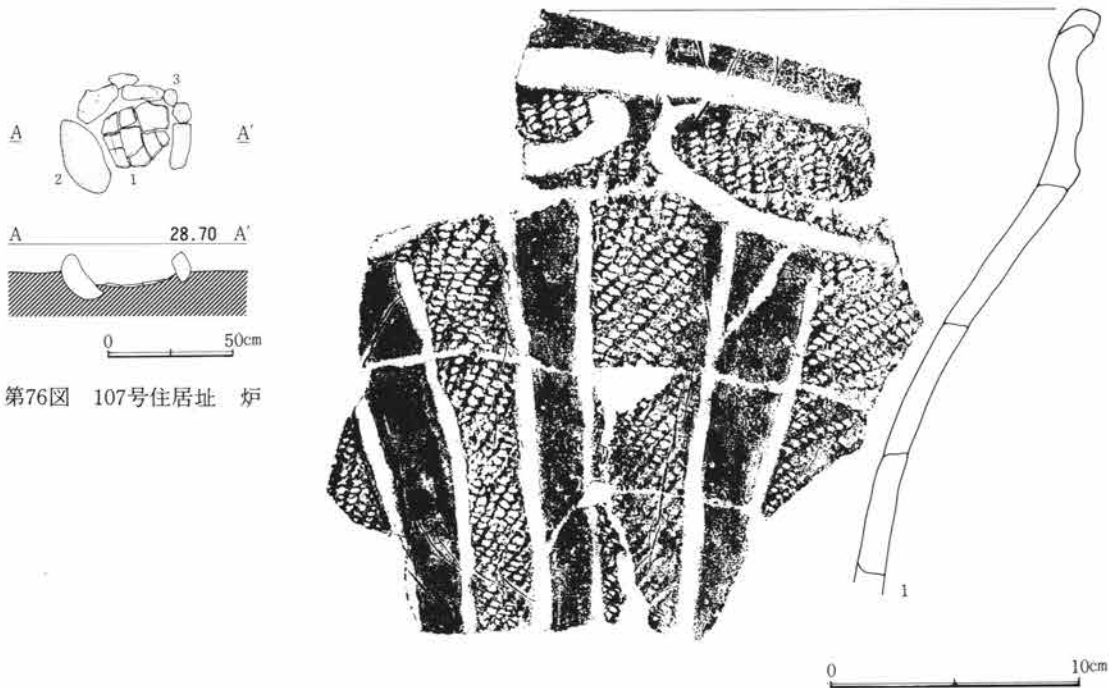
なお、石器はこれらの他に、磨石4点、打製石斧5点が出土しており、他に土製円盤が1点出土している

所見

本住居址の時期は、出土土器から加曾利E3式の段階に比定されよう。なお、位置を異にした2個体の埋甕をもつこと、2通り以上の柱穴の配置が考えられることから、本住居址は建て直し等が行なわれたと考えてさしつかえなからう。その場合、 $P_5-P_7 \cdot P_{11}-P_{13}$ が各々の出入口にあたりと考えられる。前者に対応する柱穴配置は前述のとおりであり、後者に対応するものは $P_{16}-P_1-P_7-P_{11}-P_{13}-P_{15}$ の7本が想定される。

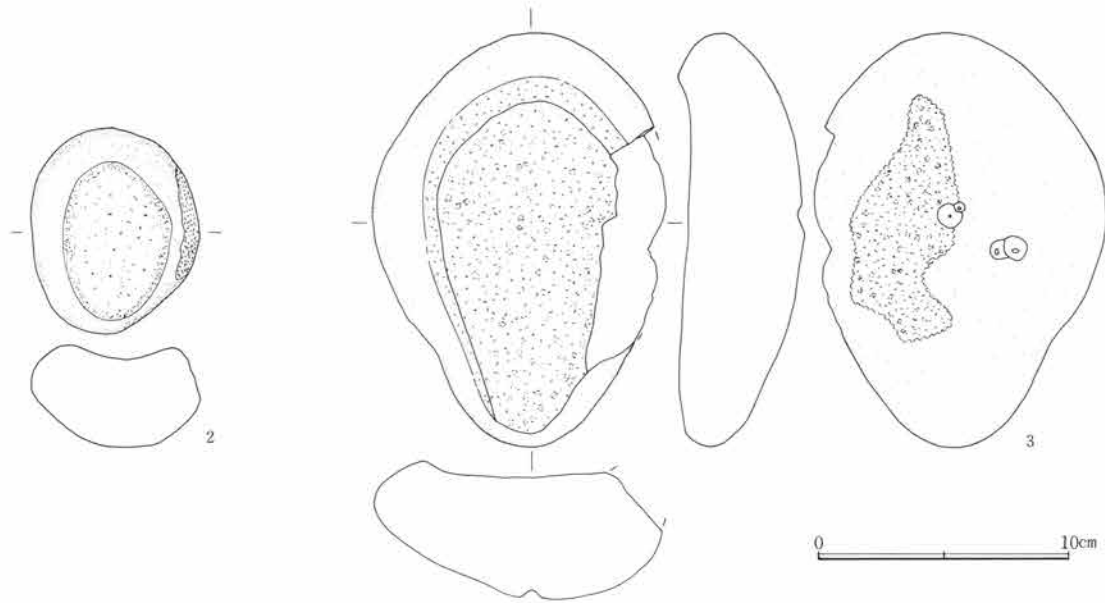
107号住居址 (第76図)

D-22グリッドに位置する。南側に21号・121号住居址、西側に108号・110号住居址が近接している。本住居は炉のみの検出にとどまった。炉は一辺55cmの石囲い炉で、炉内底面には深鉢土器の大形破片が、内面を



第76図 107号住居址 炉

第77図 107号住居址出土遺物 (1)



第78図 107号住居址出土遺物（2）

上にして敷かれていた。炉石には、石皿の未製品、小型の石皿状石器・礫が使用され、円形に組み立てられたものと思われるが、北東側の炉石は抜き取られている。焼土は検出されなかったが、炉石・底面の土器は加熱を受けて脆くなっている。炉の周辺からは少量の土器破片等が出土したのみである。

出土遺物（第77図・第78図）

1は炉内底面に敷かれていた土器である。キャリパー状を呈する深鉢の胴上半部の破片で、口縁には外反する舌状突起をもつが、欠損している。文様は、口縁部に沈線による渦巻文と楕円区画文を連結して施し、胴部には幅広の磨消縄文による懸垂文が施される。口縁部の渦巻文は楕円化し、文様帯下端の区画は省略されている。地文はR Lの縄文で、口縁部は横位、胴部は縦位に施されている。

2は小型の石皿状を呈する石器である。小円礫の片面を窪ませたもので、窪み部には敲打痕が認められる。また、側縁の一方は敲打により平坦になっている。

3は石皿の未製品である。側縁の一方を欠損している。背部の高い楕円状を呈し、使用面を荒い敲打で成形しているが、調整はなされていない。裏面の一部にも荒い敲打が施されており、また敲打による凹穴が4個付けられている。

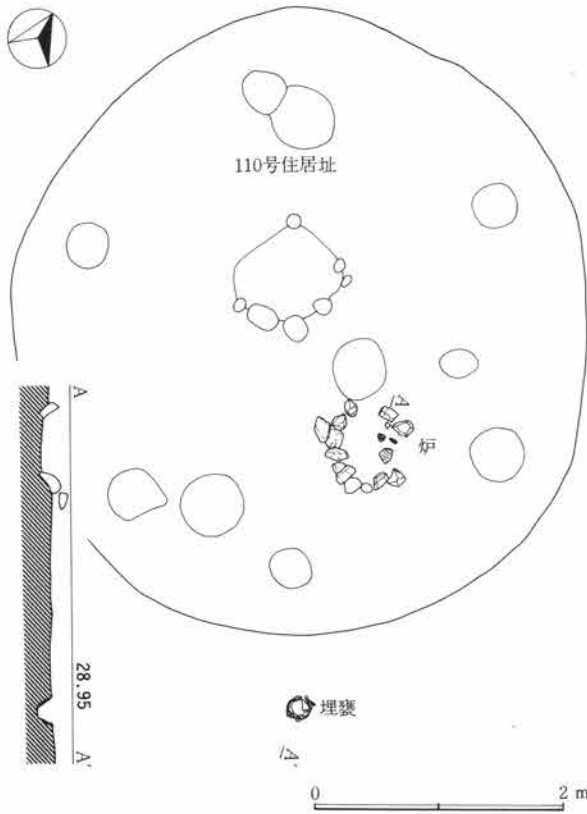
所見

本住居址の時期は、出土土器から加曽利E 3式の新しい段階に比定される。

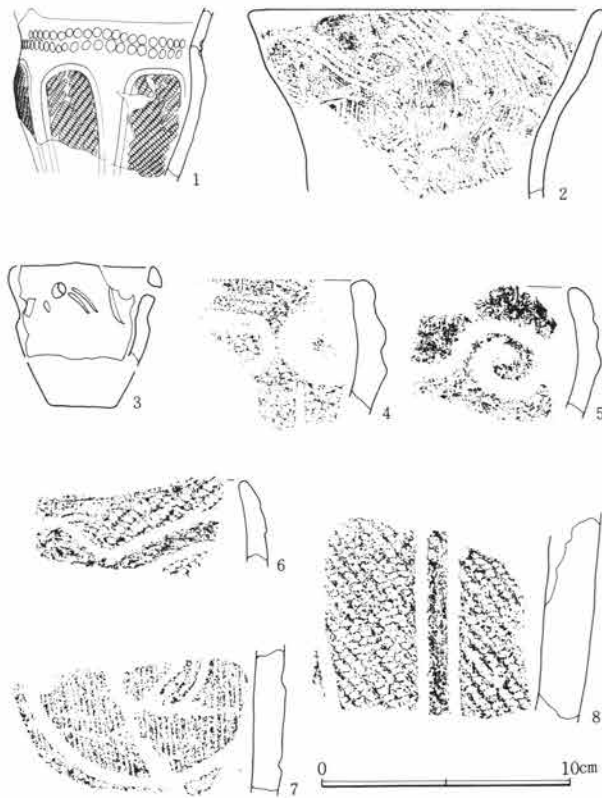
108号住居址（第79図）

B-21・22グリッドに位置する。110号住居址の床面上約25cmのレベルに石囲い炉が検出され、その南東約2mのところに埋甕が検出された。壁・柱穴等は検出できなかった。炉は小さな円礫で径80cmの円形状に組み立てられているが、炉石は部分的に抜き取られている。炉内から焼土は検出されていない。埋甕は炉と同レベル面にあり、方向・位置とも25号住居址をはじめとする本遺跡での類例と合致しており、本住居址に伴うものとしてさしつかえなからう。埋甕には小型の深鉢の口縁部と胴下半部を打ち欠いたものを使用し、正位に埋設している。なお、炉の周辺から少量の土器破片や石器が出土した。

III 検出された遺構と遺物



第79図 108号住居址



第80図 108号住居址出土遺物 (1)(1は1/6)

出土遺物 (第80図・第81図)

1は埋葬に使用されていた土器である。胴部中程が弱く括れる深鉢で、口縁部と胴下半部を欠損している。文様は、胴部括れ部に指頭状の浅い刺突文を2列めぐらして文様帯を区画し、胴下半に沈線によるアーチ状の区画帯を7単位施し、区画内を縄文RLで充填している。

2は口縁部が大きく開く小型深鉢の破片で、全体に櫛状施文具による波状文をランダムに施している。

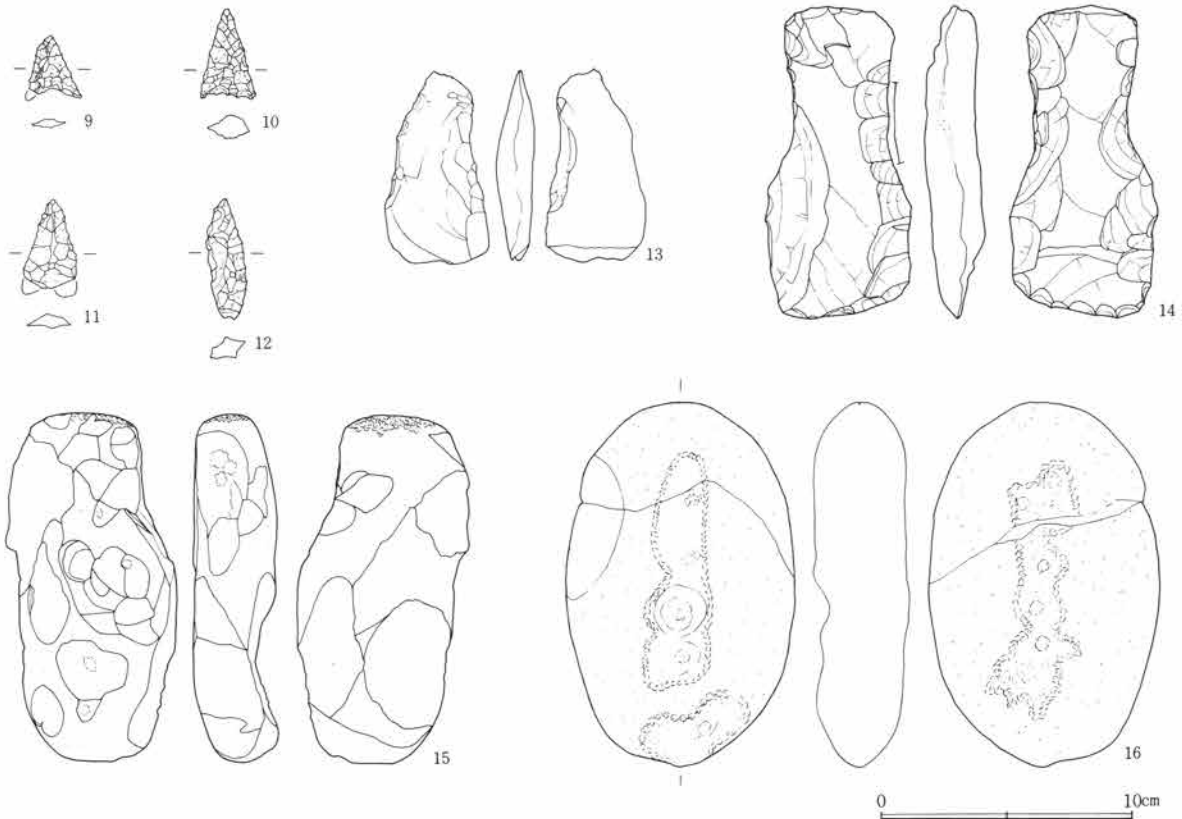
3は頸部に括れ部をもつ小型有孔土器の破片である。無文であるが、器面の所々に細い半截竹管状のものによる沈線状の痕がみられる。口縁部に直径5mmほどの円孔が1.5~2cmの間隔で施されている。成形は輪積みで行なわれており、外面の頸部・胴部には横位の荒いナデが施されているが、内面は未調整で、輪積み痕が明瞭に認められる。焼成は良好で、白橙色を呈す。

4~6は深鉢の口縁部破片である。4は口縁部を沈線による円形文と楕円区画文で構成し、胴部に沈線による懸垂文を施している。地文はRLの縄文で、口縁部には横位、胴部には縦位に施文される。5は口縁に舌状の小突起が付く土器で、口縁部突起下に沈線による渦巻文が施されている。6は波状口縁を呈する土器で、口唇下に磨消し縄文による波状文が施される。地文は縄文RLの縦位施文である。

7・8は深鉢の胴部破片である。7は2本の沈線による渦巻文が施された土器で、地文は縦位の条線である。8は幅の狭い磨消し縄文による懸垂文が施された土器で、地文は複節縄文LRLの縦位施文である。

9~12は石鏃である。いずれも小型である。9~11は無茎で、9・11は基部に浅い抉れが入るが、10は基部が平坦となっている。12は棒状を呈するものである。いずれも調整剝離は入念に施されている。

13は横長剝片を素材とした剝片石器で、両側縁



第81図 108号住居址出土遺物（2）（9～12は2/3）

を一定方向から剝離を加えて撥状に成形している。小型の打製石斧であろうか。

14は撥形を呈する打製石斧である。

15は長方形状を呈する敲石である。加熱を受けており、全面に剝落が認められる。

16は磨石である。欠損品の接合例である。両平坦面に数ヶ所からなる重複した集合打痕が認められる。加熱により器面が荒れているため、研磨面は観察できない。

なお、石器はこれらの他に、磨石2点・打製石斧3点・磨製石斧破片1点が出土している。

所見

本住居址の時期は、出土土器から加曾利E 3式の新しい段階に比定されよう。なお、7・8は加曾利E 3式の古い段階に含まれる。

111号住居址（第82図）

位置 C-34グリッド杭を中心に位置する。北側約4mにほぼ同時期の113号住居址がある。

形状 壁は検出できなかったが、柱穴の配置から径8m内外の円形を呈すると思われる。

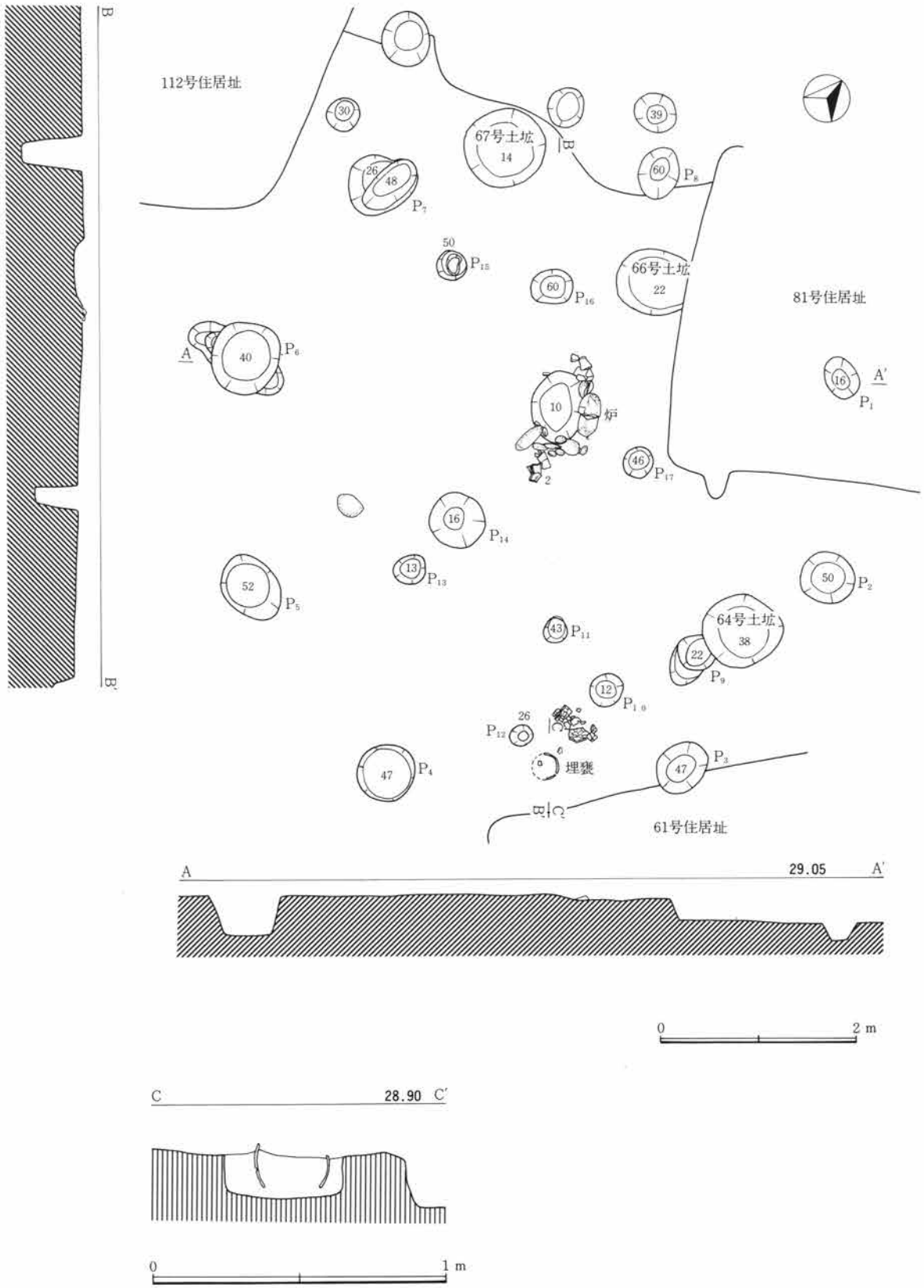
壁 未検出。

床面 平坦ではあるが、軟弱である。

柱穴 ピットは17本を検出した。このうち、主柱穴はP₁～P₈の8本である。

炉 石囲い炉で、住居址中央よりやや奥壁（北西）寄りに位置する。長軸1m・短軸0.8m内外の、主軸方向に長軸をもつ長方形を呈すると思われるが、西側と南側の炉石は抜き取られている。炉は大小の円

III 検出された遺構と遺物

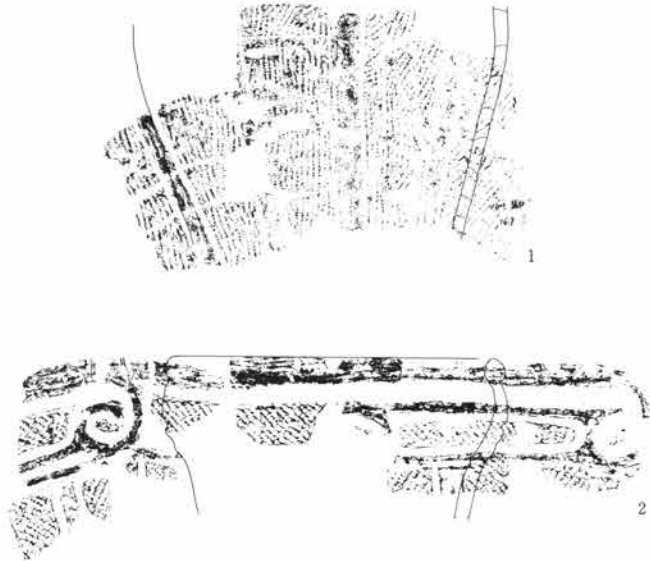


第82図 111号住居址

礫・石器で組まれており、炉内は若干掘り込まれている。炉石のなかには、加熱で破碎したものも認められるが、焼土は検出されていない。

埋甕 炉の東側長軸線上3mに位置する。深鉢の胴下半部の約半周分が、正位に埋設されていた。

重複 北側および東側の一部を古墳時代の住居址により切られている。また、西側で52号・70号土壇、112号住居址と重複しているが、切り合い関係は不明である。



第83図 111号住居址出土遺物（1）

遺物の出土状態

炉のすぐ東側床面から深鉢の胴上半部（第83図2）が、また埋甕のすぐ北西側床

面から深鉢の胴部破片が、ややまとまって出土した。また、炉の南2mの床面から大型の円礫が1個出土している。覆土中からは土器小破片が少量出土したのみである。なお、磨石3点・打製石斧1点・多孔石1点が炉石に使用されていた。

出土遺物（第83図・第84図）

1は埋甕に使用されていた土器である。胴部が弱く張る深鉢で、胴下半部の約 $\frac{1}{2}$ が出土した。文様は磨消し縄文による懸垂文が施されている。地文は縄文RLの縦位施文である。

2はキャリパー状を呈する深鉢で、胴上半部の $\frac{3}{4}$ が出土した。文様は、口縁部を隆帯と沈線による渦巻文と楕円区画文で4単位に構成し、胴部は磨消し縄文帯による懸垂文で構成される。地文は縄文RLで、口縁部には横位、胴部には縦位に施文している。

3は基部に抉れの入る無茎石鏃で、両脚部を欠損している。調整はやや粗く、中央部分に一次剝離面が残っている。

4は撥形を呈する打製石斧である。

5～7は磨石である。5・7は平坦面の片面にわずかな敲打痕を残し、7は両平坦面に研磨面が認められるが、3は摩耗しているため確認できない。6は両平坦面および両側縁部に顕著な敲打痕が認められる。

8は多孔石である。長径18cmの扁平な円礫を使用し、平坦面の片面中央に錐揉み状の凹穴が1個付けられている。凹穴の周辺には敲打痕が認められ、また平坦面全体に研磨が施されている。周辺部に欠損およびヒビ割れが認められるが、これは加熱によるものであろう。

なお、4～8は炉石に使用されていた石器である。また、これらの他に土製円盤が3点出土している。

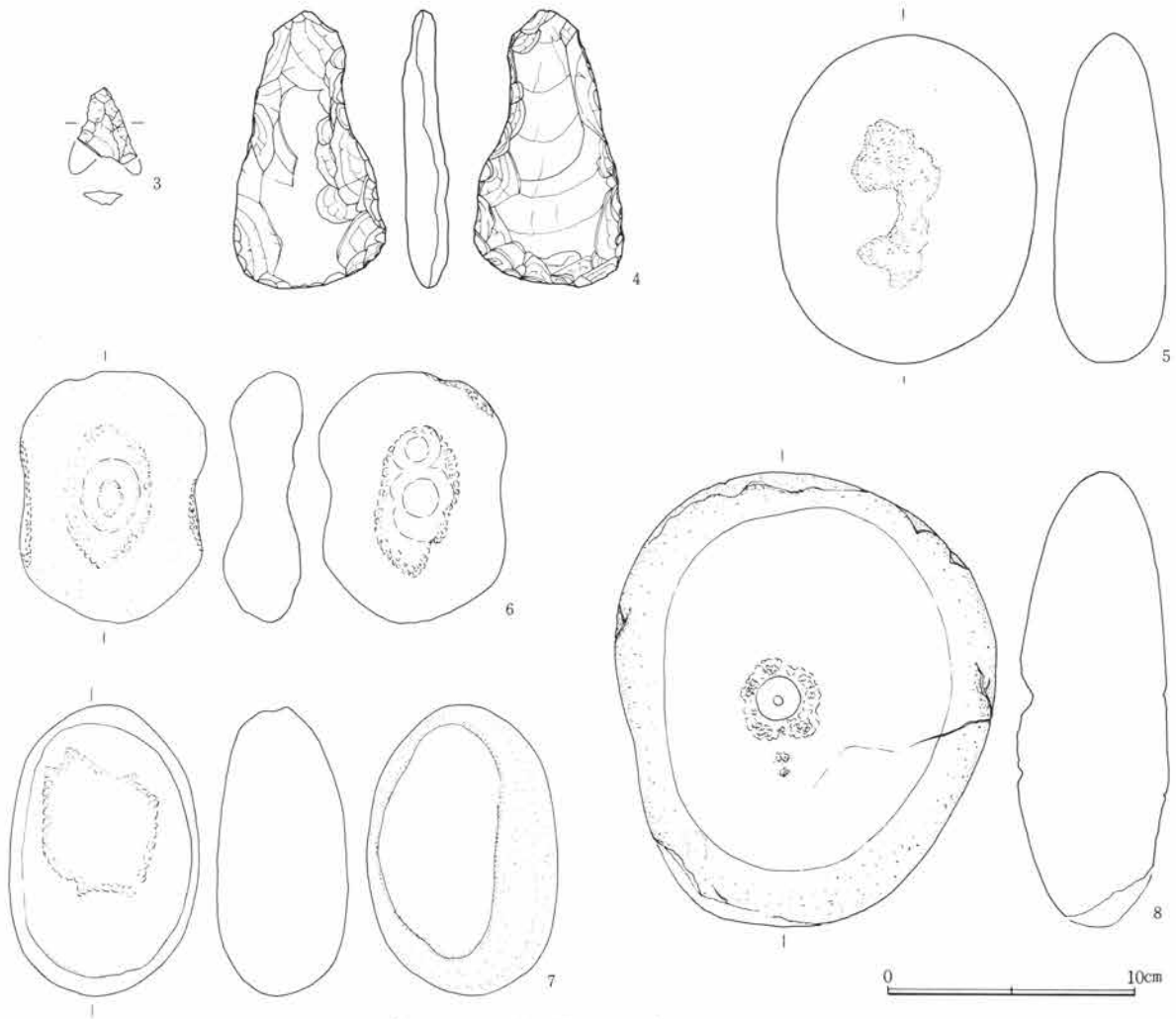
所見

本住居址の時期は、出土土器から加曾利E3式の段階に比定されよう。

113号住居址（第85図）

位置 D-32グリッド。南側約4mに111号住居址がある。

III 検出された遺構と遺物



第84図 111号住居址出土遺物(2)(3は2/3)

形状 隅丸方形を呈すると思われる。

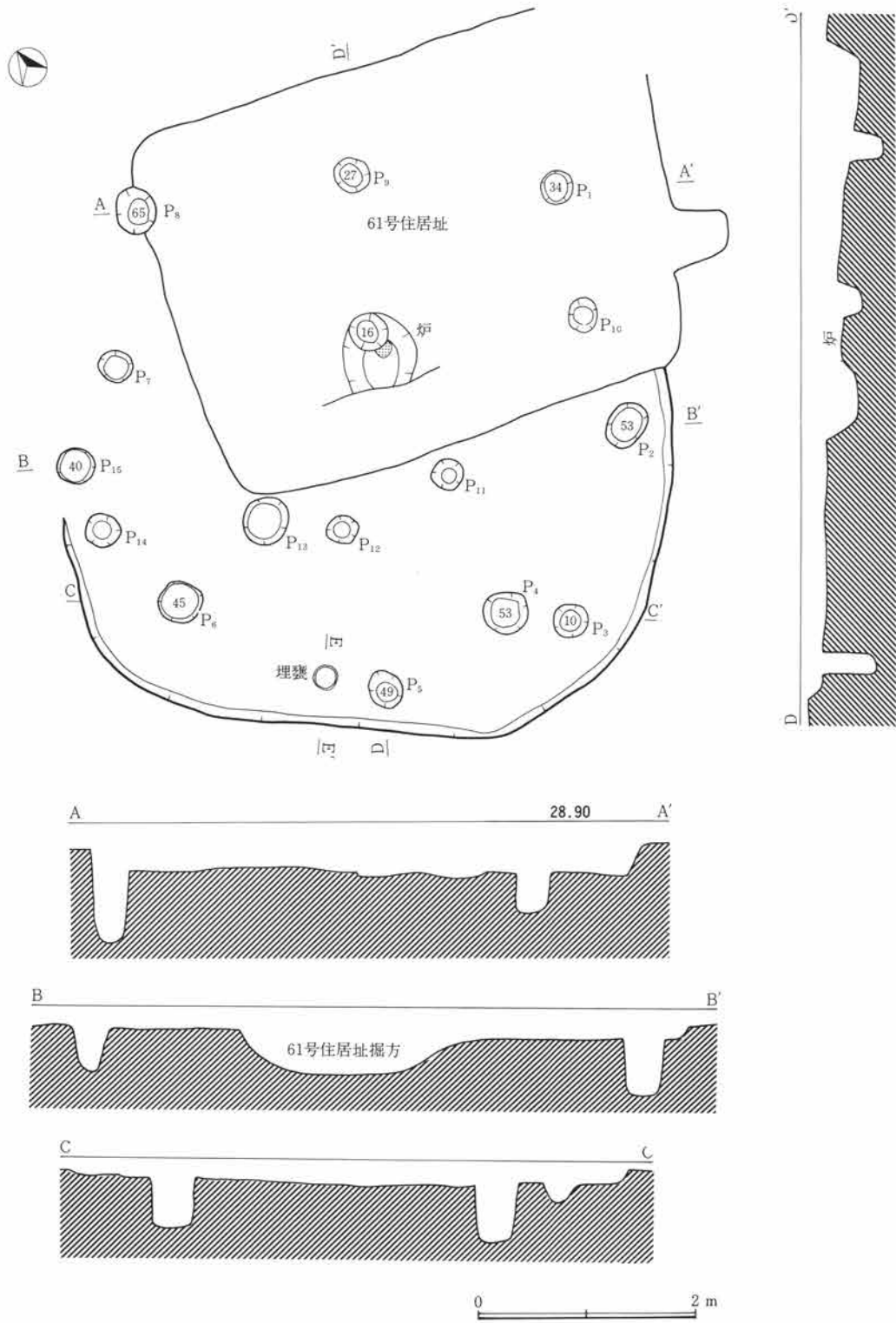
壁 南壁と東壁の一部を検出したが、他は不明である。壁高は南壁で16cmである。

床面 ほぼ平坦な面を呈するが、全体に軟弱である。

柱穴 合計16本のピットが検出された。主柱穴は $P_1-P_4-P_6-P_8$ の4本、あるいはそれに $P_2 \cdot P_7$ を加えた6本が想定される。

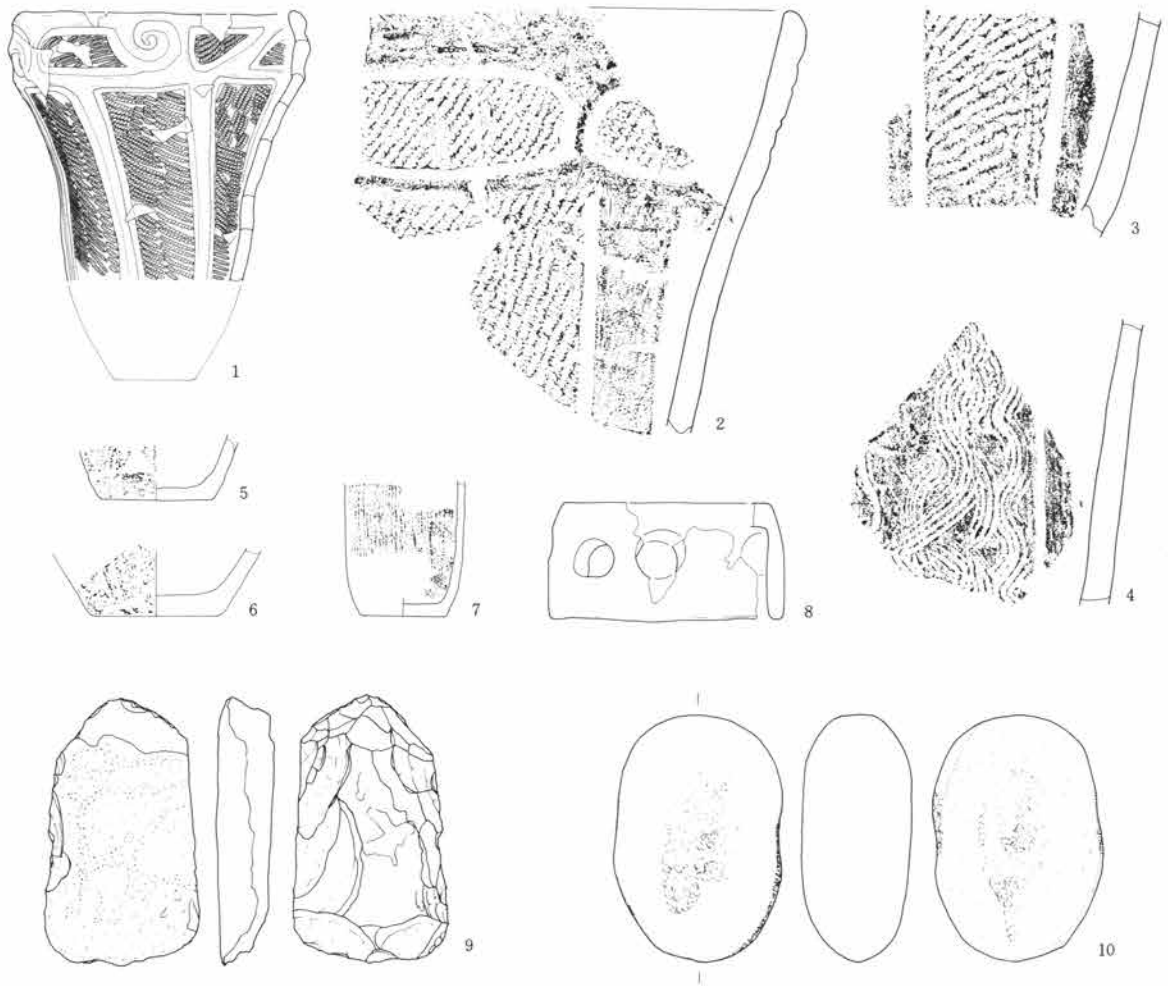
炉 柱穴列の中央よりやや北東寄りに位置する。古墳時代の61号住居址床面下に検出され、南側の一部を同住居址の掘り方により切られている。検出された炉は短軸70cmの楕円形状にわずかに掘り込まれた落ち込みで、落ち込み内中央よりやや北東寄りに、直径15cmの円形の範囲で焼土粒・炭火物粒がわずかに検出された。落ち込みは床面より15cmほど低いレベルで検出されており、地床炉とは考えにくい。おそらく落ち込みは炉の掘り方底面に相当し、円形の焼土・炭火物粒は炉内埋甕の痕と考えられる。また、掘り方の規模から石囲い炉が想定される。以上のことから、本住居址の炉は石囲い埋甕炉と考えられる。なお、炉は P_{16} により切られている。

埋甕 炉の南西2.5mに位置する。南壁から25cmほど内側である。埋甕には胴下半部を打ち欠いた深鉢が使用され、炉寄りにやや傾むいた状態で正位に埋設されている。また、埋甕内充填土は下半が地山と黒灰



第85図 113号住居址

III 検出された遺構と遺物



第86図 113号住居址出土遺物（1・5～8は1/6）

0 10cm

色土の混土で、上半が混土をブロック状に含む黒灰色土である。

重複 北側の約半分を古墳時代の61号住居址に切られている。

遺物の出土状態

覆土中から少量の土器破片と石器が出土した。床面からは、埋甕の北東約1mから深鉢の破片（第86図2～4）が出土したのみである。なお、P₁₃の底面から磨石（第86図10）が1点出土している。

出土遺物（第86図）

1は埋甕に使用されていた土器である。弱いキャリパー状を呈する深鉢で、胴下半を欠損する。文様は口縁部を隆帯と沈線による渦巻文と楕円状・三角形の区画文で4単位に構成し、胴部には磨消し縄文帯による懸垂文が8単位施される。口縁部文様帯は隆帯で区画され、胴部縄文部分を区画する沈線はその隆帯下で連結している。地文はLRの縄文で、口縁部には横位、胴部には縦位に施されている。

2・3は同一個体である。口縁部が直線的に開く深鉢の破片で、口縁部は沈線による渦巻文を簡略化した円形文と楕円区画文で構成し、胴部に幅広の磨消し縄文帯による懸垂文を施している。地文は0段多条RLの縄文で、口縁部、胴部ともに縦位に施されている。

4は沈線で区画された幅広の無文帯を垂下させた深鉢の胴部破片である。地文は条線の波状施文で、左端に波状沈線による懸垂文がみられる。

5・6は磨消し縄文帯による懸垂文が施された、深鉢の胴下半部破片である。地文は5が縄文RL、6が縄文LRである。

7は円筒状を呈する、深鉢の胴下半部である。全面に縦位の条線が施されている。

8は台形土器で、約 $\frac{1}{2}$ が出土した。体部中程に円孔が2個1対づつ施されている。

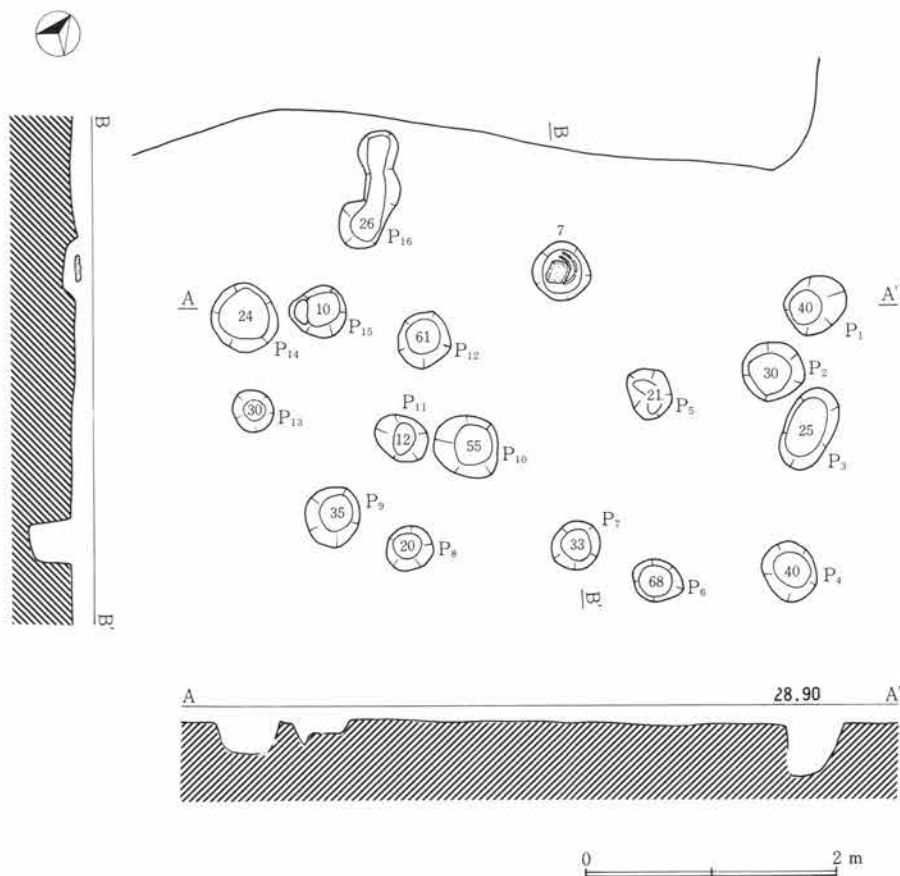
9は磨製石斧の欠損品を再調整した打製石斧である。10は磨石で、両平坦面および両側縁に集合打痕が認められる。なお、石器はこれらの他に剥片石器2点が出土している。

所見

本住居址の時期は、出土遺物から加曽利E3式の段階に比定される。

118号住居址 (第87図)

C-38グリッドに位置する。古墳時代の74号住居址の南側で合計18個のピットが検出され、そのうちの中央に位置する浅いピット内に深鉢の胴部約半周分が2重に重なった状態で検出された。また、その上面には板状の礫が、蓋をしたように置かれていた。内部に焼土は認められず、また上面に石蓋状の礫が伴うことから埋甕と考えられる。ピットはそれを取りまくように認められ、深さ30cm以上のものも9個あるが、柱穴配置としての規則性はみられない。なお、土器は洗浄時に崩れてしまい、図化不可能となった。時期は加曽利E3式期である。



第87図 118号住居址

III 検出された遺構と遺物

2) 埋設土器

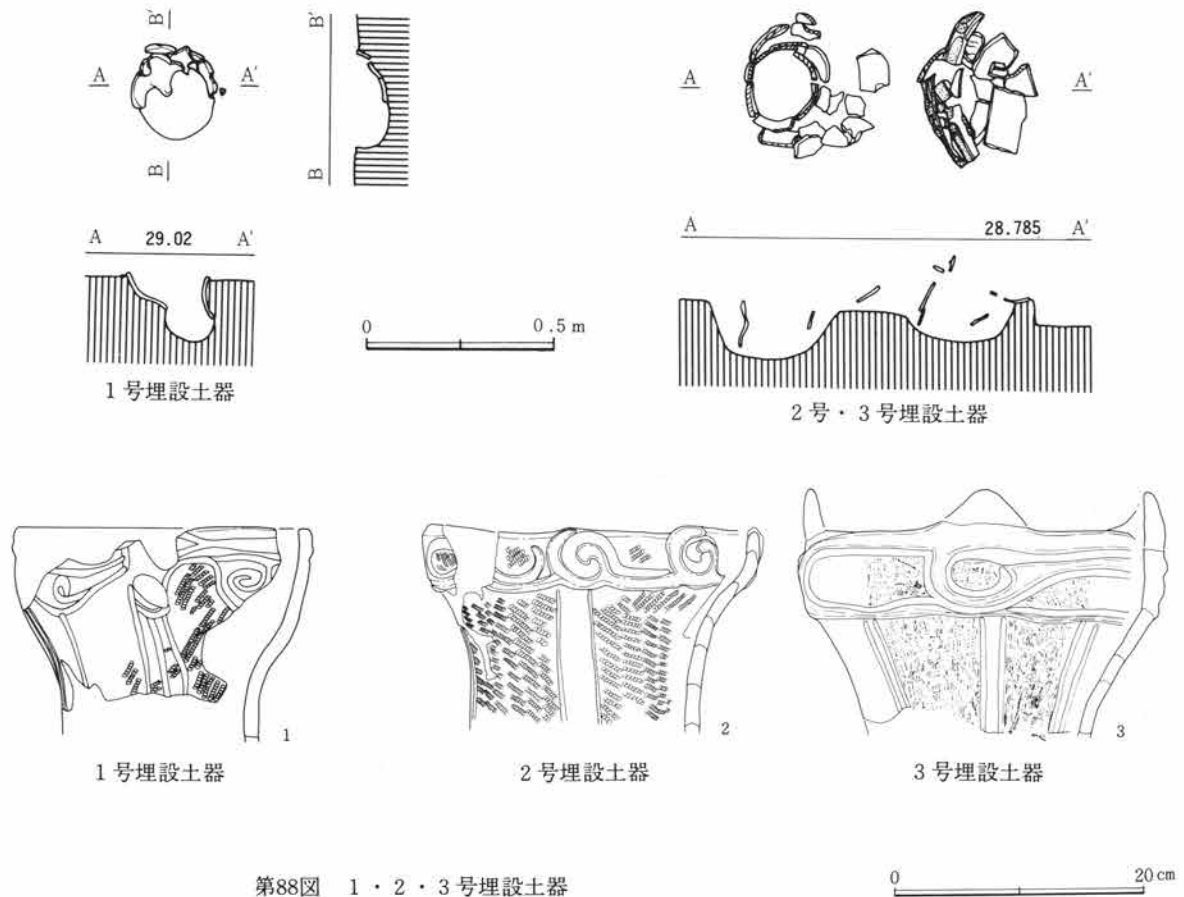
遺構外に単独で埋設された土器は6基検出された。いずれも深鉢形土器を使用しており、胴下半部を欠損したもの5基、胴上半と底部を欠損したもの1基があり、全て正位で埋設されていた。分布は、2区の中央付近と3区の北西端部に認められ、同期の遺構分布と一致している。

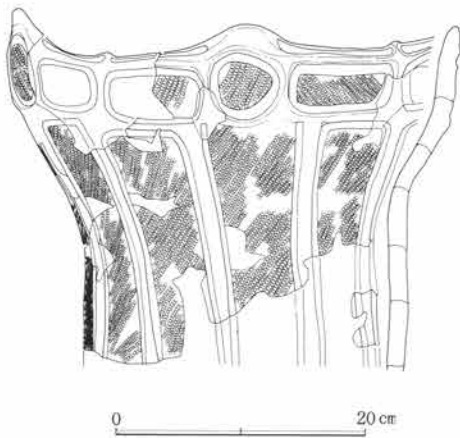
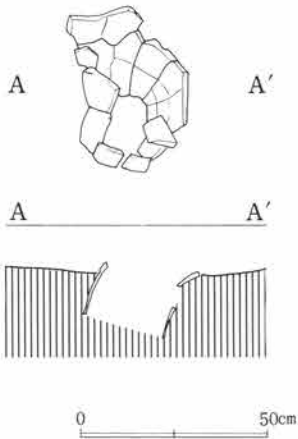
1号埋設土器 (第88図)

B-22グリッドに位置し、周辺を20号・21号・24号・108号・110号住居址により取り囲まれている。検出面は北側に近接する110号住居址炉面とほぼ同レベルである。埋設されていた土器は、胴部中程が括れ、口縁部が内湾しながら立ち上がる深鉢で、胴上半部の約半分が使用されていた。欠損状況は、胴下半部を一線上に打ち欠いたものとは異なり、口縁部から胴部にかけて不規則な欠損状態を呈している。文様は、口縁部を渦巻文を伴う弧状の文様で構成し、胴部には渦巻文下に3本の沈線による懸垂文が施される。地文は縄文RLの縦位施文で、沈線間の磨消しは認められない。加曽利E3式の古い段階に比定されよう。口縁部文様は隆帯を伴うものと思われるが、強い加熱で器面は著しく荒れており、不鮮明な部分が多い。なお、焼土等は検出されていない。

2号・3号埋設土器 (第88図、第68図参照)

C-23グリッド、21号住居址炉の北2mに位置する。検出面は21号住居址炉よりもやや低い。2個体は南北に約15cmの間隔をもって埋設されており、埋設レベルは3号のほうが5cmほど高い。また、相方とも北側からの圧力で上半部が傾いている。使用されていた土器は、2点とも口縁部が弱く内湾しながら開く深鉢で胴





第89図 4号埋設土器

沈線をめぐらし、中央につまみあげたような小突起が付けられる。口縁部は隆帯による波頂下の円形文とその間の2単位の楕円区画文で構成し、胴部に磨消し縄文による懸垂文を13単位施している。なお、胴部縄文施文部を区画する沈線は上端で連結している。地文は縄文RLで、口縁部には横位、胴部には縦位に施されるが、口縁部では縦位施文の部分もある。加曾利E3式土器である。なお、土器に加熱を受けた痕跡はない。

5号埋設土器 (第90図、P L24-7)

A-31グリッドに位置する。本埋設土器は6号埋設土器とともにFブロック土坑群中にあり、110号土坑を切って埋設されている。土器は口縁部がやや内湾しながら開く深鉢の胴下半部を打ち欠いたものを使用している。文様は、口縁部を隆帯と沈線による渦巻文と楕円区画文で4単位の構成し、胴部には磨消し縄文による懸垂文と波状懸垂沈線を交互に9単位施している。地文は複節縄文RLRで、口縁部には横位、胴部には縦位に施している。加曾利E3式土器である。なお、上半部は強い加熱を受けて内外面とも白色化し、著しく荒れているため、口縁部の一部等に接合不可能な部分がある。焼土は検出されていない。

6号埋設土器 (第90図、P L24-8)

A-31グリッドの南端に位置する。前述のようにFブロック土坑群中にあり、111号土坑を切って埋設されている。3号埋設土器の南東2mの位置にあり、埋設レベルは5号とほぼ同一である。土器は深鉢の胴上半部および底部を打ち欠いたものを使用している。胴部には、縄文RLの縦位施文を地文に、磨消し縄文による懸垂文が10単位施されている。加曾利E3式土器である。なお、加熱は認められない。

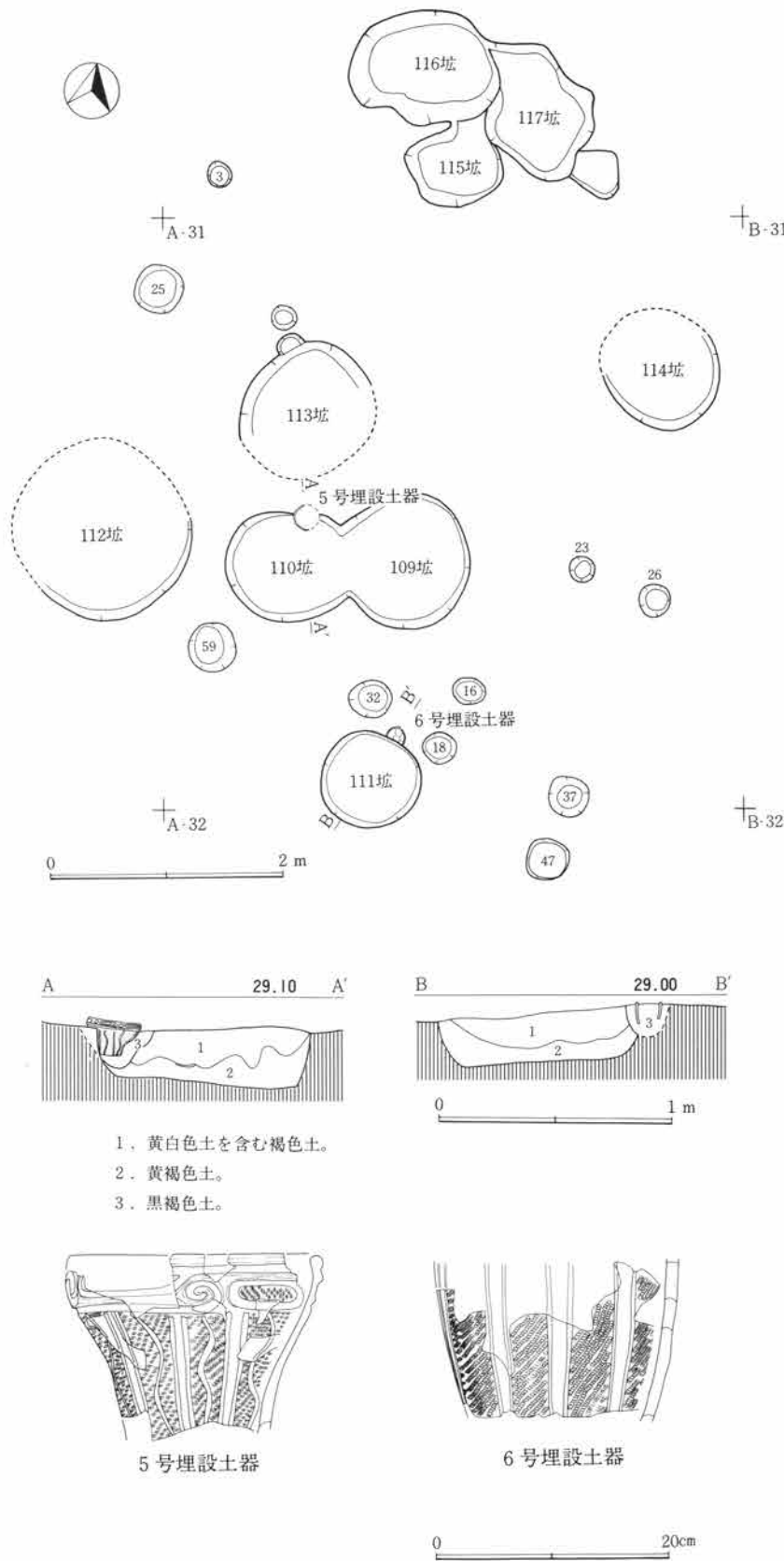
下半部を打ち欠かれている。2号は口縁部に隆帯と沈線による渦巻文を10単位(口縁の一部を欠損しており、現存5単位)施し、胴部に幅広の磨消し縄文帯を5単位垂下させている。口縁部文様帯下端は隆帯で区画されるが、上端には区画がみられず、渦巻文の隆帯は立ち切れとなっている。地文はLRの縄文で、口縁部には横位、胴部には縦位に施されている。3は口縁に舌状の突起が4個付くが、欠損している。文様は、口縁部を隆帯と沈線による渦巻文と楕円状の区画文で4単位の構成し、胴部には幅の狭い磨消し縄文帯を8単位垂下させている。地文はRの燃糸文である。

いずれも加曾利E3式土器である。切り合い関係は不明であるが、埋設レベルの高い3号のほうが新しいと考えられる。土器は加熱を受けておらず、焼土等も検出されていない。なお、周辺では東側1mから大型石皿が出土している。

4号埋設土器 (第89図)

D-25グリッド北隅に位置する。西側に22号住居址が近接しており、同住居址の炉からほぼ4mの位置にある。検出面は22号住居址炉面よりやや低い。正位に埋設されているが、南側からの圧力で押しつぶされた状態で検出された。使用されていた土器は、胴上半部が弱く括れ、口縁部が直立するやや大型の深鉢で、胴下半部を打ち欠かれている。胴上半部も欠落部分が多い。土器は4単位の波状口縁を呈し、波頂間口唇に

III 検出された遺構と遺物



第90図 5・6号埋設土器

所見

検出された埋設土器は全て加曾利E3式期のものであり、使用されていた土器は一般的な深鉢形土器で、胴下半分を打ち欠かれたものが多い。このような特徴は、同時期の住居内埋甕や炉体土器と一致しており、また分布も同時期の住居址分布と同傾向を示している。

ところで、本調査区では、特に2区においては住居址覆土と地山の識別が困難であり、大半の住居址は遺物の集中出土、あるいは炉の検出手がかりとして調査を進めてきたが、壁を検出できなかった住居址も多い。ことに1～4号埋設土器が位置する2区中央部分では、半数以上の住居址が壁未検出である。埋設土器はこれら住居址とともに検出された。すなわち、1号と110号住居址の炉、2・3号と21号住居址の炉、4号と22号住居址の炉は、各々同レベルかあるいは埋設土器のほうが若干低いレベルに位置する。当然のことながら、各住居址は本来壁が存在するのであり、当時の生活面は少なくとも床面より30cm以上のレベルにあったと考えられる。

以上のことから、5・6号も含めて、本遺跡検出の埋設土器はいわゆる屋外埋設土器（屋外埋甕）とは異なり、住

居址の施設として考えるのが最も妥当性がある。1号・5号は強く加熱を受けていることから、埋甕炉と思われる。なお、6号は5号の南東約2mに位置し、しかもほぼ同レベルにあることから、5号を炉とする住居址の埋甕とも考えられる。加曽利E3式期の住居址で南東に埋甕をもつ例は、25号・111号住居址がある。また、2号・3号も住居内埋甕と考えてよかろう。4号は加熱を受けておらず、また埋甕としてはやや大型である。あるいは土壇に伴うものかもしれないが、調査が十分でないためここでの結論は保留しておきたい。

3) 土 壇

今回の調査で検出された土壇総数は117基である。このうち、前期の土壇は5基、後期の土壇は9基であった。ここでは、それ以外の103基を中期のなかで扱うことにしたい。出土土器から中期の土壇と判定できるものは3～4割程度にすぎないが、土壇は数基～10数基づつまとまってブロック状に存在しており、その分布のあり方は住居址分布と密接に関連している。ブロックは10ヶ所認められ、各々北側からA～Jブロックとした(第7図参照)。以下ブロック毎に報告していき、その後に個別で存在するものについて扱うことにする。出土遺物については主要なものを取り上げた。なお、形態分類については下記の基準で行い、出土遺物・所属時期等とともに表-1(114ページ)に記載した。

Aブロック(第91図)

2区の北側、住居址群の外縁部に位置する。8・9・16・28・32・34号土壇の6基で構成され、比較的それぞれに間隔をおいて位置している。16・32・34号土壇は重複関係にある。形態は小～特大まで認められ、他のブロックに比べて大型のものが多い。また、隅丸形状のものは全体で4基認められたが、そのうち2基が本ブロックにある(9号・16号)。時期は阿玉台II～III式段階が主体となっている。なかでも多量の遺物を出土した9号・28号土壇について詳述しておきたい。

9号土壇(第91図・第92図)

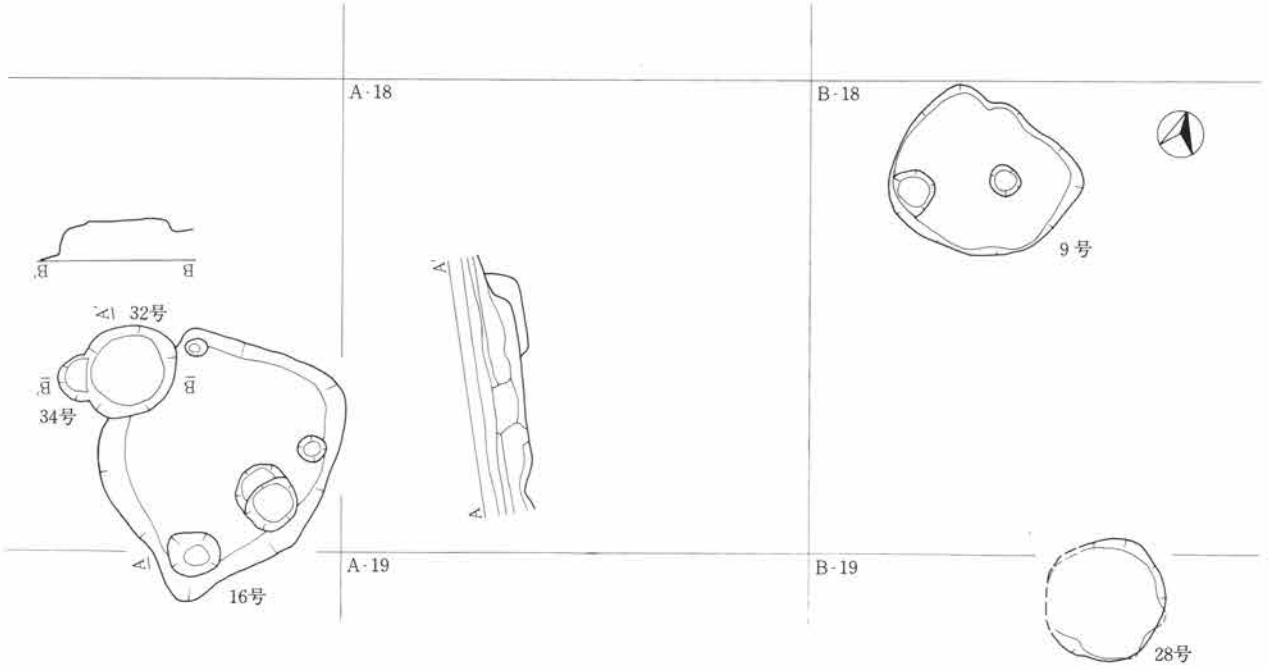
隅丸形状を呈する大型の土壇である。大きさに比べて深さは浅く、壁は傾斜をもって立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、中央部やや東寄りに直径25cm・深さ40cmのピット、および北壁際に直径32cm・深さ4cmの浅い窪みが検出された。遺物は小型深鉢・小型鉢・台付鉢・小型深鉢胴下半部各1点の他に、少量の土器破片と石鏃1点が出土している(第105図1～6)。小型土器3個体と台付鉢は土壇北半部の壁寄りをめぐるように配置されていた。小型鉢(1)と小型深鉢(3)は、東側と西側の対峙する位置にあり、ともに正位で内側へ傾いた状態で検出された。底面からはやや浮いている。小型深鉢胴下半部は横倒しの状態で、やはり底面からやや浮いて出土した。台付鉢(2)は底面に正位に置いた状態で出土した。石鏃は小型深鉢胴下半部のすぐ南側から同レベルで検出された。また、中央ピット周辺の覆土最下層に骨片が数点認められた。なお、本土

平面形による分類	}	円形 A (54)	断面形による分類	}	 Ia (0)
		楕円形 B (4)			 Ib (10)
		隅丸方形 C (4)			 Ic (78)
		不正形 D (18)			 II (8)
大きさによる分類	}	79cm以下 小 (10)	}		 III (3)
		80～119cm 中 (54)			
		120～169cm 大 (12)			
		170cm以上 特大 (4)			

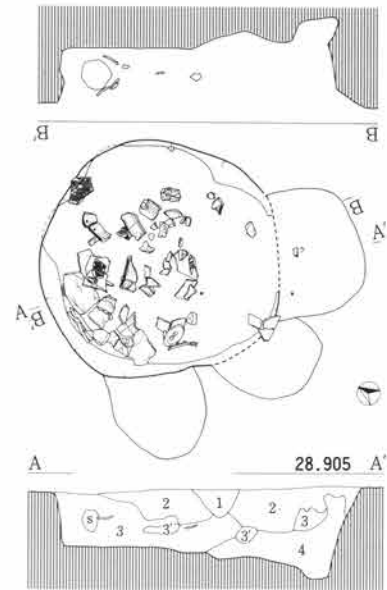
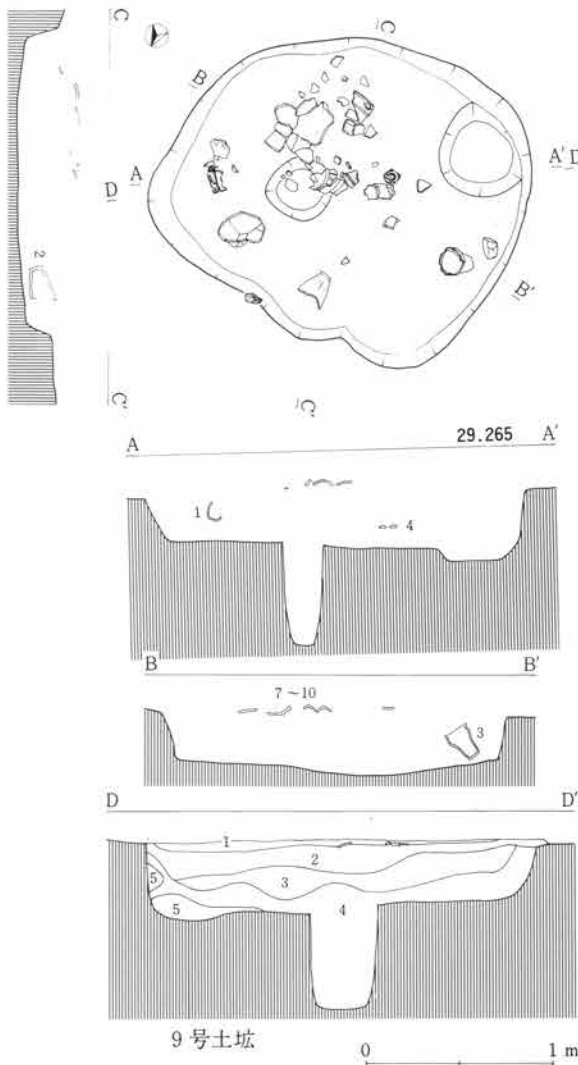
※ () は土壇数

土壇の形態分類基準

III 検出された遺構と遺物



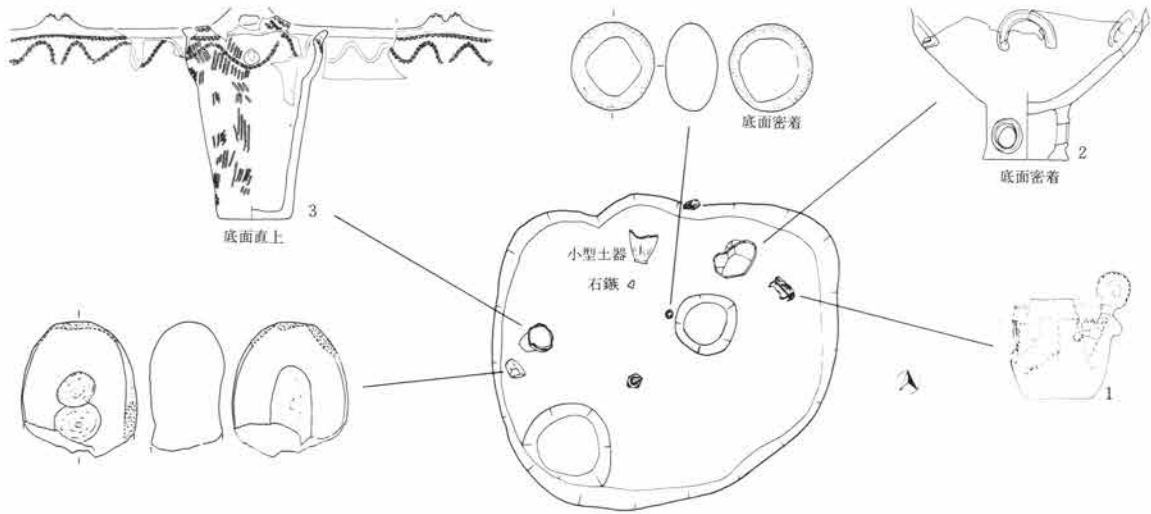
第91図 Aブロック土壇群 (1:80)



28号土壇

- 1. 茶褐色土、25号住居側溝の覆土。
- 2. 砂混り褐色土。
- 3. 灰褐色土。
- 3'. 地山ブロック。
- 4. 灰褐色土、粘性あり。

- 1. 白色粒子を多量に含む硬質黒色土。
- 2. 黒色土。
- 3. 黒灰色粘質土。
- 4. 黄白色粘質土を含む黒灰色粘質土。
- 5. 黄白色粘質土。



第92図 9号土坑出土遺物の位置

坑上面からは加曾利E 2式土器の深鉢大型破片が出土している。

本土坑は、出土遺物の特徴および出土状態、骨片の存在から、墓坑と思われる。

28号土坑 (第91図)

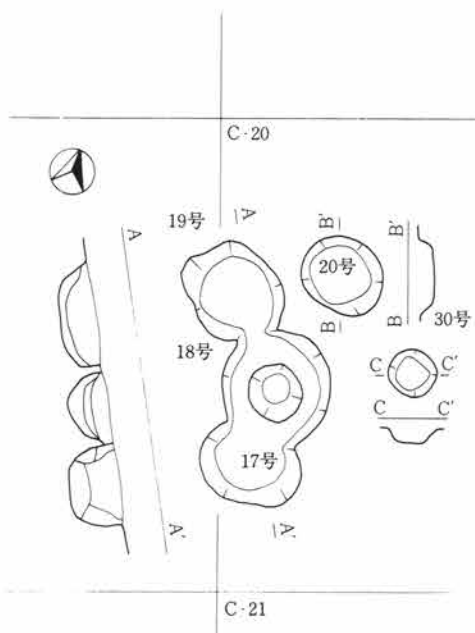
円形を呈する大型の土坑で、壁上面は崩落しているが本来はいわゆる袋状を呈するものと思われる。西側で25号住居址と重複しており、柱穴により壁と底面の一部を壊されている。遺物は胴下半部を欠損した深鉢と大型浅鉢の大型破片の他に、少量の土器破片と土製円盤1点・磨石1点・剝片石器1点・表皮を剥ぎ取られた大型礫が出土している。土器はいずれも破片の状態で、底面から5~10cmほど浮いて出土している。

Bブロック (第93図)

2区の北側、AブロックとCブロックの間に位置する。最も近い108号住居址まで約3mである。17・18・19・20・30号土坑の5基で構成され、いずれも近接している。17・18・19号土坑は重複関係にあり、17号土坑が18号土坑を切っている。形態はAlc 小が1基、Alb 中が1基、Alc 中が2基、Alc大が1基である。なお、18号は底面中央に直径57cmの浅い落込みが検出された。遺物はいずれも少量の土器小破片が出土したのみであり、時期判定の資料としては貧弱である。19号土坑からは、覆土上層から加曾利E 3式の新しい段階の土器片が数点出土している。

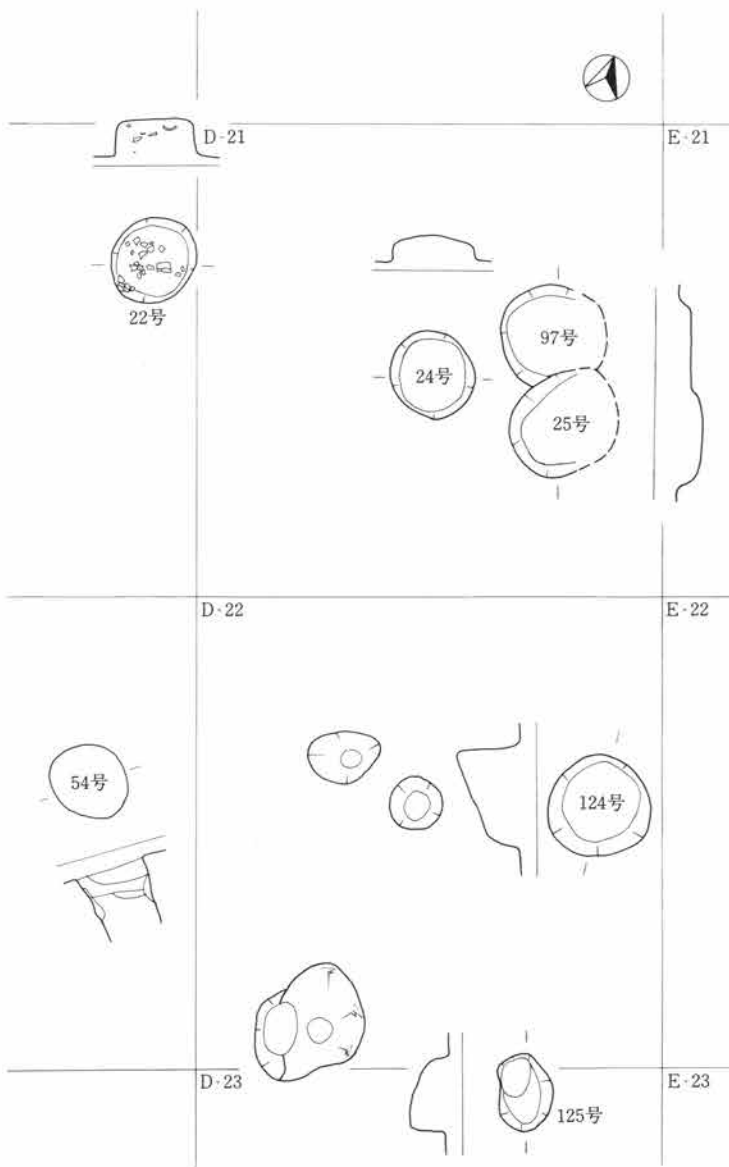
Cブロック (第94図)

D-21・22グリッドを中心に位置し、107号住居址を取り囲むように分布している。22・23・24・25・54・97・124・125号土坑の8基で構成され、北側ではブロック状に集中しているが、南側は分散的である。また、南側にはピット状

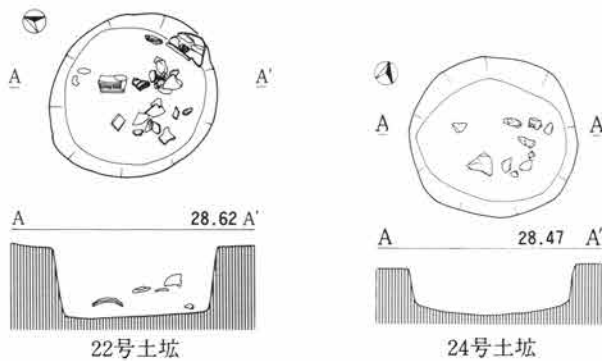


第93図 Bブロック土坑群 (1:80)

III 検出された遺構と遺物



第94図 Cブロック土坑群 (1:80)



の落込みが3個含まれている。形態はA1b小が1基、A1c中が3基、小が1基、Ic中が1基で、円形の中形が主体となっている。124・125号土坑は底面が傾斜しており、特異である。また124号土坑は小形であり、ピットとして扱ったほうが良いかもしれない。時期は、加曾利E1式期のものと加曾利E3・4式期のものがあり、前者はブロック状に集中する北側に、後者は分散的な南側に分布している。なお、54号土坑は湧水により、底面を確定することができなかった。

22号土坑 (第94図)

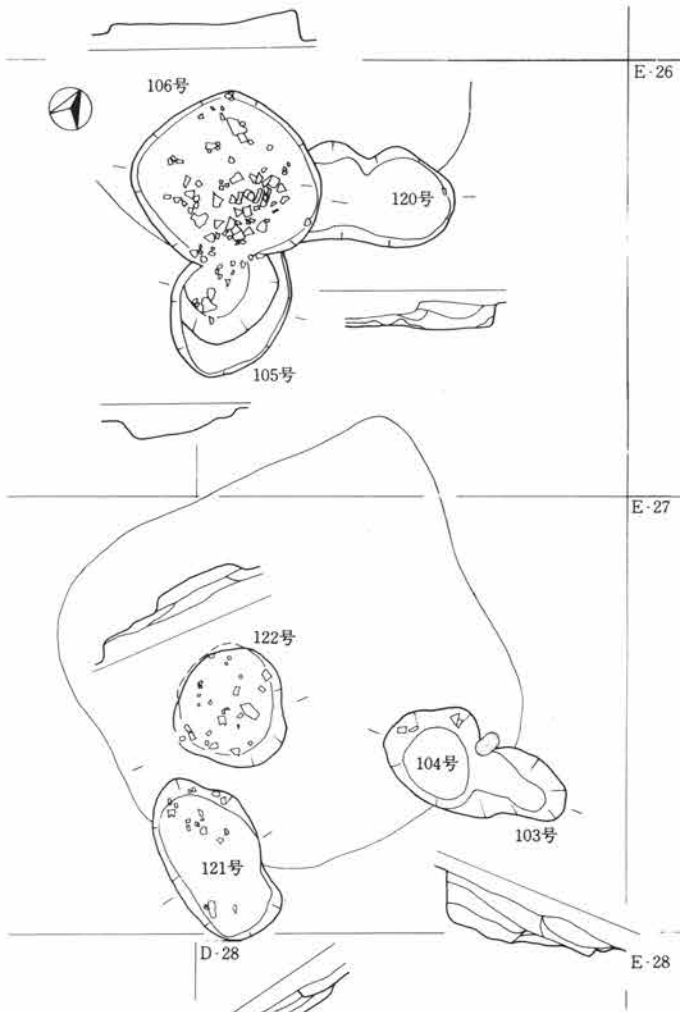
円形を呈する中形の土坑で、壁はほぼ直立する。遺物はミニチュア土器1点、浅鉢破片1点の他、少量の土器破片、礫等がある。ミニチュア土器は、浅鉢破片を内面を表にして壁に立て掛け、その上に置いたような状態で出土した。その他の遺物は、一括投棄された状態で底面からやや浮いて出土している。加曾利E1式期である。

24号土坑 (第94図)

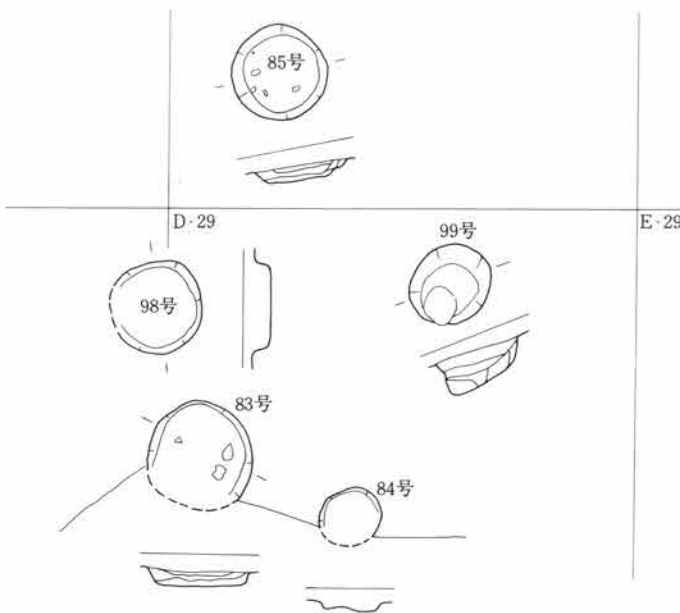
形態は22号土坑と同様である。遺物は底面直上から、少量の土器破片と打製石斧・磨石・礫が出土している。時期は加曾利E1式期である。

Dブロック (第95図)

2区の南側に位置し、119号・120号住居址と重複している。北側と南側に分かれてブロック状に存在するが、あえて一括した。103・104・105・106・120・121・122号土坑の7基で構成される。105・106号土坑および103・104号土坑は重複している。各々の構築順序は、105号→106号→119号住居址、120号→119号住居址、121・122号→120号住居址・104号→103号である。104号土坑と120号住居址の切り



第95図 Dブロック土坑群



第96図 Eブロック土坑群 (1:80)

合いは不明である。形態は A1c 中が 1 基、A1c 大が 2 基、C1c 特大が 1 基、他 3 基があり、大型土坑が多い。時期は、阿玉台 II 式期から加曾利 E 2 式期までが認められ、重複する住居址より古い阿玉台 II 式～加曾利 E 1 式期が主体となっている。出土土器から見た土坑の構築順序は、105号→121・122号→106・120号→104号→103号となり、継続性が認められる。また、105・106・120・121・122号土坑からは多量の土器破片が、いずれも底面からやや浮いた状態で出土している。特に106号土坑からは、深鉢 6 個体・浅鉢 2 個体の大型破片が、一括投棄された状態で床面直上から出土している。

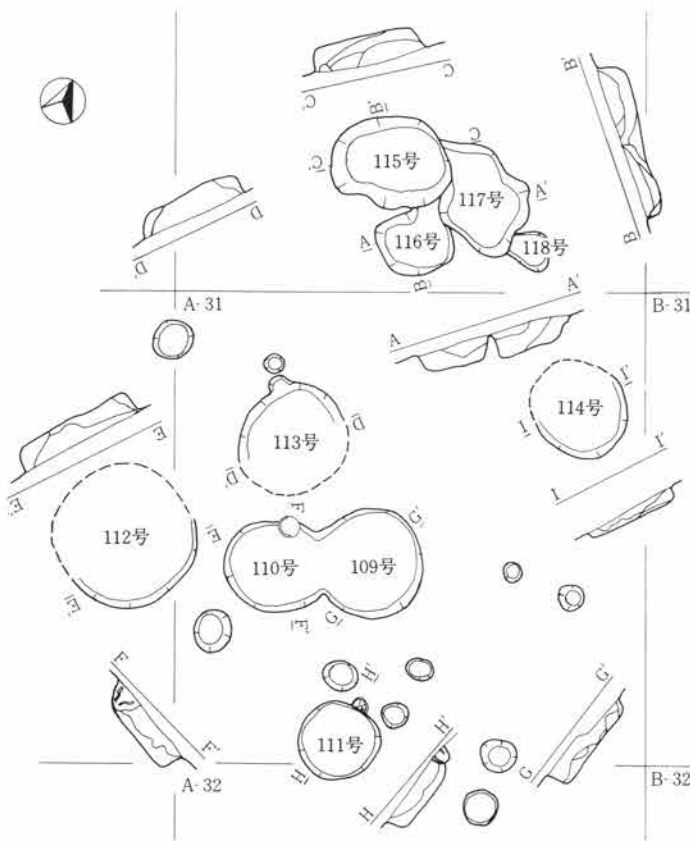
Eブロック (第96図)

D-29グリッドを中心に位置する。2区と3区の間で占拠し、北側約 3m に D ブロック、南側約 6m に G ブロックがある。33・84・85・98・99号土坑の 5 基で構成され、重複するものはない。形態は A1c 中が 4 基、他 1 基である。時期は、83号が阿玉台 IV 式期、85号が加曾利 E 1 式期、84号が加曾利 E 2 式期、他は不明である。84号・85号土坑は少量の遺物が覆土下層から出土している。83号土坑は底面から覆土下層に亘って、比較的少量の遺物が出土している。

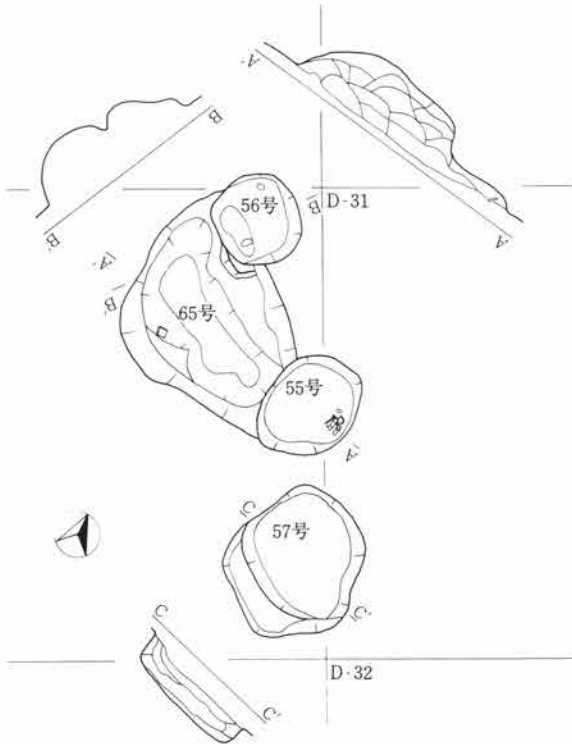
Fブロック (第97図)

A-31グリッドを中心に位置する。東側に H ブロックが近接している。109～118号土坑の 10 基で構成され、集中性が認められる。109・110号、115～118号は重複している。また、ブロック中には住居の可能性が強い 5号・6号埋設土器と、ピット 11 個が含まれている。形態は、A1c 中が 4 基、A1c 大が 2 基、不定形なもの 4 基である。不定形な 115～118号は互いに重複しており、特異なあり方を示している。時期は加曾利 E 1 式期が 4 基、加曾利 E 2 式期 1 基であ

III 検出された遺構と遺物



第97図 Fブロック土坑群 (1:80)



第98図 Gブロック土坑群 (1:80)

り、加曾利E 1式期が主体となっている。115号土坑からは多量の土器破片が出土したが、他は数点ずつである。

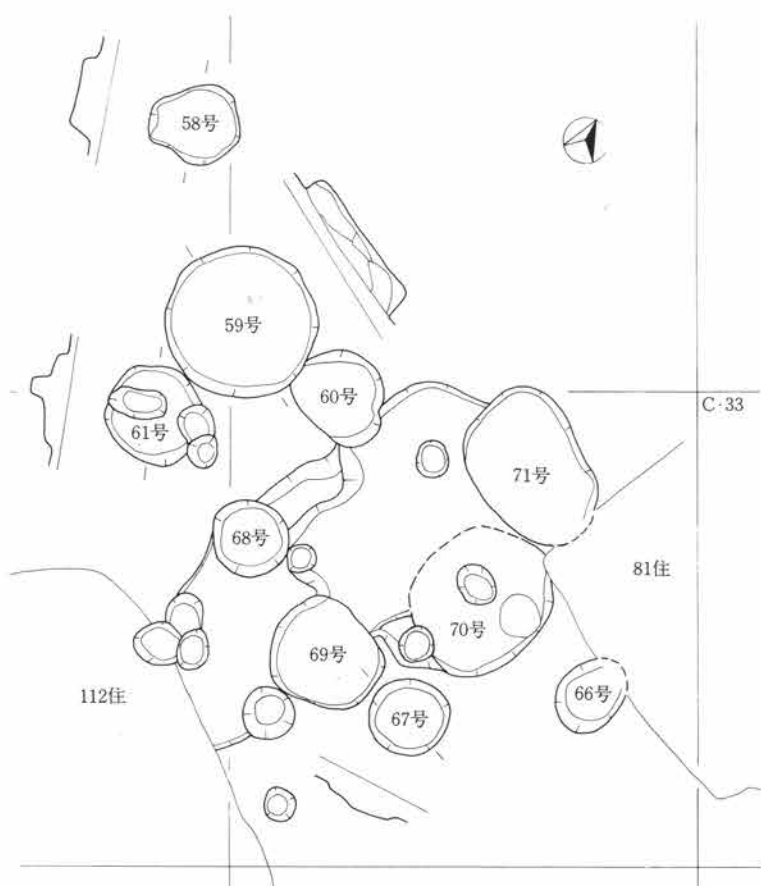
Gブロック (第98図)

C-31グリッド東端に位置する。55・56・57・65号土坑の4基で構成される小群で、集中性がある。55号・56号は65号と重複している。55号土坑はA1c中に属す。遺物は、東壁下から浅鉢の大型破片が、底面からやや浮いた状態で出土している。56号土坑は平面形が隅丸形状を呈するが、底面は南側が深く窪んでいる。遺物は、北側の底面および南側の窪んだ底面から、磨石が1個ずつ出土している。57号土坑はA1c大に属す。平面形は若干歪んでおり、南側底面に段が認められる。遺物は、少量の土器破片が覆土中から出土している。65は平面形が楕円形状を呈し、断面形は中程にテラスをもった2段構造となっている。形態的には陥穴に類似するが、湧水のため底面の精査は不可能であった。また、セクションでは数個の落ち込みの重複という所見が得られているが、断定しがたい。遺物は阿玉台Ib式～加曾利E 4式土器の破片が少量出土している。

Hブロック (第99図)

B-33グリッド杭を中心に位置する。南側に112号住居址が近接しており、東側で111号住居址および古墳時代の81号住居址と一部重複する。また、西北にFブロックが近接している。58～61・66～71号土坑の10基で構成され、ブロック中には12個のピットと前期の52号土坑がある。重複するものは59・60号のみであるが、集中性が著しい。形態は、A1c小が1基、A1c中が3基、A1c大が2基、AII小が1基、他3基であり、バラエティ

1 縄文時代の遺構と遺物



第99図 Hブロック土坑群 (1:80)

に富んでいる。遺物は、60号土坑から小型深鉢の完形品1点、61号・66号土坑から少量の土器破片が出土したのみである。時期は3基とも加曽利E1式期である。なお、59号土坑は本遺跡で検出された円形大型土坑の典型例である。

60号土坑 (第99図下)

西側で59号土坑と、東側で52号土坑とわずかに重複するが、切り合い関係は不明である。円形の袋状を呈する土坑であるが、上端部はなかり崩落している。底面は平坦で、平面形は円形を呈する。遺物は、小型深鉢の完形品が底面上25cmから横倒しの状態で出土している。

Iブロック (第100図)

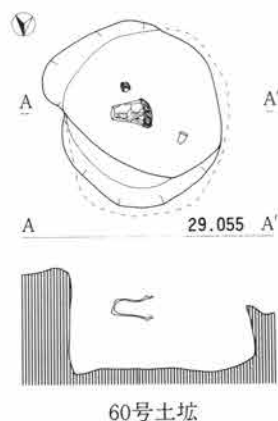
3区中期住居群の東側外縁部に位置する。南側の一部で118号住居址と重複する。72～82・91・94・119号土坑の16基で構成され、D-37グリッドを取り

囲むように弧状に分布している。形態は不定形なものが多く、定形的なものは72・73・74・76号土坑の4基のみで、AⅠc中が3基、AⅡ中が1基である。遺物は、73・74・77・78・79・81・82号土坑から少量の土器破片が出土している。また、形態は不明であるが、119号土坑からは多量の土器破片が出土している。時期は、加曽利E1式期が3基、加曽利E3式期が1基、加曽利E期が3基である。77・78・79号土坑、81・82号土坑は重複している。覆土の切り合い関係では、78号土坑を77・79号土坑が切っており、81号土坑を82号土坑が切っている。

本ブロックは特異な分布状況を示しており、他のブロックとは異質な性格を想定させるが、いずれにしても不定形なもの、時期不明なものが大半を占めており、多くを語ることはできない。

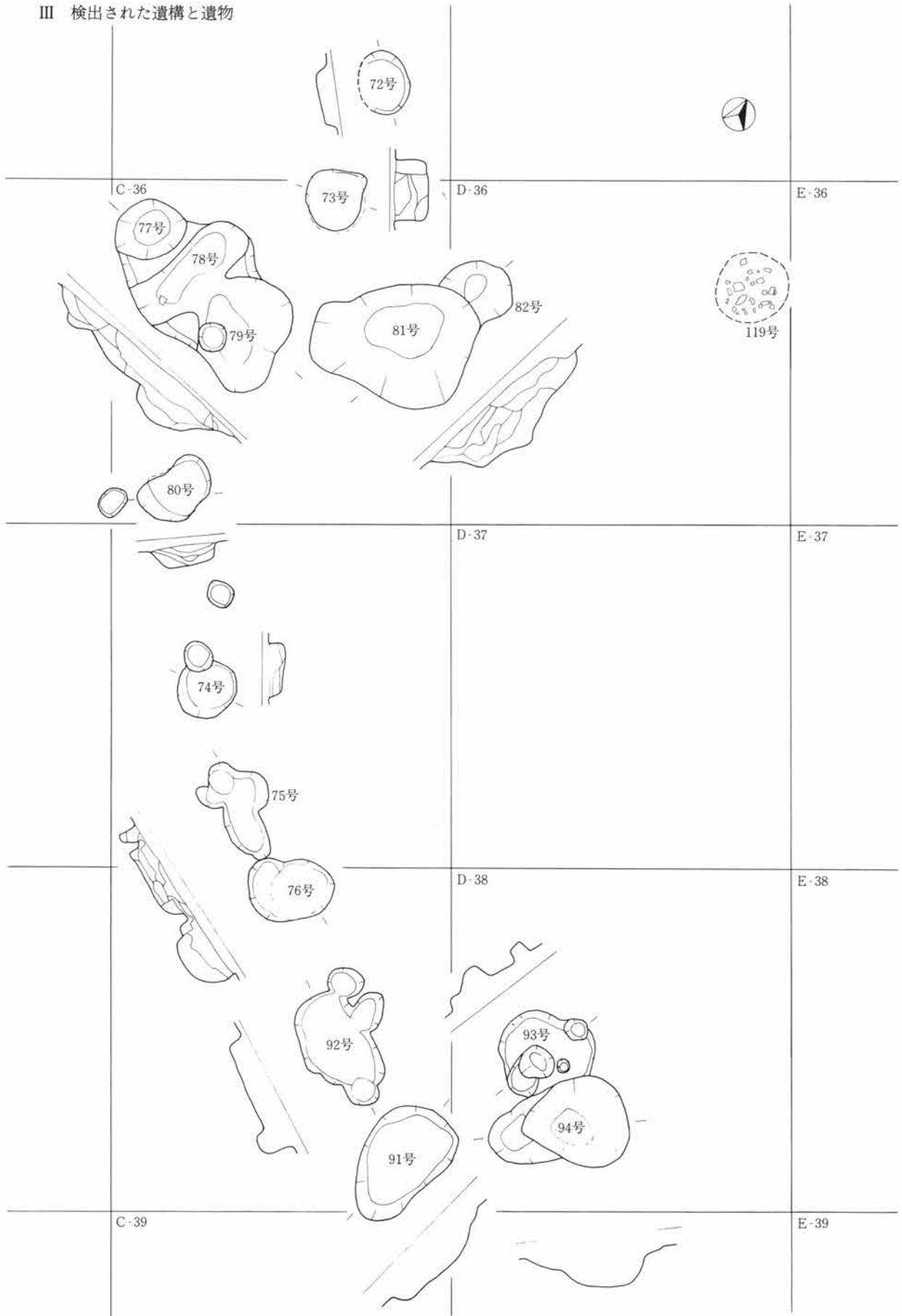
Jブロック (第102図)

4区住居址群の西側に位置し、一部重複が認められる。本遺跡土坑群のなかで最も規模の大きなブロックであり、35～46・49～51・53号土坑の16基で構成される。全体に分散的な配置をとっており、重複するのは38・39号の2基のみである。形態はAⅠc小が2基、AⅠc中が11基、AⅠc大が1基、AⅠb中が1基、AⅡ中が1基であり、AⅠc中が主体となって

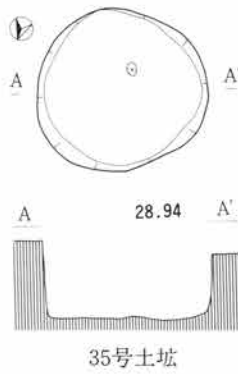


60号土坑

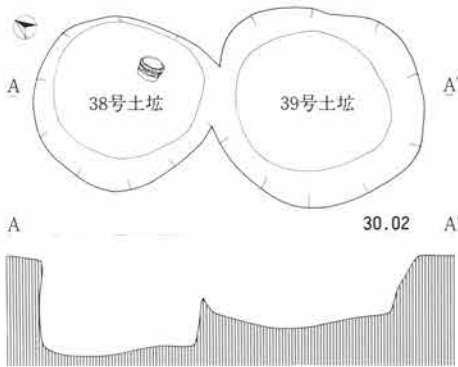
III 検出された遺構と遺物



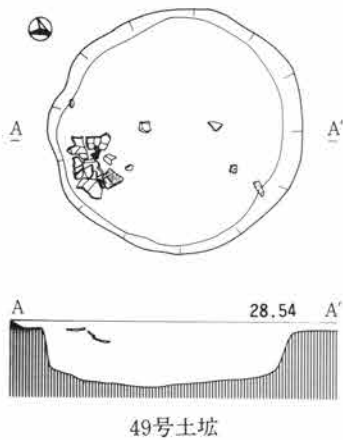
第100図 Iブロック土坑群 (1:80)



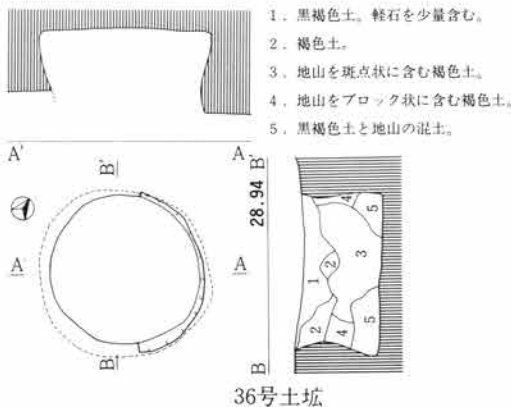
35号土坑



38・39号土坑



49号土坑



36号土坑

第101図 Jブロック内の土坑 (1:40)

いる。遺物は35・38・40・44・46・49・50・51号土坑から出土している。38号土坑から深鉢の胴下半部1個が、46・49号土坑から深鉢1個体分が出土した以外は、少量の土器破片あるいは石器が出土したにとどまる。なお、遺物はいずれも底面から浮いた状態で出土しており、特に38・46・49号土坑出土の土器は、底面から20cm以上浮いている。時期は、阿玉台III式期が2基、加曽利E1式期が3基、加曽利E2式期が3基で、他は不明である。これらの中から、代表的な土坑について個別説明を行う。

35号土坑 (第101図)

円形の中型土坑である。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がっている。本ブロックのなかで最もポピュラーな土坑であり、形態も整っている。出土遺物は数点の加曽利E1式土器と磨石1点のみで、いずれも底面から10~15cmほど浮いて出土している。

38号土坑 (第101図)

35号土坑とほぼ同形態を呈するが、底面に若干起伏が認められる。出土遺物は深鉢の胴下半部1点のみであり、北東壁寄りの底面から40cmほど浮いた状態で出土している。出土土器は勝坂2式土器である。

49号土坑 (第101図)

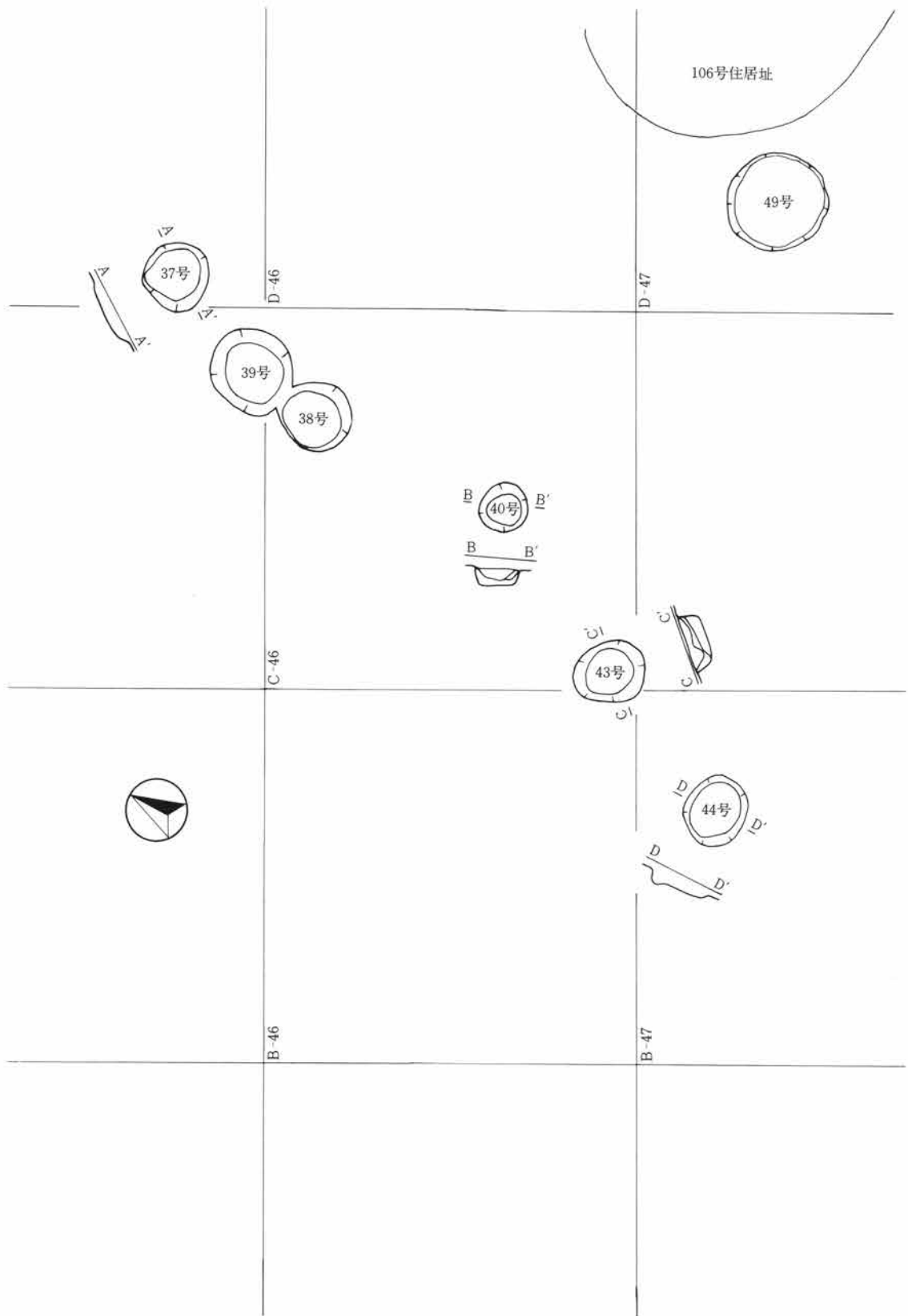
円形の大型土坑である。本ブロックで最も大型な土坑であり平面形の大きさに較べて浅い形態を呈する。底面は中央部がやや深くなっており、壁は若干外傾しながら立ち上がっている。遺物は、深鉢 $\frac{1}{3}$ 個体分の土器が横位で押しつぶされた状態で、南東壁際の底面上20cmから出土している。土器は土坑確認面ですでに検出されていることから、完形品であった可能性が高い。なお、この他に数点の土器破片と打製石斧の欠損品1点が出土している。出土土器は加曽利E1式土器である。

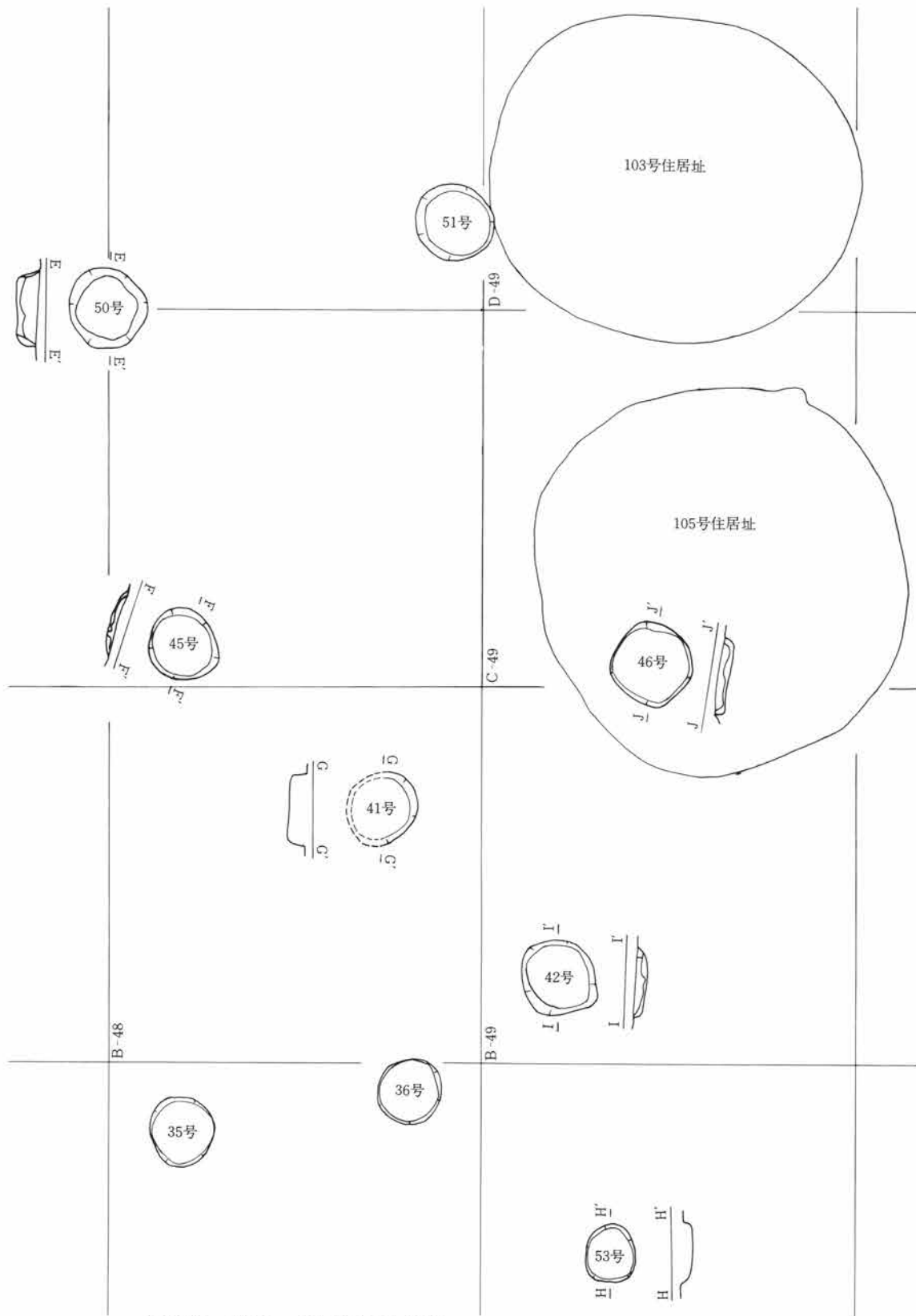
36号土坑 (第101図)

断面形が袋状を呈する、円形の中型土坑である。底面は平坦である。上端部は崩落により外傾しており、埋土は崩落を交えながら埋没したことを示している。遺物の出土はない。

個別に存在する土坑は、1区の12・13・14号土坑、2区の15・100・101・26・27号土坑、3区の62・63・69・86・108号土坑、3区の48号土坑があり、合計14基である。このうち、まったく単独で存在するものは48号・101号土坑の2基のみであり、その他は2~3基で近接あるいは重複して、小ブロックを形成している。小ブロックは、1区の12号・13号・14号土坑、2区の15

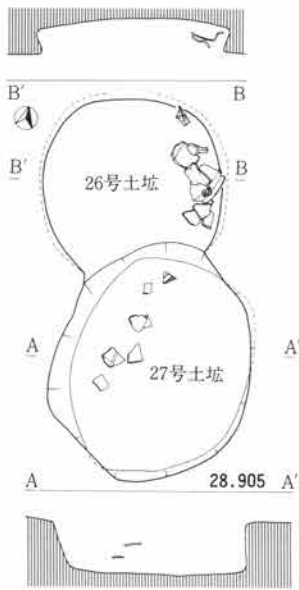
III 検出された遺構と遺物



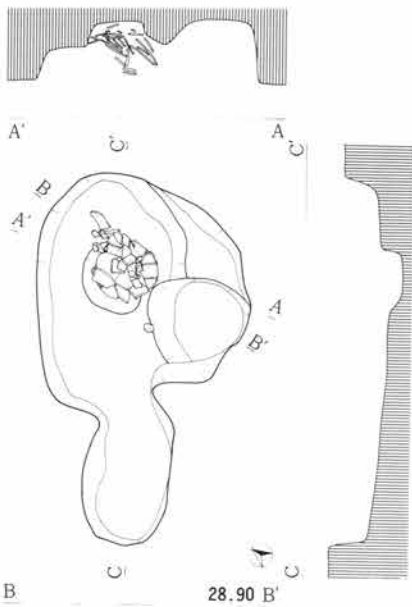


第102図 Jブロック土坑群 (1:8)

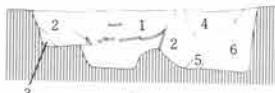
III 検出された遺構と遺物



26・27号土坑



28.90 B



108号土坑

1. 炭化物粒を少量含む黒色土。
2. 黄色粘質土粒、焼土粒を含む黒色土。
3. 黒褐色土と黄褐色粘質土の混土。
4. 黄色粘質土を少量含む黒灰褐色土。
5. " を含む黒褐色土。
6. " をブロック状に多含する黒褐色土。

第103図 ブロック以外の土坑

号・100号土坑、3区の86号・108号土坑の3つがあげられる。26号・27号土坑は重複しているが、明らかな空白期間をおいての重複であり、単独のグループに入る。これらについて、ここで個別説明を行うべきであるが、大半の土坑は十分な資料が得られておらず、表一1の記載事項以上の取り扱いは不可能である。そこで、ここでは上記の指摘にとどめ、以下の3基の主要な土坑についてのみ、個別説明をしておくことにする。

26号土坑 (第103図)

B-27グリッド東端に位置する。西側2mにほぼ同期と考えられる23号住居址が近接しており、住居との関連が考えられる土坑である。形態は、断面形が袋状を呈する円形の中型土坑で、南側の一部を27号土坑に切られている。検出された壁高は18cmにすぎず、上部数10cmが削平されていると考えられる。底面は中央部がやや低くなっているが、凹凸は認められない。遺物は、約半分を欠損した浅鉢と数点の土器破片が出土している。浅鉢は東壁に接するようにして、底面から若干浮いて出土した。出土土器は加曾利E1式土器である。

27号土坑 (第103図)

26号土坑の南側に重複して位置する。平面形は、長軸1.27m短軸1.11mのやや楕円状を呈する。断面形は袋状を呈するが、崩落あるいは掘りすぎの部分が多い。遺物は、少量の土器破片が底面からやや浮いた状態で出土している。出土土器は加曾利E4式土器である。

108号土坑 (第103図)

A-39グリッドに位置する。平面形は柄鏡状を呈するが、柄の部分も本土坑に伴うかは不明である。南壁際に直径50cmの円形の落ち込みがあり、その東側にはテラス状のやや高い部分が認められる。主体をなすと思われる部分は、長軸1.25m・短軸0.8m・深さ18cmの楕円形を呈す。中央に直径35cm・深さ12cmの円形の落ち込みがあり、そこから大型深鉢が押しつぶされて折り重なった状態で一括出土した。深鉢が含まれる黒色土①は落ち込み上部から外傾しながら立ち上がっており、また土器の一部はそれに側って斜位に位置していることから、深鉢は正位に埋設されていたものと思われる。深鉢は胴下半部を打ち欠かれているが他はほぼ完存しており、復元してみると、口縁部が土坑確認面より17cm上位のレベルになる。なお、土器は加熱を受けていないため、炉埋甕の可能性はない。土器は最大径52cmをはかる大型土器であり、また下部に折り重なった出土状態から、埋設当初は深鉢内部は空

洞であった可能性が考えられる。以上のことから、深鉢は甕棺の可能性が強い。なお、甕棺は本土坩に伴うものか、あるいは単独かは判定できない。深鉢は加曾利E 4式土器である。

土坩出土遺物（第104図～第110図）

出土遺物については、図化可能な主要な土器についてのみここで取り上げ、その他については表-1に譲ることとする。

105号土坩（第104図1～5）

いずれも深鉢の胴部破片である。1は頸部に隆帯をめぐらして文様帯を区画し、胴部には隆帯によるS字状の文様が施される。隆帯はいずれも刻みが施されており、両側を半載竹管による2列の角押文で縁取られている。2～4は爪形状の押引文が施されている。5は波状口縁を呈する浅鉢の口縁部破片である。2頭状を呈する波頂部には刻みが施され、口縁部内面には段が形成されている。器面は内外面とも入念に研磨されている。なお、左右の欠損部内側には補修孔が施されている。いずれも胎土に多量の金雲母と砂粒を含む。阿玉台II式土器。

55号土坩（第104図6）

底部から直線的に開く無文の浅鉢である。全体の $\frac{1}{3}$ が出土した。口縁は4単位の小波状を呈し、口縁部内面に段をもつ。器面は円外面とも丁寧に研磨されている。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は良好である。なお、胴部中程左側に補修孔が1つ認められる。阿玉台III式土器であろう。

57号土坩（第104図7～13）

いずれも深鉢の口縁部破片である。7～10は波状口縁を呈する深鉢の同一個体破片である。口縁部は内湾し、外傾する上端部には肥厚帯が形成されている。また口縁部内面には段をもつ。文様は口縁部が隆帯による孤状の区画文で構成され、区画内外には櫛状施文具による横位の条線が施される。なお、隆帯は両側を2条の角押文で縁取られている。11も口縁上端がくの字状に折れて外反する土器で、口縁部は隆帯による楕円状の区画文で構成され、隆帯の両側には2列の角押文が施される。12は内湾する口縁部破片で、口縁部は隆帯による楕円区画文で構成され、区画内にはキャタピラ状の押引文が施される。13は外反する口縁破片で、口縁部無文帯下に押圧を施した隆帯をめぐらしている。なお、7～11は胎土に多量の金雲母を含む。7～11は阿玉台II式土器、12は同III式土器、13は不明である。

83号土坩（第104図14～17）

14は波状口縁を呈する浅鉢の破片である。15は内湾する口縁部破片で、半載竹管による平行沈線で楕円区画文が施されている。地文は縄文RL。16は深鉢の胴部破片で、隆帯による楕円区画文内を縦位の沈線で充填している。17は縄文LRを地文に、2本の隆帯で文様を施した土器である。14・15は阿玉台IV式土器、16は勝坂3式土器、17は大木8a式土器である。

9号土坩（第105図）

1は円筒状を呈する小型の鉢形土器である。口縁にはカタツムリ状の把手が1つ付けられており、その対面にも把手が付けられると思われるが、欠損している。文様は、口唇直下に鋸歯状沈線をめぐらし、その下には、把手を境に一方には幅広爪形文、他方には半載竹管による平行沈線をめぐらしている。胴部文様は把手間の平行沈線によるU字状の懸垂文を境に、三角形の区画文で2単位に構成される。胴部文様は半載竹管による2条の平行沈線で構成され、沈線の両側には半載竹管による刺突文が施される。また、区画内には横位の鋸歯状沈線が施されている。なお内面下半には多量の炭化物の付着が認められる。

2は台付鉢形土器である。胴上半部を欠損している。台部は円筒状を呈し、中程に円孔が3つ付けられて

III 検出された遺構と遺物

いる。体部は直線的に開き、上半に括れをもつ。括れ部にはアーチ状の貼付文と三角形状の貼付文が、交互に3単位づつ施されるものと思われる。器面は内外とも入念に研磨されており、外面の一部には塗彩痕が認められる。胎土は砂粒をほとんど含まず、焼成は良好で外面は黒褐色、内面は茶色を呈す。

3は口縁部が内湾し、上端部がくの字状に外傾する小型の深鉢形土器である。口縁には橋状把手を伴う山形状の把手と、上端に刻みが施された1対の小突起が付けられるが、前者は欠損している。外傾する口縁上端部には肥厚帯が形成され、その直下にはRLの捺糸圧痕が1条施されている。また、把手周辺の肥厚帯にも同圧痕が認められる。口縁部には同捺糸圧痕による波状文が構成される。地文は縄文RLである。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好で外面は茶褐色、内面は黒褐色を呈す。

4は円孔付きの把手で、隆帯にそって沈線による縁取りが施されている。5は3と同様RLによる捺糸圧痕文が施された口縁部破片である。地文は縄文RL。6は縄文RLを地文に、縦位の条線が施された胴部破片である。

以上の土器は、1が勝坂2式、3・5・6が大木7b式に比定されよう。

なお、7～10は土坑上面から一括出土した加曾利E2式土器である。いずれも深鉢で、隆帯による渦巻文を連結して口縁部文様帯を構成し、頸部に無文帯を形成して、胴部には2～3条の沈線による懸垂文を施している。地文は縄文RLで、口縁部には横位、胴部には縦位に施している。

38号土坑（第106図1）

深鉢の胴下半分である。文様は隆帯区画により2段に構成されており、上段は半載竹管による縦位の沈線で充填され、下段は隆帯による楕円区画文で5単位に構成されている。楕円区内には隆帯にそっていわゆるキャタピラ文が施され、その間に半載竹管による横位刺突文が施されている。勝坂2式土器である。

8号土坑（第106図2・3）

2は隆帯による懸垂文が施された胴部破片で、隆帯を狭んで2本の沈線と角押文による文様が施される。地文は縄文LRで、隆帯上にも施されている。3は内湾する口縁部破片で、文様は幅広の角押文による楕円区画文で構成される。区画内には同角押文による2列の波状文が施されている。2・3とも胎土に多量の金雲母と破粒を含む。2は大木7b式土器、3は阿玉台III式土器である。

28号土坑（第106図4～9）

4は頸部が弱く括れ、口縁部が内湾しながら開く深鉢で、胴下半を欠損している。口唇裏面には隆帯をめぐらして段を形成している。口縁は4単位の小波状を呈し、各波頂部には把手が付くが、3つは欠損している。残在した1つは、角押文が施工された隆帯によるS字状の把手である。口唇直下には隆帯による波状文をめぐらしている。胴部には各波頂下に隆線による懸垂文を施し、頸部に6本の沈線をめぐらしている。地文は縄文LRの縦位施文である。

5は内湾しながら開く大型の浅鉢で、全体の約 $\frac{1}{3}$ が出土した。口縁は4単位の山形状波状口縁を呈し、口縁部裏面には段が形成されている。

6～8は深鉢の口縁部破片で、6・7は口縁上端が外側へ折れ曲がる形態を呈す。文様は、6・8は隆帯と幅広の角押文で施される。7は隆帯と2列の角押文で楕円区画文が構成される。

9は頸部がくの字状に外折する深鉢の大型破片である。頸部に1本の隆帯をめぐらし、胴部にも隆帯による懸垂文を施している。なお、隆帯の両側には幅広の角押文が施される。地文は縄文LRの縦位施文である。

以上のうち、4・5・7・9は胎土に多量の金雲母と砂粒を含む。7は阿玉台II式土器、4・6・8・9は大木8a式の古い段階の土器であろう。

22号土坑 (第106図10~12)

10は胴上半部で内湾し、口縁部がくの字状に外折する浅鉢の大型破片である。器面は内外面とも研磨されている。塗彩は認められない。11は円筒状を呈する手づくねのミニチュア土器である。底部は丸みを持ち、不安定である。口唇下8mmほどのところに1対の小孔が施されている。器面は内外面とも未調整で、胴部には縦位の粗雑な沈線が施されている。12は内湾する口縁部破片で、口縁部は隆帯で区画され、区画内に縦位の沈線を施している。加曾利E1式土器である。

26号土坑 (第107図1~4)

1は胴部上半で内折し、口縁部がくの字に外折する浅鉢である。全体の $\frac{1}{2}$ を欠損している。頸部にはX字状の橋状把手が1対付けられており、把手の両側胴上半部には2本の隆帯が縦位に施される。また、把手間の胴上半部には、2本の隆帯による渦巻文が施されている。胎土には砂粒を多量に含み、焼成は良好で茶褐色を呈す。また、外面および口縁部内面には研磨が施されている。塗彩痕は認められない。

2はRの撚糸文が施された深鉢の底部である。3・4は内湾する口縁部破片で、ともに山形の突起が付けられている。3は口縁部に縦位の沈線が施される。4は突起頂部および突起下に、隆帯による渦巻文が施されている。いずれも、加曾利E1式土器である。

49号土坑 (第107図5)

頸部が括れ、口縁部が多傾する深鉢で、全体の $\frac{1}{3}$ が出土した。口縁部は無文とされ、頸部に1~2本の隆帯をめぐらして文様帯を区画し、胴部に2本の隆帯による孤状の区画文と渦巻文で構成される。各隆帯は両側を沈線で縁取られている。なお、口縁には胴部文様部から立ち上がる把手が付くが、残存部が少なく図化不可能である。胴部の縄文は、0段多条LRの縦位施文である。

60号土坑 (第107図6)

キャリパー状を呈する小型の深鉢である。口縁部は隆帯による渦巻文を連結して5単位構成し、空白部に縦位の隆帯で充填している。胴部には縦位の細沈線のみが施されている。外面の調整は粗雑であるが、内面は研磨が施されている。加曾利E1式土器である。

85号土坑 (第107図7・8)

7は口唇部平坦面に文様帯をもつ土器である。文様は、2本の沈線間に部分的に交互刺突を施し、両端部には刻みを施している。8は頸部破片で、Rの撚糸文を地文に隆帯による文様が施されている。ともに加曾利E1式土器である。

115号土坑 (第107図9~13)

いずれも深鉢の胴部破片である。9・10は2~3条の平行沈線による懸垂文が施されたもので、10には鋸歯状文が認められる。11・13は2本の隆帯、12は平行沈線による懸垂文が施される。地文は、9・10・13がLの撚糸文、11が0段3条RL、12がRLの縄文で、いずれも縦位に施文されている。加曾利E1式土器。

106号土坑 (第108図)

1は口縁部が外反する深鉢の口縁部破片である。口縁は波状を呈し、波頂部には隆帯による蕨手状文が施される。口唇部は外側へ張り出して幅広く形成され、文様はこの部分に集中している。口唇部には2本の沈線が施される。外縁には刻みが施される。また、波頂部の両側には隆線による小さな渦巻文が付されている。

2はキャリパー状を呈する深鉢で、胴上半部の $\frac{2}{3}$ が破片で出土した。口縁部を2本の隆帯によるS字文で構成し、頸部に2本の隆帯をめぐらしている。S字文下には2本の隆帯による懸垂文が施され、頸部隆帯に接続している。また、頸部隆帯には所々に接続部が認められる。地文はLの撚糸文である。

III 検出された遺構と遺物

3はキャリパー状を呈する深鉢の大型破片である。口縁には大型の環状把手が付く。口縁部文様は、2本の隆帯による弧状の区画文と渦巻文で構成され、頸部に2本の隆帯をめぐらしている。地文は縄文LR。

4は口縁部がくの字状に内湾する浅鉢の大型破片である。胎土に細砂を含み、焼成は良好で内外面とも黄白色・黒色を呈す。また、内外面とも入念に研磨されており、部分的に塗彩が残っている。

5は深鉢の胴部である。頸部に1本の波状沈線と3本の沈線をめぐらしており、胴部には中程に剣先文を伴う渦巻文が施された3本沈線、1本の波状沈線、3本の平行沈線、2本の波状沈線の4種類の懸垂文を順々に4単位づつ施している。地文は0段3条RL縄文の縦位施文である。

6は頸部に隆帯をめぐらした深鉢の大型破片である。隆帯上には等間隔にとぎれる沈線が加えられ、見かけ上隆帯は2本に見える。地文は縄文RLの縦位施文である。

7はLの捺糸文が施された胴部である。8は口縁部肥厚帯をもつ波状口縁の土器で、波頂下には2本の縦位沈線が施される。肥厚帯には2本の沈線をめぐらし、外縁に刻みを施している。9は口縁部文様が外側へ突出した土器で、突出部には蕨手状文を伴う沈線をめぐらし、外縁にはやはり刻みが施されている。10は口縁部がくの字状に内折する土器で、口縁部には2条の鋸歯文が施されている。11は内湾する口縁部破片で、口唇直下に隆線と半截竹管による平行沈線をめぐらし、以下にLの捺糸文が施されている。

以上の土器は加曽利E1式に比定されよう。ただし、5にみられる懸垂文は新しい要素を含んでおり、加曽利E2式に比定されようか。

120号土坑（第109図1・2）

1は波状口縁を呈するキャリパー状の深鉢である。波頂部には渦巻文が付くと思われるが、欠損している口唇直下および頸部に隆帯をめぐらして口縁部文様帯を区画し、区画内には隆帯による渦巻文が施される。2は深鉢の底部である。地文はいずれもLの捺糸文。加曽利E1式土器である。

121号土坑（第109図3）

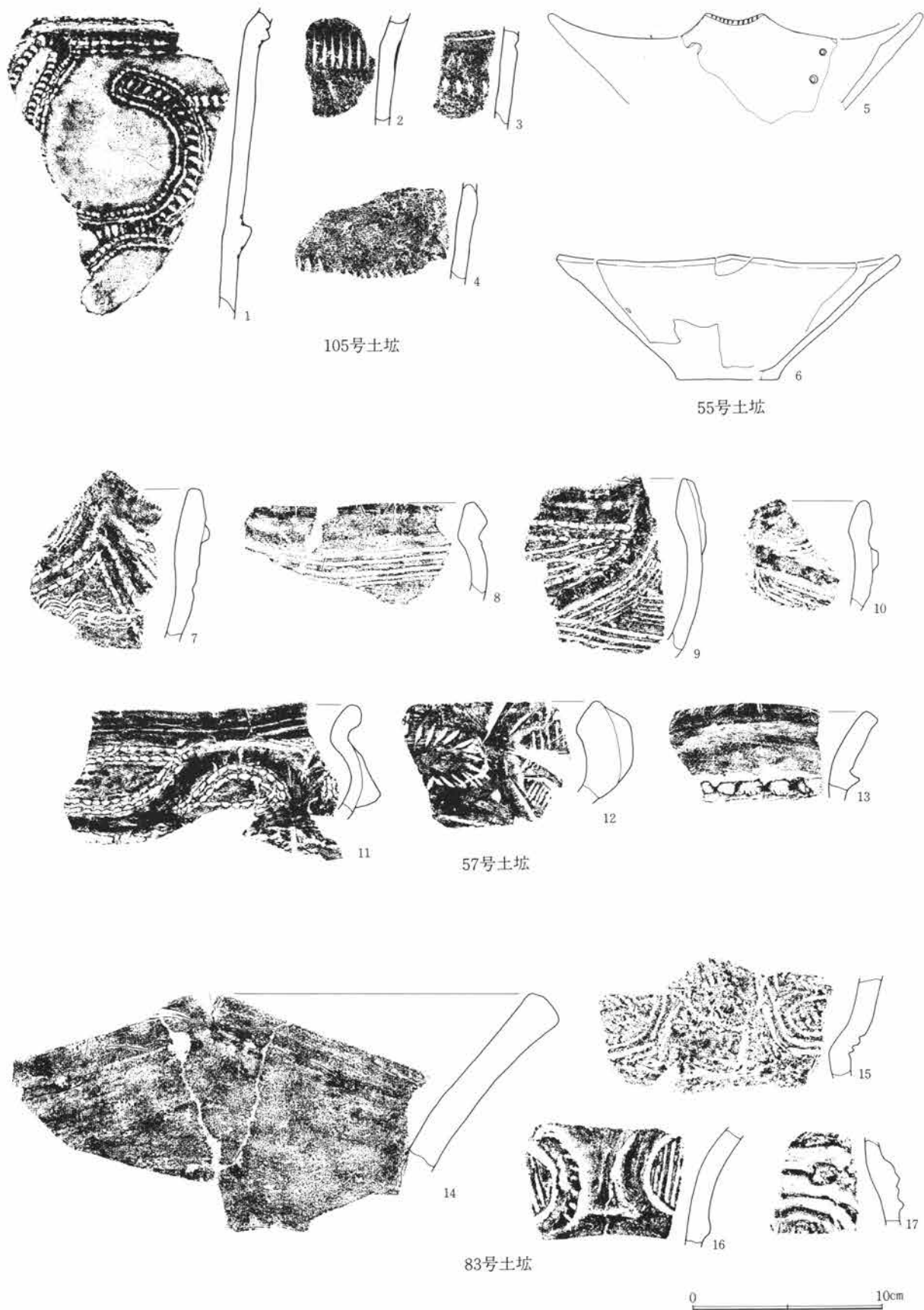
大型深鉢の内湾する口縁部破片である。把手が付くが、欠損している。口唇部はくの字状に外折し、外端に刻みが施されている。口唇下に無文部において隆線をめぐらし、2本の平行隆線と平行沈線で口縁部文様を構成する。隆線はペン先状およびへら状の押引文で縁取られ、無文部下の押引文にのみ波状沈線が伴う。地文は縄文LRの縦位施文である。大木8a式土器である。

122号土坑（第109図4～9）

4は深鉢の胴部破片で、隆帯による楕円区画文内に2条の波状沈線が施されている。隆帯の内側は各々半截竹管による押引文と1本沈線で縁取られ、波状沈線も各々同種の施文具を使用している。5は内湾する口縁部破片で、口唇部と頸部に高い隆帯をめぐらして口縁部文様帯を区画し、区画内に半截竹管による平行沈線と爪形文をめぐらし、その間に同施文具による刺突文を施文している。6～8口縁部が強く内湾し、口唇部が外反する土器で、口縁部文様は1～2本の隆帯による渦巻文や区画文で構成される。地文はいずれも縄文RL。9は算盤玉状を呈する底部破片である。以上の土器は、4が阿玉台Ⅲ式、5・9が勝坂3式、6～8が大木8a式に各々比定されよう。

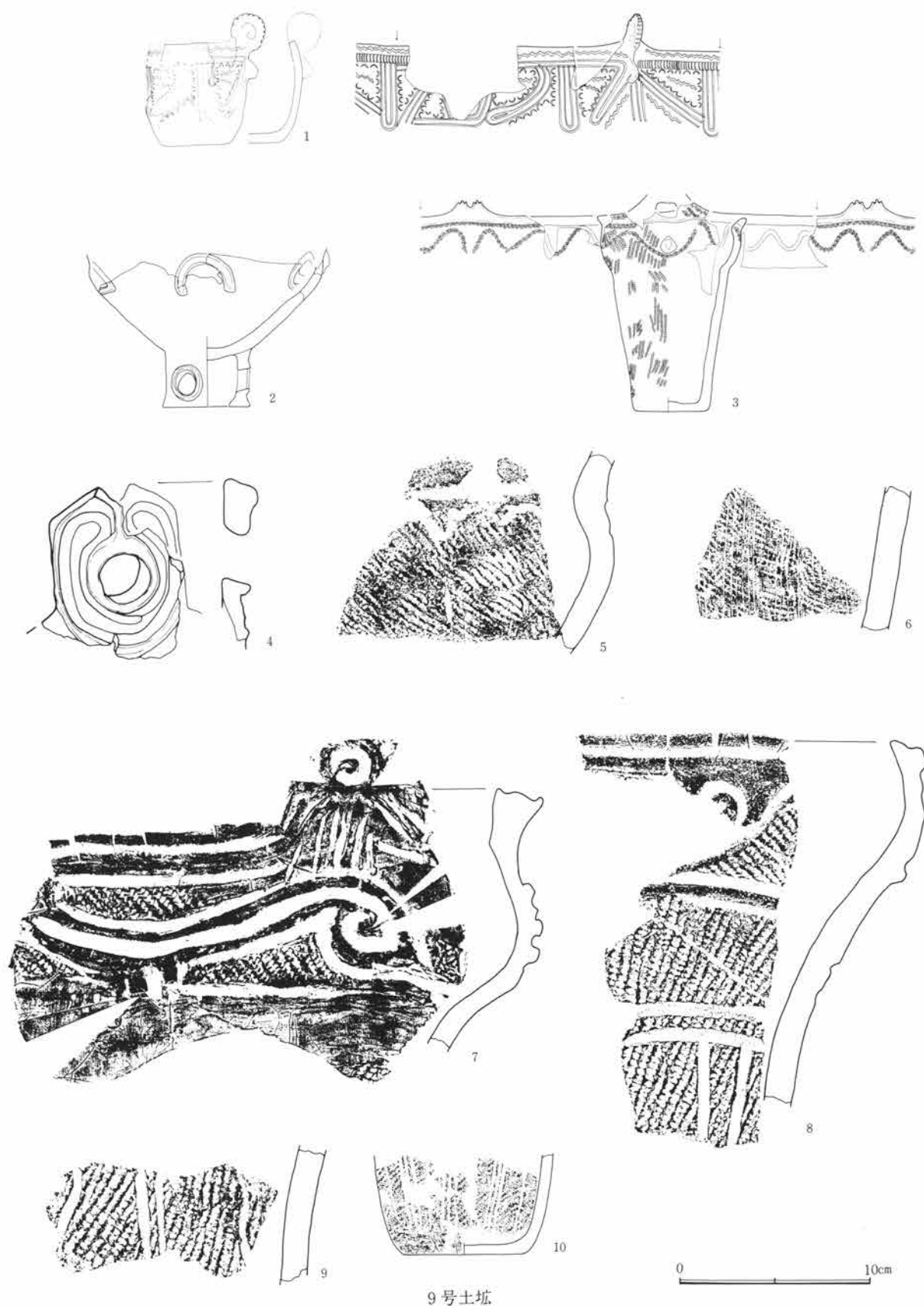
12号土坑（第109図10・11）

10は深鉢の胴部である。Lの捺糸文を地文に2～3本の平行沈線による懸垂文が6本施され、そのうち1ヶ所だけ弧状の平行沈線で連結されている。11は口唇部に隆帯と沈線による渦巻文が施され、口縁部は渦巻文下の隆帯で区画化され、区画内を縦位沈線で充填している。ともに加曽利E2式土器である。

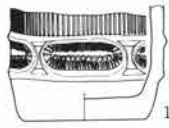


第104図 土埴出土遺物 (5・6は1/6)

III 検出された遺構と遺物



第105図 土坑出土遺物 (1~3・10は $\frac{1}{6}$)



38号土坑

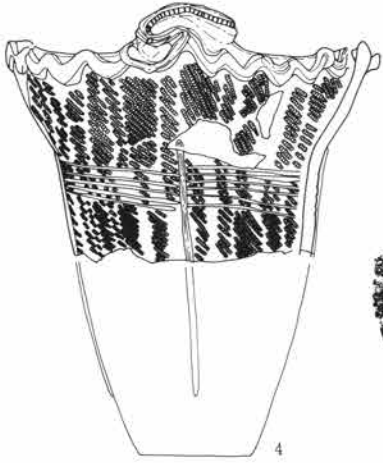


2

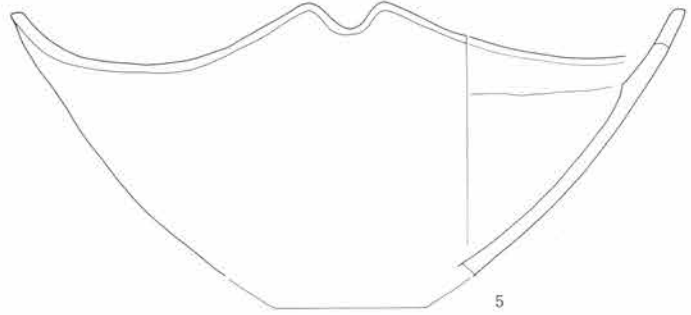


3

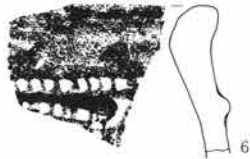
8号土坑



4



5



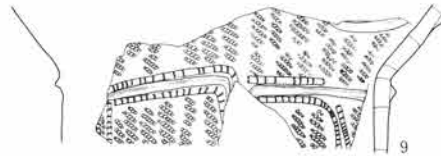
6



7

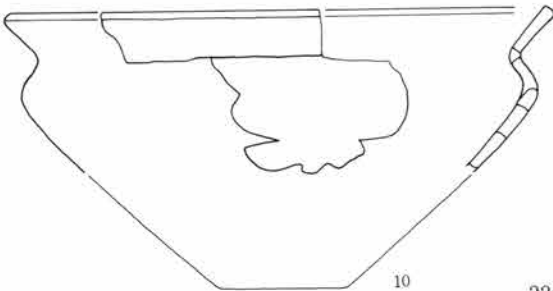


8



9

28号土坑



10



11

22号土坑

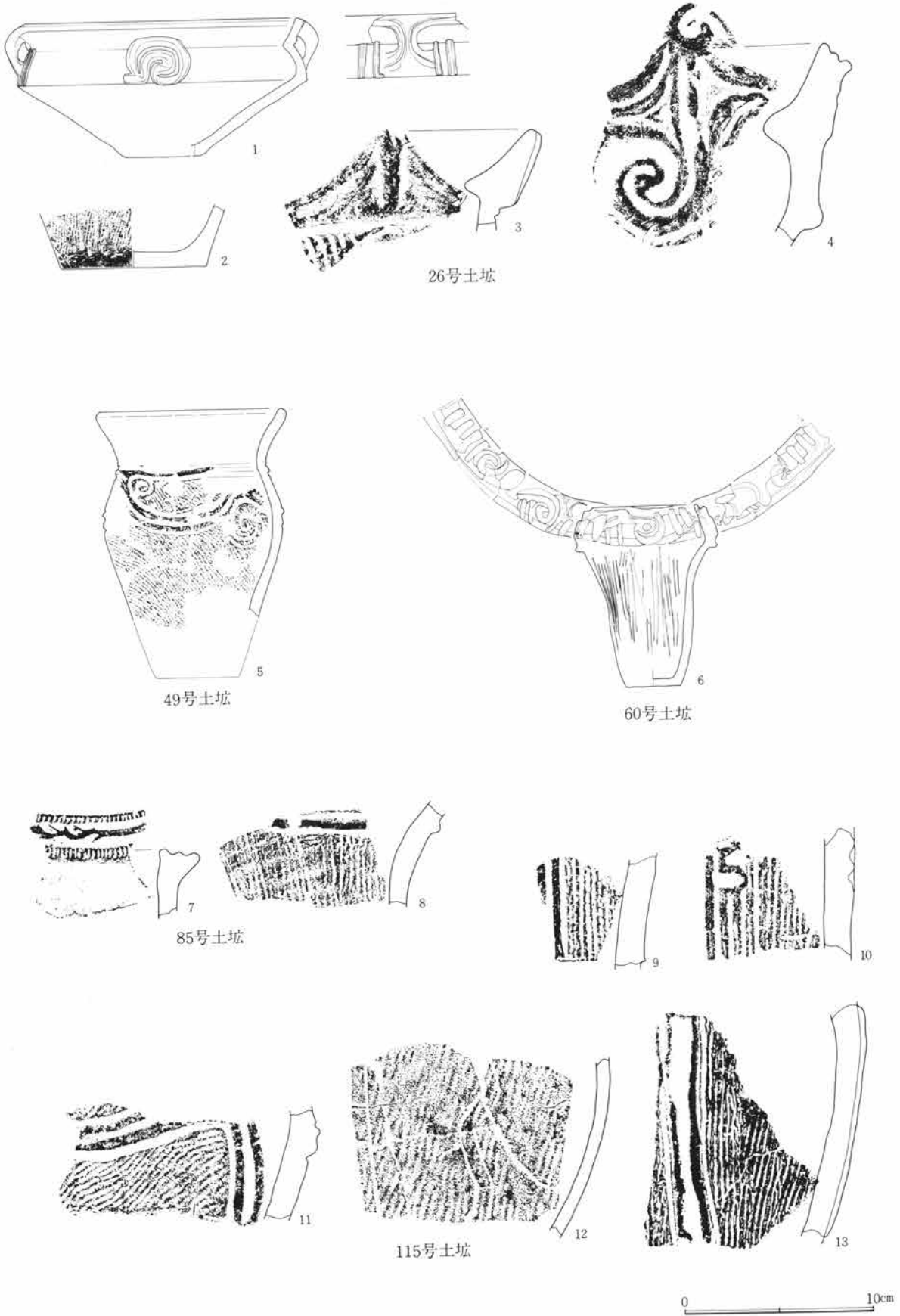


12



第106図 土坑出土遺物 (1・4・5・9・10は1/6)

III 検出された遺構と遺物



第107図 土坑出土遺物 (1・2・5・6は1/6)

1 縄文時代の遺構と遺物

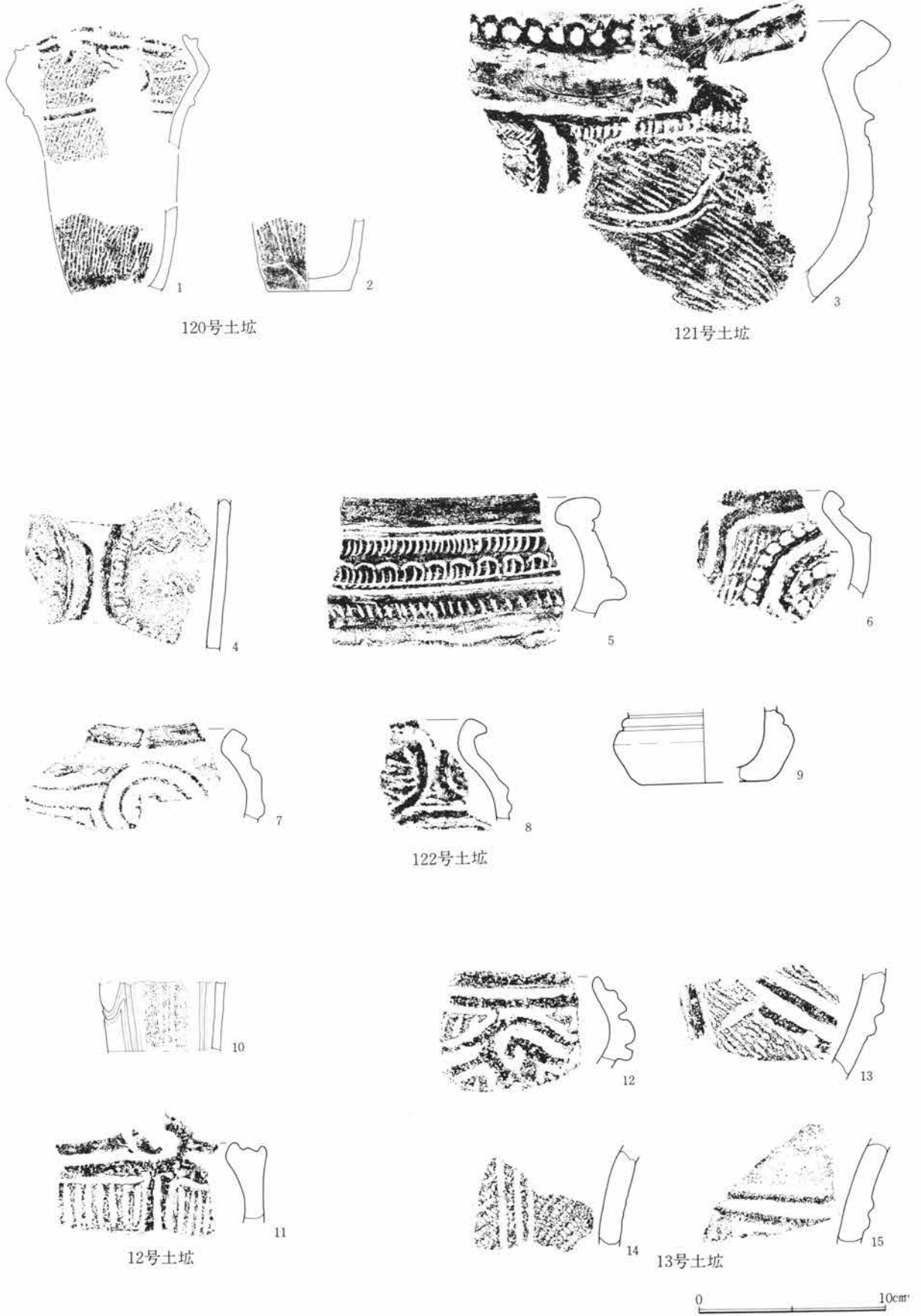


106号土埴

0 20cm

第108図 土埴出土遺物 (8~11は1/3)

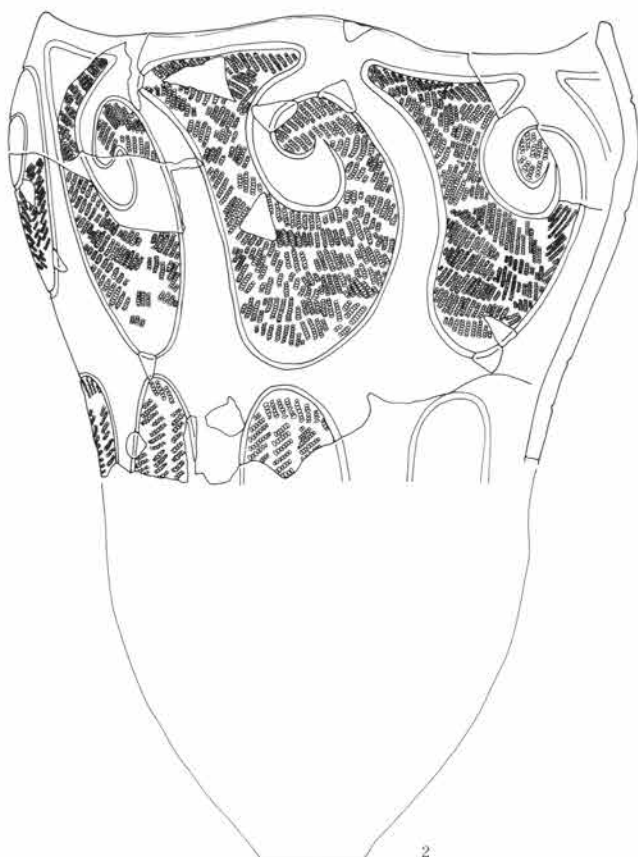
III 検出された遺構と遺物



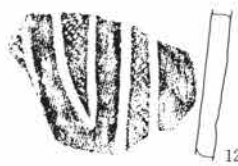
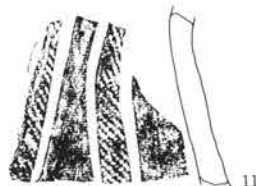
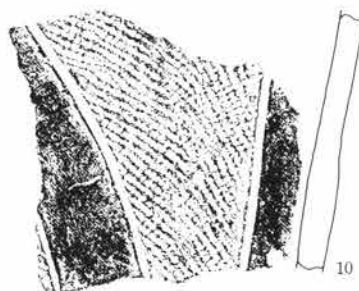
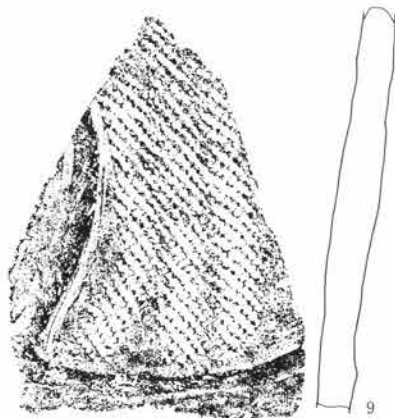
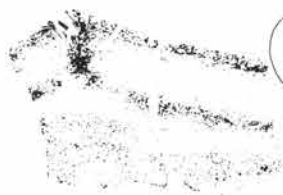
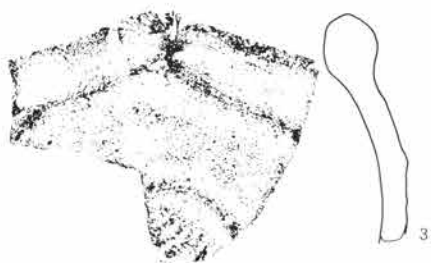
第109図 土埴出土遺物 (1・2・10は1/6)



46号土埴



108号土埴



54号土埴

第110図 土埴出土遺物 (1・2は1/6)

0 10cm

III 検出された遺構と遺物

表一 土 塚 一 覧

※ 1. 備考項目の「>」「<」は切り合い関係を示す
2. 形態分類は101ページ下の分類基準による

土塚番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形態分類	出土遺物	時 期	備 考
8					土器片少	阿玉台 III	
9	185	160	28	Ic 大	小型深鉢、小型鉢、台付鉢、小型深鉢胴下半部各一点の他、石鏡、丸石各1点出土。なお、覆土上面から加曾利E2式土器一括出土。	阿玉台 II	中央部にビットを持つ。底面付近で骨片を数点確認。
10							
12	105	80		中	土器片少 (大型破片1点)	加 E 2	>2住
13	103	92		中	土器片少	加 E 2	>2住
14	80			中	土器片少		>2住
15	150	150	28	Ic 大	土器片少、磨石1点		
16	246	232	29	Ic 特大	土器片少		17・18塚と重複
17	107	同	53	Ic 中	土器片少		
18	125	同	43	Ic 大	土器片少		
19	92	同	39	Ic 中	土器片少	加 E 3 新	
20	93	78	17	Ic 中			
21	162	同	12	Ic 大	土器片少		
22	176	171	72	Ic 大	土器片少、ミニチュア土器1点	加 E 1	
23							
24	183	170	55	Ic 大	土器片少	加 E 1	
25	105		27	Ic 中			
26	97(102)	80(85)	17	Ic 中	浅鉢1点、土器片少	加 E 1	<27塚
27	127	111	28	Ic 大	土器片少	加 E 4	>26塚
28	126	125	32	Ic 大	深鉢、浅鉢各1点、大型破片多	大木 8 a	<25住
29					土器片少	加 E 3 新	
30	50	50	17	Ic 小			
32	94	94	37	Ic 中			<16塚
33					土器片多		
34	47		30	Ic 小		加 E 1	
35	92	86	41	Ic 中	土器片少、磨石1点	加 E 1	
36	85(90)	79(88)	45	Ic 中			
37	88	173	11	Ic 大			
38	99	90	46	Ic 中	深鉢胴下半部1点		39塚と重複
39	110	104	38	Ic 中			28塚と重複
40	133	133	46	Ic 大	土器片少	加 E 1	
41	107	100	22	Ic 中			
42	100	100	13	Ic 中			
43	100	82	38	Ic 中			<溝
44	95	83	10	Ic 中	土器片少	加 E 2	
45	96	93	17	Ic 中			
46	108	100	20	Ic 中	深鉢1点、土器片少		>105住
48	103	100	20	Ic 中			
49	137	130	28	Ic 大	深鉢1点、土器片少	加 E 1	
50	107	105	31	Ic 中	土器片少	加 E 1	
51	105	100	23	Ic 中	土器片少、打製石斧1点	阿玉台 III	
53	97	62	20	Ic 小			
54	168	147	66	Ic 大	土器片少	加 E 4	
55	113	93	21	Ic 中	浅鉢1点		<65塚
56	96	86	46	Ic 中	磨石2点		<65塚
57	149	125	32	Ic 大	土器片少	阿玉台 III	<113住
58	94	82	20	Ic 中			
59	162	158	26	Ic 大			
60	79(101)	79(87)	55	Ic 小	小型深鉢1点、土器片少	加 E 1	
61	100	100	12	Ic 中	土器片少	加 E 2	
62	191	141	17	Ic 大	土器片少	加 E 1	
63	77		11	Ic 小			
64	73		38	Ic 小			111住と重複

1 縄文時代の遺構と遺物

土壌番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形態分類	出土遺物	時期	備考
65	242	171	45	Ic 特大			
66	79	62		小			
67	88	80	17	Ic 中			
68	79	78	17	Ic 小			
69	120		15	Ic 大			
70							
71							
72	94	75		中			
73	90(90)	90	50	Ib 中			
74	82	82	20	Ic 中	土器片少	加 E 3 新	
75	154	53	24	Ic 中			
76	86	86	22	Ic 中	土器片少		
77	104	86	35	Ic 中		加 E 1	
78	191	73	40	Ic 大		加 E 1	
79	150	135	67	Ic 大		加 E 1	
80	106	80	30	Ic 中			
81	237	179	63	Ic 特大			
82	96	72	52	Ib 中			
83	108	68	20	Ic 中	土器片多	阿玉台 IV	
84	68		11	Ic 小		加 E 2	
85	102	98	16	Ic 中	土器片少	加 E 1	
86	174	115	50	Ib 大			>116住
88	108	104	22	Ic 中			
91	163	104	22	Ic 大			
92	184	111	27	Ic 大			
93	139	120	17	Ic 大			
94	203	122	53	Ic 大			
96	137		44	Ic 大			
97							
98							
99	92	78	35	Ic 中			
100	130	114	19	Ic 大	土器片少	加 E 3 新	<115住
101	120	110	13	Ic 中	加 E 2		
103	135	90	27	Ic 中			>120住
104	160	90	50	Ic 大			<120住
105	133	130	20	Ic 大	土器片少	阿玉台 II	<106塚
106	215	193	26	Ic 特大		加 E 1	<119住
107			37			加 E 1	
108	123	80	18	Ic 特大	深鉢、磨石1点	加 E 4	
109	115	106	53	Ic 中			
110	107	92	45	Ic 中		加 E 2	<5号埋設土器
111	84	84	39	Ic 中			<6号埋設土器
112	140		24	Ic 大	土器片少	加 E 1	
113	138	105	26	Ic 大			
114	99		14	Ic 中	土器片少	加 E 1	
115	80	66	20	Ic 小	土器片多	加 E 1	
116	129	97	29	Ic 中			
117	84	82	29	Ic 中	土器片少	加 E 1	不正形
118	41	38		小			
119	323	241	8	Ic 特大			
120	116	112	27	Ic 中	土器片少	加 E 1	<119住
121	200	113	46	Ic 大	土器片多	大木 8 a	<120住
122	133	123	56	Ic 大		大木 8 a	<120住
123	76		58	Ib 小			
124	57	57	63	Ib 小			
125	80	54	35	Ic 小			

III 検出された遺構と遺物

13号土坑（第109図12～15）

12・13は隆帯による渦巻文が施された口縁部破片である。14は3本の懸垂沈線が施された胴部破片で、地文はR Lの縄文。15は2本の隆帯をめぐらした頸部破片である。いずれも加曾利E 2式土器である。

46号土坑（第110図1）

胴上半部が弱く外傾する深鉢で、全体の $\frac{1}{2}$ を欠損する。口縁には把手が3単位付くが、欠損している。口縁を肥厚させて口唇部と一体化し、2本の平行沈線を施している。胴部には把手下に3本の平行沈線を垂下させ、その間に1本の波状沈線を施している。地文は縄文LRの縦位施文である。加曾利E 2式土器である。

108号土坑（第110図2）

胴上半部が弱く内湾しながら開く大型の深鉢で、胴下半部および口縁の一部を欠損する。口縁は4単位の小波状を呈す。胴上半部には沈線によるJ状の区画文を8単位、胴下半部には沈線によるアーチ状の区画文を10単位施し、各区画内を縄文RLで充填している。加曾利E 4式土器である。

54号土坑（第110図3～12）

3～5は、断面三角形の微隆帯で文様が施される深鉢の口縁部破片である。いずれも波状口縁を呈し、口唇下には微隆帯が施され、波頂部にはつまみあげたような小突起が付く。4は小突起下にアーチ状の区画文が施されている。6・9は胴部破片である。10は沈線で区画文が施される深鉢の胴部破片である。区画内を充填する縄文は9がLR、他はRLである。7は直線的に開く口縁部破片で、口唇下に無文帯をおいて沈線をめぐらし、以下に縄文LRを施している。8・11・12は、沈線区画の帯状充填縄文帯で文様を構成する土器である。8は口縁部破片で、口唇裏面を肥厚させて段を形成している。いずれも区画内を充填する縄文はLRである。以上の土器は、3～6・9・10が加曾利E 4式土器、8・11・12が称名寺1式土器である。

所見

土坑は住居とともに、縄文時代を通じて一般的な遺構であるが、住居に比べて形態がシンプルで変遷性に乏しく、また遺物を伴わないものも多いことから、その性格や時期を判定することが難しい。そのため、単独で扱う時にはどうしても主要な資料に限定される場合が多く、取り扱いの限界性をはらんでいる。本遺跡検出の土坑も同様であるが、幸いなことに土坑の大半はブロック状にまとまりをもって分布しており、ブロック毎の検討が可能と思われる。

形態は分類基準に示したバラエティが認められるが、A1c中が圧倒的に多く、A・Iブロックの他はこの形態が主体を占めている。ただし、本遺跡は上面を著しく削平されているため、Icの大半はIbと考えたほうが良い。また、東・北関東地方に特徴的な袋状土坑は7基のみの検出にとどまったが、地山はシルト質で崩落しやすい土層であること、袋状土坑の大半が上半部に崩落が認められることから、若干の増加が見込まれる。袋状土坑の時期は、阿玉台III式期1基、加曾利E 1式期2基、加曾利E 4式期1基、不明2基であり、後期初頭にも2基認められた。

土坑の時期判定は、基本的には完形または半完形の一括土器でおこなった。ただし、土坑検出面は下半部以下のレベルのものが大半であることから、少量の土器破片の場合でも一時期に集中するものはそれで判断した。時期別にみると、阿玉台II式期3基、同III式期8基、同IV式期1基、加曾利E 1式期21基、同2式期9基、同3式期7基、同4式期3基であり、加曾利E 1式期がピークとなっている。ブロック別に見てみると、阿玉台II式期から開始されるものがA・D・Gブロック、阿玉台III式期から開始されるものがE・Jブロック、加曾利E 1式期から開始されるものがC・F・H・Iブロックであり、Bブロック以外はいずれも

加曽利E 1 式期に存在している。終了期については、約半数の土壇が時期不明のため明確にはできないが、半数以上のブロックは加曽利E 2 式期には消滅している。加曽利E 3 式期の土壇をもつブロックはB・C・Iの3ヶ所のみであり、それらの位置は同時期の住居址分布と一致している。

次に住居址分布との関連をみてみたい。まず、土壇は調査区内で住居址が検出されていない阿玉台II式期に2区・3区で構築が始まり、同III式期には3区でも構築が開始される。阿玉台III式期の住居址は、1区で1軒検出されている。加曽利E 1 式期になると、土壇はほぼ全ブロックが出揃い、ピークを迎えることになる。住居址は3区に集中しており、その西側に位置するJブロックが付属する土壇群と考えられる。また、2区にも23号住居址が存在し、すぐ東側に同期の26号土壇がある。A～Hブロックはそれを囲むように弧状に分布しているが、この分布は加曽利E 2 式期～同3 式期の住居配置に踏襲されることになる。加曽利E 2 式期から同3 式期にかけて住居址は増加していくが、土壇は著しく減少していく。加曽利E 4 式期には、2・3区に土壇が3基認められるのみである。大まかではあるが、以上のように土壇群は、構築開始時期においても、また2区・3区の弧状分布においても、住居址群に先行して構築されていると考えられる。

一般的に土壇の用途は貯蔵穴・墓壇・陥穴があり、各々に特徴的な形態や配置を有しており、また出土遺物や遺物の出土状態も各々に異なっている。本遺跡の中期の土壇のなかで、明らかに墓壇と言えるものは9号土壇1基のみである。長楕円形を呈する大型の土壇もいくつか認められるが、明らかに陥穴と考えられるものはない。大半の土壇は底面の平坦な中型の円型土壇であり、土器破片や石器破損品等が投棄されていることから、貯蔵穴と考えてよいだろう。これらの土壇は、前述のようにブロック状に集中して分布しており、また各ブロック毎で一定期間の継続が認められる。このことは、集落内における土壇の配置に一定の規制があったこと、また集落が継続的に営まれていたことを暗示しているように思える。また、加曽利E 1 式期から同E 3 式期にかけて、住居址が増加するのに対して土壇は減少している。これらの土壇を貯蔵穴と考えれば、貯蔵方法が変化したとも言えよう。このことは、住居址の大型化や土器の大型化などの変化と関連するのかもしれない。

4) 遺構外出土土器

遺構外からは阿玉台Ia 式期～加曽利E 4 式期の土器が出土しており、なかでも加曽利E 2 式～3 式土器が主体となっている。中期初頭の土器は、2号住居址で数点出土しているが、遺構外からは検出されていない。また、調査区内で明確な包含層は確認できなかったが、比較的安定した土層堆積が認められたA'—18～22グリッドではまとまった土器等が出土している(第111図)。遺物の出土範囲は100・101号住居址上面の黒褐色土部分に集中しており、ほぼ同レベルでの出土状況を示していることから、住居址埋没過程で形成された浅い凹地に投棄されたものと思われる。

阿玉台式土器 (第112図・第113図)

Ia 式～IV 式土器が出土しており、総数は約675点である。大半が小破片で接合するものはほとんどない。分布は1・2・3・4区に認められるが、2・4区からの出土が全体の9割を占めている。なかでも、2区の北西側、4区の南東側に集中している。

1 類 (第112図 1～15)

隆帯にそって1列の押引文が加えられるもので、42点が出土している。器形は、口縁部が弱く内湾しながら開く深鉢形を呈す。口縁上端が外折して内面に陵をもつものも見られる(5・9・15)。また、口唇に刻みや押引文が施されたものが多い(1・2・5・9・11・15)。口縁部は隆帯による楕円区画文で構成され、区

III 検出された遺構と遺物

画内には弧状文（3・12・13）や鋸歯文（4・9・14）が施される。また、縦位あるいは斜位の平行押引文で充填するものも認められる（10・11）。押引文には、細い角頭状のもの（1・2）、太い角頭状のもの（3～6）、ペン先状のもの（8・9・14）等のバラエティがある。1は相頭状の小波状口縁を呈す。口縁部には粘土棒を芯にして縦位に貼り付けた独特の突起が付けられ、口唇と波頂部内面には角押文が施されている。8も同様の突起が付けられている。4・11は区画する隆帯に刻みが施されている。

2類（第112図16～36）

隆帯にそって2列の押引文が加えられるもので、168点が出土した。いずれも半截竹管状の施文具を使用しており、先端が角頭状のものとペン先状のものとがあるが、比率は約半々である。器形や文様構成は1類とほぼ同様だが、口縁部区画内に幅広のヘラ状施文具による刺突文や条線が施されるものが現われる。また、口縁上端が外折して内面に陵をもつものが盛行する。17は口唇部に2列の角押文が、31は刻みが施されている。25は浅鉢形土器で、深鉢と同様に低い隆帯による楕円区画文が施されるが、剥落している。区画内には隆帯にそって2列の角押文が施されている。36は半截竹管による2列の角押文、平行沈線および条線で文様が構成される土器である。26・27・36以外は、胎土に多量の金雲母と砂粒を含む。なお26・27の胎土は勝坂式のものに類似している。

3類（第113図1～5）

隆帯にそって、櫛状施文具による押引文や条線が施されたもので、21点が出土した。1・2は口縁部破片で、形態や文様構成は2類と同様であり、特に2と2類の30は酷似している。1は押引文、2は条線である。3～5は胴部破片で、3・4は断面三角形の微隆線が施されている。施文具はいずれも3本単位のものを使用しており、波状施文が特徴的である。2・3・5は胎土に金雲母と砂粒を含む。

4類（第113図6～9・12）

幅広のヘラ状施文具による刺突文を横位に施すもので、54点が出土した。6・12は口縁部破片で、6は口唇部に刻みが施されている。8は微隆帯による懸垂文が施されている。7～9は胎土に金雲母と砂粒を含む。

5類（第112図37～41・第113図10）

半截竹管による平行沈線や1本沈線で波状文を施すもので、19点が出土した。37・38の口縁部形態は2類に類似するものが認められる。波状文は口縁部や胴部に横位に施されるが、1本沈線の波状文は断面三角形の微隆線に伴うものが多い。

6類（第113図11～21）

隆帯にそって、幅広の押引文が施されるもので、115点が出土した。文様を区画する隆帯は太いものが多い。押引文には、角頭状のものと爪形状のものがあり、しばしば波状沈線が伴う。口縁部文様は、楕円区画文が主体的であるが、胴部には渦巻状の文様が施されるものもある（16・17）。19・20では区画内に細沈線が施されている。21は円形状を呈する大型把手である。

7類（第113図22～24）

隆帯にそって半截竹管による平行沈線や1本の沈線が施されるもので、10点が出土した。隆帯は6類同様太いものが多く、文様施文は粗雑である。また、地文に縄文をもつものが多く、隆帯上にも縄文が施される。縄文は、22がRL、24がLRである。なお、胎土に金雲母を含むものはない。

8類（第113図25～30）

隆帯のみで文様が施されるもので、88点が出土した。25～28は内湾する平縁の土器で、口縁内面に陵をもっている。25は口縁部に逆三角形の隆帯を施して三叉文を形成している。27・28は口縁に棒状の隆帯を貼り

付け、小突起を形成している。29は截頭状を呈する波状口縁で、波頂下に隆帯を垂下させている。30は断面三角形の微隆線で文様が施された胴部破片である。25～29は胎土に金雲母を砂粒と含む。

9類 (第113図31～35)

無文土器で、144点が出土した。31～34は内湾する平縁の土器で、いずれも口縁内面に陵をもち、34は口唇下に隆帯を施して肥厚帯を形成している。35は波状口縁の土器で、波頂部に円孔が施されている。33～35は胎土に金雲母と砂粒を含んでいる。

以上の土器は、1類が阿玉台 Ib 式、2・3類が同 II 式、6類が同 III 式、7類が同 IV 式、5・8・9類が同 Ib～II 式、4類が同 II～III 式土器に各々比定されよう。なお、第112図 1 は阿玉台 Ia 式土器と思われる。

勝坂式土器 (第114図 1～27)

1式～3式が出土しており、総数は約250点である。いずれも小破片であり、分布は阿玉台式土器と同様であった。なお、3式土器については図示できる資料がないため、割愛した。

1～16・25～27は勝坂 1 式土器である。1～3は半截竹管による2～3条の平行沈線で区画文が構成される土器である。1は横帯区画文で構成され、区画内をペン先状の押引文で充填している。2・3は三角形や菱形状の区画文で構成され、区画内を幅広の押引文とペン先状の押引文で充填している。4～9は隆帯で三角形の区画文を構成し、区画内に幅広の押引文やペン先状の押引文が施される。10～12・27は、隆帯にそって半截竹管による1～2条の平行沈線を施す土器で、11には三叉状の印刻文が認められる。13～16は半截竹管による平行沈線で文様を構成する土器である。13・16は平行沈線の縁に爪形状の刺突文が加えられる。14は縄文が施されており、三叉状印刻文が認められる。15は横帯文間に波状文が施される。26は口縁部に鋸歯文と幅広爪形文をめぐらした土器である。なお、2・7・10・12・15は胎土に多量の片岩粒を、4・5は金雲母を含む。

17～24は勝坂 2 式土器である。17・21・22は2本の平行する隆帯で抽象文状の文様が施された土器である。隆帯にはいずれも刻みが施され、空白部分を17は刺突文、21は平行沈線で充填している。22は円形の貼付文や印刻による鋸歯状文が施され、隆帯上には縄文 LR が施されている。18～20は区画文を構成する隆帯や平行沈線にそって幅広の押引文が施される土器で、押引文の縁には半截竹管による刺突文が施される。23は平行沈線による区画文内に、印刻による鋸歯状文が施された土器で、鋸歯状文には刻みが施されている。24は隆帯による横帯区画内に楕円区画文が施された土器で、区画内は縦位の沈線で充填している。

大木式土器 (第114図28～40)

縄文を地文に、隆線や押引文で文様が施される土器で、15点が出土した。口縁部は内湾し、口縁上端が外反して内面に陵をもつものが多い。大半が小片のため文様構成は不明であるが、ペン先状あるいはヘラ状の押引文を特徴としている。31や35は隆帯で区画文が構成され、隆線にそって押引文が施されている。29では口縁部をめぐる2条の押引文下に、半截竹管による刺突文が施されている。38・39は、胴部に隆線による懸垂文を施し、そこから2本を単位とする押引文や沈線を斜位に施している。40は縄文施文部を2本の押引文で画している。地文は、29～33・35・39が LR、36～38・40が RL、34が複節 R LR である。なお、40は胎土に多量の金雲母と砂粒を含む。以上の特徴から、いずれも大木 8a 式に比定されよう。

加曾利 E 式土器 (第115図～第120図)

本遺跡で主体を占める土器群であり、1式～4式土器が出土している。遺構外からも多量の土器が出土しており、特に100・101号住居址上面や121号住居址周辺からは、器形復元が可能なものも出土している。分布はほぼ全域に認められるが、特に2区・3区に集中して認められた。

III 検出された遺構と遺物

第115図1、第116図1～21は加曾利E 1式土器である。第115図1は、C-48グリッドから一括出土した土器である。器形は、胴部が弱く張るキャリパー状の深鉢で、口縁部の約 $\frac{1}{2}$ を欠損している。文様は、口縁部を隆帯による円形と楕円形の区画文で構成し、円形区画内には沈線による円形文、楕円区画内には上端に波状沈線を施している。頸部には3本の沈線をめぐらし、その下に波状沈線を1本施して以下にLの捺糸文を縦位に施文している。また、口縁部には同捺糸文を横位に施している。第116図1は、口縁部に太い隆帯で長楕円形の区画文を施した土器で、連結部は突出して突起状を呈す。2～5は、口縁部文様帯を口唇部と一体化して突出した土器で、文様帯には渦巻文を伴う沈線をめぐらし、外縁部には刻みを施している。5は隆線と同様の文様が施されており、古手の様相を呈する。なお、4・5は頸部に縄文RLが施されている。16～8は強く内湾する口縁部に隆線による渦巻文が施された土器で、7は渦巻文が突出し、直下に鋸歯状沈線が施されている。9～11は隆帯による楕円状の区画内に、沈線による角ばった渦巻文が施された口縁部破片である。9は口縁上端が外折する特徴的な形態を呈する。12は口縁部を隆帯で横帯区画し、隆帯の内側にそって鋸歯状文を施した土器で、鋸歯状文間には波状沈線が施されている。13・14は口唇下に幅広い無文帯をもつ土器で、13は無文帯下に鋸歯文をめぐらし、以下にLの捺糸文を施している。14は無文帯下に高い隆帯をめぐらし、鋸歯文のかわりに波状沈線を施して、以下にRの捺糸文を施している。15はキャリパー状を呈する口縁部破片で、口縁部に2本の隆帯によるS字文を連結して施している。地文はLの捺糸文である。16・17は半截竹管による3～4条の集合沈線で文様を施した胴部破片である。地文は16がRL、17がLRの縄文である。18～21は頸部破片で、18～20は隆帯、21は沈線をめぐらしている。18は頸部下に隆帯による懸垂文を、19は口縁部に懸垂文を施している。また、18・21は頸部をめぐる隆帯や沈線の下に鋸歯状沈線を施している。地文は18・21がL、19・20がRの捺糸文である。

第115図4、第116図22～26、第117図1～11は加曾利E 2式土器である。第115図4はキャリパー状を呈する小型深鉢の口縁部破片で、口縁部には隆帯による渦巻文が施されている。第116図22～26もキャリパー状を呈する深鉢の口縁部破片である。22は口縁部に両端部が蕨手状を呈する隆帯文を施し、空白部を縦位の沈線で充填している。なお、隆帯文は口縁部文様帯を区画する隆帯に2本の隆線で連結している。23は口縁部文様が口唇部にせり上がっている。24～26は口縁に突起をもつもので、突起下には隆帯や沈線による渦巻文が施される。地文は、22・24・25がRL、23が0段3条RLの縄文である。第117図1は口縁部に隆帯で楕円区画文を施した土器で、区画内に矢羽根状の沈線を施している。2は口縁部が内湾する土器で、胴上半部に隆帯による大きな渦巻文が施される。3は外反する頸部破片で、頸部文様帯下に3本の沈線をめぐらし、胴部には沈線による渦巻文を伴う曲線的な文様が施される。4・5は2本の隆帯による懸垂文が施された胴部破片で、5では渦巻文が伴っている。6～10は3本の平行沈線や波状沈線による懸垂文が施された胴部破片で、7には小さな渦巻文が、8・10には大きな渦巻文が、懸垂文とともに施される。地文は、2・5～8がRL、4がLR、3が0段3条RLの縄文、9・10がLの捺糸文である。11は蛙頭状を呈する形象把手である。目の部分は円孔と沈線による縁取りで表現され、頭部にはペン先状の沈線が施されている。また、裏面には円孔が認められる。把手下には隆帯と沈線による渦巻文が施されているものと思われる。

第117図12・13、第118図1～14は加曾利E 3式土器の古い段階に比定される。第117図12・13はキャリパー状を呈する深鉢の口縁部破片で、いずれも波状口縁を呈す。口縁部は隆帯と沈線による波頂下の渦巻文と楕円状の区画文で構成され、胴部には2～3条の平行沈線による懸垂文が施されている。地文は2点とも縄文RLで、胴部沈線間の磨り消しはなされない。第118図1・2は、口縁部を隆帯で区画し、区画内に隆帯による円形文を施した土器である。1は円形文下胴部に幅の狭い磨り消し縄文による懸垂文を施している。地文は

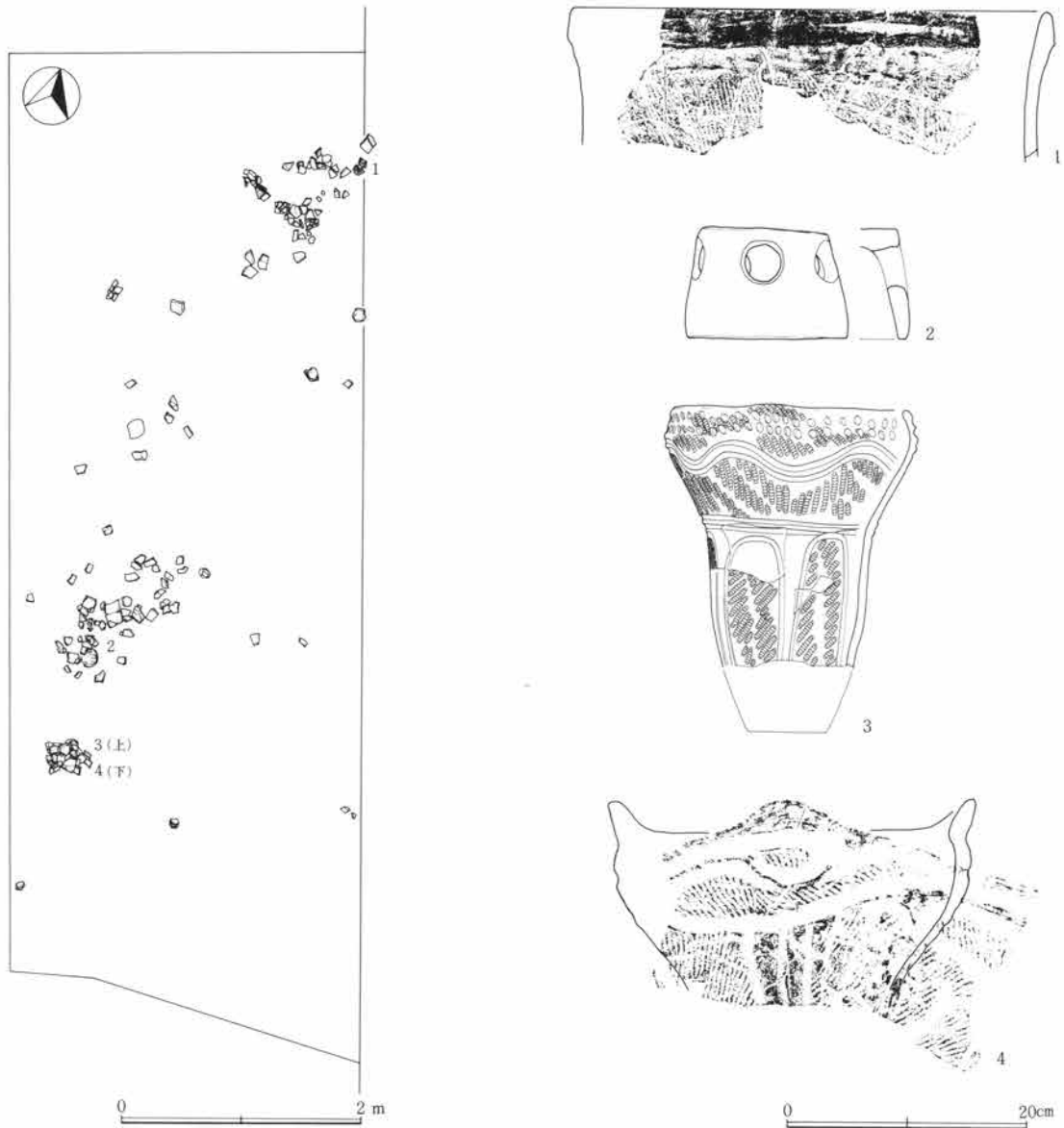
1がRL、2がLRの縄文で、1は口縁部には横位、胴部には縦位に施している。3～6は口縁部に渦巻文等の文様帯をもたない土器である。3～5は口唇下に無文帯を置いて1～2条の沈線をめぐらし、そこから沈線による懸垂文が施されている。6は胴部に2本の平行沈線による懸垂文のみを施した土器である。地文は3～5がLR、6がRLで、いずれも沈線間は磨消されない。7は口唇下に無文帯を置いて交互刺突による鋸歯文と2本の沈線をめぐらし、以下にLの撚糸文を施した、連弧文土器の口縁部破片である。8～11は深鉢の胴部破片である。8・9は2～3平行沈線による懸垂文が施されたもので、沈線間の磨り消しは認められない。10は沈線による渦巻状の文様が施されている。11は2本の波状沈線を、横位・縦位に施している。地文は8がLの撚糸文、9～11は条線である。12～14は連弧文土器である。連弧文はいずれも3本の沈線に施されている。地文は12が縄文RL、13がLの撚糸文、14が条線である。

第111図1～4、第115図2・3・5・7・8・10、第118図15～18、第119図は、加曾利E3式土器の新しい段階に比定される土器である。第111図の4個体は、先述のように100・101号住居址上面の黒褐色土中からほぼ同レベルで一括出土した土器である。1は口縁部がやや外反する深鉢で、口縁には折り返し状の肥厚帯をもち、胴部には縄文LRを地文に、半截竹管による斜縞子状の沈線が施されている。なお、口縁部肥厚帯下の文様は2cmほどの幅で磨り消されている。2は体部上位に5つの円形透しをもつ台形土器である。3はキャリパー状を呈する深鉢で、底部を除く $\frac{1}{2}$ が出土した。文様は、口縁部に2列の円形刺突文と2本の沈線による波状文をめぐらし、胴括れ部に2本の沈線をめぐらして文様帯を区画し、以下に沈線によるアーチ状の区画文を施している。地文は縄文RLで、胴上半には横位、下半には縦位に施している。なお、縄文は充填縄文であり、沈線間には施されていない。4はキャリパー状を呈する深鉢で、胴上半部の $\frac{1}{2}$ が出土した。4単位の波状口縁を呈す。口縁部文様は太沈線による渦巻文と楕円区画文を入り組み状に連結して構成し、胴部に3本の沈線による懸垂文を、渦巻文下に施している。地文は縄文RLで、口縁部区画内には横位、胴部には縦位に施し、胴部沈線間の縄文は磨り消している。

第115図2・3もキャリパー状を呈する深鉢である。2は胴上半部 $\frac{1}{4}$ の大型破片である。口縁部文様帯は隆帯と沈線による渦巻文と楕円区画文で構成され、胴部には幅広の磨消し縄文懸垂帯が施される。地文は縄文LRである。3はD-24グリッドから倒置状態で出土した土器で、胴下半部を欠損している。文様は2と同様だが、口縁部文様は5単位で構成され、胴部懸垂帯は9単位施されており、1ヶ所だけ横位に連結している。地文は複節縄文RLRである。5・7は口縁部が弱く外反する深鉢で、5は口縁部の $\frac{1}{2}$ 、7は胴上半部の $\frac{3}{4}$ が出土した。いずれも口縁部文様帯を隆帯と沈線による渦巻文と楕円区画文で構成し、胴部には磨消し縄文懸垂帯を施している。地文は2点とも縄文LRで、7は縄文施文後に条線による波状文を重複施文している。8は3の北側1mに近接して出土した土器である。胴部中程が括れた小型深鉢で、胴下半部と口縁の一部を欠損している。口縁は4単位の波状を呈し、口縁部に2列の刺突文をめぐらして、胴部に沈線でアーチ状に区画された充填縄文帯を8単位施している。縄文は複節RLRである。10は磨消し縄文懸垂帯を13本施した深鉢の胴下半部である。地文は縄文LR。

第118図15～18は、渦巻文と楕円区画文で口縁部文様帯を構成する深鉢の口縁部破片である。15は胴部に充填縄文帯による懸垂文がみられる。17・18は口縁に外反する山形の突起が付く。口縁部文様は沈線のみで施されるようになり、渦巻文は楕円化している。区画内を充填する縄文は、15が複節RLR、他はRLである。第119図1・2・4～7は、アーチ状の区画懸垂文で文様を構成する土器である。いずれも口縁部が内湾する深鉢で、口縁部文様帯を喪失している。1・2は2本の平行する沈線で区画文を構成し、沈線間以外は縄文RLが施される。縄文は口唇下一帯のみを横位に、以下は縦位に施している。4は口唇下に縄文帯をめぐら

III 検出された遺構と遺物



第111図 A'-21・22グリッド (100・101号住居址上面) 出土遺物

し、その下にアーチ状の区画文を施した土器で、縄文はRLである。5は口唇下に1本の沈線を、6は円形の列点をめぐらした土器で、6はアーチ状の区画文間に蕨手状懸垂文が施される。縄文はともにLRで、5は区画外、6は区画内に施されている。7は沈線によるアーチ状の区画懸垂文のみが施された土器で、区画内には複節縄文LR Lが充填されている。第119図3は波状口縁を呈する土器で、口唇下に1本の沈線をめぐらし、胴上半部に沈線で区画された磨消し縄文帯による渦巻文が施される。縄文はRLで、口縁部には横位、胴部には縦位に施文される。8は上端がアーチ状に連結した懸垂文が施された土器で、懸垂文間には波状条線が施されている。9～13は連弧文土器である。口唇下に、9は2本の沈線、10は1列の列点と沈線、11は1列の列点、12は列点を伴う2本の沈線、13は2列の列点を各々めぐらし、胴部に2～3本の沈線による連弧文を施している。10・11・13は連弧文が波状化している。また、9は連弧の波頂下に波状沈線を垂下している。地文は9が波状条線、10・12・13が縄文RL、11が縄文LRで、いずれも縦位施文である。なお、10・



第112図 遺構外出土土器 (1)

III 検出された遺構と遺物

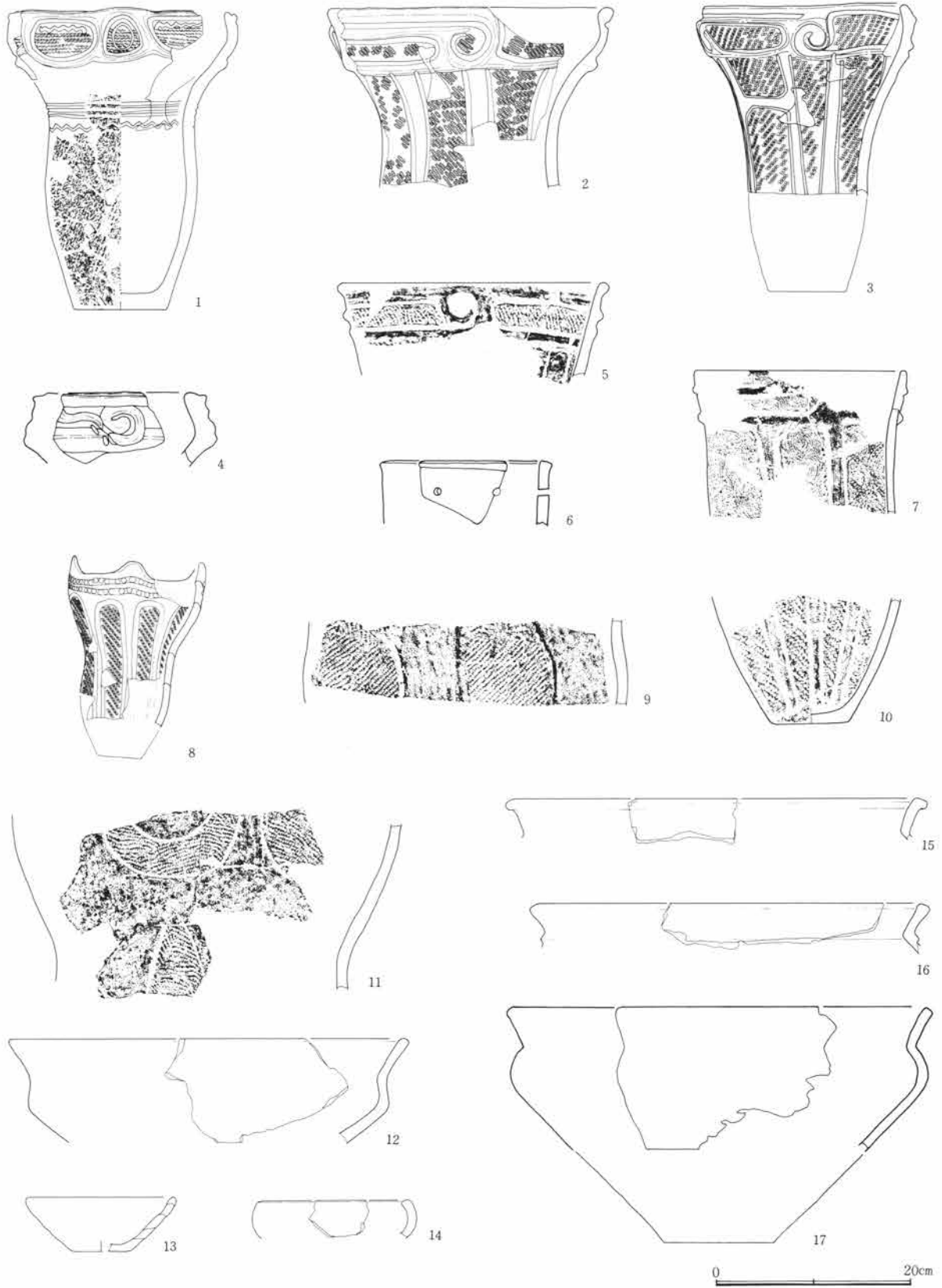


第113図 遺構外出土土器 (2)



第114図 遺構外出土土器 (3)

III 検出された遺構と遺物

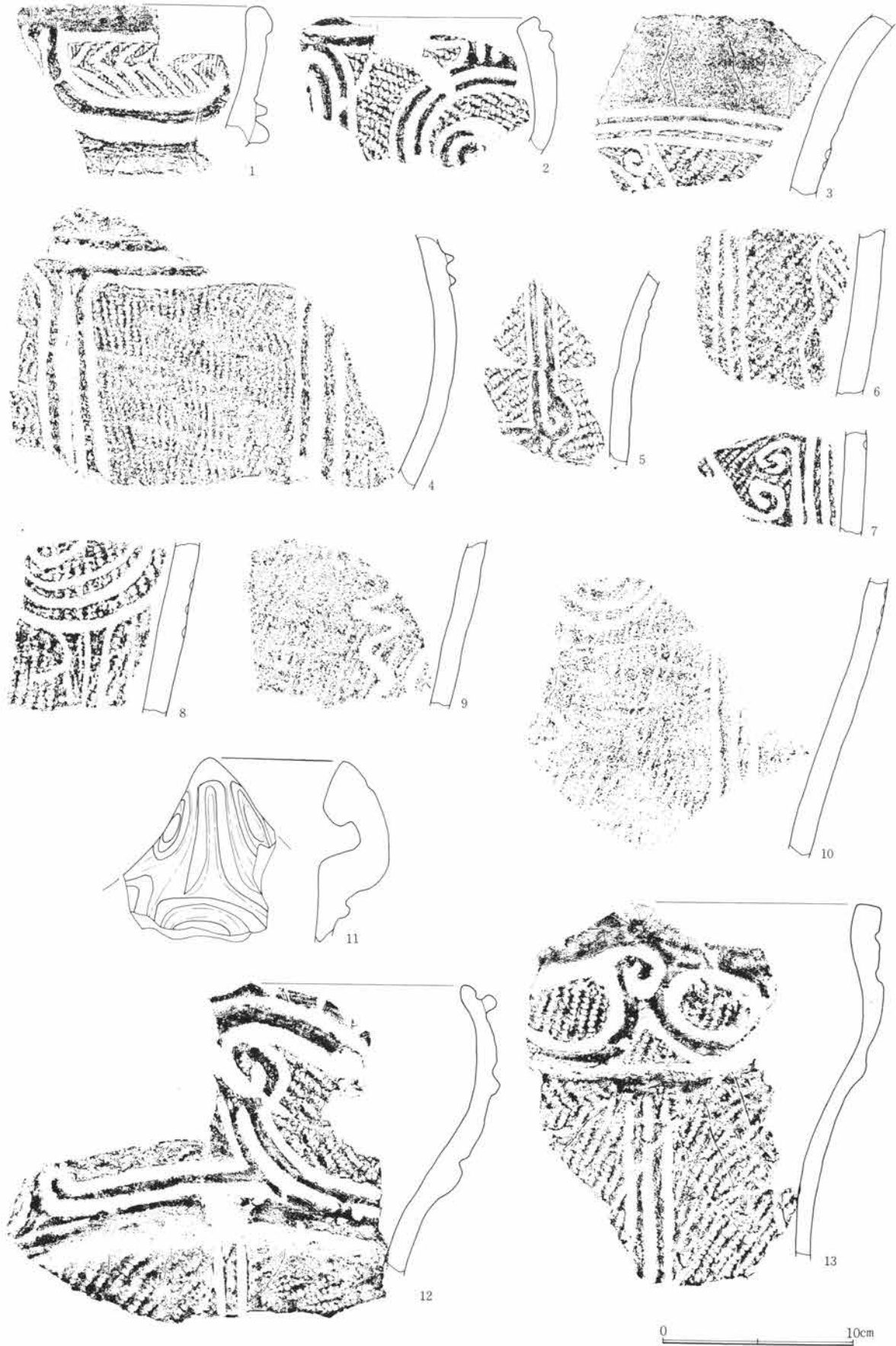


第115図 遺構外出土土器 (4)(4は $\frac{1}{3}$)

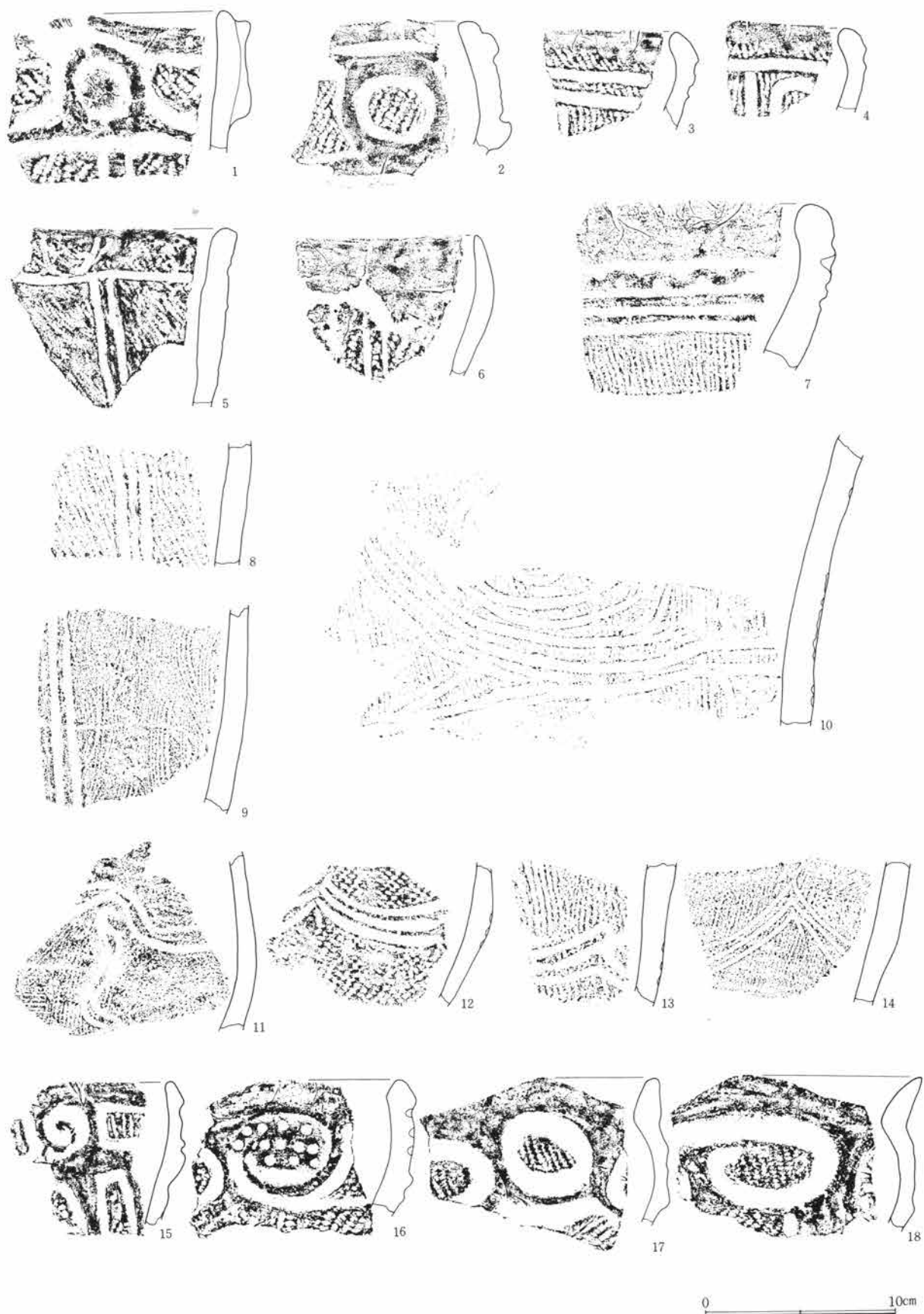


第116図 遺構外出土土器 (5)

III 検出された遺構と遺物

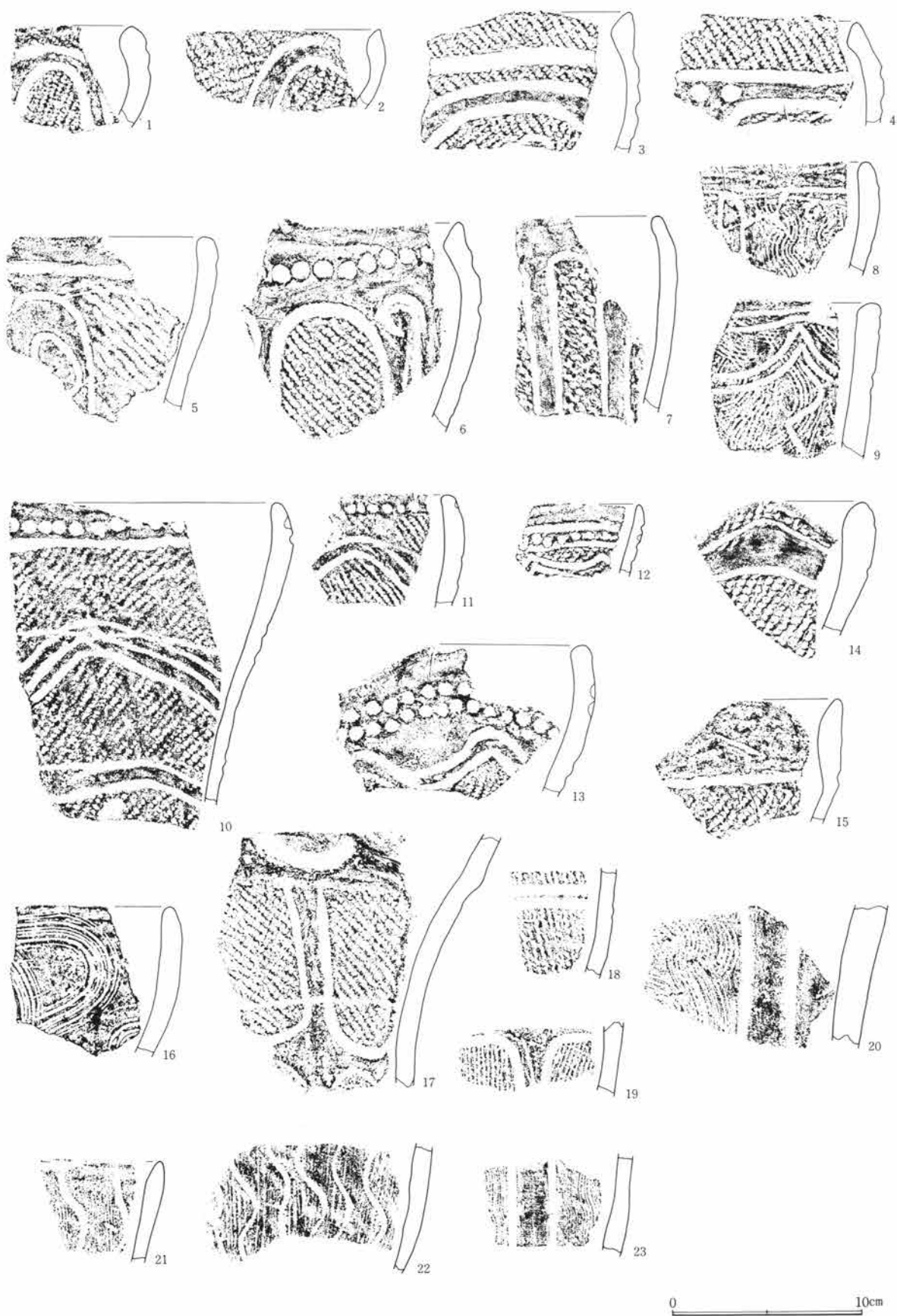


第117図 遺構外出土土器 (6)



第118図 遺構外出土土器 (7)

III 検出された遺構と遺物



第119図 遺構外出土土器 (8)

1 縄文時代の遺構と遺物



第120図 遺構外出土土器 (9)

III 検出された遺構と遺物

11・13は沈線間の縄文を磨り消している。14・15は波状口縁を呈する土器で、14は口唇下に磨り消し縄文帯をめぐらしており、15は口唇下に1本の沈線をめぐらして縄文施文部を区画している。縄文は14がRL、15がLRである。第119図16・20は条線が施された土器の口縁部破片である。20は波状沈線による懸垂文が施される。21は20の胴部破片である。16は口縁部文様帯をもつ土器の胴部破片で、上半にはU字状の区画文、下半にはアーチ状の区画文が施される。地文は縄文LR。17・18はRの撚糸文が施された胴部破片である。17は2本の沈線が横位に施され、沈線間の撚糸文は磨り消されている。18はアーチ状の区画文で構成される。19・22は条線を地文に施した胴部破片で、いずれも幅広の沈線区画無文帯が施されている。

第115図10・12、第120図1～6は加曾利E 4式土器である。

第115図10、第120図1～4は断面三角形の微隆線で文様を施文した土器である。10はアーチ状の区画文が施された胴部破片である。1は内湾する口縁部破片で、口唇下に幅広く無文帯をおいて微隆線をめぐらし、胴部に鋭角なアーチ状の区画文を施すものと思われる。2は直線的に開く口縁部破片で、口唇下4cmほどのところに微隆線をめぐらし、その間に羽状縄文を施している。4は波状口縁を呈する土器で、波頂部にはつまみ上げたような小突起が付く。また、波頂下には2本の平行する微隆線によるアーチ状の区画文が施される。地文は、10・2・4がRL、1・3がLRの縄文である。

第115図12、第120図5・6は沈線で文様を施した土器である。12は胴部中程が括れる深鉢で、胴上半部は充填縄文帯によるJ字文、下半部は尖端が鋭角なアーチ状の区画文で構成される。5は内湾する口縁部破片で、口唇下に無文帯がおかれ、以下にアーチ状の区画文が施される。6は注口付土器の注口部破片で、充填縄文帯で文様が構成される。地文は、10・6がLR、5がRLである。

第120図8～12は、曾利系の土器である。いずれも口縁部が内湾し、頸部が括れて胴部が弱く張る深鉢形を呈する。口縁部に斜位の沈線を施して、頸部に指頭状圧痕を施した隆帯をめぐらし、胴部には縦位の沈線を施した後に、同隆帯による懸垂文を等間隔に施している。7・10・12の沈線は、半截竹管で施されている。また、8は口唇裏面に段をもち、口唇部には刻みが施されている。いずれも加曾利E 3式に比定されよう。

第115図13～18、第120図13～21は浅鉢形土器である。第115図13～18は無文の浅鉢である。13は頸部と胴上半部に弱い屈曲をもつ。14・15は小型の浅鉢で、14は皿状、15はワン状を呈す。16は頸部がくの字状に折れ曲がり、口唇部が外折する形態を呈す。17・18は胴上半部が強く内湾し、頸部がくの字状に折れ曲がって口縁部が外傾する形態を呈す。いずれも内外面とも入念に研磨されているが、14は外面に輪積みの凹凸がやや残っている。なお、塗彩痕の残っているものはない。第120図13～21は有文の浅鉢である。13は口縁部が強く内折した土器で、口唇下に2列の角押文をめぐらし、その外側に斜位の同角押文を施している。14は口縁部がくの字状に内折し、口唇部が外傾する土器で、口縁折曲部に押圧を施した隆帯をめぐらしている。15も口縁部が内折する土器で、口縁に隆帯で楕円形の区画文を施している。16は内湾する口縁部破片で、口唇外面に低い隆帯をめぐらし、口縁部には円形状の隆帯が施される。17も内湾する口縁部破片で、幅広い口唇部に3本の沈線をめぐらしている。18も口唇上面が幅広く施けられたもので、口唇上面および直下に沈線による同一の文様が施されている。19は口縁部が強く内湾し、口唇部が外傾する土器で、口唇外面には肥厚帯が施され、口縁部には低い隆帯による文様が施される。20は口縁部が強く外折した土器で、口縁裏面に2本の太沈線をめぐらしている。21は口縁部が内折した土器で、口縁部に沈線による渦巻文と縦位沈線が施されている。16・17・19～21は、内外面とも入念に研磨されているが、他のものは内面のみ研磨が施されている。また、16・19・21は内外面に塗彩痕が認められる。以上の土器は、13が阿玉台II式に、他は加曾利E式の古い段階に比定されよう。

後 期

称名寺 I 式～加曾利 B 2 式までの土器群および石器等が出土しており、遺構は住居址 2 軒・土坑 9 基を検出した。出土土器のなかで主体を占めるのは称名寺 II 式～堀之内 I 式期の土器群であり、遺構の大半もこの時期のものである。分布は 1 区および 2 区の西側部分に認められ、特に 19～24 ラインに遺物の集中が認められたが、明確な包含層をとらえるまでには至らなかった。

1) 住 居 址

5 号住居址 (第121図)

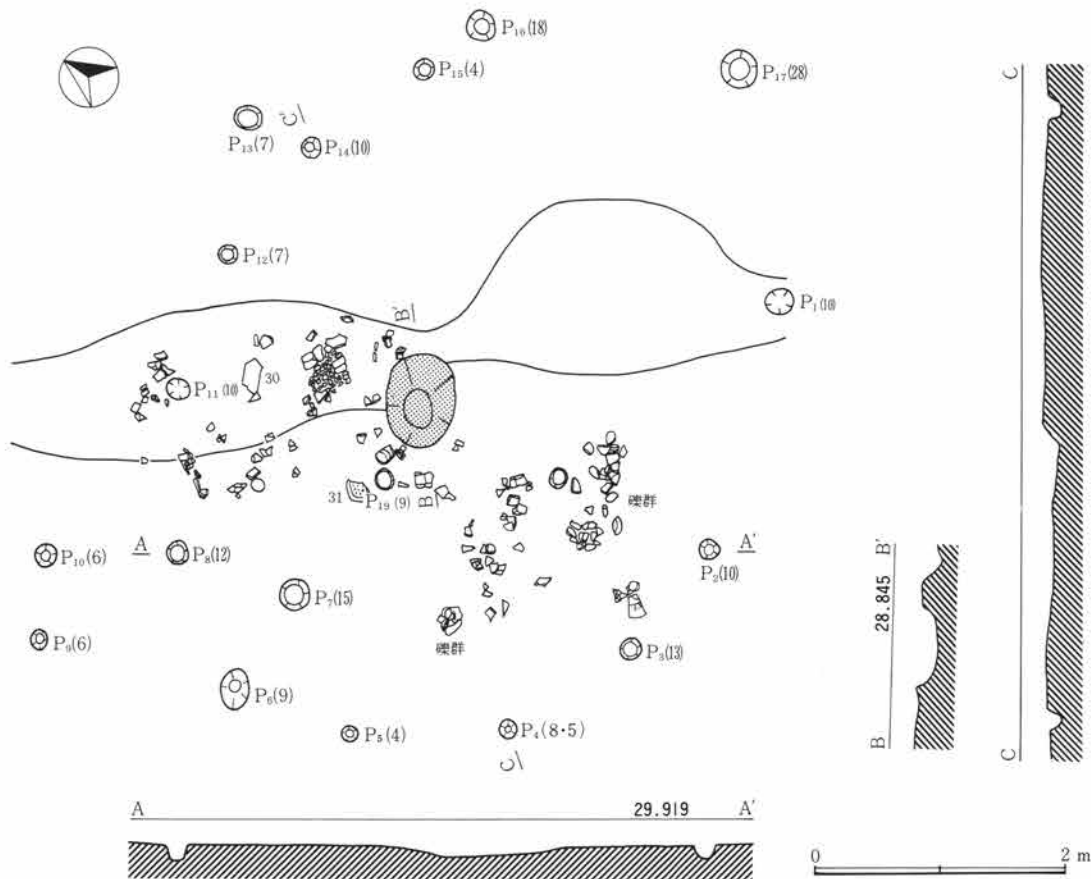
位置 D-12グリッドを中心に位置する。埋没沼縁辺部から約3.5mの位置にあり、南東約6mには7号土坑がある。

形状 不明。

床 炉の検出面を床と想定できるが、床面の確認は困難であった。

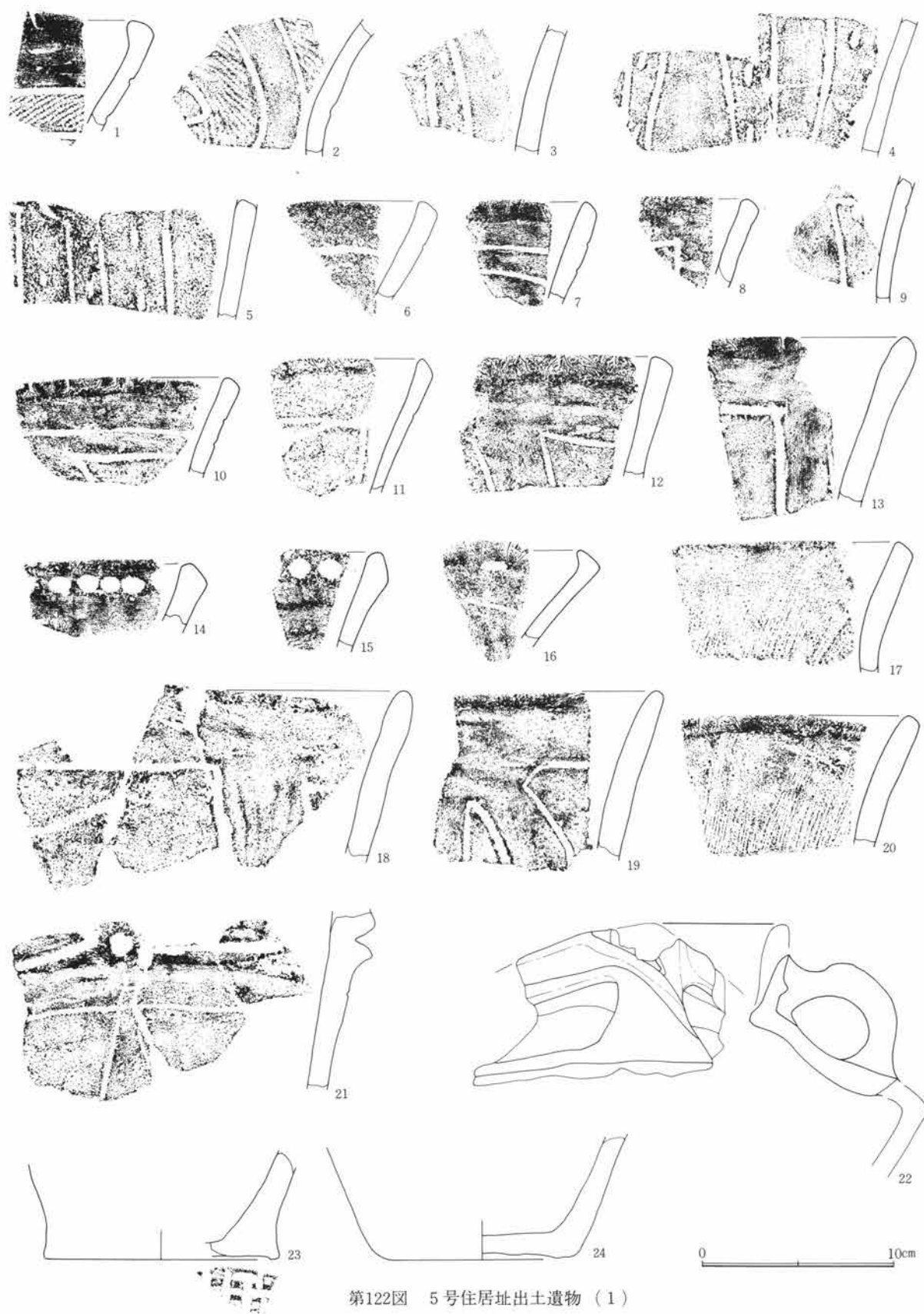
柱穴 炉の検出面で確認できなかったため、さらに10cmほど掘り下げを行い、合計17本の小ピットを検出した。これらのうち、P₂～P₆・P₁₃・P₁₅の7本は炉を中心とする半径2.5mの線上にのっており、またそれぞれの柱間がほぼ均等であることから、本住居址に伴う可能性が強い。

炉 床面を18cmも掘り込んだ深い炉で、75×55cmの東西に長軸をもつ楕円形を呈す。底面や覆土中に焼土



第121図 5号住居址

III 検出された遺構と遺物



第122図 5号住居址出土遺物(1)

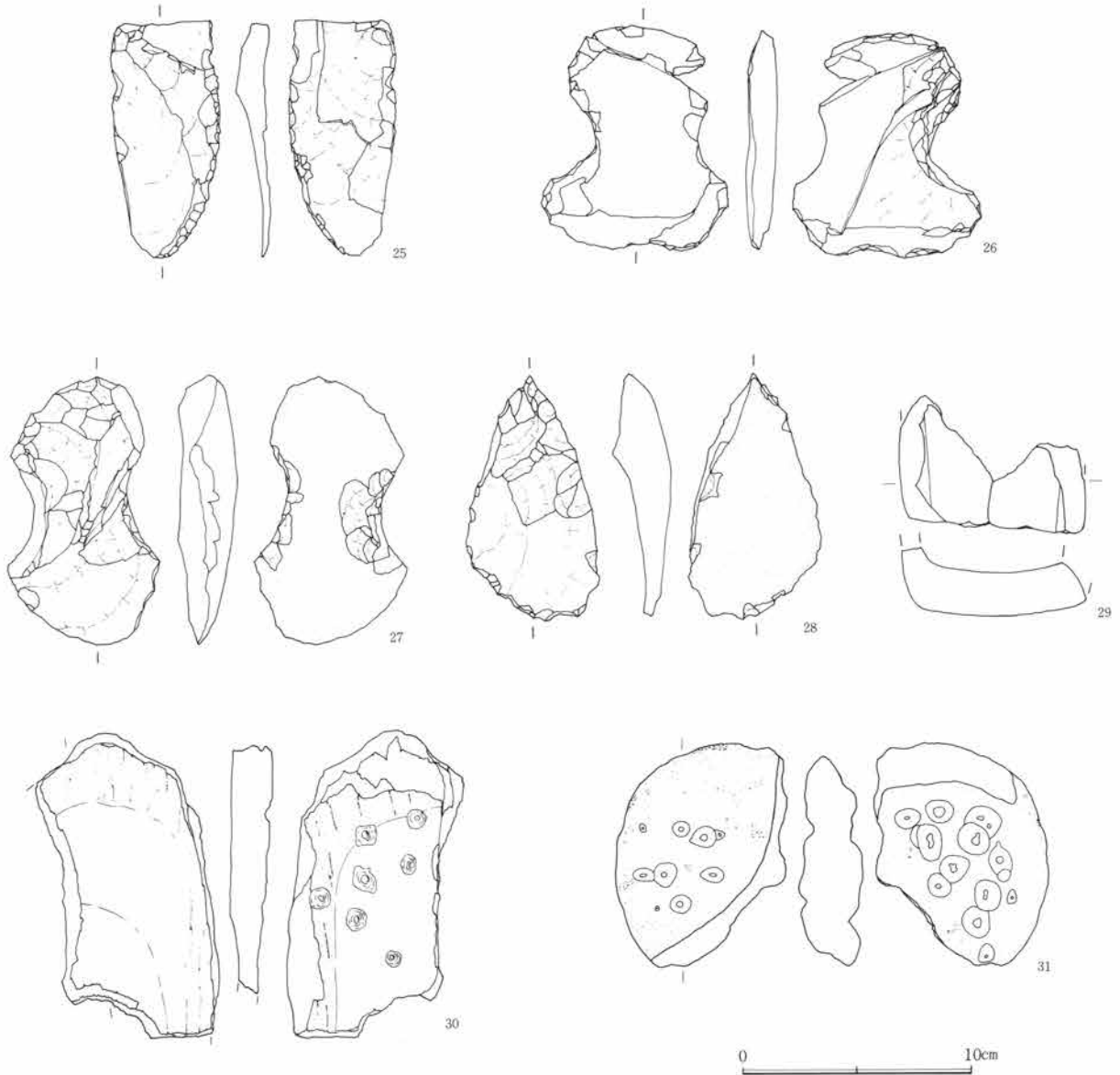
はほとんど認められないが、立ち上がり部分は強い加熱のため2cmほどの厚さで焼土化していた。

遺物の出土状態

遺物の大半は、炉辺を中心に住居の西半部から出土した。出土レベルは、炉の確認面よりやや上面のものが多く、主な遺物としては、炉の西側50cmのところから石皿の破片（第123図31）が、また炉の北側1mからも石皿の破片（30）が出土した。炉の北側50cmから大型の土器も出土しているが、摩耗がはげしく図化不可能である。なお、炉の南側1mほどのところから多量の破砕礫が出土している。

出土遺物（第122図・第123図）

1～21はいずれも深鉢の口縁部あるいは胴部の破片である。口唇部形態は、内側に突出するもの（1・16）、外削ぎ状を呈するもの（6～8・10～12・14・15・17）、円頭状を呈するもの（13・18～20）の3種類がある。これらの違いは器形の違いにも現われてくるようである。内側に突出するものは器壁が薄く、口縁部の外傾が強いが、外削ぎ状を呈するものは厚手のものもみられ、口縁部の外傾も弱くなっている。円頭状を呈する



第123図 5号住居址出土遺物（2）（29～31は1/6）

III 検出された遺構と遺物

ものはいずれも厚手の土器であり、口縁部の外傾はさらに弱い。口唇部に文様が施されるものは少ないが、14・15のように指頭状の浅い刺突が施されるものや、21のように円形の貼付文や沈線が施されるものもある。口唇下は幅広く無文帯とするのが一般的である。文様は2本の平行する沈線でJ字状・X字状の文様が施されるものと思われる。1・2は沈線間をLRの縄文で、3～5は1列の列点で、それぞれ充填している。17・20は全面に斜位の細かな条線が施されている。23・24は深鉢の底部である。

22は頸部がくの字状に強くくびれる土器である。口縁部は短かく外傾し、頸部には大きな橋状の把手が付く。口縁部に一条の隆線がめぐるようにある。

25・28は剥片石器である。25は横長剥片の一边を刃部としており、刃部には使用によると思われる摩耗痕が認められる。石質は25が頁岩で62g、28は黒色頁岩で130gである。

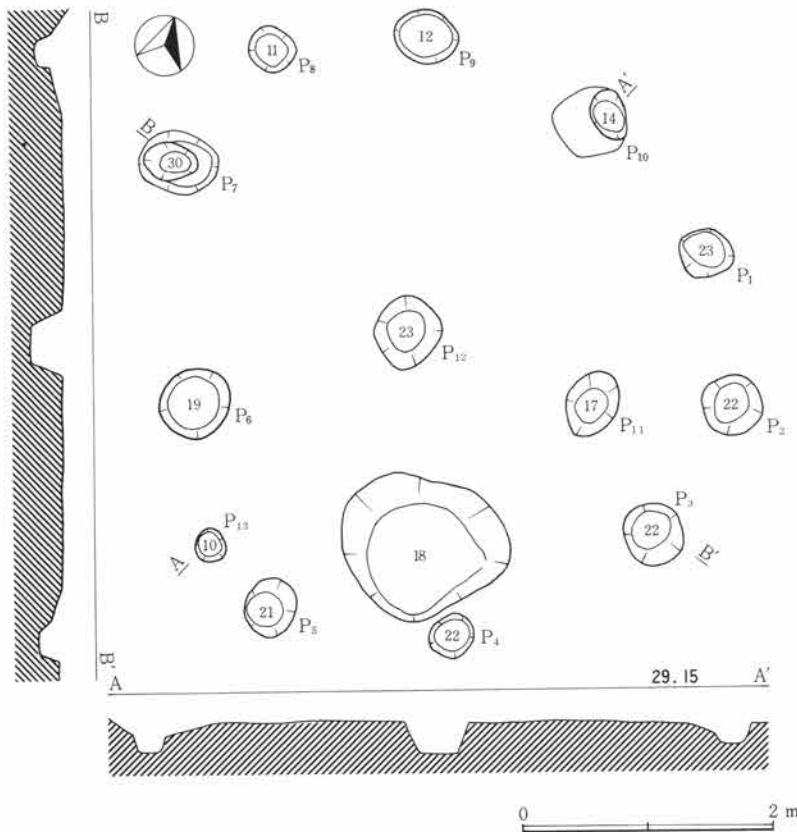
26・27は分銅型を呈する打製石斧である。27は刃部や縁辺部の調整が不十分である。未製品であろうか。石質は26が珪質準片岩で112g、27はホルンフェルスで179gである。

29～31は石皿で、いずれも欠損品である。30は薄い板状石を使用したもので、両面が使用されているが、片面に錐揉み状の凹穴が認められることから、この面が古い使用面であろう。31は多孔石に転用されたものであろう。石質は29・31が安山岩、30は雲母石英片岩である。

なお、この他に磨製石斧片1点、磨石2点、敲石2点、砥石3点が出土している。

所見

本住居址の時期は、出土土器から称名寺II式の段階に比定される。後世の攪乱を受けているため判然としないが、深い大型の炉は本地域における当該時期の特徴である。おそらく柱穴は12～13本めぐり、張り出し部を持つ可能性が強い。



第124図 115号住居址

115号住居址 (第124図)

D-18杭を中心に位置する。検出できたのは合計13本のピットのみである。そのうち、10本のピットは直径約5mの円形状にほぼ等間隔でめぐっており、その中央に直径55cmのピットが一つ認められた。ピットの深さは10～30cmのものが認められるが、20cmほどのものが多い。中央のピットからは焼土も検出されておらず、本遺構に確実に伴う遺物も出土していない。住居としての条件は整わないが、ピット列のあり方、および後期の土壇や遺物分布地点に近接していることから、5号住居址と近い時期の住居址と判断した。

2) 土 塚

後期に属す土塚は、4～7号・11号・21号・31号・90号・102号の9基を検出したが、7号・90号以外の土塚は調査上の不備から十分な調査ができなかった。なお、4～6号土塚の3基は、その後の検討で平安時代の井戸の可能性を考えるに至ったが、一応ここで扱っておきたい。

4号土塚 (第125図1、第126図1～4)

C-6グリッドに位置する。5号住居址の北西30m、埋没沼縁部から10mの位置にあり、同形態を呈する5・6号土塚と接近して一群を構成している。平面形は直径70cmの円形で、円筒状を呈す。深さは70cmで、底面は平坦である。確認面が他の遺構より下位の第VI層であるため、本来はもっと深い遺構である。底面は青灰色砂層を掘り込んでおり、覆土の大半は砂壤土である。なお、遺物は覆土中から称名寺2式期の土器小破片が数点出土したのみである。

5号・6号土塚

いずれも近接する4号土塚と同じ様相である。形態も同様であるが、4号土塚に比べていずれもやや大型であり、直径約1m、深さ0.9～1mである。なお、5号・6号とも遺物の出土は認められなかった。

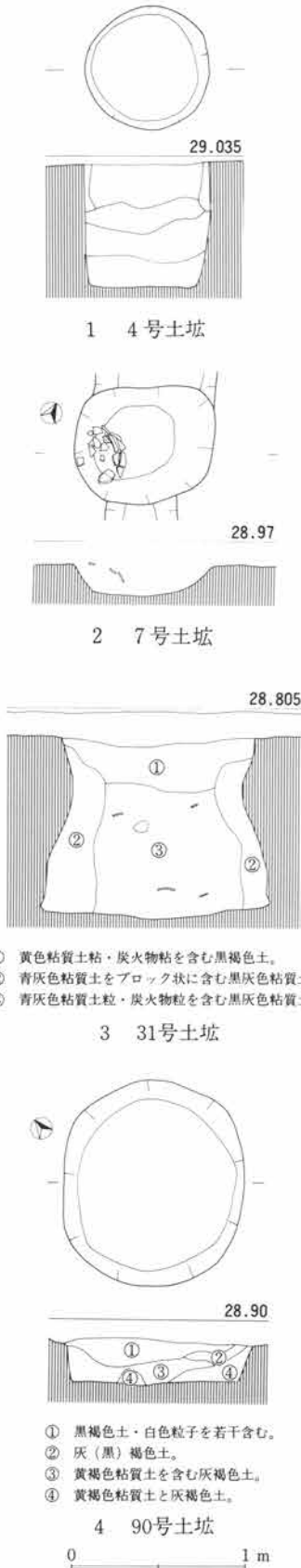
7号土塚 (第125図2、第126図5)

D-14グリッドに位置する。北側5.5mに5号住居址がある。平面形は南西-北東方向に長軸をもつ隅丸方形で、規模は80×68cmである。深さは18cmで、断面形は皿状を呈す。長軸方向南西側立ち上がり部分から、浅鉢形土器(第126図5)が倒置状態で出土した。底部を欠く約半周部が残存しており、口縁は底面から若干浮いていた。土器は口縁部が内湾する無文土器で、口唇直下に沈線が1本めぐっている。堀之内I式土器である。

11号土塚 (第126図6～9)

E-4グリッドに位置する。6号土塚の北側10mのところであり、縄文時代の遺構では最も北西寄りにある。バックホーによる表土掘削時に検出されたが、調査上の事情から十分な扱いができなかった。形態は直径約1mの円形を呈し、確認面からの深さは60cmほどで円筒形を呈する。

遺物は大型破片を含む30点ほどの土器片、および石皿破片・打製石斧・磨石各1点が覆土中から出土した。6は胴部上半が弱く括れる大型深鉢の胴上半部破片である。文様は沈線によるJ字状・X字状のモチーフで構成し、モチーフ外の沈線間に一列の列点状刺突文を施している。7は口縁部が強く外反し、口唇部がくの字状に内傾する小型深鉢で、胴上半部半周分が出土した。文様は沈線によるパネル状区画文で3単位構成される。区画内には上半に小さなJ字状文と矢印状文を連結して施し、空白部を縄文RLで充填している。なお、J字状文に斜位の沈線を付加した蕨手状のモチーフは、堀之内I式土器にそのまま認められるモチーフである。8も7同様パネ

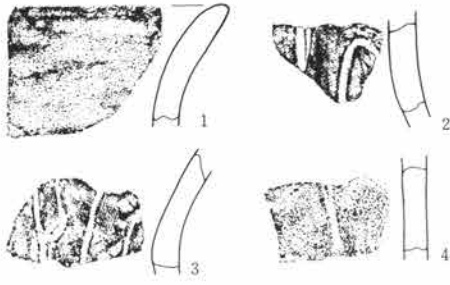


- ① 黄色粘質土粘・炭火物粘を含む黒褐色土。
- ② 青灰色粘質土をブロック状に含む黒灰色粘質土。
- ③ 青灰色粘質土粒・炭火物粒を含む黒灰色粘質土。

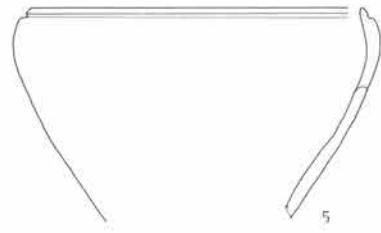
- ① 黒褐色土・白色粒子を若干含む。
- ② 灰(黒)褐色土。
- ③ 黄褐色粘質土を含む灰褐色土。
- ④ 黄褐色粘質土と灰褐色土。

第125図 土塚

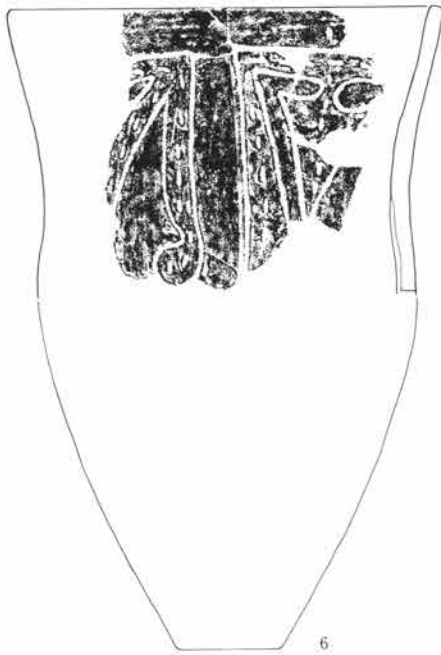
III 検出された遺構と遺物



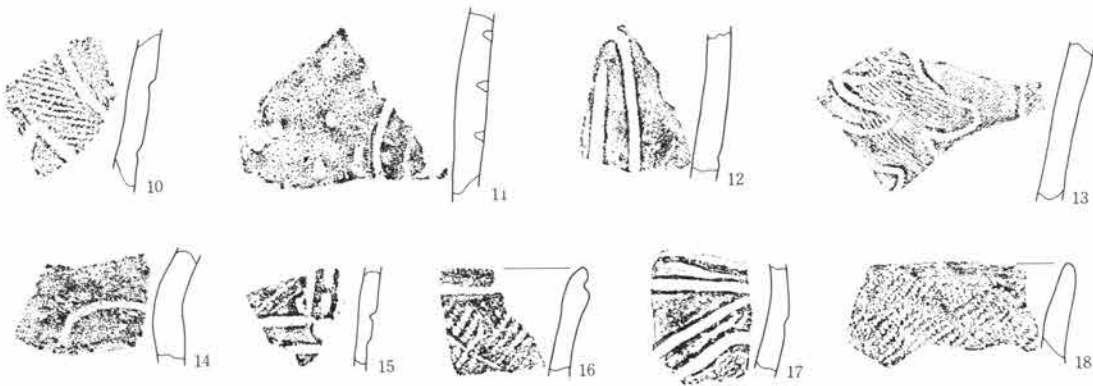
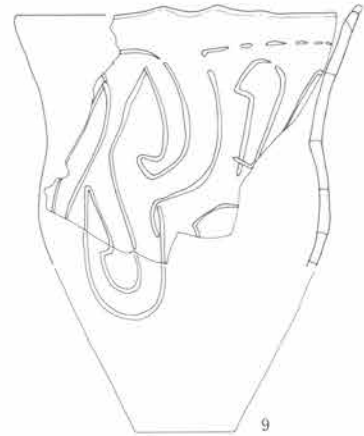
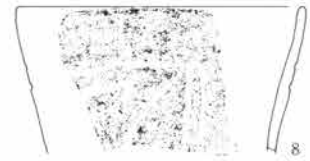
4号土坑



7号土坑



11号土坑

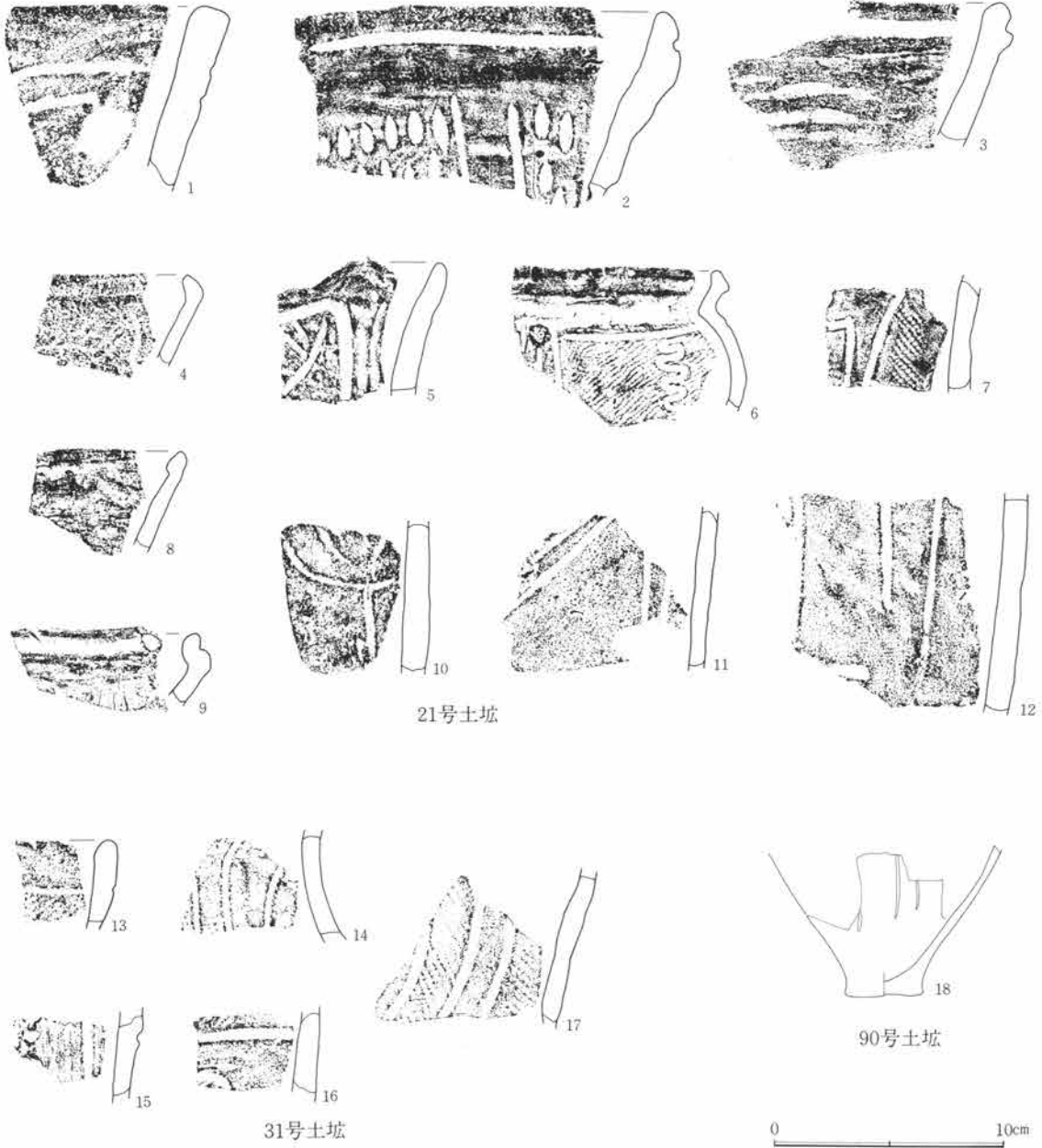


102号土坑

0 10cm

第126図 土坑出土遺物 (5~9は1/6)

1 縄文時代の遺構と遺物



第127図 土埴出土遺物 (18は1/6)

ル状区画文で構成される土器であろう。文様は沈線のみで施されている。9は胴上半が弱く括れる深鉢の大型破片で、口縁部に2個1対の山形状小突起が付く。文様は2本の平行する沈線によるJ字状文を2段に連結したモチーフを中心に構成されている。いずれの土器も口唇下に無文部を形成しており、文様はJ字状・X字状(矢印状)のモチーフを基調に構成されている。称名寺II式土器である。

21号土埴 (第127図1~12)

後期土器の集中出土地点にあたるD-19グリッドに位置する。南側3mに102号土埴、北側3.5mに115号住居址がある。本土埴は層(青灰色砂層)を深く掘り込んでいるため湧水が激しく、下半部の調査が不可能であった。形態は袋状を呈するらしい。遺物は覆土上面から、称名寺II式~堀之内I式期の多量の土器破片が出土した。6は頸部がくの字状に括れ、胴部が強く張り出る深鉢形土器で、胴部には縄文LRを地文に波状沈線を垂下させている。網取II式土器と思われる。

III 検出された遺構と遺物

31号土坑（第125図3、第127図13～17）

A-24グリッドに位置する。本土坑も層を深く掘り込んでいるため、セクションを図化した段階で、湧水により崩壊してしまった。形態は、平面形が上端部直径1.1mの円形を呈し、深さは1mで断面形が袋状を呈す。遺物は、覆土中から称名寺II式土器の小破片が少量出土したのみである。

90号土坑（第125図4、第127図18）

B-39グリッドに位置する。最も近い31号土坑から75m離れている。本地区は前期の遺構分布域にあたり、後期の遺物の出土はほとんど認められない。形態は、平面形が103cmの円形で、深さは21cmで底面は平坦である。遺物は底面付近から、称名寺II式期と思われる深鉢の胴下半部と礫1点が出土した。

102号土坑（第126図10～18）

C-20グリッドに位置する。北側3mにある21号土坑とともに、後期土器集中区内に位置する。本土坑も激しい湧水のため調査は不可能であった。遺物は覆土上半から30点ほどの称名寺II式～掘之内I式期の土器小片と敲石1点がまとまって出土した。

所見

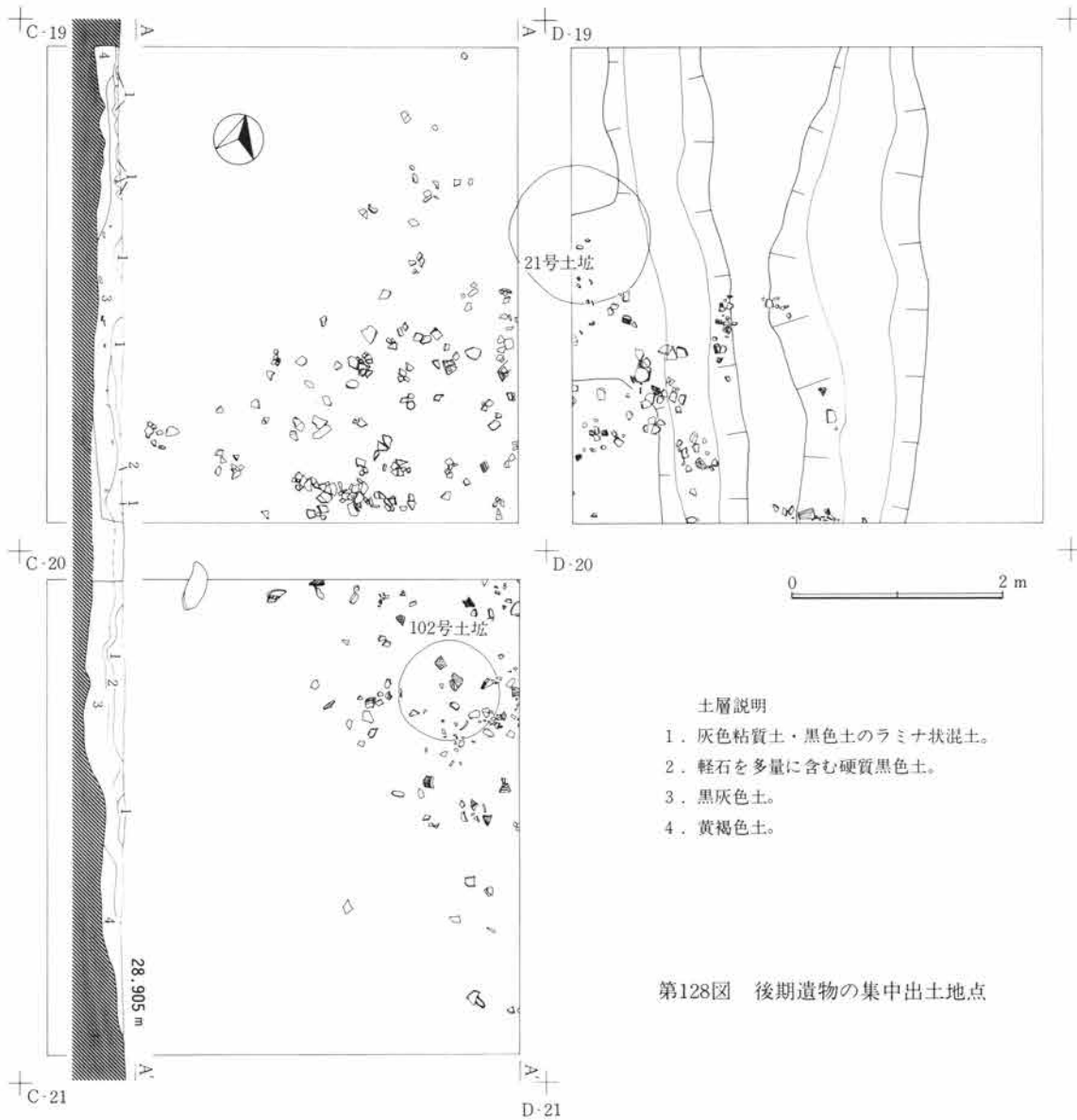
以上のように、本期の土坑は1～3区にわたって散在しており、単独で存在するものが多い。そのなかで4～6号土坑は同形態のものが近接して一群をなしており、特異である。このようなあり方は、本遺跡で検出された古墳・平安時代の井戸群と類似している。4～6号土坑はいずれも円筒状を呈し、底面は帯水層である青灰色砂層を深く掘り込んでいることから、井戸としての機能は十分可能と思われる。埋没沼との位置関係、平安時代の3軒の住居が近接していること、また古墳時代の井戸はいずれも直径50cm内外で深いことなどから、平安時代の井戸の可能性が高い。

また、7号土坑はその形態から墓坑と考えてさしつかえないであろう。その他の土坑は必要な情報が得られなかったが、袋状を呈すると思われる21号・31号土坑、および遺物が投棄された11号土坑は、貯蔵穴と考えられる。

3) 遺構外出土土器

後期では称名寺I式～加曾利B1式土器が出土しており、総数は約250点である。これらのなかで主体となるのは称名寺II式～掘之内I式土器で、全体の70%を占めている。後期の遺構のうち、時期を確定できるものは全てこの時期にあっている。分布は1～4区にわたって認められるが、90%以上が2区に集中しており、その他は各々数点づつにとどまる。2区のなかでも、特に中期の遺構が集中する19ライン～24ライン（第7図参照）に大半が集中している。包含層として把えるまでには至らなかったが、散存的な後期遺構の分布傾向とはやや異なって、集中範囲が明確に把握できることから、遺物集中区と把えておきたい。図示した土器の大半は、もちろん集中区からの出土遺物である。また、集中区のなかでも特に集中が著しい地点（第128図）があるため、若干説明を加えておきたい。この地点は、D-20杭をほぼ中心とする直径6mほどの範囲に認められる。D-20グリッドは攪乱を受けているため図化しなかった。D-19グリッドの溝状の落ち込みは自然地形である。遺物は②・③層中に包含されており、③層はこの部分で若干落ち込んでいる。また、この範囲内には21号・102号土坑が含まれており、土坑覆土中には②・③層が流れ込んでいる。遺物は、第130図10・11・14、第131図3・15、第133図1をはじめとする多量の土器破片、および少量の石器・礫が出土している。この地点の土層が落ち込んでいること、遺物が集中していることから、住居址の可能性も考えられるが、それを裏づける資料は得られなかった。

第129図1～14は充填縄文帯で文様構成される土器で、49点が出土した。称名寺I式とII式が含まれている



と思われるが、いずれも小破片のため判別できない。器形は胴部中程が括れ、口縁部が直線的あるいはやや内湾ぎみに開く深鉢形を呈する。口唇部は強く内折するもの（1・3・6）とそうでないものがある。9は小波状口縁を呈す。文様はJ字状・矢印状のモチーフを基調に構成されると思われる。14は刺突を施した隆帯を垂下させて、文様を縦位に区画する土器であろう。沈線区画内を充填する縄文は、3がRL、他は全てLRである。

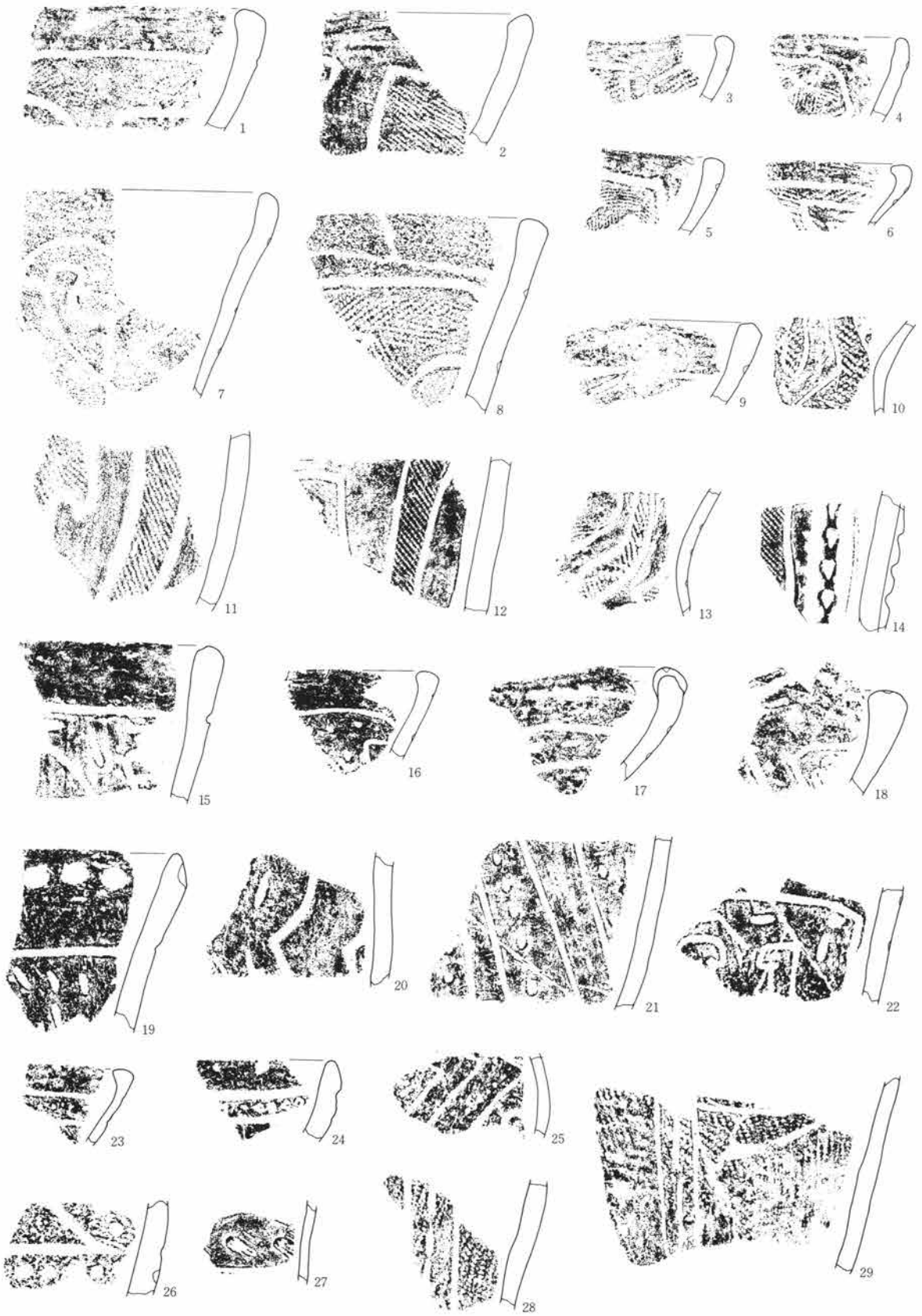
第129図15～29、第130図1～4は、沈線間に列点状の刺突文を施した称名寺II式土器である。69点出土している。器形・文様モチーフは充填縄文の土器と同様と思われる。口唇部形態も同様だが、17・18のように波頂部に刺突文を施したのものや、19のように外削ぎ状を呈する口唇部に指頭状の刺突文が施したものが認められる。沈線間に施される刺突文は、円形のもの（第129図23～26）、櫛状のもの（第129図27、第130図2）、線状のもの（第129図28・29等）などのバラエティがあり、また刺突の仕方も一列のものと充填するものとが認められる。第129図26は刺突文を施した沈線間にLRの縄文が充填されている。同図28・29は沈線施文前に縄文LRを全面に施している。線状の列点を伴う懸垂沈線は、同図14にみられる隆帯とその両側に施された

III 検出された遺構と遺物

沈線を簡略化したものであろう。

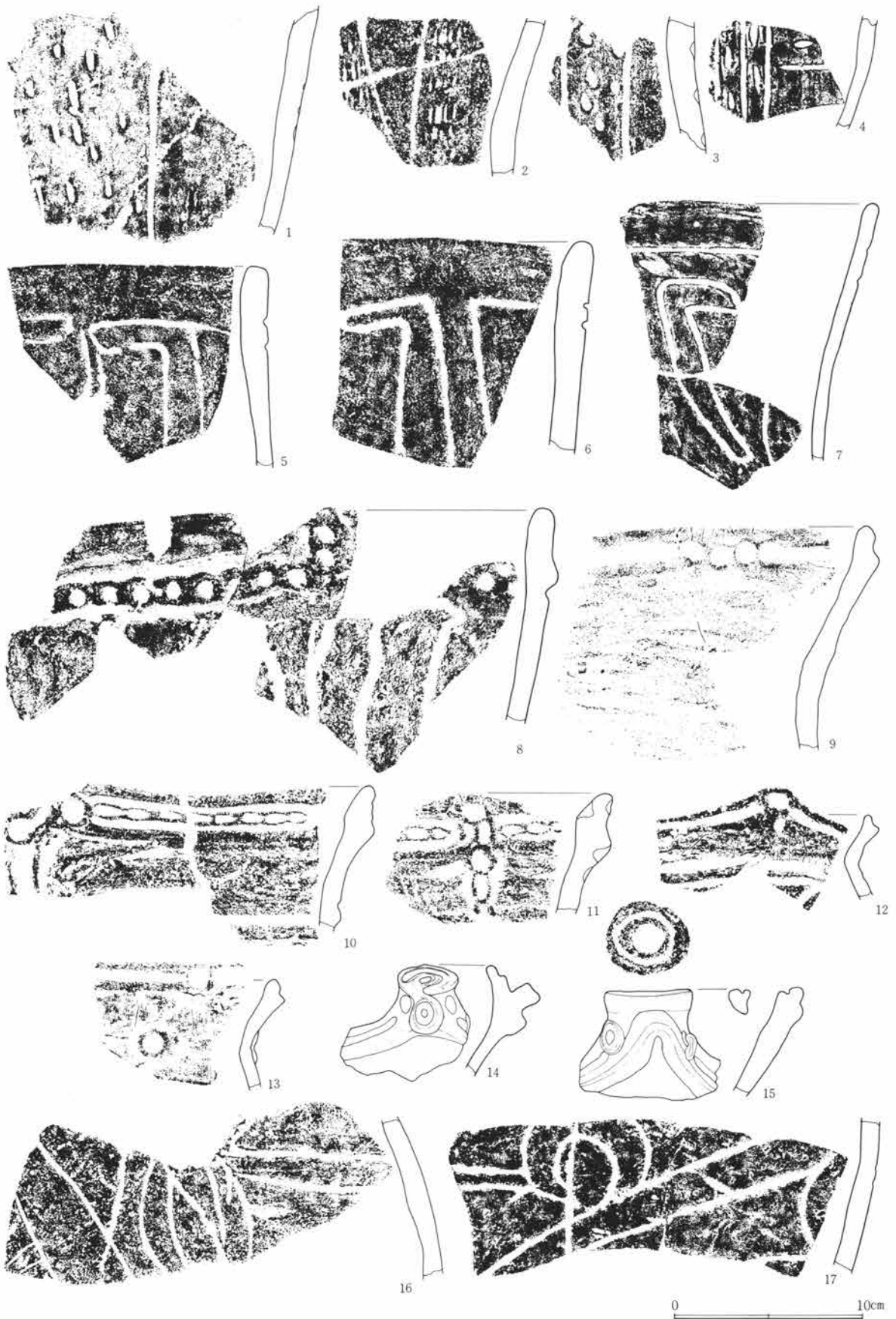
第130図5～7は、沈線のみで矢印状(X字状)のモチーフを描いた、称名寺II式土器である。38点出土している。5・6は胴部がほとんど括れない深鉢であろう。7は胴部中程が弱く括れ、上半が直線的に開く深鉢で、口唇下に幅広く無文部をおいて一条の沈線をめぐらし、文様带上限を画している。

第130図8～17、第131図1～22、第132図1～9、第133図1～8は堀之内I式土器である。総計74点が出土しており、称名寺II式土器についている。第130図8は口唇下に幅広く無文部をおいて刺突を施した隆帯をめぐらし、以下に沈線のみで文様を施した土器である。口唇下無文部には、同隆帯を縦位に施して口唇部と連結している。同図9～11、第133図2・3は、胴上半部が緩やかに括れる深鉢で、いずれも口唇部に文様帯をもつ。9は口唇部に刺突文と沈線による文様帯をもち、以下に指頭状の施文具によるナデを施した土器である。10・11は小波状口縁を呈す土器で、口唇部に列点を伴う沈線をめぐらしている。また、括れ部には2条の沈線をめぐらして胴部文様帯を画している。波頂下には両端に刺突を伴う孤状沈線を施し、そこから括れ部沈線に刺突あるいは沈線を施した隆帯を垂下している。2は口縁部の大型破片で、C-23～25グリッドから出土した。口縁には小把手が付けられ、口唇部をめぐる沈線は把手上で蕨手文を描いている。口縁部には斜位の連続施文短沈線を2段めぐらし、括れ部をめぐる沈線下にも同文様を施している。3は胴下半部に最大径をもつ深鉢で、D-20グリッドから出土した。文様は、口唇部に刺突文と沈線を施し、以下に縄文LRをまばらに施文した後に、波状あるいは雷状の懸垂文をやや斜位に垂下させている。器形・文様帯構成などの点で他とは異なる土器である。類例は下総地方に多い。第130図12～15、第131図1～6、第133図1・4～7は、頸部がくの字状に括れる深鉢で、頸部に沈線や刺突文をめぐらして胴部文様帯を画し、口縁部を無文化する土器である。波状口縁を呈する土器も多く、口唇部文様帯の発達したものが多い。第130図14・15、第133図1は、把手を伴う波状口縁の土器で、くの字に内折した幅広の口唇部には1～3本の沈線が施されている。14は把手上端が円形を呈し、中央に刺突が施されているが、直下に施された刺突を伴う円形貼付文と一体となって、8の字文を構成している。15は上端が環状を呈する把手である。1は円孔を施した舌状の把手と上端および正面に刺突を伴う円形の沈線を施した把手を1対づつ付けた土器である。舌状把手の裏面には両端に刺突を伴うC字状文が施されている。なお、各把手下には刻みを伴う隆線を垂下している。第133図4～6は平縁の土器で、口縁に把手あるいは突起をもつ。4は楕円孔を施した把手が付けられた土器で、口唇をめぐる沈線は把手の両側で渦巻状を呈す。頸部には3本の沈線をめぐらして文様帯を区画し、胴部には頸部沈線からつながる渦巻文が施されている。胴部の縄文はLR。5はD-22グリッドから横倒しの状態で一括出土した土器で、胴上半部の1/2を欠損している。口縁にはつまみあげたような2個1対の小突起が付けられ、突起間には3個1対の刺突文が施されている。なお、口唇をめぐる沈線の端部には刺突文が伴う。頸部には、4同様3本の沈線をめぐらし、小突起下には刺突を伴う円形の貼付文が施されている。胴部文様は、円形貼付文下の渦巻文と、その間に施されるJ字状文を伴うやや小さな渦巻文で3単位に構成され、各渦巻文からのびる3本の斜行沈線は右側の渦巻文下で胴部中程をめぐり、胴部文様下端を画している。器面は内外面とも入念に研磨が施されており、縄文は施されていない。6は口径15.5cmのやや小型の土器である。口縁には上端に孤縁を施した把手が付けられ、口唇には沈線がめぐっている。頸部に1列の刺突文をめぐらして文様帯を画し、胴部には縄文RLを施した後に、2本の沈線で文様が施されている。第131図1～6は胴部破片である。頸部の括れは弱い。1・5・6は頸部に8の字状の貼付文が伴う。胴部文様はいずれも縄文LRを地文としており、沈線間の磨り消しは認められない。同図7～9は円筒状を呈する土器の口縁部破片である。8は口縁が小波状を呈し、波頂部裏面に刺突が施されている。胴部には、いずれも縄文LRを地文

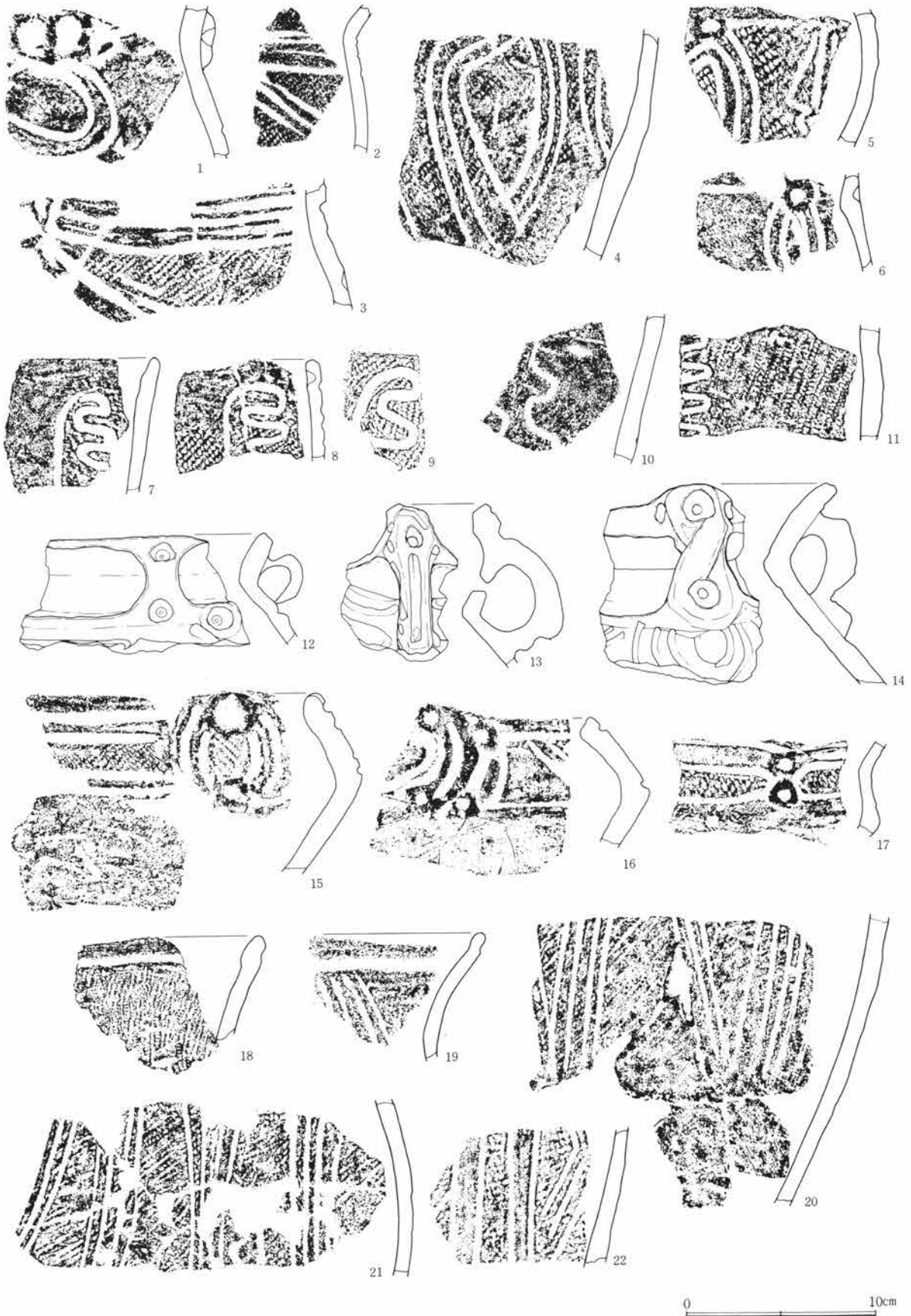


第129図 遺構外出土土器 (1)

III 検出された遺構と遺物

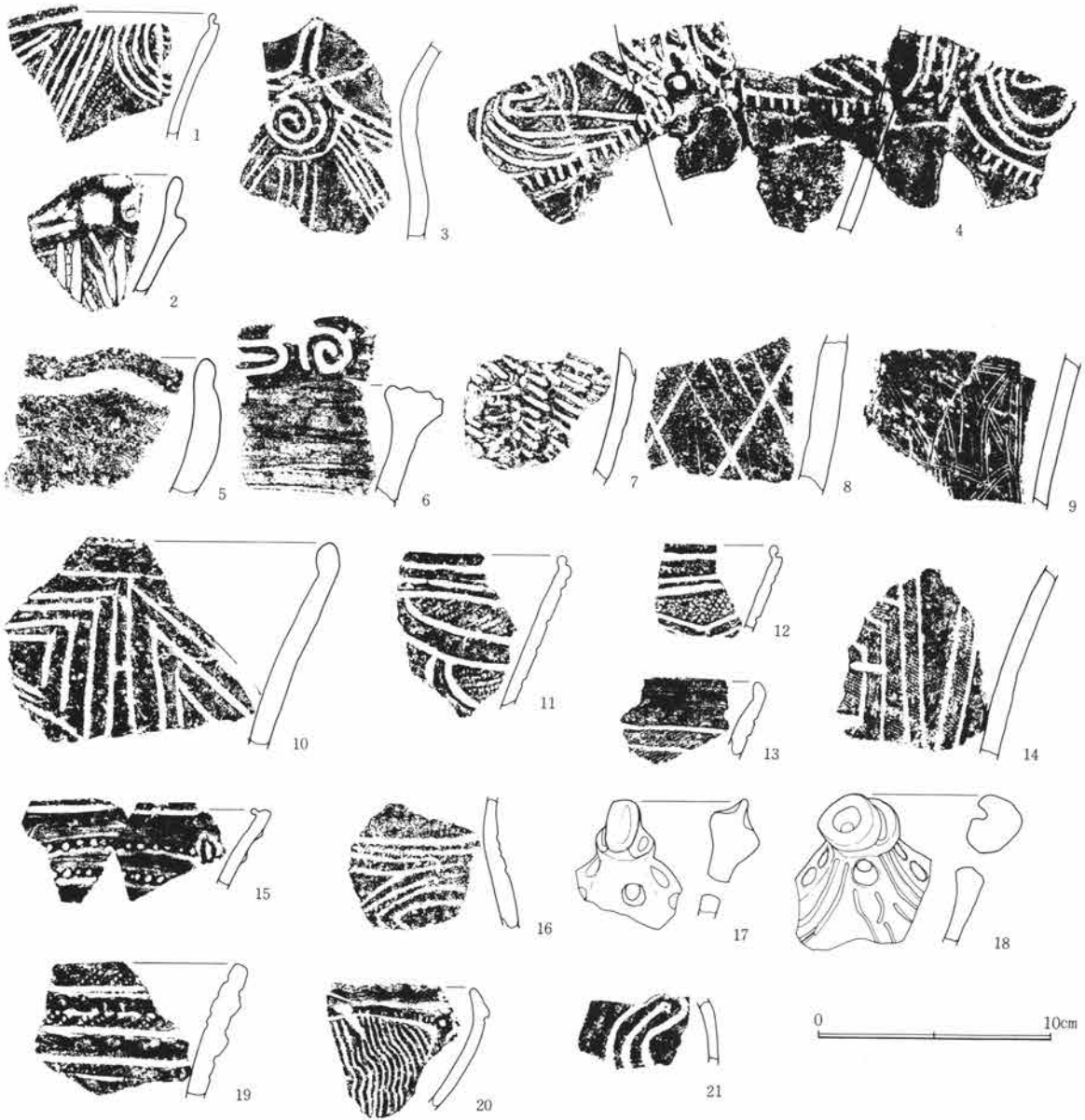


第130図 遺構外出土土器 (2)



第131図 遺構外出土土器 (3)

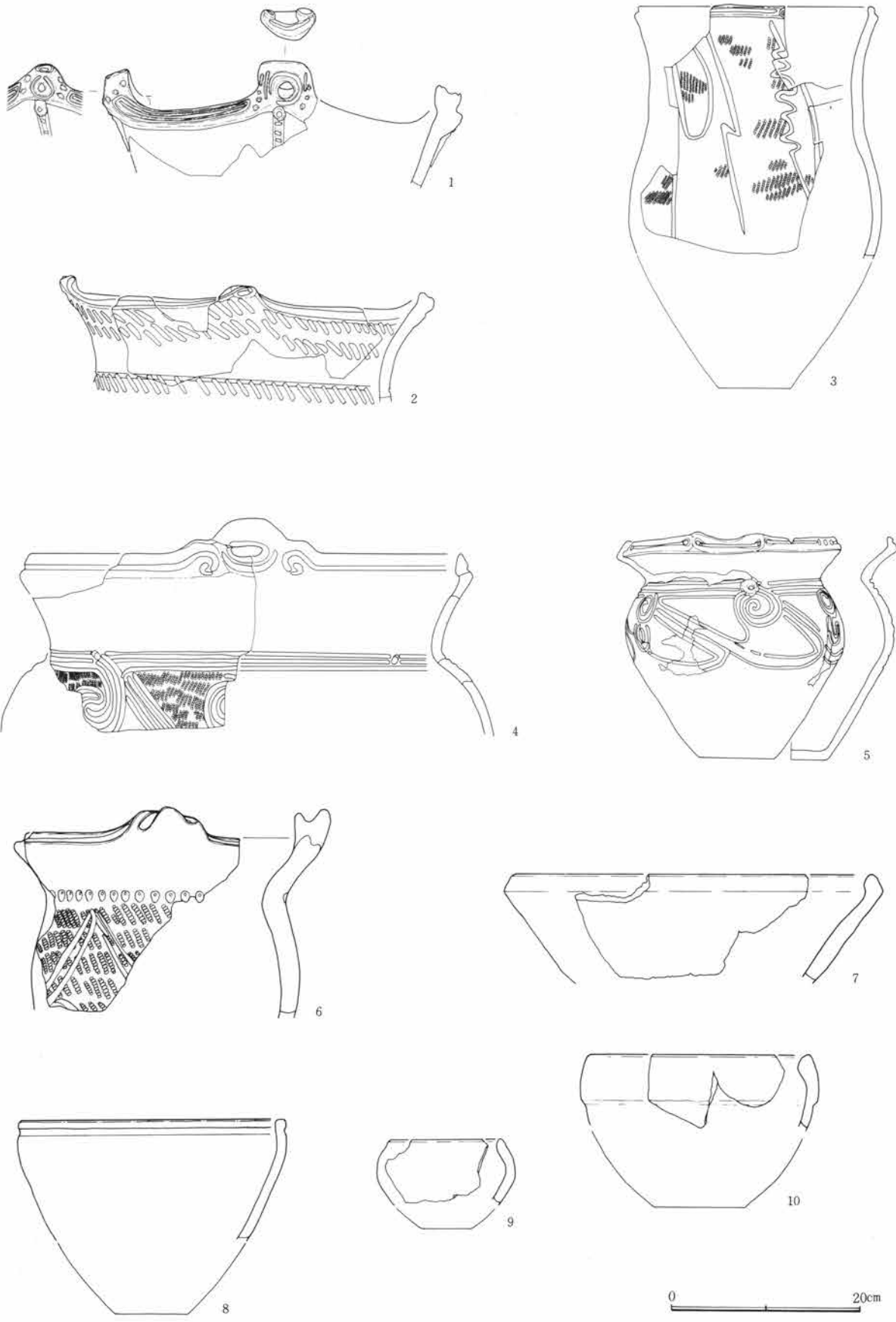
III 検出された遺構と遺物



第132図 遺構外出土土器(4)

に、蕨手懸垂文が施されている。同図10・11は波状懸垂文が施された土器である。縄文はLR。同図12~14は頸部がくの字状に折れ曲がり、胴部が強く張り出す壺状を呈する土器で、いずれも頸部をまたぐように橋状把手が付けられる。把手の上下端には刺突文が施され、14は8の字状を呈す。同図18~22、第154図3は、第133図3と同じ器形を呈する土器である。いずれも縄文を地文とし、胴部に3~4本の沈線で文様が施される。3は口縁部を無文化している。縄文は18~22がRL、3がLR。第131図15~17、第133図8は浅鉢形土器である。15・16は口縁部がくの字に内折する土器で、文様帯は口縁部のみに限られる。口縁部文様帯は沈線で縁どられ、文様帯内には16が刺突を施した円形貼付文を伴う三ヶ月状の貼付文が、15は刺突を伴う円形貼付文間を2本の沈線でつないだ文様が施されている。なお、15は沈線区画内を縄文LRで充填している。17は胴部が内折し、口縁部が外折して開く浅鉢で、胴部には8字状の貼付文が施され、それを挟んで楕円状の沈線区画文が施されている。縄文はLR。8は口縁部が弱く内湾する鉢状を呈する無文の浅鉢で、口唇下に太い沈線が施されている。第132図1・2・4は、いわゆる朝顔状を呈する小型の深鉢である。胴部文様は

1 縄文時代の遺構と遺物



第133図 遺構外出土土器 (5) (6・7・9・10は $\frac{1}{2}$)

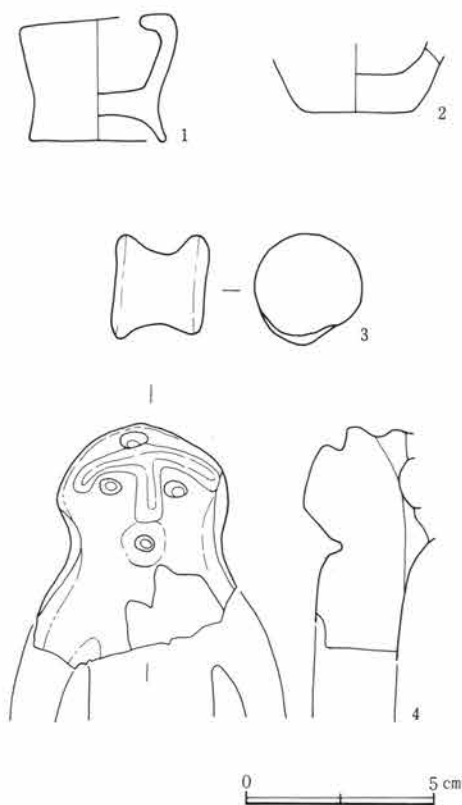
III 検出された遺構と遺物

刻みを施した縦位の隆線で区画され、区画内には集合沈線による弧線・斜線を組み合わせた文様が構成される。なお、4は文様帯下端を同隆帯で区画している。地文はいずれも縄文LRである。同図7～9は深鉢の胴部破片である。7は全面に斜位の刺突状の短沈線が施されている。8は斜格子沈線が施された土器である。9は全面に3本単位の条線をランダムに施した土器である。第133図9・10は椀状を呈する無文の小型土器である。10は口縁部が肥厚帯となっている。2点とも外面は入念に研磨が施されている。該当型式は判然としないが、称名寺式土器に伴う例が見あたらないため、一応堀之内I式に含めた。

第132図10～16は堀之内II式土器である。18点が出土している。10～15は胴部上半が弱く外反しながら開く深鉢で、いずれも口唇部はくの字に内折しており、11・12・15は沈線を伴う。10は沈線による三角形のモチーフを組み合わせる胴部文様帯を構成している。11～14は充填縄文帯あるいは磨消縄文帯で文様が構成される。縄文はいずれもLR。15は胴上半部に刻みを施した隆線を2本めぐらしている。16は胴部上半が弱く括れる深鉢の胴部破片である。

第132図17～21は加曾利B1式土器である。図示した5点のみの出土である。17・18は波状口縁の深鉢で、波頂部には把手が付けられている。くの字状に内折した口唇部には刺突文が施され、把手下には円孔が施されている。また、18は円孔下に波状沈線を垂下している。19はやや外反しながら開く口縁部破片で、口縁には沈線で縁どられた数本の隆帯をめぐらし、器面および隆帯上には縄文LRを施している。また、口縁裏面にも4本の沈線をめぐらしている。20は内湾する口縁部破片で、胴部に刻みを施した隆線で区画文を施し、区画内を櫛状施文具による波状文で充填している。21は3本の沈線で曲線的な文様が施された胴部破片である。

遺構外出土の土製品 (第134図、写真図版 PL 54-3)



第134図 遺構外出土の土製品

遺構外から出土した土製品は、ミニチュア土器2点、耳飾り1点、土偶1点、土製円盤47点である。

1はA-37グリッドから出土した。底部が上げ底になったミニチュア土器で、口縁の一部を欠損している。口縁部は鉤手状に内側へ入り込み、上面は平坦であるが、水平ではない。底部はやや外側へ張り出しており、端部は薄い作りとなっている。器面調整は全体に粗雑で、研磨は施されていない。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好で白橙色～黒色を呈す。

2はミニチュア土器の底部破片で、C-25グリッドから出土した。胎土は砂粒を含まず、やや軟質で黄橙色を呈す。

3は鼓状を呈する無文の小型耳飾りで、古墳時代の3号溝から出土した。両端部をわずかに欠損している。正面形は円形で平坦面をなし、側面形はやや歪んでいる。胎土に砂粒を多量に含み、調整はやや粗雑である。焼成は良好で白橙色を呈す。

4は土偶の頭部破片である。C-24グリッド付近から出土した。首は両側縁を窪ませて表現し、肩は撫で肩で、そこからやや斜め下方に腕が伸びるが欠損している。顔面は胴部と同じ平坦面上に、眉と鼻は粘土ひもを貼り付けて表現し、目と口は円

形の刺突で表現されている。また、前頭部にも刺突が一個付けられている。後頭部にはつまみ状の把手が付けられているが欠損している。なお、把手接続部には径8mmほどの浅い刺突が施されている。顔はかるくナデが施されているが、その他の器面調整はやや粗い。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好で白橙色を呈す。

土製円盤は総計47点が出土した。いずれも土器の破片を利用したもので、完存品43点、欠損品4点である。うちわけは、前期黒浜式土器を利用したもの2点、中期阿玉台式土器（Ib式・II式が主体）を利用したもの23点、加曾利E式土器（E1式・E2式が主体）を利用したもの22点である。黒浜期のものは直径3.2cm重さ12g・直径3.7cm重さ15.8gである。阿玉台期のものは直径2.2~4.5cmのものがあり、それらの直径は大略2.2cm（A）・3cm（B）・3.5cm（C）・4.5cm（D）に集中している。各々の点数はA-5点・B-7点・C-9点・D-2点である。これらを重量の面からみると、A-3.2~8.1g・B-7.7~14.9g・C-13.8~22g・D-16.3~29.6gとなり、A~Dの全体的傾向は直径の大小に比例しているが、各々の群内では直径のように集中する傾向は認められない。加曾利E期のものは直径2.5~4.5cmのものがあり、阿玉台期と同様に、それらの直径は大略2.5cm（A）・3cm（B）・3.5cm（C）・4.5cm（D）に集中する。各々の点数はA-4点・B-9点・C-7点・D-2点であり、阿玉台期の傾向と近似している。重量はA-6.9~11.3g・B-10~19.5g・C-13.6~19.5g・D-23~32.9gであり、内容は阿玉台期と同様である。

以上のものについて若干の所見を付け加えておきたい。本遺跡遺構出土のミニチュア土器は合計5点をかぞえるが、いずれも中期後半の遺構から出土しており、1・2もこの時期に含まれる可能性が強い。3については、同種の類例は中期後半の遺構出土例が比較的認められる。4については、後頭部に刺突を伴う把手が付くことから、同種の把手・文様が多用される後期称名寺II式~堀之内I式期に比定されよう。時期はやや下るが、群馬県郷原遺跡出土のハート形土偶の後頭部にも、把手状の装飾が認められる。土製円盤は前期黒浜期・中期阿玉台期・加曾利E前半期のものが出土しているが、遺構出土例も同様の傾向を示している。また検討の結果、中期の土製円盤は直径の集中傾向が4種類認められ、その傾向は阿玉台期・加曾利E前半期ともほぼ一致することがわかった。もとより扱った点数は僅かであり、観察項目も不十分で統計処理にたえうものではないが、この4種類の集中傾向は用途に関連する可能性が強いと思われる。

遺構外出土の石器類

遺構外からは総計259点の石器類が出土した。このなかには、前項で記述した有舌尖頭器2点、および若干の石製品を含んでいる。以下器種毎に概要を記述していくが、紙数の関係から図を掲載できないものがある。それらについては写真図版を参考にさせていただきたい。

石 鏃（PL70-3）

33点が出土しており、うち6点は未製品である。各部を僅かに欠損しているものが多く、完存品は15点である。重さが0.39gの小型品から3gを越える大形品までであるが、大半は1~2gの間におさまっている。形状は基部に抉りの入る無茎鏃が主体で20点をかぞえるが、抉りの入らない三角鏃状を呈するものや、いわゆる飛行機鏃、あるいは側縁部に突起をもつものも数点認められる。また、えぐりは深いものと浅いものがあり、後者は側縁の幅が狭く縦長のものが多い。石質はチャートが30点、黒色緻密安山岩が3点である。

石 錐（PL70-2）

11点出土した。そのうち4点は先端部を欠損している。剝片の一部を調整して作り出したものが4点、全体を調整して形状を整えているものが7点である。石質はチャートが9点、砂岩が2点である。

III 検出された遺構と遺物

打製石斧（PL73-1・2、PL72-3、第135図13~16）

総計112点が出土している。完存品は27点のみであり、大半が欠損品である。欠損部位は刃部17点、刃部+中央部24点、頭部13点、頭部+中央部12点、刃部+頭部5点、縦割半欠2点、その他12点である。形状は撥形40点、短冊形16点、分銅形12点である。なお未製品と思われるものが14点認められた。大きさは、長軸が8~15cmのものまでがあり、小型品のなかには重さ44gのものも認められた。右質はホルンフェルスが87点、頁岩が11点、安山岩が5点、砂岩が4点の他、点紋緑色片岩・緑色片岩・流紋岩・粘板岩・点文石英片岩が各一点づつである。なお、これらの他に特異な小型打製石斧が4点出土している（第135図13~16）。いずれも撥状を呈し、片面に自然面を残す点や縁辺部の調整などの特徴は、打製石斧と一致している。長軸の長さ・重量・石質は、13が6.2cm・26g・安山岩、14が7.6cm・48g・頁岩、15が5.4cm・23g・玄武岩、16が7.0cm・26g・ホルンフェルスである。打製石斧の小型品は、磨耗痕や2次調整剥離が認められ、また器厚も薄いことから、数次にわたる使用・調整の結果と想定されるものが多いが、以上の4点にはそのような点が認められず、当初から意図され形態を保っていると考えられる。

剥片石器類（PL72-3）

27点が出土している。形状はバラエティーに富んでいるが、礫の表皮部分の剥片を素材に、表皮面から調整剥離を加えて片刃の刃部を作り出した、表皮の平坦面を有効に利用したものが多い。なお、つまみ部を作り出しているものも3点認められた。石質は頁岩が15点で最も多く、他に安山岩6点、砂岩3点、ホルンフェルス2点、チャート1点である。

敲石（PL72-4）

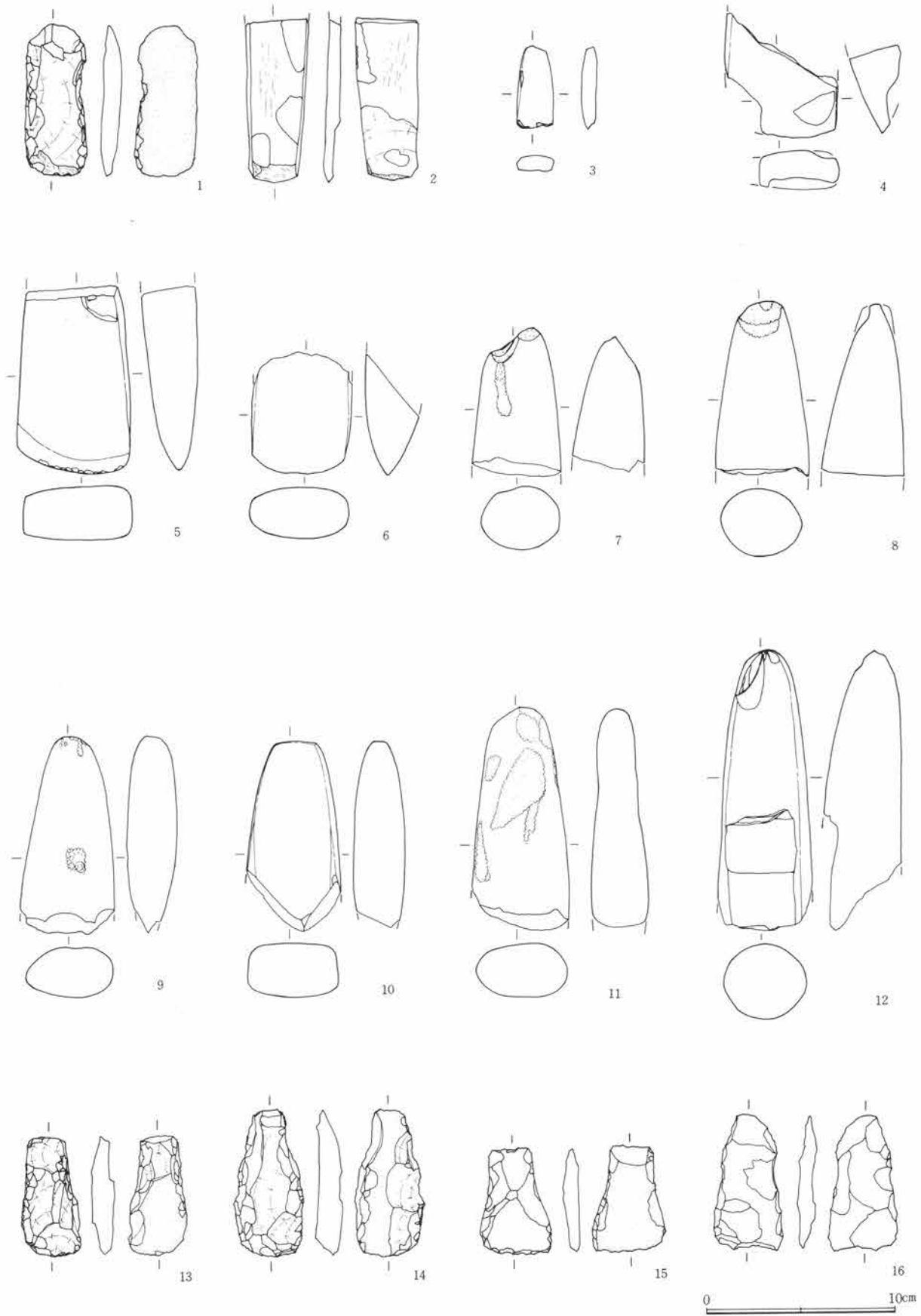
32点が出土している。形態は、棒状の円礫をそのまま使用したもの15点、円礫の一部を打ち欠いたもの13点、コア状の礫器を使用したもの4点がある。いずれも長軸の一端に敲打痕を残すものが多いが、両端部や側面に打痕を残すものも認められる。石質はホルンフェルスが14点で最も多く、他に砂岩7点、頁岩4点、石英斑岩3点、安山岩2点、玢岩・花崗岩各1点である。

磨製石斧（第135図3~12）

10点が出土している。全て欠損品であり、また欠損後に敲石等に転用されたと思われるものが多い。形態は、横断面積が長方形を呈するいわゆる定角式が4点（4~6・10）、長楕円形を呈するもの2点（9・11）、円形あるいはやや楕円形を呈するいわゆる乳棒状のものが3点（7・8・12）、小型磨製石斧が1点（3）である。定角式は4点のうち3点が装着部側に欠失しているのに対し、他のものはいずれも刃部側に欠失している。3は刃部および頭部をわずかに欠損している。5は刃部に敲打によるつぶれが認められる。7~9・12は頭部に敲打によるつぶれや剥落が認められる。これは装着に関連する打痕とも考えられる。15は欠損部が敲打により著しく磨耗している。石質は、3・9・11・12が玢岩、6・8・10が閃緑岩、5・7が輝緑岩、4が安山岩である。

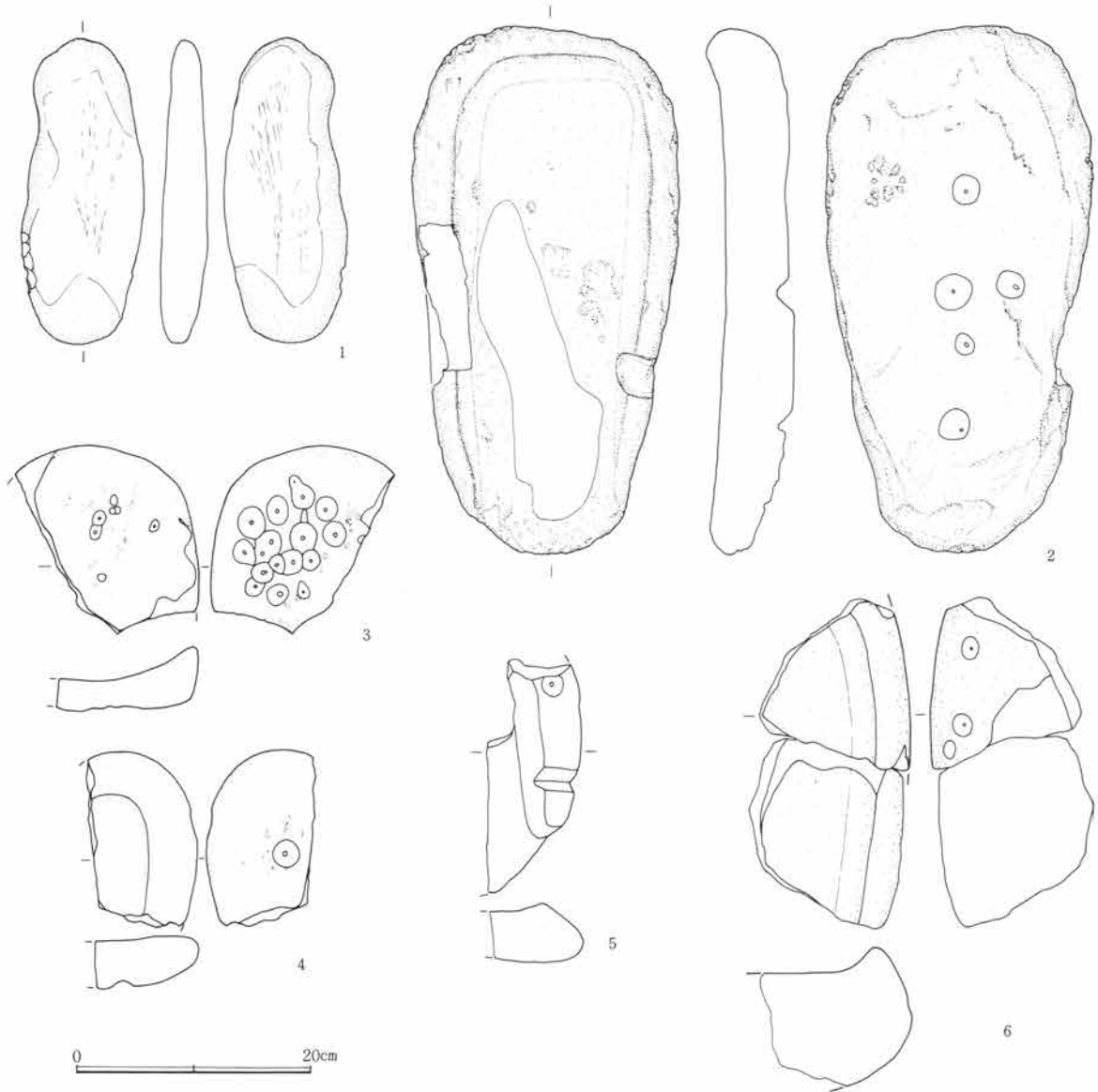
極部磨製石斧（第135図1・2）

2点出土している。1は円礫の表皮部分を剥ぎ取った横長剥片を素材に、縁辺部、特に長辺に調整剥離を加えて短冊形に成形し、短辺の一方の剥離面側の端部のみを、わずかに研磨して刃部を作り出している。自然面積には剥離や研磨は認められず、刃部はやや内湾した自然面をそのまま有効に利用している。長軸の長さ7.9cm、重量35gの完形品である。石質は頁岩。2は表裏面および両側縁が平坦な、薄い石板状のものを素材に、やや幅の狭くなる短辺の端部を両側から研磨して刃部を作り出している。この剥片には剥ぎ取った時の1次剥離面や、研磨痕が認められず、風化したようななめらかな面を呈す。所々に見られる剥離は剥落痕



第135図 遺構外出土石器

III 検出された遺構と遺物



第136図 遺構外出土石器

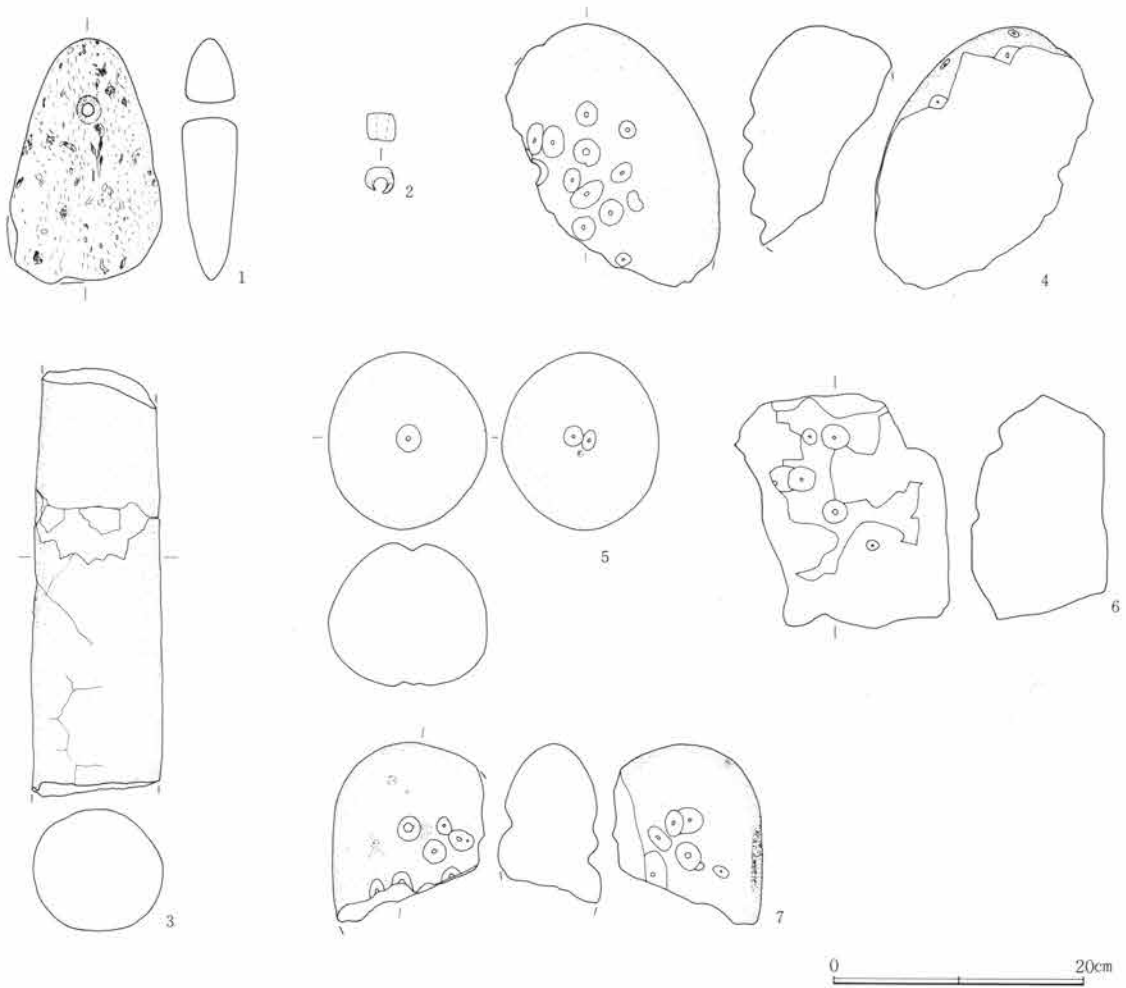
である。なお、上半部を欠損している。現存部長さ8.5cm、重量43g、石質は頁岩である。

磨石 (PL73-3・4)

いわゆる凹石を磨石を一括しており、合計71点が出土している。そのうち完形品は38点認められた。いずれも扁平な円礫を使用しており、平面形は円形と楕円形とがあるが、後者の方が多い。大きさは長軸8.3cmの重さ215gの小型品から、長軸15.3cm・重さ850gの大型品まで認められる。使用痕は、平坦面に集合打痕・あるいは研磨面のみを残すものも認められるが、大半は両者をおかね備えている。また、周縁部に敲打痕を残すものや、長軸側縁部に敲打や研磨による平坦面が形成されているものもある。石質は安山岩が66点で圧倒的に多く、他に砂岩2点、玢岩・溶結凝灰岩・石英斑岩各1点づつである。

石皿 (第136図2～6)

18点が出土しているが全て欠損品であり、ここに図化したもの以外はいずれも細片で出土している。石質の砂岩が1点ある以外は全て安山岩である。2は側縁の一部を欠損しているものの、本遺跡出土石皿のなかで唯一全体を理解できる石皿である。扁平で長大な円礫を使用しており、くぼみ部の底面は平坦で、下方に



第137図 遺構外出土石製品

掻き出し口が付く。縁辺部や裏面をそのまま使用している。なお、裏面には数個の凹穴が認められる。3は全面が調整された石皿で、縁辺部はほぼ直立し、くぼみ部は皿状を呈す。なお、くぼみ部に数個裏面には多数の錐揉み状の凹穴が付けられている。4は縁取り部が幅広く設けられた石皿で、くぼみ部はわずかに認められるのみである。裏面には錐揉み状の凹穴が一個付けられている。5は掻き出し部付近の破片で、入念に作り出された縁取り部に刻みの装飾が加えられている。なお、縁取り部に錐り揉み状の凹穴が1個付けられている。6は石皿破片の接合資料である。裏面に凹穴が3個付けられている。以上の石皿のうち、3以外の4点はいずれも121号住居址集辺から出土している。

砥石 (第136図1)

2点出土している。1は扁平な円礫を使用したもので、両平坦面に研磨痕が認められる。長軸長さ13cm、重さ155g、石質は細粒凝灰岩である。

石棒 (第137図3)

1点のみ出土しており、本遺跡で唯一の出土品である。23号住居址の南東7m、B-29グリッドから横倒しの状態で出土した。この地区は空白地区であり、土器等の遺物もほとんど出土していない。直径10cmの大形品であるが、両端部を欠損している。現存部重量は2130g、石質は凝灰岩質流紋岩である。なお、本石棒は強い加熱を受けており、亀裂が認められる。

III 検出された遺構と遺物

多子石 (第137図4～7)

8点が出土している。大半が欠損品で、図化した4点以外はいずれも細片である。4・6・7は大型の円礫を使用したもので、両平坦面に錐揉み状の凹穴が多数付けられている。5は球状の円礫を使用したもので、対象となる両面に、一方には1つ、他方には2つの錐揉み状の凹穴が付けられている。石質は8点とも安山岩である。

軽石製品 (第137図1)

本遺跡で唯一の出土品である。後期の遺物集中地点に近接するC-21グリッドから出土した。撥状の石斧形を呈し、中央部上位に直径6mmほどの円孔が施されている。側縁の一部をわずかに欠損するが、ほぼ完存品と言ってよいだろう。発泡状態の良好な軽石を使用しており、重量は25gである。

玉 (第137図2)

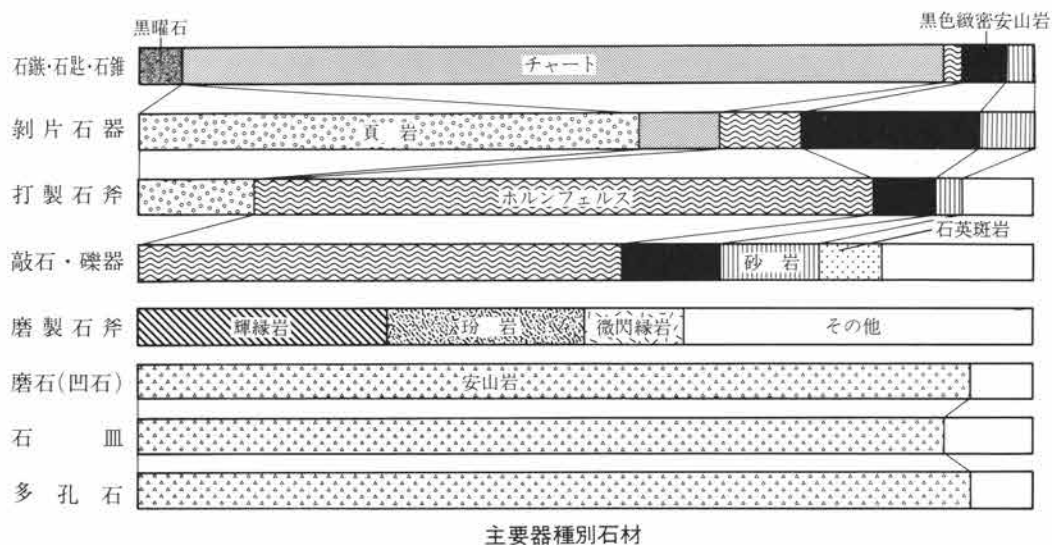
これも唯一の出土品である。黒色を呈する蛇紋岩製のもので、環状を呈さない。重量は1.66g。

所見

ここでは石器の器種別数量(右図)と主要器種別石材(下図)についてふれるにとどめたい。この二図は遺構外の石器と中期遺構の石器を合わせたものである。相方の傾向は各々に近似した数量を示しており、各期の遺物総量から見ても中期の傾向として大過なからう。器種のセットおよび各々の数量バランスについて、特異な点は認められない。定型化した石匙が少ない点は、赤城南面地域も同様である。石材では、チャート・ホルンフェルスは足尾山系に、頁岩は利根川上流域に主産地があるとされている。各々の器種の特性に合った石材を、できるかぎり近地で調達している様子が理解できよう。なお、極部磨製石斧の出土は、該当時期の問題とあわせて、今後留意していきたい。

石器の器種別数量

器種	住居	土 塚	遺構外	合 計
石 鏃	13	1	33	47
石 匙	1			1
石 錐	1	1	7	9
剥片石器	19	1	27	47
打製石斧	38	7	112	157
敲石・礫器	20	3	32	55
磨製石斧	7	1	10	18
極部磨製石斧			2	2
磨石(凹石)	37	10	71	118
石 皿	11	1	18	30
砥 石	4	1	2	7
石 棒			1	1
多孔石	6		8	14
軽石製品			1	1
玉			1	1
ストーンリタチャー		1	1	2
クサビ状石器		1	1	2
台 石	1			1
合 計 点 数	161	27	325	513



III 検出された遺構と遺物

No.	挿図No.	器種	重量(g)	石質	備考
4	9	石 鉄	(0.47)	チャート	欠 損
5		打製石斧	(81)	安山岩	
6	14	〃	172	ホルンフェルス	
7	13	〃	48	〃	
8		礫 器	(475)	〃	欠 損
9	15	敲 石	401	安山岩	
10		小石型磨製斧	56	輝緑岩	転 用
11		磨 石	745	安山岩	
12	16	〃	708	角閃石安山岩	
13		砥 石	65	砂岩	
110住					
1		剥片石器	27	チャート	
2	12	打製石斧	(99)	安山岩	欠 損
3		〃	(240)	〃	〃
4	11	頁 岩	34	頁岩	
5		磨 石	(188)	安山岩	欠 損
6		〃	(132)	〃	〃
111住					
1	3	石 鉄	1.16	ホルンフェルス	
2		剥片石器	30	〃	
3		打製石斧	(32)	粘板岩	欠 損
4	4	〃	124	ホルンフェルス	
5		〃	(196)	〃	欠 損
6	6	磨 石	307	安山岩	
7	5	〃	850	〃	
8		〃	673	〃	
9		多孔石?	2,020	安山岩	
112住					
1		打製石斧	(91)	ホルンフェルス	欠 損
113住					
1		剥片石器	39	頁 岩	
2	9	打製石斧	214	ホルンフェルス	転磨斧
3		〃	211	〃	
4		〃	(11)	〃	欠 損
5	10	磨 石	338	安山岩	
116住					
1		礫 石	(121)	ホルンフェルス	欠 損
2			70	細粒砂岩	

No.	挿図No.	器種	重量(g)	石質	備考
3		磨 石	(392)		
4		石 皿	(404)	安山岩	欠 損
5		台 石	(1,280)	安山岩	欠 損
117住					
1	15	磨 石	(249)	安山岩	
118住					
1		磨 石	534	安山岩	
119住					
1		磨 石	84	安山岩	
2		石 皿	(1,070)	安山岩	欠 損
120住					
1	76	石 鉄	(2.28)	チャート	欠 損
2	80	剥片石器	77	頁岩	
3	77	打製石斧	61	ホルンフェルス	
4	79	〃	146	流紋岩	転用?
5	81	礫 器	549	ホルンフェルス	
6	78	敲 石	143	安山岩	
7		〃	(51)	緑色片岩	欠 損
8		〃	92	ホルンフェルス	
9		〃	62	〃	
10	75	楔状石器	5.59	緑色片岩	転磨斧
11		磨 石	(133)	安山岩	欠 損
12		〃	781	〃	
13		〃	(67)	〃	欠 損
14		〃	327	〃	
15	82	石 皿	(553)	〃	欠 損
16		〃	(206)	溶結凝灰岩	〃
17	83	多 孔 石	10,600	花崗岩	
121住					
1	9	剥片石器	29	頁 岩	
2	10	打製石斧	52	ホルンフェルス	
3	11	〃	102	〃	
4		敲 石	(66)	雲母石英片岩	欠 損
5		楔状石器	9.09	チャート	
6		磨 石	(625)	安山岩	欠 損
7		石 皿	(4,520)	〃	〃

表一 3 土壇出土石器一覧

No.	土壇No.	器種	重量(g)	石質	備考
1	9	磨 石	132	安山岩	
2	〃	〃	(392)	〃	欠 損
3	10	〃	718	〃	
4	11	石 皿	(566)	〃	欠 損
5	〃	打製石斧	(109)	ホルンフェルス	〃
6	〃	磨 石	970	石英斑岩	
7	24	〃	(119)	安山岩	欠 損
8	〃	打製石斧	(88)	ホルンフェルス	〃
9	〃	敲 石	303	石英斑岩	
10	28	打製石斧	(94)	ホルンフェルス	欠 損
11	〃	磨 石	685	安山岩	
12	〃	ストーンリ ッター	(123)	〃	欠 損
13	49	打製石斧	(83)	ホルンフェルス	〃

No.	土壇No.	器種	重量(g)	石質	備考
14	51	打製石斧	342	ホルンフェルス	
15	61	磨製石斧	(61)	蛇紋岩	欠 損
16	62	磨 石	236	安山岩	
17	88	〃	(303)	〃	欠 損
18	100	砥 石	636	砂岩	
19	102	敲 石	95	点紋緑色片岩	
20	104	磨 石	719	安山岩	
21	107	石 錐	2.35	チャート	
22	108	磨 石	162	安山岩	
23	111	剥片石器	(12.9)	頁岩	欠 損
24	121	礫 器	(150)	ホルンフェルス	〃
25		打製石斧	(145)	粘板岩	〃
26	122	敲 石	423	砂岩	

2. 古墳時代の遺構と遺物

12号住居址 ▶ 出土遺物P.180、第158図

本遺跡で確認された古墳時代後期に属する住居址のうちでは、最も北よりに占地している。時期的に後出する11号住居址と南東側で一部重複している。

主軸をほぼ東西とし、東西2.6m、南北2.6mのほぼ正方形に近いプランである。

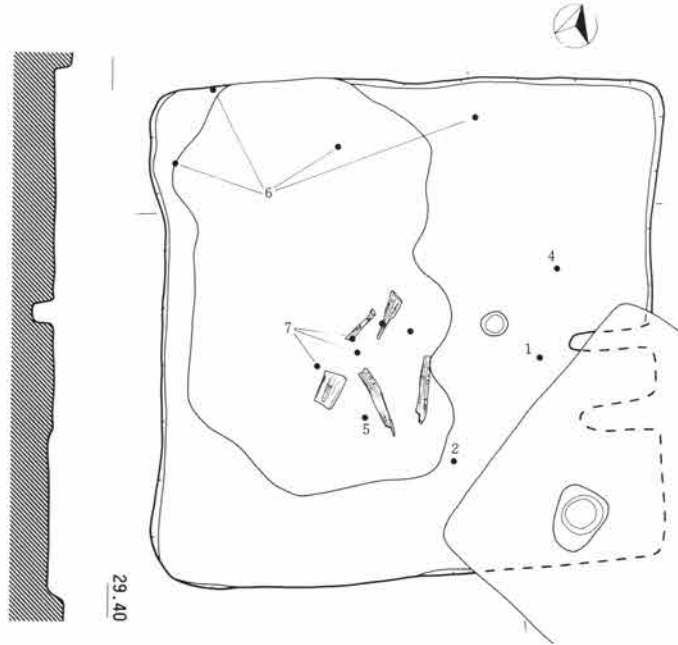
カマドは東壁のほぼ中心よりに確認されたが、大半は11号住居により削平されている。燃烧部が住居内にくるもので、カマド袖は住居内に84cm張り出している

住居東南隅に接して、68×55cm、深さ68cmの円形状を呈する貯蔵穴状のピットが確認されている。

住居址西側部分には、床面下に2.4×1.2m、深さ床面より15cmの不整形な落ち込みが確認された。調査時点での注意不足

から明らかにしがたい部分も多いが、現時点では、住居床面造成に際しての基礎作業と考えている。

本住居は焼失家屋と思われ、床面上から炭化物、炭化材の出土が目立った。



第138図 12号住居址実測図

15号住居址 ▶ 出土遺物P.182、第159図

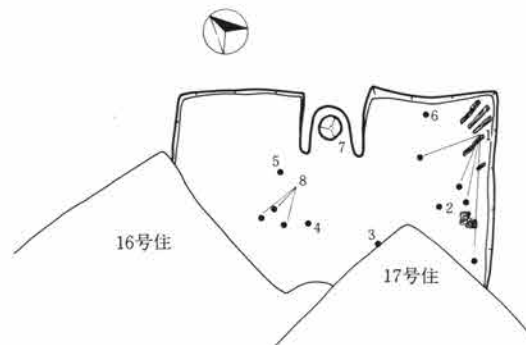
12号住居址の東南3mに隣接する。住居址の西より半分を時期的に後出する16号・17号住居址により削り取られている。また、壁高10cmの残存であり住居全体の遺存状況はあまりよくない。

床面上の壁よりの部分を中心に炭化材および炭化物が確認されていることから、焼失家屋と思われる。

主軸を北東から南西にとり、北東壁中央にカマドを付設している。主軸と直交する方向で長さ3.5mを有する。主軸方向については不明であるが、恐らく、正方形に近いプランを呈するものと推される。

カマドは袖部下部をかるうじて残しており、住居内側へ60cm張り出している。燃烧部中心に、カマド底面をやや掘りくぼめて、土師器甕下半部がすえられた状態で出土している。状態からするとカマド支脚的な機能を果していると考えられる。

本住居では、床面より約15cm上の埋土中に明瞭に榛名山二ツ岳噴出の火山灰層（FA）が認められ、FA降下直前に廃絶した住居であることが明らかである。



第139図 15号住居址実測図

III 検出された遺構と遺物

42号住居址 ▶ 出土遺物P.183、第160図

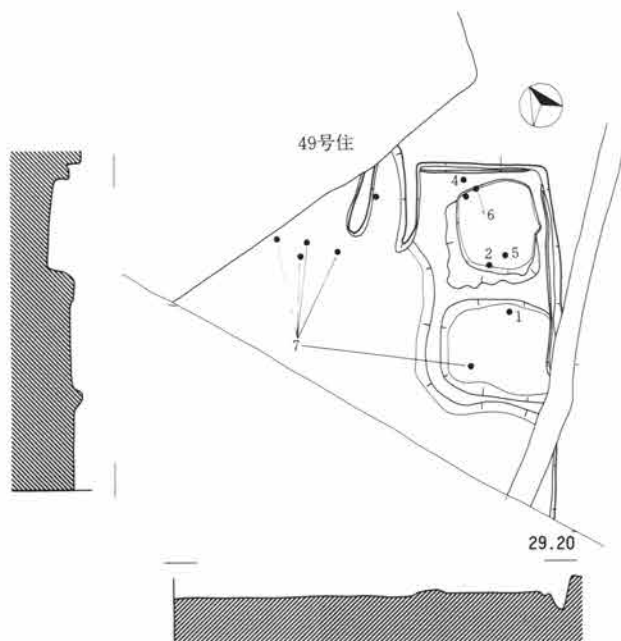
古墳時代の住居址のうちでは、南よりに位置している。北側には53号住居址、南側には43号住居址とほぼ同時期の住居が隣接している。住居北側で一部、時期的に後出する49号住居址と重複している。南西側半分ほどは、調査区域外となっていたため未調査である。

主軸を北東から南西にとる。カマドは、北東壁の南東よりに扁して付設されている。袖部は白色粘土を使用している。焚口部で幅35cmを有している。

カマドに隣接して東南側には幅30cmほどの帯状の高まりにより区画された2.5×1.4mの主軸方向に長い長方形を呈する部分がある。この区画の北東壁よりにはカマドに隣接して、100×85cm、深さ20cmの方形に近い貯蔵穴状の土壇が付設されている。南西側は、100×90cmの方形を呈し、深さ20cmほどの浅いくぼみになっている。カマドと一帯になった調理場の空間に関わる造作と推される。

検出された住居壁部分では、全体に幅10cm深さ3cmの壁周溝が存在する。

出土遺物は、カマドから貯蔵穴にかけての周辺に集中している。



第140図 42号住居址実測図

53号住居址 ▶ 出土遺物P.186、第162図

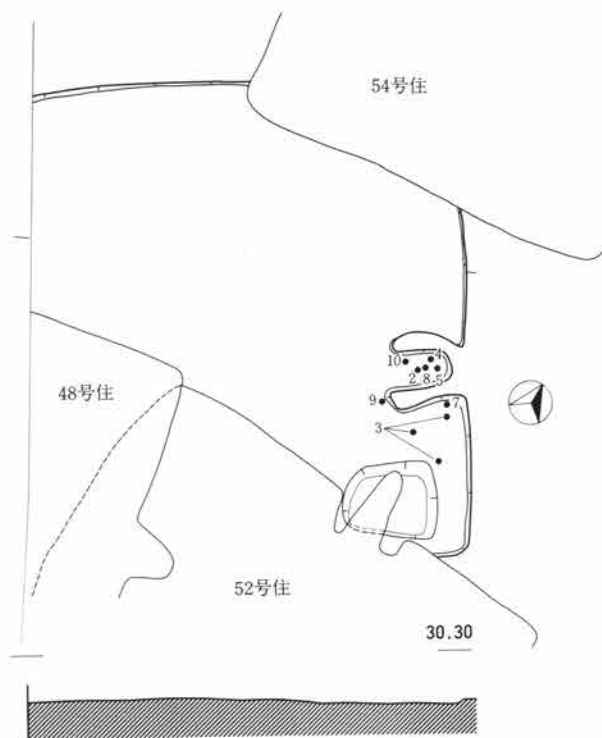
42号住居址の北側に隣接している。壁高3cm前後と遺存状況はきわめてわるい。住居北側を54号住居址に、南側を52、48号住居址に切られている。

主軸は東西からやや北にふれている。住居壁の走向より復元的に規模を測ると、南北で長さ5mである。東西では4.7m以上であり、南北に近い規模と推定される。

カマドは、東壁の中心よりやや南に扁して付設されている。白色粘土を使用しており、袖部は80cmの長さを有し焚口部での幅40cmである。燃焼部中心には底面に、甕形土器の下半部が底を上にして埋め込まれておりカマド支脚としている。

カマドの南側に隣接して、80×100cm、深さ1mの貯蔵穴と思われる土壇が付設されている。

遺物は、カマド、貯蔵穴周辺から出土しており、カマド燃焼部には、煮沸用に火に掛けられていたものが、そのままつぶれたようである。



第141図 53号住居址実測図

65・66号住居址 ▶出土遺物P.187・188、第163・164図

古墳時代の住居分布地帯の北よりに位置し、重複する2軒の住居址である。北側が65号住居址、南側が66号住居址である。66号住居址が65号住居址を切っている。

65号住居址はカマドの位置、床面のひろがりから、その形状、範囲が確認できたもので、遺存状況は悪い。主軸を南北とし、東西約4m、南北3.1m以上であり、南北は4mに近い規模と推定される。

カマドは、北壁の中央よりやや東に扁して付設されている。削平がひどく不分明なところが多い。

出土遺物は、甕、甕形土器3個体分がカマド前から左側にまとまって確認されている。

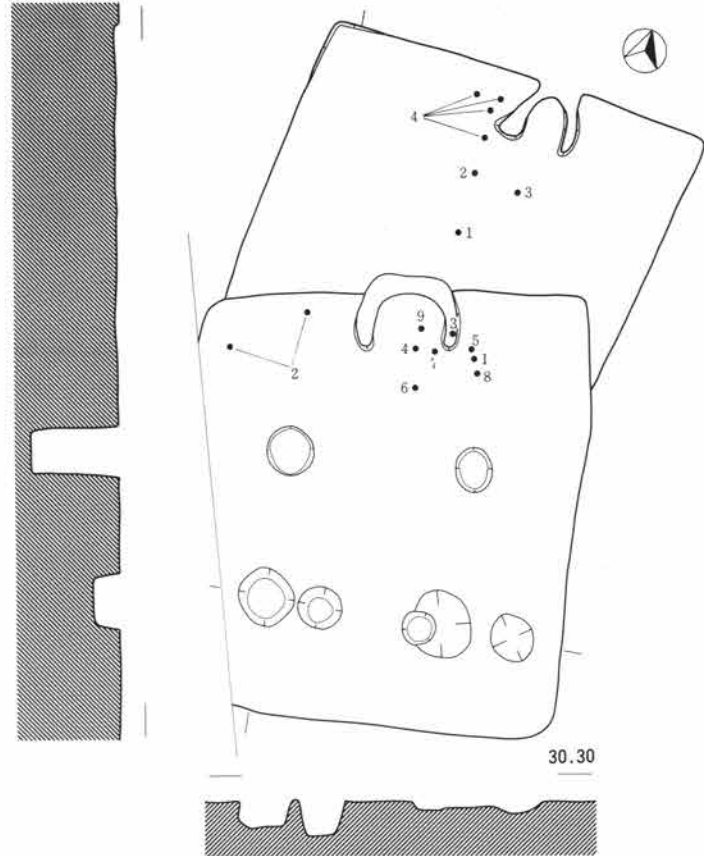
66号住居址は、65号住居址よりはやや残りはよい。

主軸をはほ南北とするが、やや西にふれている。南北4.4m、東西4.2mのほぼ方形に近いプランである。

カマドは北壁の中央に位置するが、遺存状態がわるい。

主柱穴ではないかと思われるピットが確認されているが、南東部分のものは、深さが十分でない。一方、主柱穴が明瞭に確認されている古墳時代の住居は66号住居址が唯一例である。各ピットの底面までの深さが一様でないことや形状からすると古墳時代の井戸跡ではないかという可能性も残している。

出土遺物は比較的豊富であり、カマド付近に杯類を中心として集中している。



第142図 65・66号住居址実測図

68号住居址 ▶出土遺物P.190、第165図

古墳時代の住居分布の北東よりに位置している。時期的に先行する71号住居址が南側に隣接し、相前後した時期の81号住居址が西側に隣接している。住居東南隅付近は、近年まで使用されていた用水堀により切られている。壁高35cmほどを残す遺存状態の良好なものである。

主軸をほぼ東西とし、南北長は、東壁沿いで4.8m、西壁沿いで4.6m、東西長は南壁沿いで4.4m、北壁沿いで4.5mである。弱感南北が長い、ほぼ正方形に近いプランを呈し、北東隅がやや外側へ張り出しきみである。

カマドは、東壁の中央より50cm南に扁して付設されている。白色粘土を使用しており、袖は幅15cmを有し、住居内側へ98cm張り出している。焚口部での幅40cmを測る。このカマドでは、カマド構築前に燃焼部にあた

III 検出された遺構と遺物

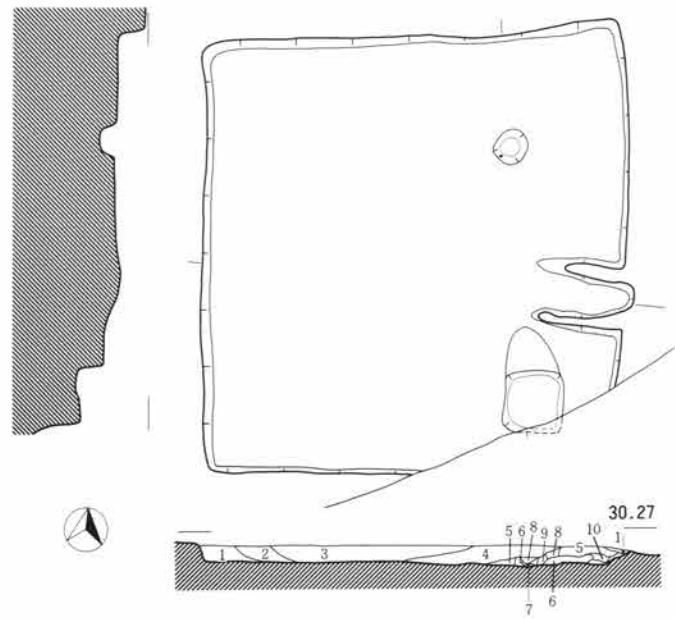
る部分を、30×40cm、深さ約40cmのピットを掘り、土を入れかえたのちにカマド上部構造をつくっている。カマド底面の除湿に対する配慮からの行為と推定される。燃烧部内での土器の出土状態は、住居廃絶直前のカマド使用状態を窺わせるものであった。燃烧部焚口部より奥へ50cmの位置に左右に並列して4個体分の土師器が折り重なるようにして出土している。左側のもは、燃烧部底面に杯形土器を埋め込んでおき、その上から長胴形の甕形土器が出土している。杯は、カマド支脚として転用されているものと思われる。右側部分のもは、長胴形の甕形土器の胴部から口縁部にかけての上半部のものがカマド底面に接して出土し、その上から完形の小型甕が出土している。下半部を失った長胴形の甕形土器を口縁部としたカマド支脚に転用し、その上に小型甕形土器をのせて火に掛けたものであろう。

カマドの南側に隣接して、62×68cm、深さ50cmのほぼ正方形プランを呈する貯蔵穴と思われる土坑が確認されている。

壁周溝は壁に沿ってほぼ全体に認められた。

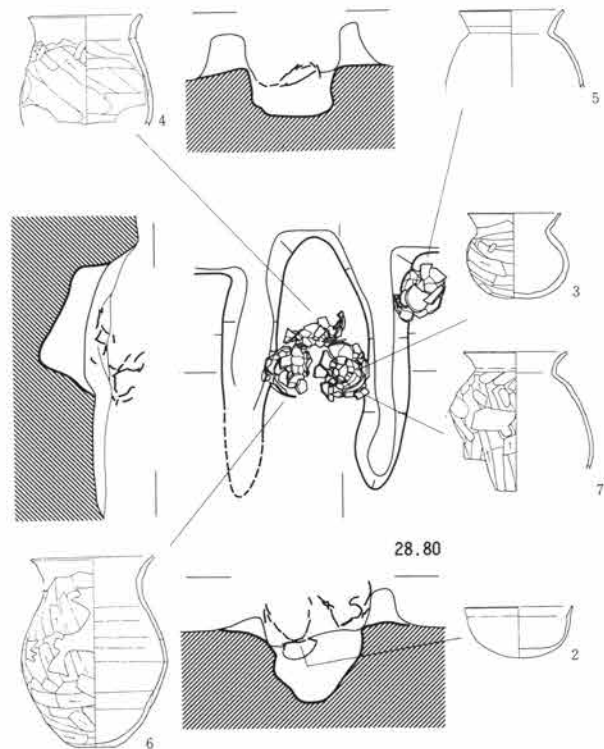
住居北側部分2ヶ所に柱穴状のピットが確認されているが、深さが一様でないこと、通例のものにくらべ浅い点にやや疑問を残している。

本住居では、ほぼ床面直上から、住居中心よりに、榛名山ニツ岳噴出の火山灰層（FA）が明瞭に確認された。最も厚い部分で灰層の厚さ3cmを測る。住居廃絶後、上屋構造のなくなった段階でニツ岳の爆裂をむかえたと考えられ、広義のFA層降下直前の住居址といえよう。



1. 焼土粒・細かい黄褐色粘質土粒を含む黒褐色土。
2. 白色軽石を少量含む黒色土。
3. 白色軽石（径8mm）を多量に含む黒色土。
4. 3に焼土粒を混じる。
- 5～11. カマドの崩落土。

第143図 68号住居址実測図



第144図 68号住居址カマド遺物出土状態図

71号住居址 ▶ 出土遺物P.189~194

68号住居址の南2.7mに方位を同じくして隣接している。壁高30cm以上を有し、遺存状況は良好である。

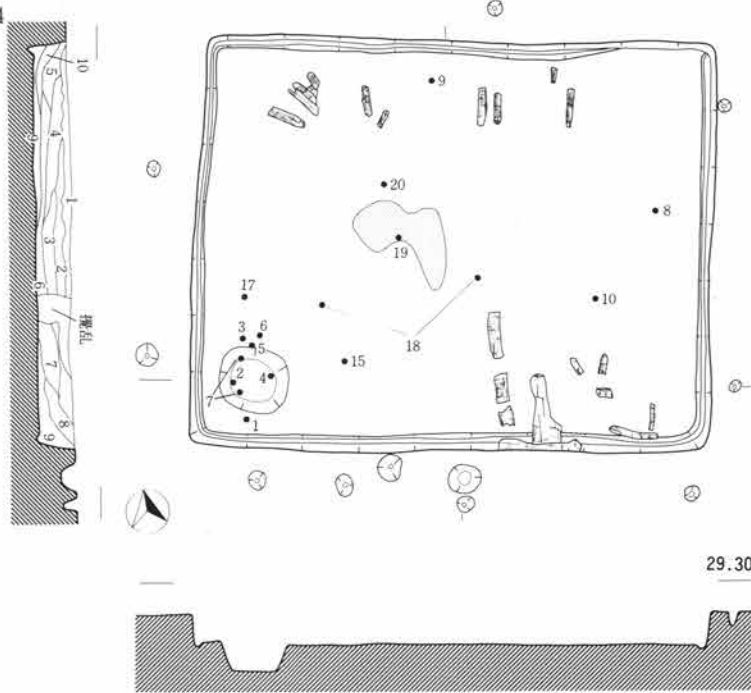
長辺5.6m、短辺4.4mの長方形プランを呈し、長辺を東西方向としている。

本遺跡で調査した古墳時代の住居址の中では、唯一カマドを有さないものである。床面下2ヶ所で一定の焼土のひろがり確認されており、地床炉の痕跡かと思われる。一ヶ所は、長辺の中軸線上で中心から70cm西によった部分であり、他の一ヶ所は、住居東南隅よりの部分である。同時期の他住居例からするならば、前者の位置が炉の位置として適当と思われる。後述する貯蔵穴状の土壇の位置との相関からも、その可能性は高い。

住居址南西隅には、住居の走行と平行して、東西70cm、南北65cmで、深さ35cmの、隅丸正方形を呈する、貯蔵穴と思われる土壇が確認されている。土壇内部および縁部分から、完形の土師器7個体(うち1は高杯の杯部分のみ)がまとめて出土している。土壇内から出土した3個体も、土壇縁部分からの転落したものであることが出土状態から推される。

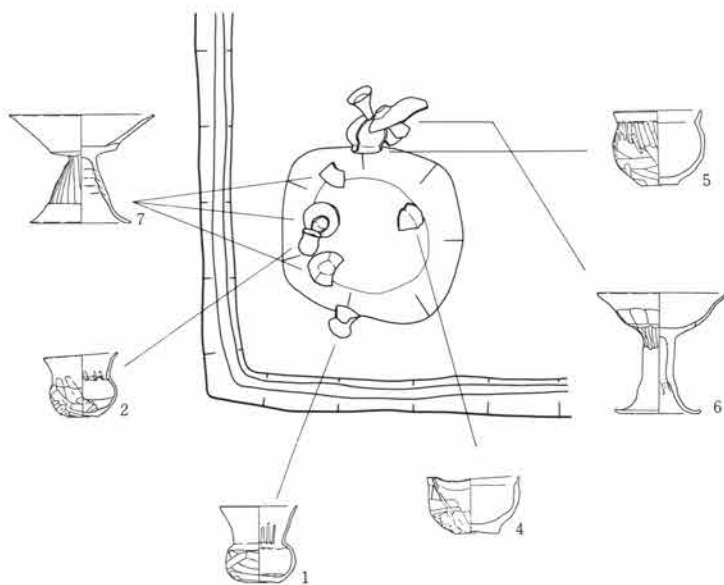
住居壁に沿って幅8cm、深さ5cmの壁周溝が全周している。

出土遺物は、埋土中のものも含め、多量に出土している。住居に直接伴なうと思われるものは、前述した貯蔵穴周辺に加えて、地床



1. FAに伴なうバミス(φ2~3cm)を多量に含む黒褐色土。
2. 1層と同じバミスを少量含む黒褐色土。
3. 地山の黄褐色ブロックを斑状に混じる黒褐色土。
4. 1層と同じバミスをごく少量含む暗褐色土。
5. 4層と同質であるが、この層中より炭化物粒を含む。
6. 白色粒子・炭化物粒を含む黒褐色土。
7. 挟雑物のない黒褐色土。
8. 炭化物粒子を少量含む黒褐色土。
9. 多量の炭化物を含む黒褐色土。
10. 褐色土ブロックと炭化物を多量に含む暗褐色土。

第145図 71号住居址実測図



第146図 71号住居址貯蔵穴遺物出土状態図

III 検出された遺構と遺物

炉と推定した焼土確認部分の北側北壁よりに集中して出土する傾向が見られる。

本住居は焼失家屋と思われ、多量の炭化物、灰とともに炭化材が床面上から確認されている。

住居中心よりで、床面から17cm上の埋土中には、榛名山ニツ岳噴出の火山灰層（FA）に伴なうと思われる軽石粒が認められる。FA火山灰の純粋層序が認められないこと理由は明らかにしがないが、本住居が、住居廃絶後、一定の時をへて、ニツ岳のFAに伴なう爆裂をむかえたことが推せられる。

住居外には、近接していくつかのピットが確認されている。住居址に直接結びつくものかどうか明らかにできなかった。

75号住居址 ▶ 出土遺物P.199～206

本遺跡の古墳時代住居址分布のほぼ中心部に位置している。北東に74号住居址、北に77、78号住居址が隣接している。壁高20cmを有する遺存状況の良好なものであったが、調査中絶えず周囲の水田から浸水してくる水に悩まされ、十分な調査ができなかった点が悔やまれる。本住居址では、埋土上層から床面まで、きわめて多量の土器が出土し、足の踏場もないほどの状況であったことが注意された。

住居址の対角線方向をほぼ方位にあわせており、主軸を北東から南西とし、北東壁にカマドが付設されている。主軸方向で長さ4.4m、これと直交する方向で長さ4.2mの規模を有し、ほぼ正方形プランを呈している。

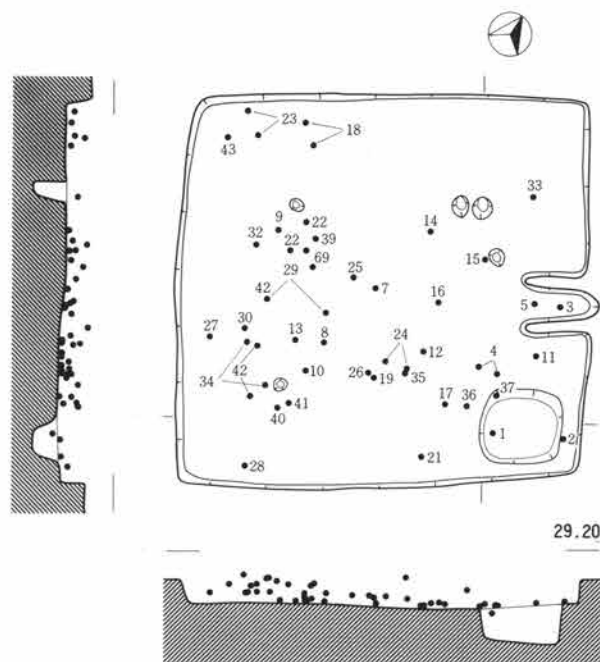
カマドは北東壁の中心より20cm南東に扁して付設されている。質のよくない白色粘土を使用して構築しており、袖は70cm、住居内側へ張り出している。焚口部での幅32cmを測る。焼成部の焚口より中心には、底面に接して、土師器碗形土器が伏せた状態で出土している。カマド支脚に転用されたものと思われる。

カマド右袖の東南50cmに隣接し、住居東隅部に接するような位置に、貯蔵穴と思われる、上端で一辺80cm、下端で一辺56cm、深さ40cmの正方形プランを呈する土坑が確認されている。

主柱穴と思われるピットが、3ヶ所で確認されているが、通例のものにくらべ、径が小さく、浅い点に問題を残している。

前述したように、本住居では、おびただしい量の土器（土師器）が住居中央部を中心として、出土している。直径住居に伴なわない埋土中のものは、破損しているものが多く、本住居廃絶後、凹地部分を捨て場として利用し、多量の土器が投棄されたものと思われる。床面直上から出土していることから、直接住居に伴なうと認定したものは、主として住居址東南側部分に集中する傾向にあり、カマド、貯蔵穴の占地部分との相関が考えられる。出土土器のうちでは、壺形土器5個体が床面直上で確認されており注目された。この量は、同時期の他住居では壺を欠くか、1個体伴なう事例がほとんどであることを考えるときわめて多い。

本住居の場合、焼失家屋ではないが、直接住居に伴なうと思われる完形の土器が、多量に放置されたまま廃絶しており、他の自然災害等を契機としての廃絶が想起される。



第147図 75号住居址実測図

74号住居址 ▶ 出土遺物 P.194~199

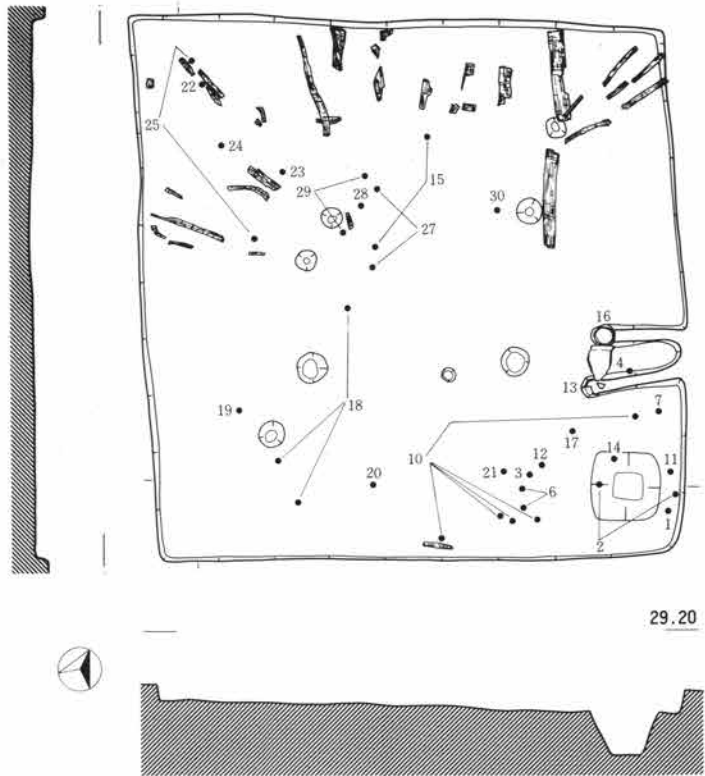
71号住居址の南東に隣接し、東側には方位をほぼ同じくして82号住居址が隣接している。古墳時代の住居分布の範囲の中では、やや中よりを占めている壁高15cmほどを残すもので、削平がかなり進んでいる。

主軸を西南西から東北東にとる（以下の記述では西南西を西とし、これを基準に表わす）。東西5.5m、南北5.6mの規模の正方形プランを呈し、北西隅はやや外側へ張り出しぎみである。

東壁の中心より70cm南に扁してカマドが付設されている。袖の住居内へ長く張り出す形状で、左袖で長さ1mを測る。袖の先端部には、左袖では土師器長胴甕形土器を倒立した状態で設置し、右袖では土師器壺を正立の状態を設置している。この二つの土器の間をうめるごとく、土師器長胴甕が横位で出土している。本来、両袖端部に設置された土器にこの長胴甕を架構させ、鳥居状の焚口部をつくっていたことが推される。燃烧部中心には、床面上に口縁部を欠く脚付甕形土器を設置し、その上に土師器高杯形土器を杯部を下にむけてかぶせるようにおいた状態で出土している。カマド支脚に破損した土器を転用したものと推される。

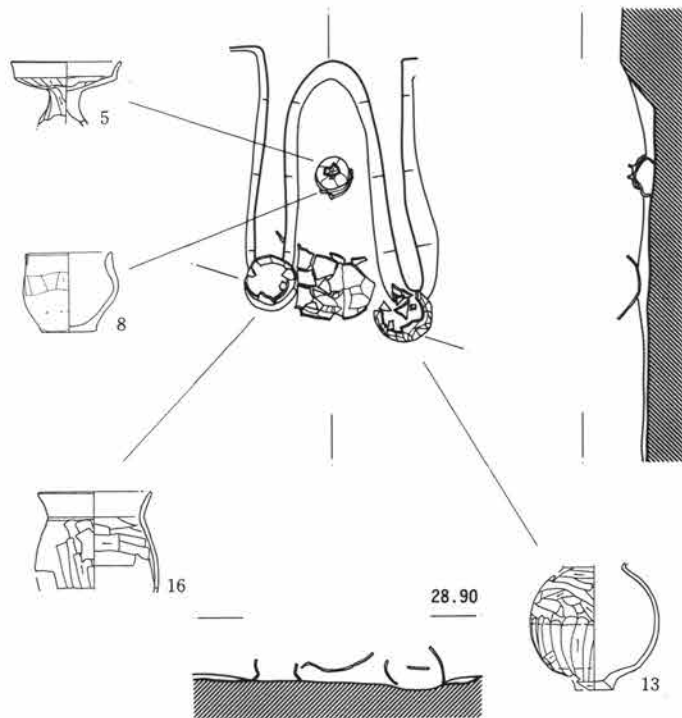
カマドの南側に隣接して、貯蔵穴と思われる土坑が確認されている。一辺上端で70cm、下端で30cmの正方形プランを呈し、下にいくにつれ、その幅を著しく狭めている。深さは56cmを有する。

出土遺物は、埋土中のものも含め、きわめて多量の土器が検出された。埋土中のものと、住居に直接伴うもの



29.20

第148図 74号住居址実測図



第149-1図 74号住居址カマド遺物出土状態図

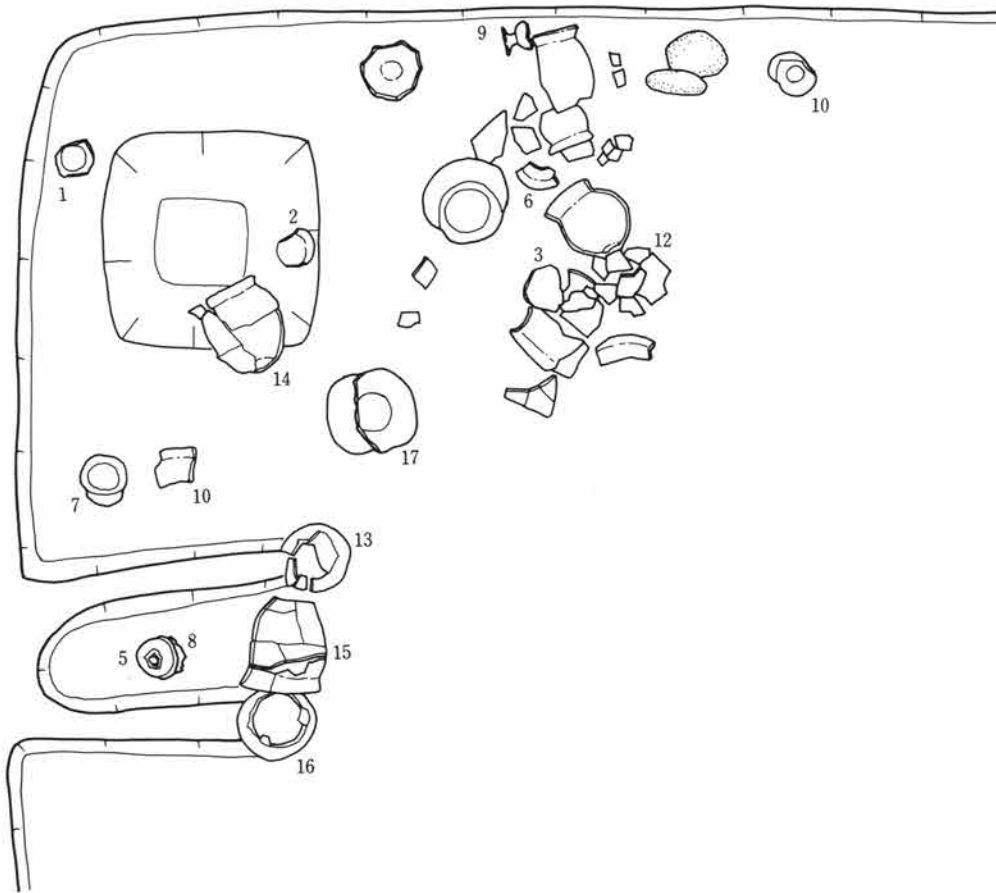
III 検出された遺構と遺物

とでは、分布状況に明瞭な差違が認められる。埋土中の土器は、大半が破片であり、住居北側部分に集中的に確認された。本住居址廃絶後、住居址北縁より、損壊した土器が投棄されたことが推される。

住居に直接伴うものは、完形のものが多いと多く、大半が原位置を保っていることが、土器底面を床面上にして正立してもの多い出土状態からも窺われた。出土位置はカマド、貯蔵穴のある住居東南隅付近で、とりわけ、貯蔵穴に隣接した西側部分に集中している。土師器甕、甑等が集中している。本遺跡中の42号住居址に見られたカマド右脇の長方形区画に通ずる空間の存在が、本住居の貯蔵穴と土器分布の範囲に窺われる。

本住居は焼失家屋と思われ、多量の炭化物、炭化材が床面上に認められた。炭化材は住居北側よりに明瞭に認められ、種と思われる材の放射状の分布が確認されている。

不意の火災遭遇の中で、家財等を放置したまま脱出したものか、きわめて、廃絶直前の住居内の状況をよく保っているものと思われる。



第149-2図 74号住居址貯蔵穴周辺遺物出土状態図

77号住居址 ▶ 出土遺物P.207、第175図

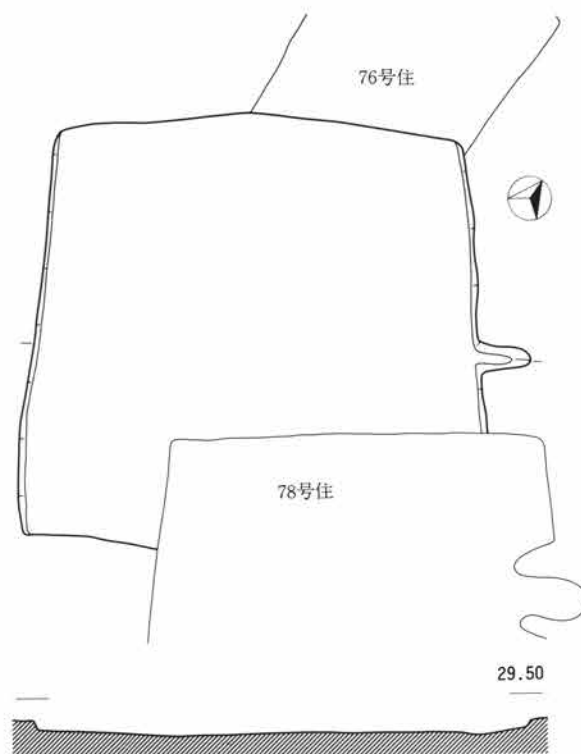
78号住居址と主軸をほぼ同じくし、南東側で重複している。一方、住居北隅よりでは、平安時代の76号住居址と重複している。遺構の遺存状態は削平等により78号住居址以上にわるく、規模、範囲等についても不明な点が多い。

主軸方向で長さ約4.5m、これと直交する方向で長さ約4.4mの規模を有する。

カマドは北東壁の中心より東南に扁して付設されているが、遺存状況がわるく、規模、形状等については不明確である。

出土遺物は、きわめて散在的に少量の破片が見られるのであるが、削平が床面にまで及んでいることゆえ、当初の状況とはいえない。

本住居は、78号住居に先行する段階のものであるが、出土土器、床面レベル、主軸方向等の比較からして、きわめて近接した時期のものであることが窺える。



第150図 77号住居址実測図

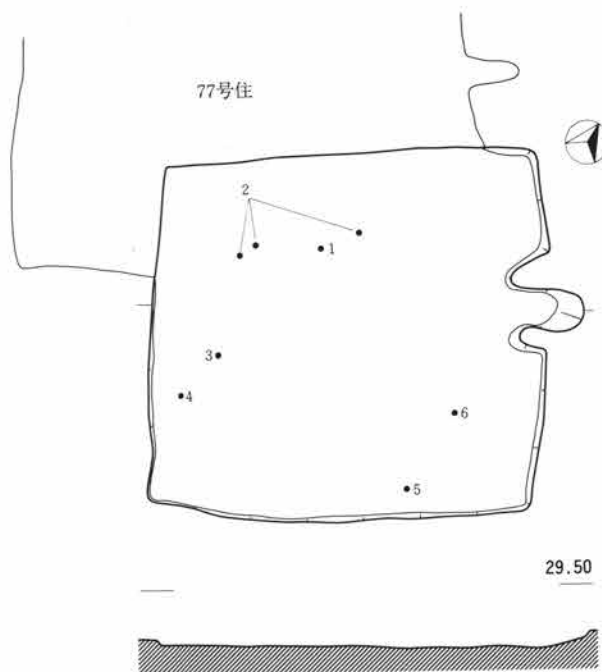
78号住居址 ▶ 出土遺物P.207~208、第175図

74号住居址の南西で、75号住居址の北西に隣接している。時期的に先行する77号住居址と北西側で重複している。残っている部分で壁高5cm以下であり、全体に遺存状況は悪い。

主軸を北東から南西にとり、北東壁にカマドを付設している。主軸方向で長さ4.2m、これと直交する方向で長さ4mの規模を有し、主軸方向にやや長い長方形プランを呈している。

カマドは、北東壁の中心から、やや北西に扁して付設されている。遺存状況が悪く、不明な点が多い。

出土遺物は、大半が破片であり、散在的な状態である。長胴の甕形土器を除くと、直接本住居に伴なうと考えられるものは少ない。



第151図 78号住居址実測図

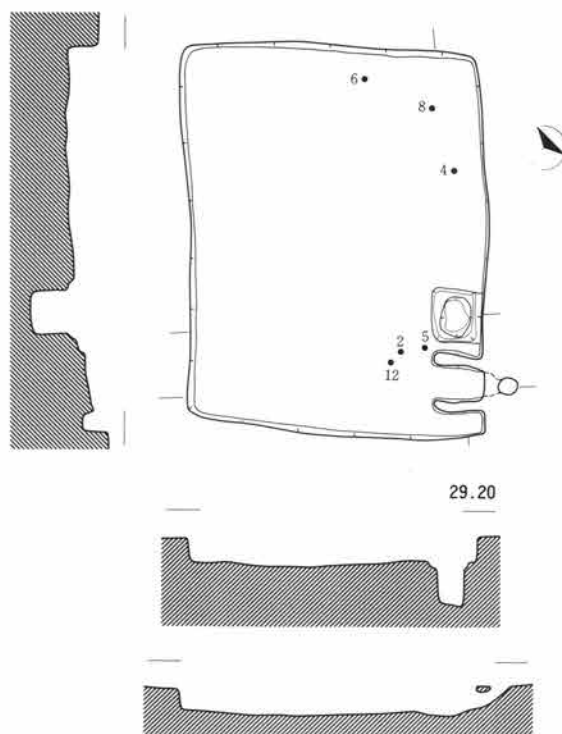
III 検出された遺構と遺物

81号住居址 ▶出土遺物P.208～210、第176・177図

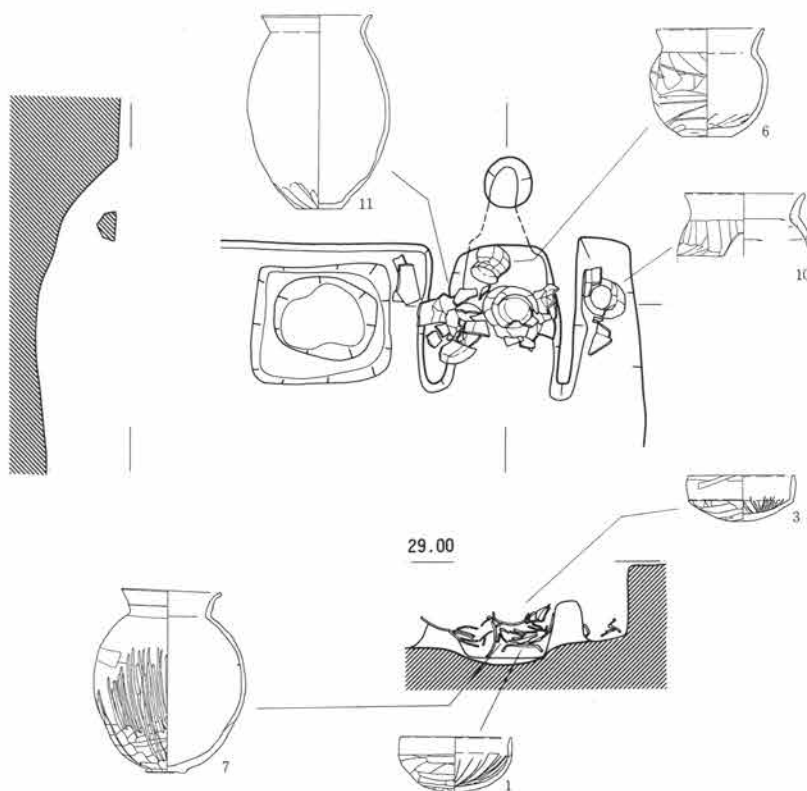
本遺跡の古墳時代住居分布北端よりに位置している。東側には68号住居址が隣接する。一方、奈良期の67号住居址が、ほぼ全体に重複している。壁高35cmを有し、カマドの遺存状況等からするとほぼ当初の状態に近いものと考えられる。

主軸はほぼ東西とするが、東からやや南へふれている。東西3.2m、南北4.1mの南北方向に長い長方形プランを呈しており、相前後する時期の他住居がほぼ正方形プランを呈するのと異っている。

カマドは、天井部、煙り出し部分まで残る遺存状況のよいものである。住居東壁の南隅部に近接して付設されており、カマド南側は、わずか25cmの間隔をおいて住居南壁である。質のよくない白色粘土を使用しており、袖は、住居内側へ55cm張り出している。焚口部での幅36cmを測る。煙り出し部分は、住居壁より40cm外側に位置しており、この部分の遺存しない、本遺跡の他住居例の参考になる。燃焼部内には、折り重なるようにして、完形の土器5個体分が出土している。焚口部から奥へ約60cmの位置、カマド左右いっぱい土器が出土している。むかって左側は長胴の甕形土器が正立で設置されていたものがつぶれた状態で出土している。右側は、カマド底面に伏せた状態に土師器杯形土器の上に土師器甕形土器が重なり、その口縁部がすっぽりうけるように土師器杯形土器が底部を下にして出土している。底面の杯形土器をカマド支脚とし、甕形土器が火に掛けられていたものと推されるが、この



第152図 81号住居址実測図



第153図 81号住居址カマド遺物出土状態図

甕形土器の上の杯形土器の出土状態の意味するところについては理解に苦しむ。またこれらの一群の土器のさらに奥に土師器小型甕形土器がカマド底面に接して出土している。この出土状態もまた理解に苦しむ。あるいは、このカマドにおける出土状態は、カマドに火が入ったの静止状態を示すものではない可能性もある。

カマドのむかって左側に貯蔵穴と思われる土壇が存在しており、本遺跡における通有形態と異っている。2段に掘りくぼめられたものであり、東西56cm、南北56cm、深さ8cmの方形の浅い区画の中に44×32cm深さ48cm（住居床面より）に掘られている。

住居に直接伴うと思われる遺物は、前述したカマド周辺に集中的に出土した土器以外では、住居北東隅付近に数は少ないが集中している。これら住居東側部分以外では、住居に直接伴うものは全く見当たらない本住居では、カマド・貯蔵穴の占地形態、プラン形状が、他住居例と異なっている点が注目された。

82号住居址 ▶出土遺物P.210・211、第176図

古墳時代住居分布の北東よりを占め、74号住居址のすぐ東側に近接する。住居の東よりを南北に、奈良～平安時代の2号溝が横断している。壁高35cmを残す遺存状況の良好なものであったが、75号住居址同様、絶えざる湧水に悩まされ、思うように調査がはかどらなかった。本住居の場合、住居廃絶後、床下にまで達する大型土壇が住居址いっばいに掘られており、床面を残す部分はわずかであった。

主軸をほぼ東西とし、東西5.6m、南北5.1mとやや主軸方向に長い、正方形プランに近い。

カマドは東壁の中心より30cm南に扁して付設されている。質のゆるい白色粘土を使用しており、袖は、住居内側へ80cm張り出している。焚口部で幅40cmを有している。カマド床面下は、カマド構築に際し、地山面を掘りくぼめて、土を入れかえており、その範囲は、カマド輪郭よりも一回り大きく、深さは、最も深い部分（カマド中心部）で15cmである。

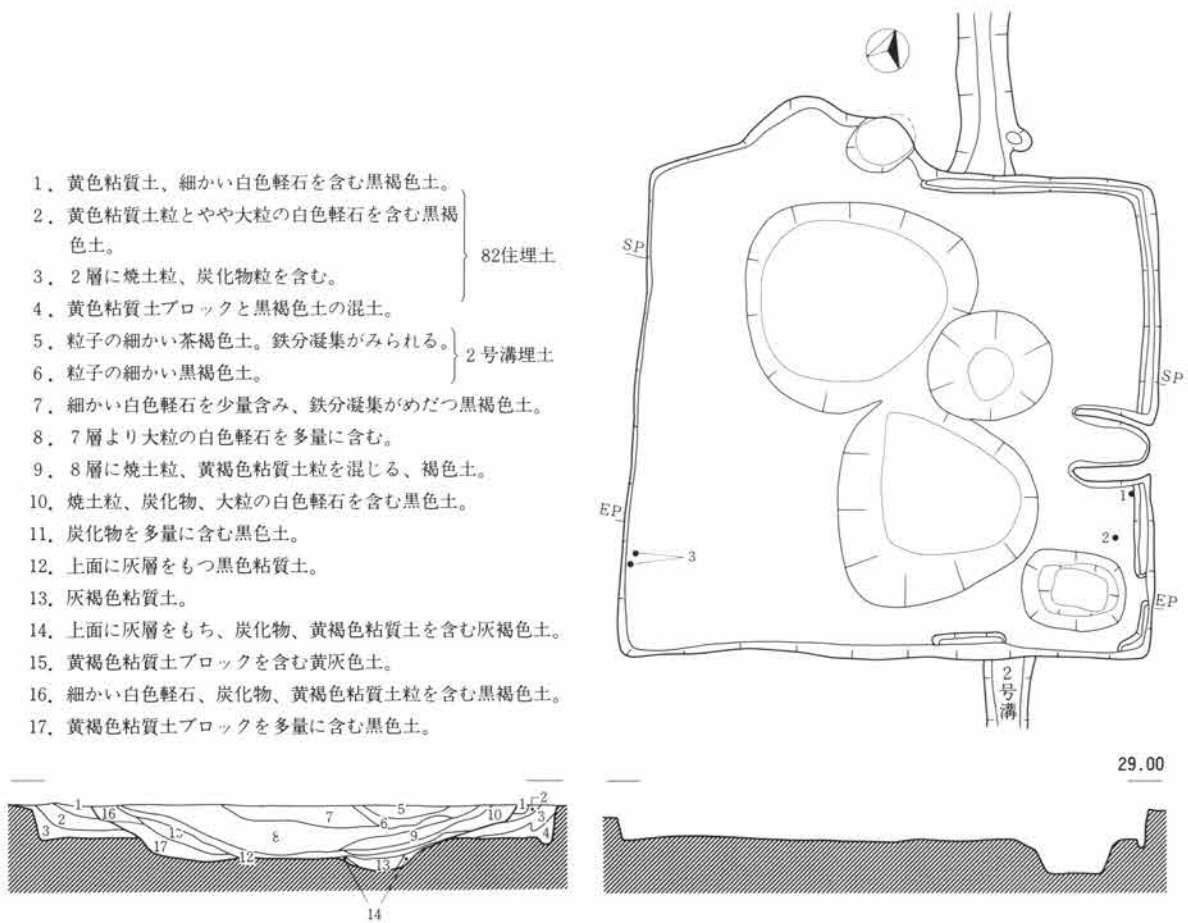
カマド右袖部から80cm間において、貯蔵穴と思われる土壇が存在する。81号住居の貯蔵穴と同様、2段に掘られている。110cm×80cm、深さ10cmの東西に長い長方形の浅い掘り込みから20cmの幅を残して、さらに30cm掘りくぼめられている。

壁周溝は、住居東側部分では明瞭であったが、他は認められなかった。

出土遺物はきわめて少ない。直接住居に伴うものはさらに少なく、カマド周辺にわずかに破片として散在するもののみである。

住居廃絶後、住居址内に掘り込まれた大型土壇は、上端部では、住居址の輪郭に近いひろがりをも有しており、下部では大小3ヶ所のくぼみとなっている。この土壇は、住居址の堅穴のくぼ地が存在している時期に掘り込まれたものであり、82号住居の時期に後出しつつも、左程時期を隔てるものではないと考えられる。埋土の状態を見ると、焼土、炭化物が多量に認められ、この土壇の機能の手がかりとなりそうである。土壇の底面に接しては、灰が一面にひろがり、またその上の埋土中にも縞状に何本もの灰層の認められる部分がある。土壇内で何かを燃やした痕跡は認められないことから、この住居址くぼ地付近で何かを燃やした際の灰原的な捨て場にしているものと考えられる。しかも、埋土の状態は、レンズ状に何層もの堆積が認められることから一定期間使用されていたことがわかる。また住居北壁沿いにも、規模は小さいが、これと類似した土壇が認められる。

III 検出された遺構と遺物

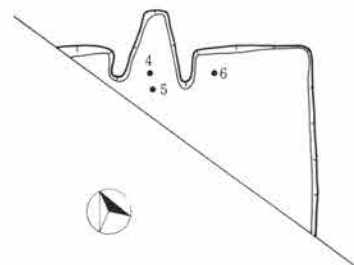


第154図 82号住居址実測図

80号住居址 ▶ 出土遺物P.212、第179図

古墳時代の住居分布のほぼ中心よりに位置し、75号住居の南西5mに近接している。住居址の南西側が調査区域外となっているため、全体の $\frac{1}{3}$ ほどの検出である。

主軸を南北とし、北壁で住居北東隅より西へ1.7mの位置にカマドを付設している。燃焼部で焚口部からやや奥まった中心部には、脚底部を破損した土師高杯形土器が、倒立して設置されている。この高杯形土器に底部を接してカマド手前へ倒れた状態で、長胴の甕形土器が出土しており、当初、高杯形土器をカマド支脚とし、その上に甕形土器がのせられて火に掛けられていたことがわかる。



第155図 80号住居址実測図

43号住居址 ▶出土遺物P.184・185、第161図

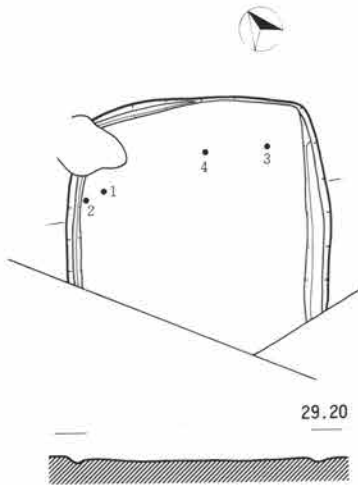
調査区内では、古墳時代の住居址のうち、最も南に位置している。平安時代の45号住居址と南端部分で重複し、住居南西よりは調査区域外となっているため未調査である。

住居址の対角線方向がほぼ方位とあうもので、北西から東南で長さ2.8mを有している。壁高3～5cmの残存であり、遺存状況はよくない。

住居検出部分では、カマドは認められなかった。45号住居址と重複する東南壁の南西隅よりに存在したものであろう。

幅15～20cm、深さ3cmの壁周溝がほぼ全体に存在している。

住居北東壁よりの床面直上から、ほぼ完形の土器4個体が出土している。



第156図 43号住居址実測図

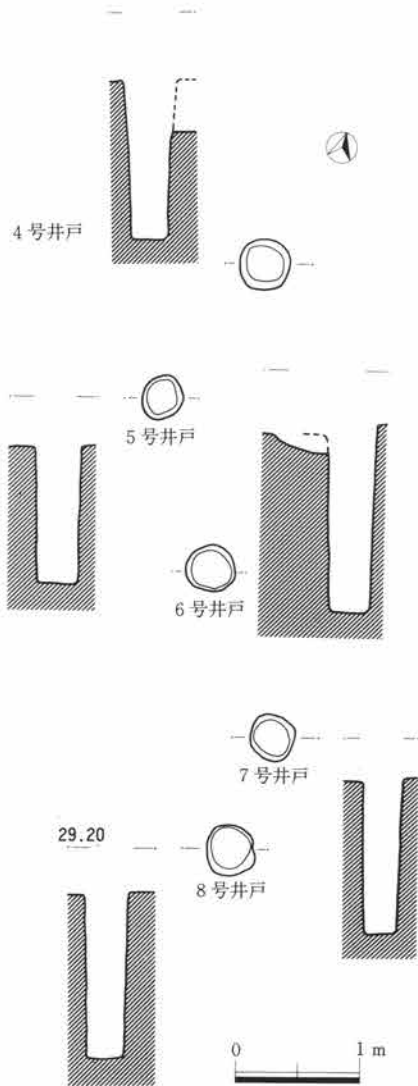
4・5・6・7・8号井戸

71号住居、74号住居、75号住居に囲まれた地域に、ほぼ南北に列をなすように5基が集中しており、北より南へ順次4・5・6・7・8号井戸と名づけた。隣りあう井戸相互の間隔は、1～2mを有し、重複するものはない。

各井戸の規模を示せば、下表のようになる。いずれも径30～40cmで、深さ120cm前後の規模に一定している。この深さは、青灰色砂質土層に達しており、十分に水が得られる深さである。住居址群との位置関係から、生活水確保を目的とする井戸と考えてよからう。

遺物等はほとんど得られていないため、新旧関係の有無は明らかでないが、単一時期に5基が併存したとは考えにくい。いずれにしても一地区に集中していることは、集落内における井戸の位置に何らかの規制があったことを意味している。

深さ・形状等からして、古墳時代後期の井戸と考えられるものが、調査区域のほぼ中央、古墳時代の住居分布の中では北よりに確認されている。調査中、絶えず湧き水に悩まされ、調査も十分でないため、不分明な部分も多い。



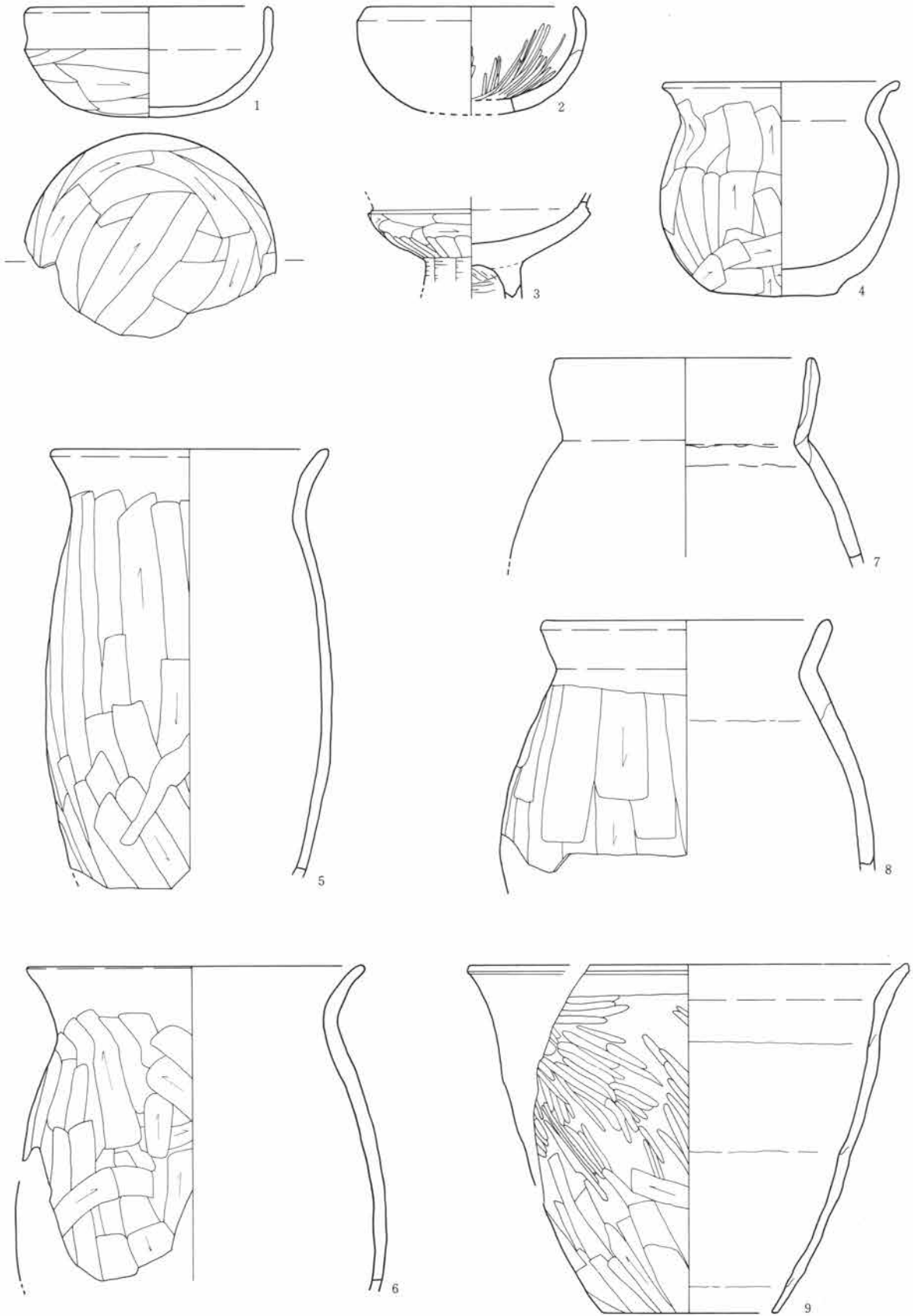
第157図 4～8号井戸実測図

規模一覧

(単位はcm)

井戸番号	東西径	南北径	深さ
4	32	31	124.5
5	32	31	121.5
6	40	36	124.5
7	33	35	127.5
8	37	35	107

III 検出された遺構と遺物



第158図 12号住居址出土遺物（5～9-¼）

12号住居址出土遺物観察表 (第158図) ▶本文P.167・第138図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	½残存 高 5.7cm 口 12.5cm 底 8.0cm	炭化材上。	①砂粒を含む。②赤褐色。	外面 底部一方向削り。体部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 摩耗激しく不明。口縁部は横ナデ
2	椀 (土師器)	½残存。底部欠。 高 (5.5cm) 口 10.9cm	埋土中。	①砂粒と石英粒、含む。②橙灰褐色。	外面 篋削りの後横方向篋磨き。 内面 ナデの後放射状の篋磨き。
3	高杯 (土師器)	杯部下半残存。	床面直上。	①砂粒、石英粒を含む。②灰褐色。	外面 杯部横方向篋削り。脚部接合部縦方向篋磨き。脚部方向ナデ 内面 杯部ナデ
4	小形壺 (土師器)	口縁部¼欠損。	甕No5の上面。	①細砂、黒雲母片を多量に含む。②赤褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。下位横方向篋削り。 内面 篋ナデ。口縁部横ナデ。
5	甕 (土師器)	底部欠損。 口 21.2cm。 頸 16.2cm。	床面上 2 cm。	①砂粒を多く含む。②茶褐色。	外面 胴部上半縦方向篋削り。下半縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
6	甕 (土師器)	口縁～胴部½残。 口 23.1cm。 頸 19.8。	床面直上。	①砂粒を多量に含む。②茶褐色。	外面 胴部上位、中位、下位の順に3段に縦方向篋削り。中位には部分的に横方向篋削り。 内面 横方向篋ナデ。口縁部横ナデ
7	壺 (土師器)	口縁～胴部½残。 口 (13.4cm)。	床面直上。	①砂粒を多く含む。②灰褐色。	外面 胴部縦方向ナデ。口縁部縦方向ユビナデ。 内面 胴部斜方向篋ナデ。口縁部横方向篋ナデ
8	甕 (土師器)	口縁～胴中位½残存。 口 15.0cm。	床面直上。	①砂粒、石英を多く含む。②灰褐色。	外面 胴部縦方向のかるい篋削り 内面 胴部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。
9	甕 (土師器)	口縁～底部破片。 高 23.7cm。 口 (30.4cm)。 底 (8.0cm)。	床面直上。	①砂粒、石英粒を含む。②灰褐色。	外面 胴部下半縦方向篋削り。上半斜方向磨き。口縁部横ナデ。 内面 胴部下半斜方向篋磨き。中位縦方向篋磨き。上位横方向篋磨き。口縁部横ナデ。

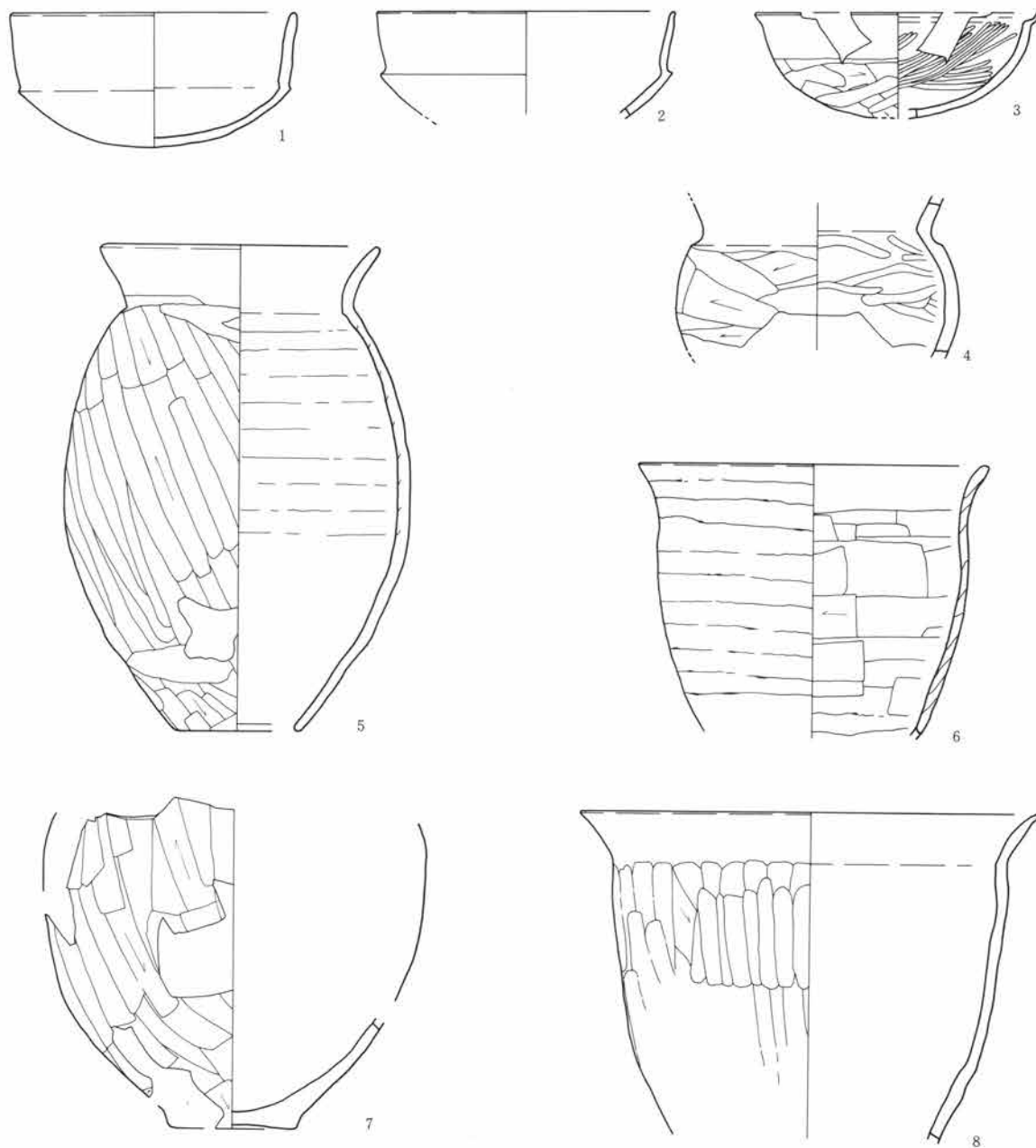
15号住居址出土遺物観察表 (第159図・P L78) ▶本文P.167・第139図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	口縁～底部½残。 高 5.9cm 口 (12.8cm)	壁際。床面直上。	①細砂を含む。②灰褐色。	外面 杯部は摩耗が激しく不明。口縁部横ナデ。 内面 口縁部横ナデ。
2	杯 (土師器)	口縁～底部¼残。 口 (13.4cm)	床面直上。	①極細砂を少量含む。②黄灰褐色。	外面 杯部斜方向ナデ。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
3	杯 (土師器)	口縁～底部¼残。 高 (4.6cm) 口 (12.8cm)	床面直上	①砂粒を多く含む。②赤褐色。	外面 杯部中央部→周縁部の順で篋削り。部分的に篋磨き。口縁部横ナデ。 内面 杯部放射状篋磨き。口縁部横ナデ。
4	小型壺 (土師器)	口縁下位～体部上位½残存。 頸 (10.1cm) 胴 (12.6cm)	カマド前。	①砂粒、石英粒を多量に含む。②赤褐色。	外面 胴部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部まばらな横方向篋磨き。口縁部横ナデ。

III 検出された遺構と遺物

(15号住居址)

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
5	甑 (土師器)	体部上位～底部½欠損。 高 28.5cm 口 16.0cm 頸 13.5cm 胴 20.5cm	カマド脇。 床面直上。	①細砂を多く含む。 ②灰白褐色。	外面 胴部下半縦方向篋削り。上半縦方向篋削り。中間部ナデ。頸部～肩部斜方向篋削り。さらに頸部横方向ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部上半粗いナデ。下半ナデ。口縁部横ナデ
6	甕 (土師器)	口縁～体部下位¼残存。 口 21.0cm	壁際。床面直上。	①細砂と金雲母片を含む。②黒茶褐色。	外面 胴部軽い粗い篋削り。口縁部横ナデ。 内面 横方向篋削り。口縁部横ナデ。



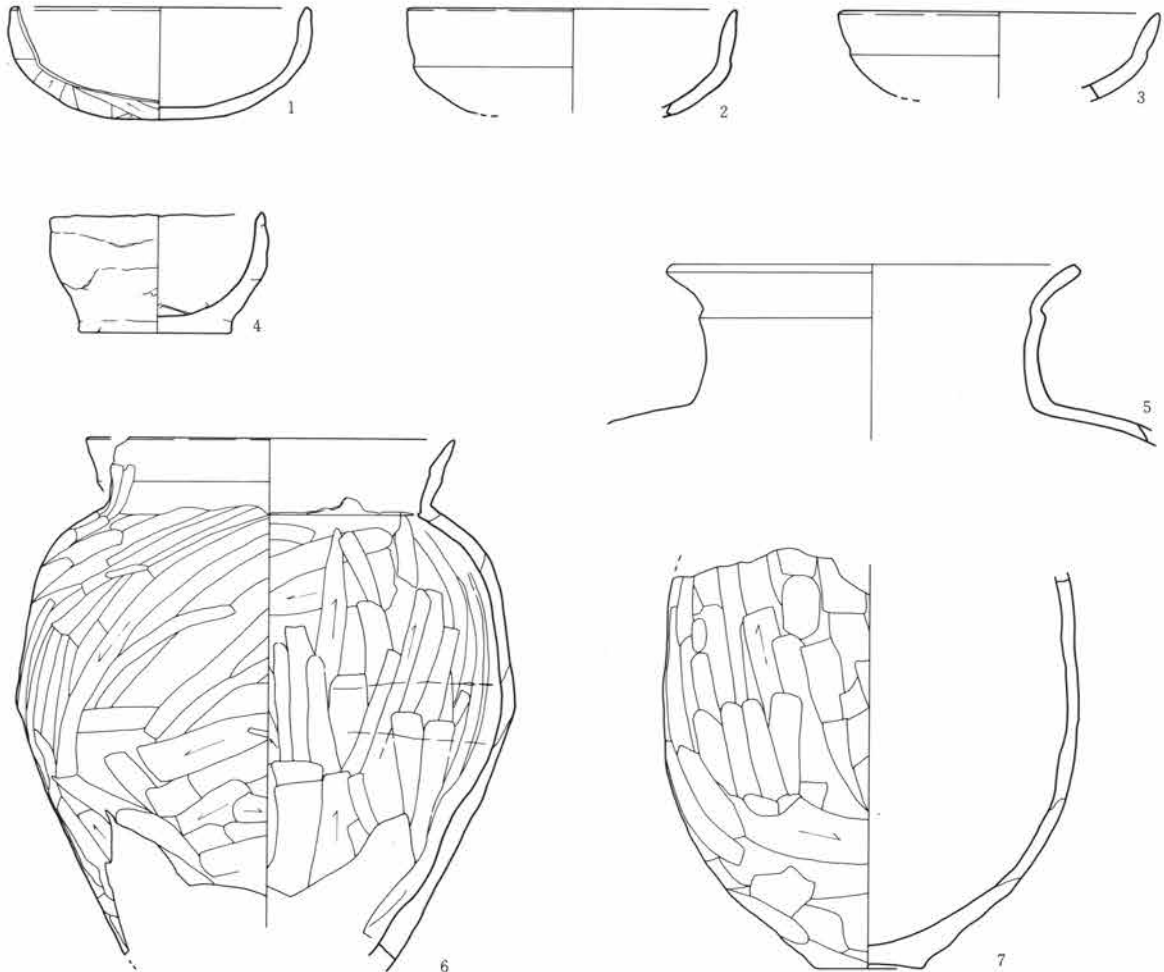
第159図 15号住居址出土遺物 (5～8-¼)

(15号住居址)

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
7	甕 (土師器)	体部中位～底部 $\frac{1}{4}$ 残存。 底 (7.3cm)	カマド支脚。	①細砂を多量に含む。 ②黒褐色。	外面 胴部最下部斜方向篋削り。下半縦方向篋削り。上半縦方向篋削り。 内面 胴部ナデ。
8	甑 (土師器)	口縁～体部中位 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 (31.4cm) 頸 (23.7cm)	カマド前。 床面直上。	①細砂を含む。 ②黒灰色と灰褐色の斑状。	外面 胴部縦方向のユビナデ。下半ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部篋ナデ。

42号住居址出土遺物観察表 (第160図・P L78) ▶本文P.168・第140図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	口縁～底部 $\frac{1}{8}$ 残。 高 4.5cm。 口 (11.8cm)	貯蔵穴脇。 床面直上。	①細砂・石英を含む。 ②灰黄褐色。	外面 杯部中央部→周縁部の順で篋削り。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
2	杯 (土師器)	底部欠損。 口 (13.2cm)	貯蔵穴内。	①砂粒、雲母を含む。 ②橙褐色	外面 杯部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデの後、放射状の篋磨き。口縁部横ナデ

第160図 42号住居址出土遺物 (5・6・7- $\frac{1}{4}$)

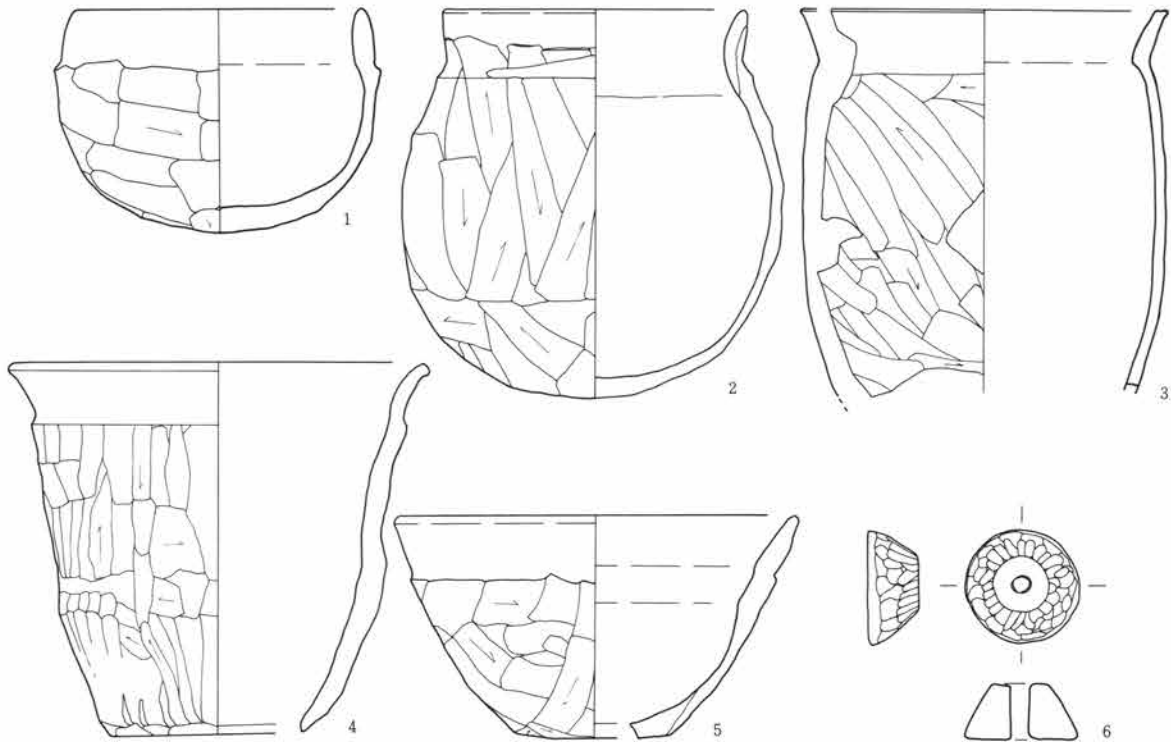
III 検出された遺構と遺物

(42号住居址)

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
3	杯 (土師器)	底部欠損。口縁 $\frac{1}{8}$ 残存。 口 (21.8cm)	カマド燃焼部。 灰面直上。	①砂粒、石英を含む。 ②茶褐色。	外面 杯部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
4	椀 (土師器)	完形。 高 4.8cm。 口 8.6cm。 底 6.0cm。	貯蔵穴脇。 壁際。 床面直上。	①砂粒、石英を含む。 ②灰色。	手捏ね。 外面 体部指ナデ。底部ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ。中央部放射状の篋痕。口縁部横ナデ。
5	壺 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{8}$ 残。 口 (21.6cm)	貯蔵穴。	①砂粒、長石、石英、雲母を含む。 ②灰褐色	外面 肩部篋削りの後、横方向ナデ。口縁部横ナデ。 内面 肩部木端状工具によるナデ。口縁部横ナデ。
6	甕 (土師器)	口縁～底部直上 $\frac{1}{4}$ 残存。 口 (19.6cm) 頸 (17.2cm)	貯蔵穴上端。	①砂粒、石英を多量に含む。②茶褐色	外面 胴部下半横方向篋削り。上半斜方向篋削り。(木端状工具)。口縁部横ナデ。 内面 胴部上半横方向篋ナデの後、上半～下半縦方向の篋削り。口縁部横ナデ。
7	甕 (土師器)	体中位～底部 $\frac{2}{3}$ 残存。 胴 (21.9cm) 底 5.8cm。	カマド前。 床面直上。	①細砂、石英を多量に含む。②黒褐色。	外面 胴部下半横方向篋削り。上半縦方向篋削り。底部一方向篋削り。 内面 胴部ナデ。

43号住居址出土遺物観察表 (第161図・P L78) ▶ 本文P.179・第156図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	椀 (土師器)	ほぼ完形。 高 8.9cm。 口 10.4cm。	床面直上。	①砂粒を少量含む。 ②褐色。	外面 体部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 体部丁寧な横ナデ。口縁部横ナデ。



第161図 43号住居址出土遺物 (2～4 - $\frac{1}{4}$)

2 古墳時代の遺構と遺物

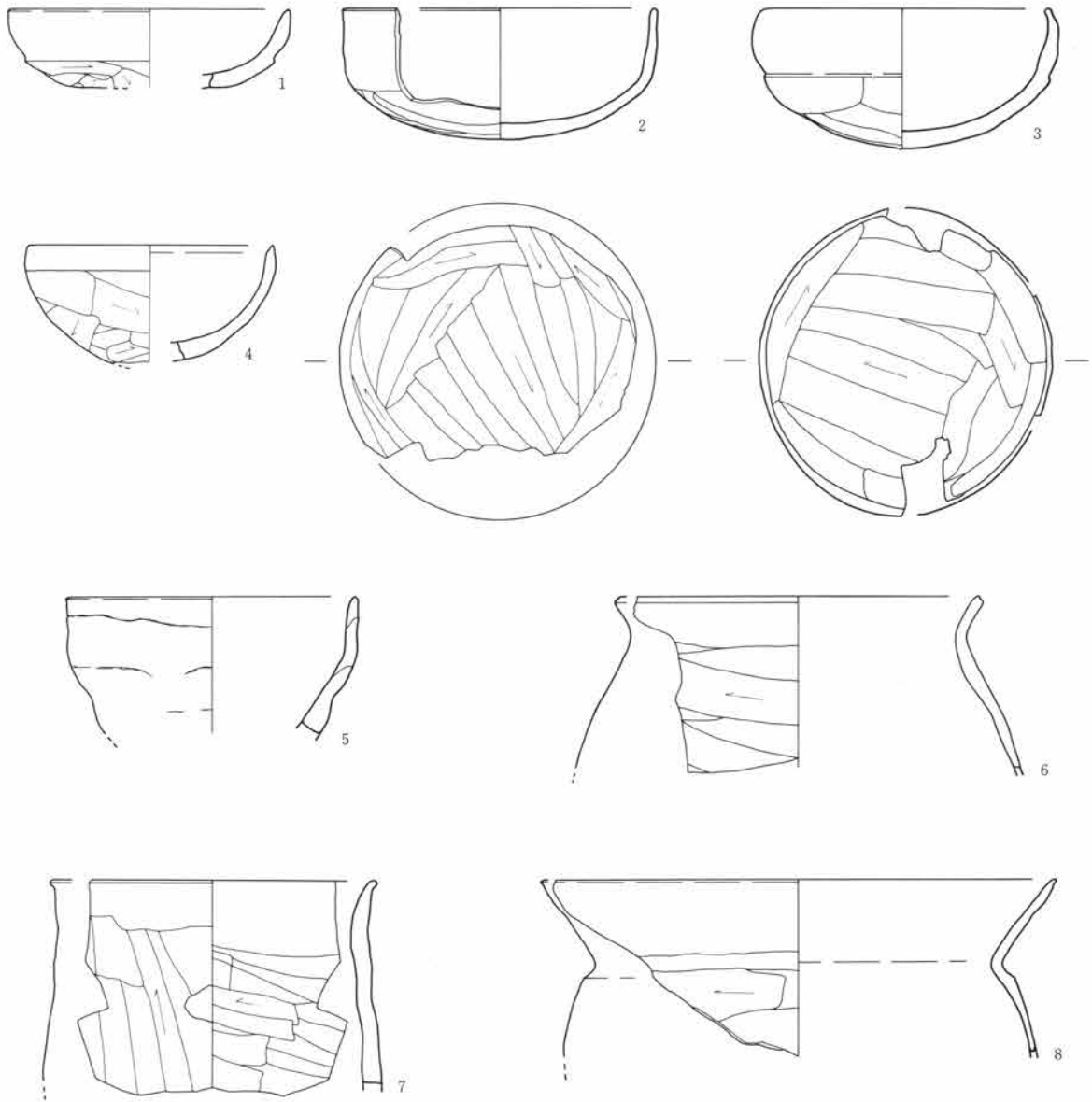
(43号住居址)

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
2	甔 (土師器)	体部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 8.8cm。 口 10.4cm。	床面直上。	①砂粒を含む。 ②褐色。	外面 体部横方向笕削り。部分的に縦方向笕削り。 口縁部横ナデ。底部小円孔は焼成前穿孔。 内面 丁寧なナデ。口縁部横ナデ。
3	甔 (土師器)	口縁部～体部下位 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 14.7cm。 口 16.5cm。 底孔 7.6cm。	床面直上。	①細砂を含む。 ②赤褐色。	外面 胴部横方向笕削り後、縦方向笕磨き。胴部 下端横方向に笕削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部上半横方向笕磨き。下半笕削りの後、 上から下まで縦方向笕磨き。口縁部横ナデ
4	壺 (土師器)	口縁部～体部下位 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 15.4cm。 口 12.2cm。 頸 11.8cm。 胴 15.8cm。	床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②赤褐色。	外面 胴部下位斜方向笕削り。上半縦方向笕削り。 頸部ぐると笕ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
5	甕	口縁部～胴部下位 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 (19.6cm) 頸 (17.8cm)	埋土中。	①細砂、雲母、多量 を含む。②黒褐色	外面 胴部斜方向笕削り。口縁～頸部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
6	紡輪 (石製品)	完形。 高 2.1cm。 径 2.1～4.5cm。	床面直上。		

53号住居址出土遺物観察表 (第162図・P L78) ▶本文P.168・第141図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	底部欠損。 口 12.2cm。	カマド燃焼部。	①細砂を少量含む。 ②橙褐色。	外面 底部笕削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
2	碗 (土師器)	底部欠損。 口 10.8cm。	カマド焼成部。	①砂粒を多量に含む。 ②橙褐色。	外面 中央部→周縁部の順で笕削り。 内面 杯部ナデ。
3	杯 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 5.6cm。 口 13.6cm。	カマドの右横。 床面直上。	①砂粒、石英粒、長石粒を多量に含む。 ②茶褐色。	外面 中層部→周縁部の順で笕削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
4	杯 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{4}$ 欠損。 高 5.9cm。 口 12.4cm。	カマド燃焼部。一部は灰面下に埋設。	①砂粒を多く含む。 ②橙褐色。	外面 底部一方向笕削り。周縁6単位笕削り。口縁部横ナデ。内面 ナデ。口縁部横ナデ
5	鉢 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存。	カマド燃焼部。貯蔵穴埋土。	①細砂、長石を含む。 ②茶褐色。	外面 体部斜方向笕削り。口縁部横ナデ。 内面 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
6	甕 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 (15.6cm)	カマド脇。 床面直上。	①細砂を含む。 ②灰褐色。	外面 肩部笕削り。口縁部横ナデ。 内面 肩部指押え。口縁部横ナデ。
7	甕 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 (15.6cm)	カマド脇。 床面直上。	①面細砂、雲母を含む。 ②灰褐色。	外面 体部縦方向笕削り。口縁部横ナデ。 内面 体部横方向笕ナデ。口縁部横ナデ。
8	甕 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 (22.2cm)	カマド燃焼部。	①細砂、雲母を多量に含む。 ②灰褐色。	外面 肩部横方向笕削り。頸部指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 肩部ナデ。口縁部横ナデ。

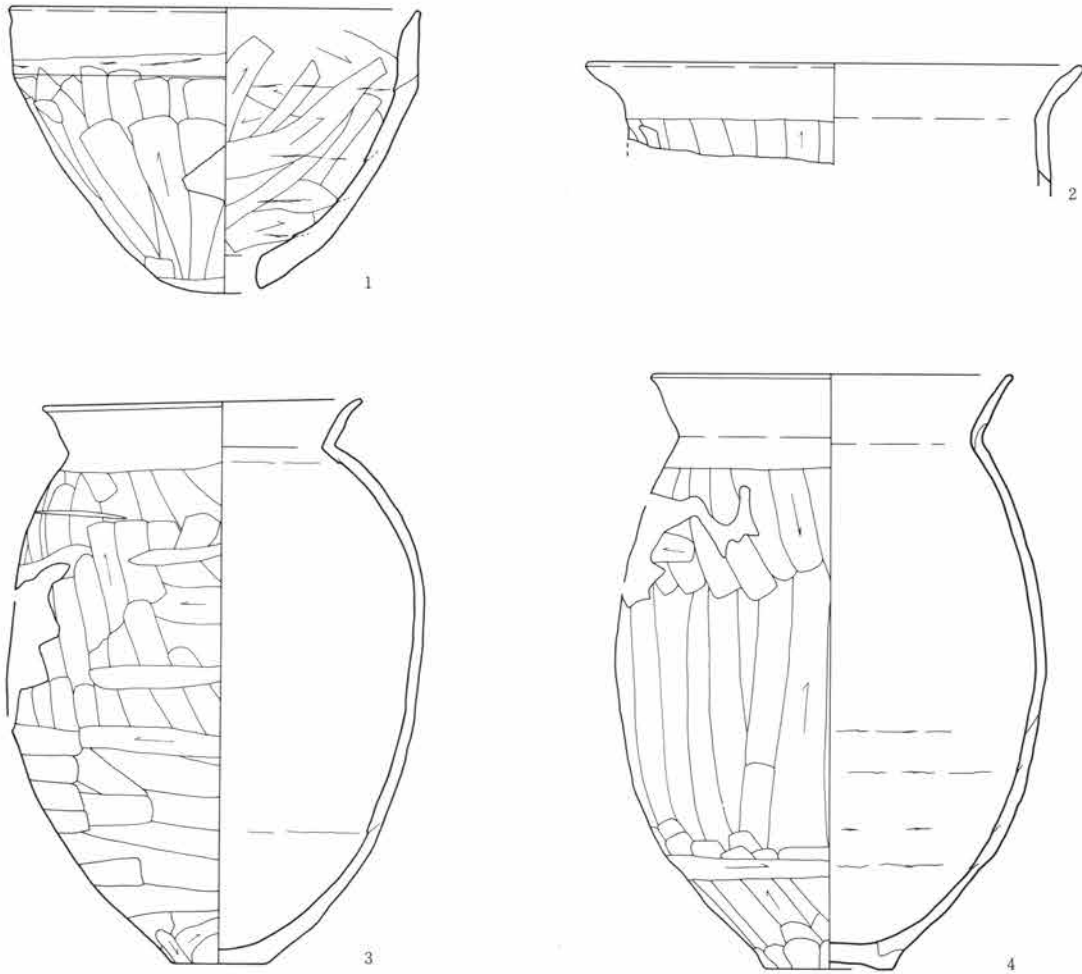
III 検出された遺構と遺物



第162図 53号住居址出土遺物

65号住居址出土遺物観察表 (第163図・P L78) ▶本文P.169・第142図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	瓶 (土師器)	ほぼ完形。 高 11.3cm。 口 16.3cm。	床面直上。	①砂粒、長石を多量に含む。②橙褐色。	外面 体部縦方向篋削り。体部下端横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部斜方向篋削り。口縁部横ナデ。
2	甕 (土師器)	口縁部残存。 口 27.0cm。 頸 22.9cm。	床面直上。	①細砂・長石を含む。②灰白褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
3	甕 (土師器)	口縁～体部½欠。 高 30.0cm。 口 17.0cm。 胴 21.9cm。 底 5.0cm。	床面直上。	①細砂、長石、石英、雲母を多く含む。②灰褐色。	外面 胴部上半3段に縦方向篋削り。一部、削りの上を横方向ナデ。下半横方向篋削り。最下部斜方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。



第163図 65号住居址出土遺物（2～4-¼）

(65号住居址)

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
4	甕（土師器）	胴部¼欠損 高 31.4cm 口 19.4cm 頸 16.1cm	カマド脇 胴 22.9cm 底 7.0cm	①細砂、雲母を含む。 ②灰褐色～黒褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。上位縦方向篋削り。下位縦方向篋削り。下位の篋削りの上に帯状に横方向篋削り。頸部および口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。

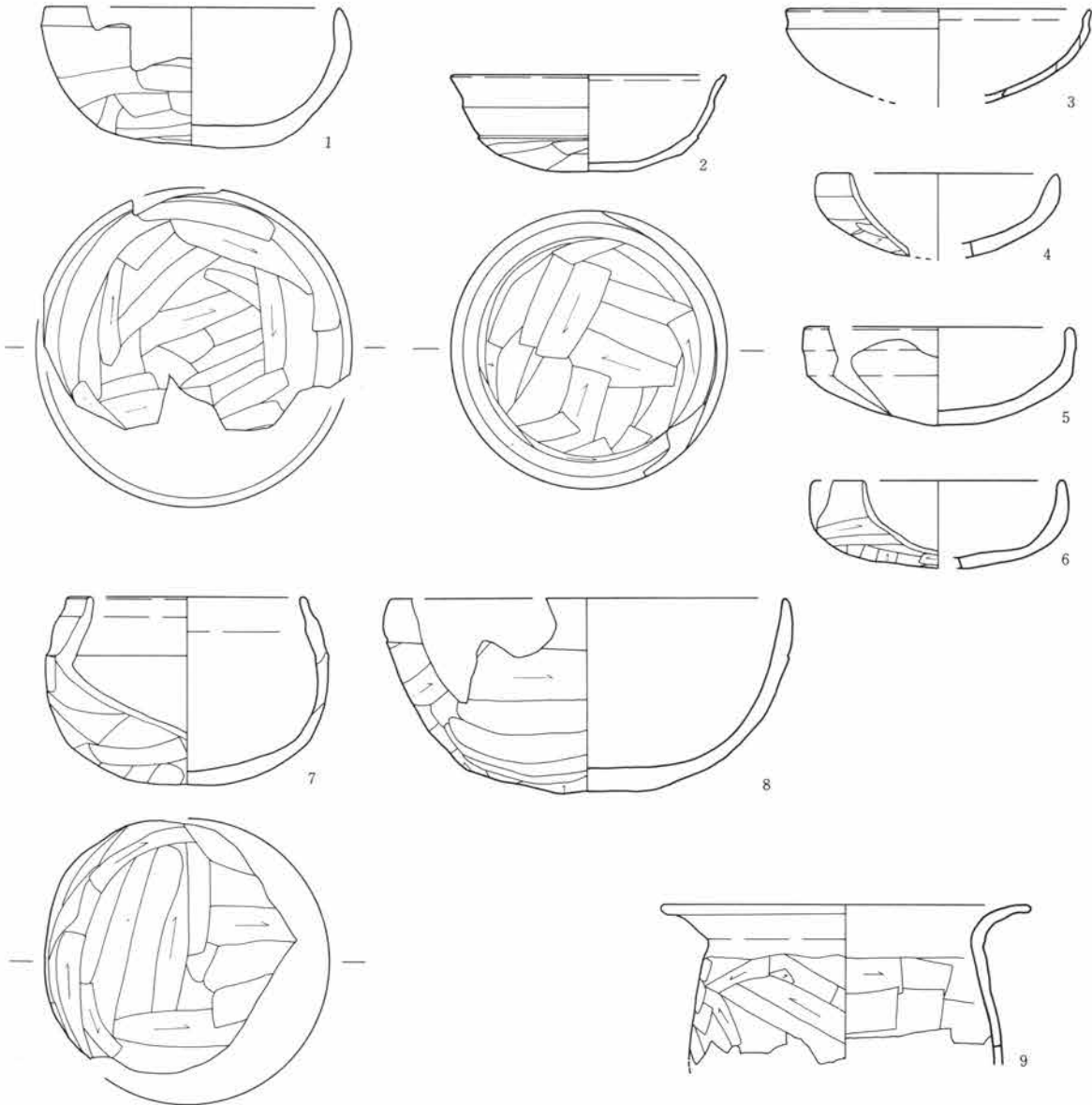
66号住居址出土遺物観察表（第163図・P L79）▶本文P.169・第142図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯（土師器）	¾残存。 高 5.8cm。 口 12.6cm。	カマド脇。 床面直上。	①砂粒を少量含む。 ②赤褐色～黄褐色。	外面 杯部中央部→周縁部の順で篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
2	杯（土師器）	口縁部¼欠損。 高 4.1cm。 口 11.8cm。	西隅。 床面上5cm。	①細砂を多量に含む。 ②灰褐色。	外面 杯部中央部3方向篋削り後、周縁をぐるりと篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
3	杯（土師器）	口縁～杯部中位¼残存。 口（13.1cm）。	カマド袖直上。	①細砂、雲母、長石、石英を含む。 ②赤褐色。	外面 杯部篋削り。摩耗激しく方向、単位不明。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。

III 検出された遺構と遺物

(66号住居址)

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
4	杯 (土師器)	1/2残存。 口 10.2cm。	カマド灰面上 6cm。	①砂粒を少量含む。 ②赤褐色。	外面 杯部下半篔削り後、上半ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
5	杯 (土師器)	口縁部1/2残存。 高 4.2cm。 口 11.4cm。	カマド脇。 床面直上。	①砂粒を含む。 ②灰褐色。	内外面とも器面が荒れており、整形技法不明。口縁部横ナデ。
6	杯 (土師器)	口縁～底部1/2残。 高 3.6cm。 口 (10.8cm)	カマド前。 床面直上。	①細砂をわずかに含む。 ②橙褐色。	外面 杯部中央部→周縁部の順で篔削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
7	椀 (土師器)	口縁部1/2欠損。 高 8.3cm。 口 (10.2cm)	カマド前。 床面上5cm。	①細砂を混じる。 ②橙褐色。	外面 底部2方向篔削り後、周縁および体部ぐるりの横方向篔削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。



第164図 66号住居址出土遺物 (9-1/4)

2 古墳時代の遺構と遺物

(66号住居址)

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
8	鉢 (土師器)	口縁～体部下位 $\frac{1}{2}$ 残存。 高 8.2cm。 口 (16.9cm)	カマド脇。 床面直上。	①砂粒を含む。 ②橙褐色。	外面 底部中央部→周縁→体部の順で篋磨き。口縁部横ナデ。 内面 体部篋ナデ。口縁部横ナデ。
9	甕 (土師器)	口縁～肩部残存。 口 21.2cm。 頸 15.7cm。	カマド焼成部。	①細砂、長石、雲母を含む。 ②灰褐色。	外面 肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 肩部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。

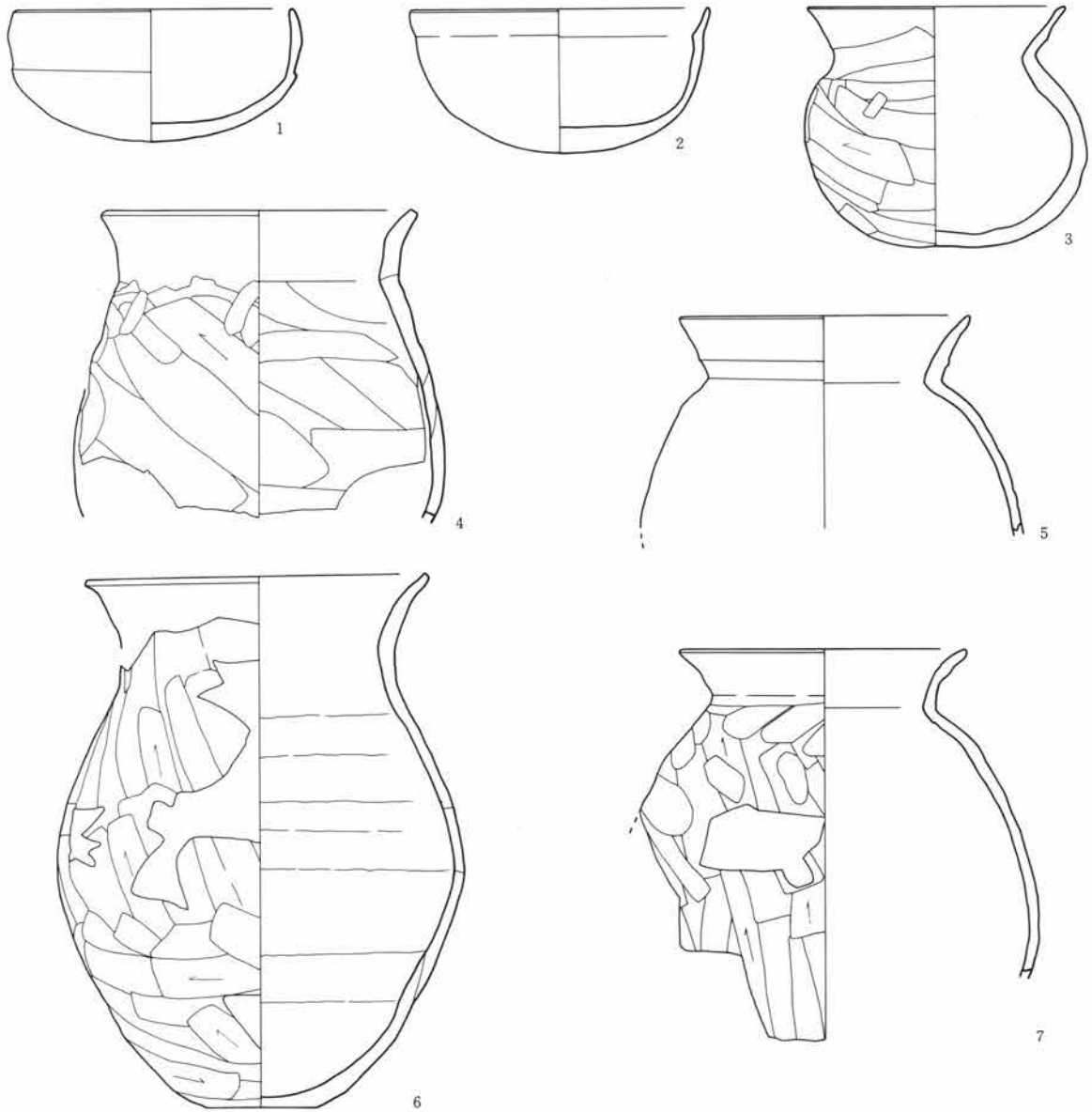
68号住居址出土遺物観察表 (第165図・P L79) ▶本文P.169・170・第143図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 5.6cm。 口 11.9cm。	埋土中。	①砂粒を多く含む。 ②赤褐色。	外面 杯部篋削りの後、篋磨き。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
2	杯 (土師器)	ほぼ完形。 高 6.1cm。 口 12.8cm。	カマド燃焼部。	①砂粒を含む。 ②赤褐色。	(内外面とも荒れており、整形技法不明)
3	小型壺 (土師器)	完形。 高 10.2cm。 口 11.0cm。 頸 8.6cm。 胴 12.1cm。	カマド燃焼部。 7の甕の中にすっぽり入る形で出土した。	①砂粒、長石、雲母粒を混じる。 ②赤褐色	外面 胴部～底部横方向篋削り。口縁部ナデ。頸部横方向篋ナデ。
4	甕 (土師器)	口縁～胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 (13.6cm) 頸 (12.0cm) 胴 15.8cm。	カマド燃焼部。	①砂粒、長石、石英粒を混じる。 ②橙褐色。	外面 胴部斜方向篋削り。口縁部横ナデ。頸部下位指ナデ。 内面 横・斜方向篋削り。口縁部横ナデ。
5	壺 (土師器)	口縁～肩部残存。 口 16.5cm。 頸 13.3cm。	カマド脇。 床面直上。	①砂粒、長石、少量の雲母を含む。 ②赤褐色。	外面 胴部篋削り後ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部ナデ。
6	甕 (土師器)	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 残。 高 29.9cm。 口 (14.6cm) 頸 (15.6cm) 胴 (21.0cm) 底 6.2cm。	カマド燃焼部。	①砂粒、石英、雲母を含む。 ②灰褐色。	外面 胴部上半縦方向篋削り。下半横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
7	壺 (土師器)	口縁～胴部中位 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 (16.3cm) 頸 9.5cm。	カマド燃焼部。	①砂粒、長石、石英を混じる。 ②灰黄褐色。	外面 胴部数段に分けて縦方向篋削り。上半部分的に篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部篋ナデ。口縁部横ナデ。

71号住居址出土遺物観察表 (第166～167図・P L79・80) ▶本文P.171・172・第145図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	埴 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損。	貯蔵穴中	①細砂、雲母を含む。 ②黄褐色。	外面 胴部斜方向篋ナデ。上半ナデ。口縁～頸部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁～頸部横ナデ。

III 検出された遺構と遺物



第165図 68号住居址出土遺物（5～7-¼）

(71号住居址)

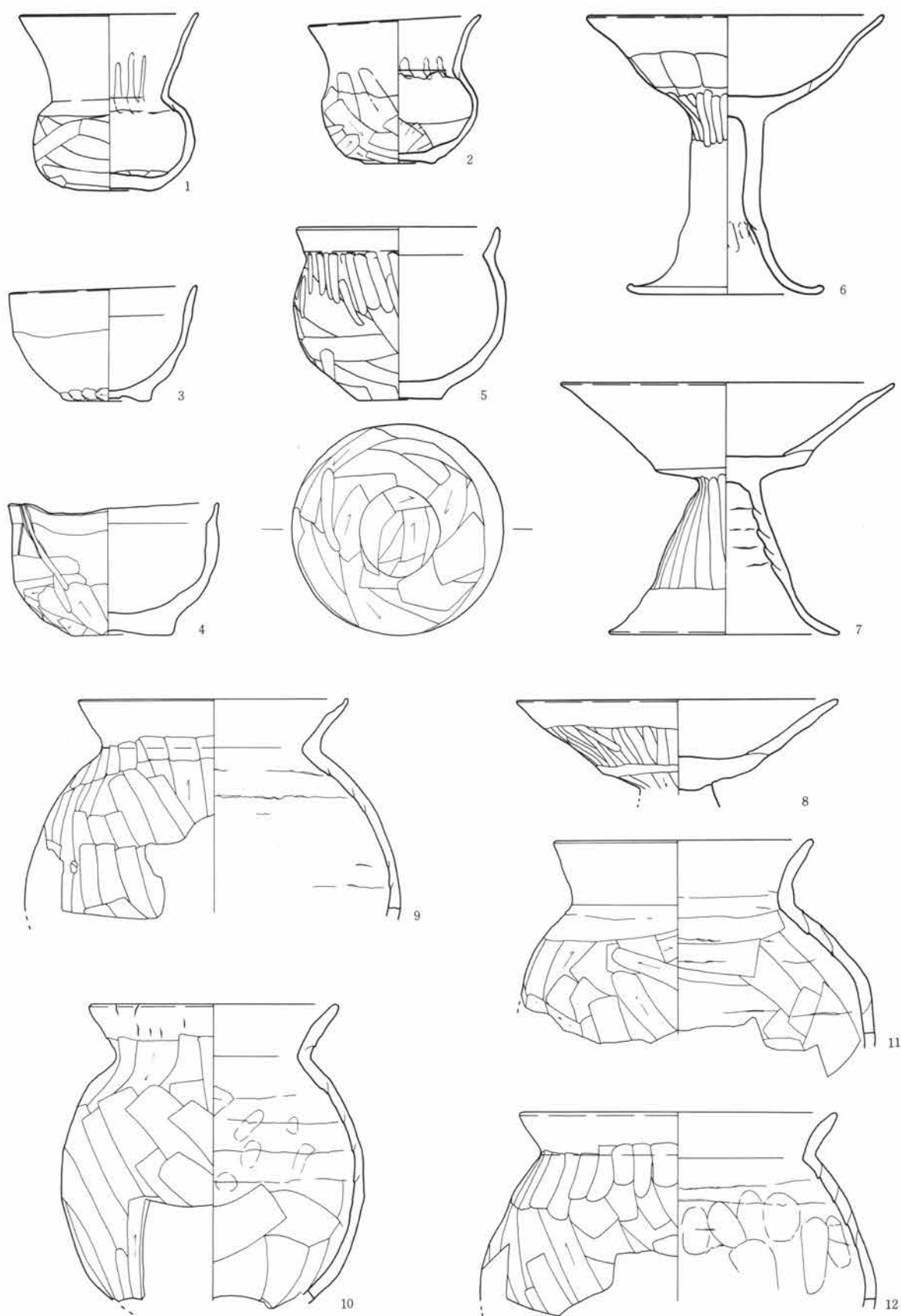
No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
2	埴（土師器）	口縁部½欠損。 高 7.3cm。 口 9.0cm。 頸 6.9cm。 胴 8.1cm。 底 3.7cm。	貯蔵穴。	①細砂、雲母、少量の長石粒を含む。 ②灰白褐色。	外面 胴部斜方向の弱い篋削り。上半ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部ヘラナデ。口縁部横ナデ後、縦方向篋磨き。
3	椀（土師器）	口縁～胴部⅓欠。 高 5.8cm。 口 9.8cm。 底 4.7cm。	貯蔵穴。	①細砂、長石、石英を含む。 ②赤褐色。	外面 体部ナデ。最下部篋押え。口縁部横ナデ。 内面 横方向篋磨き。口縁部横ナデ。

2 古墳時代の遺構と遺物

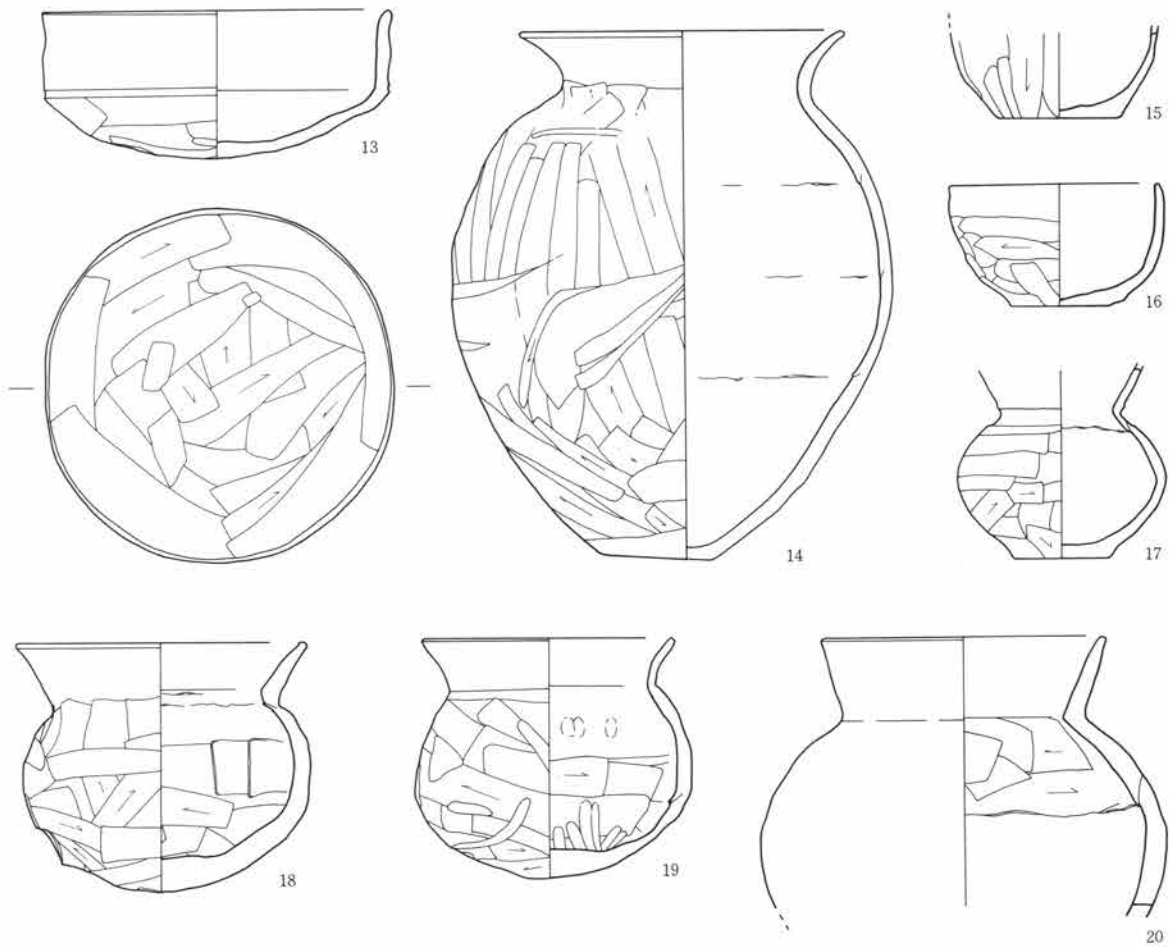
(71号住居址)

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
4	椀 (土師器)	完形。 高 6.8cm。 口 11.0cm。 頸 10.8cm。 底 5.3cm。	貯蔵穴。	①細砂、石英混入 ②赤褐色。	外面 体部下半横方向、斜方向篋削り。上半ナデ。 底部指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
5	椀 (土師器)	完形。 高 8.9cm。 口 10.6cm。 頸 9.8cm。 胴 11.0cm。 底 4.4cm。	貯蔵穴。	面細砂、少量の雲母片を含む。 ②赤褐色。	外面 体部横方向篋削り後、下半一部にナデ。上半は縦方向の篋磨き。口縁部横ナデ。 内面 体部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。
6	高杯 (土師器)	杯部 $\frac{1}{4}$ 、脚部 $\frac{1}{8}$ 欠損。 高 14.4cm。 口 15.5cm。 頸 3.8cm。 底 10.3cm。	貯蔵穴。	①砂粒、石英を含む。 ②橙褐色。	外面 杯部横方向篋削り。上半ナデ。脚部ナデ。 接合部縦方向篋磨き。口縁部横ナデ。脚裾部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。脚部指ナデ。脚裾部横ナデ。脚部指ナデ。脚裾部横ナデ。
7	高杯 (土師器)	脚裾部 $\frac{1}{4}$ 欠損。 高 13.0cm。 口 17.4cm。 底 12.0	貯蔵穴。	①砂粒、長石、石英混入。②赤褐色。	外面 杯部下半篋削り後ナデ。口縁部横ナデ。接合部～脚部縦方向篋磨き。脚裾部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
8	高杯 (土師器)	杯部 $\frac{3}{8}$ 残存。 口 (16.8cm)	貯蔵穴。	①砂粒、石英粒を含む。②橙褐色。	外面 杯部下部縦方向篋削り。中位縦方向篋磨き。稜を形づくるようにぐりと指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
9	壺 (土師器)	口縁～胴部中位残存。 口 14.0cm。 頸 11.4cm。	壁際。床面直上。	①細砂と多量の雲母片と少量の長石粒を含む。②橙褐色。	外面 胴部数段に分けて縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
10	壺 (土師器)	口縁～肩部中位 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 (13.0cm) 頸 (10.2cm)	床面直上。	①細砂、長石、少量の雲母を含む。 ②黄褐色。	外面 頸～肩部縦方向の篋ナデ。胴部縦方向篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部上半指押え。下半横方向の篋ナデ。口縁部横ナデ
11	壺 (土師器)	口縁～肩部残存。 口 (13.4) 頸 (11.8cm)	床面直上。	①細砂、雲母片を混じる。②橙褐色。	外面 胴部斜方向篋削り。口縁部横ナデ。頸部横ナデ。 内面 輪積痕を指押え。後横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。
12	壺 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残。 口 (16.4cm) 頸 (14.4cm)	壁際。床面直上。	①細砂、長石、石英を含む。 ②灰褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。肩部縦方向篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部輪積痕の上を指押え。口縁部横ナデ。
13	杯 (土師器)	完形 高 5.9cm。 口 13.9cm。	床面直上。	①細砂、石英粒、少量の雲母を含む。 ②赤褐色。	外面 杯部中央部から周縁に向かって放射状に篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
14	壺 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{4}$ 、胴部中位～下位 $\frac{1}{2}$ 欠。 高 27.8cm。口 17.3cm。 胴 23.6cm。底 6.0cm。	床面直上。	①砂粒、長石粒を混じる。 ②灰褐色。	外面 胴部数回に分けて縦方向篋削り。中位横方向篋ナデ。胴最下部ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
15	椀 (土師器)	体下位～底部残。 底 4.9cm。	床面上15cm。	①細砂、雲母、石英、長石混。②橙褐色。	外面 体部縦方向篋削り。底部ナデ。 内面 ナデ。

III 検出された遺構と遺物



第166図 71号住居址出土遺物(1)



第167図 71号住居址出土遺物(2)

(71号住居址)

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
16	椀 (土師器)	口縁～体部上半 残。 高 4.8cm。 口 (8.5cm) 底 4.0cm。	壁際。 床面直上。	①細砂、石英、長石、 雲母を含む。 ②黄褐色。	外面 体部、底部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
17	罎 (土師器)	口縁～体部中位 欠損。 頸 (4.8cm) 胴 8.4cm。 底 3.8cm。	床面上 3cm。	①細砂、石英、長石、 雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 胴部下半横方向篋削り。上半横方向篋ナデ。 底部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
18	小型壺 (土師器)	完形。 高 9.9cm。 頸 9.0cm。	床面上 7cm。 口 11.6cm。 胴 10.9cm。	①細砂、雲母細片を 含む。 ②灰褐色。	外面 体部下半斜方向篋削り。上半横方向篋ナデ。 内面 体部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。
19	小型壺 (土師器)	口縁部欠損。 高 9.6cm。 口 (10.2cm) 頸 8.3cm。	床面上 6cm。 胴 11.1cm。	①砂粒、石英粒を含 む。②灰白褐色。	外面 体部下半横方向篋削り。一部に指ナデ。上 半横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部下半横方向篋ナデ。上半指押えの後ナ デ。口縁部横ナデ。

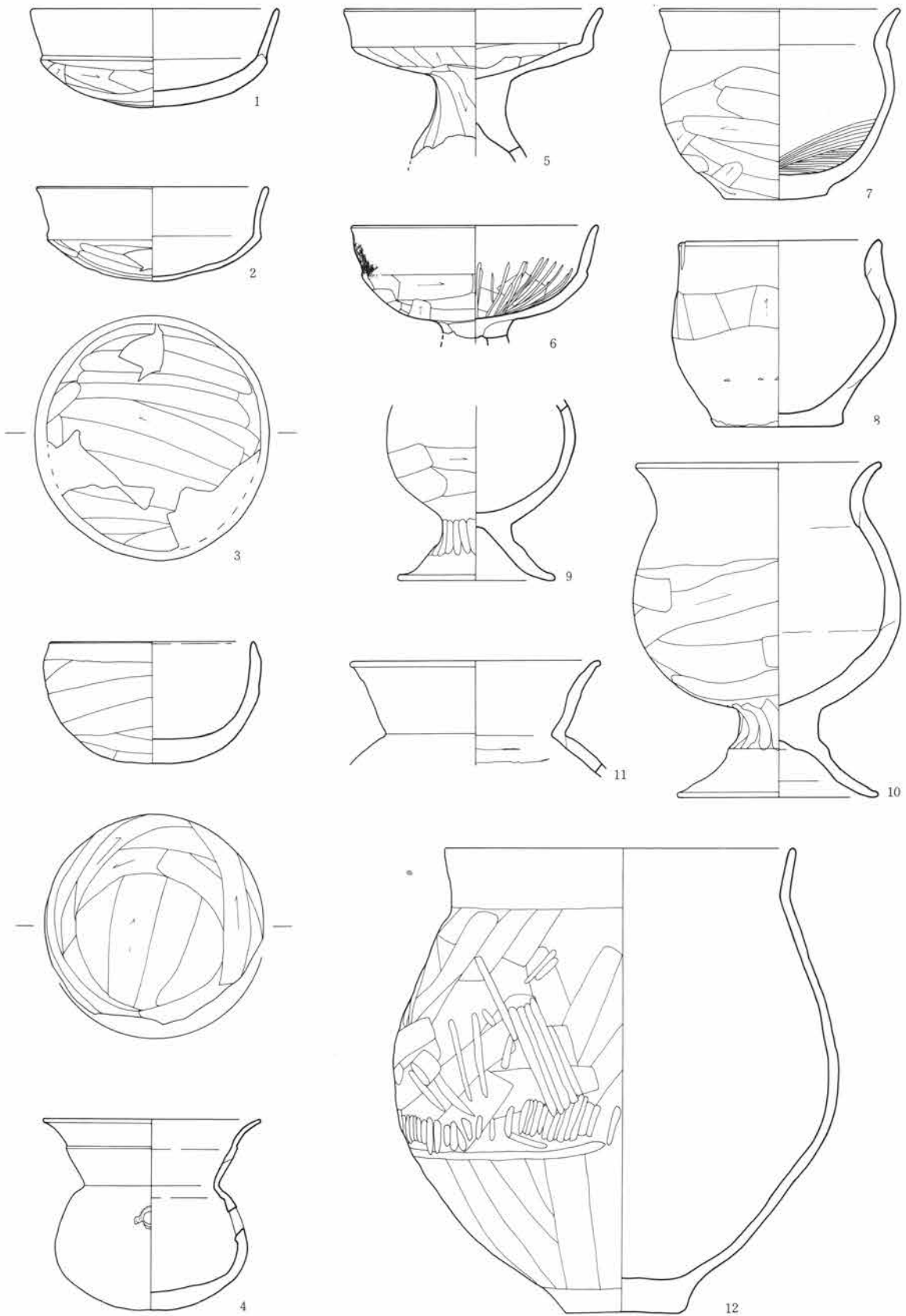
III 検出された遺構と遺物

(71号住居址)

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
20	甕 (土師器)	口縁～体部中位 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 11.4cm 頸 9.7cm。	床面上11cm。	①細砂を多量に含み石英粒も混じる。 ②黒色。	外面 胴部縦方向篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。

74号住居址出土遺物観察表 (第168～170図・P L80・81) ▶本文P.173・第148図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 5.1cm。 口 12.1cm。	床面上3cm。	①細砂、石英を多量に含む。 ②赤褐色。	外面 底部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
2	杯 (土師器)	口縁～体部 $\frac{1}{4}$ 欠損。 高 4.8cm。 口 11.8cm。	貯蔵穴。	①砂粒、雲母を含む。 ②赤褐色。	外面 杯部一方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
3	椀 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 6.2cm。 口 10.5cm。	床面直上。	①砂粒を少量含む。 ②赤褐色。	外面 底中部2方向篋削り。周縁を5単位の篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
4	甕 (土師器)	完形。 高 9.7cm。 口 11.2cm。 頸 6.9cm。 胴 9.8cm。	壁際。 床面直上。	①細砂、石英、雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 胴部篋削りの後、篋磨き。口縁部横ナデ。頸部横ナデ。 内面 篋ナデ後、胴中位よりやや上に外面から穿孔。口縁部ナデ。
5	高杯 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 脚部下半欠損。 口 13.3cm。	カマド支脚。 倒立。	①砂粒、石英粒を混じる。②黄橙褐色。	外面 杯部縦方向篋削り。下半ナデ。脚部縦方向篋削り。如縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
6	高杯 (土師器)	杯部のみ残存。 口 12.3cm。	床面直上。	①砂粒を含む。 ②赤褐色。	外面 杯部横方向篋削り。脚部との接合益ナデ。口縁部横ナデ。 内面 杯部斜方向篋削り後、放射状篋磨き。
7	鉢 (土師器)	ほぼ完形。 高 9.7cm。 口 12.4cm。 頸 11.2cm。 胴 12.0cm。 底 5.3cm。	カマド脇。 床面直上。	①砂粒を多量に含む。 ②赤褐色。	外面 胴部横方向篋削り。上半ナデ。口縁部横ナデ。底部篋削り。 内面 胴部刷毛目。上半ナデ。口縁部ナデ。
8	鉢 (土師器)	ほぼ完形。 高 9.4cm。 口 10.2cm。 頸 10.5cm。 胴 11.4cm。 底 6.5cm。	カマド燃焼部。	①砂粒、石英を多く含む。 ②赤褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。下半ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部篋ナデ。口縁部横ナデ。
9	小型台付甕。 (土師器)	胴部中位～台部残存。 胴 9.7cm。 底 8.0cm。	壁際。 床面上2cm。	①砂粒を多量に含む。 ②赤褐色。	外面 胴部横方向篋削り。台部横ナデ。台部接合部縦方向篋磨き。 内面 胴部ナデ。台部横ナデ。
10	台付甕 (土師器)	胴部 $\frac{1}{4}$ 、底部 $\frac{1}{4}$ 欠損。 高 16.8cm。 胴 13.8cm。	床面直上。 口 12.6cm。 底 10.5cm。	①細砂、長石、石英、雲母を含む。 ②赤褐色。	外面 胴部横方向篋削り。口縁～肩部横ナデ。台部接合部縦方向篋磨き。台部端部横ナデ。 内面 胴部ナデ。台部端部横ナデ。口縁部横ナデ。

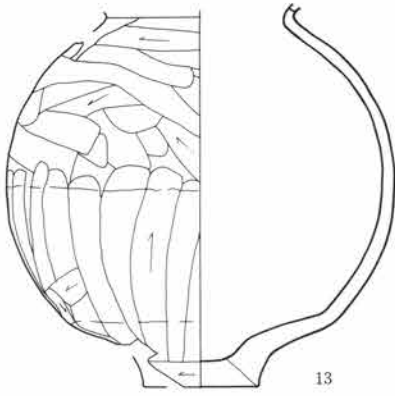


第168図 74号住居址出土遺物(1) (12-¼)

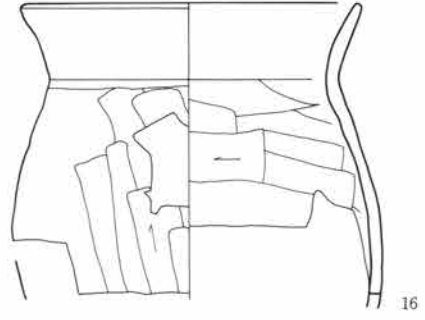
III 検出された遺構と遺物

(74号住居址)

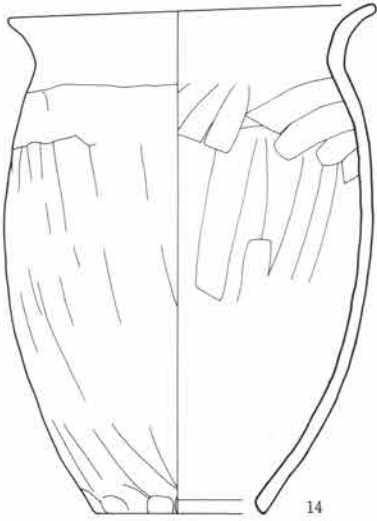
No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
11	壺 (土師器)	口縁～頸部 $\frac{1}{4}$ 残。 口 (14.8cm)。 頸 (9.2cm)	壁面。 床面直上。	①砂粒、石英を混じる。 ②橙褐色。	外面 口縁部横ナデ。 内面 //
12	広口壺 (土師器)	ほぼ完形。	床面直上。	①砂粒・長石・雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 胴部下半縦方向篋削り。上半斜方向篋削り。さらに上半縦方向に部分的な篋磨き。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
13	壺 (土師器)	口縁部欠損。 頸 10.0cm。 胴 20.8cm。 底 6.2cm。	カマド袖。	①細砂を多く含む。 ②赤褐色。	外面 胴部上半斜および横方向篋削り。下半縦方向篋削り。頸部横ナデ。胴部最下部横ナデ。 内面 胴部ナデ。
14	甔 (土師器)	ほぼ完形。 高 26.6cm。 頸 16.5cm。 底 8.9cm。	床面直上。 口 19.5cm。 胴 19.6cm。	①細砂・雲母・長石を含む。 ②赤褐色。黒斑。	外面 胴部縦方向篋削り。最下部指押え。口縁部～頸部横ナデ。 内面 篋ナデ。口縁部～頸部横ナデ。
15	甔 (土師器)	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 残。 高 34.1cm。 頸 18.9cm。 底 9.1cm。	カマド焼成部。 口 22.1cm。 胴 22.3cm。	①砂粒・雲母・長石を含む。 ②橙褐色。	外面 胴部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部篋ナデ。 //
16	甕 (土師器)	口縁～胴部中位残存。 口 18.2cm。 頸 15.3cm。 胴 19.7cm。	カマド脇。	①砂粒、石英、長石を混じる。 ②灰褐色。	外面 胴部縦方向篋削りの後ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。
17	甕 (土師器)	口縁～胴中位 $\frac{1}{4}$ 欠損。 高 25.0cm。 頸 19.4cm。 底 8.0cm。	床面直上。 口 21.4cm。 胴 22.0cm。	①砂粒を含む。 ②灰褐色。	外面 胴部斜方向篋削り。最下部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。
18	甕 (土師器)	口縁～胴部中位 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 35.7cm。 頸 9.8cm。 底 6.9cm。	床面直上。 口 15.5cm。 胴 15.2cm。	①砂粒を多く含む。 ②黒褐色。	外面 胴部篋削りの後、ナデ、さらに部分的に縦方向の篋磨き。口縁部横ナデ。 内面 胴部斜方向篋ナデ。口縁部横ナデ。
19	甕 (土師器)	口縁～胴部中位 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 12.3cm。 口 (17.6cm) 底 6.6cm。	床面上5cm。	①細砂、長石粒、石英粒を含む。 ②赤褐色。	外面 胴部斜方向篋削り。底部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
20	壺 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{4}$ 残。 口 (15.6cm)。 頸 12.9cm。	床面上5cm。	①細砂を含む。 ②橙褐色。	外面 胴部篋磨き。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
21	甕 (土師器)	口縁～肩部残存。 口 21.2cm。 頸 19.3cm。	床面上4cm。	①砂粒を混じる。 ②灰褐色。	外面 胴部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。
22	杯 (土師器)	ほぼ完形。 高 4.5cm。 口 12.0cm。	床面上20cm。	①砂粒、長石粒を混じる。 ②黄褐色。	外面 杯部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。



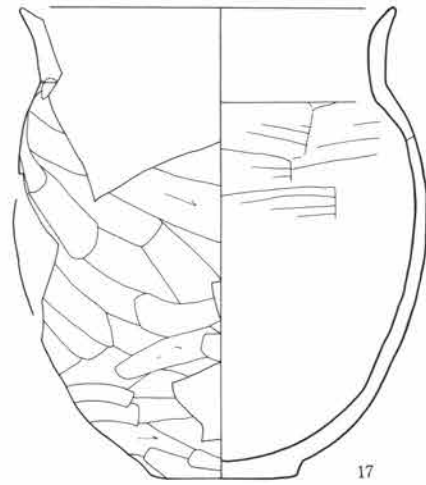
13



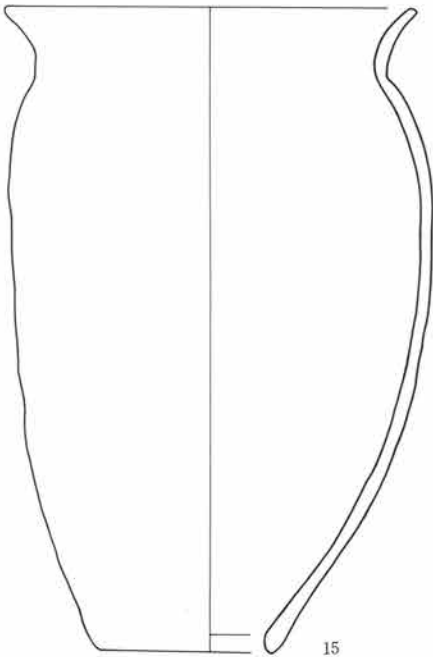
16



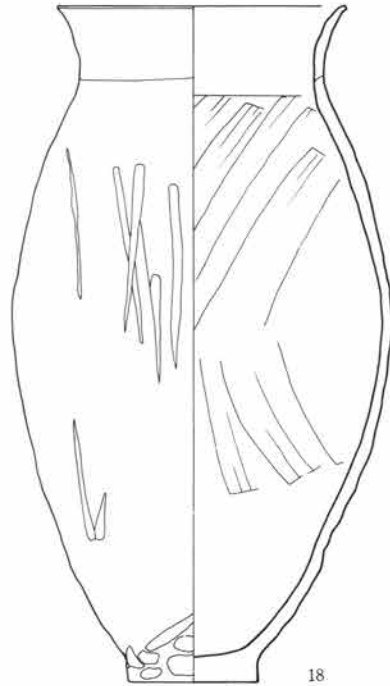
14



17



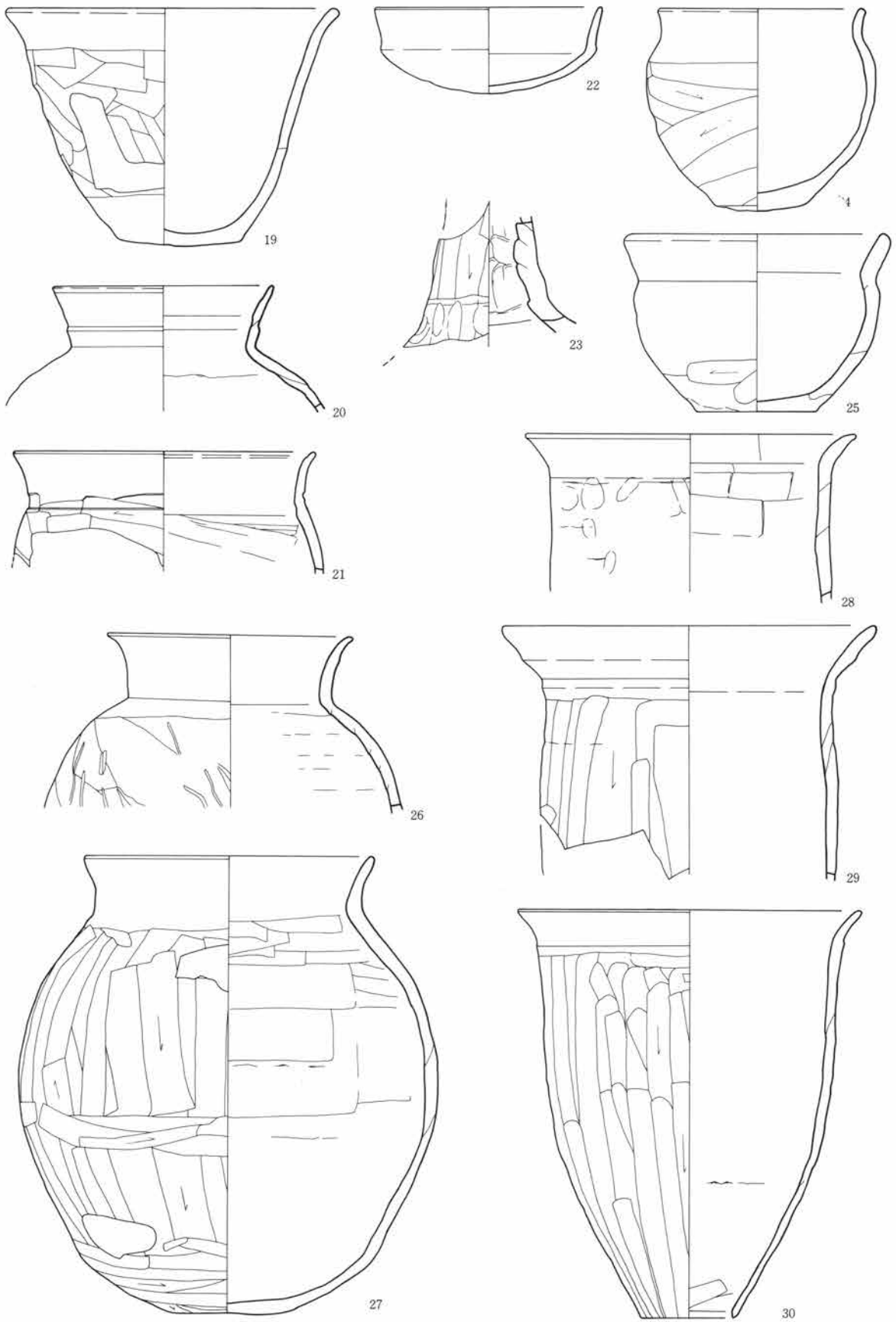
15



18

第169図 74号住居址出土遺物(2) (13~18-¼)

III 検出された遺構と遺物



第170図 74号住居址出土遺物(3) (20・21・26~30-1/4)

2 古墳時代の遺構と遺物

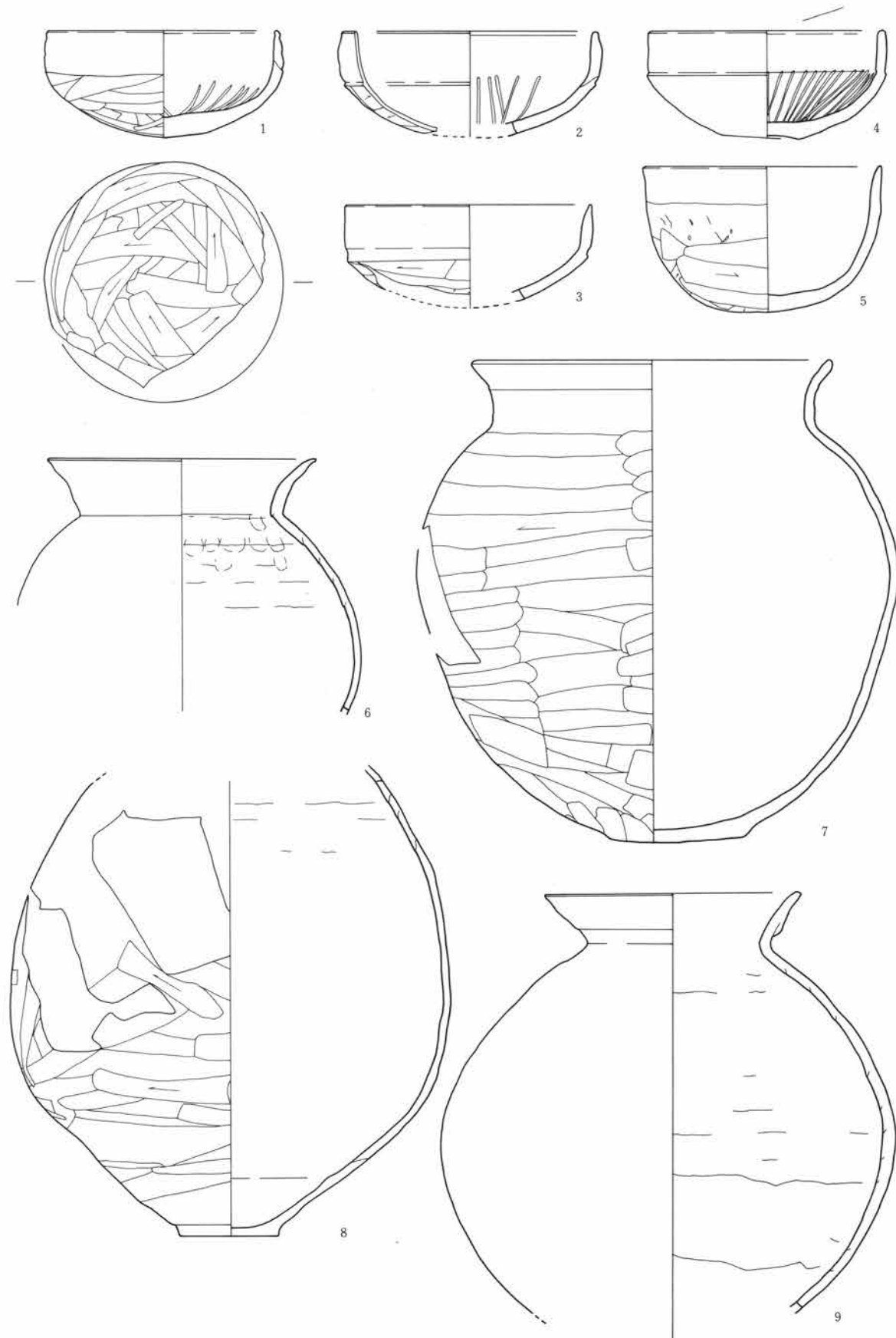
(74号住居址)

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
23	高杯 (土師器)	脚部残存。 端部欠損。	床面上10cm。	①細砂を多量に含む。 ②橙褐色。	外面 脚部縦方向笥削り。下半ナデおよび指押え。 口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
24	鉢 (土師器)	完形。 高 10.5cm。 頸 10.5cm。 底 4.8cm。	床面上15cm。 口 10.8cm。 胴 12.0cm。	①砂粒、長石と少量の雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 胴部斜方向笥削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
25	鉢 (土師器)	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 残。 口 (14.0cm) 胴 12.9cm。	床面上10cm。 口 (14.0cm) 胴 12.9cm。	①細砂を多く含む。 ②灰黄褐色。	外面 胴部下半横方向笥削り。上半ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
26	壺 (土師器)	口縁～胴部中位残存。 口 17.1cm。 頸 14.2cm。	埋土中	①砂粒、雲母を含む。 ②灰褐色。	外面 胴部笥削りの後、ナデ。部分的に縦方向の笥磨き。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
27	広口壺 (土師器)	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 欠。 高 31.5cm。 頸 19.0cm。 底 8.0cm。	床面上10cm。 口 20.3cm。 胴 29.4cm。	①細砂を多く含む。 ②黒褐色。	外面 胴部縦方向笥削り。中位横方向笥削り。下部横方向笥削り。底部笥削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
28	甕 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残。 口 (17.4cm) 頸 (12.8cm)	床面上10cm。	①細砂と少量の雲母を含む。 ②灰褐色	外面 胴部指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向笥削り。口縁部横ナデ。
29	甕 (土師器)	口縁～胴部中位 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 (19.5cm) 頸 (15.4cm)	床面上10cm。	①細砂、長石、石英、雲母を含む。 ②灰褐色。	外面 胴部縦方向笥削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
30	甕 (土師器)	完形。 高 28.3cm。 口 24.0cm。 底 3.6cm。	床面上10cm。	①細砂を多量に含む。 ②灰白褐色。	外面 胴部縦方向笥削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部下部斜方向笥削り。胴部縦方向笥磨き。口縁部横ナデ。

75号住居址出土遺物観察表 (第171～174図・P L82・83) ▶本文P.172・第147図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 5.5cm。 口 (12.2cm)	貯蔵穴。	①砂粒、雲母を含む。 ②赤褐色。	外面 杯部中央部→周縁部の順で笥削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部放射状笥磨き。口縁部横ナデ
2	杯 (土師器)	$\frac{1}{2}$ 残存。 口 (13.4)	床面直上。	①細砂、石英、雲母を含む。②橙褐色。	外面 杯部笥削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部放射状笥磨き。口縁部横ナデ。
3	杯 (土師器)	底部欠損。 口 12.8cm。	カマド燃焼部。	①細砂、雲母粒を含む。②黄褐色。	外面 杯部中央部3方向笥削り後、周縁をぐるりと5単位の笥削り。口縁部横ナデ。 内面 口縁部横ナデ。
4	杯 (土師器)	口縁部一部欠損。 高 5.6cm。 口 12.4cm。	床面直上。	①細砂を多く含む。 ②橙灰褐色。	外面 杯部及び底部笥削りの後、横方向の笥磨き。 内面 杯部ナデの後、放射状笥磨き。
5	椀 (土師器)	完形。 高 7.7cm。 口 12.6cm。	床面直上。 底 4.0cm。	①砂粒を含む。 ②橙褐色。	外面 底部笥削りの後、体部横方向笥削り。上半指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 体部ナデ。口縁部横ナデ。

III 検出された遺構と遺物



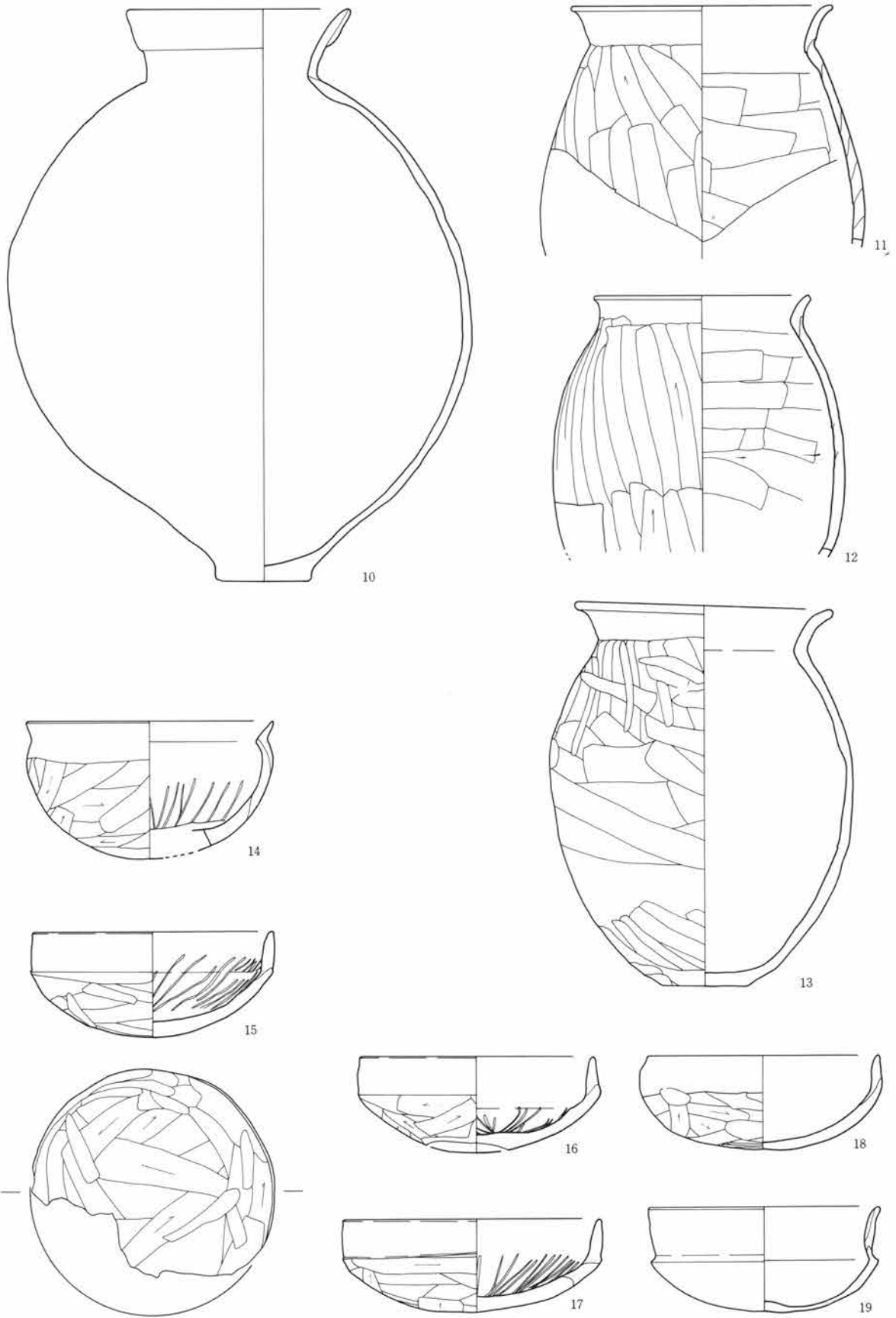
第171図 75号住居址出土遺物(1) (6~9-¼)

2 古墳時代の遺構と遺物

(75号住居址)

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
6	壺 (土師器)	口縁～胴部上半 $\frac{1}{4}$ 残存。 口 (18.8cm) 頸 (14.2cm)	床面直上。 胴 (24.0cm)	①砂粒、石英粒を混じる。 ②橙灰褐色。	外面 胴部縦方向篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部下半横方向篋ナデ。上半指押え。口縁部横ナデ。
7	壺 (土師器)	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 残。 高 33.4cm。 口 (25.1cm) 頸 (22.3cm)	床面直上。 胴 (33.5cm) 底 (9.4cm)	①砂粒、長石、雲母を含む。②灰褐色。	外面 胴部下部斜方向篋削り後、横方向篋削り。最下部は縦方向に押え。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
8	壺 (土師器)	胴部～底部 $\frac{3}{4}$ 残 胴 30.6cm。 底 7.0cm。	床面直上。	①砂粒、雲母を含む。 ②赤橙褐色。	外面 胴部横方向篋削りの後ナデ。
9	壺 (土師器)	底部欠損。 口 17.6cm。 頸 12.7cm。 胴 31.6cm。	床面直上。	①砂粒を混じる。 ②灰黄褐色。	外面 胴部篋削りの後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
10	壺 (土師器)	ほぼ完形。 高 39.5cm。 口 15.7cm。 頸 12.1cm。	床面直上。 胴 32.2cm。 底 6.7cm。	①細砂、雲母を含む。 ②灰白褐色。	外面 胴部篋削りの後ナデ。縦方向篋磨き。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
11	甕 (土師器)	口縁～胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 (18.2cm) 頸 (15.6cm)	床面直上。	①細砂、雲母、長石を多量に含む。 ②黒褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篋ナデ。
12	甕 (土師器)	口縁～体部中位残存。 口 15.2cm。 頸 14.2cm。 胴 20.3cm。	床面直上。	①砂粒、長石を含む。 ②灰褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篋ナデ。
13	甕 (土師器)	胴部下半～底部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 26.7cm。 口 17.8cm。 頸 14.6cm。	床面直上。 胴 21.2cm。 底 6.0cm。	①砂粒、石英粒を含む。 ②灰褐色。	外面 胴部上半縦方向篋削り。後肩部から下を横方向篋ナデ。下部斜方向篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部篋ナデ。
14	椀 (土師器)	底部欠損。 口縁～体部 $\frac{1}{4}$ 残。 口 (13.0cm) 頸 (10.6cm)	床面上6cm。	①砂粒を多粒に含む。 ②赤褐色。	外面 椀部横方向、斜方向弱い篋削り。口縁部横ナデ。 内面 放射状の篋磨き。口縁部横ナデ。
15	杯 (土師器)	口縁～底部 $\frac{3}{4}$ 残。 高 5.5cm。 口 12.6cm。	床面上5cm。	①砂粒、石英粒を多量に含む。 ②橙褐色。	外面 杯部篋削り後、周縁をぐるりとナデ。口縁部横ナデ。 内面 放射状篋磨き。口縁部横ナデ。
16	杯 (土師器)	$\frac{1}{2}$ 残存。 高 (5.1cm) 口 12.3cm。	床面上7cm。	①砂粒、石英を含む。 ②赤褐色。	外面 杯部中央→周縁へうずまき状の篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ後下半に放射状篋磨き。口縁部横ナデ。
17	杯 (土師器)	$\frac{1}{2}$ 残存。 高 (4.9cm) 口 (13.5cm)	床面上5cm。	①細砂、長石、雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 杯部中央→周縁の順で篋削り。周縁はぐるりとナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデの後、下半に放射状篋磨き。口縁部横ナデ。

III 検出された遺構と遺物



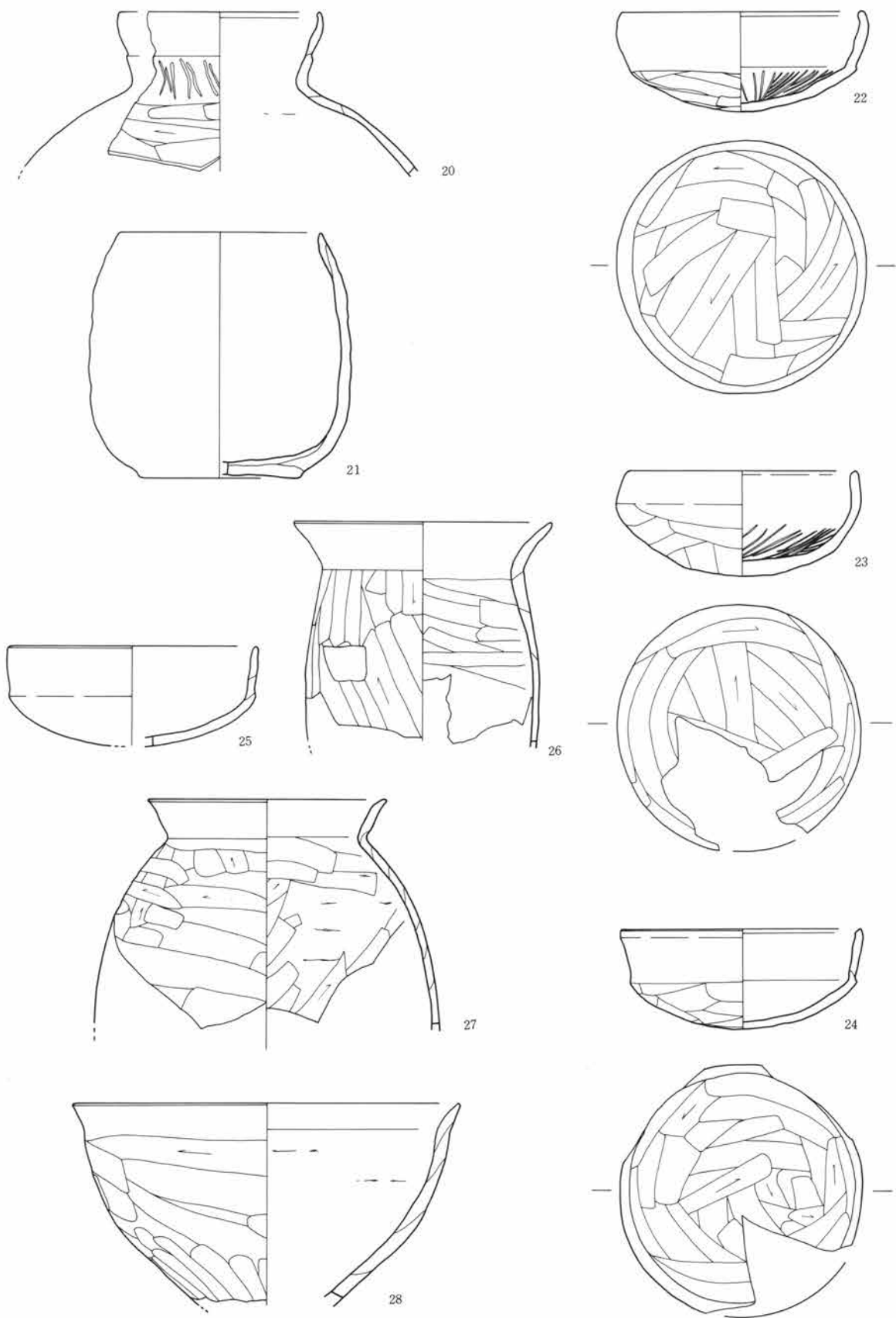
第172図 75号住居址出土遺物(2) (10~13-¼)

2 古墳時代の遺構と遺物

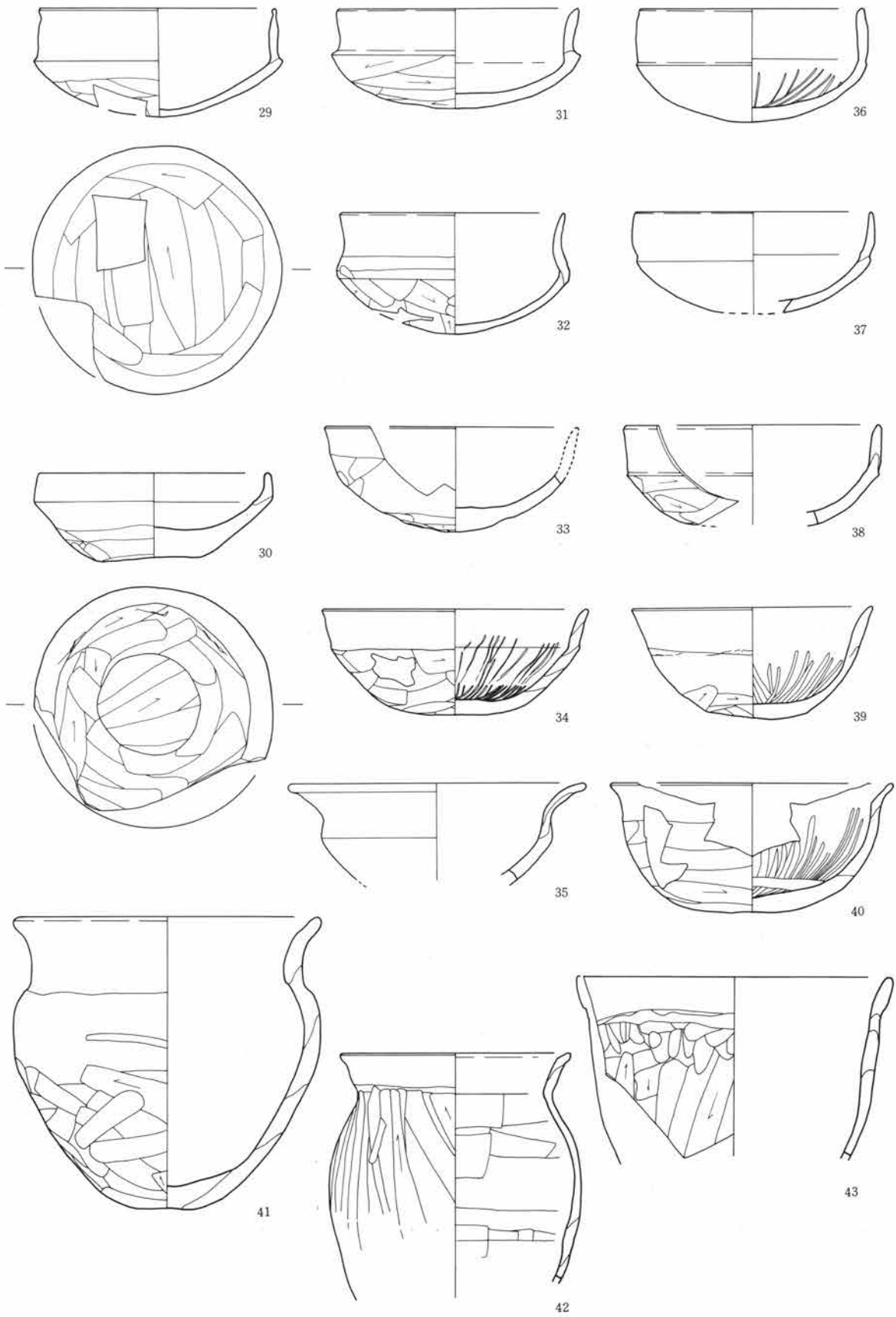
(75号住居址)

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
18	杯 (土師器)	1/2残存。 高 4.9cm。 口 (12.2cm)	床面上5cm。	①砂粒を含む。 ②黄褐色。	外面 杯部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
19	杯 (土師器)	1/3欠損。 高 5.5cm。 口 12.2cm。	床面上9cm。	①砂粒、石英、雲母を含む。 ②黄褐色。	外面 杯部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部不定方向篋削り。口縁部横ナデ。
20	鉢 (土師器)	口縁～底部1/2残。 高 16.8cm。 口 14.0cm。 底 11.2cm。	床面上9cm。	①砂粒、石英粒を多量に含む。 ②赤褐色。	外面 胴部篋削り。 内面 ナデ。
21	壺 (土師器)	口縁～肩部1/2残。 口 (14.0cm) 頸 (12.2cm)	床面上3cm。	①砂粒、石英粒、雲母を含む。 ②赤褐色。	外面 肩部横方向篋削り。頸部ナデ。口縁部横ナデ。 内面 頸部縦方向篋磨き。頸部～肩部篋ナデ。口縁部横ナデ。
22	杯 (土師器)	完形。 高 5.2cm。 口 12.6cm。	床面上10cm。	①砂粒、雲母を含む。 ②赤褐色。	外面 杯部風車状の篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部放射状篋磨き。口縁部横ナデ。
23	杯 (土師器)	口縁～底部1/2欠。 高 5.5cm。 口 12.0cm。	床面上10cm。	①砂粒を多量に含む。 ②赤褐色。	外面 杯部中央部2方向篋削り。後周縁部5単位でぐるりと篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ後、口縁部横ナデ。
24	杯 (土師器)	杯部～底部1/2欠。 高 5.2cm。 口 12.5cm。	床面上10cm。	①砂粒、石英を含む。 ②赤褐色。	外面 杯部中央部3方向篋削り後、周縁7単位でぐるりと篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部篋ナデ。口縁部横ナデ。
25	杯 (土師器)	口縁～底部1/2残。 高 5.2cm。 口 13.0cm。	床面上10cm。	①砂粒を多く含む。 ②橙褐色。	外面 杯部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
26	甕 (土師器)	口縁～胴上半1/2残存。 口 (17.2cm) 頸 (13.9cm)	床面上10cm。	①細砂、長石、石英を含む。 ②灰褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篋ナデ。 // 。
27	甕 (土師器)	口縁～胴上半1/2残存。 口 (15.3cm) 頸 (13.8cm)	床面上12cm。	①砂粒を含む。 ②黄橙褐色。	外面 胴部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部縦方向篋削りの後、ナデ。頸部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。
28	鉢 (土師器)	底部欠損。 口 20.0cm。	床面上10cm。	①砂粒、長石、雲母を含む。②茶褐色。	外面 体部横方向篋削り。下半縦方向篋磨き。口縁部横ナデ。 内面 体部ナデ後、縦方向篋磨き。口縁部横ナデ。
29	杯 (土師器)	口縁～底部1/2欠。 高 5.6cm。 口 12.4cm。	床面上12cm。	①ほとんど挟雑物のない緻密な胎土。 ②赤褐色。	外面 杯部中央1方向篋削り。周縁部8単位にぐるりと篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。
30	杯 (土師器)	口縁部1/2欠損。 高 4.4cm。 口 12.0cm。 底 5.4cm。	床面上28cm。	①砂粒を多く含む。 ②黄褐色。	外面 杯部横方向篋削り。下部斜方向篋削り。底部一方向篋削り。杯部上半ナデ。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
31	杯 (土師器)	口縁～底部1/2残。 高 5.2cm。 口 11.5cm。	床面上18cm。	①砂粒、石英を多く含む。 ②赤褐色。	外面 杯部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。

III 検出された遺構と遺物



第173図 75号住居址出土遺物(3) (20・21・27~29-¼)

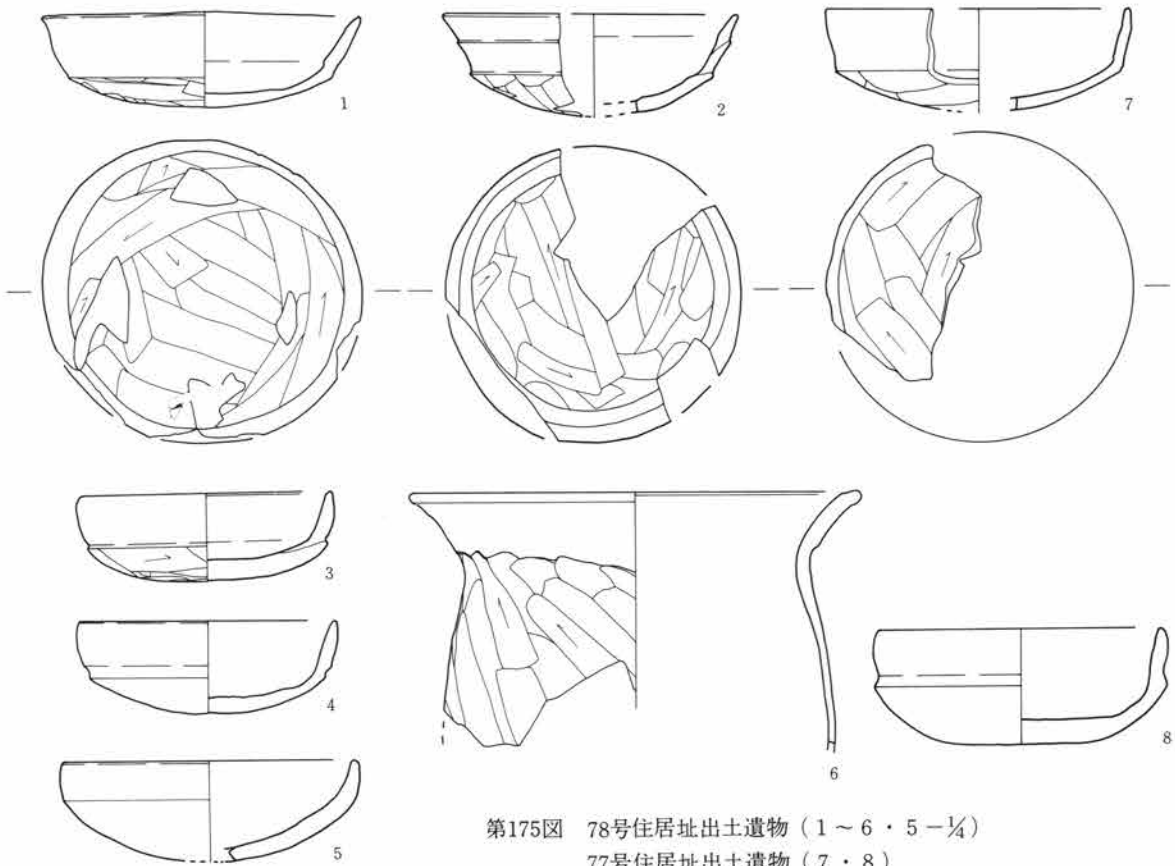


第174図 75号住居址出土遺物(4) (42・43-¼)

III 検出された遺構と遺物

(75号住居址)

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
32	杯 (土師器)	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 残。 高 6.3cm。 口 11.8cm。	床面上24cm。	①砂粒、雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 杯部中央部一方向篋削り。周縁部ぐるりと篋削り。口縁部横ナデ。 内面 口縁部横ナデ。
33	杯 (土師器)	口縁～杯部 $\frac{1}{8}$ ・底部残存。 高 5.5cm。 口 (13.6)	床面上14cm。	①砂粒を多く含む。 ②橙褐色。	外面 底部篋削り。その周縁を指押え。杯部ナデの後、上半指押え。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
34	杯 (土師器)	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 残。 高 5.5cm。 口 (13.8cm)	床面上23cm。	①砂粒、長石、雲母を含む。 ②赤褐色。	外面 杯部中央不定方向篋削り。周縁ぐるりと篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。杯部放射状篋磨
35	杯 (土師器)	口縁～体部下位 $\frac{1}{4}$ 残存。 口 (15.6cm) 頸 (12.0cm)	床面上14cm。 胴 (12.2cm)	①細砂をやや多く含む。②赤褐色。	外面 体部篋削後ナデ。口縁～頸部横ナデ。 内面 体部ナデ。口縁～頸部横ナデ。
36	杯 (土師器)	完形。 高 5.9cm。 口 11.7cm。	床面上20cm。	①砂粒を多量に含む。 ②黄褐色。	外面 杯部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ後放射状篋磨き。口縁部横ナデ。
37	杯 (土師器)	口縁～杯部下位 $\frac{3}{4}$ 残存。 口 (12.4cm)	床面上14cm。	①砂粒、石英を含む。 ②黄褐色。	外面 杯部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
38	杯 (土師器)	口縁～底部下位破片。 口 (13.4cm)	床面上17cm。	①砂粒を多く含む。 ②赤褐色。	外面 杯部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
39	椀 (土師器)	完形。 高 5.7cm。 口 10.6cm。 底 5.2cm。	床面上12cm。	①砂粒を多量に含む。 ②黄橙褐色。	外面 底～椀部下位篋削り。後中位指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 椀部ナデ。口縁部横ナデ。椀部放射状篋磨き。
40	椀 (土師器)	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 残。 高 6.7cm。 口 (14.8cm) 底 4.0cm。	底面上24cm。	①砂粒を多量に含む。 ②赤褐色。	外面 椀部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 椀部ナデ後、放射状篋磨き。部分的に指ナデ。口縁部横ナデ。
41	小型甕 (土師器)	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 残。 高 15.1cm。 口 (16.1cm) 頸 (14.2cm)	床面上20cm。 胴 (16.1cm) 底 (4.1cm)	①細砂、長石、雲母細粒を多く含む。 ②茶褐色。	外面 胴部横方向、斜方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
42	甕 (土師器)	口縁～胴 $\frac{1}{2}$ 残。 口 (16.0cm) 頸 (13.6cm) 胴 (17.6cm)	床面上15cm。	①砂粒、石英、雲母を含む。 ②赤褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篋削り。口縁部横ナデ。
43	甕 (土師器)	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 残。 口 (22.0cm)	床面上0cm。	①砂粒を多く含む。 ②灰褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。上部指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。



第175図 78号住居址出土遺物（1～6・5-¼）
77号住居址出土遺物（7・8）

78号住居址出土遺物観察表（第175図・P L84）▶本文P.175・第151図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯（土師器）	ほぼ完形。 高 3.8cm。 口 12.9cm。	床面直上。	①細砂、雲母を多量に含む。	外面 杯部中央一方向篔削り。周縁4単位篔削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
2	杯（土師器）	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 残。 高 4.0cm。 口 11.8cm。	床面上1cm。	①細砂を多く含む。 ②黒灰褐色。	外面 杯部篔削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
3	杯（土師器）	口縁～底部 $\frac{1}{3}$ 残。 高 3.6cm。 口 (10.4cm)	床面直上。	①砂粒を含む。 ②灰褐色。	外面 杯部篔削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
4	杯（土師器）	完形。 高 3.7cm。 口 10.4cm。	床面直上。	①砂粒を多く含む。 ②茶褐色。	外面 杯部篔削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。 摩耗激しく、整形の方向、単位は不明である。
5	杯（土師器）	口縁～底部 $\frac{1}{4}$ 残。 高 4.0cm。 口 (11.8cm)	床面直上。	①細砂を含む。 ②灰褐色。	外面 杯部篔削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
6	甕（土師器）	口縁～肩部残存。 口 18.0cm。	床面上7cm。	①細砂、長石粒を多量に含む。②灰褐色。	外面 胴部縦および斜方向篔削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。

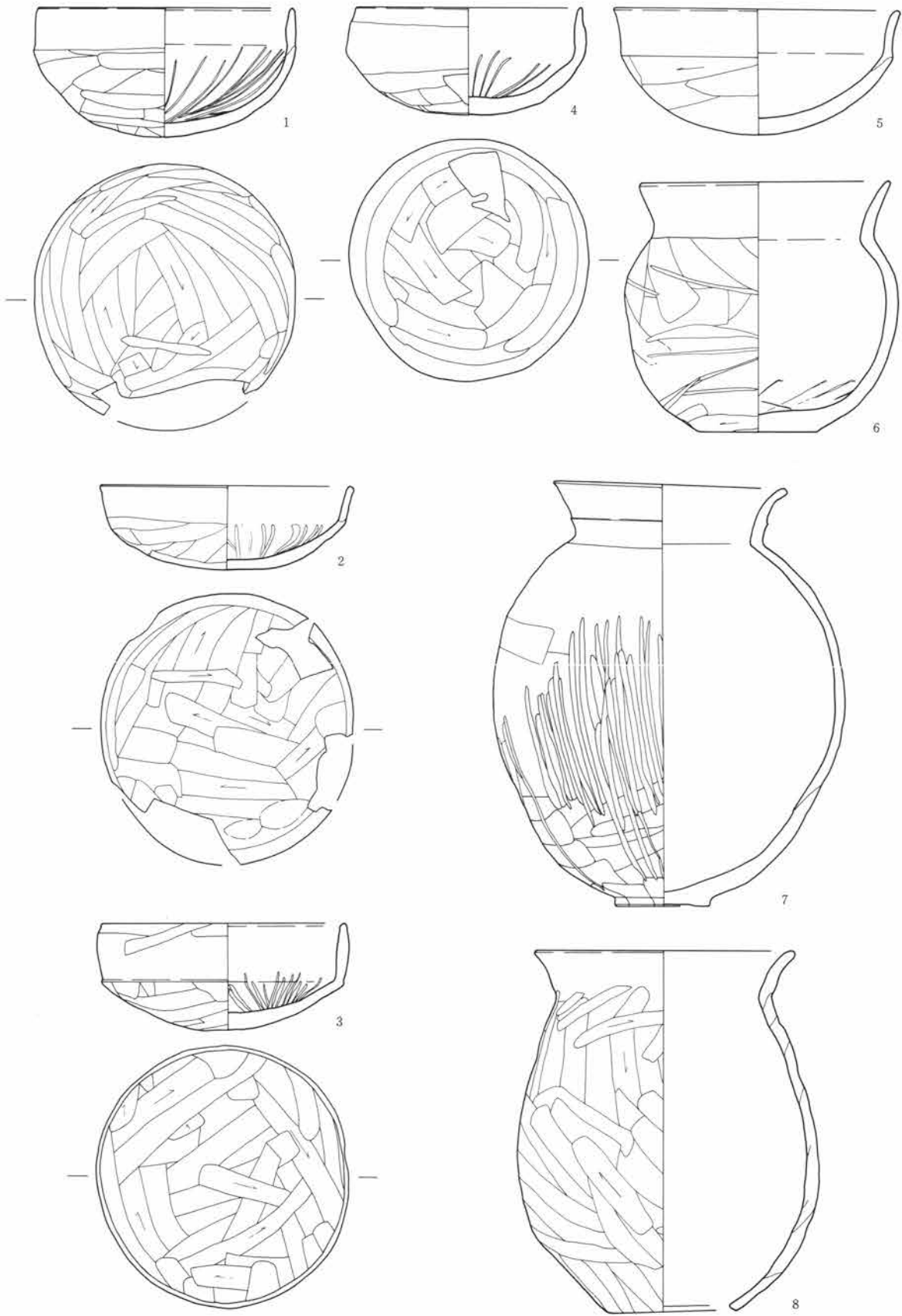
III 検出された遺構と遺物

77号住居址出土遺物観察表（第175図）▶本文P.175・第150図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
7	杯（土師器）	口縁～底部 $\frac{1}{4}$ 残。 口 12.3cm	埋土中	①細砂、雲母を含む。 ②茶褐色。	外面 底部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部、口縁部横ナデ。
8	杯（土師器）	破片。	埋土中	②橙褐色。	摩耗が激しく観察不能。

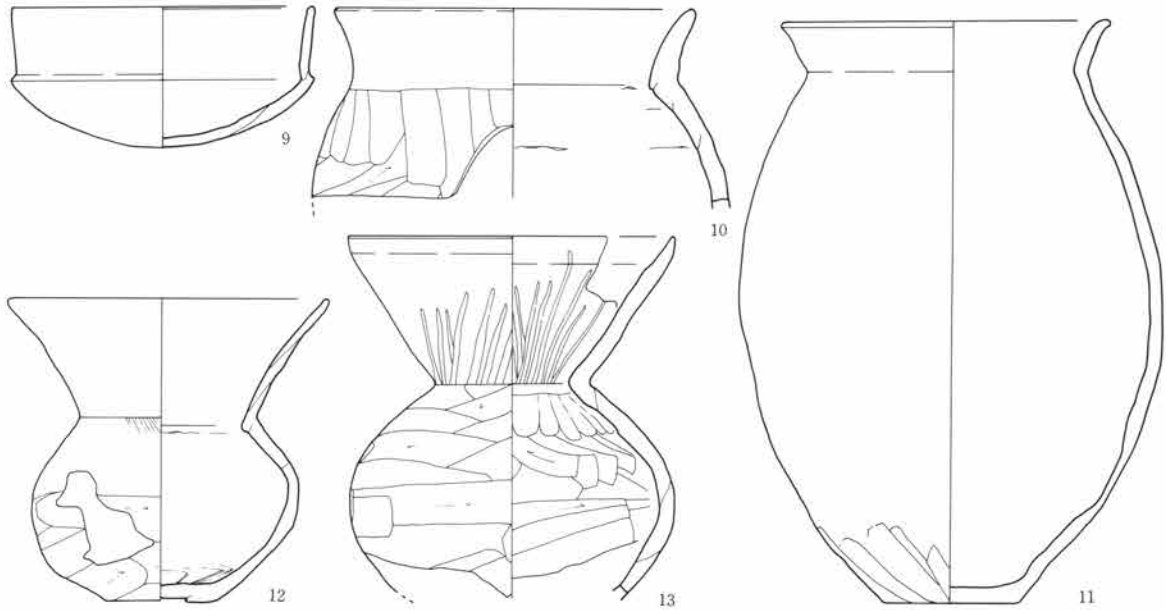
81号住居址出土遺物観察表（第176～177図・P L84・85）▶本文P.177・第152図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯（土師器）	口縁部 $\frac{1}{4}$ 欠損。 高 6.7cm。 口 13.5cm。	カマド燃焼部。 灰面上。 伏せた状態。	①細砂、石英を含む。 ②橙褐色。	外面 杯部中央三方向篋削り。周縁5単位でぐるりと篋削り。さらに周縁磨き。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。杯部放射状篋磨き。
2	杯（土師器）	口縁部 $\frac{1}{4}$ 欠損。 高 4.4cm。 口 13.1cm。	カマド前。 床面直上。	①細砂、雲母を含む。 ②灰黒褐色。	外面 杯部直交する2方向に篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデの後、放射状篋磨き。口縁横ナデ。
3	杯（土師器）	ほぼ完形。 高 5.5cm。 口 12.6cm。	カマドに直立する壺(Na7)にのった状態。	①砂粒を多く含む。 ②茶褐色。	外面 杯部中央1方向、周縁4方向に篋削り。口縁部横ナデ。 内面 口縁部横ナデ。杯部放射状篋磨き。
4	杯（土師器）	ほぼ完形。 高 5.6cm。	壁際。 床面直上。	①砂粒を多量に含む。 ②赤褐色。	外面 杯部中央篋削り。周縁ナデ。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。放射状篋磨き。口縁部横ナデ。
5	杯（土師器）	完形。 高 6.5cm。 口 14.8cm。	カマド前。 床面直上。	①砂粒と少量の長石を含む。 ②橙褐色。	外面 杯部篋削りの後、篋磨き。特に下半はよく磨かれている。口縁部横ナデ。 内面 杯部篋削りの後ナデ。口縁部横ナデ。
6	広口壺（土師器）	完形。 高 13.6cm。 口 12.9cm。 頸 11.3cm。	カマド燃焼部。 胴 14.1cm。 底 6.4cm。	①細砂、雲母をやや多く含む。 ②灰褐色。	外面 胴部横方向及び斜方向のナデ後、横方向篋磨き。胴部最下部～底部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。下半放射状篋ナデ。
7	壺（土師器）	ほぼ完形。 高 29.1cm。 口 15.8cm。 頸 24.2cm。	カマド燃焼部。 底 6.4cm。	①砂粒、雲母を含む。 ②茶褐色。	外面 胴部上半篋削りの後ナデ。下半横方向篋削り。最下部斜方向篋削り。胴中位縦方向篋磨き。底部篋削り。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
8	甌（土師器）	ほぼ完形。 高 24.9cm。 口 17.9cm。 頸 14.7cm。	床面直上。 胴 20.7cm。 底孔 8.7cm。	①砂粒、雲母を混じる。 ②灰褐色。	外面 胴部上半縦方向篋削り。上部を斜方向篋削り。胴部下半斜方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
9	杯（土師器）	ほぼ完形。 口 12.3cm。	壁際。 床面上5cm	①砂粒を多く混じる。 ②赤褐色。	磨耗が激しく観察不能。
10	壺（土師器）	口縁～肩部残存。 口 14.5cm。 頸 13.0cm。	カマド左脇 床面直上。	①砂粒、石英を多量に含む。	外面 肩部斜方向の篋削り後縦方向のナデ。口縁部横ナデ。 内面 肩部ナデ。口縁部横ナデ。



第176図 81号住居址出土遺物(1) (7・8-¼)

III 検出された遺構と遺物



第177図 81号住居址出土遺物(2) (11-1/4)

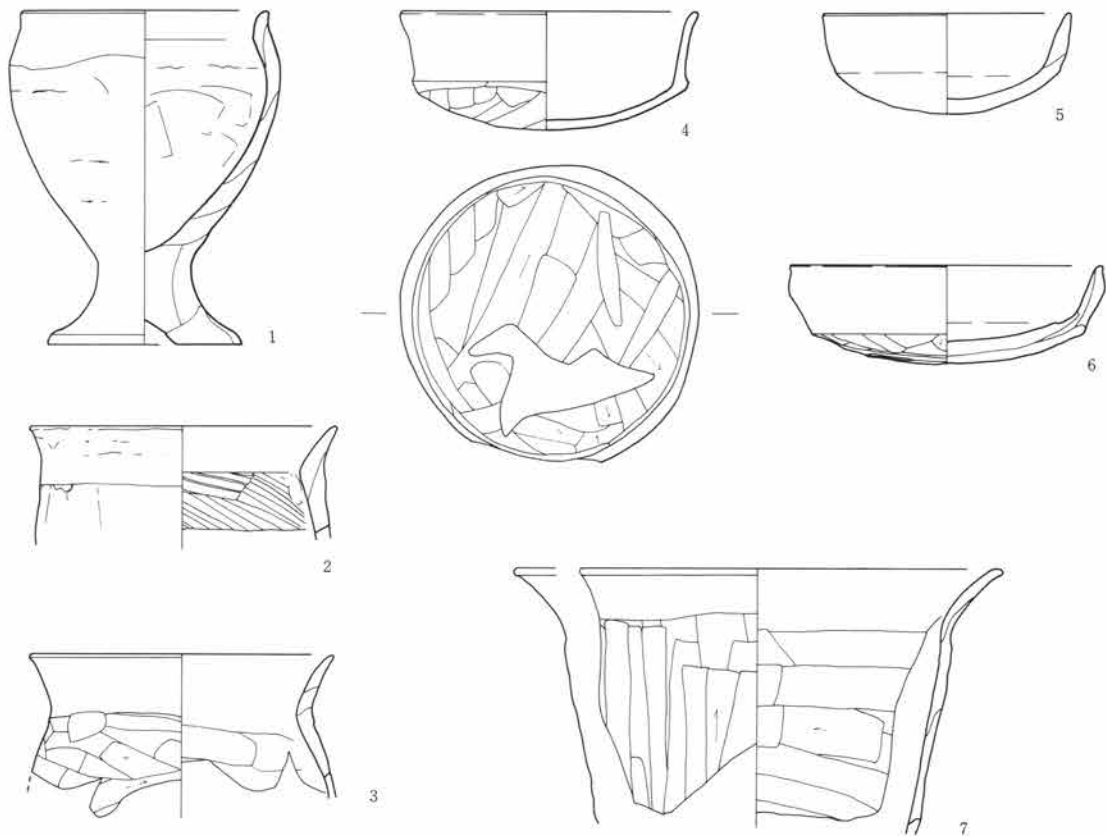
(81号住居址)

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
11	甕 (土師器)	ほぼ完形。 高 30.8cm。 口 17.4cm。 頸 15.0cm。 胴 22.6cm。	カマド左袖上。 底 4.3cm。	①細砂を多量に含む。 ②灰褐色。	外面 胴部上半筒削りの後ナデ。下半斜方向筒削り。底部筒削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
12	埴 (土師器)	ほぼ完形。 高 12.1cm。 口 13.0cm。 頸 6.6cm。	カマド前。 床面上5cm。 胴 10.7cm。 底 4.4cm。	①砂粒と石英粒を多量に含む。 ②灰黄褐色。	外面 胴部下半横方向筒削り。上半、筒削りの後、ナデ。底部筒削り。口縁部縦方向筒磨き。 内面 横方向ナデ。口縁部横ナデ。
13	埴 (土師器)	口縁～胴下位1/2残存。 口 (13.4) 頸 (6.2cm)	埋土中。 胴 13.0cm。	①砂粒を含む。 ②灰褐色。	外面 胴部横方向筒削り。口縁部ナデの後縦方向筒磨き。口縁部横ナデ。 内面 胴部上半斜方向筒削り。下半横方向筒削り。頸部押え。口縁部横ナデ。

82号住居址出土遺物観察表 (第178図) ▶本文P.177、178・第154図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	台付甕 (土師器)	口縁～胴部中位1/2欠損。 高 13.3cm。 口 9.8cm。	カマド左脇。 床面直上。	①細粒を少量含む。 ②灰褐色。	外面 胴・脚部指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向筒削り。脚部指ナデ。
2	小型甕 (土師器)	口縁～肩部1/2残。 口 (12.4cm) 頸 (11.4cm)	床面下。	①砂粒を少量含む。 ②灰褐色。	外面 肩部筒削りの後、ナデ。口縁部横ナデ。 内面 肩部木端状工具によるナデ。口縁部横ナデ。
3	小型甕 (土師器)	口縁～肩部1/2残。 口 (12.4cm) 頸 (10.5cm)	床面上15cm。	①砂粒を含む。 ②赤褐色。	外面 肩部横方向筒削り。口縁部横ナデ。 内面 肩部横方向筒削り。

2 古墳時代の遺構と遺物

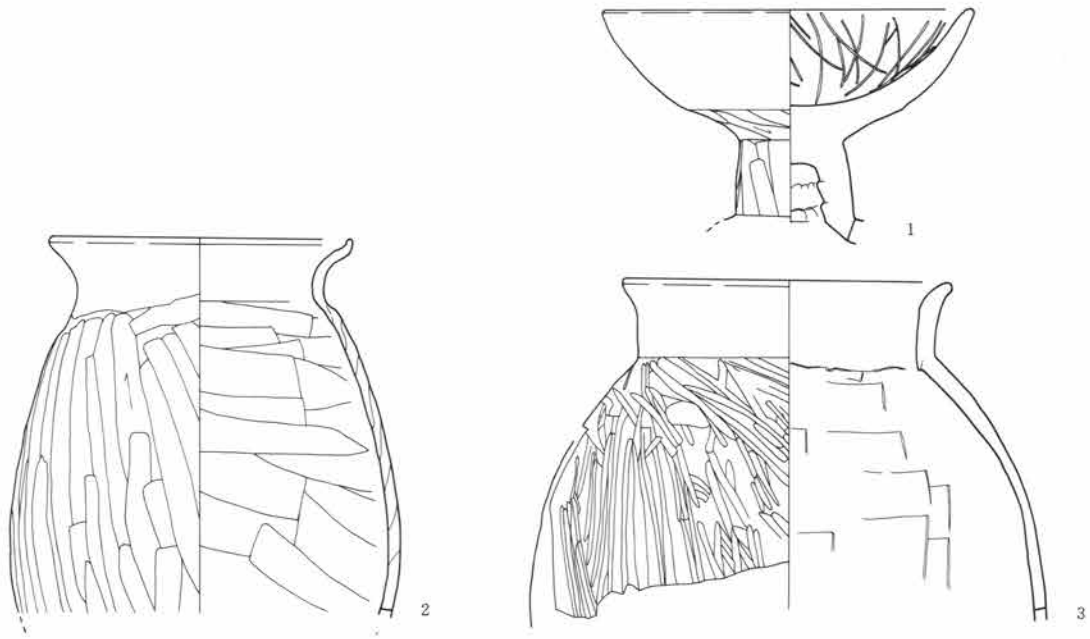


第178図 82号住居址出土遺物（7-¼）

(82号住居址)

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
4	杯（土師器）	口縁、底部一部欠損。 高 4.7cm。 口 12.0cm。	埋土中。	①砂粒、雲母を含む。 ②赤褐色。	外面 杯部篋削り後、周縁ぐるりとナデ。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
5	杯（土師器）	口縁～底部¼残。 高 4.0cm。 口 10.0cm	埋土中。	①砂粒を含む。 ②灰褐色。	外面 杯部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
6	杯（土師器）	口縁～底部¼残。 高 3.9cm。 口 12.4cm	埋土中。	①砂粒、石英を含む。 ②灰褐色。	外面 杯部中央一方向篋削り。周縁外側から内側へ数単位に篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
7	壺（土師器）	口縁～胴上位¼残存。 口 26.4cm	埋土中。	①長石、石英、雲母を含む。②橙褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篋削り。

III 検出された遺構と遺物



第179図 80号住居址出土遺物（1～3 - ¼）

80号住居址出土遺物観察表（第179図・P L86）▶本文P.178・第155図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
4	高杯（土師器）	台部下位欠損。 口 14.9cm。 接合部 4.1cm。	カマド焼成部。 倒立（支脚）。	①砂粒、長石粒を含む。 ②橙褐色。	外面 杯部下半斜方向篋削り。上半横方向篋削り後、横ナデ。脚部縦方向のナデ。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ後、杯部放射状の篋磨き。
5	甕（土師器）	口縁部～胴部下位残存。 口 16.3cm。 頸 13.1cm。 胴 20.8cm。	カマド焼成部。 カマド支脚から転倒。	①砂粒・長石・雲母細粒を含む。 ②灰褐色、黒斑。	外面 胴部縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。
6	壺（土師器）	口縁部、胴部上半残存。 口 17.6cm。 頸 15.7cm。	カマド脇。 床面上2cm。	①砂粒を多量に含む。 ②灰褐色、黒斑。	外面 胴部篋削り後縦方向篋磨き。頸部ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。

3. 奈良時代の遺構と遺物

11号住居址 ▶ 出土遺物P.222・第194図

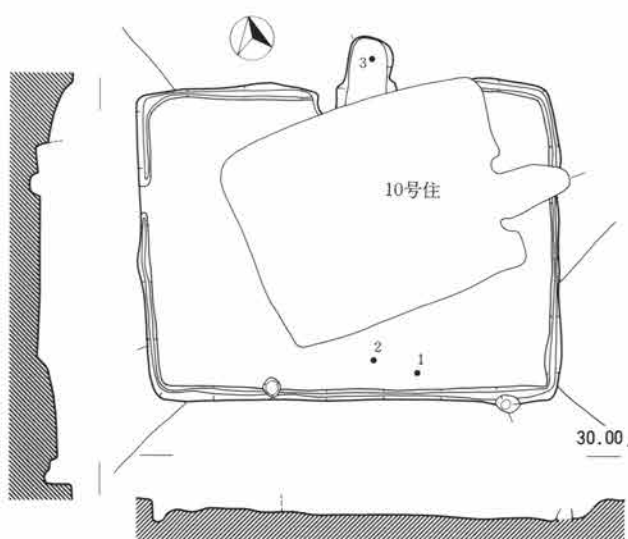
奈良時代の住居分布の北端に位置し、これより北には同期の住居は見られない。12号住居址（古墳時代）、14号住居址（奈良時代）を切り、平安時代の10号住居址が本住居址内にすっぽり重複して、その掘り込みは、本住居の床面下まで達している。

主軸をほぼ南北とし、東西4.45m、南北3.3mと主軸と直交する方向に長い長方形プランを呈している。

カマドは、北壁の中心よりやや東に扁して付設されている。カマド袖が住居壁から30cm張り出す。燃烧部の大半は、壁外となり、焚口部で幅約40cm、奥行85cmを有している。

住居壁に沿って、全体に幅10cm、深さ5cmの壁周溝が認められる。

住居に伴う遺物は、10号住居址が本住居の主要部分を占めるためもあってか、少ない。



第180図 11号住居址実測図

14号住居址 ▶ 出土遺物P.253・第242図

11号住居址と北西端で一部重複している。また南西端では15号住居址（古墳時代）と重複している。住居壁の遺存がきわめてわずかであり、部分的には明瞭に住居輪郭を確認できていないところもある。

主軸を北北西から南南東にとり、主軸方向で長さ約4m、これと直交する方向で長さ3.7mの主軸方向にやや長い長方形プランを呈している。

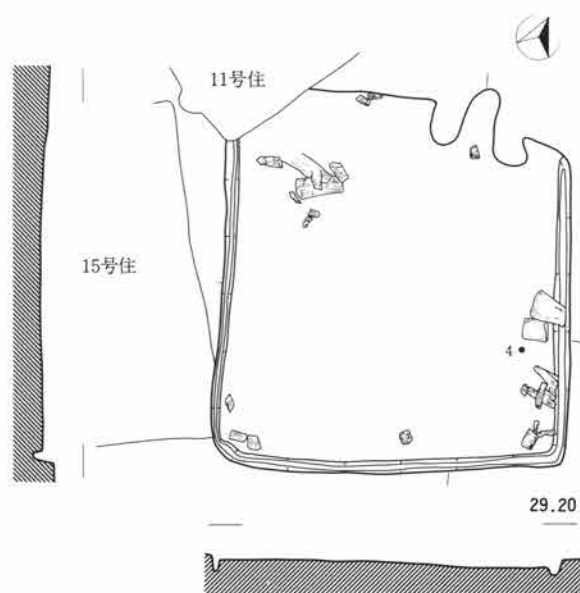
カマドは、北壁の中心より80cmほど東に扁して付設されている。かろうじて底面を残すのみであり、形状・構造等については不明確である。

北側をのぞき、住居壁にそって壁周溝が認められる。

遺物はきわめて少なく、破片のみである。

本住居は、焼失家屋と思われ、床面上から多量の炭化物が出土している。

本住居址の時期については、決め手に欠ける点が多いが、住居址の主軸方向および出土土器中の須恵器蓋から奈良時代のものとした。



第181図 14号住居址実測図

III 検出された遺構と遺物

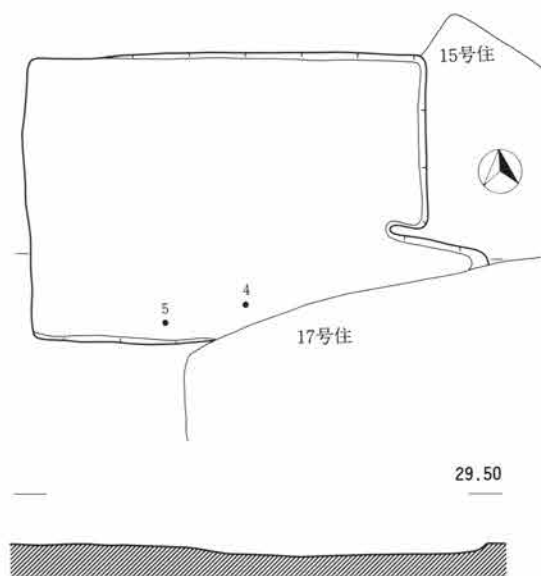
16号住居址 ▶ 出土遺物P.222・第194図

11号住居址の南に隣接して位置し、15号住居址（古墳時代）を切り、17号住居址（平安時代）に南東よりの一部を切られている。壁高10cmほどを残すが、西よりは床面近くまで削平されている。

主軸を東西とし、東西約4.3m、南北3.1mの規模を有し、主軸方向に長い長方形プランを呈している。

カマドは東壁の中心から70cm南に扁して付設されている。残存する左袖は35cm住居内に張り出しており、燃烧部の半ばほどが壁外になっている。

出土遺物は、きわめて少ない。北壁南よりに完形に近い甕形土器が確認された以外は、わずかの破片のみである。



第182図 16号住居址実測図

27号住居址 ▶ 出土遺物P.224・第195図

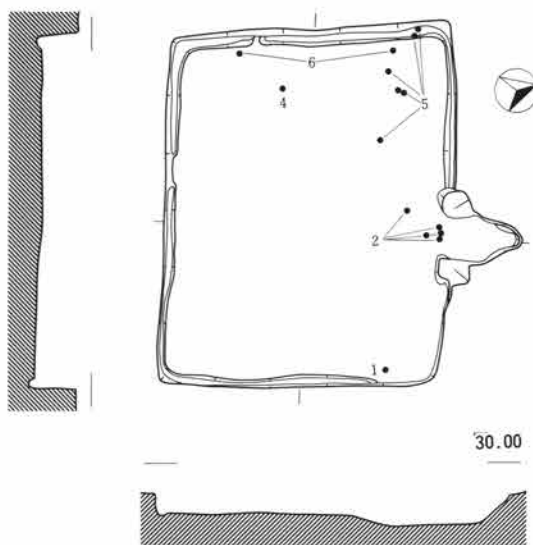
調査区域の最南端に位置するものである。周辺には近接する住居址は見られず、北および西側に10mほどの間隔をおいて平安時代の住居が存している。壁高30cm以上を残しており、遺存状況は良好である。

主軸を北北東から南南西（以下、北東を北として記述）にとり、主軸方向で長さ3.1m、これと直交する方向で長さ3.8mの規模を有し、主軸と直交する方向に長い長方形プランを呈している。

カマドは、北壁の中心より30cm東に扁して付設されている。比較的質のよい白色粘土を多量に使用して構築されている。袖は住居壁から15cmほど張り出している。燃烧部は、大半が壁外となっており、焚口部で幅45cm、奥行90cmを測る。

住居の床面は、カマド前から東壁より部分は、地山を掘り下げ、土を入れかえてつくっている。

直接住居に伴なうと思われる遺物は、住居北東隅よりで確認された須恵器杯形土器を除くと、きわめてわずかである。埋土中の遺物は住居西よりに集中しており、西側からの流れこみと考えられる。



第183図 27号住居址実測図

49号住居址 ▶出土遺物P.225・第196図

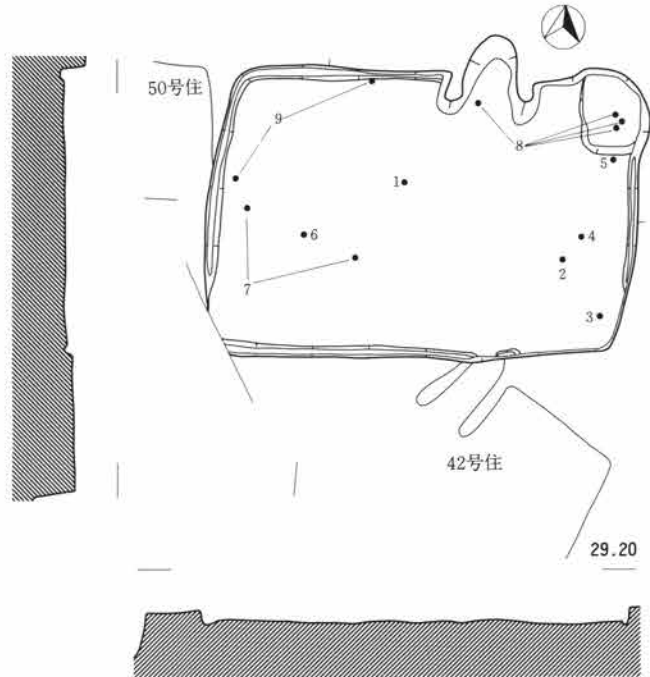
奈良時代の住居分布の南よりに位置する近接して北側に、本住居と相前後する時期の53号住居、54号住居が、ほぼ同規模、同方向で南北にならぶ。南側で42号住居、西側で50号住居と重複している。壁高25cmを有し遺存状況は良好である。

主軸はほぼ南北とし、東西で4.6m、南北で3mの規模を有し、主軸と直交する方向に長い長方形プランを呈している。

カマドは北壁の中心より70cm東に扁して付設されている。袖は住居壁より40cm張り出している。燃焼部は、奥より半分が壁外となり、焚口部で幅55cm、奥行96cmを測る住居北東隅には、80×60cmで、深さ10cmほどの浅いくぼみをつくっており、一種の貯蔵穴的な施設かと考えられる。

住居壁にそって壁周溝が全周している。

出土遺物は、埋土中のものは小破片が全体に多く認められ、住居に直接伴うと考えられるものは、カマドから貯蔵穴状の施設にかけてで、主として破片であり、量は少ない。



第184図 49号住居址実測図

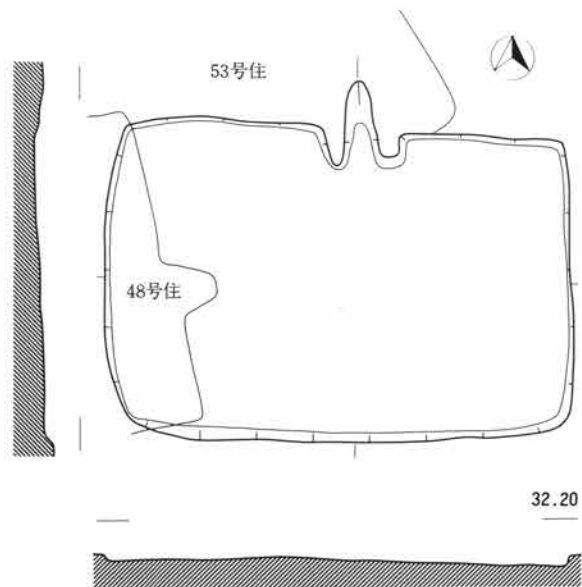
52号住居址

時期的に相前後する49号住居址と54号住居址の間にはさまれている。53号住居址(古墳時代)と北側で、48号住居址(平安時代)と西側で重複している。壁高10cm以下で、遺存状態はあまり良くない。

主軸をほぼ南北とし、東西4.95m、南北3.3mの規模で、主軸と直交する方向に長い長方形プランを呈している。

カマドは、北壁の中心より20cm南に扁して付設されている。袖は住居壁から40cm張り出している燃焼部が半ば壁外にくるもので、焚口部で幅40cm奥行90cmである。

出土遺物は非常に少ない。大半が小破片である



第185図 52号住居址実測図

III 検出された遺構と遺物

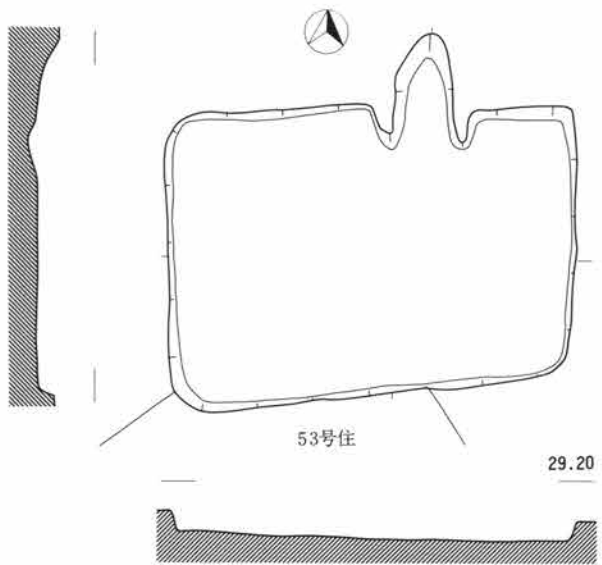
54号住居址 ▶出土遺物P.222・第194図

53号住居址の北3mに位置している。53号住居址（古墳時代）と南側で一部重複している。壁高25cmほどを残しており、遺存状況は比較的良好である。

主軸をほぼ南北とし、東西4.4cm、南北3.1mの規模を有し、主軸と直交する方向に長い長方形プランを呈している。

カマドは、北壁の中心より60cm東に扁して付設されている。袖は住居壁から50cm張り出す。燃烧部の半分ほどが壁外となり、焚口部で幅55cm、奥行120cmを有している。燃烧部中心では、床面の下20cmほどを掘りくぼめ、土を入れかえて床をつくっている。

出土遺物は、埋土中の2片の小破片をのぞくと全く認められない。遺構の遺存状態のよさからして、意図的に廃棄された住居である可能性が強いと考えられる。



第186図 54号住居址実測図

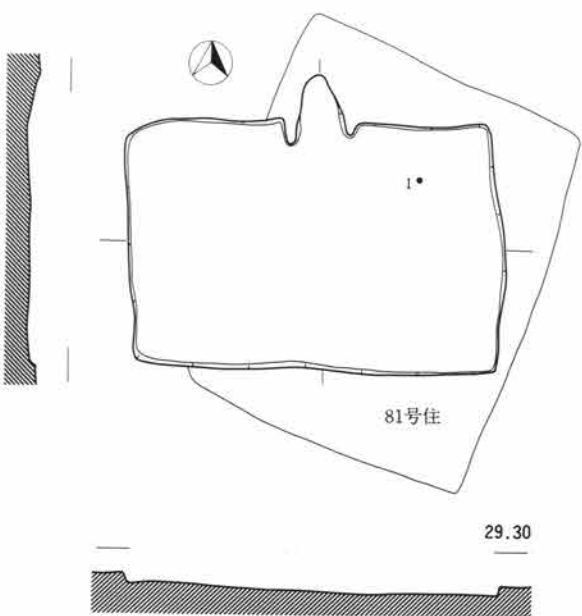
67号住居址 ▶出土遺物P.229・第199図

奈良時代の住居分布のうちでは、北よりに位置し、ほぼ同時期の64号住居址の西5mである。時期的に先行する81号住居址の上に本住居址の大半がかかっている。壁高10cmほどを残すが、遺存状態はあまりよくない。

主軸をほぼ南北とし、東西4m、南北2.6mの規模を有し、主軸と直交する方向に長い長方形プランを呈している。

カマドは、北壁のほぼ中心に付設されている。袖が住居壁から左側で20cm張り出している。燃烧部は、奥より半ばが壁外となり、焚口部で幅50cm奥行70cmを測る。

出土遺物はきわめて少なく、住居に直接伴なうと考えられるものは、住居北東部から出土した土師器杯形土器1個体のみである。住居の遺存状況も悪いため、断定はできないが、本来的に住居に伴なう土器が少なかった可能性が強い。



第187図 67号住居址実測図

64号住居址 ▶出土遺物P.226~229、第197・198図

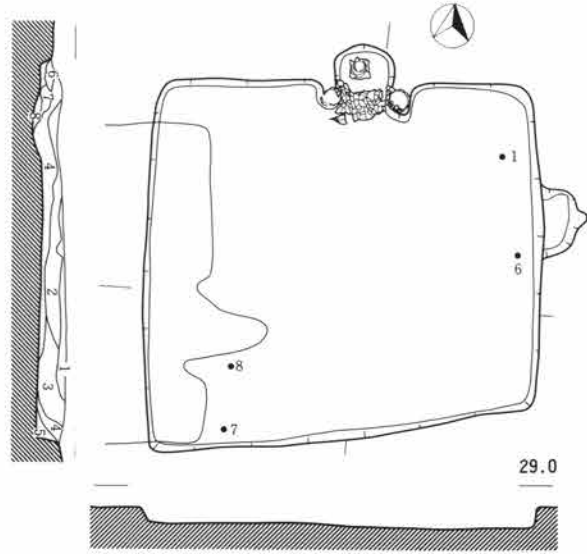
奈良時代の住居分布の北よりに位置する。2号溝の西側に隣接し、相前後した時期の69号住居址は南東に隣接している。住居西側で63号住居址（平安時代）と重複している。壁高30cmを有し、遺存状況のきわめて良好なものである。

本住居では、北壁と東壁の2ヶ所にカマドが確認されており、東壁カマドが北壁カマドに先行する。

主軸を南北とし、東西4.25m、南北は東壁よりで3.45m、西壁よりで3.95mを測り、東壁を上辺西壁を下辺とした台形プランを呈している。

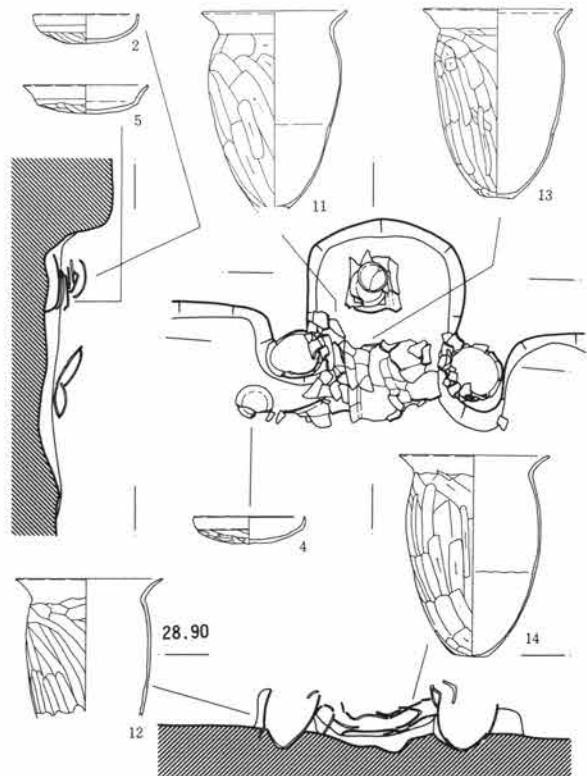
北壁カマドは、北壁の中心より15cm東に扁して付設されており、カマド使用状態を具体的に把握できる遺存状態であった。カマド用材として、土師器8個体を巧みに組み合わせて構築している。左袖で住居壁から30cm張り出している。燃烧部は奥より半分が壁外となっており、焚口部で幅50cm奥行75cmを測る。焚口部は、5個体の長胴甕形土器を鳥居状に組み合わせている。袖部先端部にあたる位置の床面を10cm掘りくぼめ、土器底部を下にして埋め込み、門柱状にし、周囲は粘土で補強している。この2つの長胴の甕形土器の口縁部に掛けて、むかって左側を口縁部、右側を底部とする三連につないで架構したと思われる長胴甕形土器3個体がつぶれた状態で出土している。焚口部から奥へ50cmの燃烧部の中心には、3個体の土器を積み重ねてカマド支脚としている。最下部は長胴甕形土器の上半部を縦に½分割した2枚を内面を下にし、口縁部を互い違いにして重ね、その上に盤状の杯形土器を伏せてのせ、最上部には杯形土器を伏せてのせている。これらはカマド底面より高さ10cmに積み上げられている。この上に煮沸用の土器がのせられたものであろう。

東壁カマドは、東壁の中央やや北側に付設されている。北壁カマド構築前に使用されていたものと考えられ、燃烧部を埋めて、住居壁に改築している。カマドの形状は、残存部分の規模、形状からして北壁カマドに類似したものであったと思われる。袖部にあたる部分は、削平されて床面になっていたので



1. 粒子が細かく、黄褐色粘質土粒を混じる灰褐色土。
2. 1に黄褐色土ブロックを少量混じる。
3. 1に黄褐色土ブロックを多量に混じる。
4. 1より黒みの強い灰褐色土。
5. 4と黄褐色粘質土の混土。 7. 黄褐色粘土。
6. 焼土と黄褐色粘質土の混土。 8. 黄褐色粘土を含む焼土。

第188図 64号住居址実測図



第189図 64号住居址カマド遺物出土状態図

III 検出された遺構と遺物

あるが、床下の調査により、両袖の端部にあたる位置に地山面を掘りくぼめたピットが確認され、門柱状の長胴甕形土器の抜きとり穴と考えられる。北壁カマドと同じ長胴甕形土器を使用した鳥居状のものであったことが推せられた。燃焼部の奥より中心には、カマド支脚に使用されたとされる長胴甕形土器を底部を下にして埋め込んで設置している。この長胴の甕形土器は、胴中央部に丸みを有しているもので、明らかに北壁カマド使用の土器よりも古い段階に位置づけられるものである。この設置場所は、北壁カマドのカマド支脚の付設場所とほぼ同じ位置である。



64号住居址東壁カマド

壁周溝、支柱穴は検出されなかった。

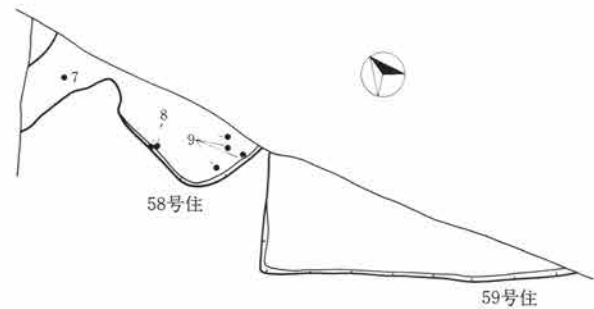
カマドに使用されている土器以外、住居に直接伴う遺物はきわめて少ない。北壁カマドに掛けられたであろう煮沸用の土器も見られないことから、意図的な住居の廃棄を契機として廃絶したものと考えられる。

58号住居址 ▶ 出土遺物P.222・第194

1号溝の検出部分の最北部の東側に近接している。この付近は、後世の攪乱等により、遺構の明確な検出が困難であり、本住居址についても不明な点が多い。大半は、調査区域外となっていたため、西よりの一部の調査である。

検出した住居輪郭からすると、住居のむきは、ほぼ方位に沿うものであったことがわかるが、規模、形状は不明である。

58号住居址の南側に隣接して住居址と思われる遺構（59号）が確認されているが、遺物を伴わず、58号住居址との重複関係も明らかでないため時期を限定できない。



第190図 58・59号住居址実測図

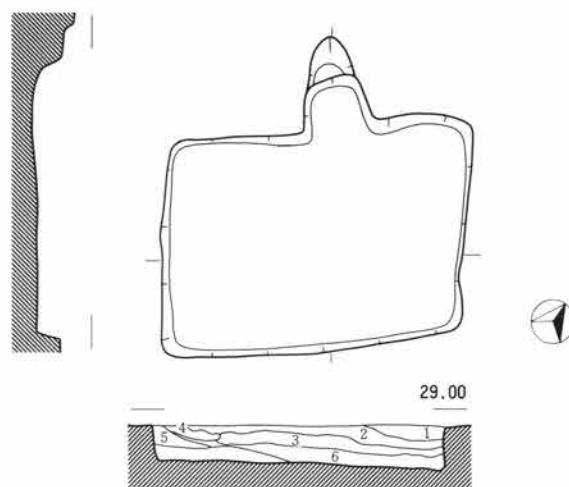
69号住居址

64号住居址の南東に近接する。住居東側で南北走向の時期的に先行する2号溝と重複する。住居に伴う遺物がほとんど認められなかったため、時期を決定する決め手に欠けるが、プラン形状、カマド付設箇所等から奈良時代のものと考えている。本遺跡では類似の住居形状で平安前期のものも1例存することから、奈良時代に限定することはできない。壁高40cmを有し、きわめて遺存状況の良好なものである。

主軸を北北西から南南東とし、主軸方向で2.3m、これと直交する方向で3.2mの、主軸方向と直交する方向に長い長方形プランを呈している。

カマドは北壁の中心より25cm東に扁して付設されている。燃烧部が壁外に位置し、焚口部で幅60cm、奥行65cmを測り、その先に幅30cm、奥行45cmの煙道がとりついている。

遺構の遺存状態がきわめて良好であるにもかかわらず、出土遺物はわずかししか認められなかった意図的な廃棄を契機とした住居の廃絶であろう。



1. 黄褐色粘質土の小ブロック・粒を多く含む黒褐色土。白色軽石を混入する。
2. 黄褐色粘質土ブロック、白色軽石を多量に含む黒褐色土。
3. 粗い黄褐色粘質土粒子を含む黒褐色土。
4. 黄褐色粘質土小ブロック、白色軽石を含む黒褐色土。
5. 4に炭化物粒を混じる。
6. 黄褐色粘質土ブロック（径5cm）を混じる黒褐色土。
7. 黄褐色粘質土ブロックを混じる。

第191図 69号住居址実測図

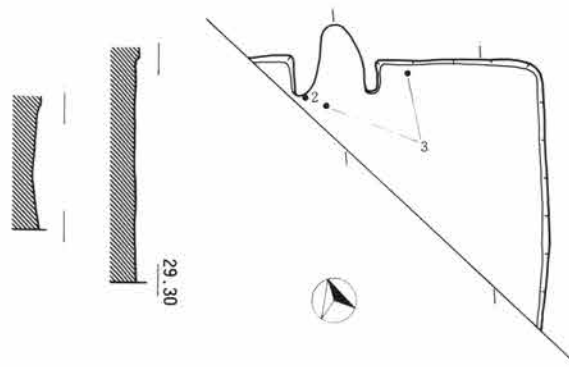
70号住居址 ▶ 出土遺物P.229・第199図

奈良時代の住居分布の北よりに位置する。調査地内では、同時期の住居との間にやや隔たりがある。住居址西より半分は調査区域外となっていたため未調査である。

主軸は南北からやや東にふれている。住居址隅部は、北東隅のみの検出であるため、規模・形状の全容はつかめない。しかし、カマドが北壁の北東隅から2.1m西に位置していることからして、北壁の中央よりにカマドを有し、東西に長い長方形プランを呈する11号住居址をはじめとする奈良時代の住居址に近い規模・形状と推せられる。

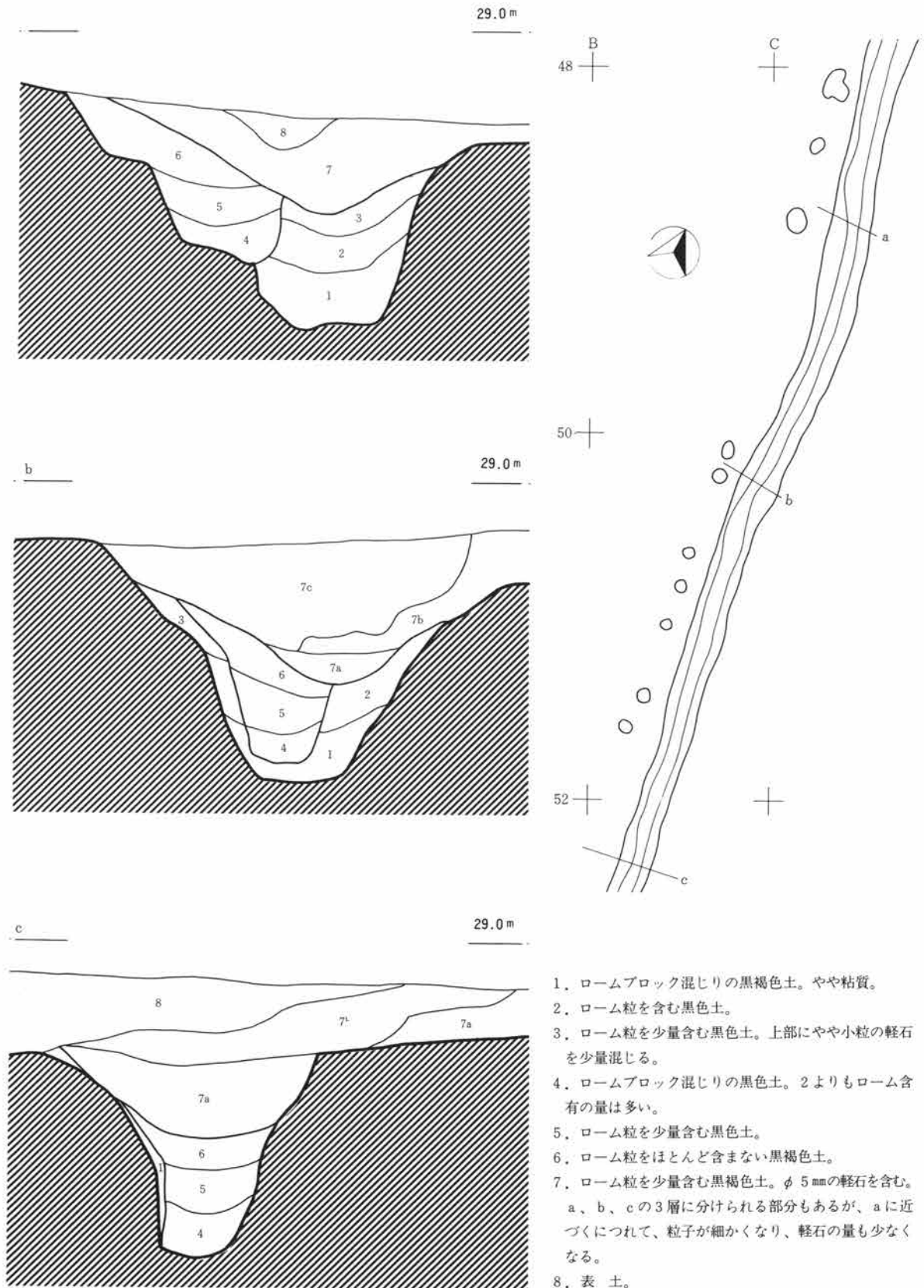
カマドは、袖が住居壁から35cm張り出し、燃烧部は奥よりが壁外となっている。焚口部で幅55cm、奥行80cmを測る。

壁高が5cm以下と浅いため、出土遺物は少ない。比較的カマド周辺部には集中して認められる。



第192図 70号住居址実測図

III 検出された遺構と遺物



第193図 1号溝土層断面図 S=1/20

1号溝 ▶出土遺物P.230～232、第200・201図

調査地南よりを、ほぼ南北に横切る比較的大型の溝である。検出した部分は、長さ約60mにわたっている。検出された端部での状況からして、溝はさらに南北に続いていくことが窺われる。溝の走行は、ゆるやかな蛇行を示す部分も見られるが、全体としては西側にむかってきわめてゆるやかな弧状を呈している。

遺存状況の最もよい部分で見ると、幅、上端で1.6m、下端で0.3m、深さ0.85mの葉研状を呈するものである。地層断面の状況からすると、最初の掘開後、少なくとも2回の掘り返しがほぼ全体にわたって認められる。掘り返しのたびに、溝底面は高くなっており、最終的には上端から30～50cmと、当初の深さの半分近くとなっている。溝内への土砂の埋没状況からすると、常時水を湛えていた痕跡は認められない。

溝内からは、多量の土器片が出土しているが、主として第一次段階の溝の埋土中のものである。出土地点は、40号住居と33号住居にはさまれた地点を中心として南北20mの範囲に集中する傾向である。また、溝西側より投棄されたことを推測させる出土状態である。溝内出土の土器からすると、古墳時代後期から奈良時代のものが確認されるが、層位的に区分できない。溝の時期の上限を奈良時代におくことができる。また、平安期に属する土器が認められないことから、奈良時代の中で廃絶したことが明らかである。

2号溝

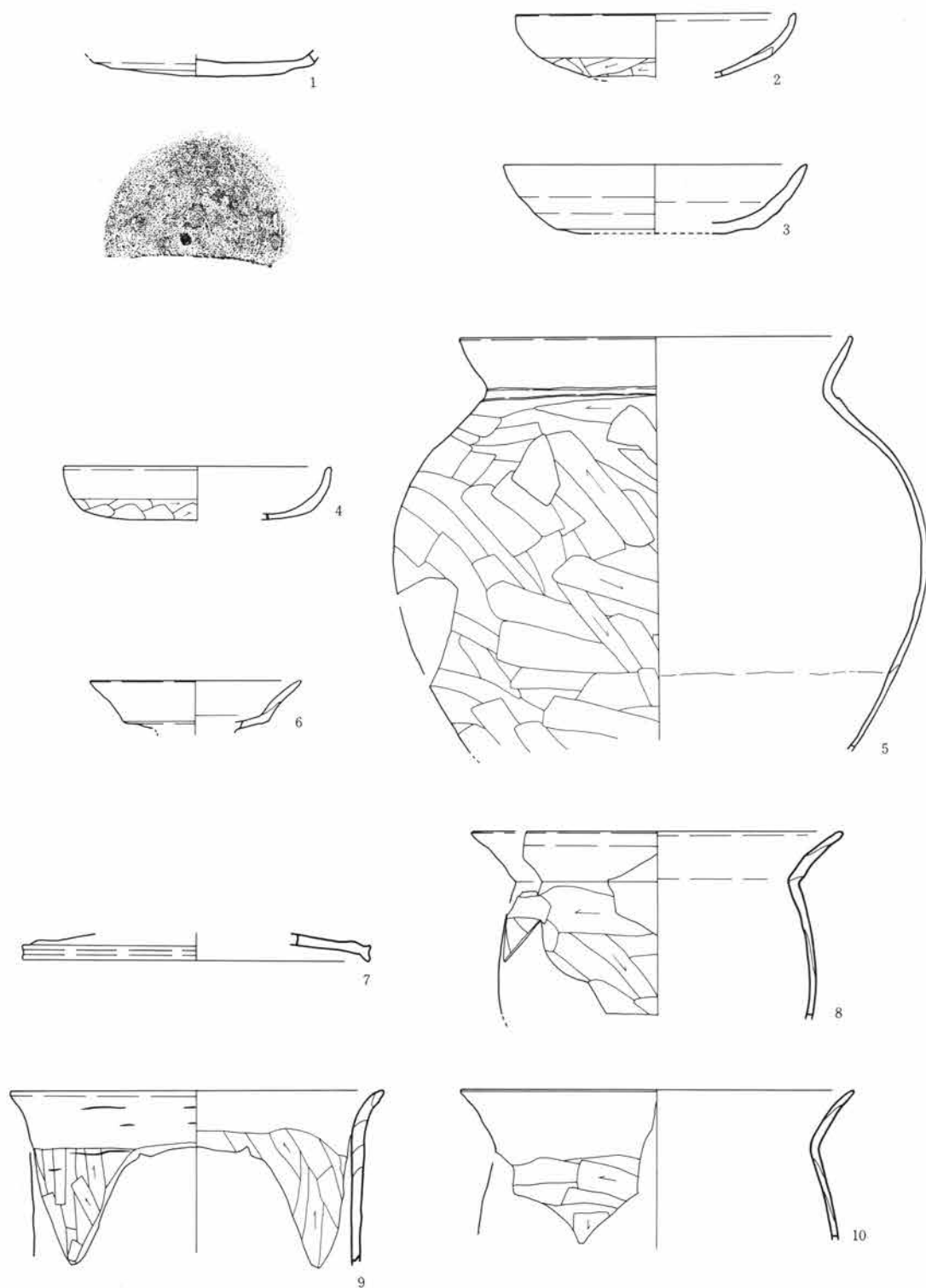
1号溝の西約5mに位置し、ほぼ平行した南北の走行を示すが、南端部で、西へ大きく屈曲する点が異なる。時期的に後出する平安期の4号掘立、56号住居、時期的に先行する69号住居、82号住居と重複する。このことから1号溝に近い時期のものと考えており、あるいは同時併存したかもしれない。溝に伴う遺物がほとんど認められないため確定的ではない。

断面U字形を呈する浅いもので、幅、上端で50cm、深さ約25cmの規模を有している。溝内への覆土の埋没状況等からして、常時水をたたえていたものではない。

所見

1号溝、2号溝とも水路等の施設としてではなく、一定の範囲を区画するものとして機能したものと考えられる。溝とほぼ同時期と思われる住居址の位置を見ると、27号住居を除いてすべて1号溝の西側に位置している。2号溝についても27、69号住居を除いて同様の位置関係を示している。以上のことからして、1号溝は、同時期の住居址群、すなわち、集落の限界を区画する溝として機能していたことが明らかであり、溝の西側部分の住居址群が、明らかに有機的連関をもった集落の一定の単位であったことが理解される。

III 検出された遺構と遺物



11号住居址出土遺物 (1~3)
 16号住居址出土遺物 (4・5-¼)
 54号住居址出土遺物 (6)
 第194図 58号住居址出土遺物 (7・8~10-¼)

11号住居址出土遺物観察表（第194図）▶本文P.213・第180図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯（須恵器）	底部残存。 底 8.2cm。	壁際。 床面直上。	①細砂を含む。 ②灰褐色。	右回転ロクロ成形 外面 底部回転篋削り
2	杯（土師器）	口縁～杯部 $\frac{1}{4}$ 残。 口（13.2cm）	床面上5cm。	①細砂、長石、雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 杯部下半斜方向篋削り。上半ナデ。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
3	杯（須恵器）	口縁～杯部 $\frac{1}{4}$ 残。 口（14.4cm）	灰面直上。	①砂粒、石英粒、白色鉱物粒を含む。 ②灰色。	ロクロ整形。切り離し技法不明

16号住居址出土遺物観察表（第194図・P.L85）▶本文P.214・第182図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
4	杯（土師器）	口縁～底部 $\frac{1}{4}$ 残。 高 2.5cm。 口（12.5cm）	壁際。床面直上。	①砂粒、雲母を含む。 ②灰褐色。	外面 杯部下半斜方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
5	甕（土師器）	口縁部 $\frac{1}{4}$ 欠損。 胴部 $\frac{1}{4}$ 残存。 口 24.5cm。 頸 21.0cm。 胴（33.5cm）	床面直上。	面細砂、長石、雲母を多量に含む。 ②赤褐色。	外面 胴部上半斜方向篋削り。下半横方向篋削り。最下縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篋削り。口縁部横ナデ。

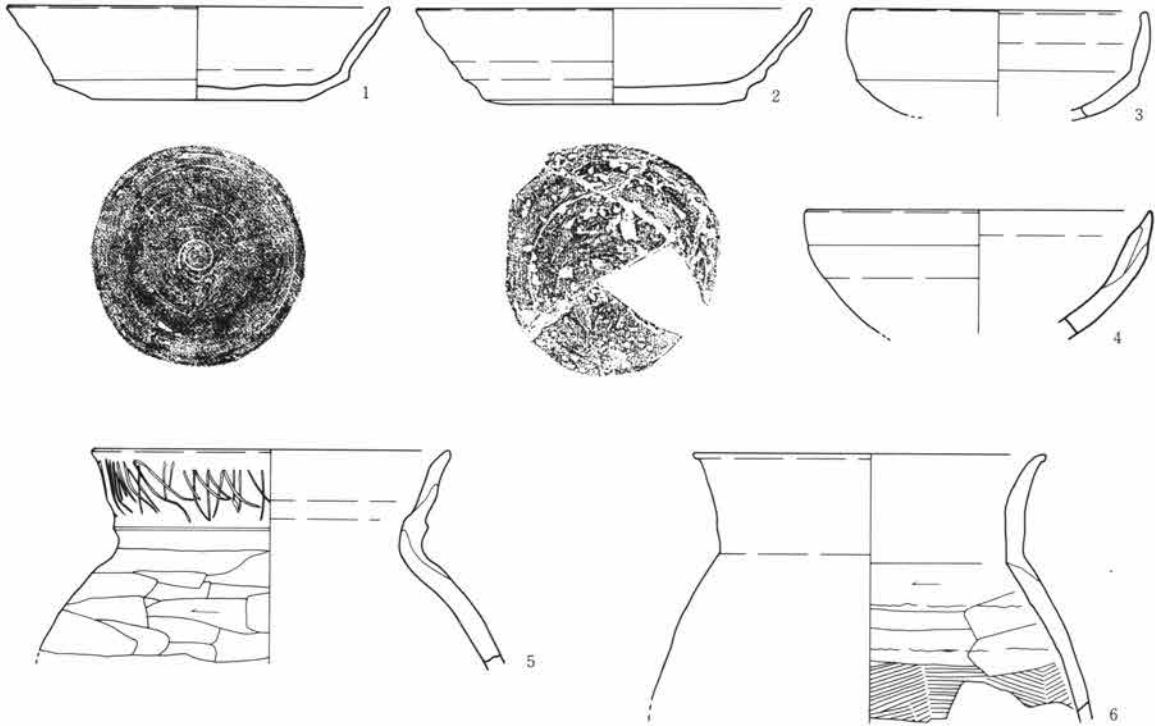
54号住居址出土遺物観察表（第194図）▶本文P.216・第186図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
6	杯（土師器）	底部欠損。 口 10cm。	埋土中。	①細砂を少量含む。 ②橙褐色。	外面 ナデ。 内面 ナデ。

58号住居址出土遺物観察表（第194図）▶本文P.218・第190図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
7	蓋（須恵器）	口縁部 $\frac{1}{4}$ 残存。 口 16.3cm。	カマド燃焼部。	①砂粒を少量含む。 ②青灰色。	ロクロ成形。 回転によるナデ。
8	甕（土師器）	口縁部～胴部上位 $\frac{1}{4}$ 残存。 口 23.4cm。	床面直上。	①砂粒、長石、石英、雲母を多量に含む。 ②灰褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。口縁部～頸部横ナデ。 内面 縦及び斜方向篋削り。口縁部～頸部横ナデ。
9	甕（土師器）	口縁部～胴部上半 $\frac{1}{4}$ 残存。 口（23.4cm） 頸（17.8cm）	床面直上。	①細砂、雲母を多量に含む。 ②茶褐色。	外面 胴部斜方向篋削り。肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
10	甕（土師器）	口縁～肩部 $\frac{1}{4}$ 残。 口（24.3cm） 頸（20.2cm）	床面直上。	①細砂粒、雲母を多量に含む。 ②赤褐色。	外面 肩部横方向篋削り。下部縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 横方向篋削り。口縁部横ナデ。

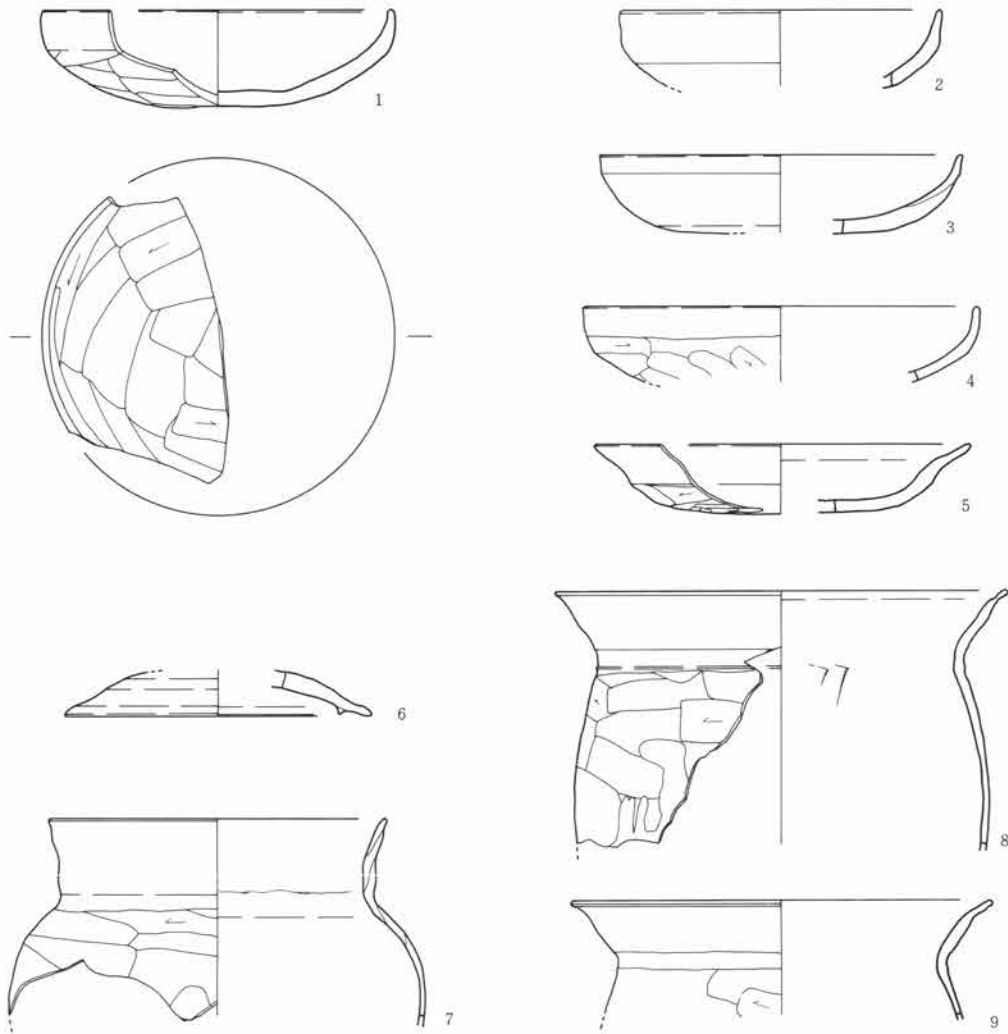
III 検出された遺構と遺物



第195図 27号住居址出土遺物

27号住居址出土遺物観察表 (第195図・PL85) ▶ 本文P.214・第183図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯 (須恵器)	口縁部 $\frac{1}{4}$ 欠損。 高 3.8cm。 口 15.3cm。	壁際。床面直上。	①砂粒を含む。 ②灰色。	外面 口縁部回転ナデ。底部回転篋削り。 内面 全体回転ナデ
2	杯 (須恵器)	口縁部 $\frac{1}{4}$ 。 底部 $\frac{3}{4}$ 残存。 高 3.8cm。 口 (15.9cm)	カマド燃焼部。 灰面直上。	①砂粒、長石粒を含む。 ②橙灰色。	外面 口縁部回転によるナデ。底部周縁回転篋削り。 内面 口縁部回転によるナデ。
3	杯 (土師器)	口縁～杯部 $\frac{1}{2}$ 残。 口 (11.8cm)	カマド前。床面直上。	①細砂粒、雲母を含む。②赤褐色。	外面 杯部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 口縁～杯部篋磨き。口縁部横ナデ。
4	椀 (土師器)	口縁～椀部 $\frac{1}{4}$ 残。 口 (13.9cm)	壁際。床面直上。	①細砂、石英を含む。 ②橙褐色。	外面 椀部ナデ。口縁部横ナデ。 内面 椀部横ナデ。口縁部横ナデ。
5	壺 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{4}$ 残。 口 (14.4cm) 頸 (12.2cm)	壁際。床面直上。	①細砂、石英を含む。 ②橙褐色。	外面 肩部横方向篋削り。頸部ナデ。口縁部縦方向の装飾的篋磨き。 内面 肩部篋ナデ。口縁部横ナデ。
6	壺 (土師器)	口縁部～胴部上半 $\frac{1}{4}$ 残存。 口 (14.5cm) 頸 (12.1cm)	壁際。床面直上10cm。	①細砂、石英粒を多量に含む。②赤褐色部分的に灰褐色。	外面 胴部縦方向ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向刷毛目。上半横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。



第196図 49号住居址出土遺物

49号住居址出土遺物観察表（第196図）▶本文P.215・第184図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯（土師器）	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 残。 高 3.9cm。 口 14.2cm。	床面上 9 cm。	①砂粒、雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 杯部篔削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
2	杯（土師器）	口縁～杯部残存。 口 13.0cm。	床面上 8 cm。	①砂粒、石英を多量 に含む。②橙褐色。	外面 杯部篔削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
3	杯（土師器）	底部欠損。 口 14.6cm。	壁際。 床面上 5 cm。	①細砂粒含む。 ②赤褐色。	外面 杯部篔削り。上半指ナデ。 内面 杯部、口縁部横ナデ。
4	杯（土師器）	口縁～杯部 $\frac{1}{2}$ 残。 口 16.0cm。	床面上 5 cm。	①砂粒、雲母を含む。	外面 杯部横方向篔削り。 内面 杯部、口縁部横ナデ。
5	杯（土師器）	口縁～杯部 $\frac{1}{2}$ 残。 言 15.0cm。	貯蔵穴脇。 床面直上。	①砂粒、雲母を多量 に含む。②赤褐色。	外面 杯部、底部篔削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部、底部ナデ。口縁部横ナデ。
6	蓋（須恵器）	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残。 口 (12.4cm)	床面上 8 cm。	①細砂、長石粒を少 量含む。 ②灰色。	右回転ロクロ成形。 外面 回転篔削り後、周縁及び口縁部回転ナデ。 内面 周縁及び口縁部回転によるナデ。

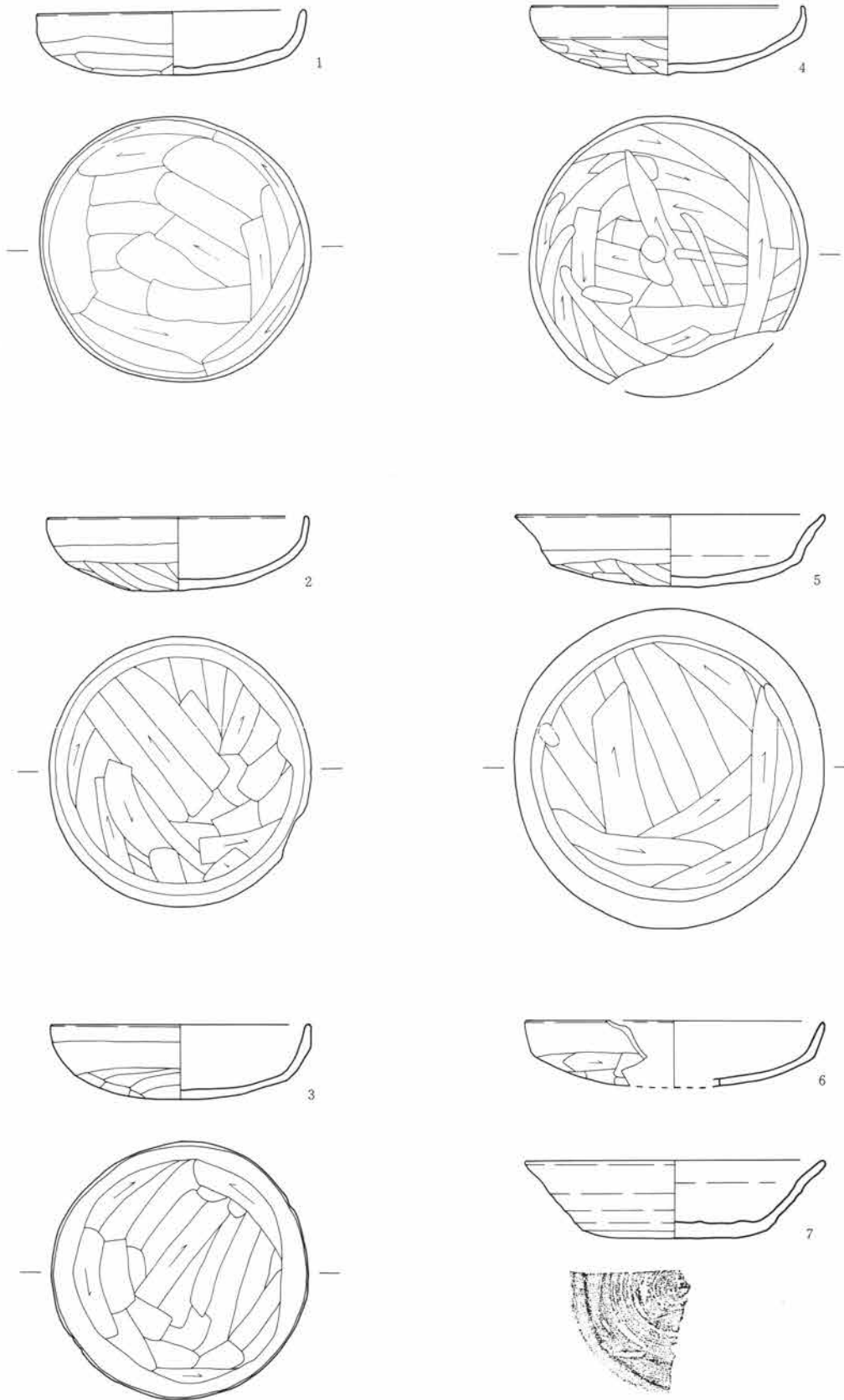
III 検出された遺構と遺物

(49号住居址)

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
7	甕 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{4}$ 残。 口 (13.6cm) 頸 (12.5cm)	床面上 8 cm。	①細砂粒、雲母を多量に含む。 ②黒褐色。	外面 肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 肩部横篋ナデ。口縁部横ナデ。
8	甕 (土師器)	口縁部～胴部上位 $\frac{1}{4}$ 残存。 口 13.6cm。 頸 12.6cm。	貯蔵穴。 頸 12.6cm。	①細砂を多量に含む。 ②赤褐色。	外面 肩部横方向篋削り。頸部篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。
9	甕 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 22.6cm。 頸 17.6cm。	北辺周溝上 7 cm。	①細砂、雲母を多量に含む。 ②赤褐色。	外面 肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 肩部ナデ。口縁部横ナデ。

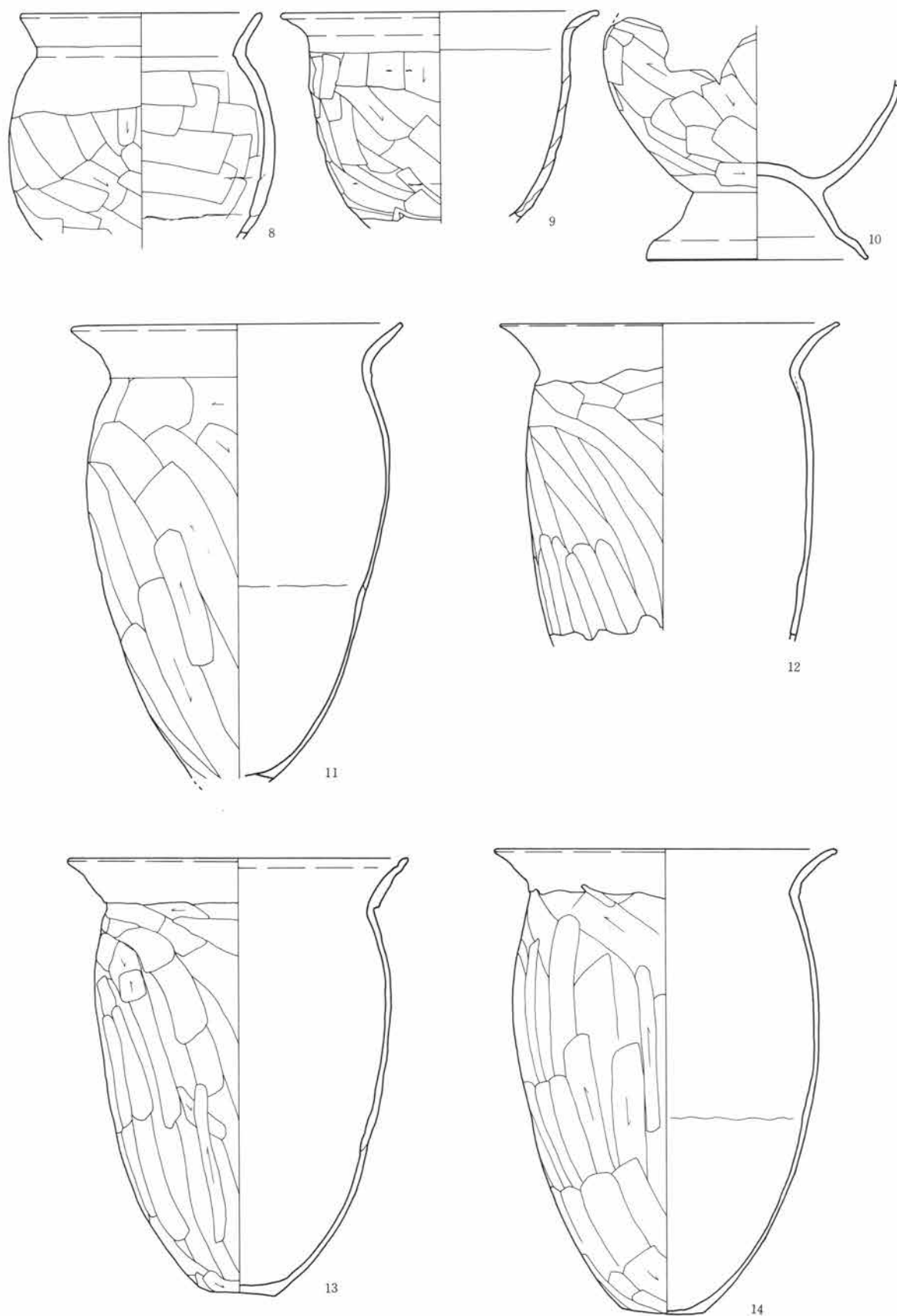
64号住居址出土遺物観察表 (第197・198図・P L85) ▶本文P.217・第188図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	完形。 高 3.0cm。 口 12.9cm。	壁際。床面直上。	①砂粒を含む。 ②橙褐色。	外面 杯部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
2	杯 (土師器)	完形。 高 3.5cm。 口 12.6cm。	カマド燃焼部。 支脚構造の最上。	①砂粒、長石粒を多量に含む。 ②灰褐色。	外面 杯部篋削り。周縁横方向指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
3	杯 (土師器)	完形。 高 3.6cm。 口 12.4cm。	カマド前。 床面上 8 cm。	①砂粒、長石、石英を多量に含む。 ②灰褐色。	外面 杯部篋削り。周縁横方向指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
4	杯 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{4}$ 欠損。 高 3.3cm。 口 13.0cm。	カマド前床面直上。	①砂粒を多量に含む。 ②赤褐色。	外面 杯部篋削り後、部分的にナデ。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
5	杯 (土師器)	ほぼ完形。 高 3.4cm。 口 14.9cm。	カマド燃焼部。	①砂粒を含む。 ②赤褐色。口縁部に炭化物が多量に付着。	外面 杯部篋削り。周縁横方向指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
6	杯 (土師器)	口縁～杯部 $\frac{1}{4}$ 残。 口 (14.3cm)	壁際。床面上 15cm。	①砂粒を含む。 ②茶褐色。	外面 杯部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
7	杯 (須恵器)	口縁～底部 $\frac{1}{4}$ 残。 高 3.7cm。 口 (14.4cm)	壁際。床面上 10cm。 底 (5.9cm)	①砂粒を含む。 ②灰色。	右回転ロクロ成形。 外面 底部回転篋削り。杯部回転によるナデ。 内面 杯部回転によるナデ。
8	甕 (土師器)	口縁部～胴部下半 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 16.7cm。	床面上 7 cm。 頸 14.4cm。	①細砂、長石、石英、雲母を多量に含む。 ②灰褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。上半横方向の指ナデ。口縁、頸部横ナデ。 内面 胴部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。
9	甕 (土師器)	口縁部～胴部下半残存。 口 21.6cm。	カマド前。 床面上 3 cm。 頸 18.3cm。	①細砂、長石、石英、雲母を含む。 ②灰白褐色。	外面 胴部上半縦及び斜方向篋削り。下半斜方向篋削り。口縁部～頸部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁～頸部横ナデ。
10	台付甕 (土師器)	胴下半～台部残。 底 11.6cm。 胴最大 (16.0cm)	東壁旧カマド燃焼部。	①砂粒、長石、石英を含む。 ②茶褐色。	外面 胴部斜方向篋削り。台部横ナデ。 内面 胴部ナデ。台部横ナデ。



第197図 64号住居址出土遺物(1)

III 検出された遺構と遺物



第198図 64号住居址出土遺物(2) (1・2・4~7-1/4)

3 奈良時代の遺構と遺物

(64号住居址)

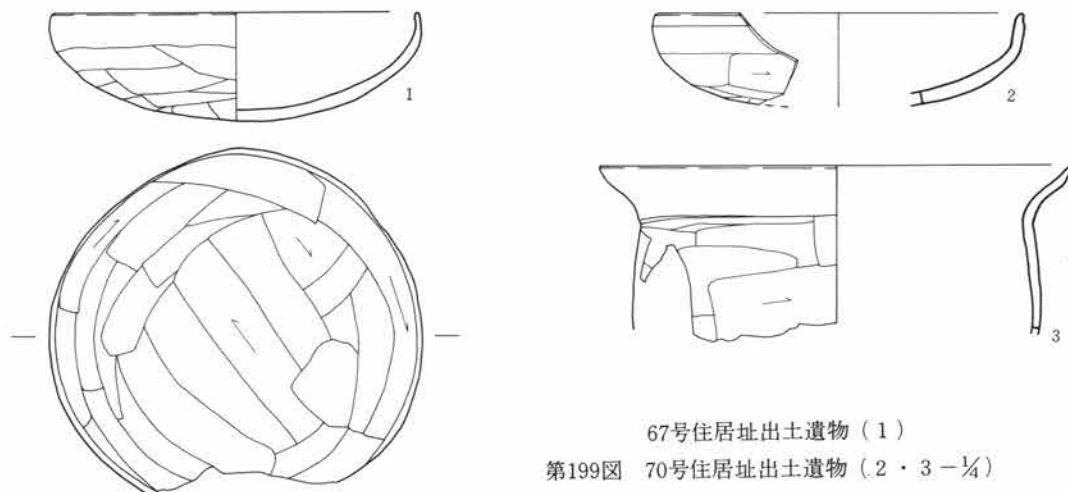
No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
11	甕 (土師器)	底部欠損。 口 22.9cm。 頸 18.0cm。	カマド、鳥居状のたき口。 胴最大20.9cm。	①細砂・雲母・長石を含む。 ②赤褐色～灰褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部丁寧なナデ。口縁部横ナデ。
12	甕 (土師器)	胴部下半欠損。 口 23.6cm。 頸 18.0cm。	カマド左袖。 胴最大20.0cm。	①細砂・雲母・長石を含む。 ②赤褐色～灰褐色。	外面 胴部縦方向篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部丁寧なナデ。口縁部横ナデ。
13	甕 (土師器)	ほぼ完形。 高 29.7cm。 口 23.6cm。 頸 18.5cm。	カマド。鳥居状のたき口。 胴最大20.5cm。 底 4.5cm。	①細砂・雲母・長石を含む。 ②赤褐色～黒褐色。	外面 胴部縦方向篋削り。肩部斜方向篋削り。口縁部横ナデ。底部篋削り。 内面 肩部丁寧なナデ。口縁部横ナデ。口唇部ナデによる凹線をもつ。
14	甕 (土師器)	ほぼ完形。 高 31.9cm。 口 23.6cm。 頸 18.7cm。	カマド。鳥居状のたき口。 胴最大21.2cm。 底 5.73cm。	①細砂・雲母・長石を含む。 ②赤褐色～黒褐色。	外面 胴部縦及び横方向篋削り。底部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部縦方向の丁寧なナデ。口縁部横ナデ。

67号住居址出土遺物観察表 (第199図・P L86) ▶本文P.216・第187図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{4}$ 欠損。 高 4.3cm。 口 14.7cm。	床面直上。	①細砂・雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 杯部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。

70号住居址出土遺物観察表 (第199図・P L86) ▶本文P.219・第192図

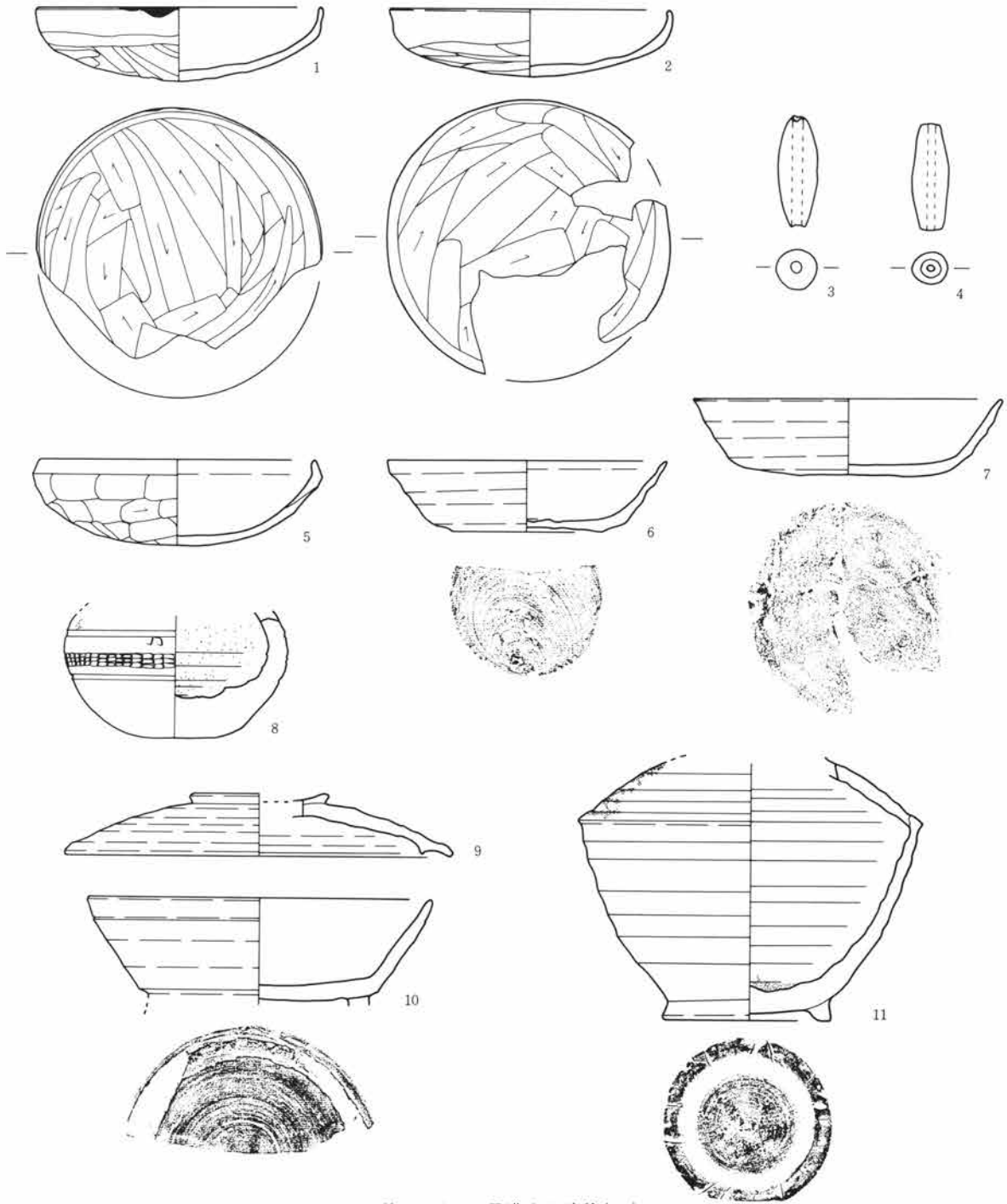
No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
2	杯 (土師器)	口縁～杯部 $\frac{1}{4}$ 残。 口 14.6cm。	カマド前。 床面直上。	①細砂・雲母細片を含む。 ②橙褐色。	外面 杯部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
3	甕 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{4}$ 残。 口 (25.3cm) 頸 (15.7cm)	カマド前。 床面直上。	①砂粒・長石・雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 胴部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。



67号住居址出土遺物 (1)

第199図 70号住居址出土遺物 (2・3- $\frac{1}{4}$)

III 検出された遺構と遺物



第200図 1号溝出土遺物(1)

1号溝址出土遺物観察表 (第200・201図・PL86) ▶ 本文P.221・第193図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	2/3残存。 高 3.5cm。 口 13.5cm。	溝底直上。	①砂粒、長石粒、雲母細片を含む。 ②赤褐色。	外面 底部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。口縁部横ナデ。

3 奈良時代の遺構と遺物

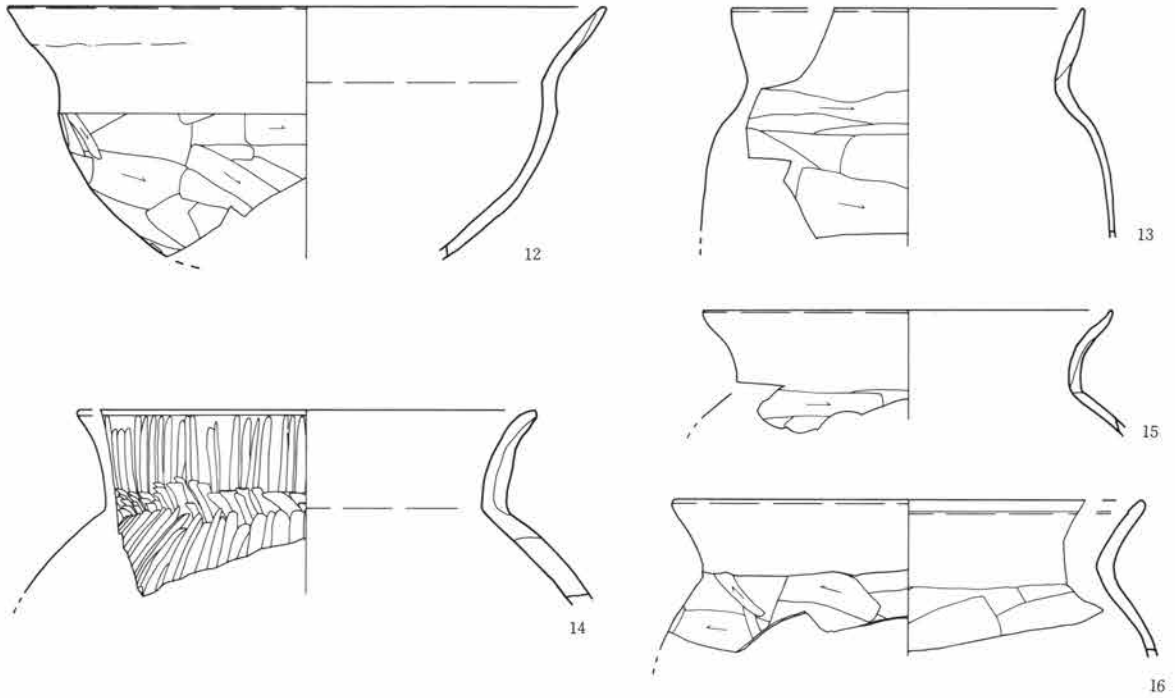
(1号溝)

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
2	杯 (土師器)	3/5残存。 高 3.2cm。 口 13.3cm。	埋土中。	①砂粒、石英少量、 雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 底部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。口縁部横ナデ。
3	土 錘 (土製品)	完形。 器長 4.9cm。 最大 1.9cm。	埋土中。 穿孔 0.5cm。	①細砂、石英、雲母 を含む。 ②橙褐色。	手握ね整形 全面ナデ。
4	土 錘 (土製品)	完形。 器長 4.7cm。 最大 1.6cm。	埋土中。 穿孔 0.3cm。	①細砂、雲母を含む。 ②橙白褐色。	手握ね整形 全面ナデ。両端面もなでられ平らになっている。
5	杯 (土師器)	1/2残存。 高 4.0cm。 口 13.0cm。	埋土中。	①細砂、雲母を含む。 緻密。 ②橙褐色。	外面 杯部篋削り後、周縁篋磨き。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
6	杯 (須恵器)	ほぼ1/2残存。 高 3.1cm。 口 13.4cm。	埋土中。 底 7.1cm。	①細砂、長石を含む。 ②青灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 外面 杯部回転によるナデ。
7	杯 (須恵器)	口縁部1/2欠損。 高 3.5cm。 口 14.6cm。	埋土中。	①細砂、雲母、長石、 石英を含む。 ②灰褐色。底部黒斑。	外面 底部、周縁回転篋削り。 内面 口縁部～杯部ナデ。
8	長頸壺 (須恵器)	胴部～底部残存。 胴最大10.6cm。 底 3.4cm。	埋土中。	①細砂・石を少量含 む。 ②灰白色。	全面ナデ。 肩に自然釉。
9	蓋 (須恵器)	1/4残存。 高 2.6cm。 口 20.1cm。	埋土中。	①砂粒を少量含む。 ②青灰色。	右回転ロクロ成形。付つまみ。 全面、回転によるナデ。
10	高台付椀 (須恵器)	1/2残存。 高台欠損。 口 16.4cm。	埋土中。	①黒色鉍物粒子含 む。 ②灰白色。	右回転ロクロ成形。切り離し技法不明 外面 底部回転篋削り。 内面 口縁～椀部ナデ。
11	長頸壺 (須恵器)	胴部1/4～底部残。 体部最大16.2cm。 底 7.9cm。	遺構外。	①細砂粒、黒色鉍物 粒子を含む。 ②灰白色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。 外面 肩部～胴部中位、回転によるナデ。胴下位 回転篋削り。 内面 ナデ。底部内面、肩部外面に緑色の自然釉 が看られる。
12	鉢 (土師器)	底部欠損。 口 24.2cm。 頸 20.2cm。	埋土中	細砂、少量の長石、 雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 胴部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
13	甕 (土師器)	口縁～胴部中位1/4 残存。 口 (14.4cm) 頸 12.8cm。	埋土中。	①細砂、長石を含む。 ②橙褐色。	外面 胴部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
14	壺 (土師器)	口縁部1/4残存。 口 (18.6cm) 頸 (16.2cm)	埋土中。	①砂粒を含む。 ②橙白褐色。	外面 口縁部横ナデ後、口縁部～肩部に縦方向の 篋磨き。 内面 口縁部横ナデ。胴部ナデ。
15	甕 (土師器)	口縁部1/5残存。 口 (21.8cm) 頸 (18.4cm)	埋土中。	①細砂多量に含む。 ②橙褐色。	外面 胴部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部篋ナデ。口縁部横ナデ。

III 検出された遺構と遺物

(1号溝)

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
16	甕 (土師器)	口縁～肩部¼残。	埋土中。	①細砂、石英を含む。 ②橙褐色。	外面 胴部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篋削り。口縁部横ナデ。



第201図 1号溝出土遺物(2) (12~14・15・16-¼)

4. 平安時代の遺構と遺物

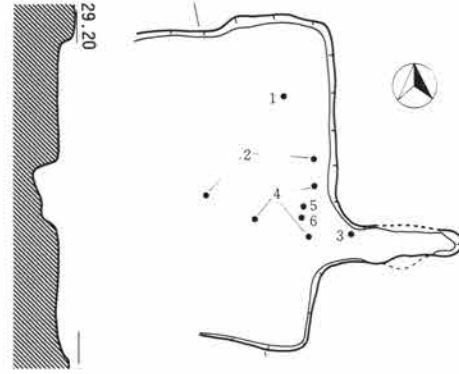
1号住居址 ▶出土遺物P.251・第241図

本住居址は、本調査区域の北端に位置している。これより北には各時代とも遺構はほとんど認められず、また、平安時代のものに限っても、南西7mに3号住居址が位置する以外は周囲に全くない。

主軸をほぼ東西にとり、東壁の中心より40cm南に扁してカマドを付設している。住居址の位置する付近では、後世の削平により、西へむけ地山面が下がる状態であり、そのため住居址よ西半分は今はない東壁よりでの南北幅3.4mを有するが、東西幅については明らかでない。

カマドは比較的残存状態がよく、平面的には、ほぼ全体を残している。焚口部での幅50cm、奥行140cmを有し、全体的によく焼けている。

出土遺物は、土器で、そのほとんどがカマド焚口部およびその前面に集中している。焚口部のものは脚付甕形土器を主としており、煮沸用に使われていたものがそのままおし潰されたかのようなものである。



第202図 1号住居址実測図

6・7・13号住居址 ▶出土遺物P.256・第244図

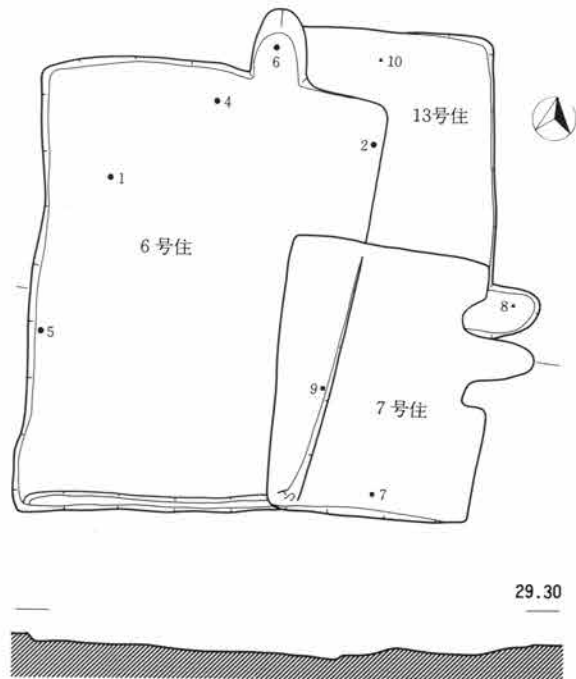
3軒の住居址の重複するものである。遺構の大半が削平されてしまっており、わずかに5cm内外の壁高を有するのみの残存状況である。したがって、個々の住居址の範囲についても不確定な部分もある。かろうじて確定する切り合い関係からすると、13号、6号、7号の順に新しくなる。

7号住居址は、主軸をほぼ東西にとり、東壁の中心より1m北に扁してカマドを付設している。南北2.8m、東西2.4mの主軸と直交する方向に長い長方形プランを呈する。

6号住居址は、主軸をほぼ南北にとり、北壁の中央より0.5m東に扁してカマドを付設している南北長4.8m、東西長3.3mと主軸方向に長い長方形プランである。

13号住居址は、7号住居址とほぼ同一の方向で7号住居址の北側に隣接している。6、7号住居址に切られているためその規模は明らかにし難いが、主軸と直交する南北方向に長い長方形プランを呈するものであることはわかる。

3住居址とも、これに伴う遺物はきわめて少ない。



第203図 6・7・13号住居址実測図

III 検出された遺構と遺物

8・9号住居址 ▶出土遺物P.252・第242図

2軒の住居址の重複である。切り合い関係から9号住居址が8号住居址に先行することがわかる

8号住居址は、主軸をほぼ東西にとり、東壁のほぼ中央にカマドを付設している。東西3.2m、南北2.5mと、主軸方向に長い長方形プランを呈する。

カマドは、壁体に薄く白色粘土を用いたもので住居壁面より20cmのわずかな袖部を有している。焚口部での幅48cmで奥行は96cmの部分まで残存している。

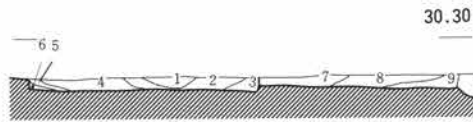
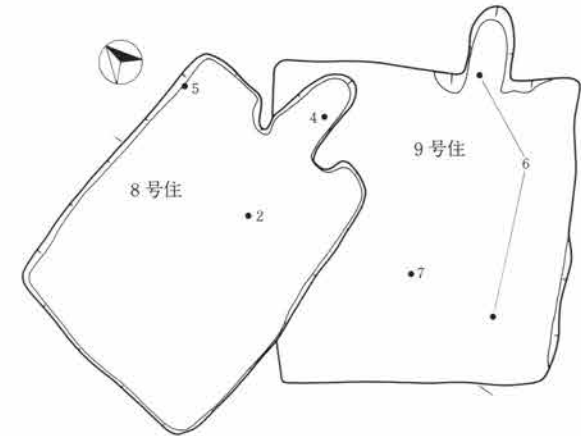
遺物はカマド付近を除くときわめて少ない。カマドの燃焼部には、脚付甕形土器がおしつぶされた状態で出土しており、煮沸に供され、原位置を保つものと推定される。

9号住居址は、主軸が8号住居址とほぼ45度の角度で交わり、北東から西南の方向にとっている主軸の方向に長い長方形プランを呈し、長辺3.4m、短辺3.2mの規模である。

床面は、灰を多量に含むよく踏みしめられたものである。この最終時床面から下へは、3mm前後ごとに、確認し得たもので14枚の踏みしめられた面（それぞれ一定の時点で床面をなしていた）があり、長期にわたって本住居が使用されていたことを物語っている。住居址最終時床面の比較では8号住居址のほうが9号住居址より5cmほど低いのであるが、9号住居址について、当初の段階の床面まで下げると、ほぼ同高の深さであったことがわかる。

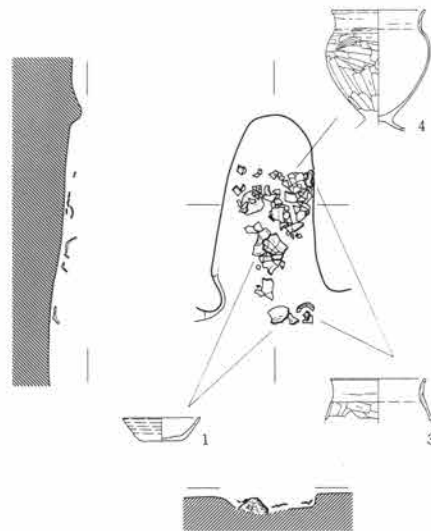
住居址につく遺物は、わずか数片にすぎず、通例比較的多いカマド付近でも、きわめて少ない。本住居の廃絶形態の一端を語るものであるかもしれない。

カマドは、わずかではあるが白色粘土を使用しており、焚口部の灰層の面が幾重にも重なっている。住居址壁面より20cmとわずかにはり出す袖部を有しており、焚口部での幅32cm、奥行は80cmまで残存している。



1. 粒子が細かく、白色軽石を含む黒褐色土。
2. 鉄分の凝集や炭化物粒を含む黒褐色土。
3. 淡黒褐色土。
4. 白色粘土粒を多量に含む黒褐色土。
5. 鉄分凝集が顕著にみられる灰黒褐色土。
6. 4にほぼ同質。
7. しまりのある黒褐色土。
8. しまりがあり、白色軽石を多量に含む黒褐色土。
9. 灰褐色土。

第204図 8・9号住居址実測図



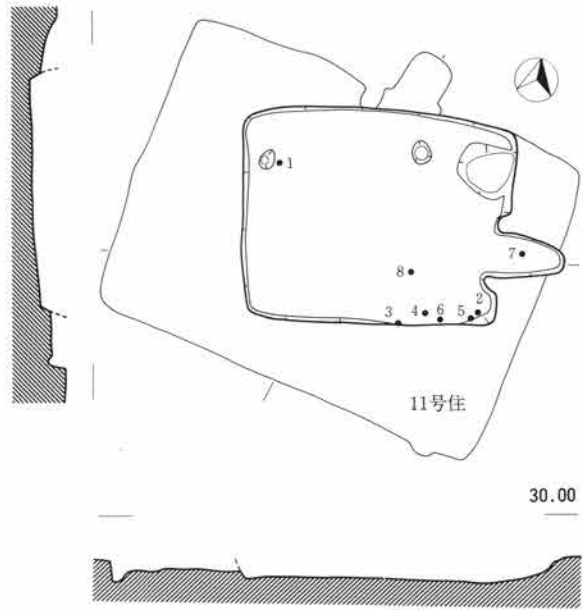
第205図 8号住居址カマド遺物出土状態図

10号住居址 ▶出土遺物P.255・第243図

平安時代の住居分布の中心よりに位置している
 時期的に先行する11号住居址内にすっぽり入る状
 態で重複している。壁高30cmを有し、遺存状況は
 良好である。平安時代の住居址の中では比較的小
 規模である。主軸をほぼ東西とし、東西2.85m、南
 北2.25mの規模を有し、主軸方向に長い長方形プ
 ランを呈している。

カマドは、東壁の中心から20cm南に扁して付設
 されている。住居壁から10cmほど張り出す袖を設
 けている。燃烧部が壁外にくる形態で、焚口部で
 幅40cm、奥行85cmを測る、焚口部から40cm奥より
 中心部には、脚付甕形土器を到立させて設置させ
 ている。カマド支脚として使用されていたものと思
 われる。

出土遺物は、直接住居に伴なうと思われるもの
 が、比較的多く出土している。カマド右脇付近を
 中心に集中する傾向がある。



第206図 10号住居址実測図

29号住居址 ▶出土遺物P.258・第245図

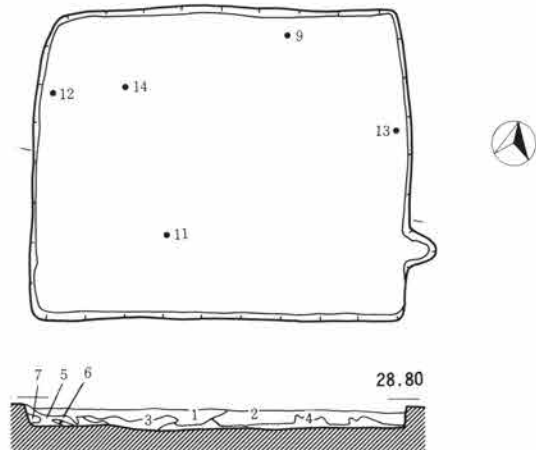
平安時代の住居分布の南端よりに位置している
 南側には34号住居址が、北側には30号住居址が隣
 接する。壁高20cmを有し、遺存状況は比較的よい

主軸をほぼ東西とし、東西4.1m、南北3.3mの規
 模を有し、主軸方向に長い長方形プランである

カマドは東壁の中心より90cm南に扁した住居東
 南隅に近接して付設されている。長期間にわたっ
 て使用されていないためか、燃烧部はあまり焼け
 ておらず、カマド周辺への灰の広がりもあまり認
 められない。

住居址中心部分の床下には、2×1.2mほどの範
 囲で、北面を約20cm掘り下げ、土を入れかえて床
 としている。

出土遺物は少ないが、住居に直接伴なうと思わ
 れるものには、須恵器類の割合の多い点が注意さ
 れた。出土位置は、きわめて散在的であり、意図
 的な住居廃棄により廃絶したものと思われる。



1. 焼土粒、白色軽石粒を比較的多く含む黒褐色土。
2. 黄褐色粘質土粒をわずかに含む黒褐色土。
3. 焼土粒等挟雑物をほとんど含まない黒色土。
4. 黄褐色粘質土粒を比較的多く含む褐色土。
5. 焼土粒、黄褐色粘質土粒、炭化物を多量に含む褐色土。
6. 炭化層。カマド崩落層
7. 黄褐色粘質土ブロック。

第207図 29号住居址実測図

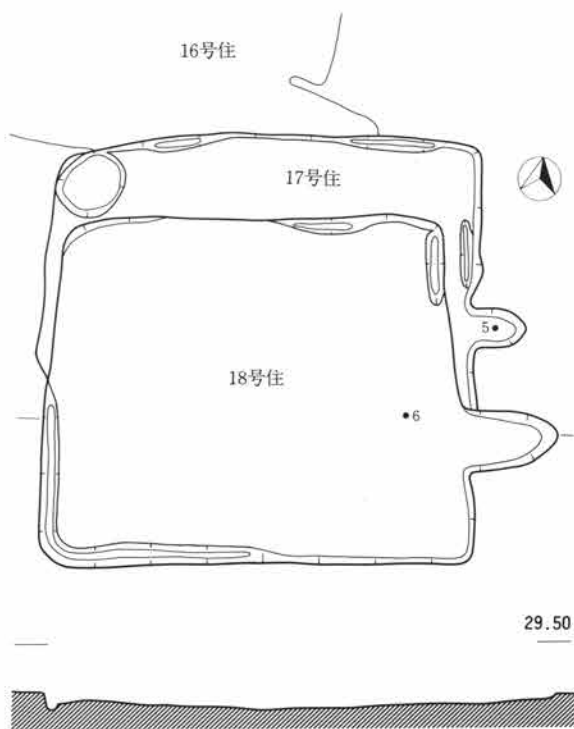
III 検出された遺構と遺物

17・18号住居址 ▶出土遺物P.253・第242図

時期的に近接すると思われる2つの住居址の重複である。切り合い関係から17号住居址が18号住居址に先行することがわかる。

17号住居址は、主軸をほぼ東西にとり、東西4.5m、南北2.75m以上の東西に長い長方形プランを呈している。東壁の中心より南に扁してカマドを付設している。燃烧部が壁外にくるものである。

住居址南西隅に径70cm、深さ住居址床面より15cmの円形土壇が確認されている。同時存在か否かを調査の不備から明らかにできなかったが、所在位置等からすると本住居の施設とも考えられる。土壇底面より手のひら大の安山岩割石が5石出土している。住居に伴なわないものであれば、中近世の墓址等の可能性も考えられる。出土遺物は、大半を18号住居址に切られているため、きわめて少ない。



第208図 17・18号住居址実測図

18号住居址は、17号住居址とほぼ同形、同大であり、主軸方向もほぼ同一である。東西約4.6m、南北3.6mの規模を有している。住居床面レベルは、17号住居址と同じである。カマドは、東壁の中心より45cm南に扁して付設されている。本住居址は、17号住居址をそのまま南へ平行移動させたようであり、連続する時期の建て替えの可能性が強い。

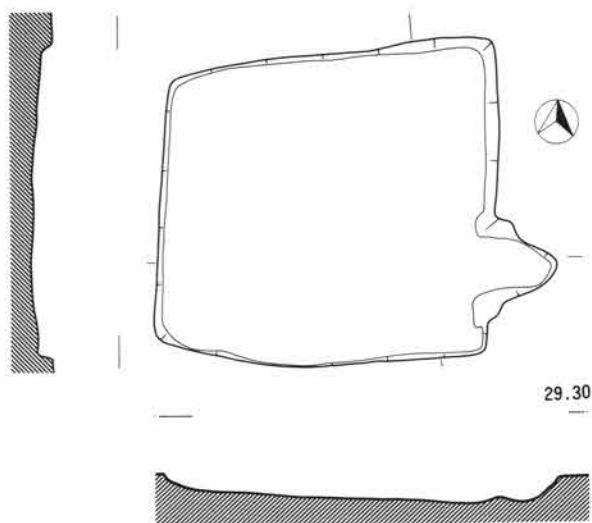
30号住居址

平安時代の住居分布の南端よりに位置する。南側に29号住居址、西側に32号住居址が隣接する。壁高15cm前後を残す。さほど遺存状況の悪いものではないが、出土遺物が全く認められず、明確な時期決定は困難である。占地および住居形態から平安時代のものと考えられる。主軸をほぼ東西とし、東西3.6m、南北3.3mの主軸方向に長い長方形プランである。

カマドは東壁の中心より75cm南に扁した住居東南隅に近接した位置に付設されている。白色粘土を比較的少量に使用して構築している。燃烧部が壁外となり、焚口部で幅65cm、奥行80cmを測る。焚口部前は径65cm、深さ20cmの円形ピットを掘り土を入れかえて床面としている。

南壁沿いのカマドよりの部分も、地山面を掘り下げて土を入れかえて貼床としている。

出土遺物は全く認められず、住居の意図的な廃棄を契機として、廃絶したものと推せられる。



第209図 30号住居址実測図

32号住居址 ▶出土遺物P.260・第246図

平安時代の住居分布の南北の南よりに位置する。本住居址の住居掘込面に近いレベルで、時期的に後出する28号住居址が重複している。壁高40cmを有しほぼ旧状に近い遺存状態を示している。

主軸をほぼ東西とし、東西3.2m、南北4.2mの規模を有し、南北に長い長方形プランを呈する。

本住居の場合、北壁と東壁の2ヶ所にカマドが確認された。カマド燃焼部からかき出された灰層の上下関係により、北壁カマドが東壁カマドに先行することが明らかとなっている。

北壁カマドは、北壁の中心より70cm東に扁して付設されている。燃焼部は壁外に位置し、焚口部で幅50cm、奥行80cmを測り、その先に幅30cm、奥行60cmの煙道がとりつく。カマド床面下は、地山面を20～30cm掘り込み、土を入れかえている。

東壁カマドは、東壁の中心より80cm南に扁して付設されている。燃焼部が壁外に位置するもので焚口部で幅50cm、奥行70cmを測る。焚口部分を中心に、カマド床面下は、地山面を25cm前後掘り込み、土を入れかえて床としている。

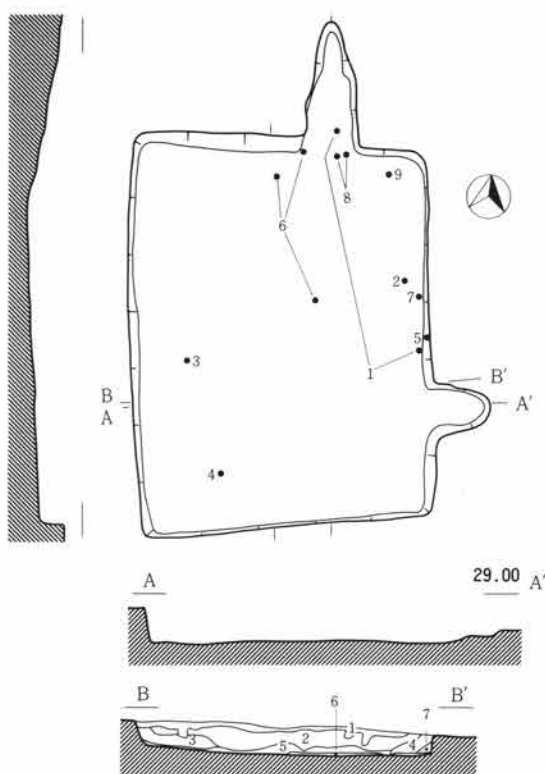
出土遺物は北壁カマド周辺および東壁カマド周辺に集中して認められる。その大半は破片であり住居に伴なう完形の土器はほとんど見られない。

本住居は、当初、北壁にカマドを付設し、南北に長い住居として構築されたものであり、北壁カマド崩壊後、東壁に新たにカマドを付設したものと考えられる。

47号住居址 ▶出土遺物P.266・第250図

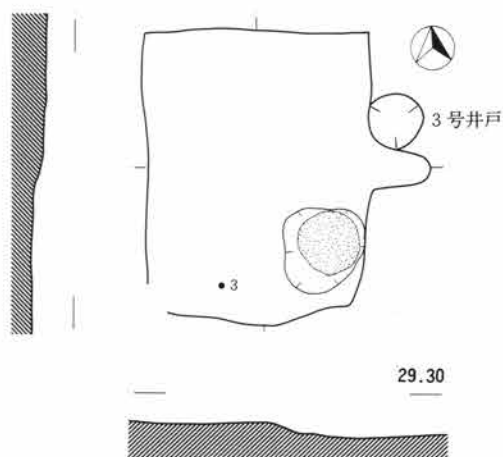
平安時代の住居分布の北よりに位置する小規模な住居である。遺構面までが浅いため、後世の削平が床面にまでおよぶ遺存状況のわるいものである。床面のひろがりから、住居の平面形状をかろうじて確定できた。

主軸をほぼ東西とし、東西2.35m、南北3.1mの規模を有し、主軸と直行する方向に長い長方形プランを呈している。



1. 黄褐色粘質土粒、焼土粒、白色軽石を多く含む黒褐色土。堅くしまっている。
2. 黄褐色粘質土粒、焼土粒、炭化物粒を含む灰褐色土。
3. 黄褐色粘質土ブロック、焼土粒、炭化物粒を含む灰褐色土。
4. 黄褐色粘質土ブロックと、多量の焼土粒・炭化物粒を含む灰褐色土。
5. 黄褐色粘質土粒・ブロックを多く含む黒褐色土。
6. 黄褐色粘質土粒を多く含む灰褐色土。
7. 黄褐色粘質土と黒色土の混土。

第210図 32号住居址実測図



第211図 47号住居址実測図

III 検出された遺構と遺物

カマドは東壁のほぼ中心に付設されており、燃焼部が壁外となるものである。

床下にあたると思われるが、南壁沿いに2ヶ所径約80cmの円形土壇が存する。このうち、住居東南隅に接して確認されたものは、白色粘土を中心とした埋土であり、この部分が住居床面全体の中で、特定の利用空間であったことが窺われる。

出土遺物は、後世の削平が原因していると思われるが、1点の土器の他は全く認められなかった。カマド北側に重複して3号井戸が確認されている。本住居に後出する平安期のもと考えられる。

34号住居址 ▶ 出土遺物P.262・第247図

平安時代の住居分布の南端よりに位置する。北側にはほとんど間をおかず29号住居址が隣接する。壁高20~30cmを残す遺存状況のきわめて良好なものである。

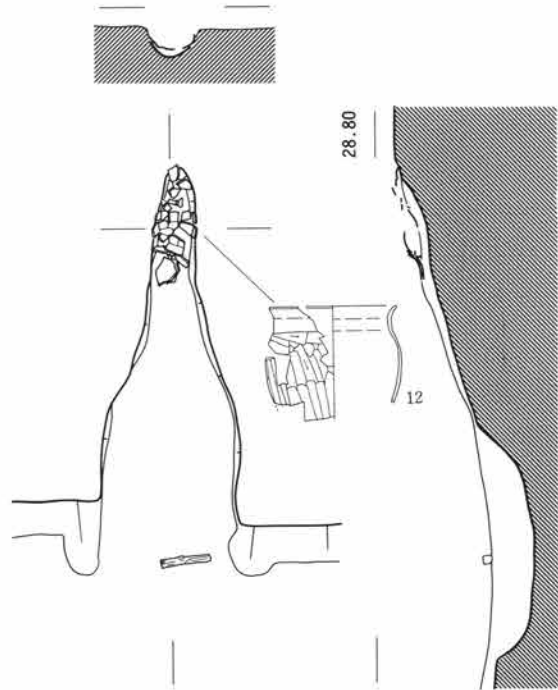
主軸をほぼ東西とし、東西4.2m、南北3.1mの主軸方向に長い長方形プランを呈している。

カマドは東壁の中心より40cm南に扁して付設されている。煙道部分までほぼ残る遺存状況の良さである。白色粘土を使用して構築しており、住居壁から10cmほど張り出す袖を有している。燃焼部が壁外となり、焚口部で幅50cm、奥行95cmを有しその先に長さ70cmの煙道部分がとりつく。煙出し部分はコの字形口縁の甕形土器を底面に接して横置きにしてつくっている。カマド燃焼部の底面下は、90×60cmで深さ15cmの東西に長い長円形ピットを掘り、土を入れかえてカマド床としている。

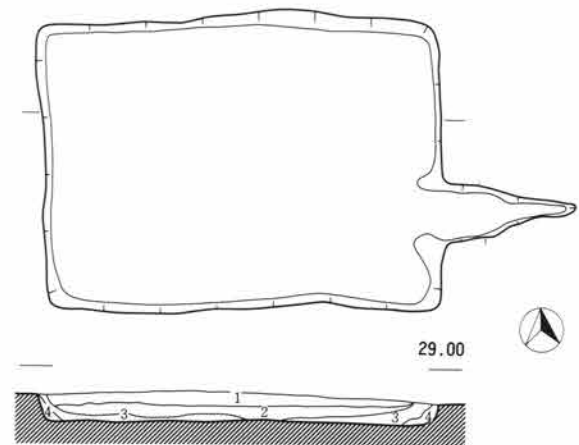
住居床下について見ると、中心部分は地山をそのまま床面とするが、南および西壁よりは10~15cm掘り込み、土を入れかえて床面をつくっている。

住居東南隅に接して貯蔵穴状の土壇が認められ中から土器が2個体分出土しているが、調査の不備から住居使用時点に存在したものか、床下の土壇かを明らかにし得なかった。また、南壁沿いの中央よりには、あるいは入口施設に伴うものかと思われる径20cmの円形ピットが認められる。

出土遺物はきわめて少なく、直接住居に伴うと思われるものは、カマド周辺に確認された少量の破片の



第212図 34号住居址カマド遺物出土状態図



1. 焼土粒・黄褐色粘質土粒・白色軽石を含む黒褐色土。
2. 1より大粒の焼土粒・黄褐色粘質土粒・白色軽石を含む黒色土。
3. 焼土粒・黄褐色粘質土粒を含む黒色土。
4. 黄褐色粘質土粒を3より多く含む黒褐色土。

第213図 34号住居址実測図

みであった。意図的な廃棄により住居が廃絶したものと思われる。

33号住居址 ▶ 出土遺物P.262・第247図

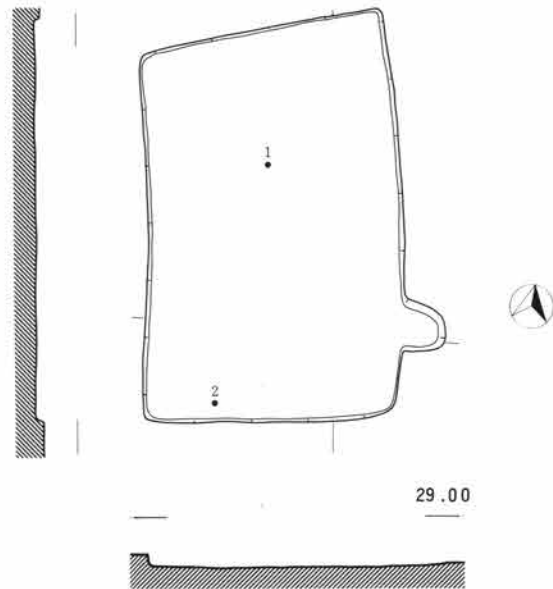
平安時代の住居分布の南端より50mほど北に位置する。西側には隣接して南北走向の1号溝（奈良時代）が位置する。溝をはさんで西側2.5mには同形同大の40号住居址が所在する。遺構の遺存状況はわるく、カマドの位置する東壁よりは床面近くまで削平されている。

主軸をほぼ東西とし、東西2.7m、南北4.1mの規模を有し、主軸と直交する方向に長い長方形プランを呈している。

カマドは、東壁の中心より1.2m南に偏した東南隅に近接した位置に付設されている。底面付近のみの遺存であり、規模・形状等は不明確である。

床面近くまでの削平のためもあってか、出土遺物はわずかである。

住居床下部分には、径0.6~1.1m、深さ10cmほどの大小の土壇が確認されている。機能については明らかにしがたいが、通例の貼床のための掘り込みとは考えられない。



第214図 33号住居址実測図

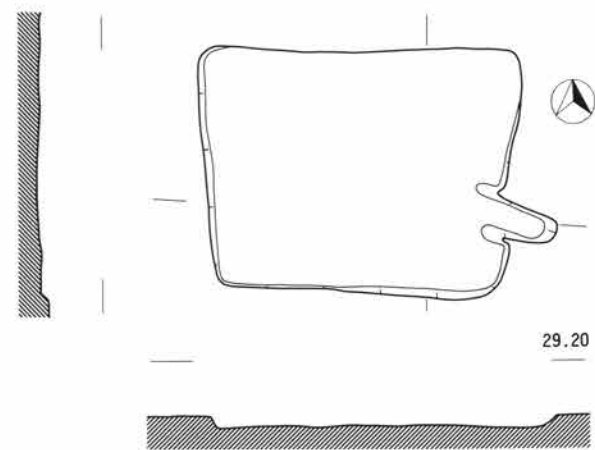
37号住居址

調査区最北端に位置するものである。この付近は、近年の耕作等により攪乱が深く及んでおり、不明瞭な部分も多い。南西側で一部時期的に後出する26号住居址と重複している。

主軸をほぼ東西とし、東西3.2m、南北2.5mの規模を有し、主軸方向に長い長方形プランを呈している。

カマドは東壁の中心より35cm南に偏して付設されている。燃焼部が壁外となるものである。遺存状況がわるいため詳細は不明である。

出土遺物は全く認められないため、時期を限定する資料に乏しいが、平安時代後期に属する26号住居址より古いことと、本遺跡内の平安時代の住居形態に類似することから、平安時代前期のものとしてとらえられる。



第215図 37号住居址実測図

III 検出された遺構と遺物

40号住居址 ▶出土遺物P.264・第249図

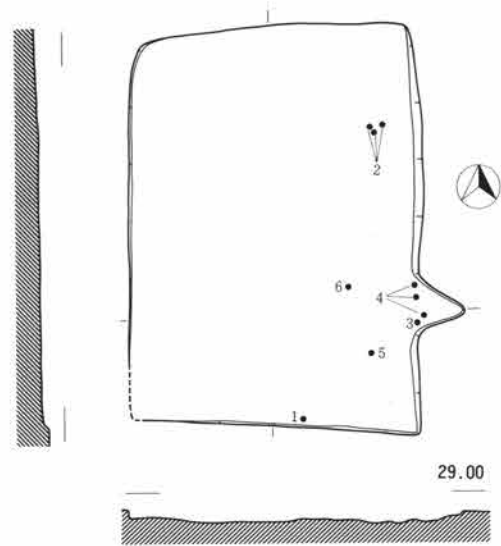
平安時代の住居分布の北よりに位置する。東に33号住居址、北に4号掘立柱建物址が隣接する。壁高は、最もよく残ったところで10cmであり、北西壁はほとんど削平されている。

主軸をほぼ東西とし、東西3.15m、南北4.25mの規模を有し、主軸を直交する方向に長い長方形プランを呈している。

カマドは、東壁の中心より80cm南に扁して付設されている。燃烧部が壁外となるもので、焚口部で幅50cm、奥行55cmを測る。焚口部からは羽釜土器が出土している。

カマドの位置する住居址西よりの床下には、径0.65~1.1m、深20~25cmの円形土壇が掘られ、土を埋めて床としている。また、あるいは入口施設に伴うものかと思われる径10cmの小型ピット2個が南壁ぞいの、中心部よりに確認されている。

出土遺物は、カマドの位置する東壁ぞいを中心に比較的多量に出土している。



第216図 40号住居址実測図

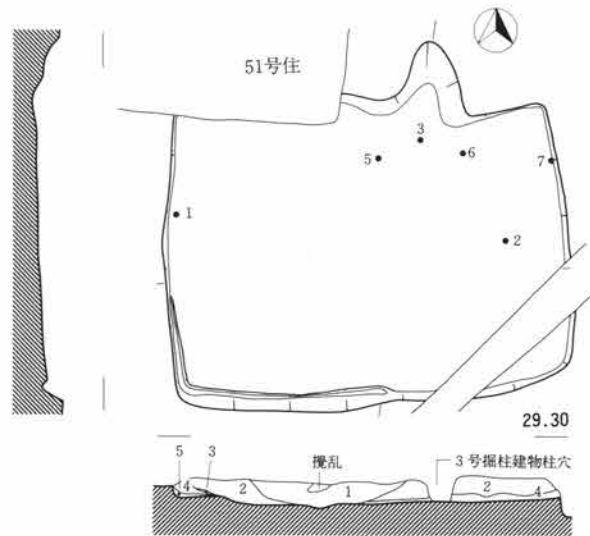
41号住居址 ▶出土遺物P.265・第250図

平安時代の住居分布の南よりに位置するもので、時期的に後出する4号掘立柱建物址、51号住居址と一部重複している。また東側には南北に走る2号溝が隣接している。壁高20cmを有し、遺存状況は良い。

主軸をほぼ南北とし、東西4.3m、南北3.2mの規模を有し、主軸と直交する方向に長い長方形プランを呈している。

カマドは北壁の中心より70cm南に扁して付設されている。本遺跡では、平安時代の住居で北向きカマドの数少ない事例である。燃烧部が壁外にくるもので、焚口部で幅60cm、奥行80cmを測る。カマド床面下は、地山を径1m、深さ25cmほどの円形に掘りくぼめ、土を入れかえて床としている。

住居床下には、中心部で径1.5m、深20cmの円形土壇が掘られ、土をうめて床としている。この周囲にも床下に、掘り込んで埋めもどした中小の土



1. 黄褐色粘質土粒、白色軽石を含む黒色土。水によって流されたような痕跡が認められる。
2. 黄褐色粘質土粒・焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色土。
3. 焼土と灰の層。本住居址埋積途中で、捨てられたものか。
4. 径2mmくらいの黄褐色粘質土粒・焼土粒・炭化物を含む黒褐色土。少量の白色軽石も含む。
5. 黄褐色粘質土ブロックを多量に含む黒褐色土。

第217図 41号住居址実測図

塚が認められる。

出土遺物は少量であり、大半が破片である。散在的な分布であり、直接住居に伴うものは少ない。意図的な住居廃棄により廃絶したものと思われる。

51号住居址 ▶ 出土遺物P.270・第252図

住居東南隅で、時期的に先行する41号住居址と重複している。41号住居址と床面レベルはほとんど変わらない。平安時代では比較的大型の住居址である。また4号掘立柱建物址が東側にほとんど間隔をおかずに隣接している。壁高25cmを有し、遺存状況は良好である。

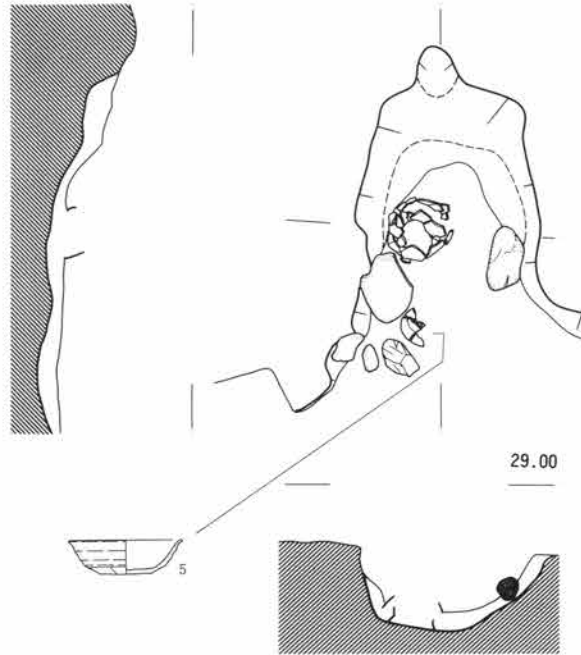
主軸をほぼ東西とし、東西3.8m、南北5.3mの主軸と直交する方向に長い長方形プランを呈している。

カマドは東壁の中心より80cm南に扁して付設されている。住居壁から15cm袖が張り出している。燃烧部は壁外となっており、焚口部で幅80cm、奥行110cmの大型なものである。焚口よりのカマド側壁に扁平な川原石を使用しており、3石が原位置をとどめていた。燃烧部の奥よりには、コの字口縁甕形土器が倒立の状態ですべて床面に設置されている。カマド支脚として使用されていたものであろう。燃烧部は地山面を15cm掘り下げ、土を入れかえて床としている。

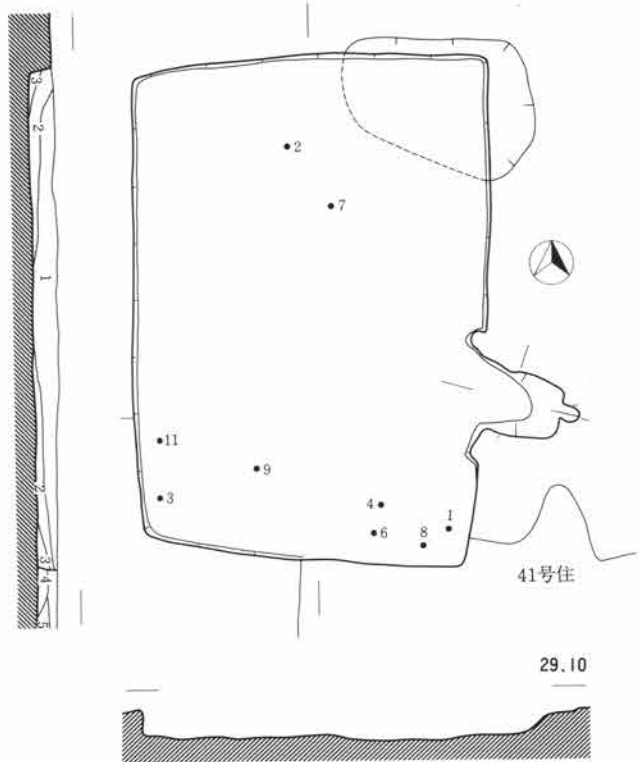
カマド右脇にあたる住居東南隅には70×90cm、深さ50cmの土塚が確認されているが、不定形であり、貯蔵穴であると確定するに至っていない。

住居床面は、大部分は厚さ10cm前後の貼り床である。

出土遺物は比較的多く、直接住居に伴うと思われるものは、破片が大半であり、南壁より、特に東南隅付近に集中する傾向がみられる。



第218図 51号住居址カマド遺物出土状態図



1. 黄褐色粘質土粒・炭化物粒・焼土粒を含む黒褐色土。径2～3mmの白色軽石を混じる。
2. 少量の炭化物粒・焼土粒と、径数cmの黄褐色粘質土ブロックを含む黒褐色土。小粒の白色軽石も混じる。
3. 焼土粒・炭化物粒を少量含む黒色土。
4. 径1cm前後の焼土粒を含む黒褐色土。
5. 少量の黄褐色粘質土粒と白色軽石を含む黒色土。

第219図 51号住居址実測図

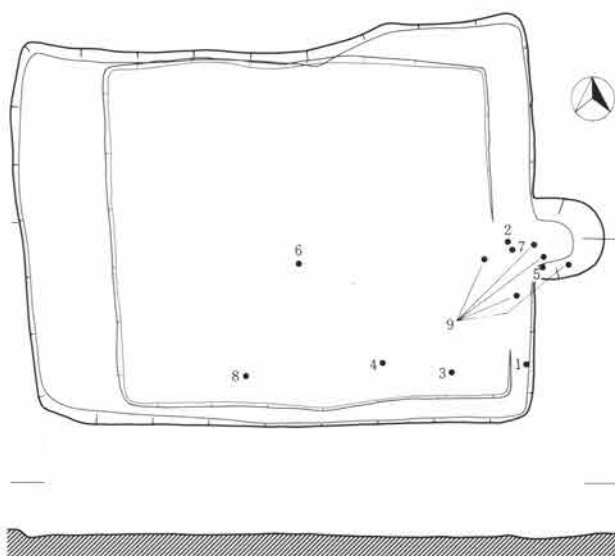
III 検出された遺構と遺物

56・60号住居址 ▶出土遺物P.272・第253図

平安時代の住居分布の南端より北へ60mの地点に位置している。重複する2軒の住居址であるが、先行する60号住居址を主軸方向に一定の幅で拡大したような56号住居址との重複関係であり、建て替えの可能性が高い。東西方向の2号溝が位置するが、両住居址により溝は分断されている。56号住居址は、壁高50cm前後を有し、60号住居址床面は56号住居址床面より5cm前後低い。

60号住居址は、主軸をほぼ東西とし、東西4.1m、南北3.6mの主軸方向に長い長方形プランを呈する。カマドは、東壁の中心より南に扁して付設されていたものと思われるが56号住居址により削平されている。遺物は、小破片が散在的にある程度である。

56号住居址は、主軸を60号住居址と同一の東西としている。主軸を東西とし、東西5.6m、南北4mの主軸方向に長い長方形を呈す。60号住居址を東西で1.5m、南北で40cm拡大したものと思われ、両住居址の各辺はほぼ平行している。カマドは、東壁の中心より20cm南に扁して付設している。燃烧部は壁外に位置し、焚口部で幅50cm、奥行80cmを測る。出土遺物は、遺構の遺存が悪いにもかかわらず豊富であった。出土位置は、カマド付近から南壁沿いの東よりに集中する傾向が顕著である。



第220図 56号住居址実測図

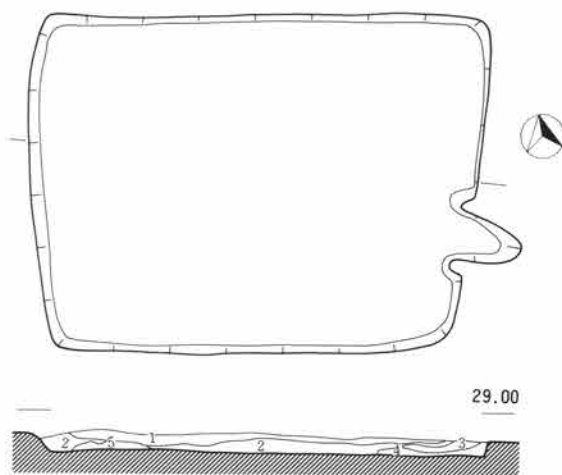
61号住居址

平安時代の住居分布の南北のほぼ中心よりに位置する。北側には、間をほとんどおかず62号住居址が位置している。壁高20cmを有し、遺存状況は比較的よい。主軸をほぼ東西とし、東西4.8m、南北3.6mの規模を有し、主軸方向に長い長方形プランを呈している。

カマドは東壁の中心より70cm南に扁して付設されている。住居壁から20cm張り出す袖を有している。燃烧部は壁外に位置し、焚口部で幅50cm、奥行80cmを測る。燃烧部床面下は、15cmほど掘りくぼめ、土を入れかえて、カマド床面としている。

床下は、住居壁に沿って地山面を幅60cm、深さ20cmの溝状に四周を掘り、土を入れかえて床をつくっている。

出土遺物はきわめて少ない。わずかな破片が住居東南部に出土している。



1. 黄褐色粘質土ブロックを混じる黒褐色土。径5mmくらいの白色軽石を含む。
2. 黄褐色粘質土ブロック・焼土粒を含む黒褐色土。
3. 黄褐色粘質土の粒子を若干含む黒色土。
4. 黒色土を少量混じる黄褐色粘質土。
5. 黄色粘質土ブロック。

第221図 61号住居址実測図

62号住居址

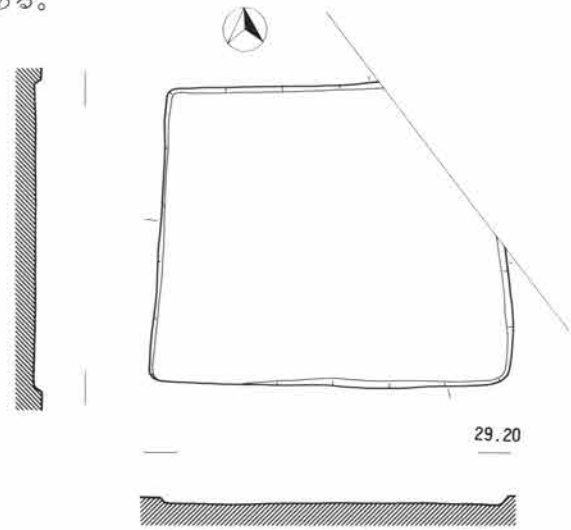
61号住居址の北側に20cmほどの間隔をおいて隣接している。壁高5cm前後であり、遺存状況はあまり良くない。住居址北東部分は調査区域外のため未調査である。

東西3.7m、南北3.15mの規模を有し、東西に長い長方形プランを呈する。

カマドは、調査部分では確認されていない。おそらく、東壁の未調査部分に付設されているものと推される。

出土遺物はきわめて少なく、すべて破片である。直接住居に伴うと思われるものは、全く存しない。

本住居の時期を限定する資料はきわめて乏しいが、住居址形状、床面レベル等からして、平安期の可能性が強い。埋土中の土器片もこのことと矛盾していない。



第222図 62号住居址実測図

63号住居址

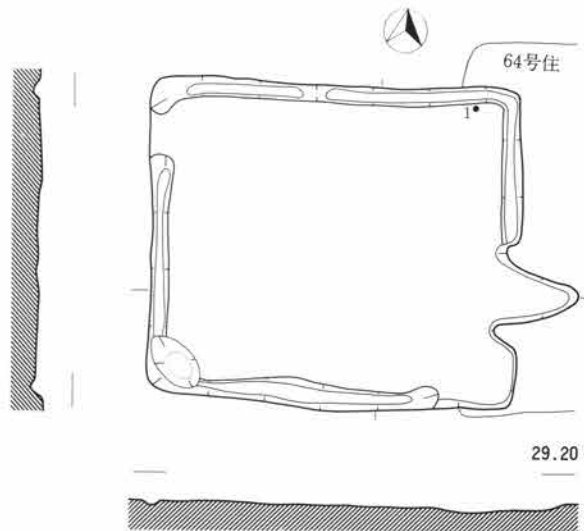
平安時代の住居分布の南北の中心よりに位置している。住居東側で、時期的に先行する64号住居址と一部重複している。壁高5cm以下と遺存状態はわるく、壁周溝により範囲をかるうじて確定できた。

主軸を東西とし、東西4m、南北3.45mの規模を有し、主軸方向に長い長方形プランである。

カマドは東壁の中心より50cm南に扁して付設されている。住居壁から20cm張り出す袖を有し、燃烧部は壁外に位置する。焚口部で幅60cm、奥行90cmの規模である。カマド床面は、地山面を周囲より15cmほど掘り込み、土を入れかえてつくっている。

住居東南隅を除き、全体に壁に沿って幅20cm、深さ8cmの壁周溝が認められる。

出土遺物は、破片が大半であり、カマドから住居南壁よりに集中している。



第223図 63号住居址実測図

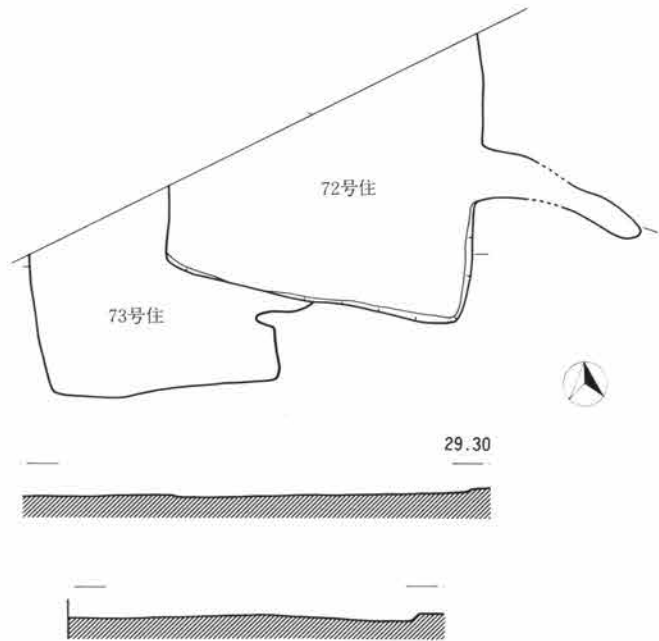
III 検出された遺構と遺物

72・73号住居址 ▶出土遺物P.273・第254図

平安時代の住居分布の南北の中心よりに位置する。後世の削平が著しく、部分的には床面下までおよんでいる。2軒の住居の重複であり、東側に位置し、新しい方が72号住居址、西側に位置し、旧い方が73号住居址である。両住居とも北側部分を、近年まで使用されていた東西に走る用水堀により切り取られている。

72号住居址は主軸を東西からやや南にふれてとり、東西約3.3mで、東壁の中心よりにカマドを有している。燃烧部が壁外に位置するものと思われるが、詳細は不明である。

73号住居址は主軸をほぼ東西とし、東西2.5mの規模である。カマドを東壁の中心よりやや南に扁して付設している。燃烧部が壁外に位置するものであるが、詳細は不明である。



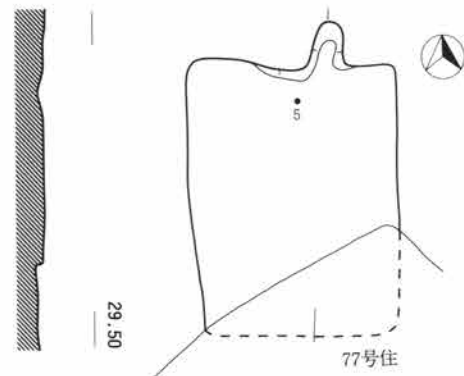
第224図 72・73号住居地実測図

76号住居址 ▶出土遺物P.273・第254図

72、73号住居址の南3mに隣接する。時期的に先行する77号住居址と、南側で重複している。後世の削平が著しく、遺存状況はわるい。本住居の場合焼失家屋と思われ、床面全体に灰および炭化物のひろがり認められ、その範囲からほぼ住居の規模を確定できた。

主軸を南北とし、東西2.2m、南北3mの規模で、南北に長い長方形プランを呈する。

カマドは、北壁の中心より40cm東に扁して付設されている。



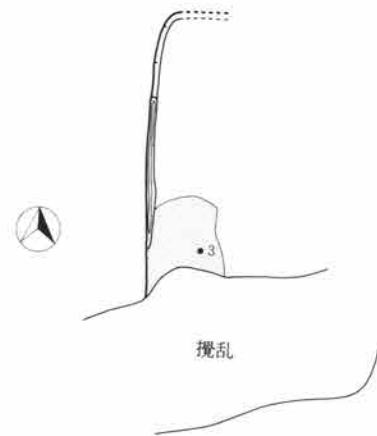
第225図 76号住居址実測図

36号住居址 ▶出土遺物P.263・第248図

調査区南端に位置している。住居床面下まで削平による破壊が到っており、炭化物および部分的な住居壁の遺存からかろうじて住居址の存在を確認できた。

住居壁が残存するのは、西壁部分であり、これより東側部分に、住居床面構築に伴うものと考えられる床面下の掘り込み、土入れかえの痕跡が認められた。このひろがりから強いて推測するならば本住居は、南北方向に長い長方形プランを呈していたものと考えられる。住居規模、カマドの付設位置については不明である。

出土した土器は、かろうじて残る床面上の炭化物のひろがりの中からであり、直接住居に伴うものと考えられる。



第226図 36号住居址実測図

45号住居址 ▶出土遺物P.268・第251図

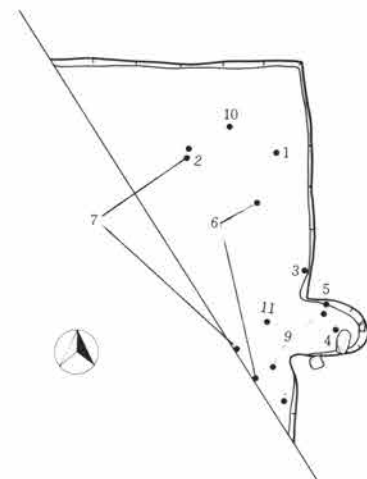
調査区の南よりに位置する。住居址西半分は調査区域外のため未調査である。住居址北側で一部43号住居址（古墳時代）と重複する。

主軸を東西とし、南北約4.2mを有する。住居形状からして、南北に長い長方形プランを呈するものと思われる。

カマドは、東壁の中心より75cm南に扁して付設されている。燃烧部は壁外に位置し、焚口部で幅55cm、奥行80cmを測る。カマド壁に使用されていたと思われる石が確認されており、焚口部両側には、門柱石の抜き跡と思われるピットが確認されている。

出土遺物は杯形土器を中心として比較的多量であり、カマド前床下から出土した平瓦片（白鳳期）が注意される。

住居北側部分床下に1.55×1.9mの長円形で、深さ30cmの大型土壇が確認されている。



第227図 45号住居址実測図

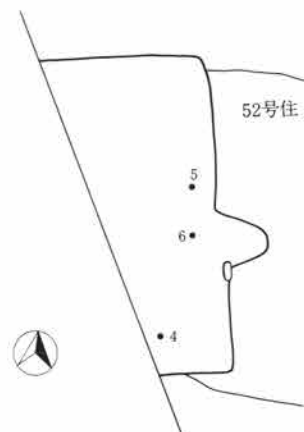
48号住居址 ▶出土遺物P.250・第250図

調査区の南端から約55m北で西よりの遺構密集部分に位置する。時期的に先行する52号住居址と東側で重複する。住居床面近くまで削平されており、遺構の遺存状況は悪い。住居西側部分は調査予定地外のため、東側半分ほどの調査である。

主軸をほぼ東西とし、南北3.4mの規模であり、東西に長い長方形プランを呈するものかと思われる。

カマドは東壁の中心より30cm南に扁して付設されている。燃烧部は壁外に位置し、焚口部で幅46cm、奥行48cmを測る。焚口部右脇には、凝灰岩質の板状の切石を縦位に据え、袖部としている。左脇も同様の造作であったと思われる。

出土遺物は、カマド前および右脇部に集中している。



第228図 48号住居址実測図

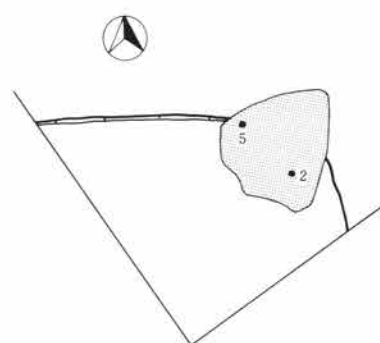
III 検出された遺構と遺物

26号住居址 ▶ 出土遺物P.258・第245図

調査区最南端で確認したものである。遺構の遺存状況はきわめてわるく、後世の削平は大半床面下にまでおよんでいる。住居西側部分は調査区域外のため未調査である。北東側で時期的に先行する37号住居址と重複している。

土のよごれ、炭化物のひろがり等の住居址の痕跡よりするならば住居壁は、ほぼ方位に沿った走向であったことがわかる。

出土遺物は、原位置を保っているものではないが、住居址内のみからの出土であることから、住居址の時期を知る手懸りにはなる。



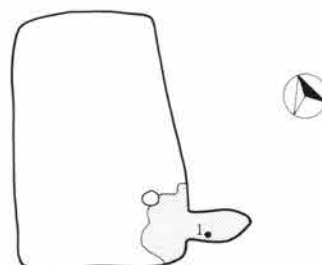
第229図 26号住居址実測図

35号住居址 ▶ 出土遺物P.264・第248図

調査区の南端に位置する。表土をはがした状態ですでに住居床面があらわれ、後世の削平の進み具合を物語っていた。住居壁は全く残存せず、焼土、炭化物、および床面のふみかためられた面の広がりから住居の範囲を確定した。

主軸を東西とし、東西1.75m、南北2.7mときわめて小規模であるカマドは、東壁の南端よりに付設されており、燃烧部は壁外に位置している。焚口部で幅30cm、奥行70cmを測る。

遺物は、カマド内から土釜状の甕が出土しているのみである。



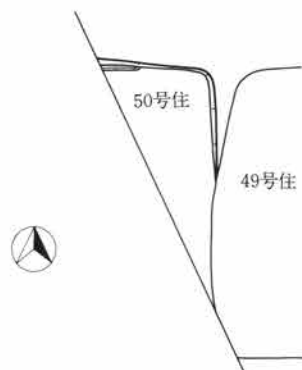
第230図 35号住居址実測図

50号住居址

遺跡地南よりの住居密集部分に位置している。住居西側が調査区域外となっていたため、東よりのきわめて部分的な調査であった。住居址東側では、時期的に先行する49号住居址と重複している。

住居壁は、ほぼ方位に沿った走向を見せるが、北東隅部のみしか検出していないため、住居規模、形状は明らかでない。

カマドは、調査部分では確認されていない。東壁の南に扁した位置に付設されているのであろう。



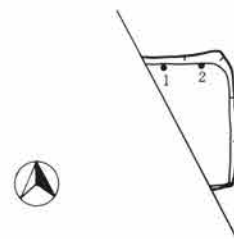
第231図 50号住居址実測図

55号住居址 ▶ 出土遺物P.273・第254図

調査区南よりの住居址密集部分に位置している。仮に住居として遺構番号を付してあるが、規模、形状等からして住居址ではない可能性が高い。西側部分は調査区域外のため未調査である。

東壁沿いで長さ1.4mときわめて小規模の方形あるいは長方形の竪穴状を呈する。

現時点では、集落に伴う屋外の貯蔵等の特別な施設ではなかったかと考えている。



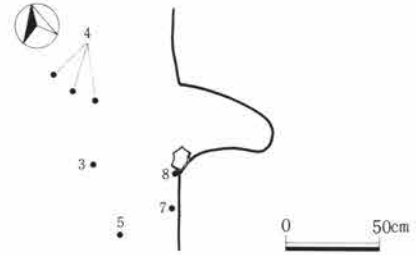
第232図 55号住居址実測図

28号住居址 ▶ 出土遺物P.258・第245図

時期的に先行する32号住居址の埋土上面を床面として重複するものである。住居址のカマド部分のみの遺存であり、このカマドも底面に近い部分である。

カマドの遺存状態から、住居址は、主軸をほぼ東西にとり、東壁にカマドが設置されていたものと推せられた。

カマド付近に、少量ではあるがまとまって羽釜、杯形土器等が出土している。

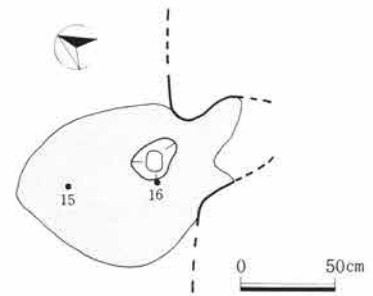


第233図 28号住居址実測図

31号住居址 ▶ 出土遺物P.258・第245図

カマド部分の灰および焼土の残存から、住居址のカマド周辺がかろうじて知り得たものである。調査地の南よりに位置し、本住居と同様の遺構状態である38号住居址が北側に、28号住居址が東側に隣接している。

焼土の幾分厚い部分がカマドの燃焼部の中心部と考えられる。この部分より西側に縁釉高台付椀、羽釜等が確認されていることから主軸を東西とし、東壁にカマドが位置していたと考えている。

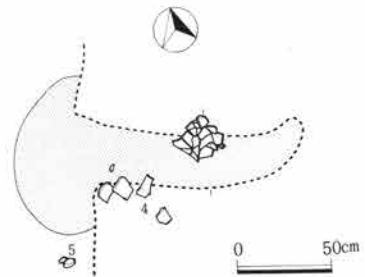


第234図 31号住居址実測図

38号住居址 ▶ 出土遺物P.264・第248図

遺跡地南よりに位置し、南側に31号住居址、北側に40号住居址が隣接している。焼土、炭化物の面の一定のひろがりから、住居址のカマド付近を中心とした部分がかろうじて残存したものである。それゆえ、遺構の遺存状況はきわめて悪い。

焼土、炭化物のひろがり、および住居に伴うと思われる遺物の出土状況からすると、ほぼ主軸を東西とし、東壁にカマドが付設されていたものと推される。カマド燃焼部から、羽釜、甕形土器等の破片が確認されている。



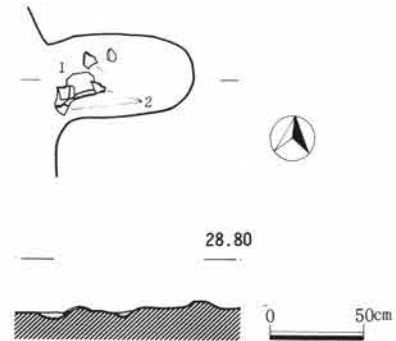
第235図 38号住居址実測図

44号住居址 ▶ 出土遺物P.266・第250図

調査地南よりに位置し、時期的に先行する45号住居址と重複している。住居址の大半が調査区域外となっていたため、カマド部分を中心とした一部の調査であった。住居床面近くまで削平がおよんでおり、遺存状況は悪い。

主軸をほぼ東西とするが、規模、形状については不明である。

カマドは、東壁に位置する。燃焼部は壁外に位置し、焚口部で幅40cm、奥行75cmを測る。燃焼部焚口より、煮沸用に使用したものと思われる羽釜土器がつぶれた状態で出土している。



第236図 44号住居址実測図

III 検出された遺構と遺物

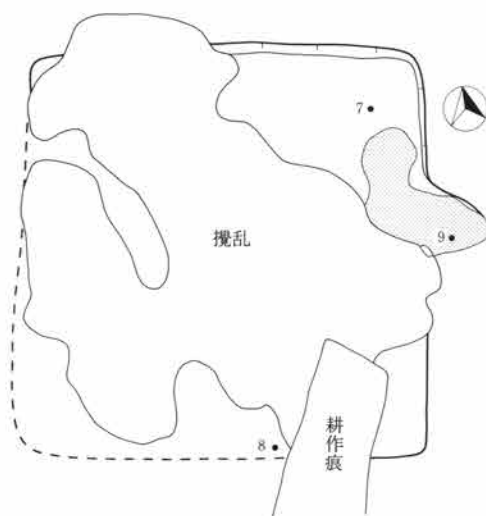
3号住居址 ▶ 出土遺物P.251・第241図

平安期の住居分布の最北端に位置する。北東7mに1号住居址が隣接する。この二つの住居址を除くと、周辺にはまったく住居址がなく、南60mの1、2号掘立が最も近い。

遺構の遺存状況はきわめてわるく、大部分は後世の破壊が床面下まで達していた。かろうじて残る床部分および、床造作のための床面下の掘り込みのひろがりから、かろうじて住居址の範囲を確定できた。

主軸をほぼ東西とし、東西4.3m、南北4.4mの規模と推定された。

カマドは焼土の遺存から東壁の中心よりに位置したことがわかるが、規模、形状等は明らかにできなかった。



第237図 3号住居址実測図

19・57・83号住居址 ▶ 出土遺物P.253・273、第242・第254図

これら3軒の住居址は、遺構の遺存状況がきわめてわるく、不明な点も多いのであるが、焼土、炭化物および土器等の遺物の分布状況から、住居址であることは誤りないと思われる。

各住居址とも、遺構確認面から住居址床面までがきわめて浅く、この点では、平安後期に位置づけられる他の住居址の深さに共通している。

19号住居は、17、18号住居の西側に隣接しており、カマド付近のみの遺存である。

57号住居は、56号住居の東5mに位置し、7号溝の東側に接している。カマド付近を中心として灰のひろがり認められる。

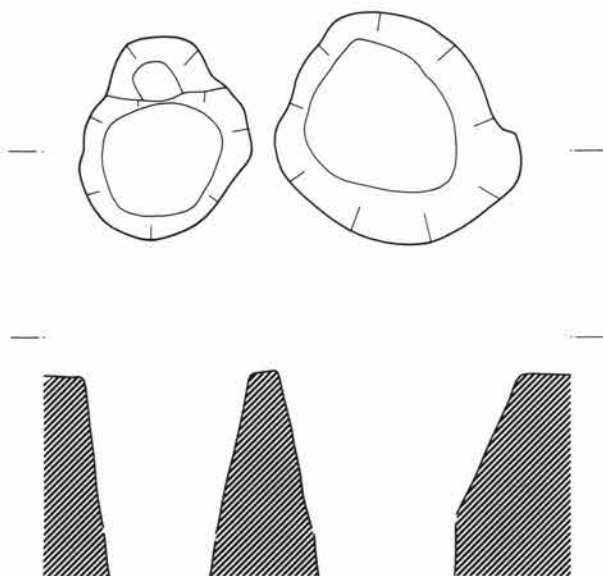
83号住居は、82号住居の南側に隣接している。

1・2号井戸

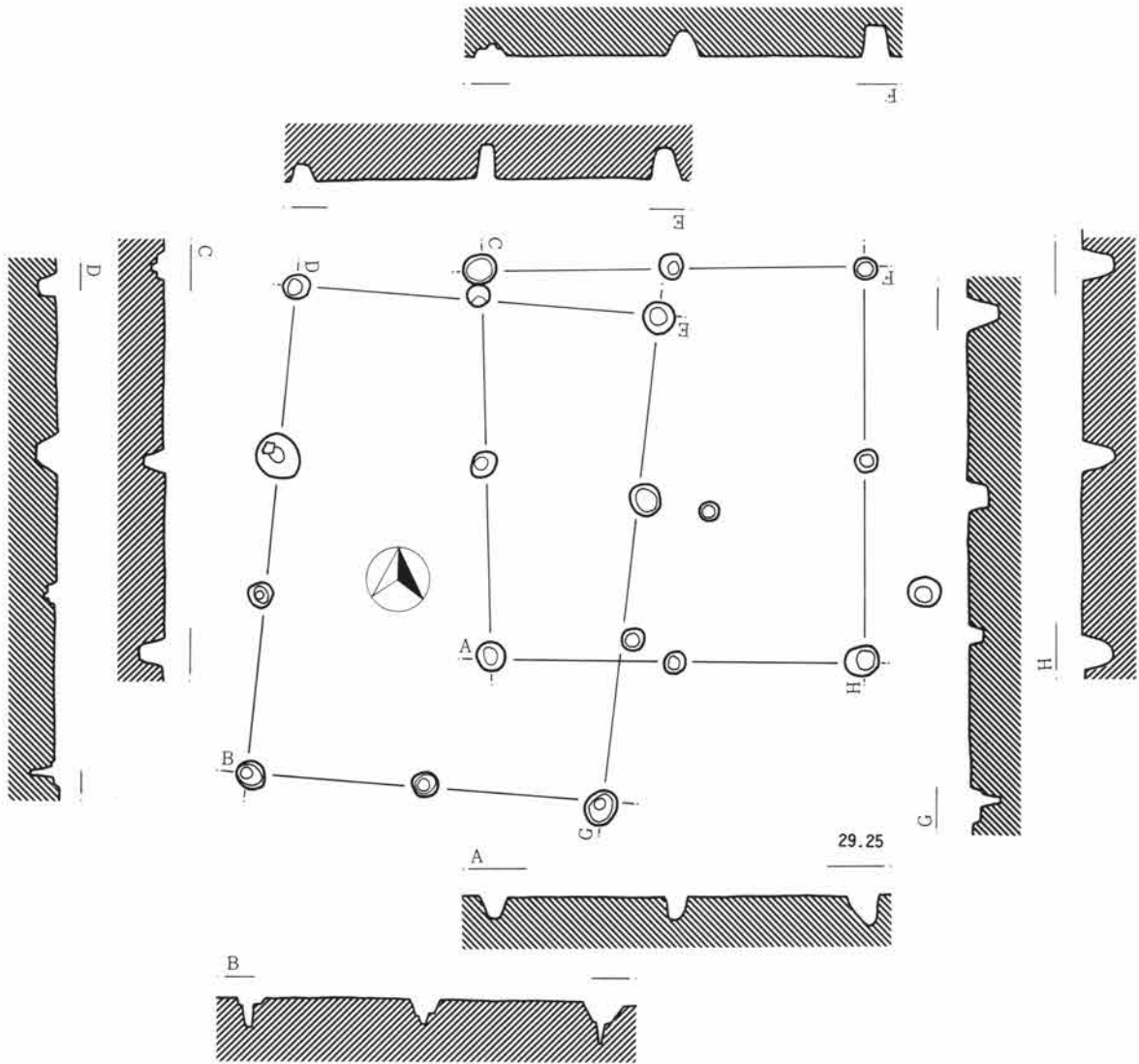
調査地北よりの1、2号掘立の北西7mに位置し、東西に隣接する2基の井戸址である。西側が1号井戸、東側が2号井戸である。

1号井戸は、一辺上端で70cm、下端で50cm、2号井戸は、一辺上端で90cm、下端で70cmの不整の隅丸方形プランを呈する。両者とも、深さ80cmのところまではすりばち状を呈し、それより下は垂直である。深さ2mのところまで調査したが、それより下は激しい湧水のため未調査である。

井戸の形状、周辺の遺構等からして、1、2号掘立、6、7、13号住居と近接した平安期のものと考えられる。



第238図 1・2号井戸実測図



第239図 1・2号掘立柱建物址実測図

1・2号掘立柱建物

重複する2棟の掘立柱建物である。2間3間の南北棟が1号掘立、2間2間のものが2号掘立である。遺跡地北よりの遺構の密度の薄い部分に位置し、周囲には平安期の住居は見あたらない。南8mに6、7、13号住居が、南23mに8、9号住居が近接している。柱穴相互の切りあいはなく、また出土遺物を見られないため、2棟の新旧関係は明らかにしがたいが、きわめて近接した時期的関係が予想される。

1号掘立は主軸を $N4^{\circ}E$ とする南北棟の2間3間の建物である。東西13尺、南北17.5尺の規模と推定される。柱穴は、径35cm前後の円形の掘り方内に、径10cmの柱痕が確認されている。

2号掘立は、2間2間の方形プランを呈する建物で $N2^{\circ}E$ の軸線をとる。東西、南北とも14尺の規模と推定される。

3号掘立柱建物

遺跡調査地の南よりに位置し、時期的に先行する2号溝、41号住居と重複している。41号住居は平安前期に位置づけられることから、少なくともそれ以降の時期である。

III 検出された遺構と遺物

主軸をN5°Eとする南北棟の2間3間の建物である。東西14尺、南北24.5尺の規模と推定される。柱穴の状況から少なくとも2度の建て替えが予測される。

1号掘立柱間寸法

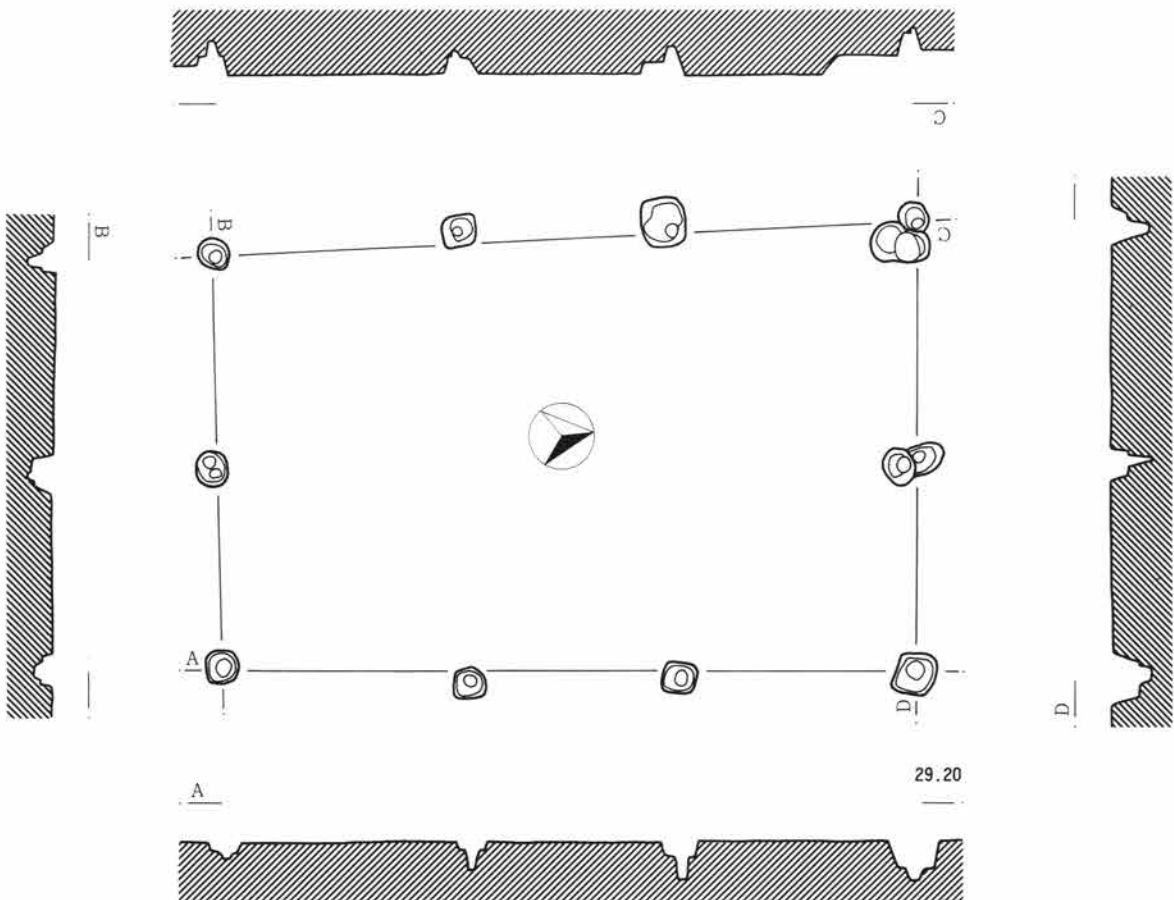
柱穴番号	計測値 (cm)	復元尺
1-2	180	6
2-3	153	5
3-4	197	6.5
4-5	192	6.5
5-6	205	6.5
6-7	183	6
7-8	157	5
8-9	192	6.5
9-10	193	6.5
10-1	190	6.5

2号掘立柱間寸法

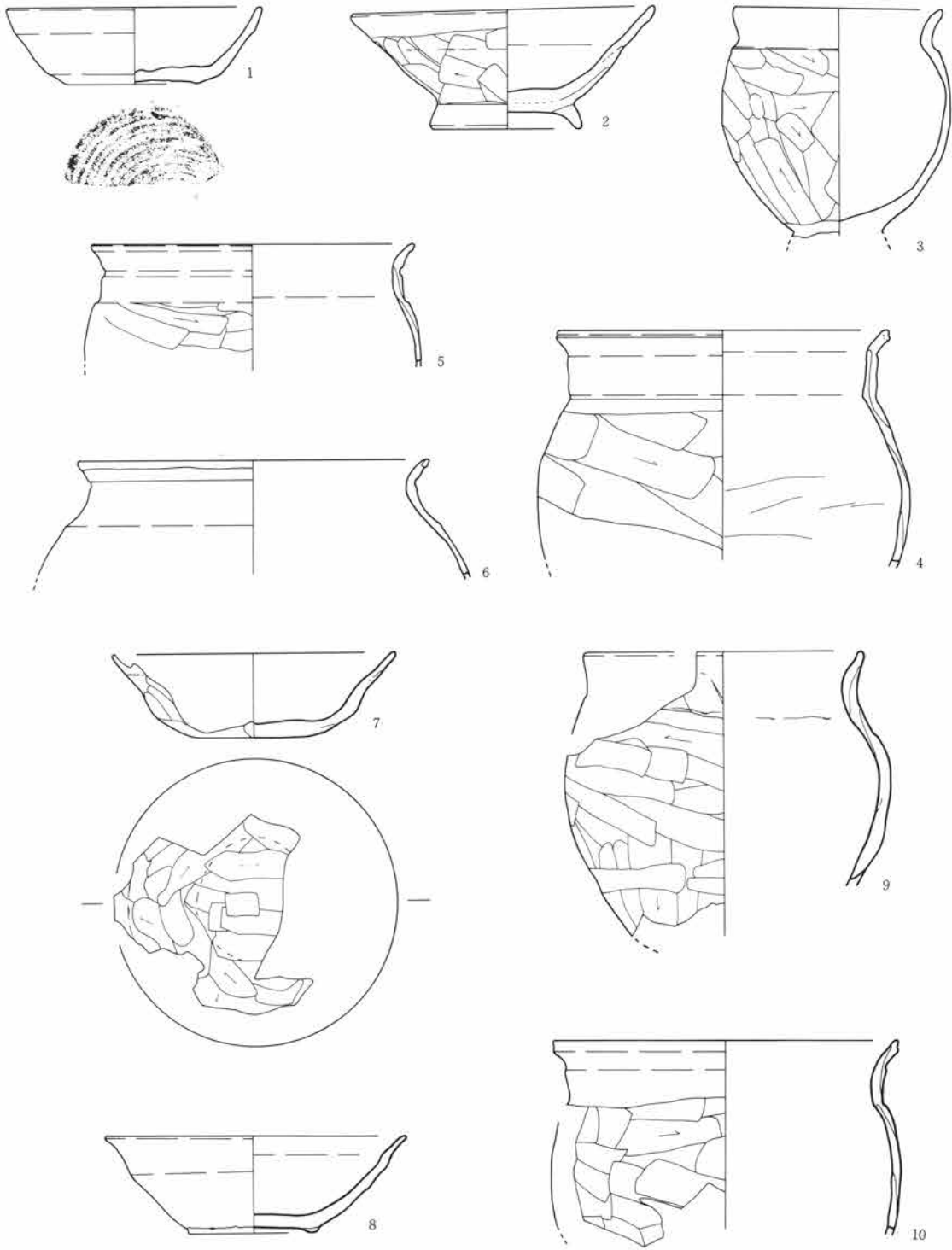
柱穴番号	計測値 (cm)	復元尺
11-12	213	7
12-13	211	7
13-14	212	7
14-15	207	7
15-16	210	7
16-17	209	7
17-18	205	7
18-11	208	7

3号掘立柱間寸法

柱穴番号	計測値 (cm)	復元尺
1-2	264	9
2-3	223	7.5
3-4	245	8
4-5	220	7
5-6	220	7
6-7	255	8.5
7-8	225	7.5
8-9	260	8.5
9-10	218	7
10-1	211	7



第240図 3号掘立柱建物址実測図



1号住居址出土遺物 (1~3、4~6-¼)
 第241図 3号住居址出土遺物 (7・8、9・10-¼)

III 検出された遺構と遺物

1号住居址出土遺物観察表 (第241図・PL87) ▶本文P.233・第202図

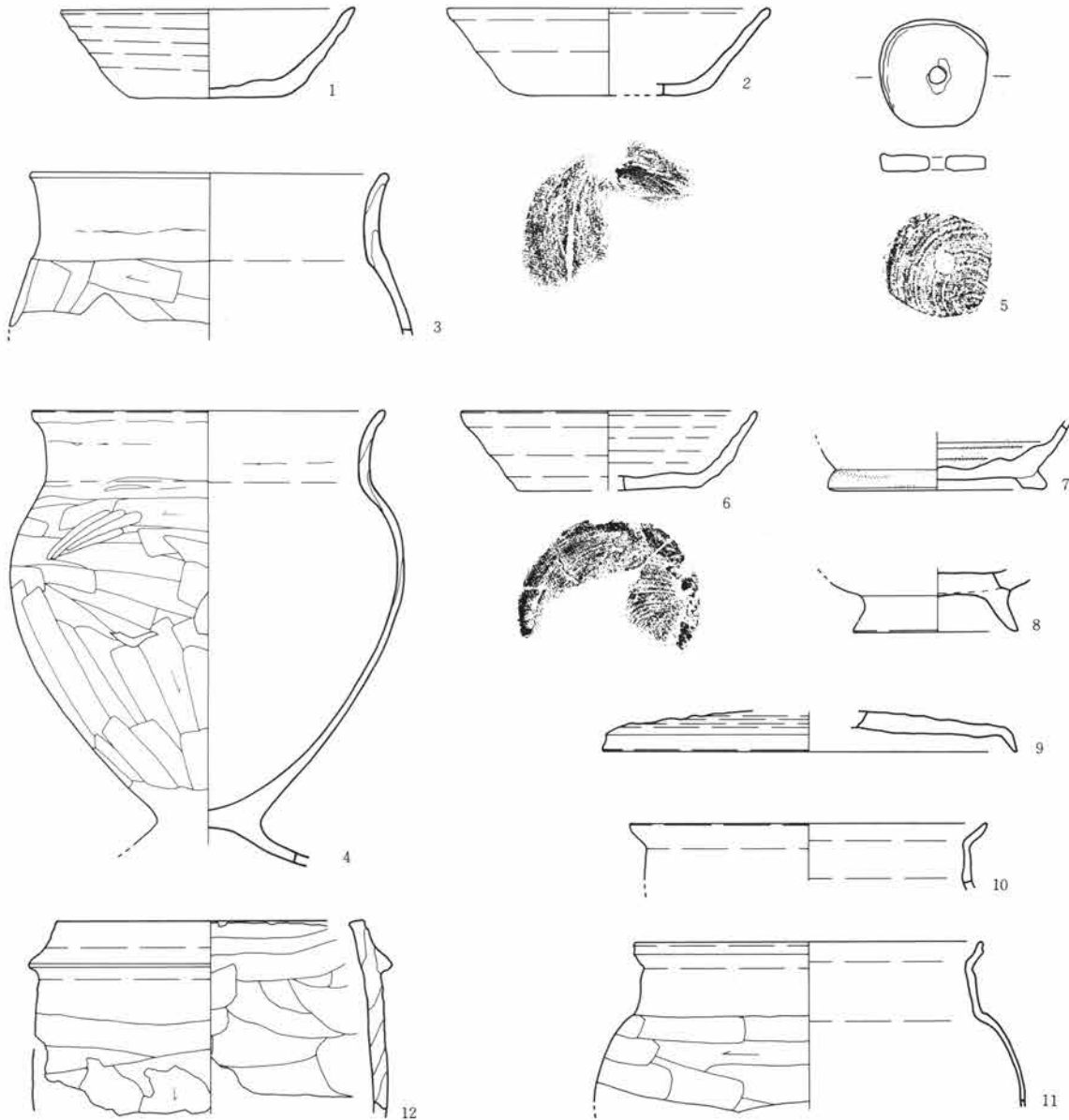
No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯 (須恵器)	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 残。 高 3.6cm。 口 (14.0cm)	床面上 5 cm。 底 (6.3cm)	①微細粒を含む。 ②灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 口縁部回転によるナデ。
2	高台付椀 (土師器)	口縁～上部 $\frac{1}{2}$ 残。 高 5.2cm。 口 14.3cm。	床面上 5 cm。 底 7.2cm。	①砂粒、雲母を含む。 ②灰橙褐色。	付高台。 外面 椀部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 椀部ナデ。口縁部横ナデ。
3	台付小型甕 (土師器)	上部欠損。 口 9.8cm。	カマドに到 置。 支脚。	①細砂を多く含む。 ②灰褐色。	外面 胴部上半縦篋削り。下半斜篋削り。口縁部 から頸部、丁寧な横ナデ。
4	甕 (土師器)	口縁～胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 (20.2cm)	床面直上。 頸 (18.4cm)	①砂粒を多く含む。 ②灰褐色。黒斑。	外面 胴部斜方向篋削り。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
5	甕 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残。 口 (15.5cm) 頸 (14.3cm)	床面直上。	①細砂を多く含む。 ②橙褐色。黒斑。	外面 肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 肩部ナデ。口縁部横ナデ。
6	甕 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残。 口 (11.0cm)	床面直上。	①細砂、石英粒含む。 ②灰褐色。	外面 胴部篋ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部篋ナデ。口縁部横ナデ。

3号住居址出土遺物観察表 (第241図・PL87) ▶本文P.248・第237図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
7	杯 (土師器)	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 残。 高 3.9cm。 口 (13.4cm)	柱穴中。 底 (4.8cm)	①砂粒、雲母粒混入。 ①灰褐色。	外面 杯部三段に分けて横方向篋削り。底部篋削 り。口縁部横ナデ。 内面 口縁部横ナデ。
8	杯 (須恵器)	口縁～杯部 $\frac{1}{2}$ 欠。 高 4.5cm。 口 7.3cm。	床面直上。 底 3.2cm。	①砂粒を多く含む。 石英粒も少量含む。 ②灰色。	右回転ロクロ成形。付高台 外面 底部ナデ。
9	甕 (土師器)	口縁～胴部下位 $\frac{1}{4}$ 欠損。口縁部一部 欠損。 口 13.0cm。	カマド燃焼 部。 頸 12.6cm。 胴最大15.2 cm。	①細砂を含む。φ 5 mmの粒も稀に含む。 ②赤褐色。	外面 胴部下半縦方向篋削り。部分的に横方向ナ デ。上半横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。
10	甕 (土師器)	口縁～胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 (21.6cm)	埋土中。 頸 (20.0cm)	①細砂を多量に含 む。 ②灰褐色。肩部は黒。	外面 胴部上半横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。

8号住居址出土遺物観察表 (第242図・PL87) ▶本文P.234・第204図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯 (須恵器)	ほぼ完形。 高 3.8cm。 口 12.8cm。	カマド前。 底 6.6cm。	①砂粒、多く含む。 ②灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 口縁部回転によるナデ。
2	杯 (須恵器)	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 欠。 高 3.7cm。 口 13.8cm。	床面直上。 底 7.0cm。	①砂粒を混じる。 ②灰色。底部一部に 褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 口縁部回転によるナデ。



8号住居址出土遺物 (1、2、5、3・4-¼)
 9号住居址出土遺物 (6、7)
 14号住居址出土遺物 (8、9)
 17号住居址出土遺物 (10-¼)
 18号住居址出土遺物 (11-¼)
 第242図 19号住居址出土遺物 (12-¼)

(8号住居址)

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
3	甕 (土師器)	口縁～肩部½残。 口 (15.4cm) 頸 (14.4cm)	カマド燃焼部。	①細砂粒含む。 ②赤褐色。	外面 肩部横方向篋削り。 内面 肩部ナデ。口縁部横ナデ。

III 検出された遺構と遺物

(8号住居址)

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
4	台付甕 (土師器)	口縁～胴部下位 ¼、台部欠損。 口 15.2cm。 頸 14.0cm。 胴最大 16.9cm。	カマド燃焼部。	①細砂多量に含む。 ②黒褐色。	外面 胴部上半横方向篋削り。一部篋磨き。下半縦方向篋削り。台部接合部ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部、台部ナデ。口縁部横ナデ。
5	紡輪 (土製品)	完形。 厚 0.5cm。 径 4.5cm。	壁際。	①砂粒を多く含む。 ②灰色。 白色鉱物粒子混入	須恵器杯の底部を再利用。(材の須恵器は右回転ロクロ成形。回転糸切り) 穿孔は、杯内面であった方からとみられる。

9号住居址出土遺物観察表 (第242図・PL87) ▶本文P.234・第204図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯 (須恵器)	¼欠損。 高 3.4cm。 口 12.7cm。	床面上2cm。 底 7.9cm。	①細砂粒多量に含む。 ②灰茶褐色と蓋灰色との斑。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 回転によるナデ。
2	長頸壺 (須恵器)	底部残存。 底 9.3cm。	床面上8cm。	①細砂少量含む。 緻密。 ②黒灰色。	右回転ロクロ成形。付高台。 外面 口縁部、底部回転によるナデ。 内面 底部半分、高台の一部に自然釉

14号住居址出土遺物観察表 (第242図) ▶本文P.213・第181図

*註 (P.274)

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
3	高台付椀 (須恵器)	底部～台部¼残。	埋土中。	①砂粒、石英粒含む。 ②灰褐色。	右回転ロクロ成形。付高台。 高台の接合部回転によるナデ。
4	蓋 (須恵器)	¼残存。 口 (17.7cm)	床面上2cm。 炭化材上。	①細砂、細かい雲母混入。	右回転ロクロ成形。 全面、回転によるナデ。

17号住居址出土遺物観察表 (第242図) ▶本文P.236・第208図

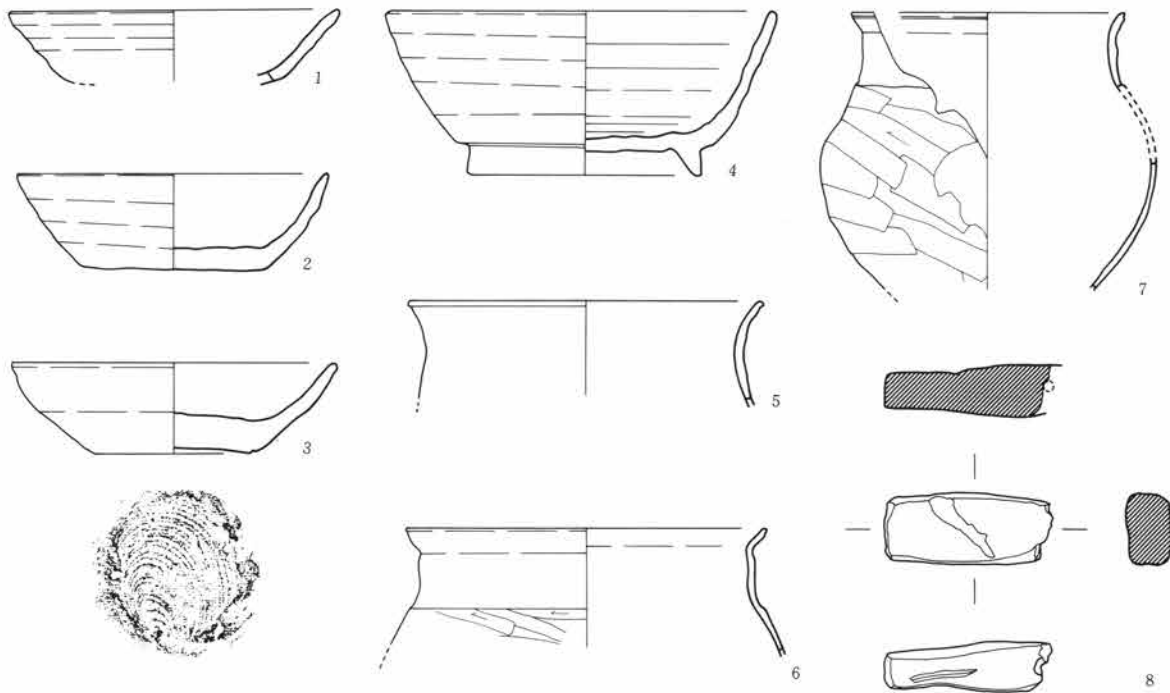
No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
5	甕 (土師器)	口縁部破片。 口径 (20.6cm)	カマド燃焼部。 床面上直上。	①細砂、雲母、長石を含む。②茶褐色。	外面 頸部ナデ。口縁部横ナデ。 内面 頸部ナデ。口縁部横ナデ。

18号住居址出土遺物観察表 (第242図・PL88) ▶本文P.236・第208図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
6	甕 (土師器)	口縁～肩部¼残。 口径 20.0cm。 頸部 19.0cm。	床面直上。	①細砂、石英、長石、雲母を多量に含む。 ②茶褐色。	外面 肩部横方向篋削り。頸部ナデ。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。

19号住居址出土遺物観察表 (第242図) ▶本文P.248

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
7	羽釜 (*)	口縁～胴上¼残。 口 (17.6cm)	床面直上。	①φ7.8mm砂粒と長石を含む。②赤褐色。	外面 胴部上半横方向荒いナデ。下半縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 横方向篋削り。口縁部横ナデ。

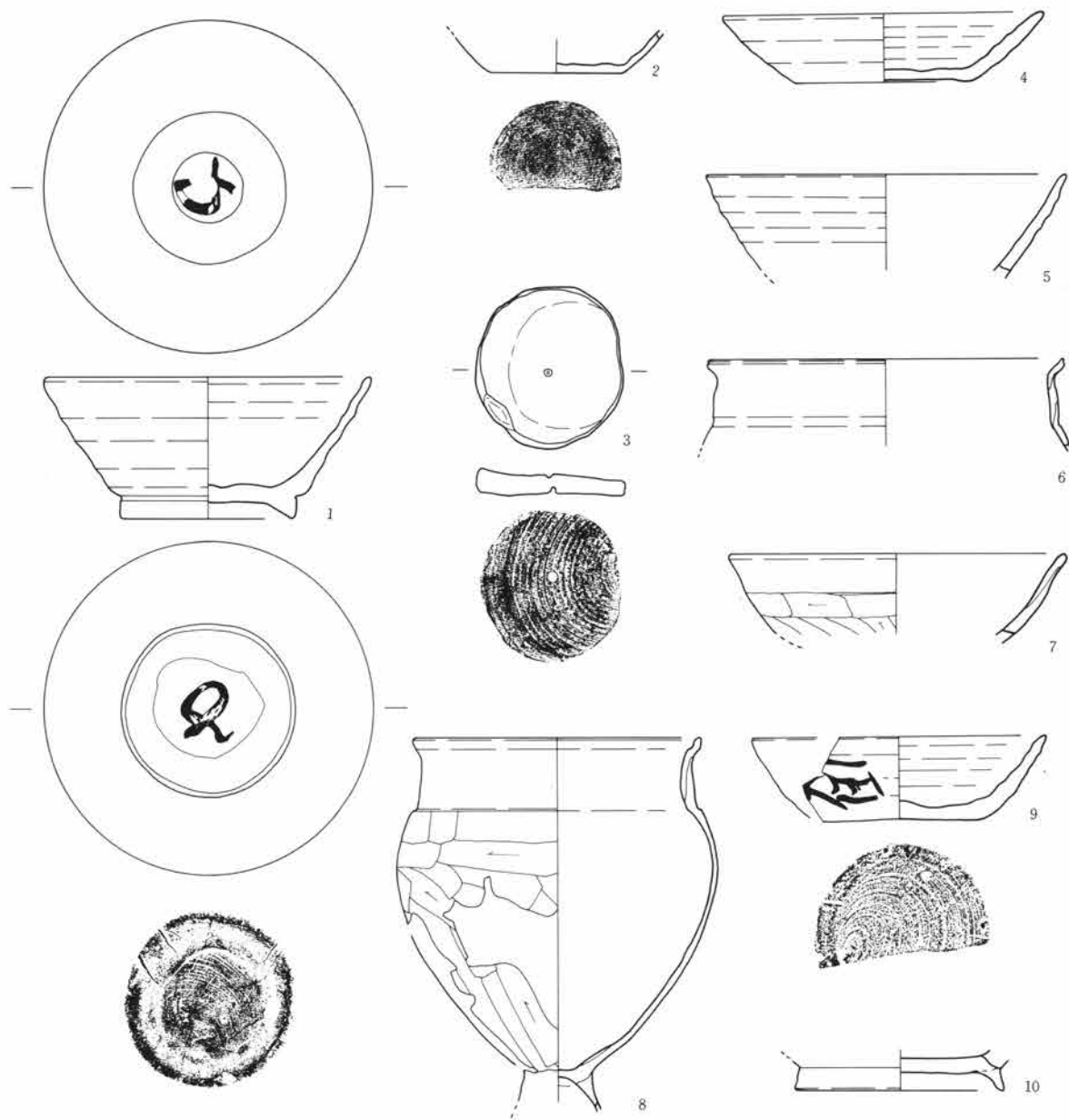


第243図 10号住居址出土遺物（5～7-¼）

10号住居址出土遺物観察表（第243図・PL87）▶本文P.235・第206図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯（須恵器）	口縁～杯下¼残。 口 13.4cm	壁際。 床面上5cm。	①細砂、細長石粒を含む。②灰色。	右回転ロクロ成形。 口縁部回転によるナデ。
2	杯（須恵器）	ほぼ完形。 高 3.8cm。 口 12.6cm。	隅 床面直上。 底 7.5cm。	⑤砂粒を混じる。 ②灰白色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 口縁部回転によるナデ。
3	杯（須恵器）	完形。 高 3.7cm。 口 13.0cm。	壁際 床面上10cm。 底 6.3cm。	①砂粒を混じる。 ②青灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 口縁部回転によるナデ。
4	高台付椀 （須恵器）	椀部¼欠損。 高 6.4cm。 口 16.4cm。	6の甕の下。 床面直上。 底 5.8cm。	①ごく極細砂を多く含む。雲母粒も少量含む。②灰色。	右回転ロクロ成形。切り離し技法不明。付高台口縁部及び高台の接合部、回転によるナデ。
5	甕（土師器）	口縁部¼残。 口 19.3cm	埋土中。	①細砂、雲母を含む。 ②茶褐色。黒斑。	外面 横ナデ。口唇部は丸く肥厚し、大きく外湾している。 内面 横ナデ。
6	甕（土師器）	口縁～肩部¼残。 口 12.9cm。 頸 17.6cm。	4の椀の上 のった状態 で出土した。	①細砂、雲母を含む。 ②赤褐色。	外面 肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 肩部ナデ。口縁部横ナデ。
7	台付甕（土師器）	口縁～胴部¼残。 底部、台部欠損。 口 14.7cm。	カマド燃焼 部。 頸 13.6cm。 胴 17.7cm。	①細砂、問量の細かい雲母を含む。②黒褐色。	外面 胴部斜方向篋削り。口縁部横ナデ。口唇部凹線がある。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
8	砥石（石製品）	一端欠損。	床面直上。		

III 検出された遺構と遺物



6号住居址出土遺物 (1・3~5、6-1/4)

7号住居址出土遺物 (7・9)

第244図 13号住居址出土遺物 (2・8・10)

6号住居址出土遺物観察表 (第244図・PL87) ▶本文P.233・第203図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	高台付椀 (須恵器)	口縁～椀部 $\frac{1}{2}$ 欠損 高 6.2cm。 口 14.5cm。	床面直上。	①砂粒を混じる。 ②灰色。	右回転ロクロ成形。付高台。 内外面とも回転ナデ。 底部の内外両面に「子」の墨書がある。
3	紡輪 (須恵器)	完形。 径 6.0cm。 厚 0.8cm。	床面直上。	①砂粒を混じる。 ②灰色。	回転糸切り離し後周縁回転篋削りの杯形土器底部を転用。両面からの穹孔が合致しておらず、紡輪としては未完成である。
4	杯 (須恵器)	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 残存 高 3.0cm。 口 (13.4cm) 底 (6.8cm)	カマド前。 床面直上。	①少量の砂粒を含む ②灰色。	右回転ロクロ成形。切り離し技法不明。切り離した後、底部篋削り。
5	椀 (須恵器)	$\frac{1}{2}$ 残存。 高 4.2cm。 口 (16.0cm)	壁際。	①砂粒を混じる。 ②灰色	右回転ロクロ成形
6	甕 (土師器)	口縁部破片。 口 (20.8cm)	カマド燃焼部	①細砂・雲母細粒を含む。 ②茶褐色。	内外面とも口縁部横ナデ。

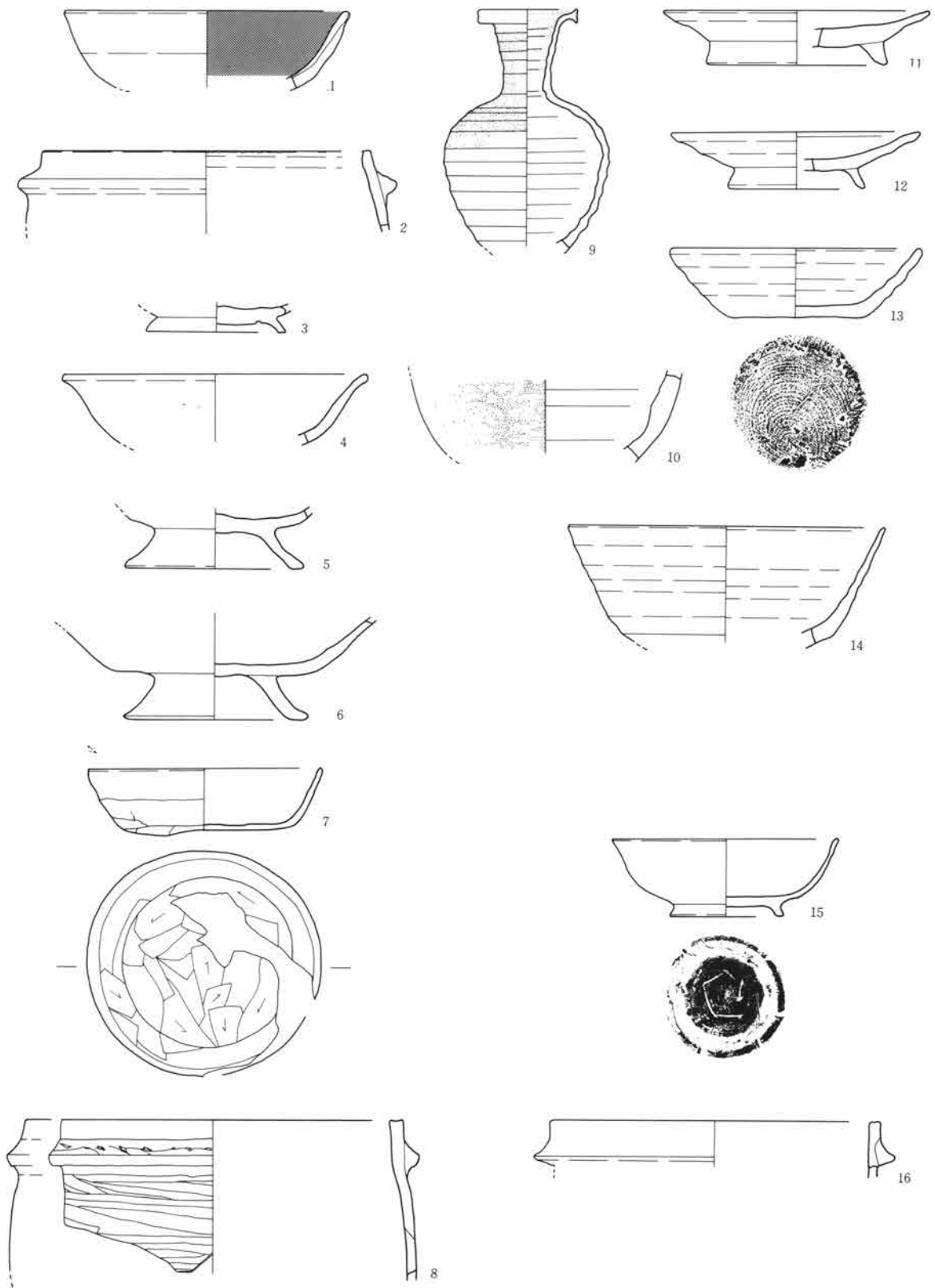
7号住居址出土遺物観察表 (第244図・PL87) ▶本文P.233・第203図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
7	椀 (土師器)	口縁部破片。 口 (14.0cm)	壁際。	①砂粒を少量含む。 ②赤褐色。	外面 椀部縦方向篋削り後上半横方向篋削り。 口縁部横ナデ。 内面 //
9	杯 (須恵器)	$\frac{1}{2}$ 残存。 高 3.7cm。 口 13.0cm。 底 7.0cm。	ほぼ床面直上。	①細粒を混じる。 ②灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。 内外面ナデ。 椀部外面に「大田(?)」の墨書がある。

13号住居址出土遺物観察表 (第244図・PL87) ▶本文P.233・第203図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
2	椀 (須恵器)	底部 $\frac{1}{2}$ 残存。 底 6.0cm。	ほぼ床面直上。	①緻密な胎土である ②黒灰色～赤灰色。	右回転ロクロ成形。 外面 底部回転篋削り。 内面 ナデ。
8	台付甕 (土師器)	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 残存。 台部欠損。 口 (11.6cm) 胴 (13.0cm)	カマド燃焼部。	①細砂を混じている ②赤褐色。	外面 胴部下半縦方向篋削り。上半ナメ方向篋削り。肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向ナデ。口縁部横ナデ。
10	高台付椀 (須恵器)	高台部のみ残存。 底 9.2cm。	埋土中。	①細砂・石英粒を含む。 ②茶褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し後回転篋削り。 付高台。

III 検出された遺構と遺物



26号住居址出土遺物 (1・2-¼)
 28号住居址出土遺物 (3~7・8-¼)
 29号住居址出土遺物 (9~14)
 第245図 31号住居址出土遺物 (15・16-¼)

26号住居址出土遺物観察表 (第245図) ▶本文P.246・第229図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	口縁~杯部 $\frac{1}{4}$ 残。 口 14.4cm。	床面直上。	①細砂、雲母を多く含む。②橙褐色。内面黒色処理。	外面 下半斜め篋削り。上半ナデ。口縁部横ナデ。 内面 杯部横方向の細かい篋磨き。口縁部横ナデ。
2	羽釜 (*)	口縁部破片。 口 (22.0cm)	カマド灰面上 3cm。	① ϕ 5mm砂粒と、少量の石英を含む。	外面 口縁部横方向のナデ。 内面 口縁部横方向のナデ。

28号住居址出土遺物観察表 (第245図・PL88) ▶本文P.247・第233図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
3	高台付椀 (*)	底部高台部残存。 底 7.0cm。	床面直上。	①細砂、長石、雲母を含む。②橙褐色。内面黒色処理。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。高台部回転によるナデ。高台部底面には沈線。 内面 椀部篋磨き。
4	杯 (*)	口縁~杯上 $\frac{1}{2}$ 残。 口 (15.3cm)	床面直上。	①細砂、石英、雲母を含む。②灰褐色。	右回転ロクロ成形。 全面回転によるナデ。
5	高台付椀 (*)	底部高台部残存。 底 9.0cm。	壁際。 床面上2cm。	①細砂、雲母、石英を多量に含む。②橙褐色。	右回転ロクロ成形。切り離し技法不明。付高台。全面回転によるナデ。 内面 底部高台接合部は指ナデ。
6	高台付椀 (*)	杯中~高台部残。 底 9.0cm。	カマド前。 床面上2cm。	①多量の細砂と、少量の雲母を含む。②橙灰褐色。	右回転ロクロ成形。切り離し技法不明。付高台。全面回転によるナデ。 外面 底部指ナデ。
7	杯 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{4}$ 欠損。 高 3.3cm。 口 12.8cm。	埋土中。 底 8.5cm。	①砂粒を含む。 ②赤褐色。	外面 杯部斜方向篋ナデ。底部篋削り。杯部口縁部横ナデ。 内面 杯部口縁部横ナデ。
8	羽釜 (*)	口縁~胴上 $\frac{1}{2}$ 残。 口 (25.4cm)	カマド前。 床面上3cm。	①砂粒、石英を含む。 ②茶褐色。	外面 つば接合部下端~胴部横方向の細かいナデ。 口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向ナデ。口縁部横ナデ。

29号住居址出土遺物観察表 (第245図・PL88) ▶本文P.235・第207図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
9	長頸壺 (須恵器)	胴部 $\frac{1}{2}$ 底部欠損。 口 5.0cm。 頸 2.5cm。	壁際。 床面上5cm。 胴 8.3cm。	①少量の細砂と白色鉍物粒、黒色鉍物粒を含む。②灰色。	右回転ロクロ成形。 全面回転によるナデ。 口縁部内面、頸部、肩部外面に自然釉。
10	壺 (須恵器)	胴部 $\frac{1}{2}$ 破片。	埋土中。	①挟雑物はほとんどない。 ②灰色。	全面回転ナデ。 胴部外面に自然釉。
11	高台付皿 (須恵器)	$\frac{1}{2}$ 残存。 高 2.6cm。 口 (13.4cm)	床面直上。 底 (8.8cm)	①細砂、長石粒を含む。②灰色。	右回転ロクロ成形。付高台。 外面 高台部、口縁部、回転によるナデ。 内面 高台部、口縁部、回転によるナデ。
12	高台付皿 (須恵器)	$\frac{1}{4}$ 残存。 高 2.8cm。 口 (12.6cm)	床面直上。 底 (6.8cm)	①細砂、長石粒を含む。②灰色。	右回転ロクロ成形。付高台。 外面 高台接合部、口縁部、回転によるナデ。 内面 高台接合部、口縁部、回転によるナデ。
13	杯 (須恵器)	ほぼ完形。 高 3.5cm。 口 12.6cm。	壁際。 床面上10cm。 底 6.6cm。	⑤細砂粒を混じる。 ②青灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 外面 杯部上半回転によるナデ。 内面 杯部回転によるナデ。

III 検出された遺構と遺物

(29号住居址)

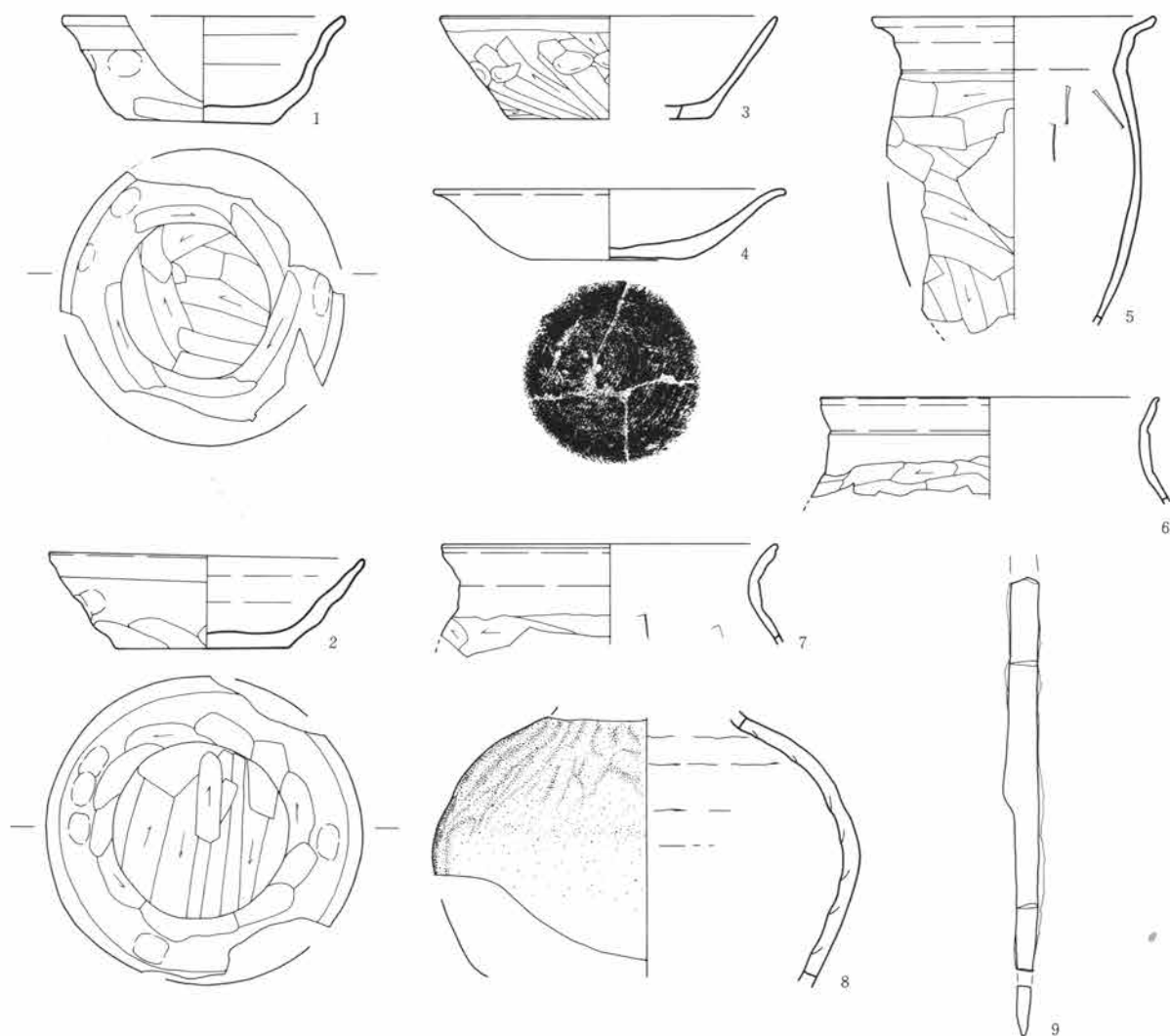
No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
14	椀 (須恵器)	椀部 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 (16.0cm)	埋土中。	①細砂、長石を混じる。②灰色。	右回転ロクロ成形。 外面 回転によるナデ。 内面 回転によるナデ。

31号住居址出土遺物観察表 (第245図) ▶本文P.247・第234図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
15	高台付椀 (緑釉陶器)	高台部椀部 $\frac{1}{2}$ 残。 高 3.9cm。 口 (11.4cm) 底 5.7cm。	カマド前。 灰面直上。	①細砂を少量含むが緻密は粘土である。 ②深緑色。	ロクロ成形。回転方向不明。付高台。 全面回転によるナデ。 外面 底部高台接合部をナデ、中央部も擦痕がみられる。底部五角形の篋描きがある。 軸は底部外面を除く全面に刷毛塗り。口縁部は特に濃い。
16	羽釜 (*)	口縁部破片。 口 (22.2cm)	埋土中。	①砂粒、長石、雲母を含む。 ②茶褐色。	外面 口縁部横ナデ。口唇部は面とりされ、強くなでられて凹線様を呈す。 内面 口縁部横ナデ。

32号住居址出土遺物観察表 (第246図・P.L88) ▶本文P.237・第210図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	口縁～体中 $\frac{1}{2}$ 欠。 高 4.4cm。 口 10.6cm。底 7.2cm。	壁際。 床面上6cm。	①細砂粒、長石を多く含む。②橙灰褐色。	外面 杯部横方向篋削りの後、上半のみ指ナデ。底部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
2	杯 (土師器)	ほぼ完形。 高 3.9cm。 口 12.9cm。底 7.2cm。	壁際。 床面上13cm。 底 7.2cm。	①砂粒、長石を多量に含混じる。②橙褐色。底部に黒斑。	外面 杯部篋削り後下半斜方向篋ナデ。上半指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
3	杯 (土師器)	口縁～杯下破片。 高 4.2cm。 口 (14.0cm) 底 6.8cm。	埋土中。 底 6.8cm。	①砂粒、長石、雲母を多量に含む。②橙褐色。	外面 杯部縦方向篋削り。中位に帯状に指ナデ。底部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。口縁部横ナデ。
4	皿 (須恵器)	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 2.7cm。 口 14.6cm。底 6.8cm。	埋土中。 底 6.8cm。	① ϕ 5mmの砂粒を多く含む。②灰白色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 外面 口縁部回転によるナデ。口唇部大きく外湾 内面 口縁部回転によるナデ。
5	甕 (土師器)	口縁～胴下 $\frac{1}{2}$ 残。 口 (15.2cm) 頸 (12.3cm)	埋土中。	①細砂、長石、雲母を含む。②口縁部橙褐色。胴部茶褐色。	外面 胴部下位方向篋削り。中位斜方向篋削り。上位(肩部)縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部、横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。
6	甕 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残。 口 18.6cm。	埋土中。	①細砂を多く含み、長石、雲母も混じる。②橙褐色。	外面 肩部横方向篋削り。横方向篋ナデ。頸部、口縁部複雑なナデ。 内面 頸部、口縁部複雑な横ナデ。
7	甕 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残。 口 (18.5cm)	壁際。 床面上7cm。	①細砂、雲母を多量に含む。②橙白褐色。	外面 肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 肩部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。
8	壺 (須恵器)	頸～胴部 $\frac{1}{2}$ 残。 頸 11.0cm。	床面上6cm。	①砂粒と ϕ 3mm黒色鉱物粉子。 ϕ 7mm白色鉱物粉子を含む。 ②灰色。	全面回転によるナデ。

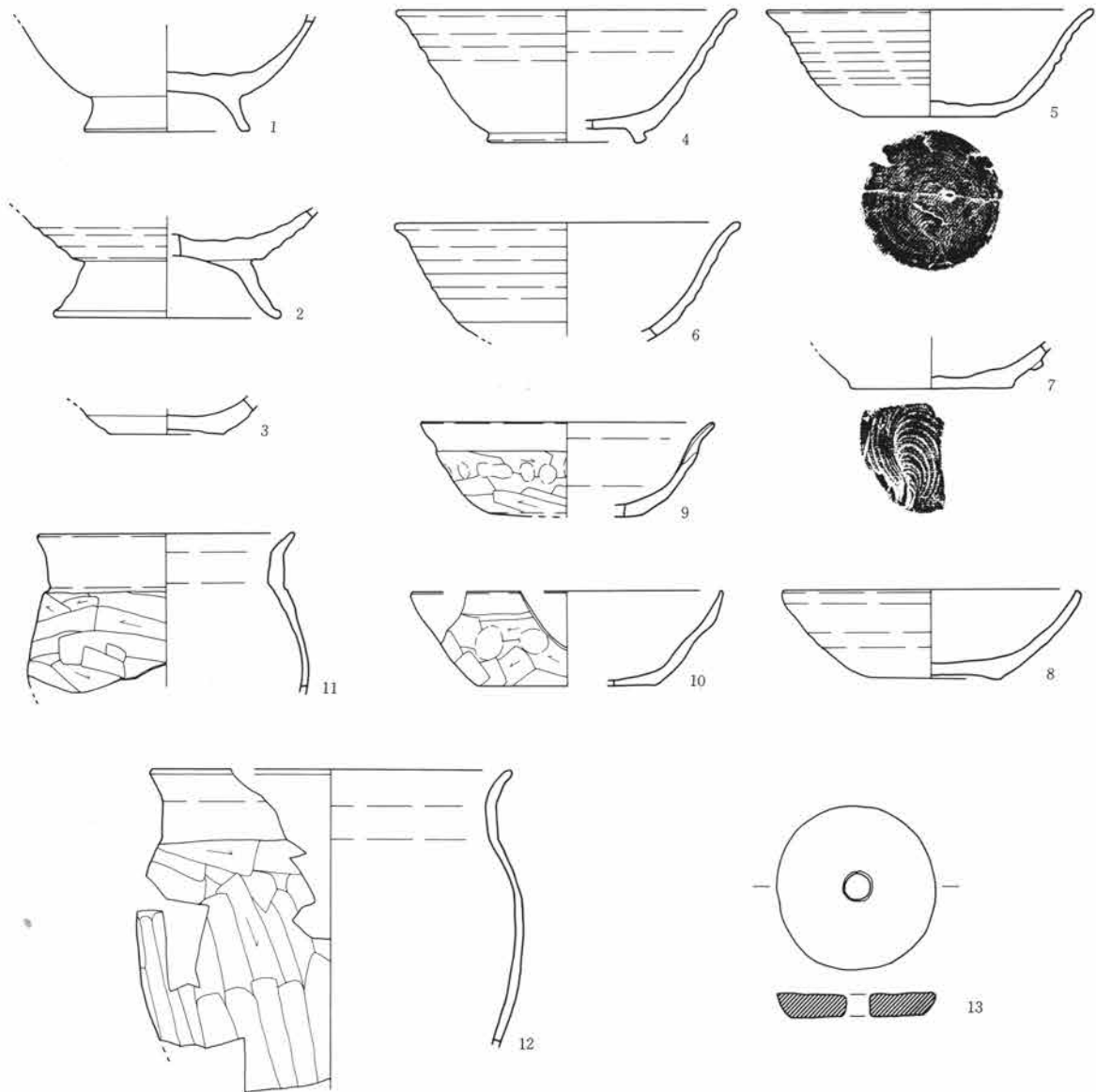


第246図 32号住居址出土遺物（5～9-¼）

33号住居址出土遺物観察表（第247図） ▶本文P.239・第214図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	高台付椀 （*）	椀部下位～高台部 残存。 底 7.1cm。	壁際。 床面上 2 cm。	①細砂、長石、雲母 を含む。 ②橙褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸すり。付高台。 全面回転によるナデ。
2	高台付椀 （*）	椀部下位～高台部 ½残存。 底 9.7cm。	壁際。 床面上 1 cm。	①細砂、長石、雲母 を含む。 ②橙褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。 全面回転によるナデ。
3	杯（*）	椀部下位～高台部 ½残存。 底 5.0cm。	埋土中。	①黒雲母片を多量に 含む。 ②乳白色。	ロクロ成形。回転糸切り。 底部外面を除き、回転によるナデ。

III 検出された遺構と遺物



33号住居址出土遺物（1～3）
第247図 34号住居址出土遺物（4～11、12-1/4、13）

34号住居址出土遺物観察表（第247図・P L88）▶本文P.238・第213図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
4	高台付椀 （須恵器）	1/4残存。 高 5.6cm。 口（14.6cm）	壁際。 床面上 9 cm。 底（6.8cm）	①φ 5 mmの砂粒、白色鉍物粒子を含む。 ②灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。口縁部内外面、高台部、回転によるナデ。
5	杯（須恵器）	口縁～杯部中位1/2欠損。 高 4.6cm。 口 14.0cm。 底 5.8cm。	壁際。 床面上 4 cm。	①φ 5 mmの砂粒、白色鉍物粒子を含む。 ②灰白色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。口縁部外面～杯部内面、回転によるナデ。
6	椀（須恵器）	椀部破片。 口（14.8cm）	床面上 1 cm。	①砂粒、石英を含む。 ②灰褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。全面回転によるナデ。

4 平安時代の遺構と遺物

(34号住居址)

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
7	杯 (須恵器)	底部破片。 底 7.0cm。	壁際。 床面上3cm。	①細砂、白色鉱物粒子を含む。②灰褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 内面 回転によるナデ。
8	杯 (須恵器)	ほぼ完形。 高 3.8cm。 口 12.7cm。 底 5.7cm。	床面上13cm。	①砂粒、白色鉱物粒子を含む。 ②灰色。褐色斑が底部にある。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 内外面とも回転によるナデ。
9	杯 (土師器)	口縁～底部 $\frac{1}{4}$ 残。 高 3.9cm。 口 (12.4cm) 底 (7.4cm)	カマド脇。 床面上11cm。	①極細砂を含む。 ②黒褐色。	外面 杯部横方向篋削り。上半指オサエ。底部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。口縁部横ナデ。
10	杯 (土師器)	口縁～底部 $\frac{1}{6}$ 残。 高 4.0cm。 口 (13.4cm) 底 (7.6cm)	壁際。 床面上6cm。	①砂粒を混じる。 ②灰黄褐色。	外面 杯部横方向篋削り。上半まばらな指押え。底部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 底部ナデ。口縁部横ナデ。
11	甕 (土師器)	口縁～胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 (11.0cm) 頸 (10.0cm)	壁際。 床面上13cm。	①砂粒、雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 胴部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 口縁部横ナデ。
12	甕 (土師器)	口縁～胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 (20.8cm) 頸 (19.2cm)	カマド煙道。	①砂粒を多く含む。 ②橙褐色。外面黒斑。	外面 肩部横方向篋削り後、胴部縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
13	紡輪 (土製品)	完形。 厚 1.0cm。 口 6.7cm。 穿孔 1.1cm。	壁際。 床面上4cm。	①砂粒、雲母、石英を含む。 ②灰褐色。	須恵器杯の底部再利用。片面に杯整形時の篋削り残る。

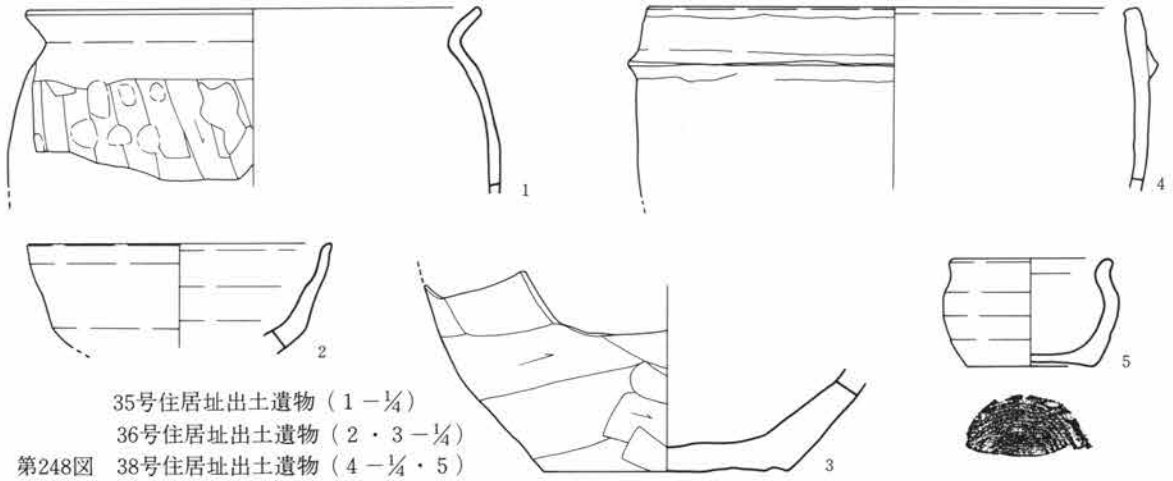
35号住居址出土遺物観察表 (第248図) ▶本文P.246・第230図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	甕 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{3}$ 残存。 口 (24.4cm) 頸 (22.4cm)	カマド燃焼部。 灰面直上。	①砂粒、白色鉱物粒子を含む。 ②赤褐色。	外面 肩部縦方向篋削り後、指押え。口縁部横ナデ。 内面 口縁部及び胴部横ナデ。

36号住居址出土遺物観察表 (第248図) ▶本文P.245・第226図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
2	椀 (＊)	口縁～杯部 $\frac{1}{6}$ 残存。 口 (12.2cm) 底 (8.6cm)	埋土中。	①砂粒を混じる。 ②灰褐色。	ロクロ成形。 外面 回転によるナデ。 内面 回転によるナデ。
3	甕 (土師器)	胴部下位～底部 $\frac{1}{2}$ 残存。 底 10.0cm。	カマドと思われる灰面直上。	① ϕ 5mm～8mmの砂粒を多量に含む。 ②茶褐色。	外面 胴部横方向篋削り。底部ナデ。 内面 ナデ。

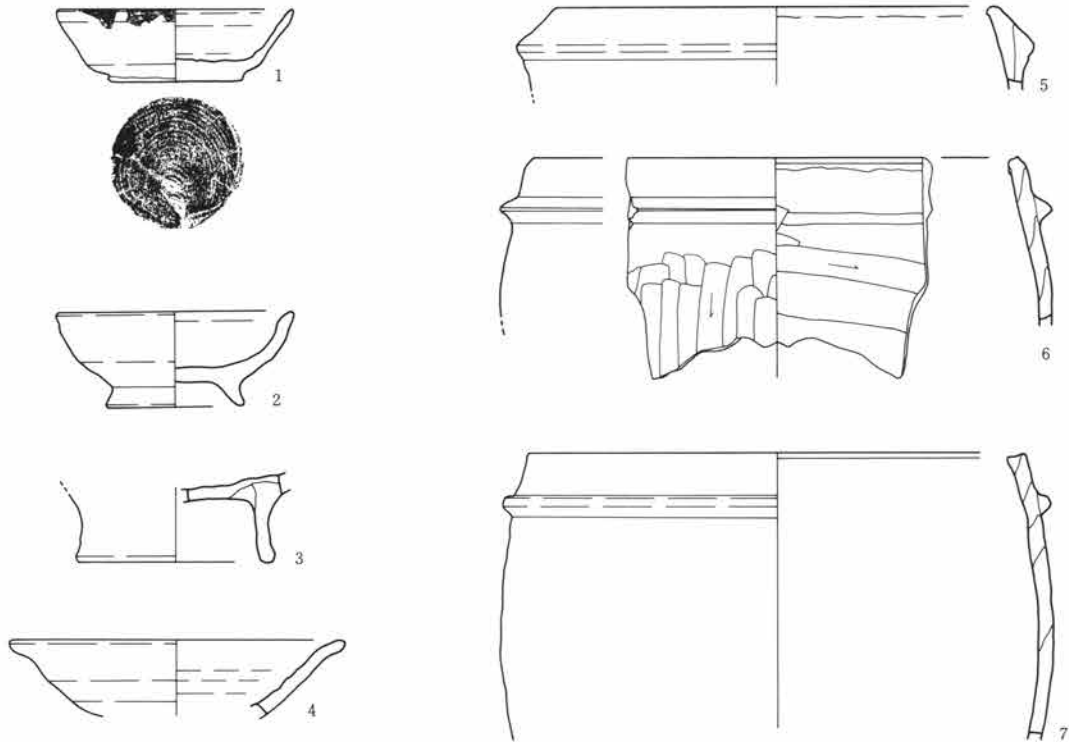
III 検出された遺構と遺物



35号住居址出土遺物 (1-1/4)
 36号住居址出土遺物 (2・3-1/4)
 第248図 38号住居址出土遺物 (4-1/4・5)

38号住居址出土遺物観察表 (第248図・PL88) ▶ 本文P.247・第235図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
4	羽釜 (*)	口縁部1/4残存。 口 19.8cm	カマド煙道部。 灰面直上。	①砂粒を多く含む。 ②橙褐色。	外面 胴部横方向篋ナデ。つば部口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篋ナデ。
5	ミニチュア壺 (*)	1/2残存。 口 6.4cm。 頸 6.4cm。 胴 7.0cm。 底 5.2cm。	床面直上。	①細砂粒、石英、雲母を含む。 ②橙褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 外面 回転によるナデ。 内面 回転によるナデ。



第249図 40号住居址出土遺物 (1~4・5~7-1/4)

40号住居址出土遺物観察表 (第249図・P L88) ▶本文P.240・第216図

No	器 種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯 (*)	ほぼ完形。 高 2.9cm。 口 9.6cm。 底 5.5cm。	壁際。床面上 10cm。	①細砂粒、石英、雲母、長石を多量に含む。②橙褐色。口縁に炭化物付着。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 口縁部および杯部外面、回転によるナデ。
2	高台付椀 (須恵器)	口縁～椀部 $\frac{1}{4}$ 欠。 高 3.9cm。 口 9.6cm。 底 5.6cm。	壁際。 床面上3cm。	①細砂粒、石英、雲母を多く含む。②黒灰褐色。	回転糸切り。 付高台。口縁部横ナデ。 口縁部内外面および高台接合部、回転によるナデ。
3	高台付椀 (須恵器)	高台部 $\frac{1}{4}$ 残存。 底 8.0cm。	カマド 燃焼部。 灰面直上。	①細砂、雲母を含む。 ②灰白褐色。	カマド燃焼部、灰面直上。右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台、内外面とも回転によるナデ。
4	椀 (*)	口縁～椀部 $\frac{1}{6}$ 残。 口 13.4cm。	カマド前。 床面直上4cm。	①砂粒を含む。 ②茶褐色。	右回転ロクロ成形。 口縁部回転によるナデ。
5	羽釜 (*)	口縁部破片。 口 23.4cm。	カマド前。 床面直上。	①砂粒を多量に含む。 ②茶褐色。	外面 口縁部横ナデ。 内面 荒いナデ。
6	羽釜 (*)	口縁部 $\frac{1}{6}$ 残存。 口 26.6cm。	床面上2cm。	① ϕ 8mmの砂粒。石英、長石を多く含む。 ②茶褐色。	外面 胴部縦方向へ篋削り。 内面 横方向篋ナデ。口縁、つば接合部横ナデ。
7	羽釜 (*)	口縁～胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 26.6cm。	カマド 燃焼部。 灰面直上。	①細砂、長石粒、石英を含む。 ②茶褐色。	外面 胴部ナデ。 内面 口縁部および胴部横ナデ。

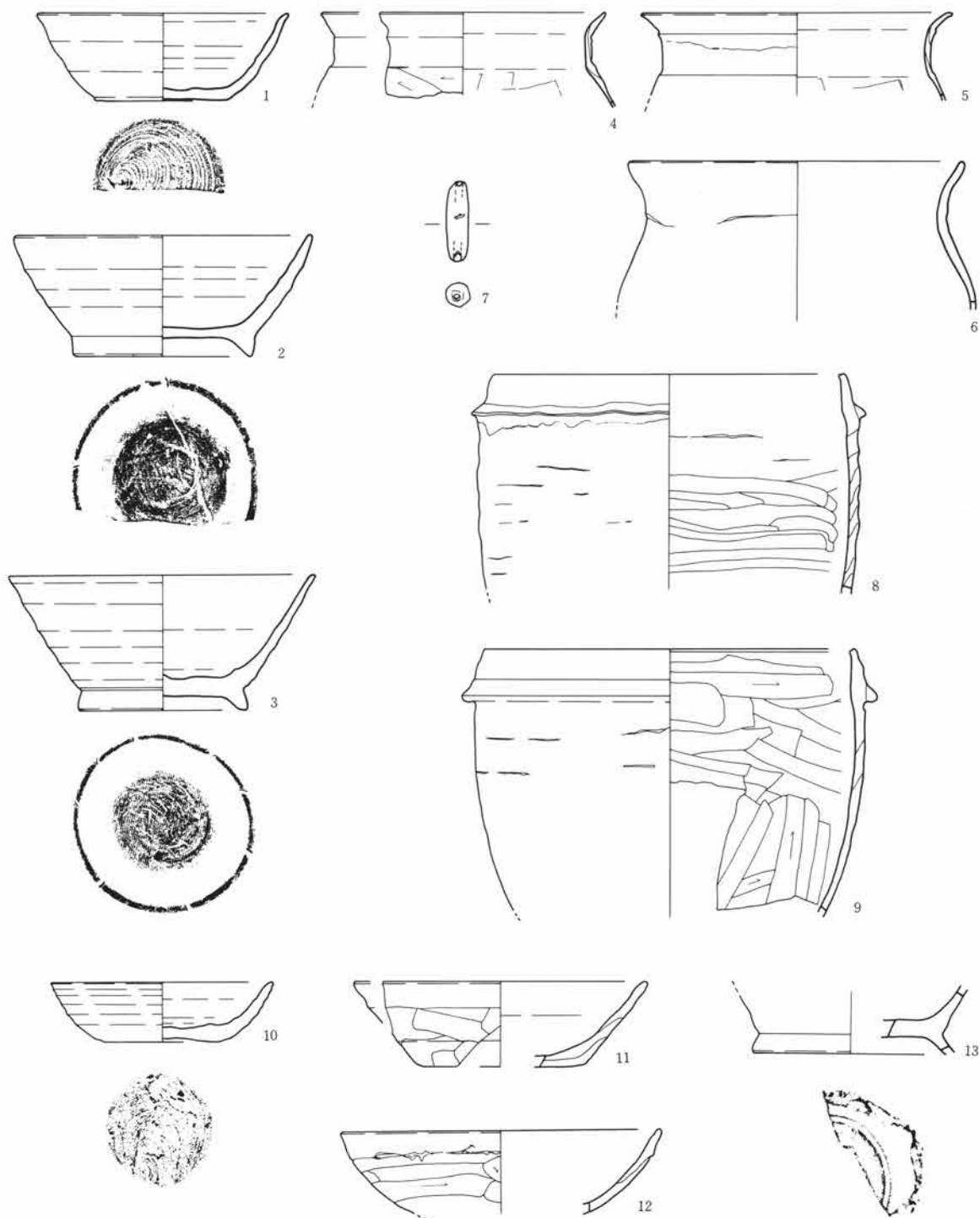
41号住居址出土遺物観察表 (第250図・P L88) ▶本文P.240・第217図

No	器 種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	椀 (須恵器)	$\frac{1}{2}$ 残存。 高 4.1cm。 口 12.0cm。	壁際。 床面直上。 底 6.2cm。	① ϕ 5mmの砂粒を含む。②灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。 口縁部および内面回転ナデ。
2	高台付椀 (須恵器)	$\frac{1}{2}$ 残存。 高 5.2cm。 口 14.4cm。	床面上14cm。 底 8.7cm。	①細砂を多く含む。 ②灰白褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。付高台。 口縁部横ナデ。高台接合部ナデ。
3	高台付椀 (須恵器)	$\frac{1}{2}$ 欠損。 高 6.4cm。 口 14.5cm。	カマド前。 床面直上。 底 8.0cm。	①細砂、長石を含む。 ②灰白褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り離し。付高台。 口縁部内面、高台接合部ナデ。
4	甕 (土師器)	口縁部破片。 口 (18.2cm)	貼床土中。	①細砂、雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
5	甕 (土師器)	口縁部破片。 口 (21.0cm)	床面直上。	①細砂、石英、長石を含む。 ②黒褐色。	外面 肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。
6	甕 (土師器)	口縁部破片。 口 (21.6cm)	床面上4cm。	①細砂、長石を多く含む。 ②橙褐色。	外面 肩部横方向の強いナデ。口縁部横ナデ。 内面 口縁部、肩部横ナデ。

III 検出された遺構と遺物

(41号住居址)

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
7	土 鍾 (土製品)	完形。 長 3.7cm。 径 1.2cm。	壁際。 床面上15cm。	①細粒、雲母を含む。 ②黄褐色。	手捏ね成形 全面ナデ。



41号住居址出土遺物 (1~3・4~8-¼・7)

44号住居址出土遺物 (8、9-¼)

47号住居址出土遺物 (10)

第250図 48号住居址出土遺物 (11~13)

44号住居址出土遺物観察表 (第250図・P L88) ▶本文P.247・第236図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	羽釜(＊)	口縁～体部 $\frac{1}{2}$ 残。 口 22.5cm。	カマド燃焼部。 灰面上2cm。	① ϕ 5mmの砂粒、長石を含む。②茶褐色。	外面 胴部縦方向篔削り。口縁部横ナデ。 内面 横方向篔削り。口縁部横ナデ。
2	羽釜(＊)	口縁～体部 $\frac{1}{2}$ 残。 口 23.6cm。	カマド燃焼部。 灰面上2cm。	① ϕ 2～3mmの砂粒を多く含む。②褐色。	外面 胴部縦方向篔削り。 内面 上半横方向篔削り後、下半縦方向篔削り。

47号住居址出土遺物観察表 (第250図・P L89) ▶本文P.237・第211図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
3	杯(＊)	杯部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 2.8cm。 口 10.7cm。	南西隅。 床面直上。	①細砂、長石、雲母を含む。 ②橙褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 口縁部および内面、回転によるナデ。

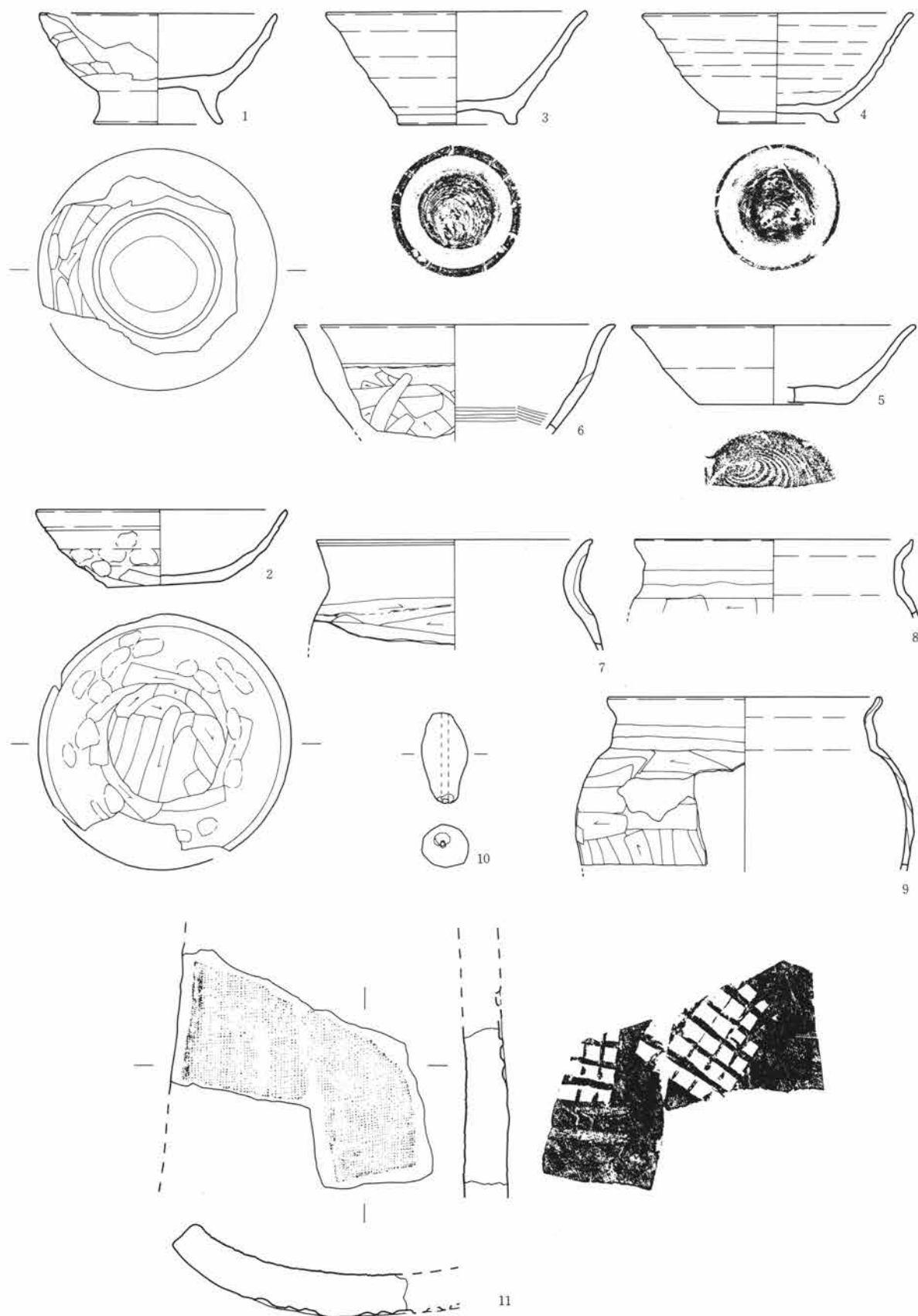
48号住居址出土遺物観察表 (第250図) ▶本文P.245・第228図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
4	杯(土師器)	杯部★残存。 高 4.0cm。 口 14.0cm。	床面直上。	①細砂、雲母を含む。	外面 杯部横方向篔削りの後、指押え。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
5	椀(＊)	杯部 $\frac{1}{2}$ 残存。 口 15.2cm。	床面直上。	①雲母、石英、細砂を含む。②灰褐色。	外面 杯部横方向篔削り。 口縁部および内面横ナデ。
6	高台付椀(須恵器)	高台接合部 $\frac{1}{2}$ 残。 底(9.4cm)	床面直上。	①砂粒、長石、雲母を含む。②灰色。	右回転ロクロ成形。 高台接合部回転ナデ。

45号住居址出土遺物観察表 (第251図・P L89) ▶本文P.245・第227図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	高台付椀(土師器)	椀部 $\frac{1}{2}$ 、底部残。 高 5.7cm。 口 12.4cm。 底 6.7cm。	貼床土中。	①細砂、雲母、長石を含む。 ②橙褐色。	外面 縦方向篔削り。底部、高台接合部ナデ。 内面 口縁部および椀部ナデ。
2	椀(土師器)	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 4.0cm。 口 13.1cm。 底 6.1cm。	床面直上。	①砂粒、雲母を含む。 ②橙褐色。	外面 椀部下半斜方向篔削り。上半指押え。底部篔削り。 内面 口縁部および椀部ナデ。
3	高台付椀(須恵器)	椀部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 5.7cm。 口(13.6cm) 底 5.6cm。	カマド脇。 床面直上。	① ϕ 2～5mmの砂粒を多く含む。②灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 外面 口縁部および高台接合部回転ナデ。 内面 口縁部および高台接合部回転ナデ。
4	高台付椀(須恵器)	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 5.7cm。 口 14.0cm。 底 6.3cm。	カマド灰層中。支脚として使用か？	① ϕ 2～5mmの砂粒を含む。②茶褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。 外面 口縁部、回転によるナデ。 内面 口縁部、回転によるナデ。
	椀(須恵器)	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 残。 高 4.1cm。 口(14.8cm)	カマド灰面下。 底(8.0cm)	① ϕ 2mmくらいの砂粒を含む。②灰褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 外面 底部周縁に擦痕。 口縁部および内面横ナデ。

III 検出された遺構と遺物



第251図 45号住居址出土遺物 (8、9-¼)

4 平安時代の遺構と遺物

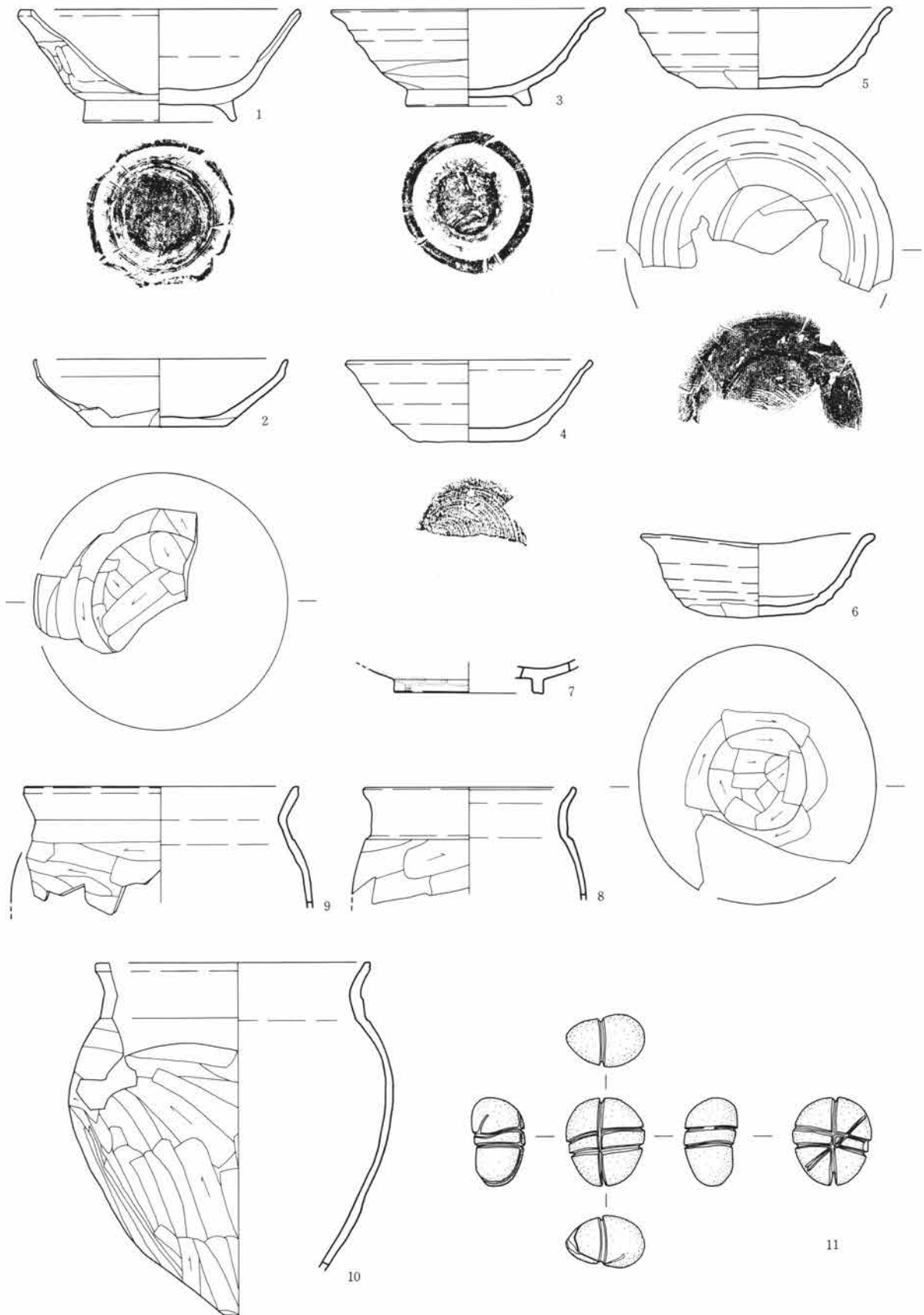
(45号住居址)

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
6	鉢 (土師器)	口縁～腕部 $\frac{1}{8}$ 残。 口 (16.6cm)	床面下。	①細砂、長石、雲母を多く含む。②橙褐色。	外面 腕部篋削りの後指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 腕部下半横方向刷毛目。口縁部横ナデ。
7	甕 (土師器)	口縁部破片。 口 (14.2cm)	床面下。	①細砂、雲母を含む。②灰褐色。	外面 胴部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 胴部横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。
8	甕 (土師器)	口縁部 $\frac{1}{8}$ 残存。 口 (19.4cm)	カマド脇床面直上。	①砂粒、雲母、石英を含む。②橙褐色。	頸部に未成形部分がある。外面、肩部横方向篋削り。口縁部および内面横ナデ。
9	甕 (土師器)	口縁部～体部 $\frac{1}{8}$ 残。 口 (19.0cm)	カマド灰面直上。	①細砂、雲母を含む。②橙褐色。	外面 胴部下半縦方向篋削り。上半横方向篋削り。頸部下半横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 篋ナデ。口縁部横ナデ。
10	土錘 (土製品)	完形。 長 4.5cm。 最大 2.5cm。 穿 0.3cm。	床面上14cm。	①細砂を多く含む。②灰褐色。	手捏ね。 全面ナデ。
11	平瓦	破片。	カマド灰層下。	①緻密な胎土。②緑灰色。	裏面 格子状タタキ 表面 布目

51号住居址出土遺物観察表 (第252図・P L89) ▶本文P.241・第219図

No.	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	高台付椀 (*)	椀部破片。 高 6.2cm。 口 (14.8cm) 底 9.2cm。	壁際。 床面上5cm。	①細砂、長石、雲母を多量に含む。②橙褐色。	外面 椀部篋削り後、上半指ナデ。高台接合部、口縁部横ナデ。 内面 高台接合部、口縁部横ナデ。
2	杯 (土師器)	$\frac{1}{4}$ 残存。 高 3.5cm。 口 (13.2cm) 底 (7.0cm)	埋土中。	①細砂、石英を多量に含む。②橙褐色。	外面 椀部横方向篋削り。底部篋削り。 内面 椀部および口縁部横ナデ。
3	高台付椀 (*)	$\frac{1}{8}$ 残存。 高 5.0cm。 口 14.3cm。 底 6.5cm。	壁際。 床面上20cm。	①砂粒、雲母を含む。②赤褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。 外面 椀部下半横方向篋削り。高台接合横ナデ。口縁部横ナデ。 内面 口縁部横ナデ。
4	杯 (須恵器)	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 残。 高 4.2cm。 口 (12.8cm) 底 5.2cm。	床面直上。	①細砂、雲母を含む。②灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 内面および口縁部横ナデ。
5	椀 (*)	$\frac{1}{8}$ 残存。 高 4.1cm。 口 14.0cm。 底 6.6cm。	カマド灰面直上。	①細砂、雲母を含む。②茶褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 外面 椀部の下部～底部周縁手持ち篋削り。口縁部および内面ナデ。
6	椀 (須恵器)	椀部 $\frac{1}{4}$ 欠損。 高 4.3cm。 口 12.3cm。 底 5.2cm。	床面直上。	① ϕ 2mmの砂粒を多量に含む。②灰白色。	ロクロ成形? 外面 ナデ後、椀部下位横方向篋削り。底部篋削り。 内面 ナデ。
7	高台付椀 (灰釉陶器)	底部 $\frac{1}{8}$ 残存。 底 7.8cm。	床面上3cm。	①緻密な胎土。②緑灰色。	ロクロ成形。

III 検出された遺構と遺物



第252図 51号住居址出土遺物（9、10-¼）

4 平安時代の遺構と遺物

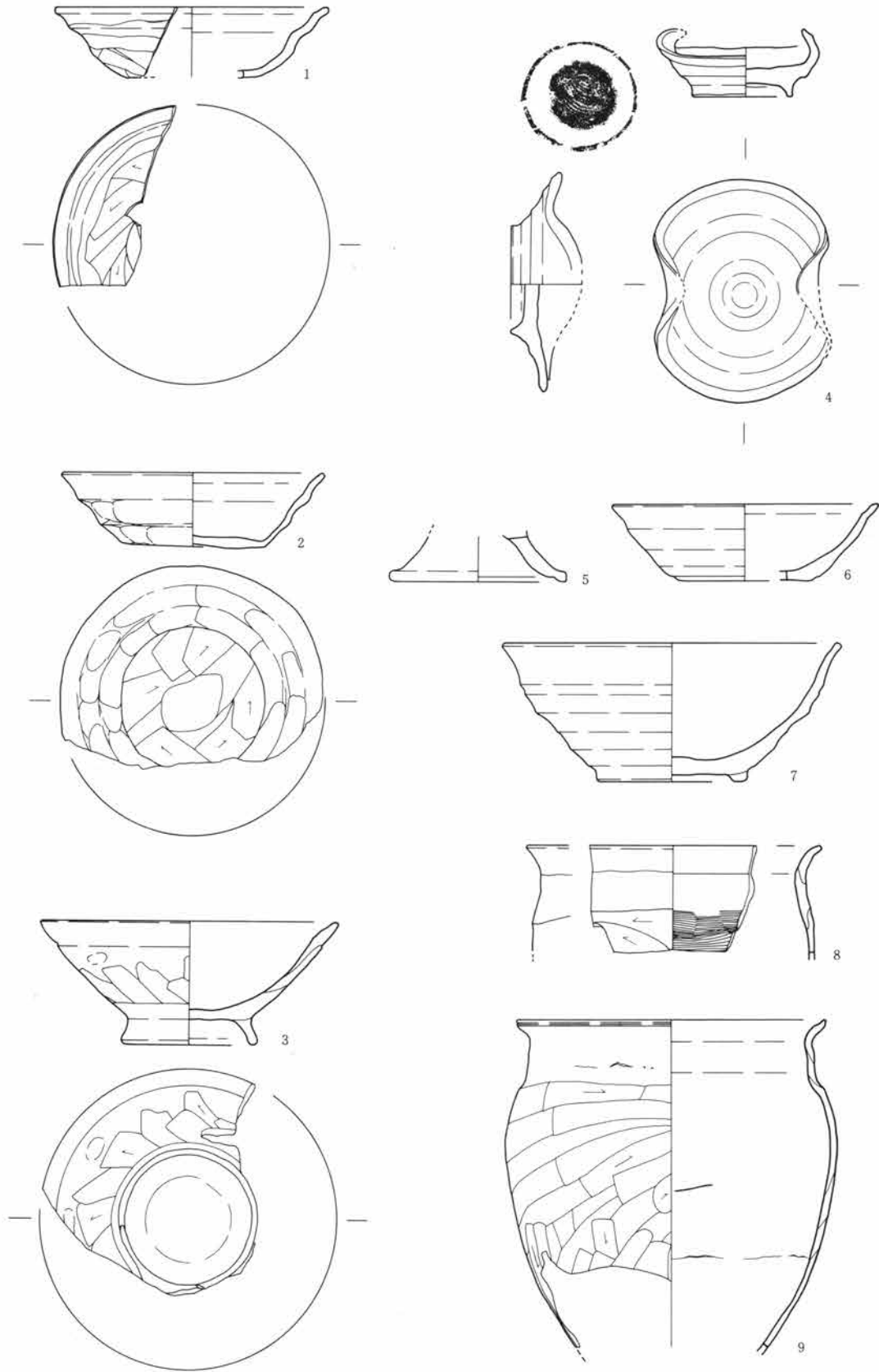
(51号住居址)

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
8	甕 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残。 口 11.1cm。	床面直上。	①細砂、雲母多量に含む。②黒褐色。	外面 肩部横方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 横方向篋ナデ。口縁部横ナデ。頸部無整形
9	甕 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{4}$ 残。 口 19.2cm。	床面下。 貼床土中。	①細砂、長石、雲母を含む。②橙褐色。	外面 肩部横方向篋削り。 内面 横方向篋ナデ。口縁部および頸部横ナデ。
10	甕 (土師器)	$\frac{1}{2}$ 残存。 高 25.8cm。 口 (19.0cm) 胴 (24.5cm) 底 (4.5cm)	床面上17cm。	①細砂、長石、雲母を含む。 ②黒褐色。	外面 肩部横方向および斜方向篋削り後、胴部下半縦方向篋削り。口縁部横ナデ。 内面 ナデ。口縁部横ナデ。
11	石 錘 (石製品)	完形。 器厚 2.2cm。 大4.5×3.8cm	壁際。 床面上10cm。	①榛名山二ツ丘給源の軽石	鋭い溝が穿たれ、器面はよくナデられている。

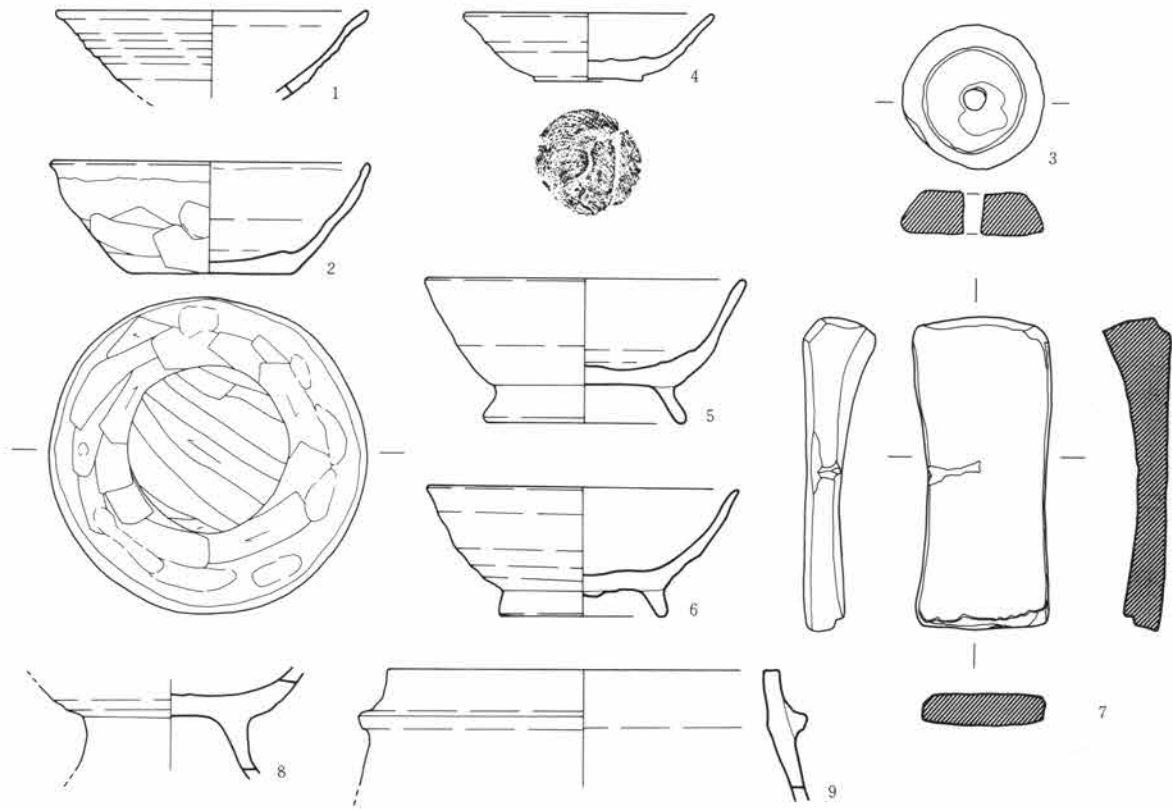
56号住居址出土遺物観察表 (第253図・P L 89) ▶本文P.242・第220図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	杯 (土師器)	杯部 $\frac{1}{2}$ 残存。 高 (3.4cm)	壁際。 床面上9cm	①細砂、長石、雲母を含む。②灰褐色。	外面 杯部篋削り。上半指ナデ。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
2	杯 (土師器)	$\frac{2}{3}$ 残存。 高 3.6cm。 口 12.8cm。 底 7.0cm。	床面上4cm。	①細砂、長石、雲母を含む。②橙褐色。	外面 杯部二段に指ナデ。底部篋削り。口縁部横ナデ。 内面 杯部ナデ。口縁部横ナデ。
3	高台付椀 (土師器)	$\frac{1}{2}$ 残存。 口 (14.6cm) 底 6.8cm。	床面上2cm。	①細砂、長石、雲母を含む。 ②赤褐色。	付高台 外面 杯部下半斜方向篋削り。下半雑なナデ。 内面 杯部ナデ。
4	耳 杯 (須恵器)	ほぼ完形。 高 3.5cm。	床面上10cm。	① ϕ 5mmくらいまでの砂粒含む。②青灰色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。 口唇部、回転によるナデ。
5	杯 (*)	高台部のみ残存。 底 8.8cm。	カマド灰面上 4cm。	①細砂を含む。 ②灰褐色。	不明。 外面 横ナデ。内面 横ナデ
6	杯 (*)	杯部 $\frac{1}{2}$ 残存。 高 3.7cm。 口 (13.0cm) 底 (6.5cm)	床面上7cm。	①細砂、長石、石英を含む。 ②灰褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。 外面 口縁部、回転によるナデ。 内面 口縁部、回転によるナデ。
7	高台付椀 (*)	底部完存。 高 6.8cm。 口 (16.4cm) 底 7.4cm。	カマド前。 床面上2cm。	①細砂、長石、石英を含む。 ②灰褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。付高台。 外面 口縁部、回転によるナデ。 内面 口縁部、回転によるナデ。
8	甕 (土師器)	口縁～肩部 $\frac{1}{6}$ 残。 口 (19.2cm) 頸 (17.4cm)	床面上1cm。	①砂粒、石英、雲母を含む。 ②赤褐色。	外面 肩部横方向篋削り。頸部ナデ。口縁部横ナデ。 内面 肩部刷毛目。口縁部横ナデ。
9	甕 (土師器)	口縁～胴部下位 $\frac{2}{3}$ 残存。 口 20.2cm。 頸 19.0cm。 最大21.6cm。	壁際。 床面上1.0cm。	①砂粒、長石、雲母、石英を含む。 ②橙褐色。	外面 胴部上半横方向篋削り。下半縦方向篋削り。口縁部横ナデ。口唇部面とりされ、凹線が看取される。 内面 胴部ナデ。口縁部横ナデ。

III 検出された遺構と遺物



第253図 56号住居址出土遺物（1～7・8、9-¼）



55号住居址出土遺物 (1、2) 76号住居址出土遺物 (6・7)
 第254図 72号住居址出土遺物 (3～5) 83号住居址出土遺物 (8・9-1/4)

55号住居址出土遺物観察表 (第254図・P L89) ▶本文P.246・第232図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
1	椀 (須恵器)	1/4残存。 底部欠損。 口 12.6cm。	壁際。 床面上1cm。	①φ5mmまでの砂粒、石英を含む。②青灰色。	右回転ロクロ成形。口縁部、回転によるナデ。
2	杯 (土師器)	完形。 高 4.5cm。 口 13.0cm。 底 6.8cm。	壁際。 床面上2cm。	①砂粒、長石、石英を含む。②茶褐色。	外面 篋削り後、指ナデ。

72号住居址出土遺物観察表 (第254図・P L90) ▶本文P.244・第224図

No	器種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
3	紡輪 (土製品)	ほぼ完形。 厚 1.6cm。 上 4.2cm。 下 5.6cm。 孔 0.9cm。	北壁周溝内。	①細砂粒、長石、雲母を含むが、緻密な胎土である。	不明。焼成後穿孔。 全面よく磨かれている。

III 検出された遺構と遺物

(72号住居址)

No.	器 種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
4	杯 (*)	杯部 $\frac{1}{2}$ 欠損。 高 2.8cm。 口 10.7cm。 底 5.4cm。	埋土中。	①細砂、長石、石英を含む。②灰褐色。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。口縁ナデ。
5	高台付椀 (*)	$\frac{1}{4}$ 残存。 高 5.8cm。 口 12.9cm。 底 8.0cm。	床面上1cm。	①細砂、長石、雲母を含む。②灰褐色。	右回転ロクロ成形。口縁部、底部横ナデ。

76号住居址出土遺物観察表 (第254図・P.L.90) ▶本文P.244・第225図

No.	器 種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
6	高台付椀 (*)	$\frac{1}{2}$ 残存。 高 5.3cm。 口 12.6cm。 底 6.6cm。	カマド前。 床面上1cm。	①細砂、長石、雲母を含む。②黄褐色。	右回転ロクロ成形。付高台。
7	砥石 (石製品)	ほぼ完形。	床面上3cm。	①流紋岩	

83号住居址出土遺物観察表 (第254図) ▶本文P.248

No.	器 種	残存・法量	出土状況	①胎土・②色調	成・整形の特徴
8	高台付椀 (須恵器)	高台部残存。	床面直上。	①砂粒、雲母を含む。 ②灰白色。	全面回転によるナデ。
9	羽釜	口縁～体部 $\frac{1}{6}$ 残。 口 21.2cm。	床面直上。	①細砂粒を多量に含む。 ②褐色。	外面 胴部、口縁部ナデ。 内面 胴部、口縁部ナデ。

* 註 14号住居址の帰属する時代については、最終的には奈良時代とした。編集上の不手際で、出土遺物のみ平安時代となってしまったことを明記し、お詫びします。

IV 成果と問題点

1. 縄文時代

小町田遺跡出土の中期土器の概要

今回の調査区では、前述のように草創期前半～後期後半の遺物が検出された。なかでも有舌尖頭器2点の検出は、本地域では数少ない新資料を提供するとともに、草創期前半期における遺跡立地のあり方、あるいは本地域の地質的・地理的環境の問題とも関連する点で、重要な資料が得られたと言えよう。以下、各時期の出土遺物の概要については、すでにII-3でふれており、また各々の出土土器の該当型式等についてもIII-1のなかで順次ふれているので、それらについては重複をさけるが、出土した土器のなかで主体を占める中期の土器について、ここでもう一度整理しておきたい。

中期の土器は、五領ケ台式～加曾利E4式土器が出土しているが、五領ケ台式～阿玉台I式期の土器は良好な資料が得られていないため、これらについては割愛し、ここでは阿玉台II式～加曾利E4式期の出土土器のうち、良好な資料を使用してその概要を述べておきたい。なお、該期の土器については、近年細密な段階区分が試みられているが、本項では既存の型式を大枠として把えておく。

阿玉台II式期 阿玉台II式土器は良好な資料が得られていない。1～3は9号土壇から一括出土した土器で、本土壇の性格から共伴資料と考えてよいだろう。1は勝坂2式の新しい段階に、2は大木7b式の新しい段階に、各々比定されよう。いずれも小型のやや特異な土器であるが、両型式の特徴は備えている。

阿玉台III式期 4は2号住居址覆土、5～7は28号土壇覆土からの出土品である。4は隆帯にそって幅広い爪形文を施した阿玉台III式土器である。5・6は口縁部が弱く内湾しながら大きく開く土器で、頸部に区画帯をもち、胴部には隆線による懸垂文が施されている。6は4単位の小波状口縁を呈し、波頂部にS字状の把手が付けられている。地文に縄文をもつこの種の土器は、最近福島県や関東北東部地域で類例が増加している。大木8a式の古い段階に比定されよう。

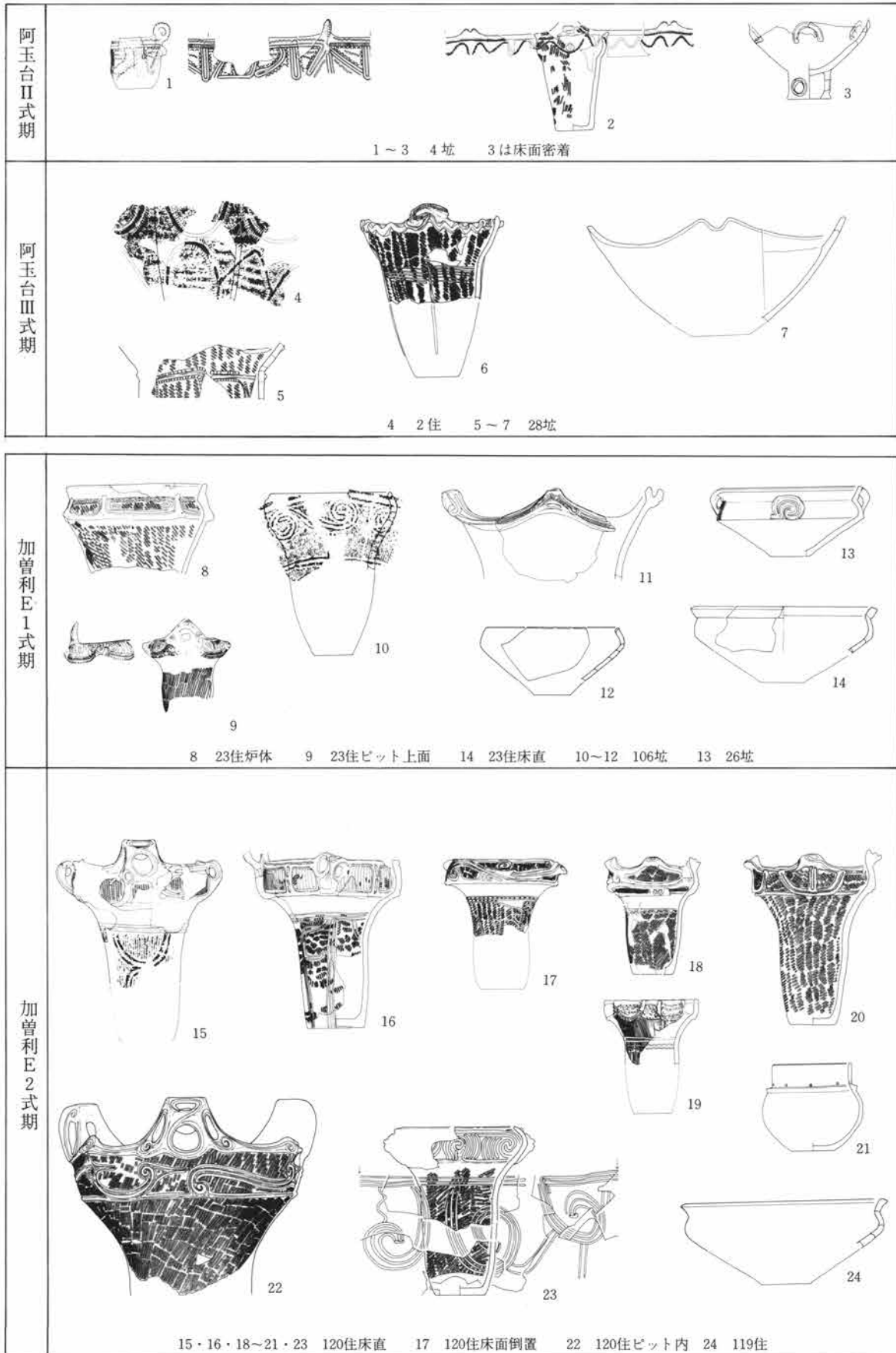
加曾利E1式期 器形や文様はバラエティに富んでおり、各々の土器に前時期の多様な要素が含まれている。文様は口縁部文様帯のみに限られるものが多く、モチーフはS字文や渦巻文、杵状文などが多用されている。地文は縄文・撚糸文が多用される。また、浅鉢は口縁部がくの字状に内湾するものと、外折した口唇部が付くものがある。

加曾利E2式期 器形は大半がキャリパー形を呈し、頸部無文帯が形成される。口縁部文様は渦巻文が主体となる。また口縁に把手が付くものが多く、特に本遺跡では箱状把手が特徴的である。頸部無文帯をもたないものもいくつか認められるが、その場合胴部文様も施されない。27～30は本時期のなかでも新しい段階の土器であろう。

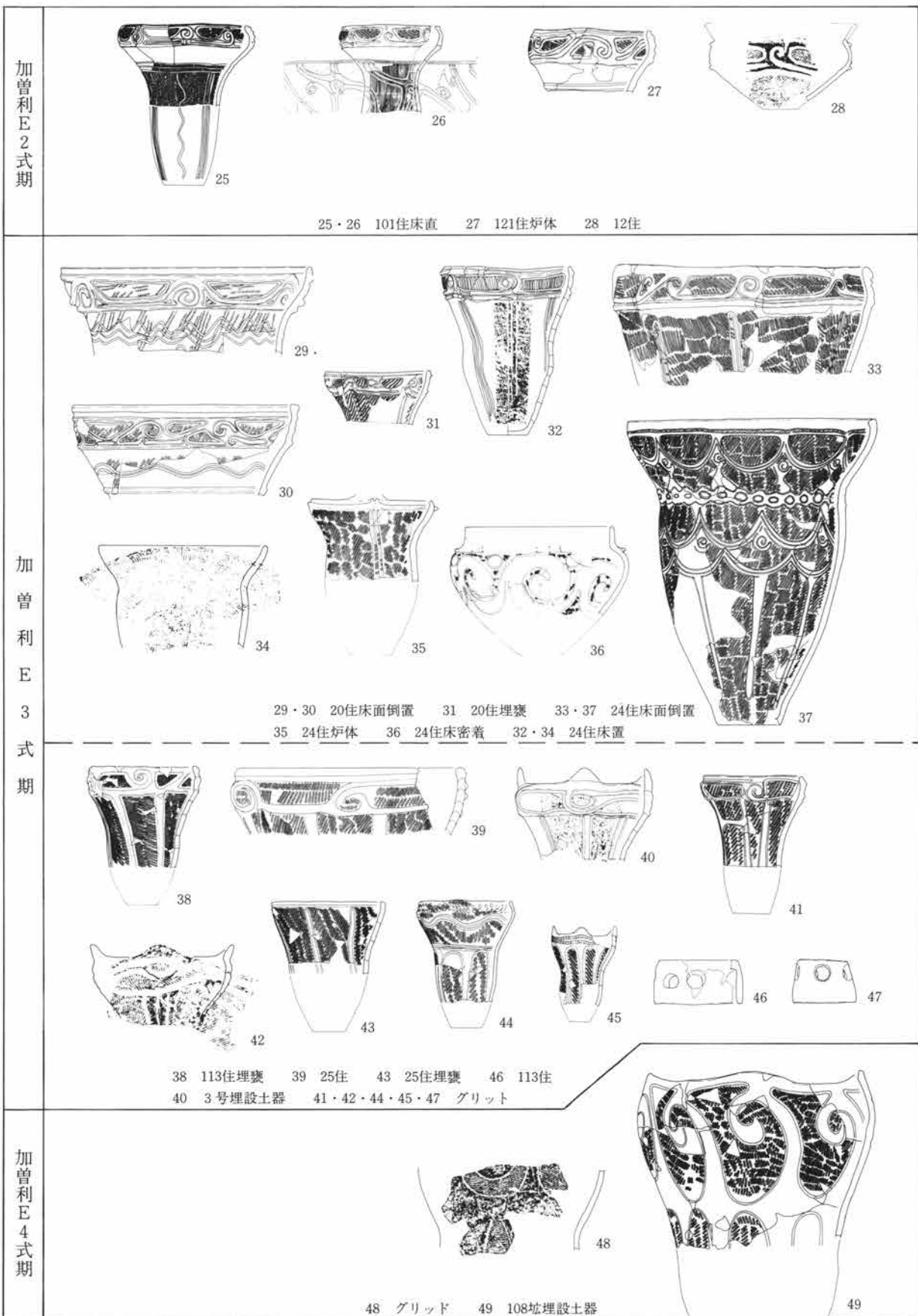
加曾利E3式期 頸部無文帯が消失するとともに、口縁部文様は隆帯から沈線へ、あるいは渦巻文から楕円状文へと簡略化され、やがて消失の方向性をたどる。また、胴部の懸垂文間の地文は磨り消しが施されるようになる。この他に、連弧文土器や曾利系の土器・台形土器が一般化するもの、この時期の特徴である。

加曾利E4式期 口縁部文様帯が消失し、微隆帯や沈線による区画文が主体となる。また、地文は大半が充填縄文になる。

IV 成果と問題点



第255図 中期土器の時期区分(1)



第256図 中期土器の時期区分(2)

IV 成果と問題点

この他にもふれなければならない点は多々あるが、それらについては土器の系統問題や細分問題などとともに今後の課題としておきたい。

小町田遺跡の中期住居址について

ここでは検出された中期の住居址の内部施設を中心に、その概要をまとめておきたい。今回の調査で検出された中期の住居址は、阿玉台Ⅲ式期のものから加曾利E3式期までのものがあり、合計25軒である。このうち、形態や内部施設などの全容が判かるものは少なく、各々に欠落する部分も多いが、表化してみると下図のようになる。形状から見ていくと、加曾利E1式段階では隅丸長方形・楕円形を呈するが、E2式期では隅丸方形・円形となり、E3式期では円形となる方向性が認められる。楕円形を呈する121・24号住居址は同時期のなかでは大型住居址であり、いずれも石囲埋甕炉を持つ点でも他の住居址と異なるようである。柱穴は長方形・方形を呈するものは4本であるが、円形・楕円形を呈するものは5～6本から7～8本へと変化するようであり、住居址の規模も大型化している。周溝については不確定要素が大きいが、加曾利E3式期の住居跡では確認されていない。炉は古い段階では地床炉が多いようであるが、加曾利E2式の新しい段階で石囲炉や石囲埋甕炉が出現し、E3式期では石囲炉が主流となるようである。出入口部埋甕は加曾利E3式期の古い段階に出現し、その後継続されていくようである。また、参考に床面倒置土器の項目を設けてみた。なお、埋設土器4ヶ所もこれに加えて見たほうが良いかもしれない。

以上が本遺跡で検出された中期住居址の大まかな様相である。この他に、石囲埋甕炉と床面倒置土器、および石囲炉と埋甕が、各々に近接した一定の時期に集中する傾向が認められる。今後、本遺跡の十分な検討とともに、周辺遺跡および他地域との比較検討が必要とされよう。

住居址No	時 期	形 状	柱 穴	周 溝	炉				埋 甕	床面倒置土器	備 考
					地 床	埋 甕	石囲い	石囲埋甕			
2	阿玉台Ⅲ				(○)						
104	加E1	隅丸長方形	4								同一地点重複住居の可能性あり
23	〃	〃		○							
106	〃	楕円形	(5)	○							
102	〃	〃	(5)								
103	〃	〃	5～6		○						三脚付ミニチュア土器出土 同一地点重複住居の可能性あり
119	加E2	円形	5		(○)						1 有孔鏝付土器、耳飾り出土
105	〃	〃	6	○	○						
120	〃	隅丸方形	4								
101	〃	〃					○				
100	加E2(新)	〃									
121	〃(〃)	楕円形	6					○			
114	〃(〃)	〃							○		大珠形土製品出土
112	〃(?)	隅丸方形	4	(○)							
20	加E3(古)								○	2	ミニチュア土器・鏝付浅鉢出土
24	〃(〃)	楕円形	7							2(3)	
110	〃(〃)	円形	6				○				
21	〃	〃						○		(1)	
25	〃	円形	6						2		
111	〃	〃	8				○		○		
113	〃	?	(8)				(○)		○		
108	〃(新)						○		○		
107	〃(新)						○		○		
22	〃(〃)							○			
118											台形土器出土

2. 古墳～平安時代

小町田遺跡における出土土器の変遷

本項では、小町田遺跡出土の土器について、推移の概要を見てみたい。小町田遺跡の集落の存続時期、あるいは、一定の時期における集落の存在形態を把握するための一助になればというものであり、土器の厳密な型式編年を試みたものでないことは言うまでもない。また、ここでは主として古墳時代の土器変遷について気づいた点を列挙するにとどめたい。なお、当地域の平安時代の土器変遷については、『賀茂遺跡』の中で小島敦子が概観している。^{註1}賀茂遺跡に近接する当遺跡の土器変遷についても、小島のあとづけた変遷観がそのまま踏襲できるものと思われる。

小町田遺跡の古墳時代の土器については、大きく4段階（Ⅰ～Ⅳ）に区分することができる。

Ⅰ期は、いわゆる和泉期末葉に相当しており、71号住居の出土土器がこれにあたる。土器全体の器制としては、高坏、小型甕、甕等に和泉期の特性をよく残しているのであるが、床面直上より出土した模倣坏（71住-13）の存在をいかに理解したらよいか、明解を得ていない。現在のところ、本住居に直接伴なわないものではないかと考えている。なお、地床炉の使用もこの時期の特色である。

Ⅱ期は、ほぼ鬼高Ⅰ式の段階に相当している。土器の型式の特徴および層位的関係から3小期に区分される。第2小期と第3小期の間は榛名山二ツ岳火山灰（FA）が介在するのみであり、土器のみについては強いて差違は見出しがたいことから一つにくくり得るものである。

第1小期にあたる75号住居の土器群は、71号住居に直接連なるものと考えられる。この時期新たに須恵器模倣杯が出現してくるに加え、坏類を中心にした磨きの多用や折り返し口縁壺等に前代の特徴を強く残している。この段階から当遺跡ではカマド使用が開始される。

第2～3小期には、甕の長胴化傾向が顕著となる（81住-11）。カマドの使用とともにカマド用として新たに出現する甕は、前代の甕の底部を取り除いた形態のもの（15住-5、81住-8）と底部から口縁にかけてラッパ状に近く開くもの（15住-8）が見られる。坏はこの時期、明瞭でシャープな段を有する。TK47型式の須恵器坏蓋に極似するもの（15住-1・2、81住-9）を見る。

Ⅲ期は2小期に区分される。第1小期にあたる74号住居出土土器を見ると、甕、甕（74住-15、18）における顕著な長胴化が窺われ、カマド用の甕の完成を見たといえる。坏では、前代に比し、体部が浅くなる傾向が見られる。この段階、整形の特徴として、ごく一部に磨きを使用しつつも、全体として、ほぼ削りを基調とするようになっている。

Ⅳ期では、坏の口頸部に段を有するもの（66住-2、77住-2）とともに、奈良時代の土師器坏に連なる坏（66住-5、77住-5）が入ってくる。この段階を真間式直前のいわゆる鬼高Ⅲ式に併行するものとして理解できよう。

当遺跡では、古墳時代を通じ土師器のみであり、須恵器は全く見られない。須恵器の使用は次の奈良時代になってはじめて開始されたようである。



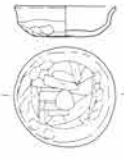
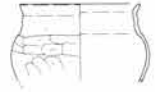
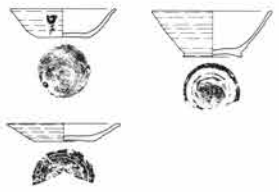
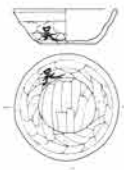
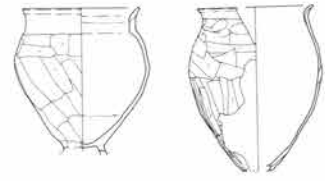
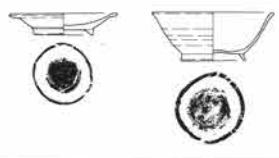

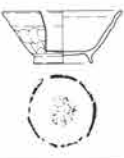

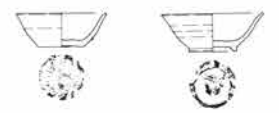


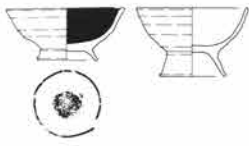
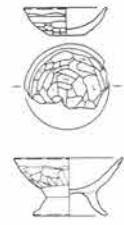
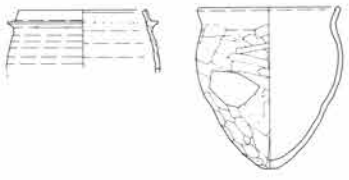

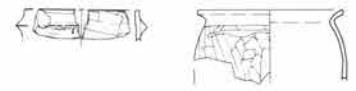

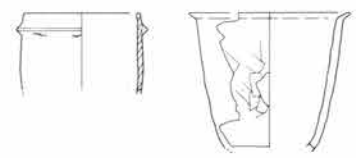
小町田遺跡における古墳時代以降の集落変遷の画期とその意義

小町田遺跡において我々が調査した調査域は、周辺の地形および検出遺構の分布状況、また発掘調査終了後の周辺地域のボーリング調査等からして、遺跡地のほぼ中核部分にあたっていることが予測された。また、調査域外南方部分を除くと、遺跡地の限界が確認されており、^{註2}南方とて調査域を上まわる遺構分布は予測さ

IV 成果と問題点

	坏・埴	甗・敲	高 坏	小型土器
I			 71住-7	 71住-5 71住-4 71住-1
II	 75住-2 75住-1 75住-4 75住-5	 75住-13 75住-9 75住-14		
	 15住-3 68住-1 15住-1 68住-2	 68住-5 15住-5 15住-7 15住-5		 68住-3
	 81住-9 81住-2 81住-4	 81住-11 81住-8		 81住-6 81住-12 81住-13
III	 74住-2 12住-1 74住-1	 74住-8 74住-15	 12住-9 74住-5 74住-6	 74住-7 81住-13
	 82住-4	 43住-3 43住-4		 43住-1
IV	 60住-2 66住-4	 66住-9		 66住-7

第257図 古墳時代の土器変遷

	須恵器	ロクロ使用土師器	土師器	甕・羽釜・土釜
I				
II				
III				
IV				
V				
VI				
VII				

第258図 賀茂遺跡における平安時代の土器変遷

IV 成果と問題点

れないことから、我々の検出した住居址群が、集落跡の過半を占めているものと考えられる。この調査成果と北西に隣接する賀茂遺跡^{註2}の調査成果をあわせた時、古墳時代以降の当地域の地域変遷の概要が理解されるものと考えられる。

本節では、集落構造の変遷過程に見出されるいくつかの画期を摘出し、その意義、問題点について若干考えてみたい。

(1) 古墳時代後期初頭における集落形成の開始

小町田遺跡における集落形成は、鬼高期直前の和泉期末葉に位置づけられる71号住居により開始されている。一方、賀茂遺跡における居住は、2号住居、4号住居を初現とし、小町田遺跡71号住居とほぼ同時期のものである。

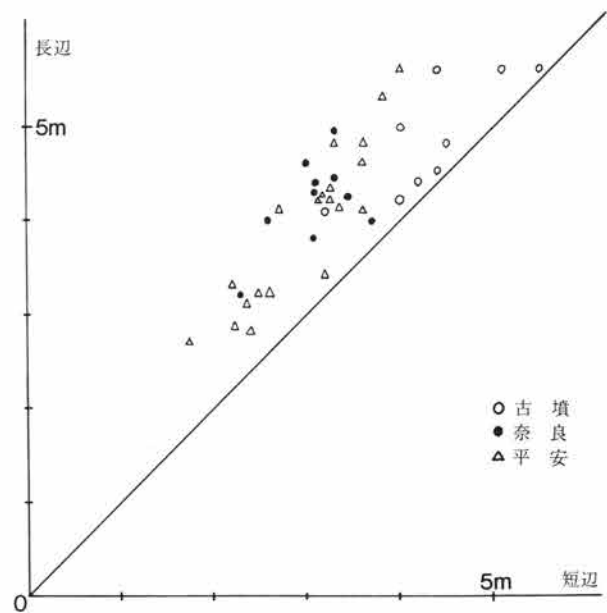
当地域における和泉期末段階における新たな形成については注意する必要がある。古式土師器を伴う段階の集落が、当地域の周辺では、深町遺跡、沖之郷遺跡、塚廻古墳群^{註3}等点在するが、これら集落跡の占地域には、重複して和泉期以降の継続的な集落形成を見ない。一方、小町田遺跡、賀茂遺跡では、古墳時代後期以降、奈良、平安時代と継続的に集落を見る点に共通した特色がある^{註4}。この時期、新たな技術体系にもとづく農耕開発を契機として当地域への移住がなされたものと考えられよう。また、新たな農耕開発に裏づけられた生産力の増大を基礎として、6世紀前半以降、近接する塚廻古墳群、あるいは塚井古墳群の被葬者層の成長を見たといえよう。

前項における土器区分からするならば、第II段階の一定の時期に榛名山二ツ岳火山灰層（FA）の降下を見る。15、68号住居址では、ほぼ床面直上にFA層が確認でき、81号住居址の覆土中には確認されていない。15、68号住居では、住居廃絶直後にFAの降下を見たのであり、FA降下時に81号住居が存在していたものと考えられよう。

前項における小町田遺跡の土器の変遷観に従えば、古墳時代の6段階の各小期について、検出住居のうちの2～3軒が属しており、この数を大きく出るのは認められない。これを即座に同一時期における集落の部分とするわけにはいかないが、数量的には、一時期における住居址の数としても大過ないものと考えられよう。前に遺跡地の広がりやを予測した南方部分を考慮したとしても、各小期について4～6軒程度のものであったと予測される。古墳時代の小町田遺跡は、1～2家族という、きわめて小規模な単位により、限定された地域に集落が維持されてきたものと考えられよう。

(2) 奈良時代の集落構成における規制の存在

賀茂遺跡の調査報告書において、古墳時代後期後半から奈良、平安にかけての住居変遷をたどった時、きわめて限定された空間の中で、建て替えを長期にわたって繰り返していった状況が把握された^{註5}。このことから、当該期における宅地域の存在、あるいは賀茂遺跡の集落における古墳時代から奈良・平安時代へのスムーズな変移が予測された。



第259図 住居址の平面規模

小町田遺跡では、賀茂遺跡で見られたような古墳時代から奈良時代への推移は認められない。古墳時代後期末に位置づけられる66号住居、77号住居の周囲には、これに直接続くと思われる奈良時代の住居を見出せない。また、奈良時代に位置づけられる住居のうちでは、時期的に先行すると考えられる27号住居、64号住居（東カマド使用の時期）の周囲には、その直前にあたる時期の住居を見出せない。71号住居にはじまる古墳時代後期を通じて連綿と形成されてきた集落とは、一定の隔絶を伴って奈良時代の集落の形成が始まったのであろうか。

奈良時代前半の一定の時期に1号溝が掘鑿されたと考えられるが、この溝と密接な関連を予想させる11・49・52・54・64・67・70号住居がある。これら住居は、すべて北カマドであり、規模、平面形状等、きわめて均質なものである点が注意される。集落形成にあたって、溝を含めて統一的な意図が働いていることが予測される。

この時期、全国的に律令制施行の段階であり、律令制的村落再編成の動きの中で小町田遺跡のこの状況を見ることができないであろうか。

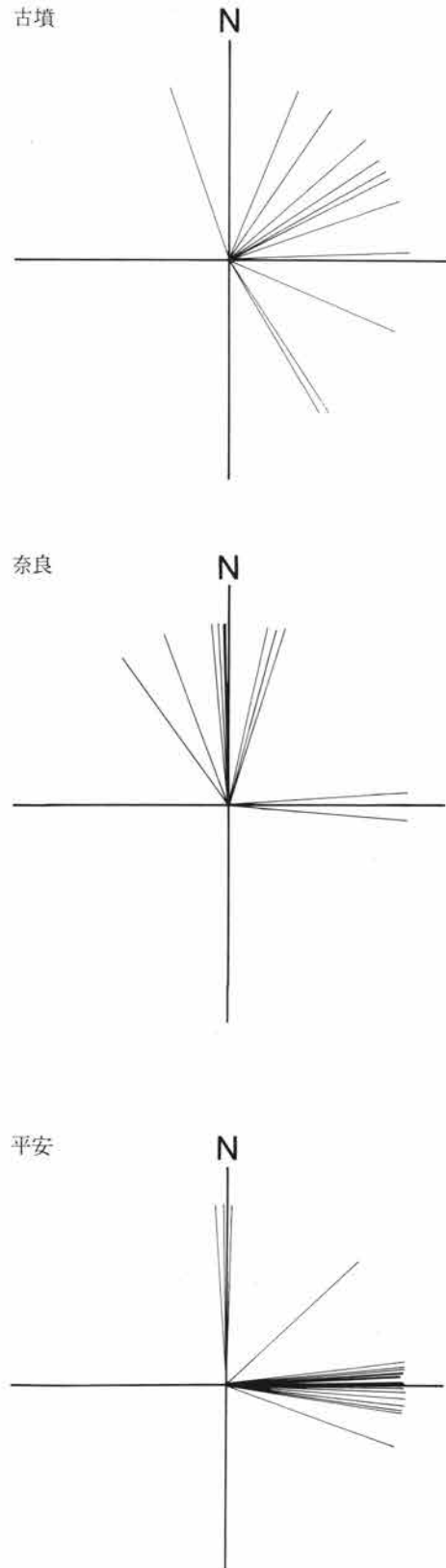
ところが、奈良時代後半に位置づけられる14・16・69号住居を見ると、前半段階に見られたほどの斉一性が失われていることに気づく。このことは、平安時代についても同様である。

奈良時代の中にあって、きわめて近接した地域の集落構成に、賀茂遺跡例と小町田遺跡例の異なる2者が共存していたことが推された。この相違は、律令制施行前における単位集落の性格と密接に関連したその後の変化であったと考えられよう。

(3) 平安時代集落に見る生産力の増大

奈良時代から平安時代にかけての小町田遺跡の集落址に顕著な変化がいくつかあげられる。一つは、集落域の大幅な面的拡大であり、一つには、集落を構成する住居数の量的拡大である。また、この時期、集落の構成にはじめて掘立柱建物が加わってくることである。

集落の拡大傾向は平安前期段階で認められる。掘立柱建物は、平安期の土器変遷の第2～3段階の時期にあたるものと考えられる。前の奈良時代における変化が主として律令施行の一貫という外的要因に基づくものであるとするならば、平



第260図 住居址の主軸方位

IV 成果と問題点

安時代のこの変化は、生産力の増大という内的要因に求めることができよう。しかも、従来にない飛躍的な増大がこの時期あったものと考えられる。

掘立柱建物については、住宅であったと考えられ、かかる生産力の増大に裏づけられた集落内における有力層の輩出との関係で扱えられるものと考えられよう。

- 註1 小島敦子「賀茂遺跡出土の平安時代の土器について」1984（文献32）
2 右島和夫・藤巻幸男・小島敦子1984（文献32）
3 石塚久則1980（文献36）
4 小町田遺跡では、未調査部分に古式土師段階の集落が存在することも予測しなければならないが、我々の調査地内では該期の住居址は検出されておらず、遺物も微量であったことから、可能性はきわめて少ないと考えている。
5 右島和夫「賀茂遺跡の集落について」1984（文献32）

参考文献

- 1 右島和夫・藤巻幸男・柏崎敦子 『小町田B遺跡・賀茂遺跡—国道122号道路改良地域埋蔵文化財発掘調査略報』(勸群馬県埋蔵文化財調査事業団1980(昭和55)年)
- 2 大木紳一郎編『庚塚・上・雷遺跡—国道122号(太田バイパス)道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書I』(勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 1980(昭和55)年)
- 3 石塚久則 a 『清水田遺跡、塚井・塚廻古墳群—県営太田東部地区ほ場整備事業に伴う「太田東部遺跡群」昭和51年度発掘調査概報』 群馬県教育委員会 1977(昭和52)年
b 『塚廻り古墳群』 群馬県教育委員会 1980(昭和55)年
- 4 飯塚卓二 『小町田遺跡—昭和52年度太田東部地区県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要』 群馬県教育委員会 1978(昭和53)年
- 5 能登 健・石坂 茂・小島敦子・徳江秀夫 「赤城山南麓における遺跡群研究—農耕集落の変遷と溜井灌溉の出現—」『信濃』第35巻4号 1983(昭和58)年
- 6 能登 健・小島敦子 「弥生から平安時代の遺跡分布」『新里村の遺跡』 1984(昭和59)年
- 7 野村 哲編 『群馬の地質をめぐって・日曜の地学5』 筑地書館 1978(昭和53)年
- 8 木村喜雄・野村 哲・中島 啓著 『群馬のおいたちをたずねて(上)』 上毛新聞社 1977(昭和52)年
- 9 大地のあゆみ編集委員会編 『大地のあゆみ』 上毛新聞社 1982(昭和57)年
- 10 沢口 宏 a 「大間々扇状地の地形発達史—予報—」 群馬県高等学校社会科研究会会誌第7号 1966(昭和41)年
b 「渡良瀬川扇状地とその教材化」 群馬県立太田女子高等学校 1977(昭和52)年
c 「第二章地形・地質」「第三章土壌と土地利用」『大泉町誌上巻』 1978(昭和53)年
- 11 『群馬県遺跡地図』 群馬県教育委員会 1973(昭和48)年
- 12 宮田 毅 『大塚・間之原遺跡確認調査の概要—第1次調査—』 太田市教育委員会 1981(昭和56)年
『 —第2次調査—』 太田市教育委員会 1981(昭和56)年
- 13 『野尻湖発掘展図録』 群馬県立博物館 1981(昭和56)年
- 14 『御正作遺跡発掘調査概報』 大泉町教育委員会 1981(昭和56)年
- 15 『焼山遺跡総合調査報告 第1分冊』 はにわの会 1968(昭和43)年
- 16 山内清男 『日本先史土器の縄文』 先史考古学会 1979(昭和54)年
- 17 赤山容造 『三原田遺跡』資料合冊 群馬県企業局 1980(昭和55)年
- 18 海老原郁雄也 「観沢遺跡」 栃木県教育委員会 栃木県埋蔵文化財調査報告第34集 1980(昭和55)年
- 19 神奈川考古同人会 「神奈川県における縄文時代中期後半土器編年表試案」『神奈川考古』 4 1978(昭和53)年
- 20 小林達雄也 「シンポジウム—北関東を中心とする縄文中期の諸問題」 日本考古学協会 昭和56年度大会1981(昭和57)年
- 21 小林達雄編 「日本原始美術大系1 縄文土器」 講談社 1977(昭和52)年
- 22 丹羽 茂 「大木式土器」『縄文文化の研究』 4 縄文土器II 1982(昭和57)年
- 23 能登 健 「縄文文化解明における地域研究のあり方—関東地方加曾利E式土器を中心として」『信濃』27—4 1975(昭和50)年
- 24 能登 健・石坂 茂 「重弧土器の系譜」『信濃』32—4 1980(昭和55)年
- 25 谷井 彪也 「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』(勸埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982(昭和57)年)
- 26 井上唯雄 「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究』 8号 1978(昭和53)年
- 27 井上 太 『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』 富岡市教育委員会 1981(昭和56)年
- 28 山下歳信 『天神風呂遺跡発掘調査報告書』 大胡町教育委員会 1981(昭和56)年

- 29 中沢 悟 『清里・陣馬遺跡』(勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981(昭和56)年)
- 30 綿貫綾子 『有馬条理遺跡第二分冊』 渋川市教育委員会 1983(昭和58)年
- 31 宮田 毅 『大塚・間之原遺跡一川向・中西田地区(第2次)』 太田市教育委員会 1983(昭和58)年
- 32 新井房夫 『関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層』『考古学ジャーナル』No157
1979(昭和54)年
- 33 石井 寛 『集落の継続と移動』『縄文文化の研究』第8巻 雄山閣 1982(昭和57)年

写 真 图 版



1 本調査前の状況（北から）すでに表土掘削が行なわれている。



2 1区・2区の調査（北から）1とほぼ同地点。上方右側に埋没沼がある。



1 基準土層 (E-35グリッド西壁)



2 基準土層 (E-47グリッド西壁)



3 埋没沼の土層堆積状態



4 同3 軽石層の埋積状態 (上が榛名FA、下が浅間C)



5 遺構検出作業 (南側部分)



6 遺構検出作業



7 グリッド調査 (2区)



8 排水作業 (C-23グリッド周辺)



1 1～3区 縄文遺構全景（南から）



2 2号住居址（西から）



3 2号住居址遺物出土状態（南から）



4 5号住居址（東から）



5 5号住居址 炉（南から）



1 20号住居址遺物出土状態（北から）



2 同1



3 同1 床面倒置土器（第57図1）



4 同1 床面倒置土器（第57図2）



5 21号住居址 石囲炉



6 同5 石柱復元



7 22号住居址遺物出土状態（南から）



8 同7 埋壺炉



1 23号住居址遺物出土状態（北から）



2 ピットの配置状況



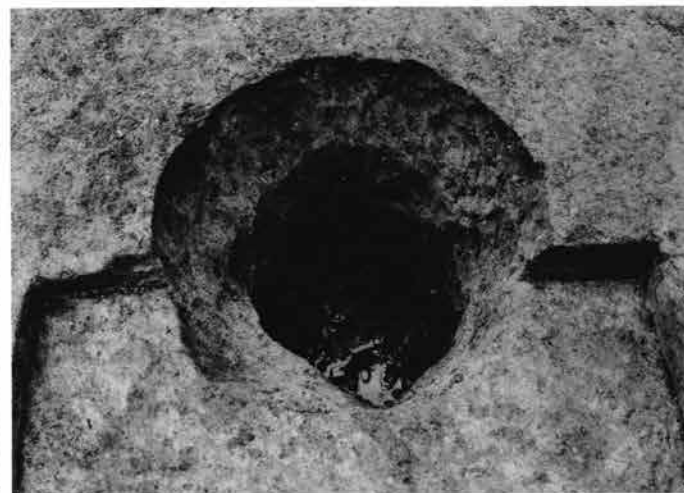
3 同1 埋壺炉



4 同1 ピット上の埋設土器



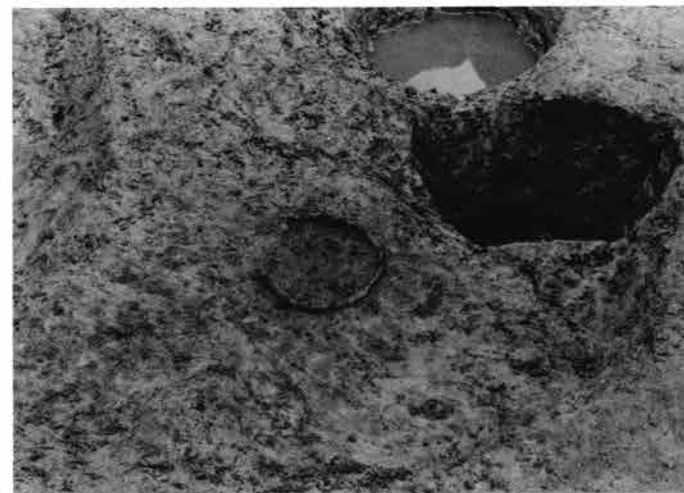
6 25号住居址遺物出土状態（南から）



5 同4 ピット



7 同6 1号埋壺



8 同6 2号埋壺



1 24号住居址全景（東から）



2 同1 セクション（東から）



3 同1 遺物出土状態（西から）



4 同1 一括土器の出土状態（西から）



5 同4 床面倒置の大型土器（北東から）



6 同3 手前に浅鉢がある



7 同6 床面に設置された浅鉢



8 同1 埋壺炉



1 24号住居址 主要土器の出土状態



2 100・101号住居址上層の遺物出土状態（東から）



3 同2（西上方から）



4 同2 台形土器出土状態



5 同2 深鉢土器出土状態



1 100・101号住居址遺物出土状態（東から）



2 同1 全景（東から）



3 同1（南から）



4 100号住居址遺物出土状態（東から）



5 同4 深鉢土器出土状態



6 同5



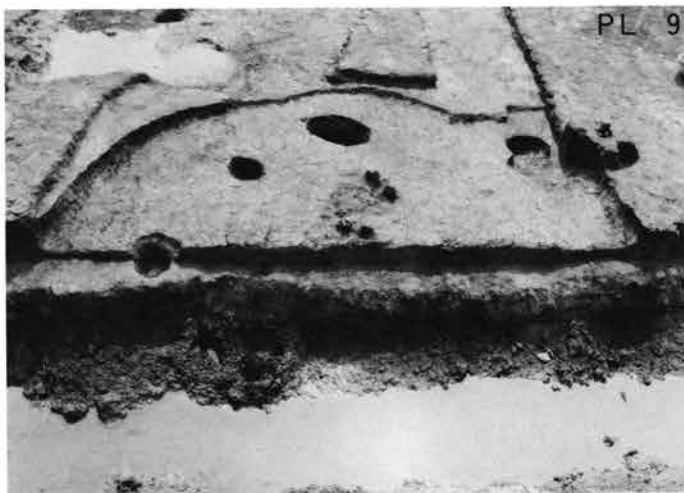
7 101号住居址内の集石



8 同7 炉



1 102号住居址遺物出土状態（西から）



2 同1 全景（東から）



3 同1 深鉢土器出土状態



4 同1 三脚付ミニチュア土器の出土状態



5 103号住居址遺物出土状態（南から）



6 同5 全景（南から）



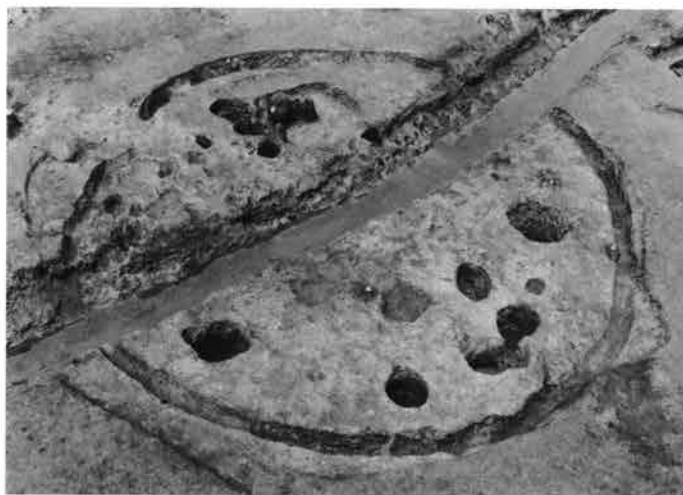
7 同5 浅鉢出土状態



8 同5 炉



1 104号住居址 (西から)



2 105号住居址 (南から)



3 106号住居址遺物出土状態 (東から)



4 同 全景 (東から)



5 107号住居址 石囲い炉



6 110号住居址全景 (北から)



7 108・110号住居址遺物出土状態 (西から)



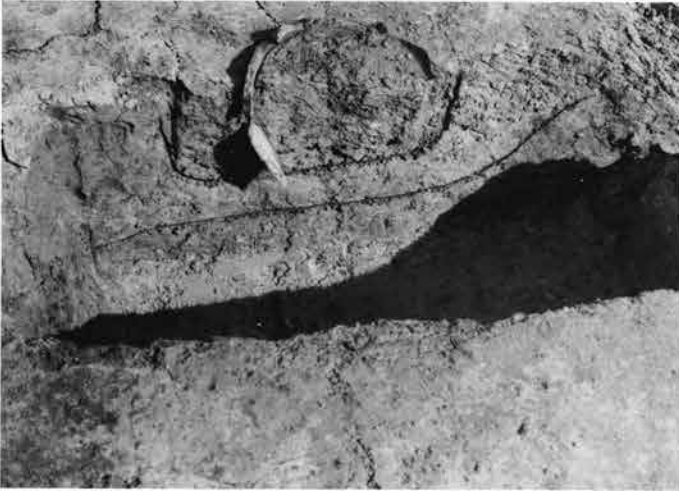
8 同 7 石囲い炉



1 111号住居址全景（西から）



2 同1 石囲い炉



3 同1 埋甕



4 112号住居址遺物出土状態（南から）



5 同4 周溝



6 同4 全景（南から）



7 同4 貼り床を施したピット



8 同7



1 113号住居址遺物出土状態（西から）



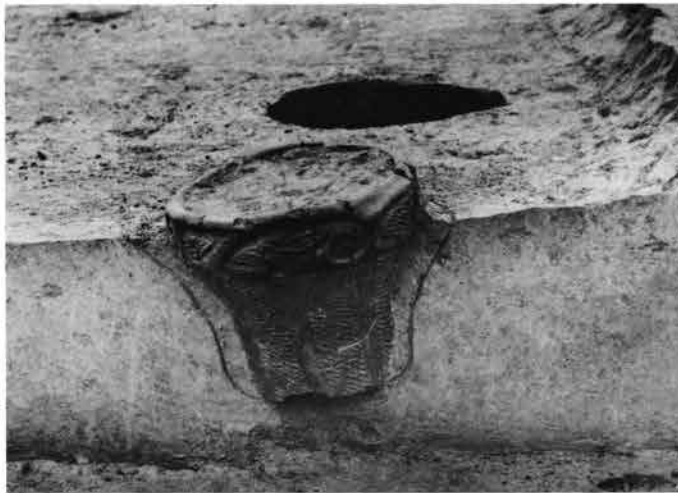
2 同1 全景（北から）



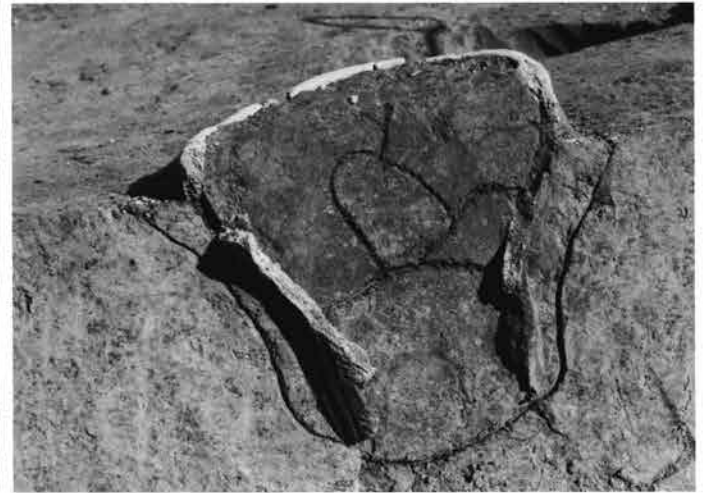
3 同1 炉



4 同1 埋甕



5 同4 埋設状態



6 同4 充填土の状態



7 114号住居址全景（南から）



8 同7 埋甕炉



1 115号住居址全景（南から）



2 116号住居址全景（東から）



3 117号住居址全景（南から）



4 118号住居址全景（東南から）



5 119号住居址（南から）



6 121号住居址全景（南から）



7 同6 石囲炉



8 同7 セクション



1 120号住居址遺物出土状態（南から）



2 同1 床面一括土器の出土状態



1 120号住居址床面一括土器出土状態



2 同1



3 同1



4 同1



5 同1



6 同1 (床面倒置土器)



7 同1 柱穴、重複する土坑の遺物出土状態 (南から)



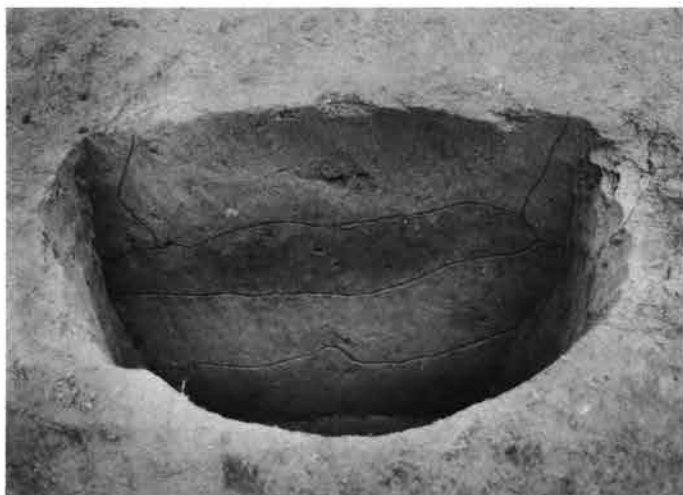
8 同1 柱穴上半部出土の土器



1 120号住居址遺物出土状態（南から）



2 52号土埴



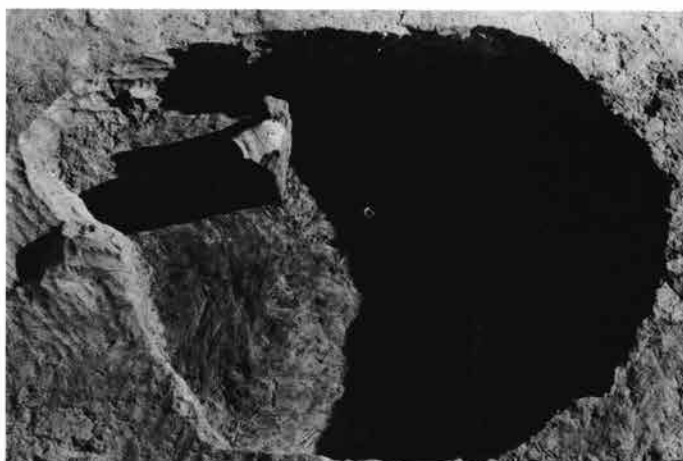
1 4号土坑セクション



2 6号土坑



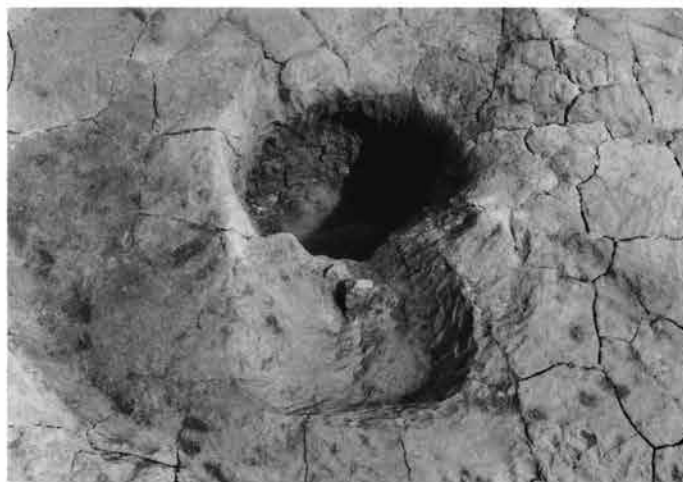
3 7号土坑



4 8号土坑



5 12号土坑 (2号住居址内)



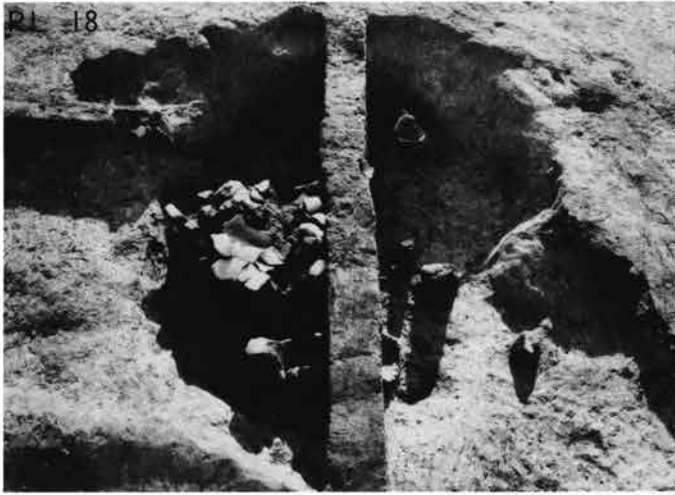
6 13・14号土坑 (2号住居址内)



7 15号土坑



8 16号土坑 (32・34号土坑と重複)



1 9号土坑遺物出土状態



2 同1 セクション



3 同1 小型土器出土状態



4 同3



5 同1 台付鉢出土状態



6 同1 全景



7 同1 骨片の出土状態



8 同7 拡大



1 22号土坑



2 同1 ミニチュア土器の出土状態



3 17・18・19号土坑



4 24号土坑



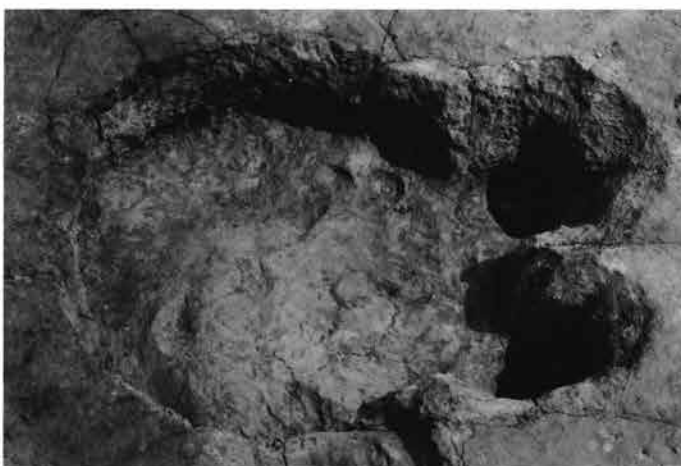
5 26・27号土坑



6 26号土坑 浅鉢の出土状態



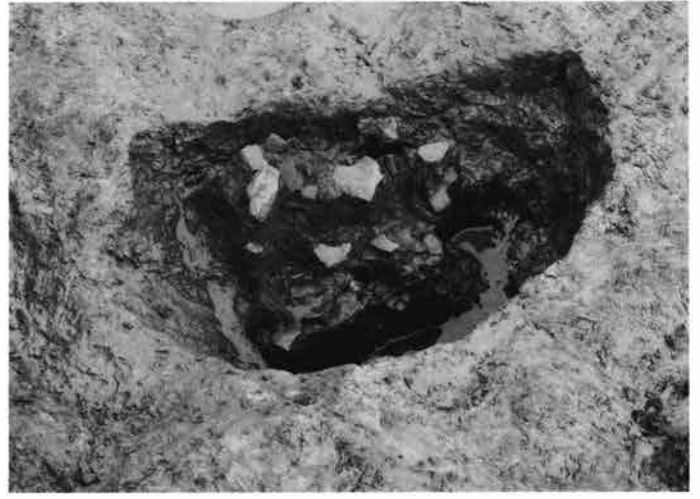
7 28号土坑遺物出土状態



8 同7 全景



1 31号土坑セクション



2 31号土坑



3 同2 崩落状況



4 32号土坑



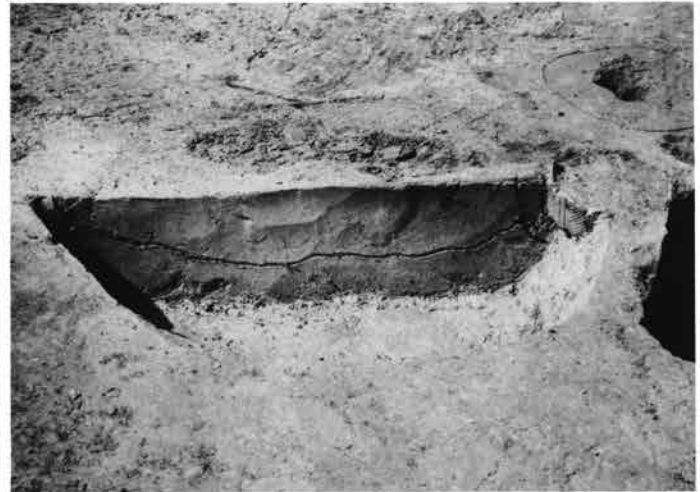
5 33号土坑



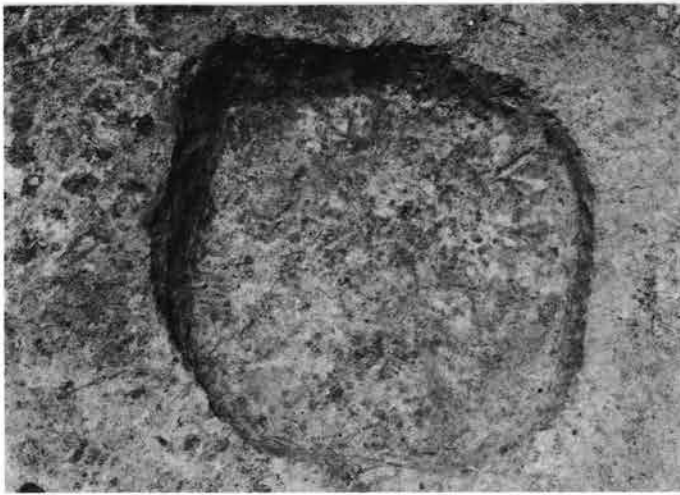
6 36号土坑



7 38・39号土坑



8 41号土坑



1 42号土坑



2 43号土坑



3 44号土坑



4 45号土坑



5 46号土坑 (105号住居址と重複)



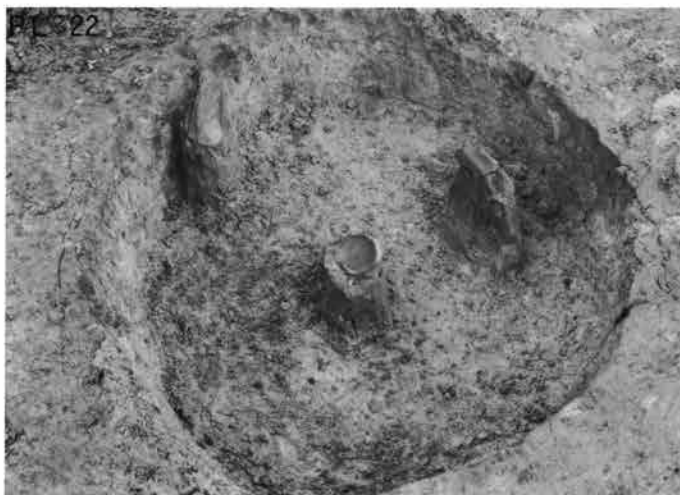
6 49号土坑 一括土器出土状態



7 50号土坑



8 51号土坑セクション



1 同7 全景



2 54号土塚セクション



3 55・56・65号土塚



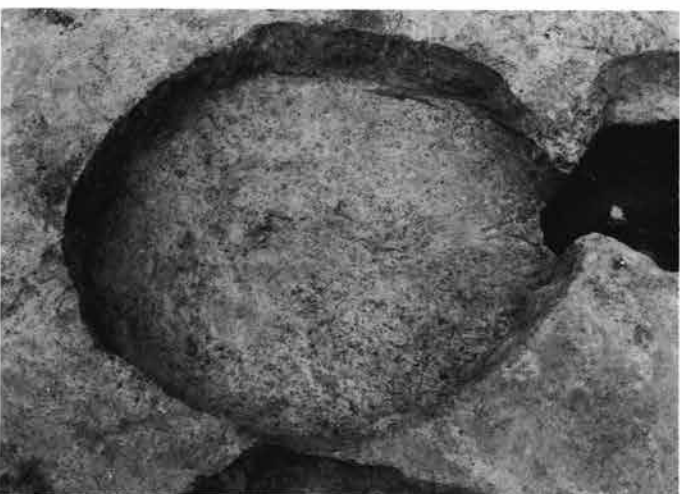
4 55号土塚 浅鉢出土状態



5 56号土塚



6 57号土塚



7 59号土塚



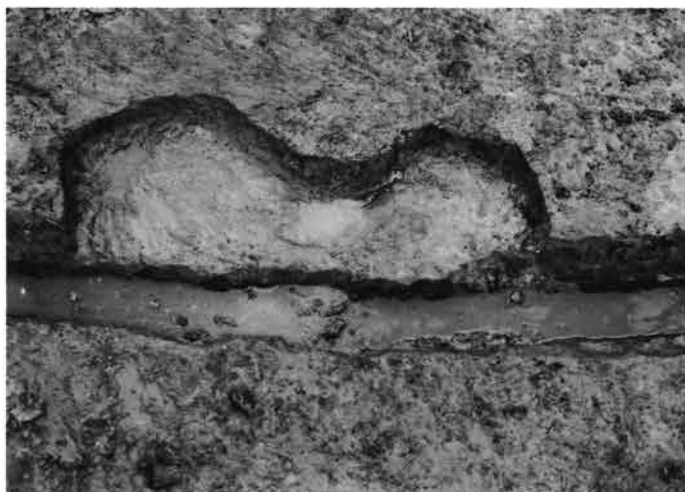
8 60号土塚



1 74号土坑



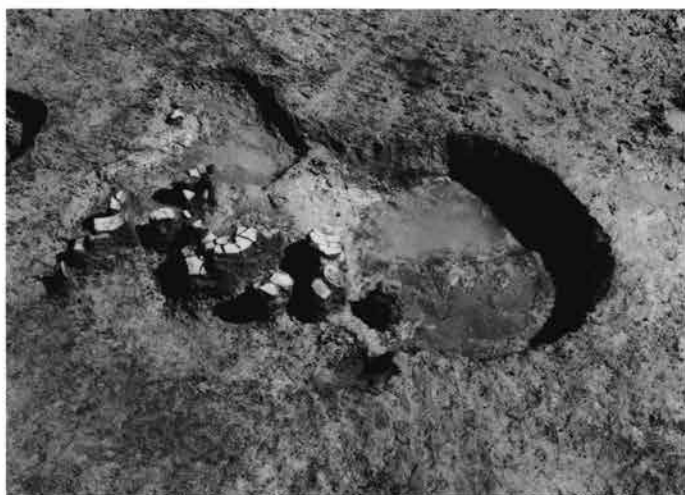
2 83号土坑



3 84号土坑



4 85号土坑



5 88・89号土坑



6 90号土坑



7 95・96号土坑



8 100号土坑 (115号住居址と重複)



1 101号土坑



2 102号土坑



3 103・104号土坑



4 105・106号土坑（119号住居址と重複）



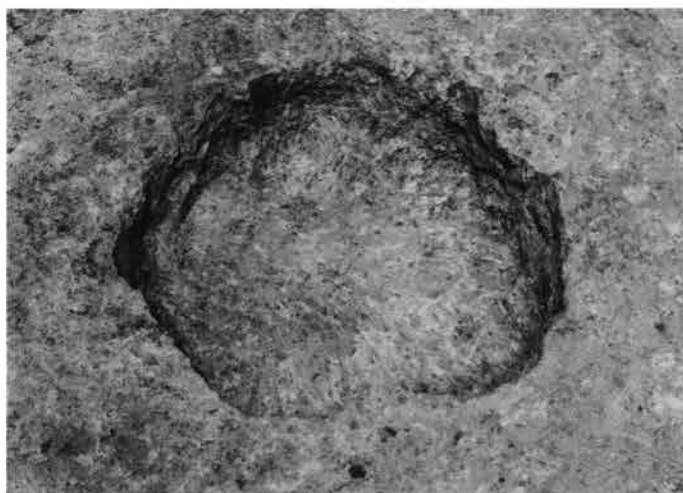
5 108号土坑



6 同5 一括土器出土状態



7 110号土坑（5号埋設土器と重複）



8 111号土坑（6号埋設土器と重複）



1 113号土坑



2 115号土坑



3 121号土坑



4 122号土坑



5 D-22グリッド (南から)



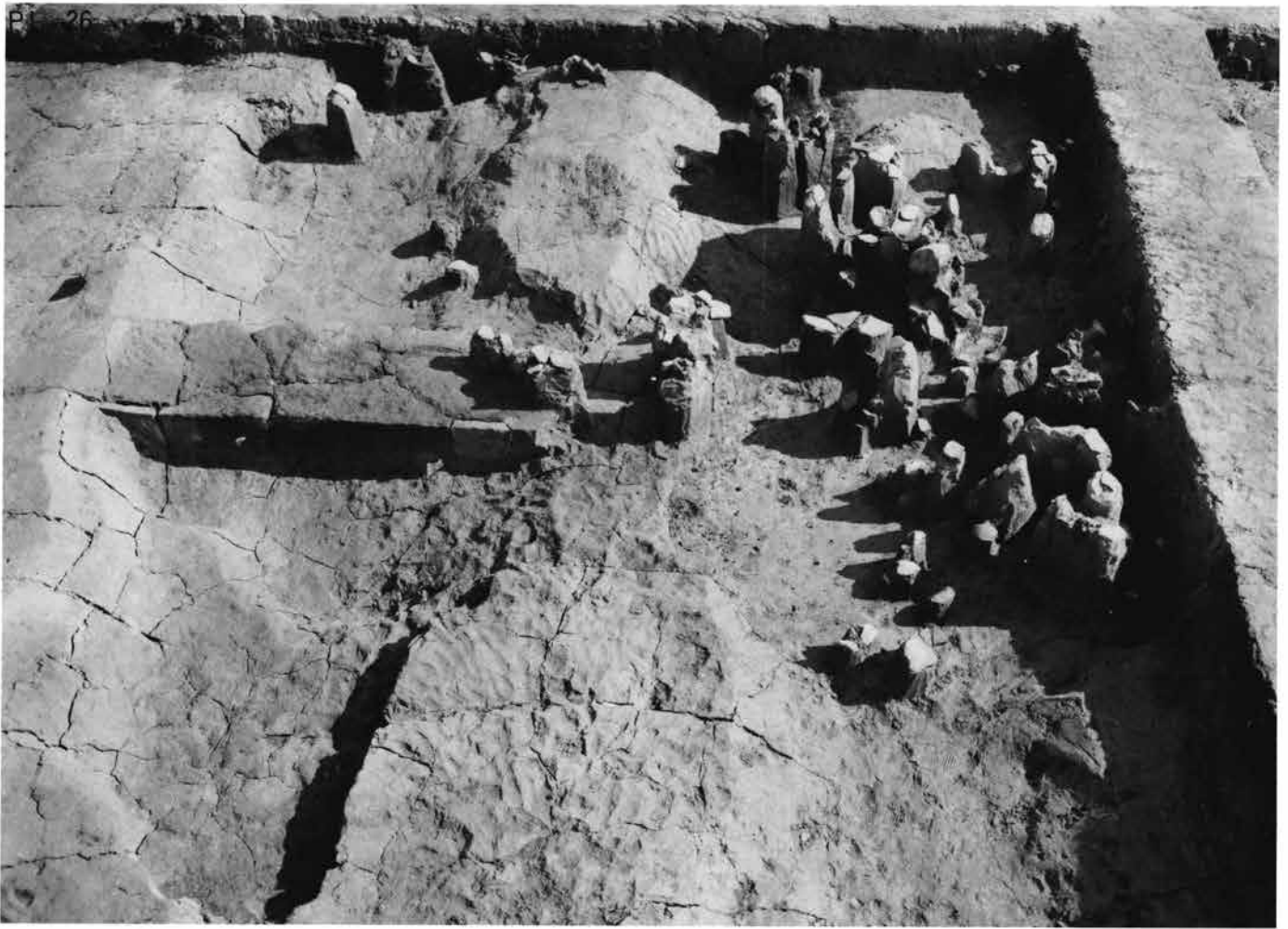
6 同5 深鉢形土器の出土状態



7 同6



8 同6



1 D-20グリッド遺物出土状態（北から）



2 同1（東から）



3 同1（南から）



4 C-20グリッド遺物出土状態（東から）



5 同4



1 1号埋設土器 (B-23グリッド)



2 4号埋設土器 (D-26グリッド)



3 C-24グリッド 遺物出土状態 (東から)



4 同3 2号・3号埋設土器



5 同3 石皿



6 同3 倒置土器



7 21号住居址下の遺物出土状態 (西から)



8 同7 形象把手の出土状態



1 C-24・25、D-24・25グリッド下層の遺物出土状態（南から、中央がI21号住居址）



2 同1（東から）



3 倒置土器（D-24グリッド）



4 C-25グリッド 堀之内I式土器の出土状態



5 深鉢形土器の単独出土（C-48グリッド）



1 古墳～平安時代遺構全景（調査区南側部分）



2 同1（調査区中央部分）



1 12号住居址全景（南から）



2 同左 遺物出土状態



3 15号住居址全景（南から）



4 同左 カマド



5 43号住居址全景（南から）



6 同左 遺物出土状態（北から）



7 42号住居址全景（南から）



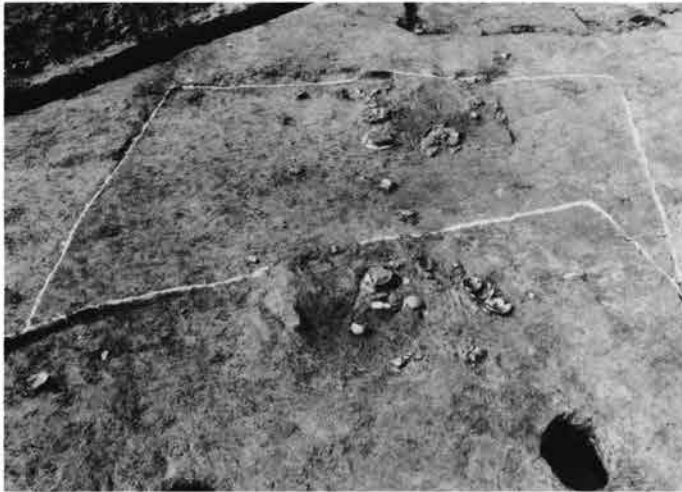
8 同左 カマドおよび貯蔵穴



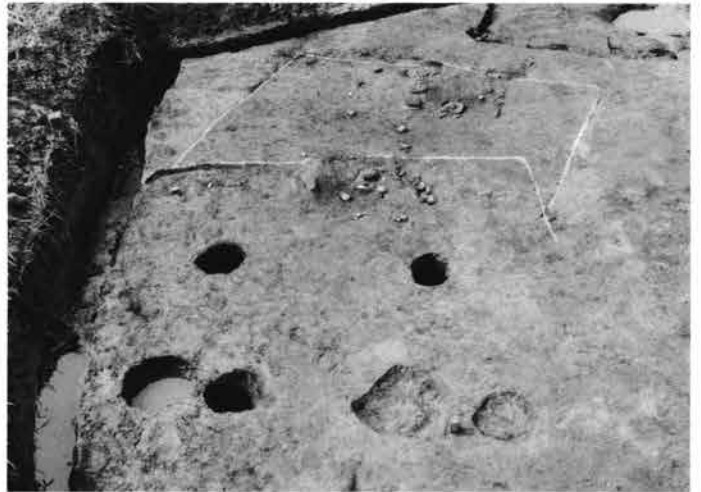
1 53号住居址全景（北から）



2 同左 カマド



3 65・66号住居址遺物出土状態（南から）



4 同左 全景（南から）



5 65号住居址カマド



6 66号住居址カマド



7 68号住居址全景（西から）



8 同左 床面榛名山ニツ岳火山灰(FA)堆積状況



1 71号住居址遺物出土状態（南から）



2 同左 全景（南から）



3 同上 貯蔵穴遺物出土状態



4 同左 床面遺物出土状態



5 74号住居址遺物出土状態（西から）



6 同左 床面遺物出土状態（南から）



7 同上 カマド



8 同左 北東隅炭化材



1 75号住居址遺物出土状態（西から）



2 同左 床面遺物出土状態（西から）



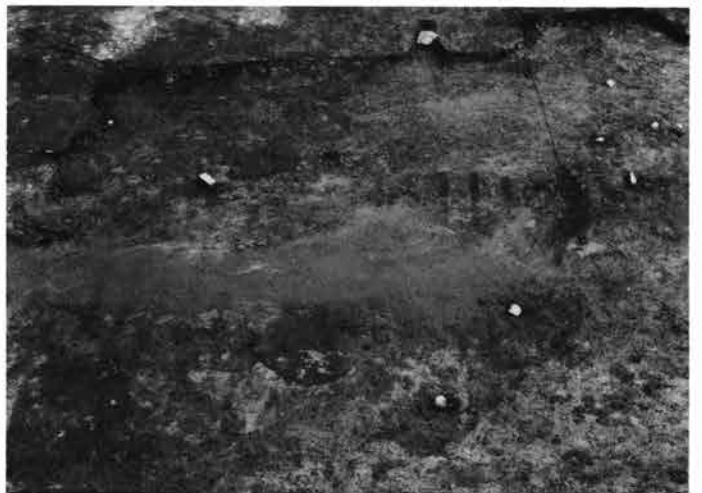
3 同上 カマド



4 同左 床面遺物出土状態



5 78号住居跡全景（西から）



6 77号住居址全景（西から）



7 81号住居址全景（西から）



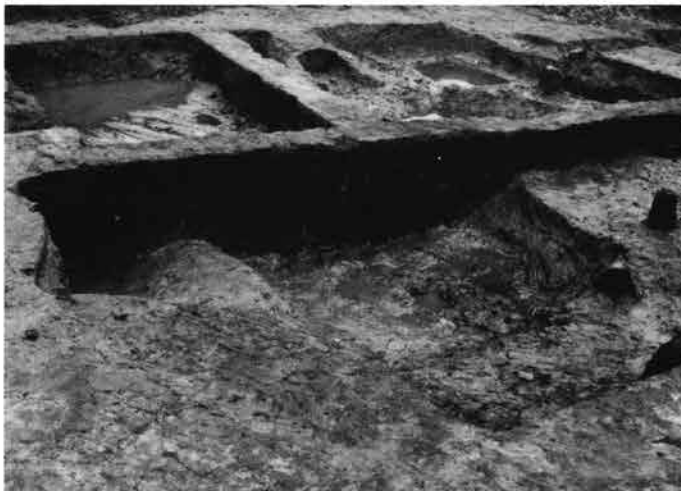
8 同左 カマド（南から）



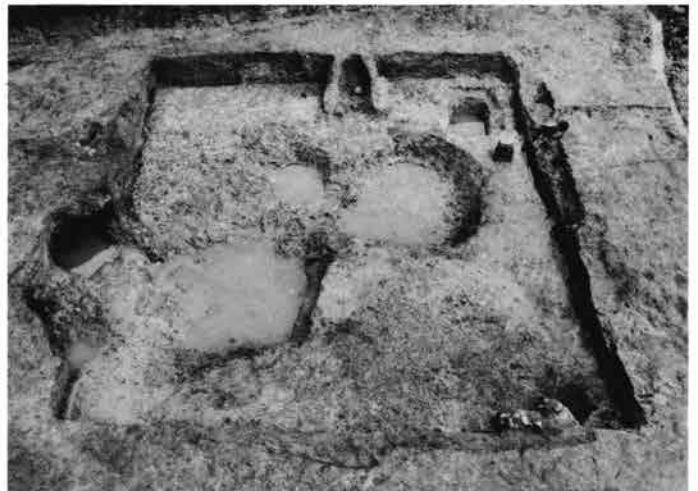
1 81号住居址 カマド遺物出土状態



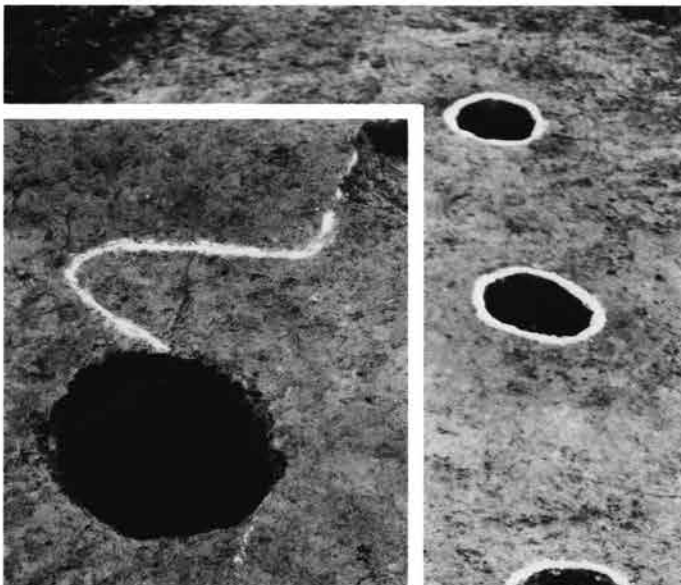
2 同左 カマド



3 82号住居址 埋積土層断面 (南から)



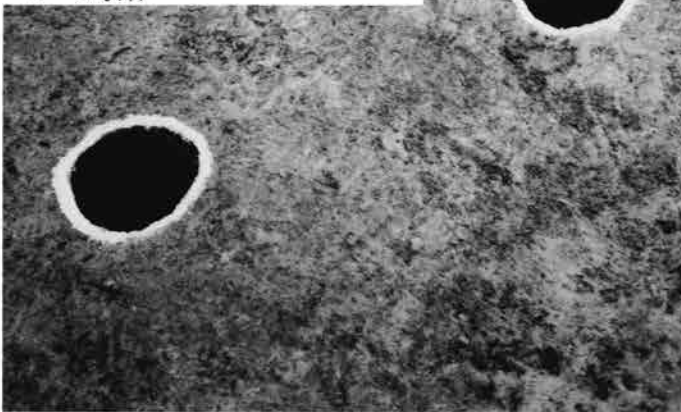
4 同左 全景 (西から)



6 3号井戸



5 同上 カマド



7 4~7号井戸



8 1・2号井戸



1 11号住居址 カマド



2 10・11号住居址 掘り方全景(南から)



3 16号住居址全景(南から)



4 同左 遺物出土状態



5 27号住居址遺物出土状態(西から)



6 同左 全景(西から)



7 同上 カマド



8 同左 遺物出土状態



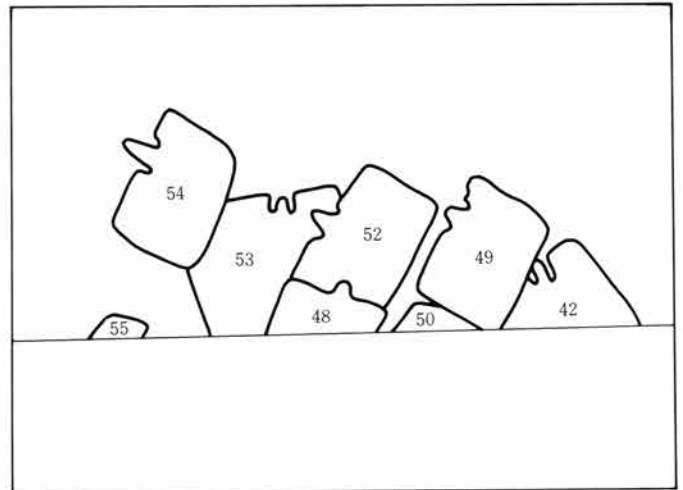
1 49号住居址カマド



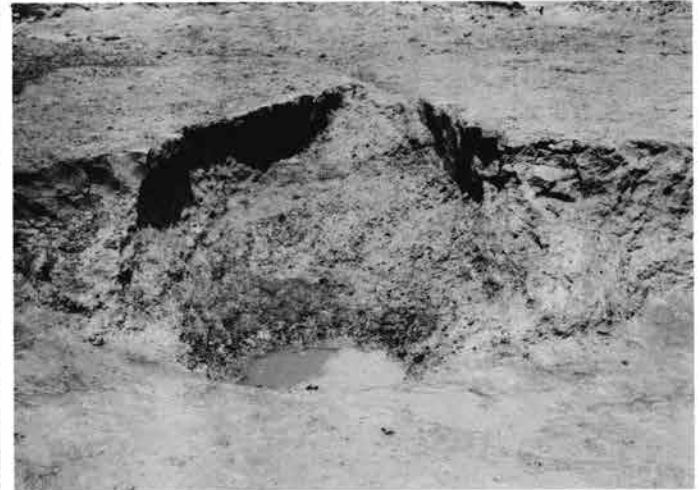
2 同左 全景 (南から)



3 52号住居址全景 (南から)



4 54号住居址全景 (南から)



5 同左 カマド



6 67号住居址全景 (南から)



7 同左 カマド



1 64号住居址全景（南から）



2 同左 カマド



3 同上 東壁カマド



4 70号住居址全景（南から）



5 69号住居址 埋積土層断面



6 同左 全景（南から）



7 80号住居址全景（東から）



8 同左 カマド



1 58・59号住居址全景（東から）



2 1号溝 発掘状況（北から）



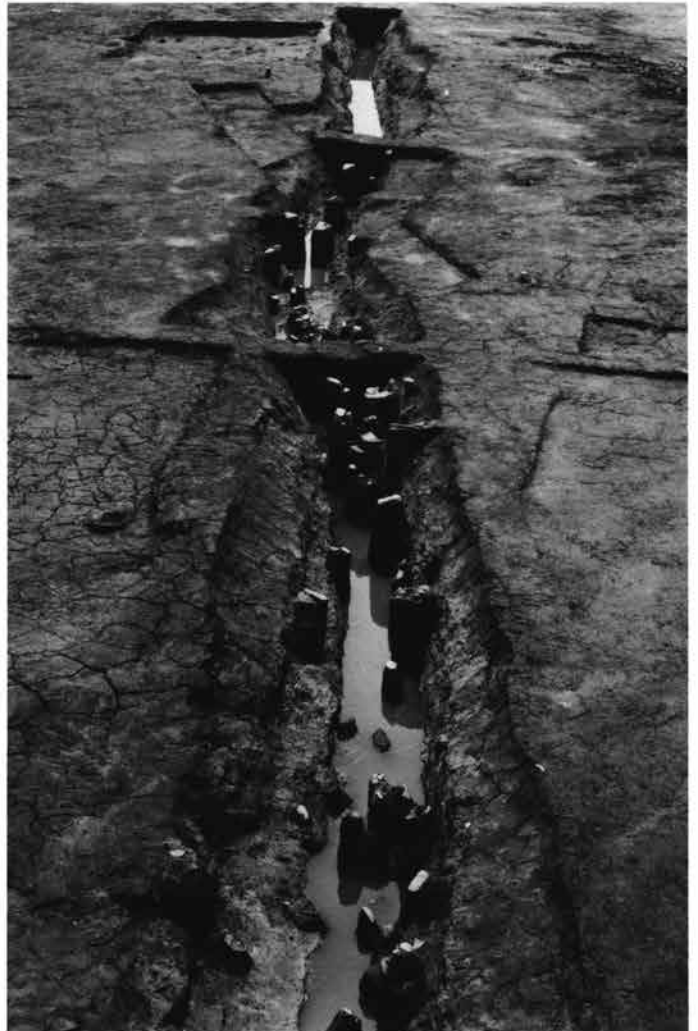
3 1号溝 埋積土層断面



4 同左 遺物出土状態



5 同上 全景（南から）



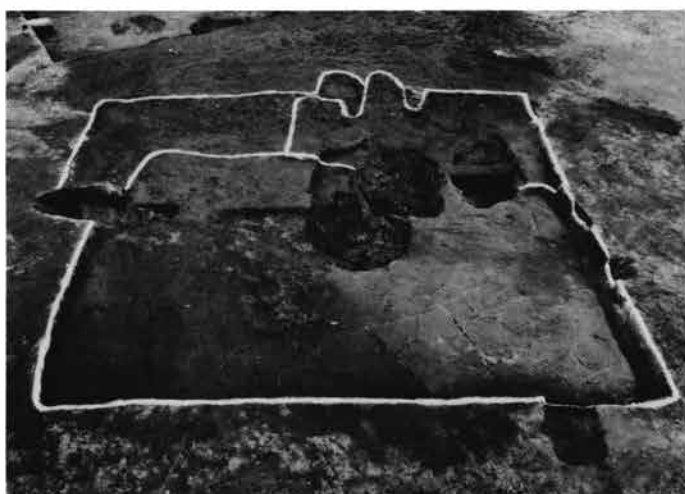
6 同左 遺物出土状態（北から）



1 1号住居址全景 (西から)



2 同左 カマド



3 6・7・13号住居址全景 (西から)



4 7号住居址全景



5 8・9号住居址全景 (西から)



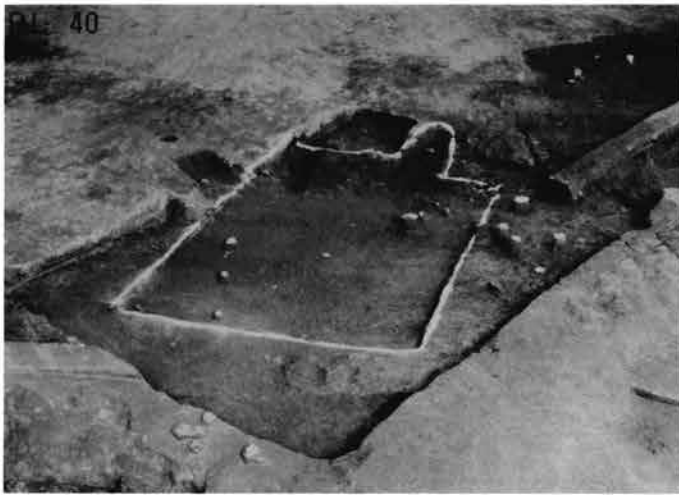
6 8号住居址カマド



7 9号住居址カマド 重複する灰層



8 同左 カマド



1 10号住居址全景（西から）



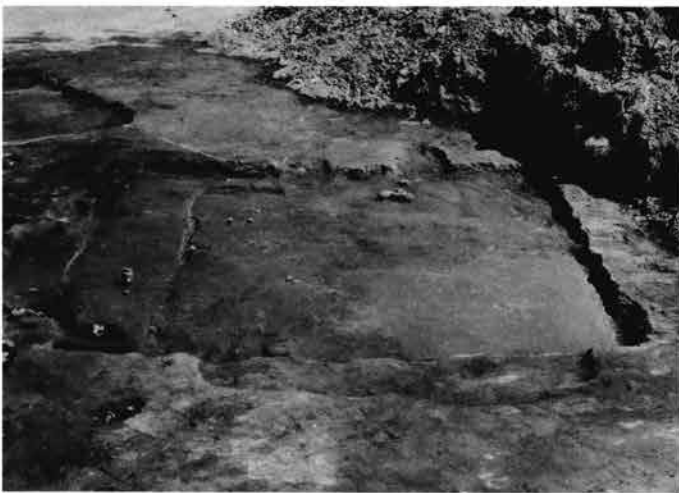
2 同左 遺物出土状態



3 同上 遺物出土状態



4 同左 遺物出土状態



5 17・18号住居址全景（西から）



6 18号住居址カマド



7 29号住居址全景（西から）



8 30号住居址全景（西から）



1 32号住居址全景（西から）



2 同左 遺物出土状態



3 34号住居址全景（西から）



4 同左 カマド



5 39号住居址全景（西から）



6 発掘作業状況



7 40号住居址全景（西から）



8 同左 カマド



1 41号住居址全景 (南から)



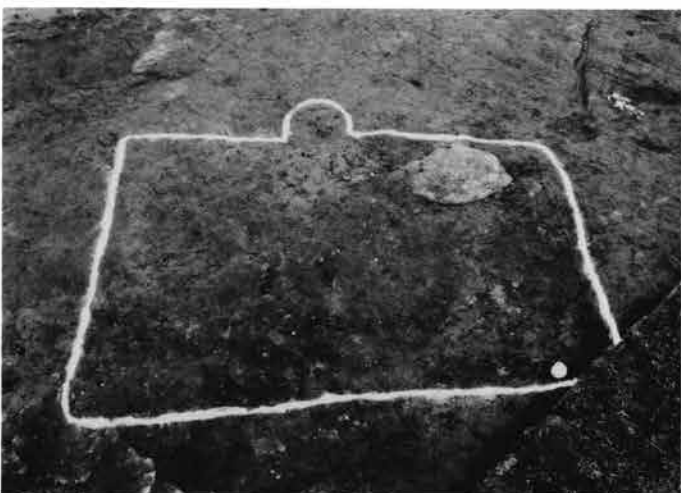
2 同左 カマド



3 51号住居址全景 (西から)



4 同左 カマド



5 47号住居址全景 (西から)



6 56号住居址全景 (西から)



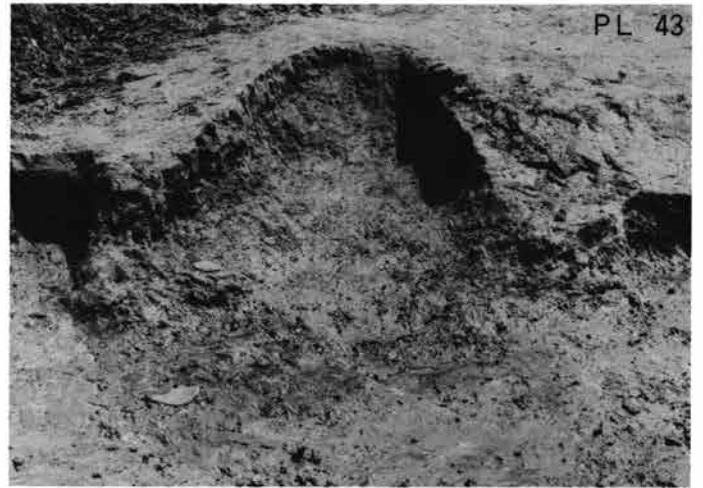
7 同右上 カマド



8 60号住居址全景 (西から)



1 61号住居址全景（西から）



2 同左 カマド



3 63号住居址全景（西から）



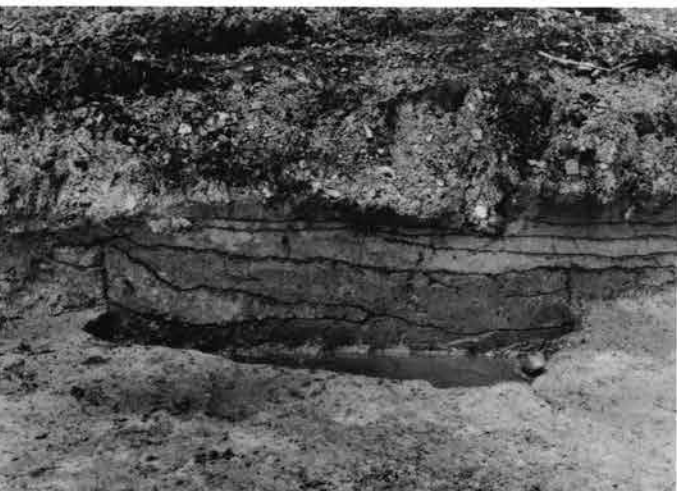
4 同左 カマド



5 45号住居址全景（南から）



6 同左 カマド



7 55号住居址全景（東から）



8 同左 遺物出土状態



1 31号住居址全景（西から）



2 38号住居址全景（西から）



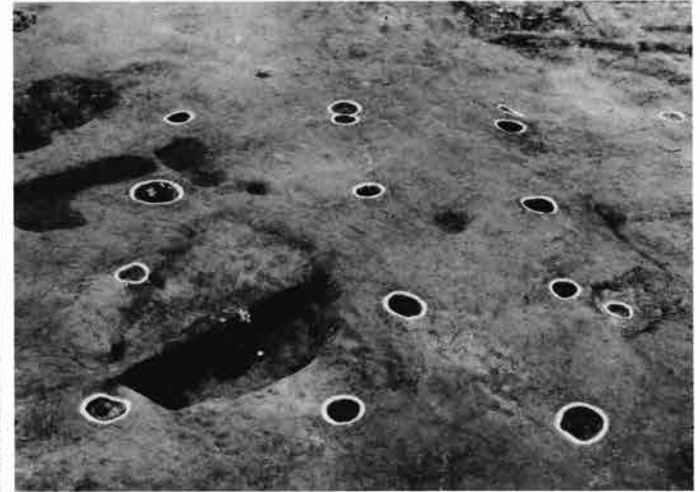
3 44号住居址カマド（北から）



4 同左 全景（東から）



5 3号住居址全景（西から）



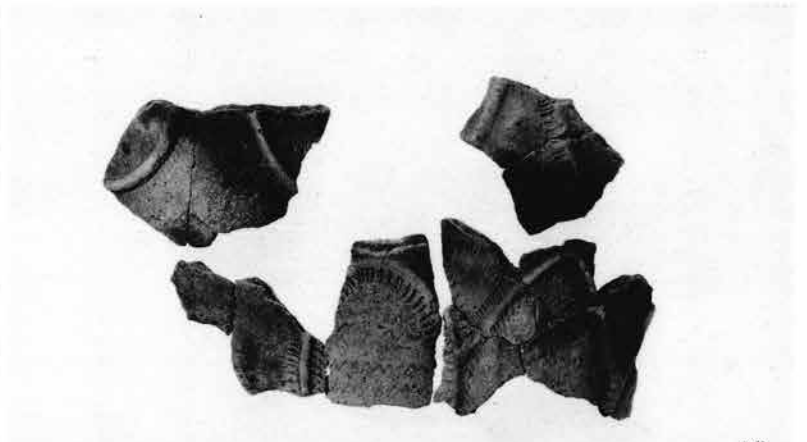
6 1・2号掘立柱建物址全景（南から）



7 3号掘立柱建物址全景（南から）



23住



2住



120住



23住



120住



120住



120住



120住

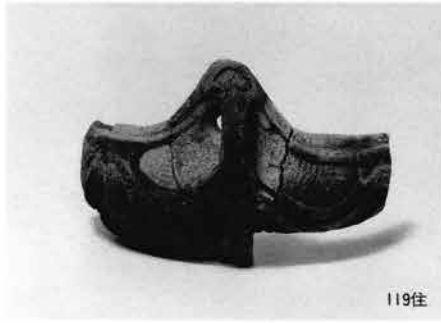


120住





120住



119住



120住



102住



121住



100住



121住



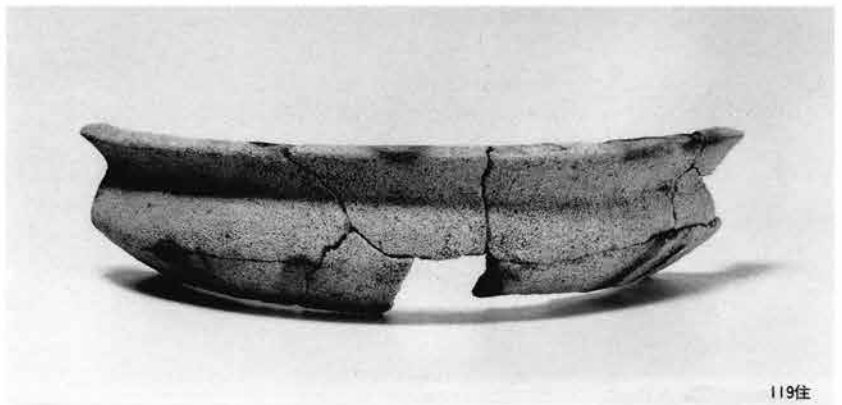
100住



119住



100住



119住



20住



20住



24住



24住



24住



24住



24住



24住



24住



24住



120住



121住



120住



24住



24住



24住



24住



24住



21住



108住



25住



113住



25住



113住



25住



25住



25住



25住



25住



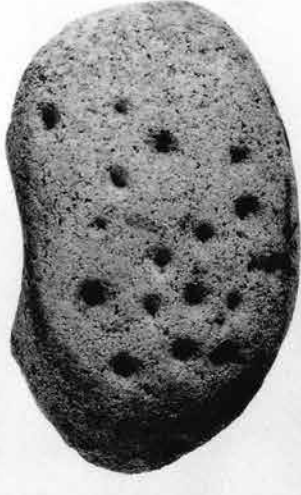
108住



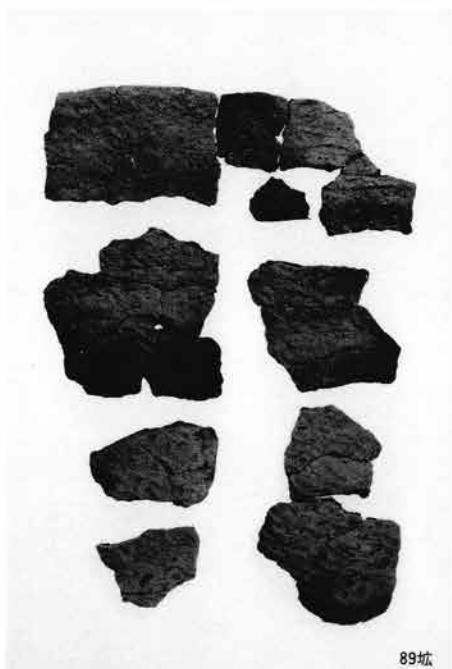
22住



22住



120住



89 坩



22 坩



38 坩



9 坩



9 坩



28 坩



106 坩



106 坩



9 坩



106 坩



106 坩



55 坩



26 坩



106 塚



60 塚



90 塚



46 塚



108 塚



106 塚



9 塚



12 塚



C-48 G



C-23 G(21 住)



C-23-25 G



C-23-25 G



D-26 G



B-24 G(21 住)



C-23-25 G



D-24 G(倒置)



4号埋設



3号埋設



1号埋設



5号埋設



A' 22G



2号埋設



6号埋設



A' 22G



A' 21G



A' 21G



52号



A' 21G



D-25G



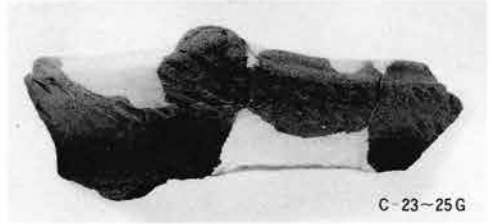
D-22G



D-20G



71住



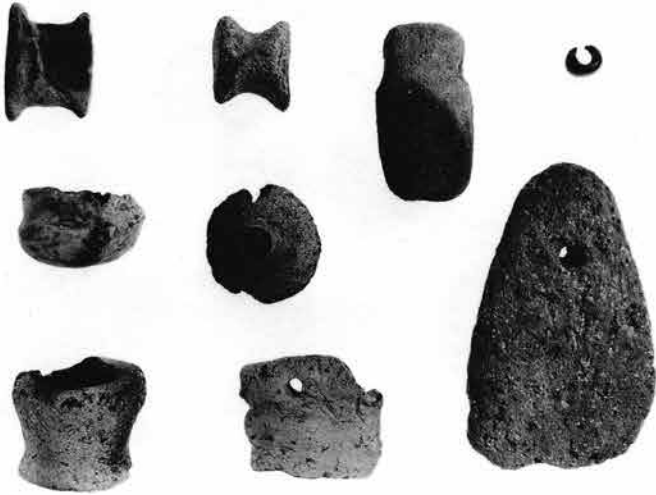
C-23-25G



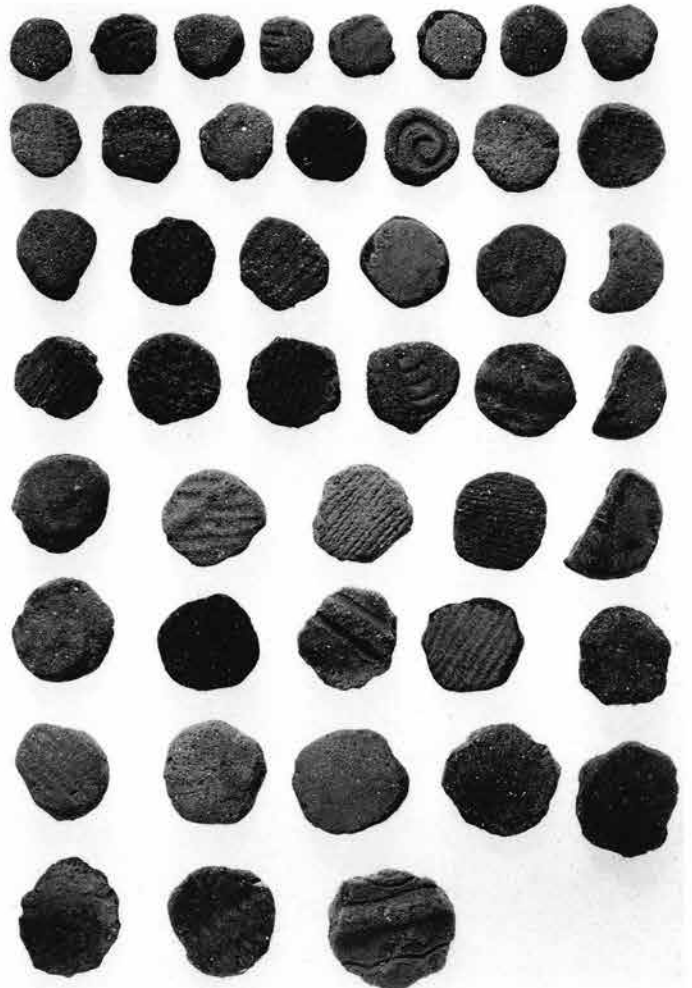
C-23-25G



28坑



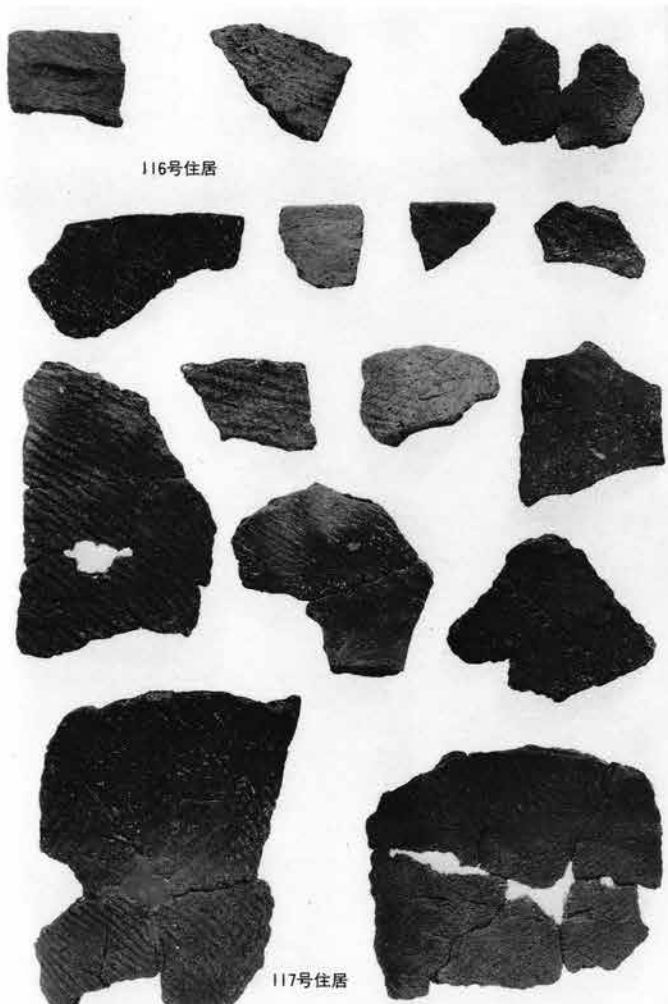
1 土製品・軽石製品・ミニチュア土器・玉



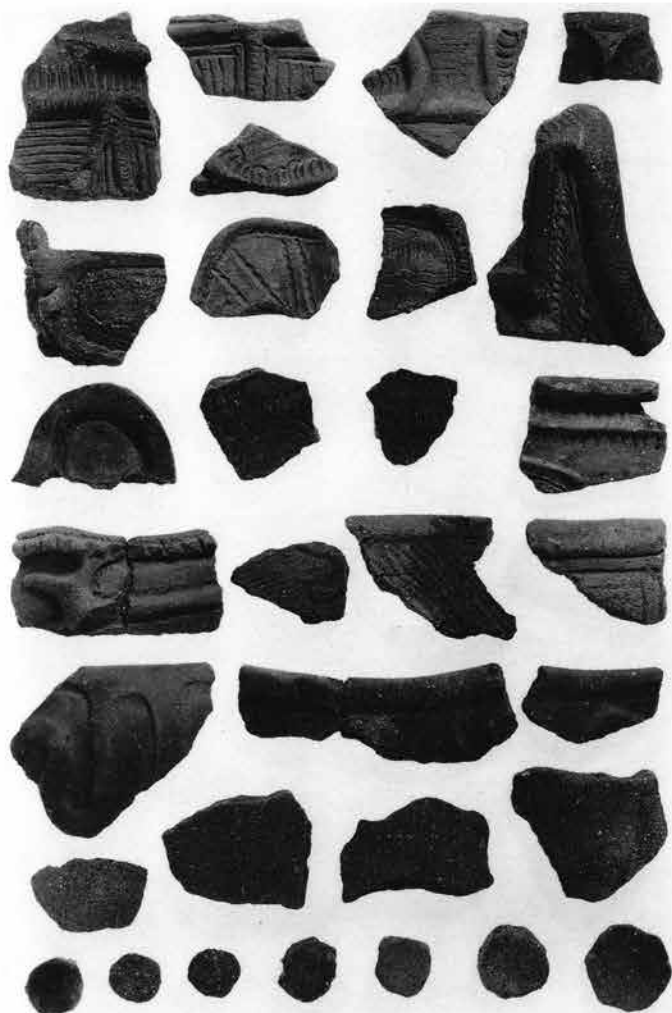
3 土製円盤 (遺構外出土)



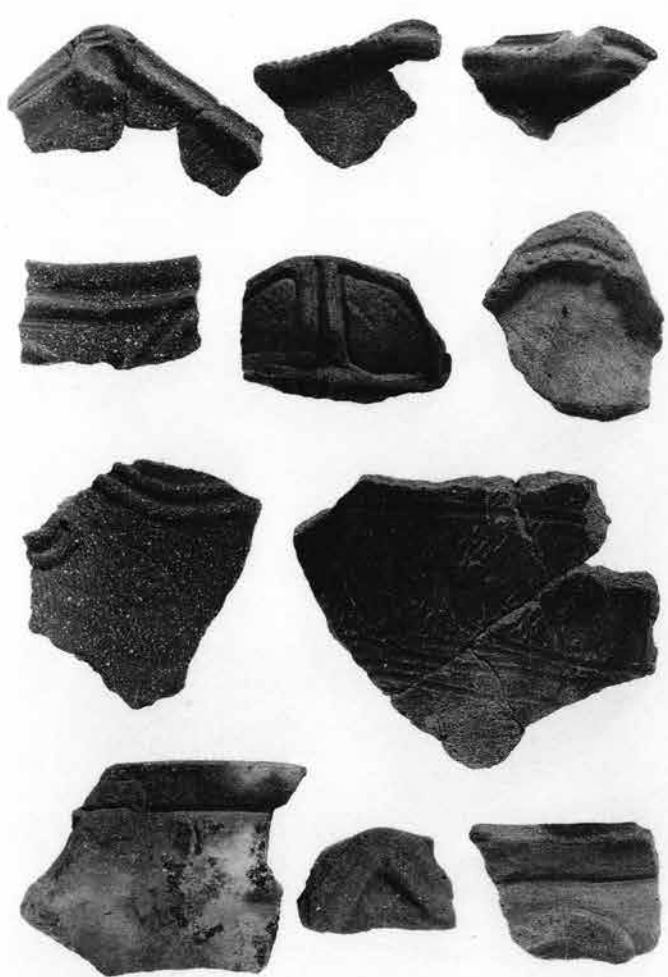
2 形象把手・土偶



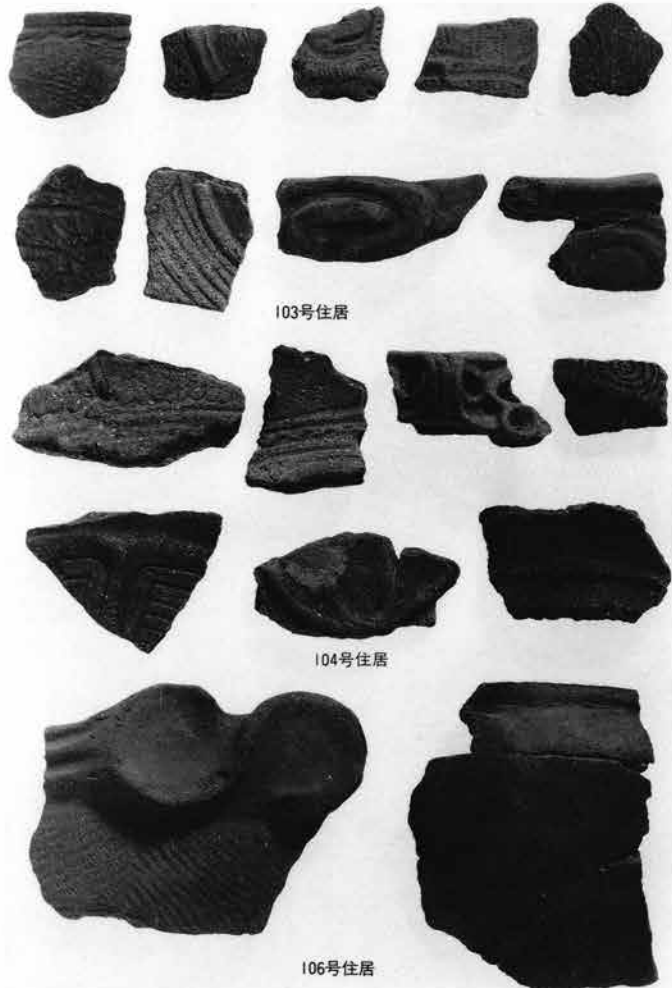
1 住居址出土土器



2 住居址出土土器 2号住居



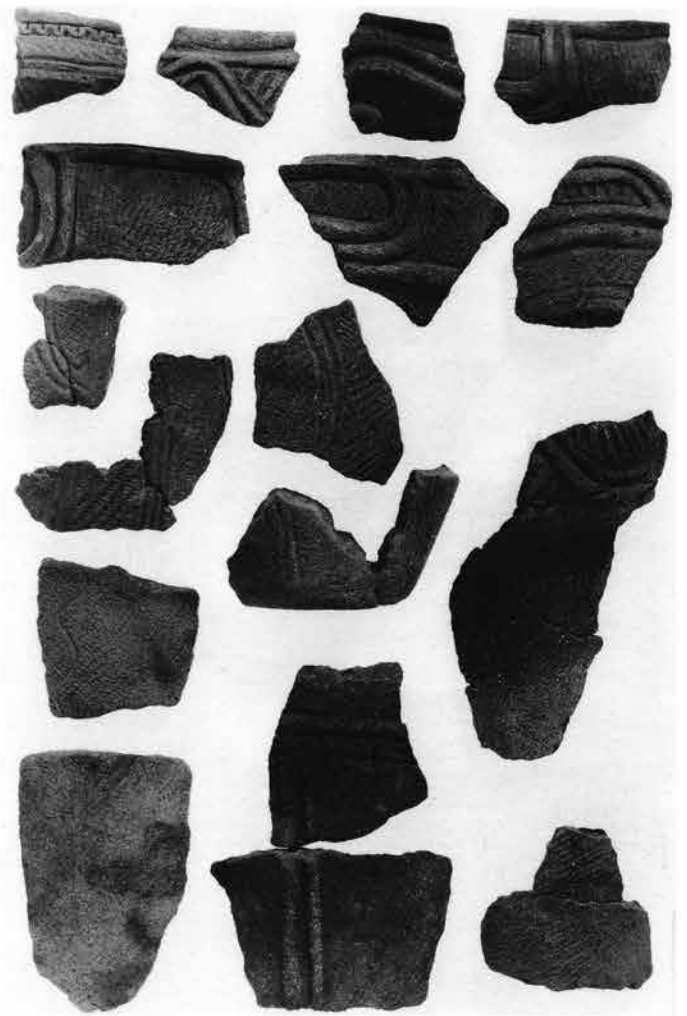
3 住居址出土土器 23号住居



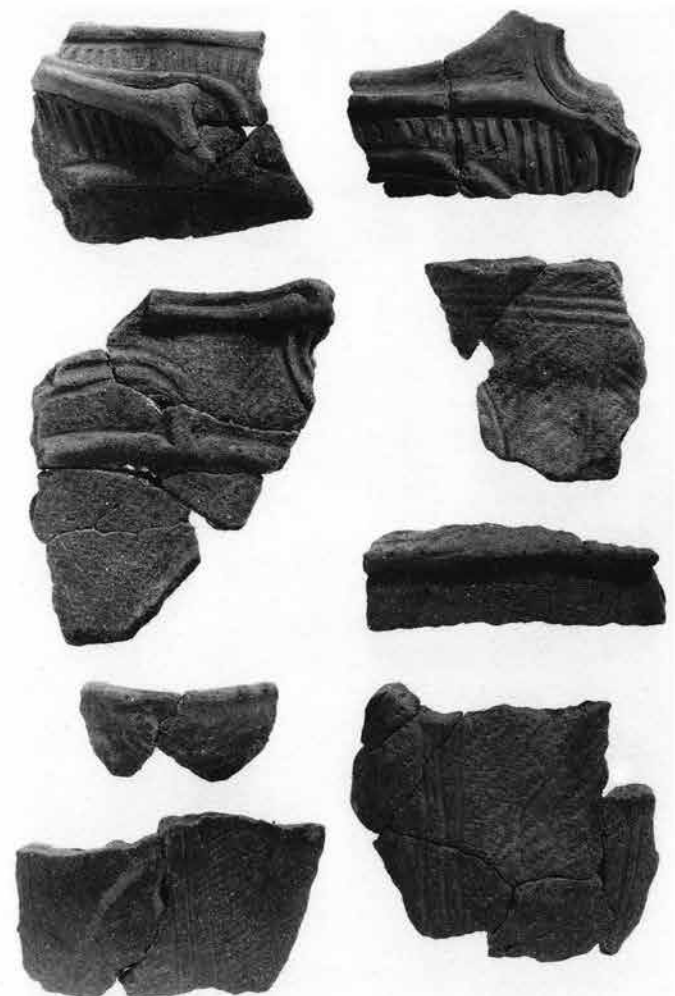
4 住居址出土土器



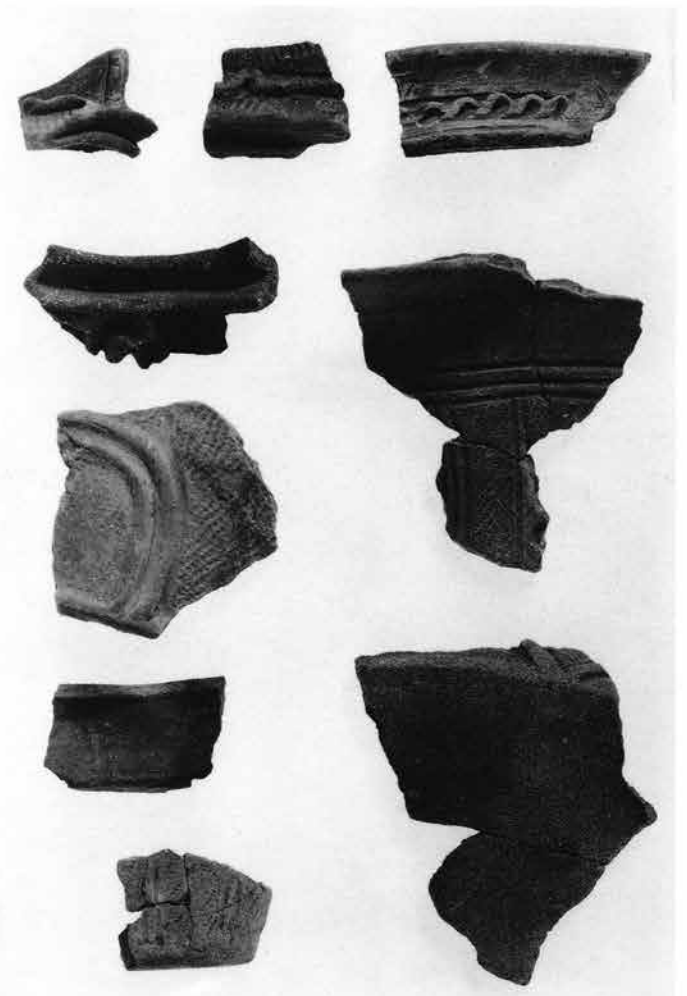
1 住居址出土土器 120号住居



2 住居址出土土器 120号住居



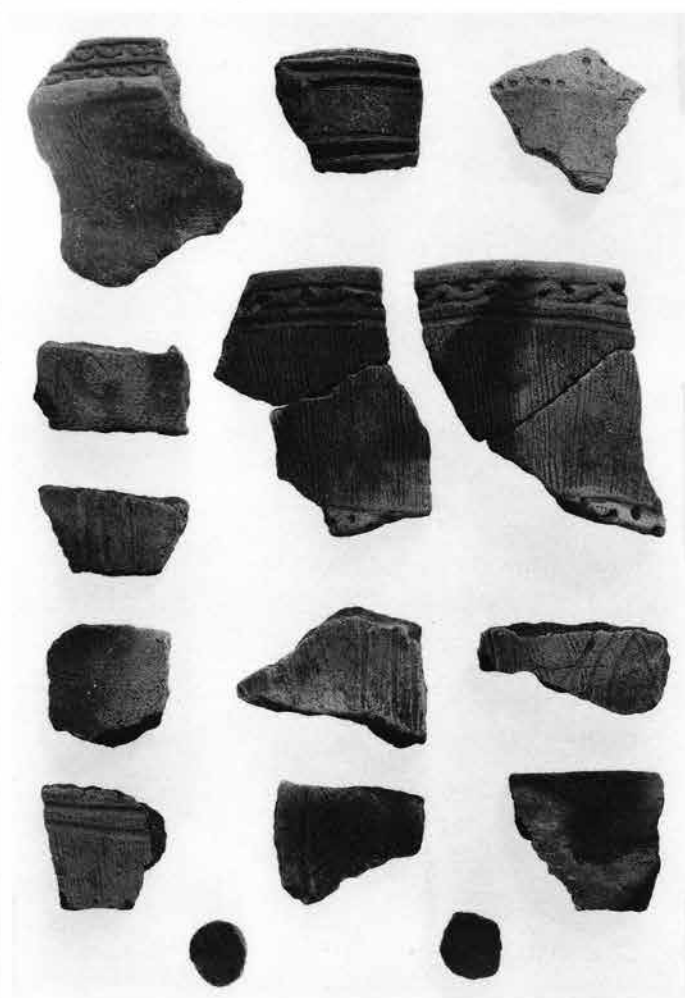
3 住居址出土土器 120号住居



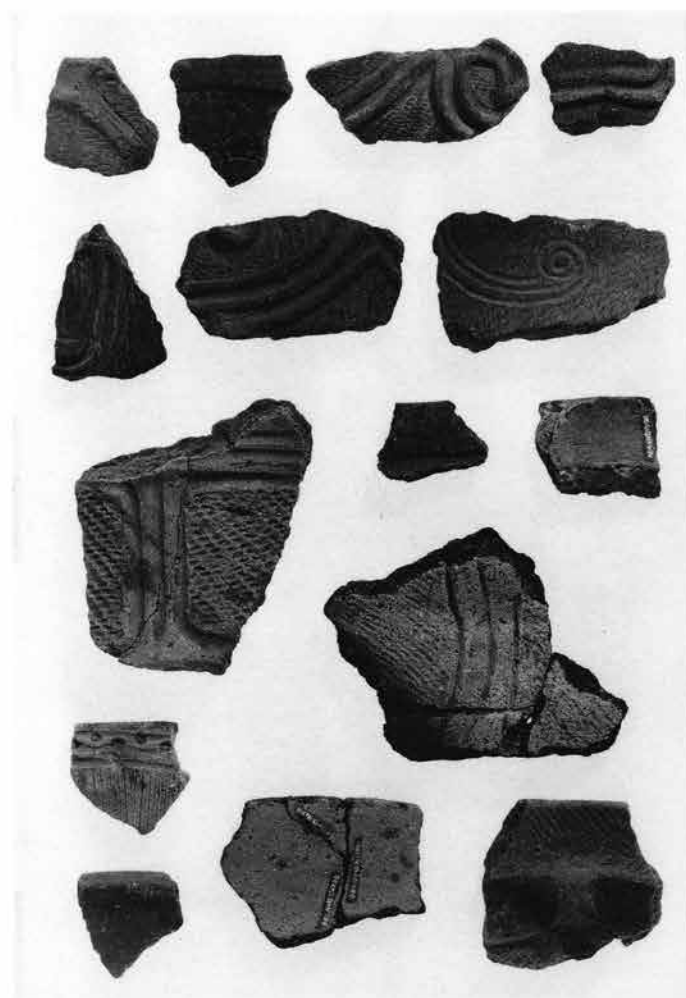
4 住居址出土土器 119号住居



1 住居址出土土器



2 住居址出土土器 121号住居



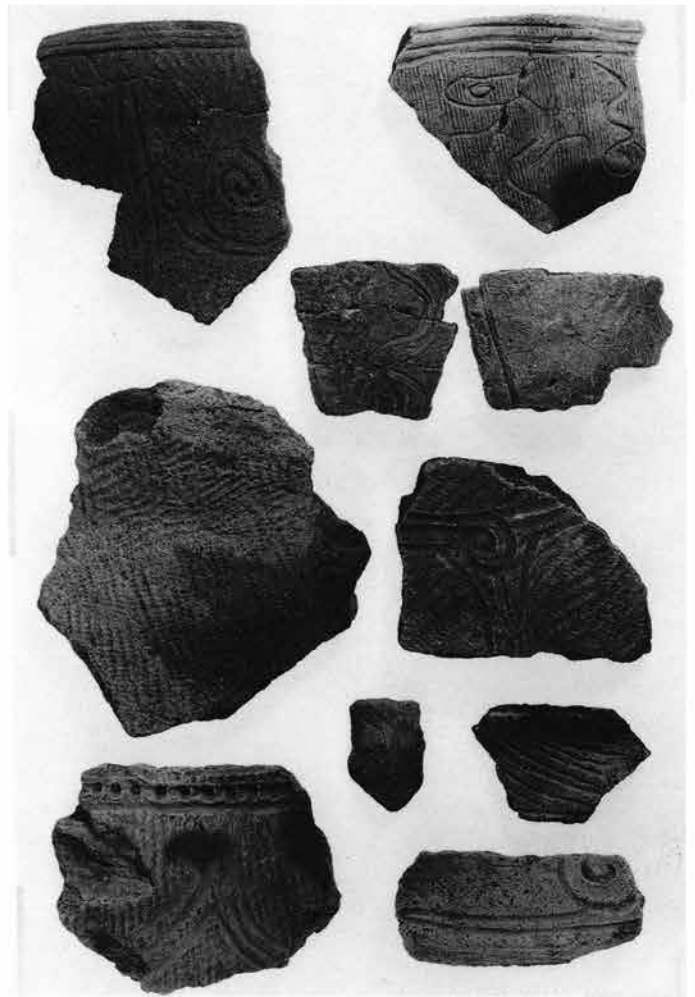
3 住居址出土土器 110号住居



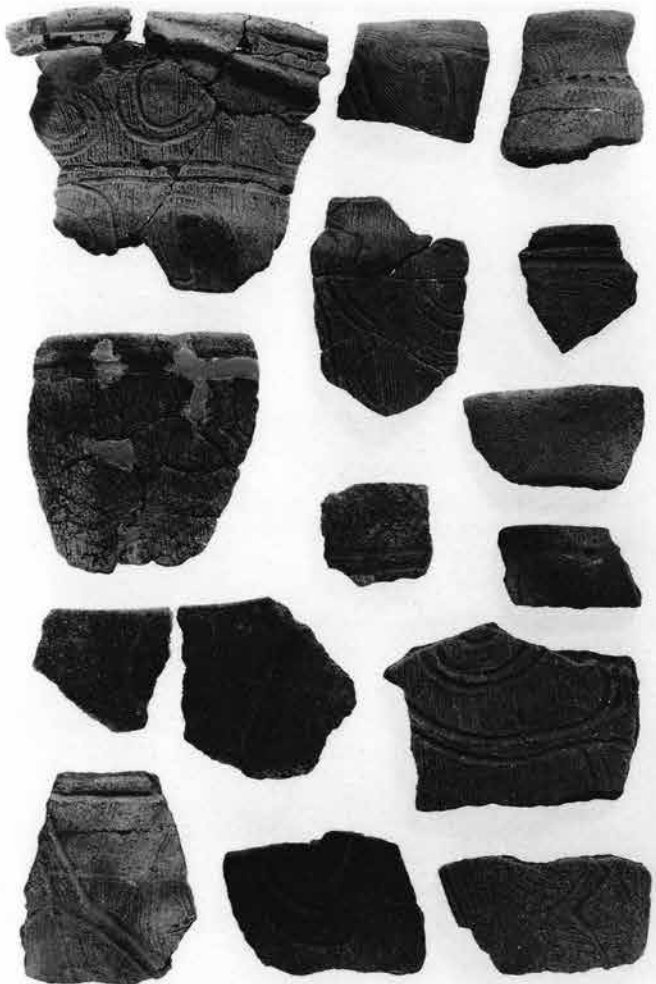
4 住居址出土土器 24号住居



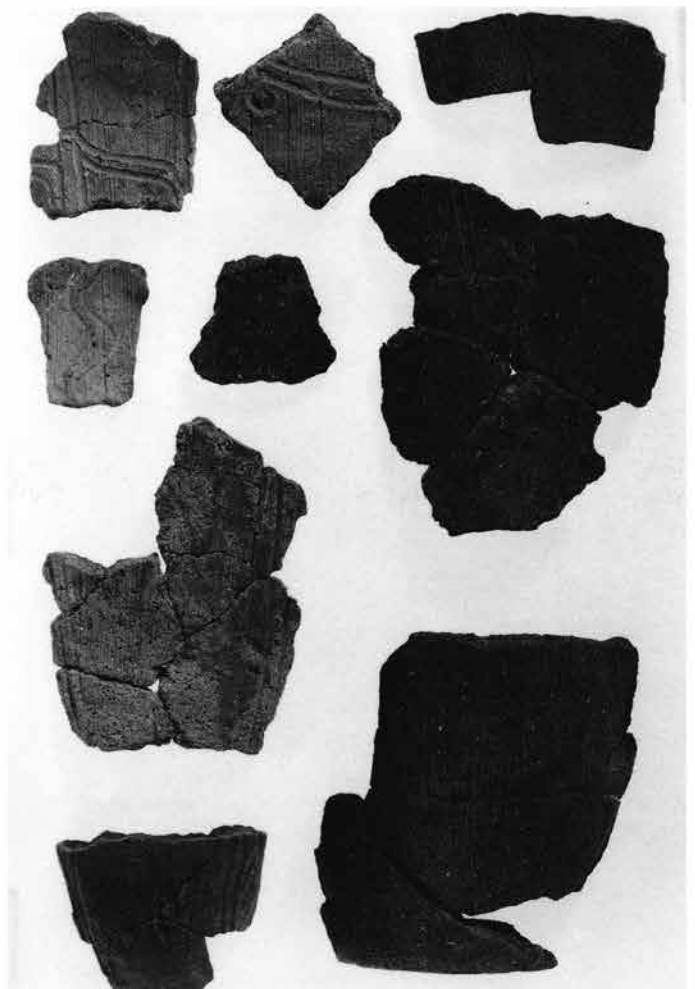
1 住居址出土土器 24号住居



2 住居址出土土器 24号住居



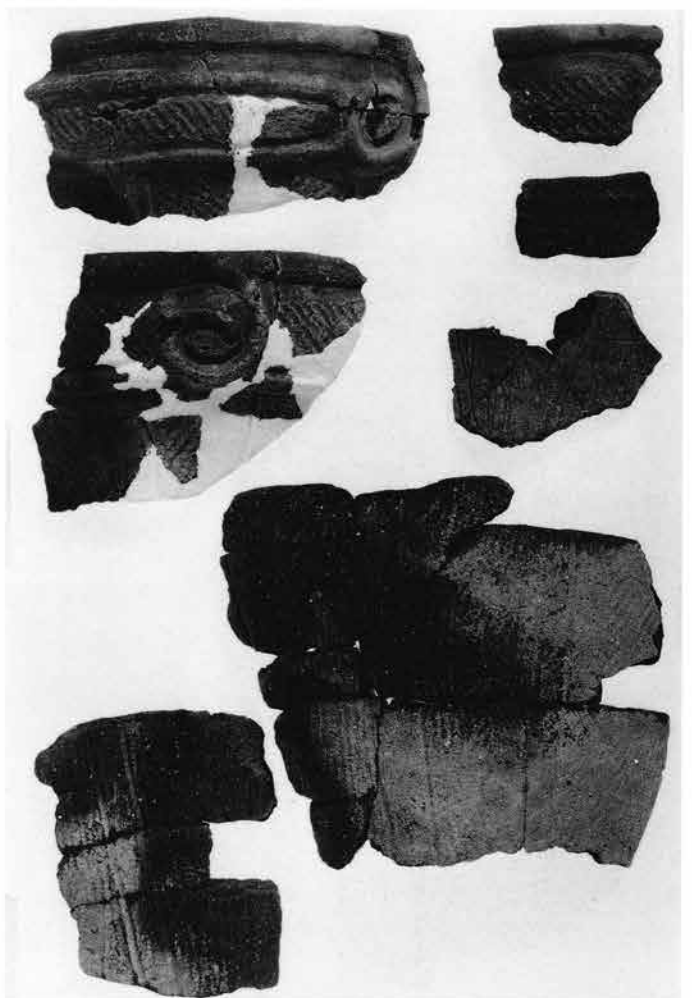
3 住居址出土土器 24号住居



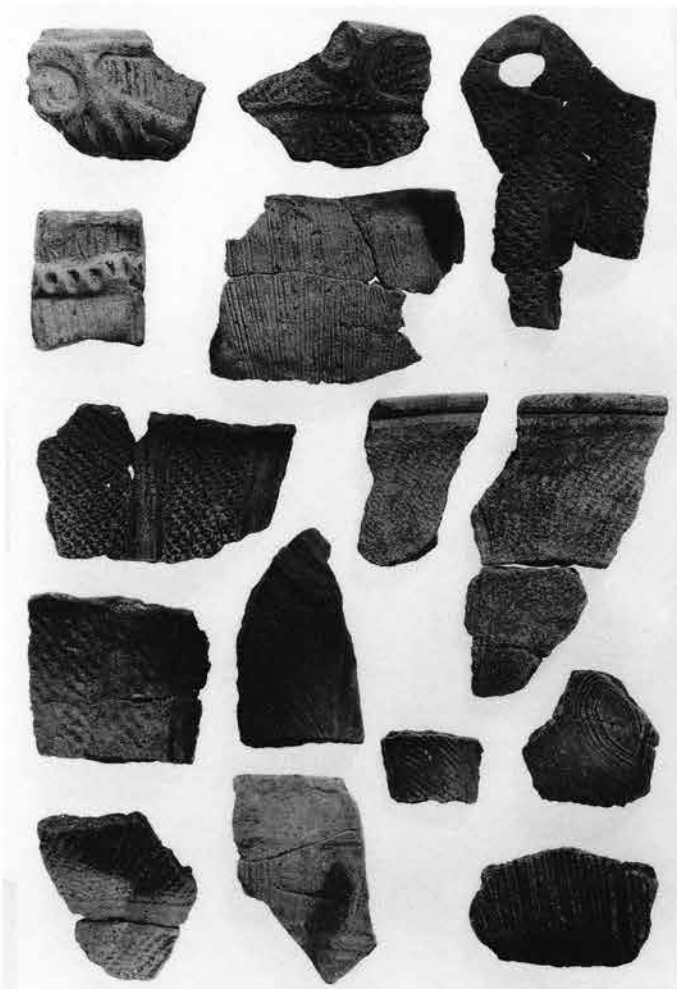
4 住居址出土土器 24号住居



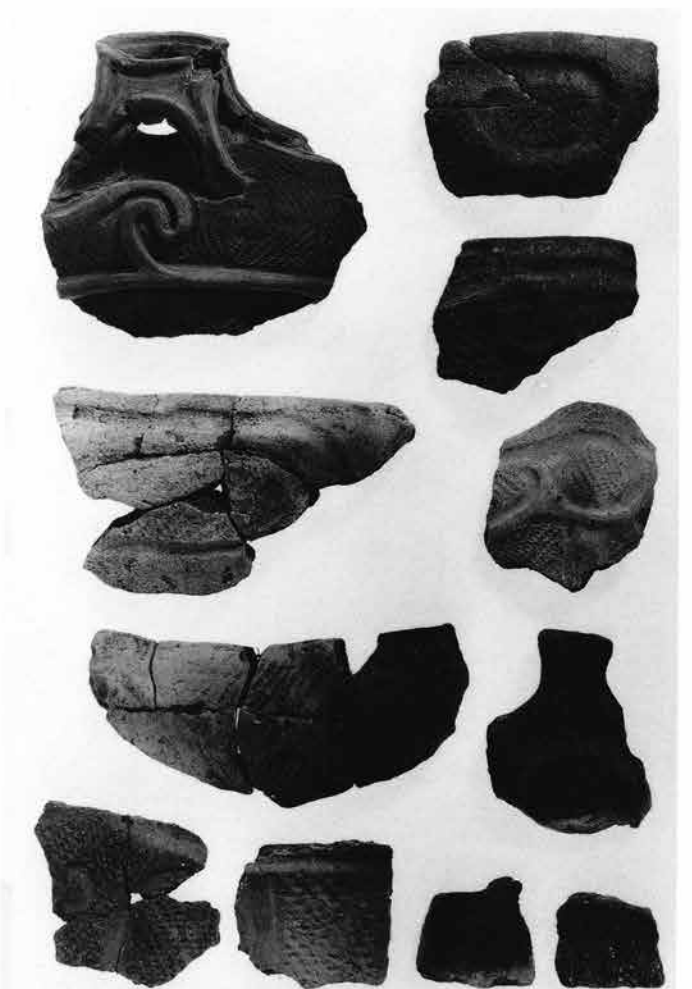
1 住居址出土土器 113号住居



2 住居址出土土器 111号住居



3 住居址出土土器 25号住居



4 住居址出土土器 22号住居



1 住居址出土土器 5号住居



2 土塚出土土器



3 土塚出土土器



4 土塚出土土器



83号土坑



121号土坑



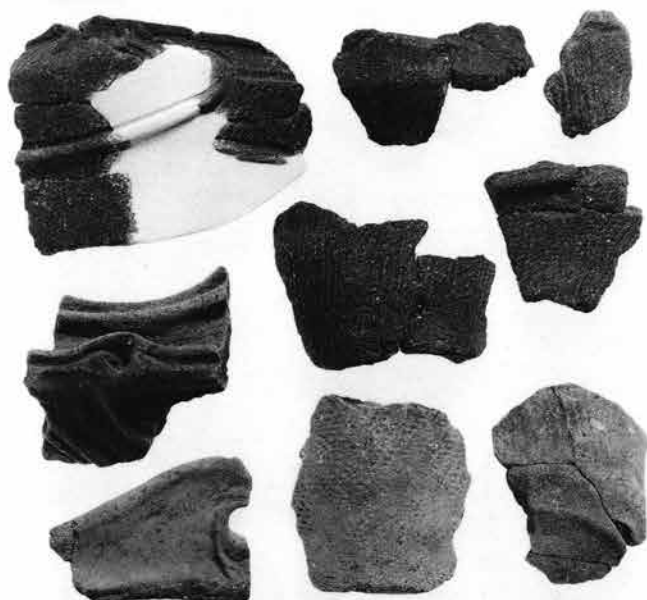
9号土坑



49号土坑

1 土坑出土土器

2 土坑出土土器



120号土坑



106号土坑



26号土坑



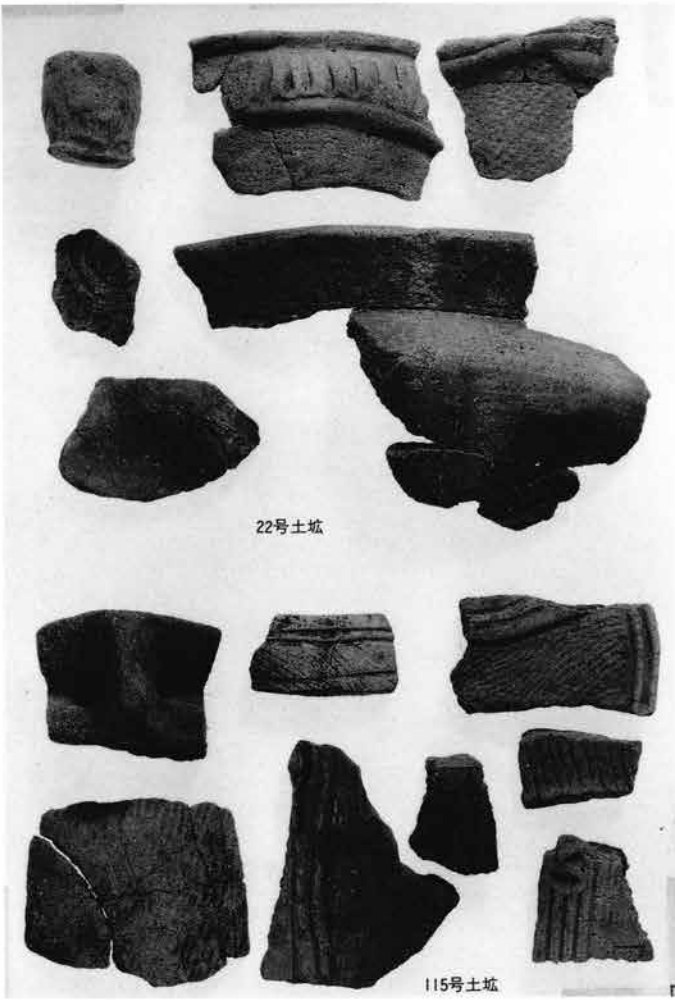
124号土坑



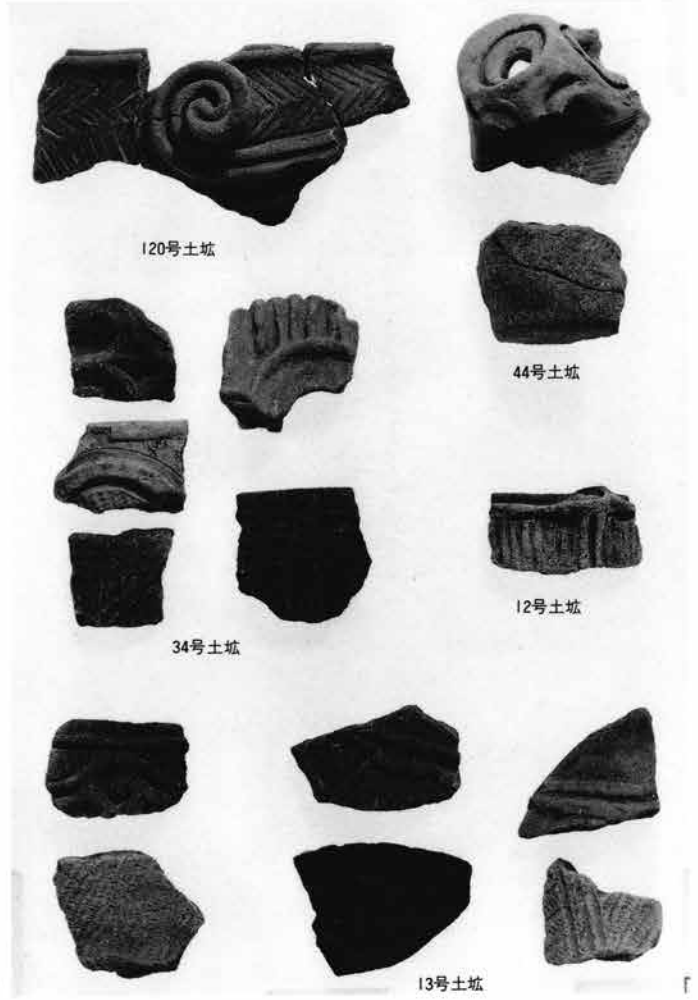
100号土坑

3 土坑出土土器

4 土坑出土土器



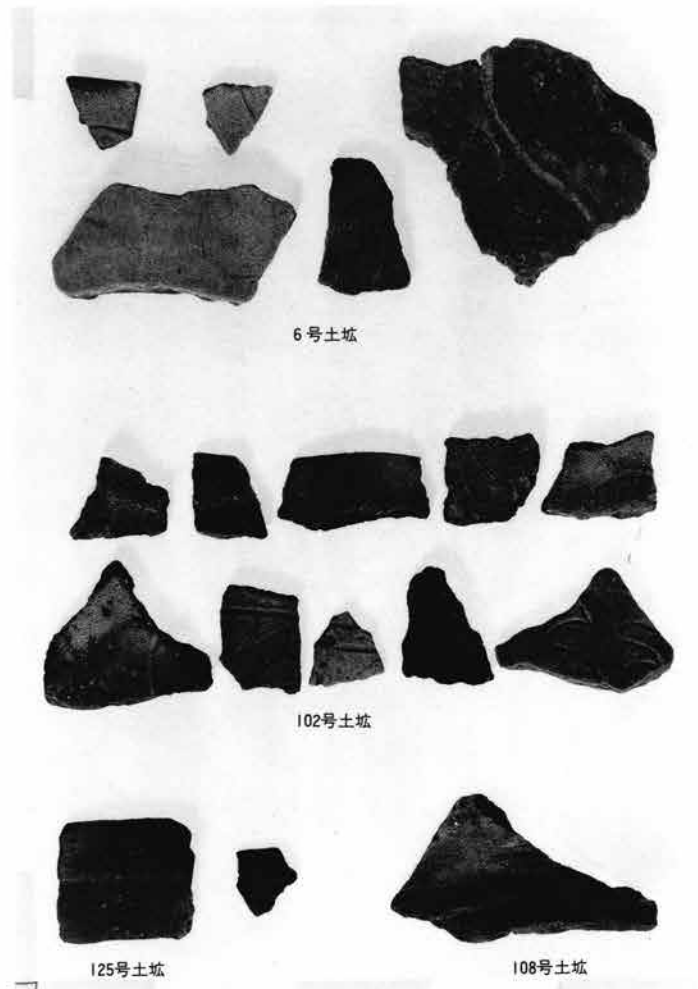
1 土坑出土土器



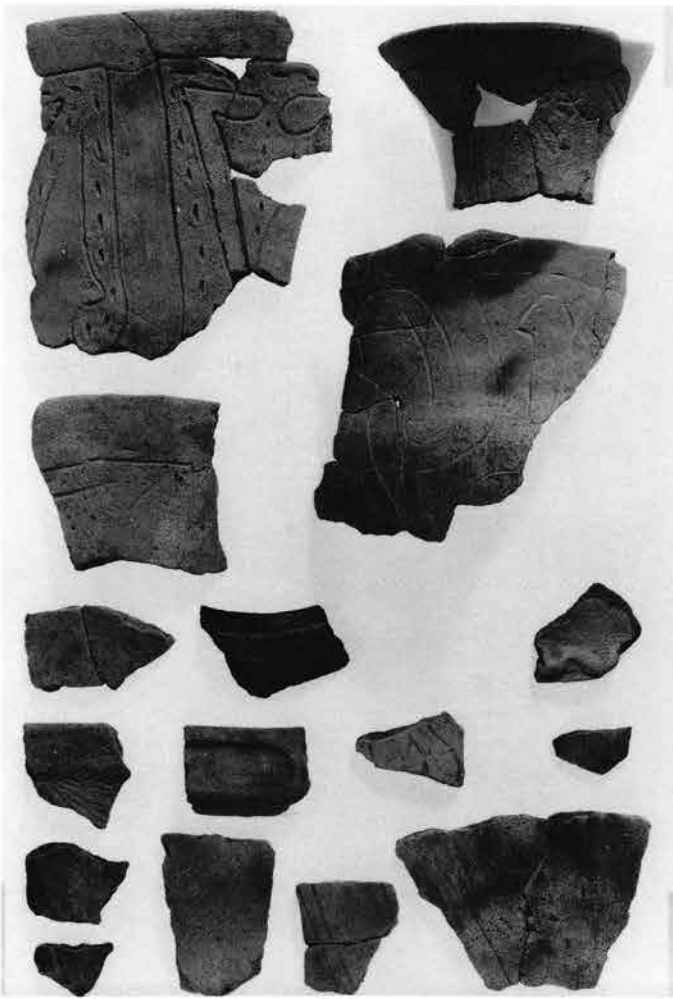
2 土坑出土土器



3 土坑出土土器



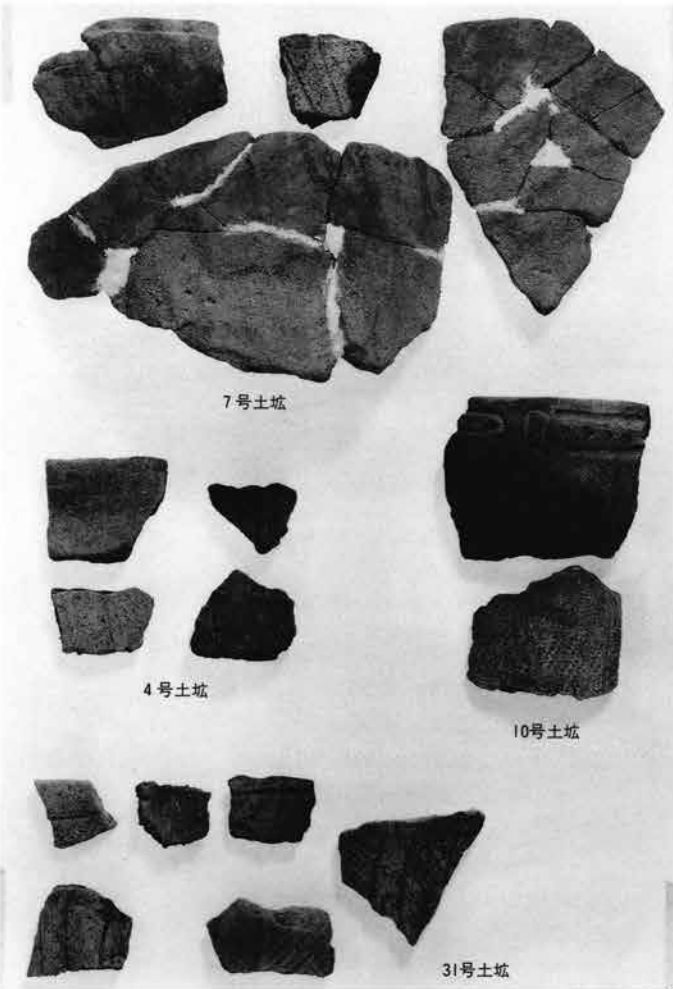
4 土坑出土土器



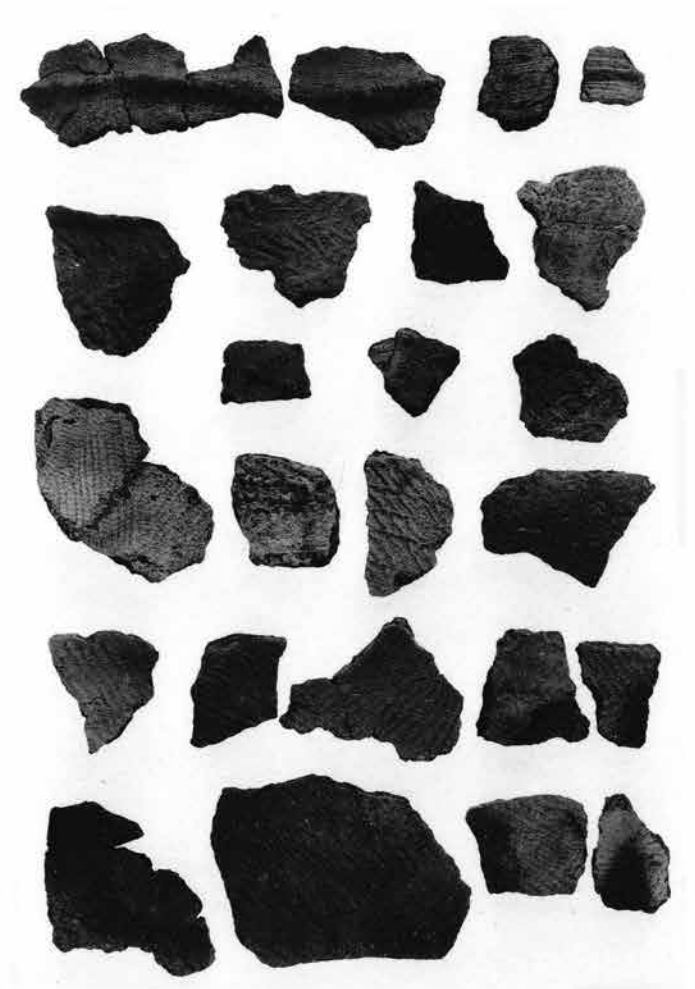
1 土坑出土土器 11号土坑



2 土坑出土土器 21号土坑



3 土坑出土土器



4 遺構外出土土器 前期

7号土坑

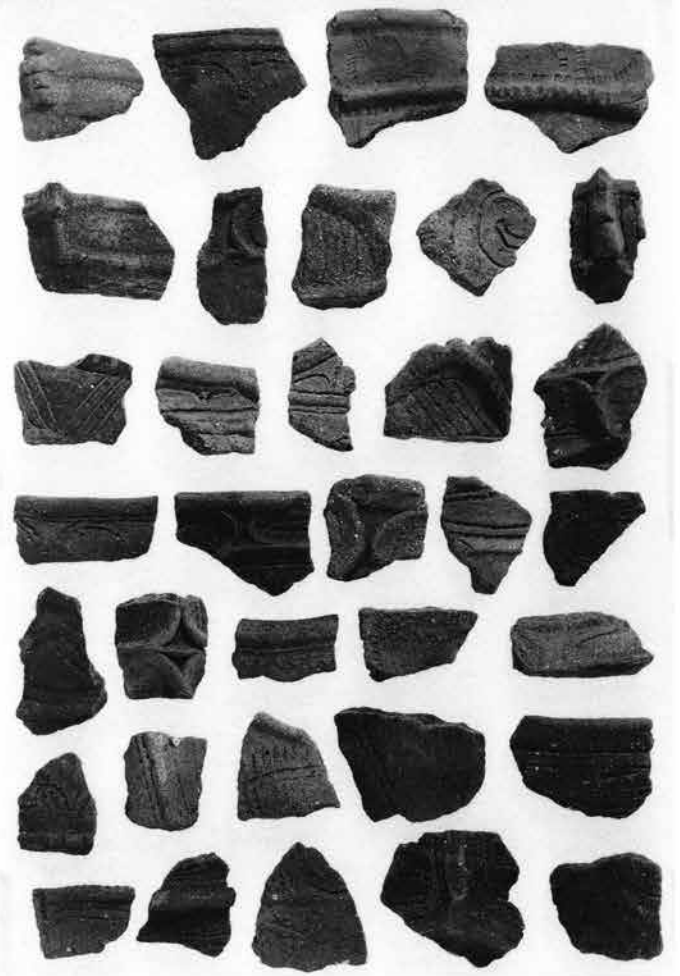
4号土坑

10号土坑

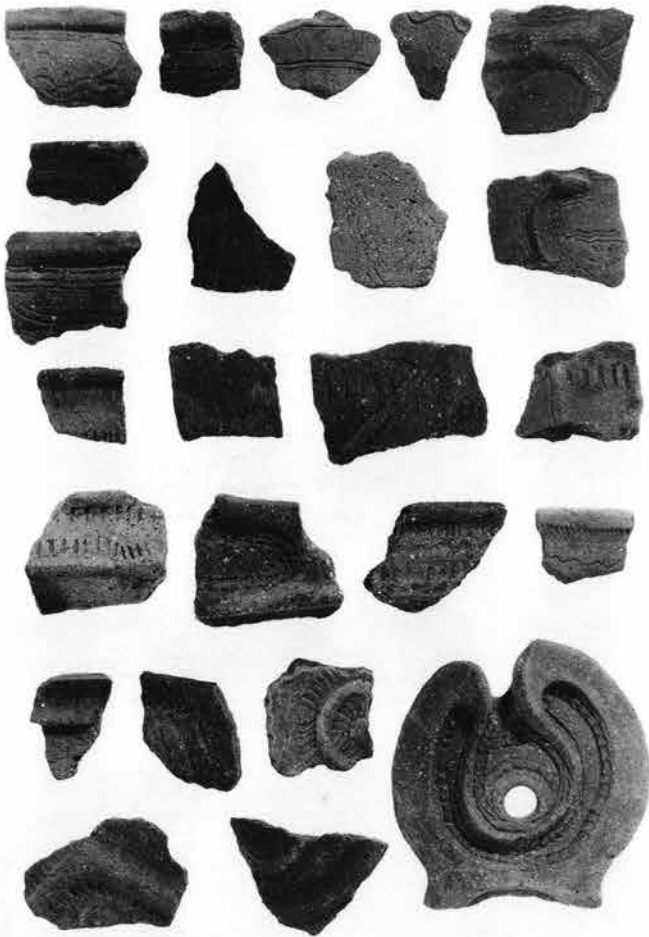
31号土坑



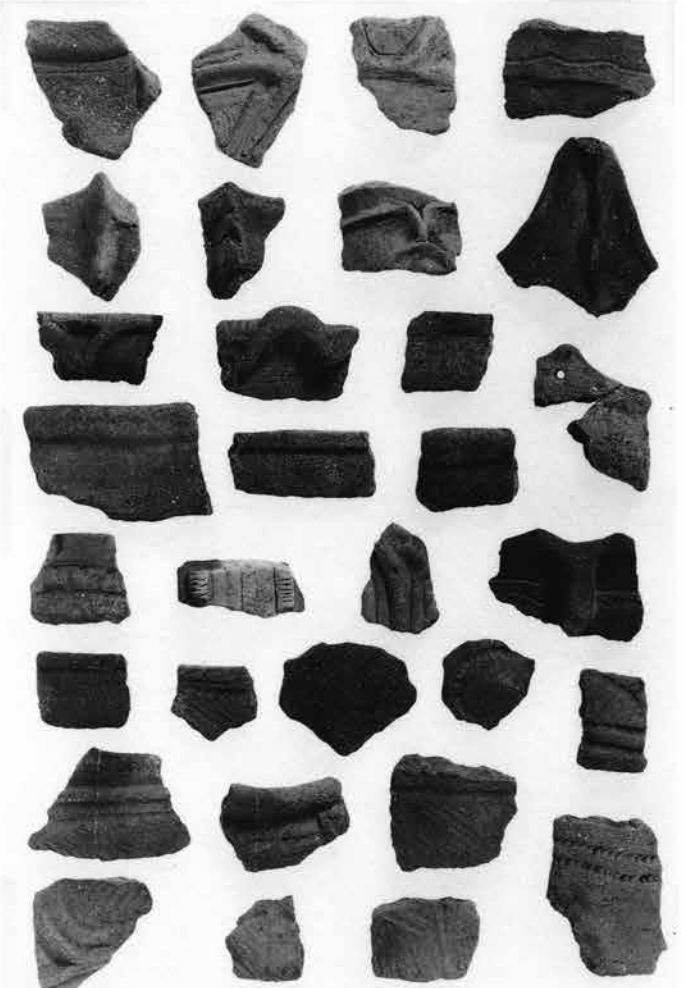
1 遺構外出土土器 前期



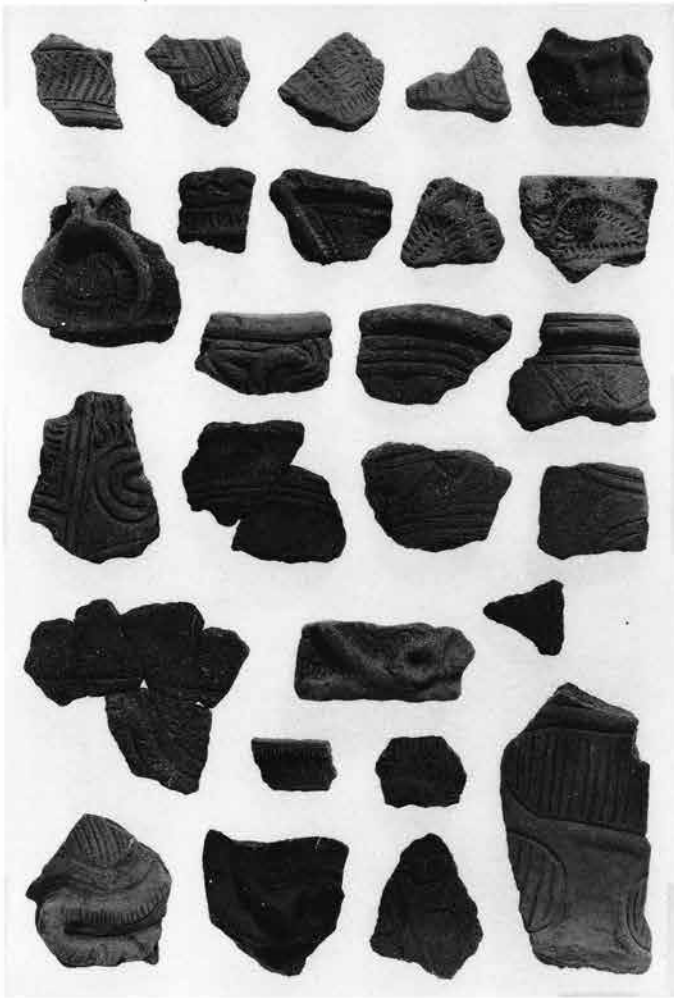
2 遺構外出土土器 中期



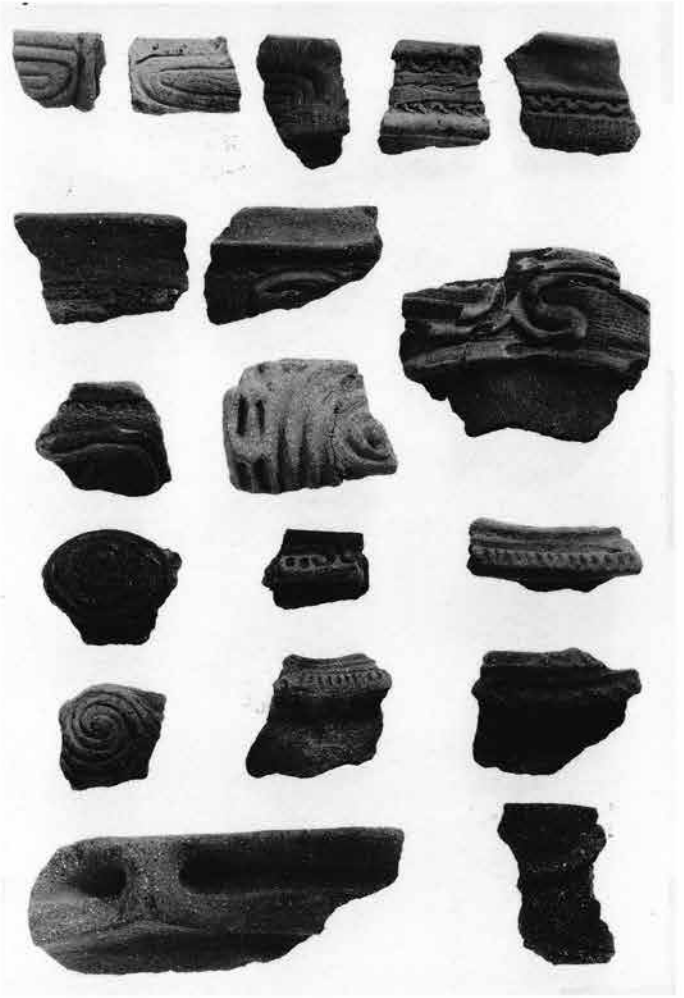
3 遺構外出土土器 中期



4 遺構外出土土器 中期



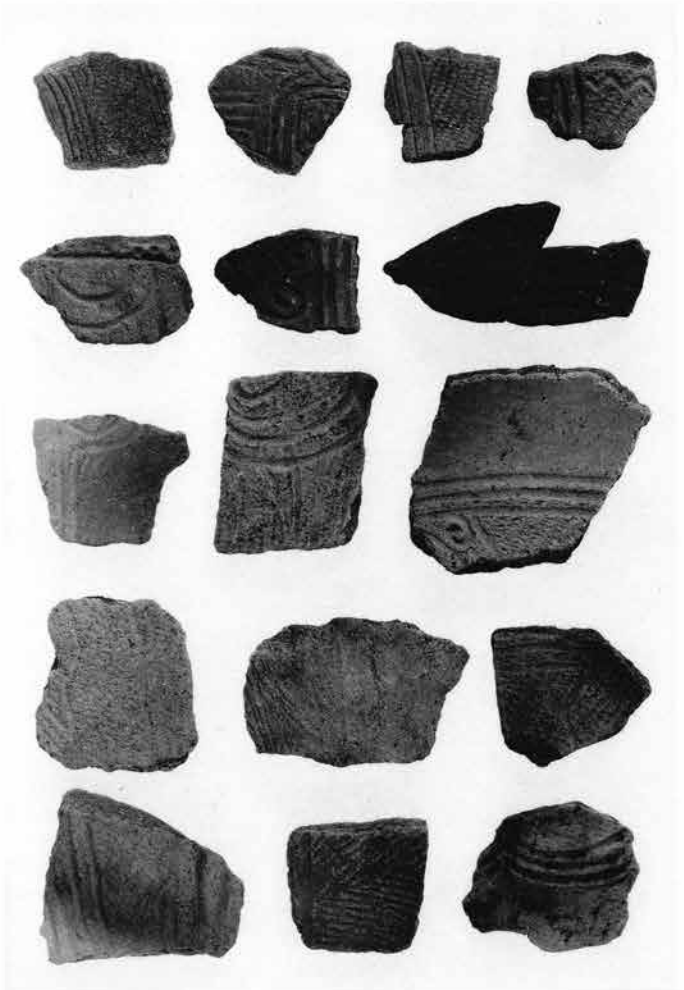
1 遺構外出土土器 中期



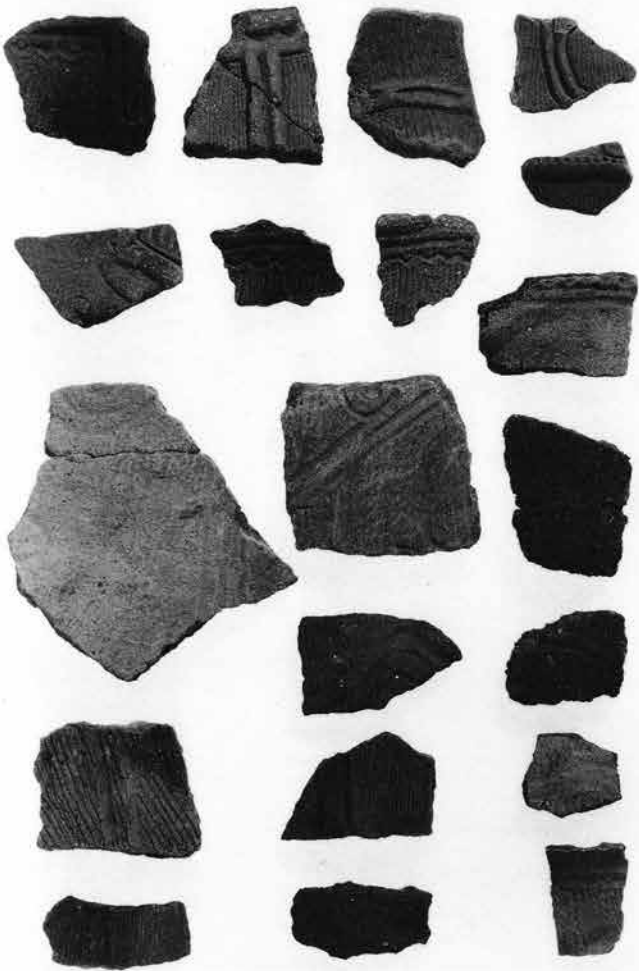
2 遺構外出土土器 中期



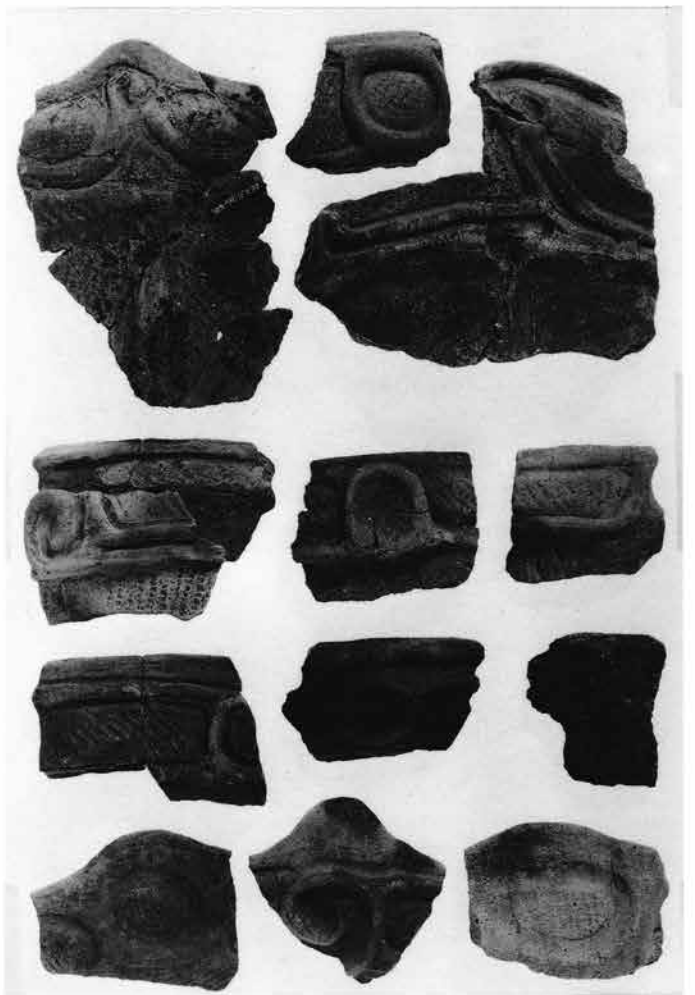
3 遺構外出土土器 中期



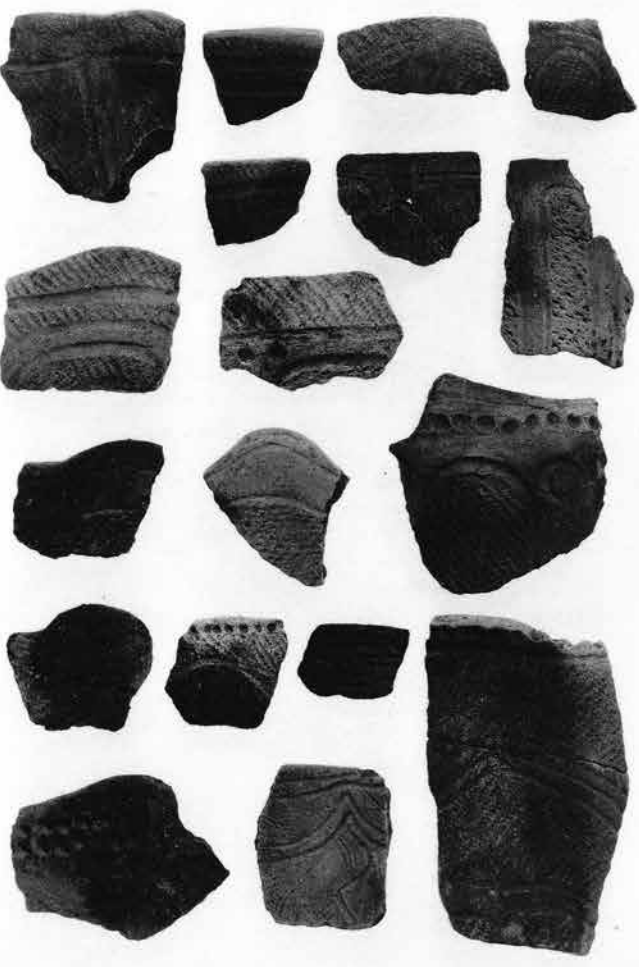
4 遺構外出土土器 中期



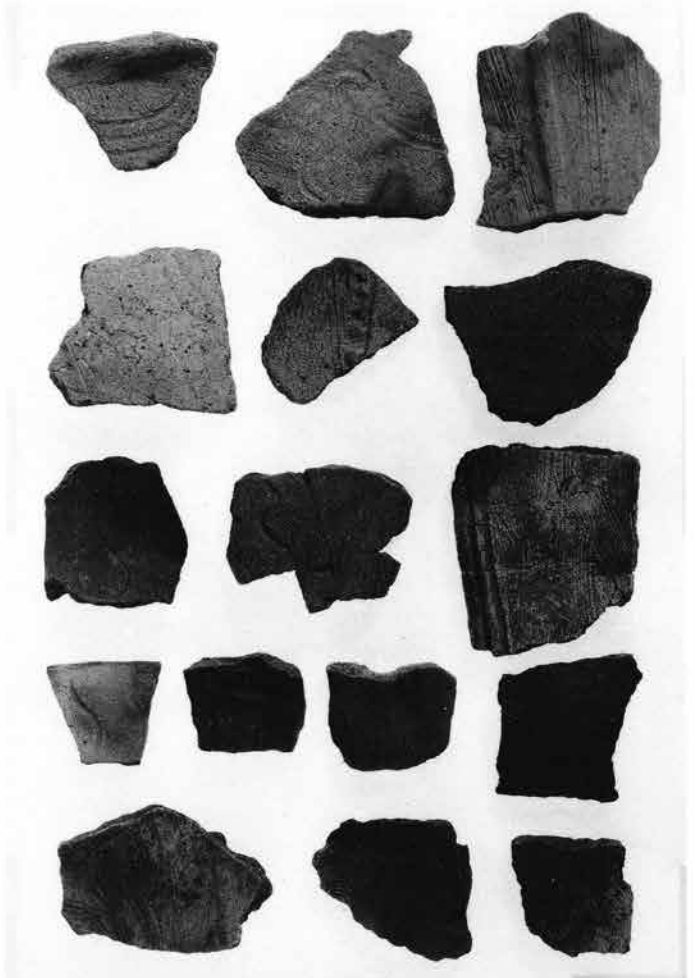
1 遺構外出土土器 中期



2 遺構外出土土器 中期



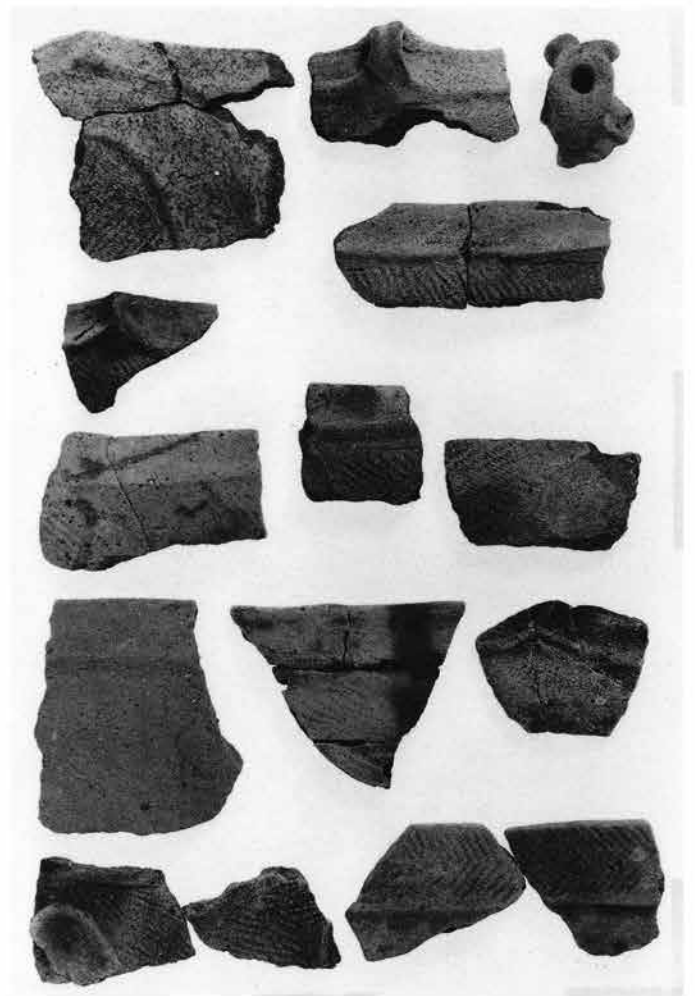
3 遺構外出土土器 中期



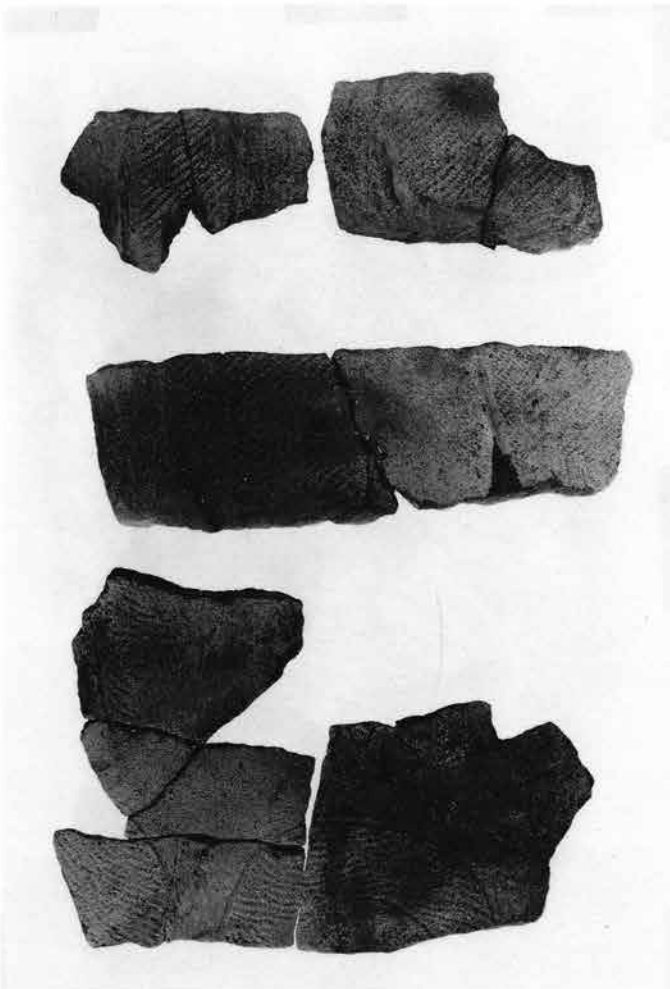
4 遺構外出土土器 中期



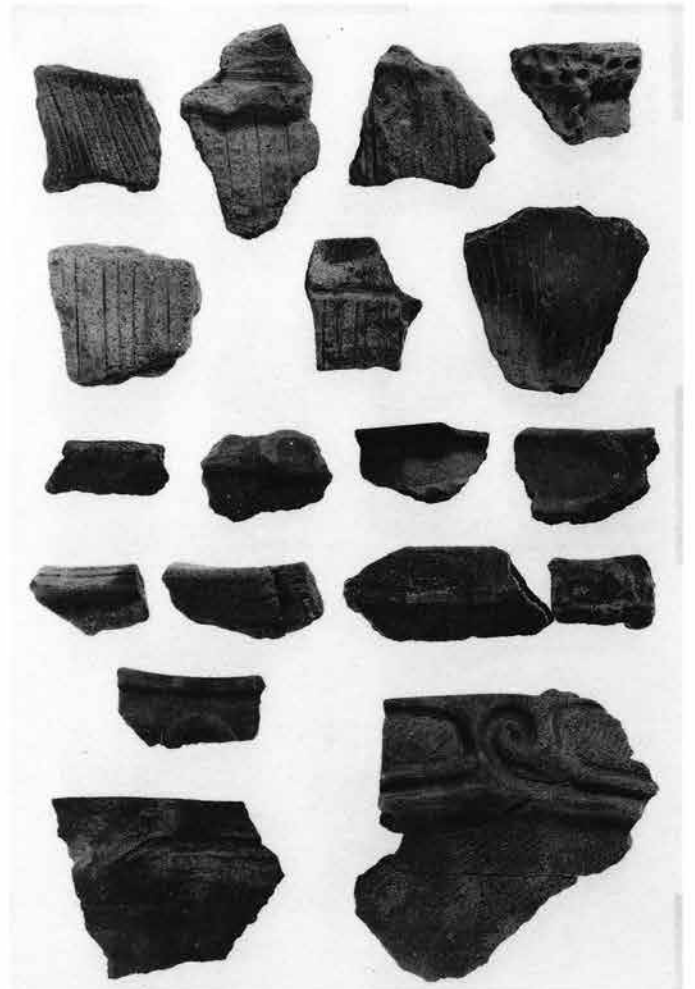
1 遺構外出土土器 中期



2 遺構外出土土器 中期



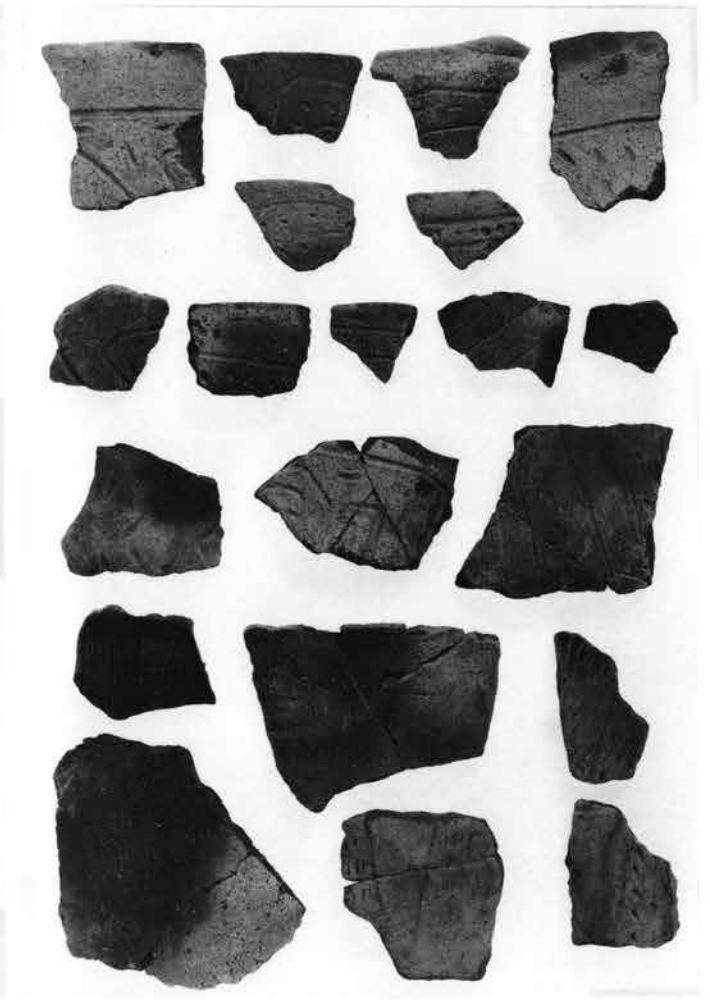
3 遺構外出土土器 中期



4 遺構外出土土器 中期



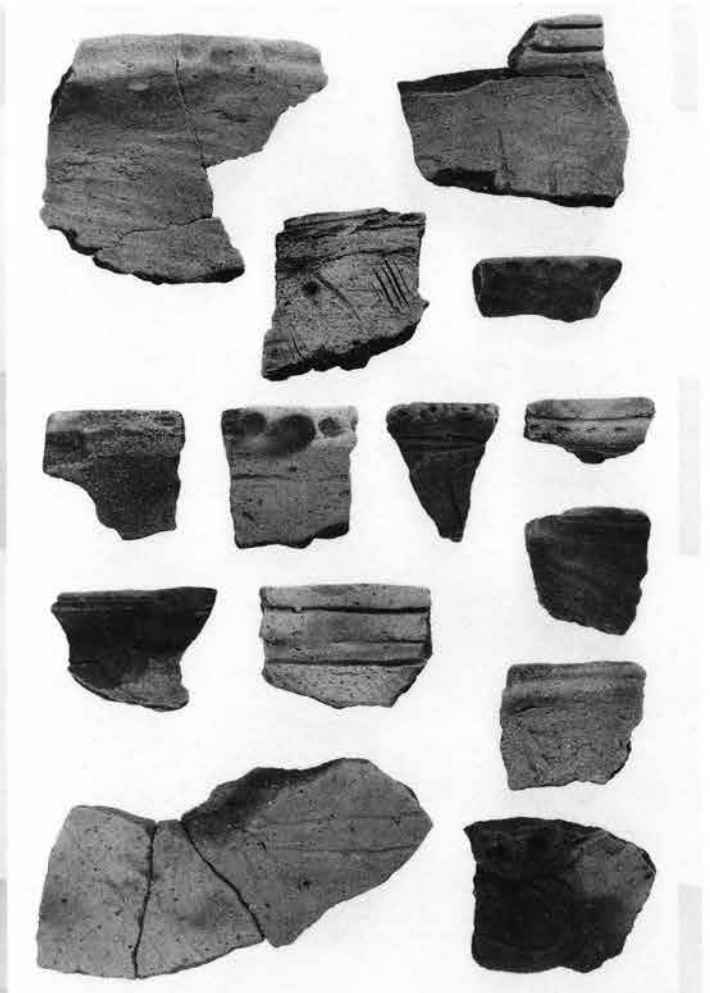
1 遺構外出土土器 後期



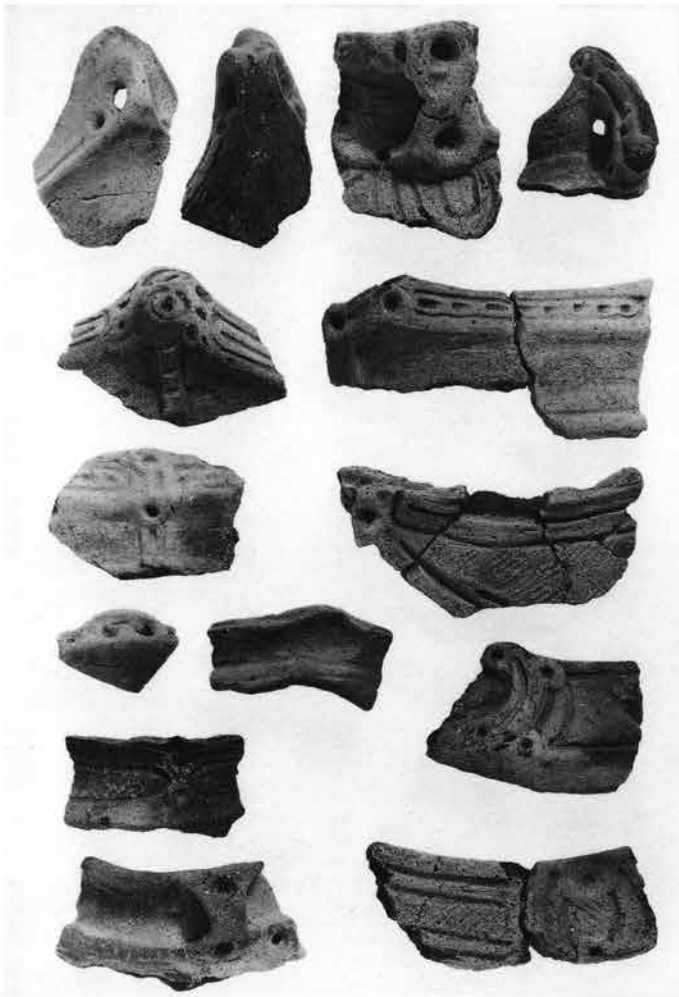
2 遺構外出土土器 後期



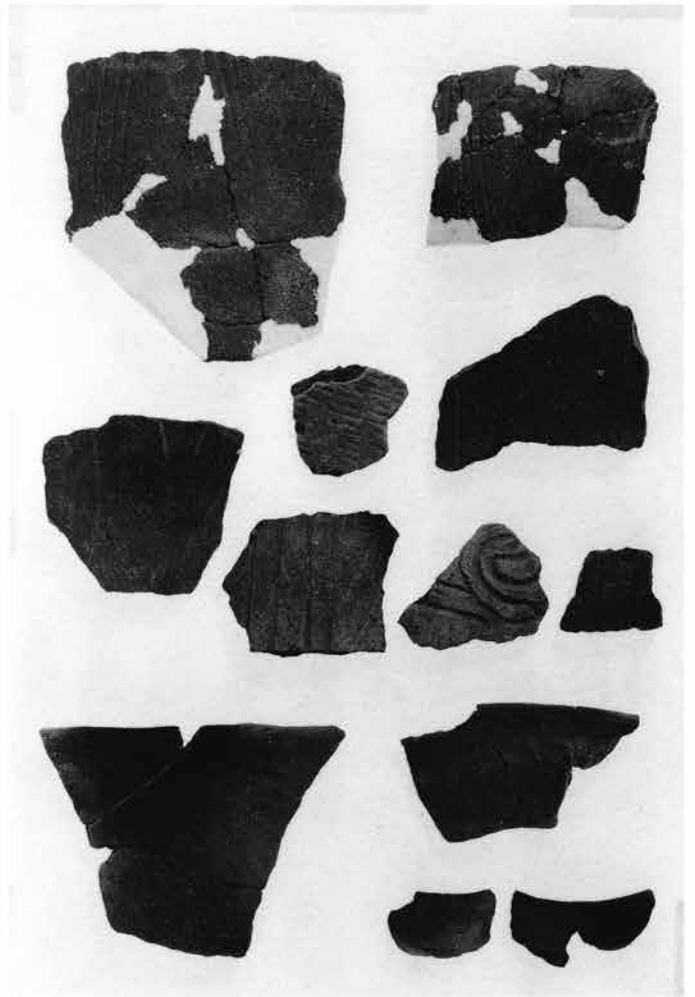
3 遺構外出土土器 後期



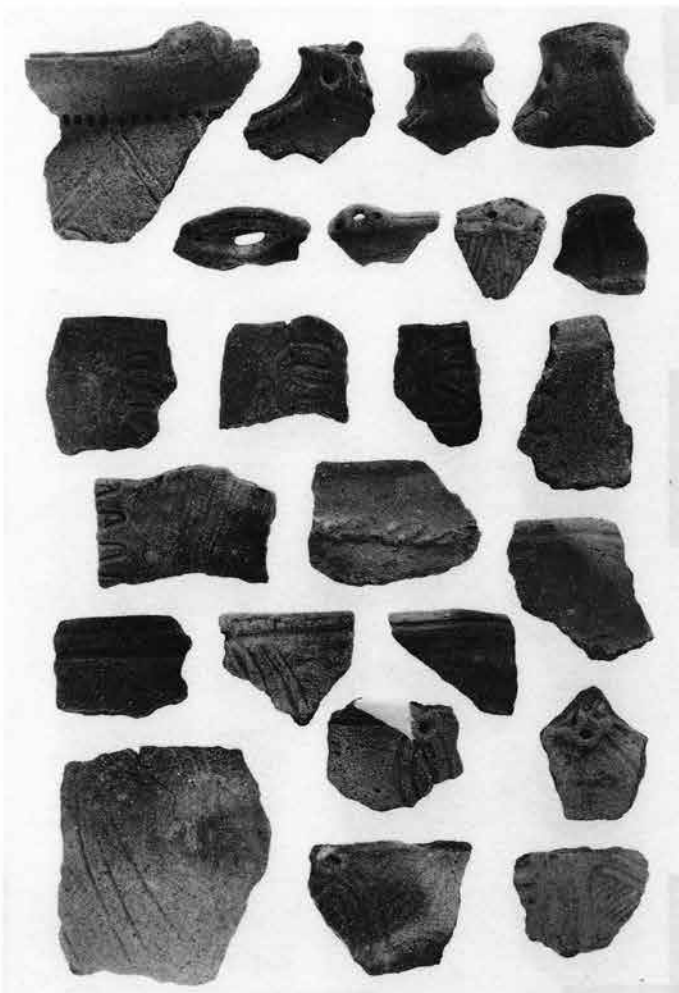
4 遺構外出土土器 後期



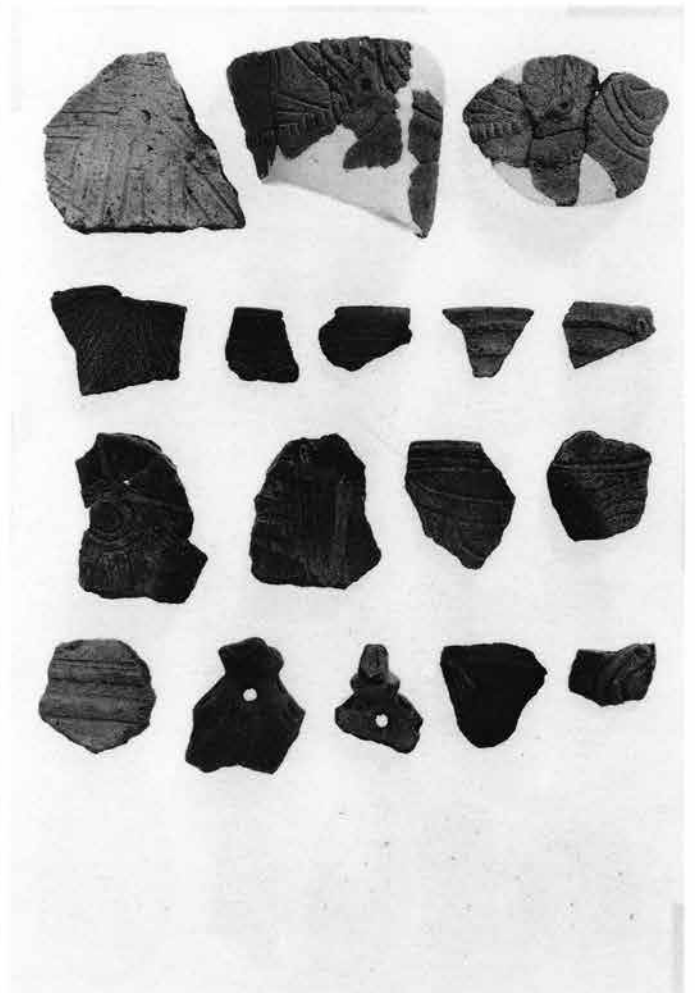
1 遺構外出土土器 後期



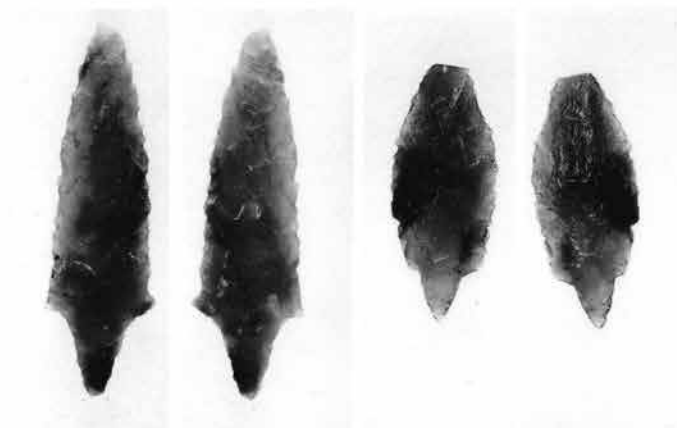
2 遺構外出土土器 後期



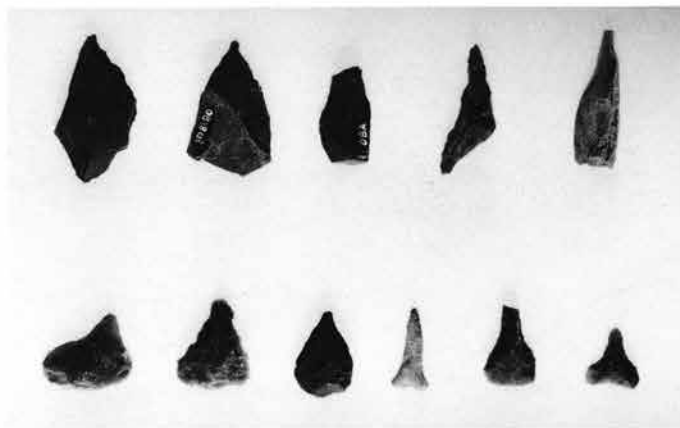
3 遺構外出土土器 後期



4 遺構外出土土器 後期



1 有舌尖頭器



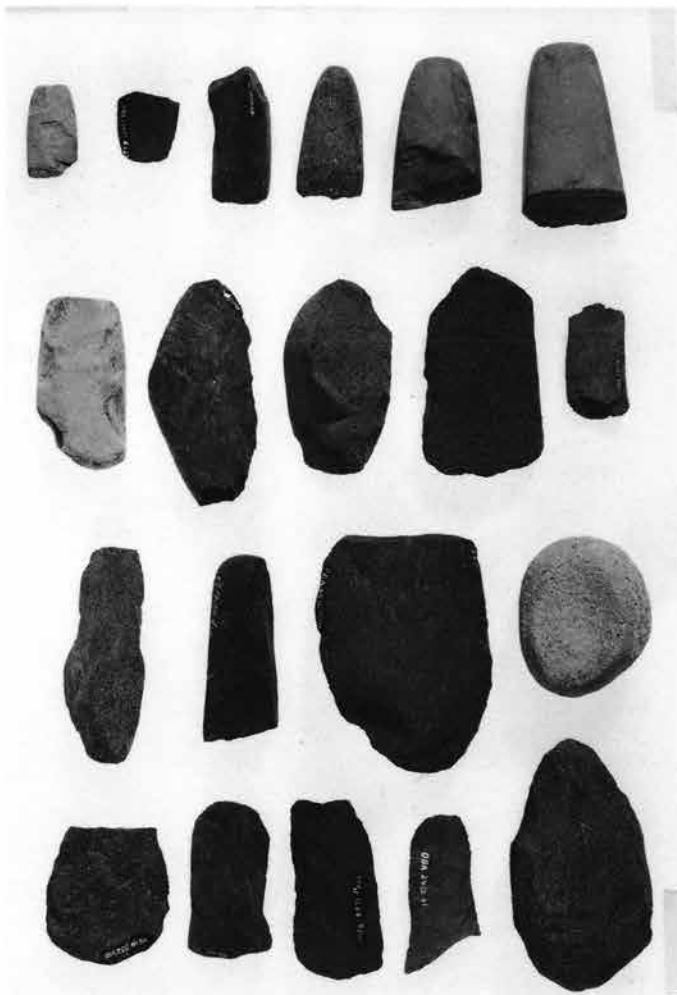
2 石錐 遺構外出土



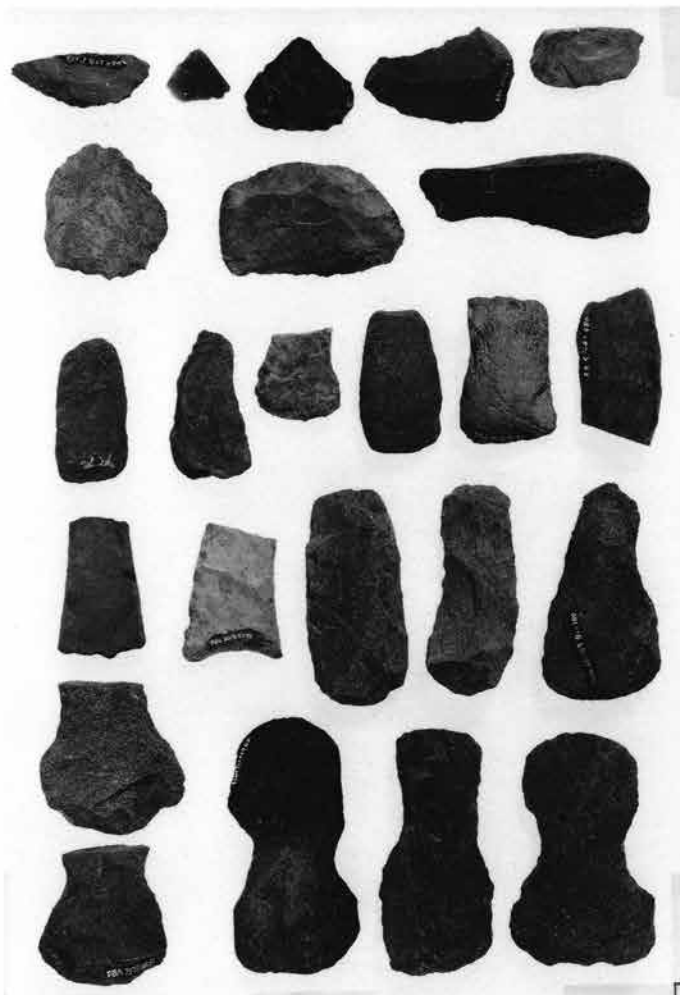
3 石鏃 遺構外出土



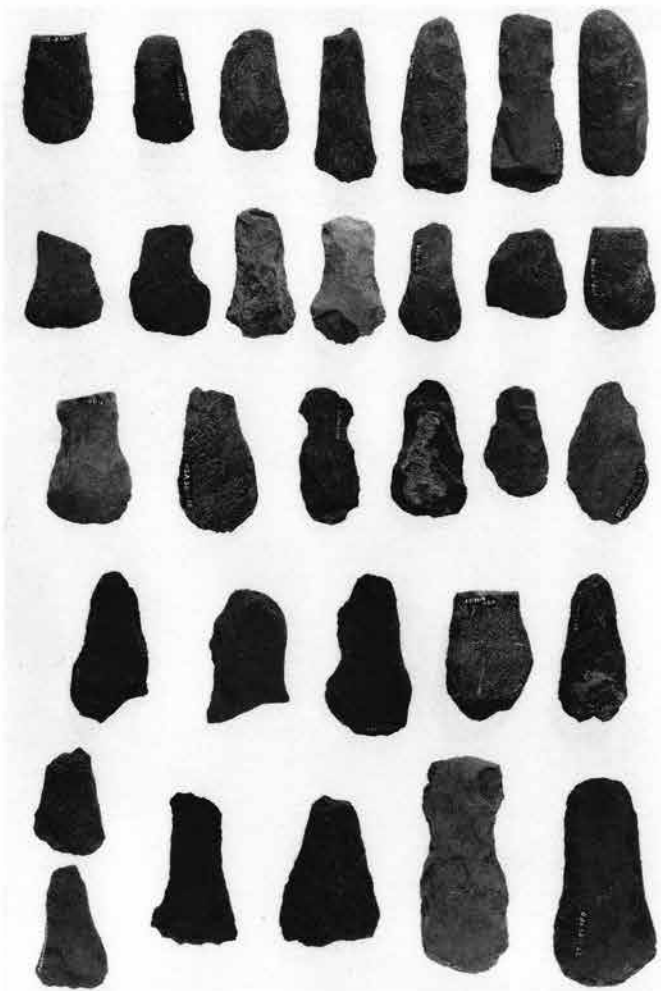
4 本遺跡出土黒曜石片の総量



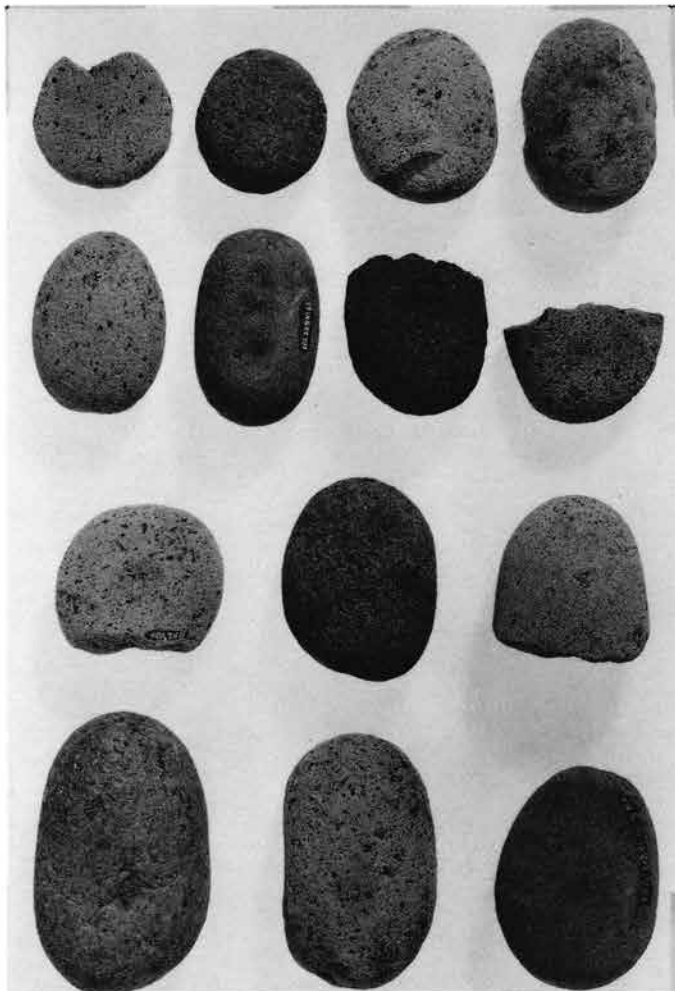
5 住居址出土石器 磨製石斧・敲石・打製石斧など



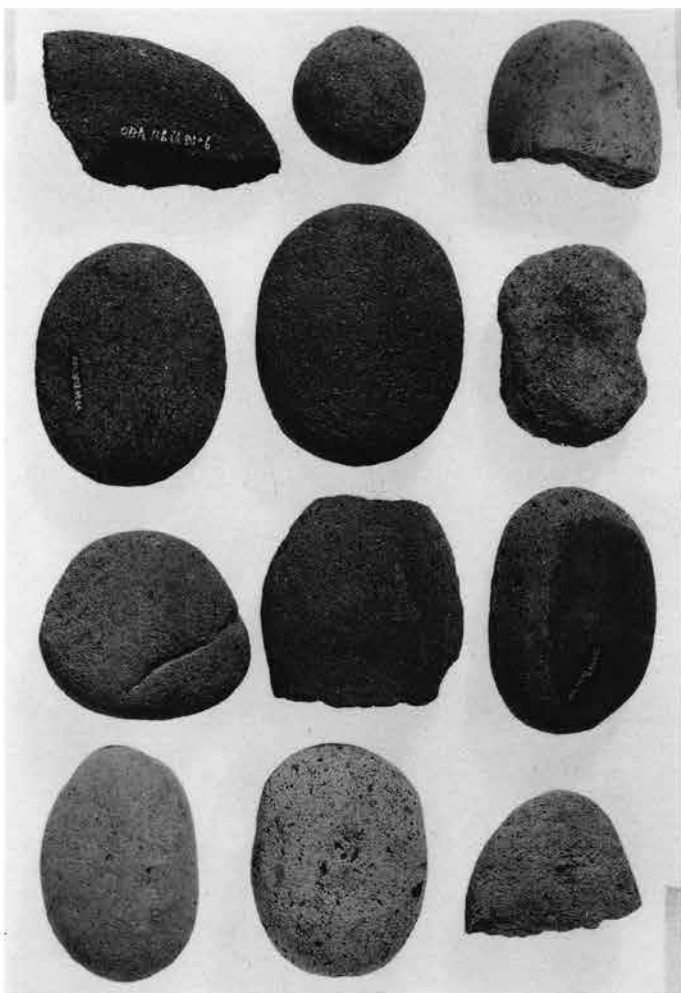
6 住居址出土石器 剥片石器・打製石斧



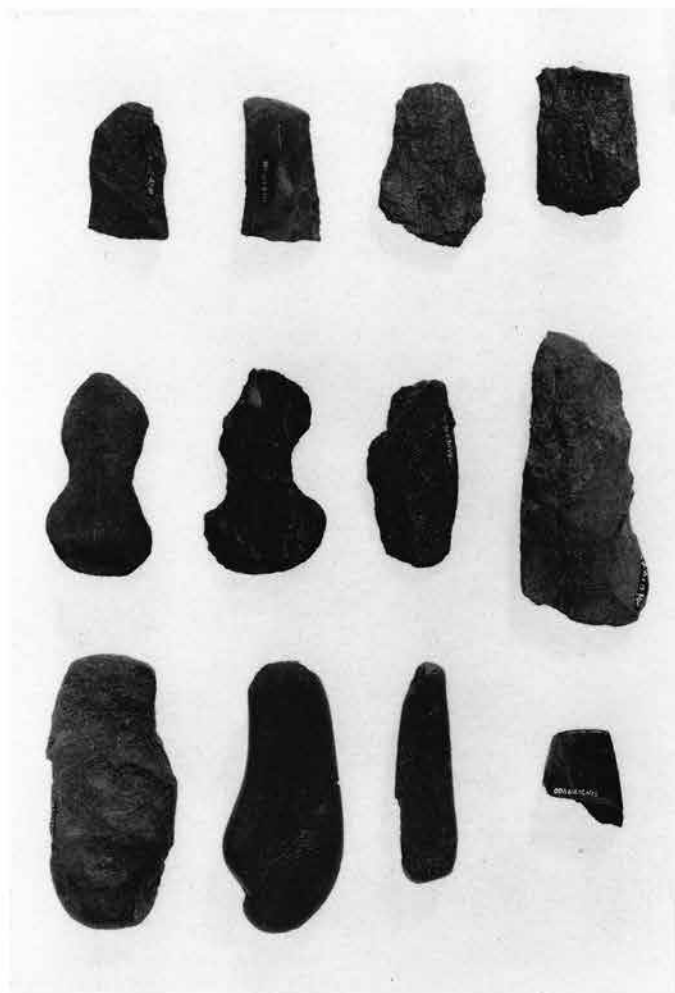
1 住居址出土石器 打製石斧



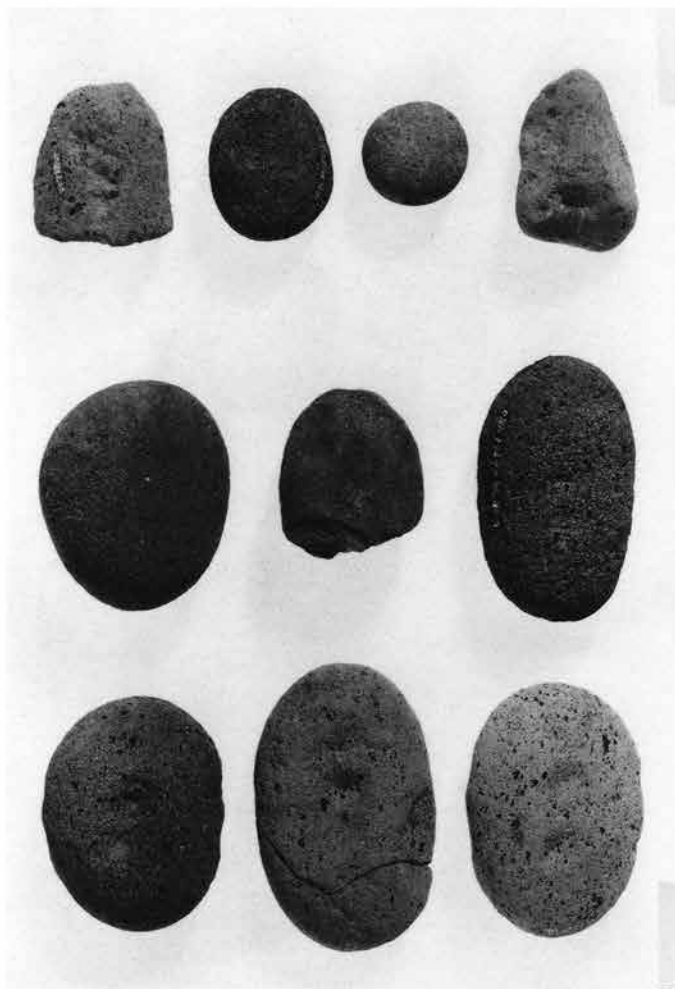
2 住居址出土石器 磨石



3 住居址出土石器 磨石



4 土坑出土石器 打製石斧・敲石・磨製石斧



1 土坑出土石器 磨石



2 遺構外出土石器 局部磨製石斧・磨製石斧



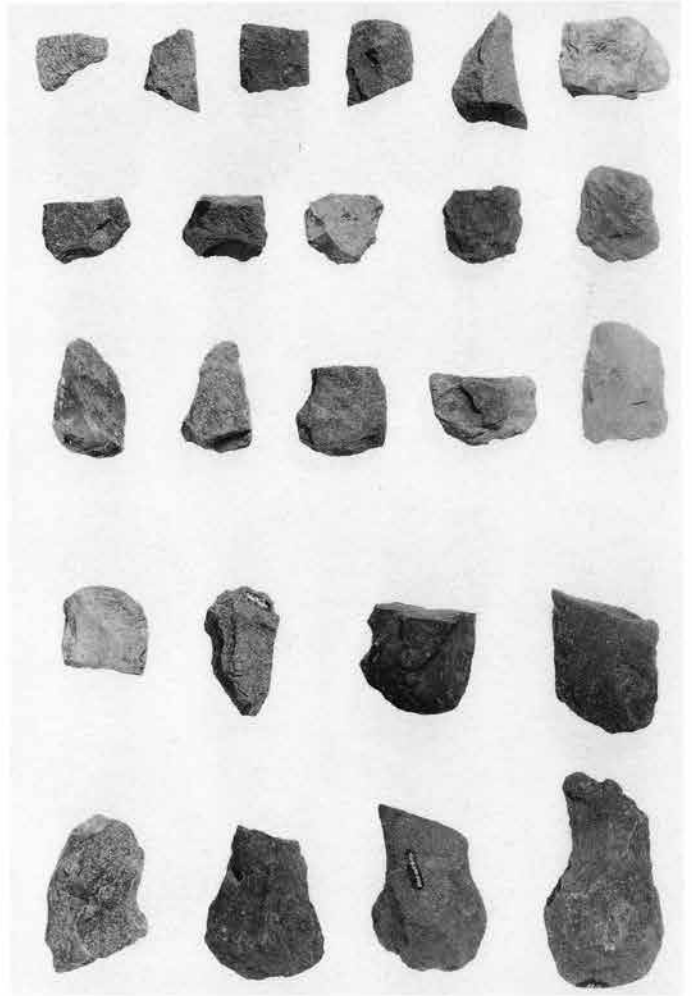
3 遺構外出土石器 剝片石器・小型打製石斧



4 遺構外出土石器 敲石・礮器



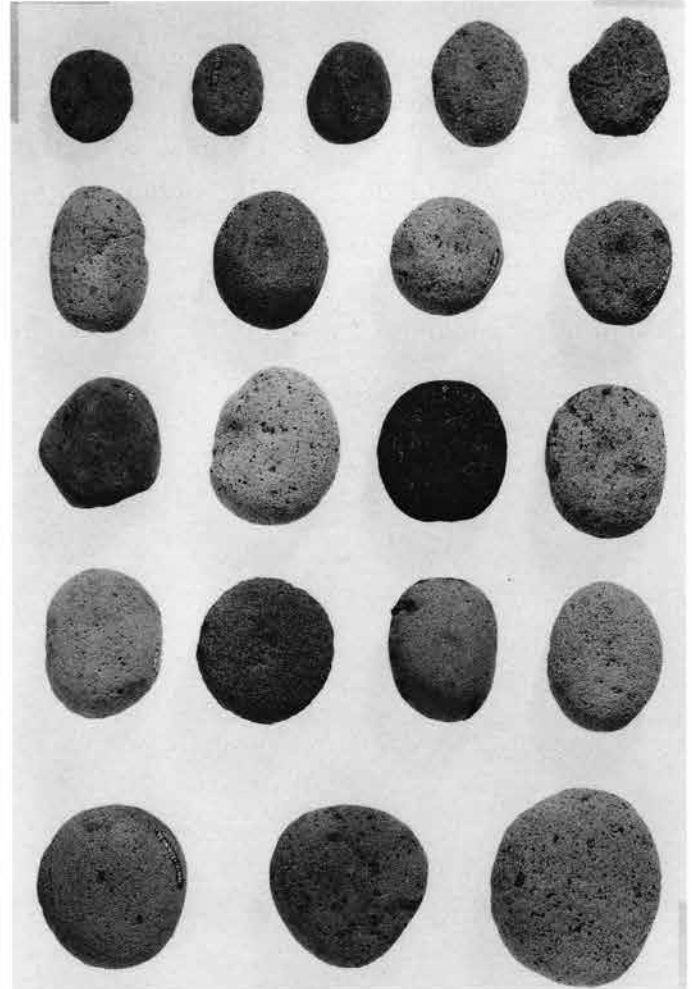
1 遺構外出土石器 打製石斧



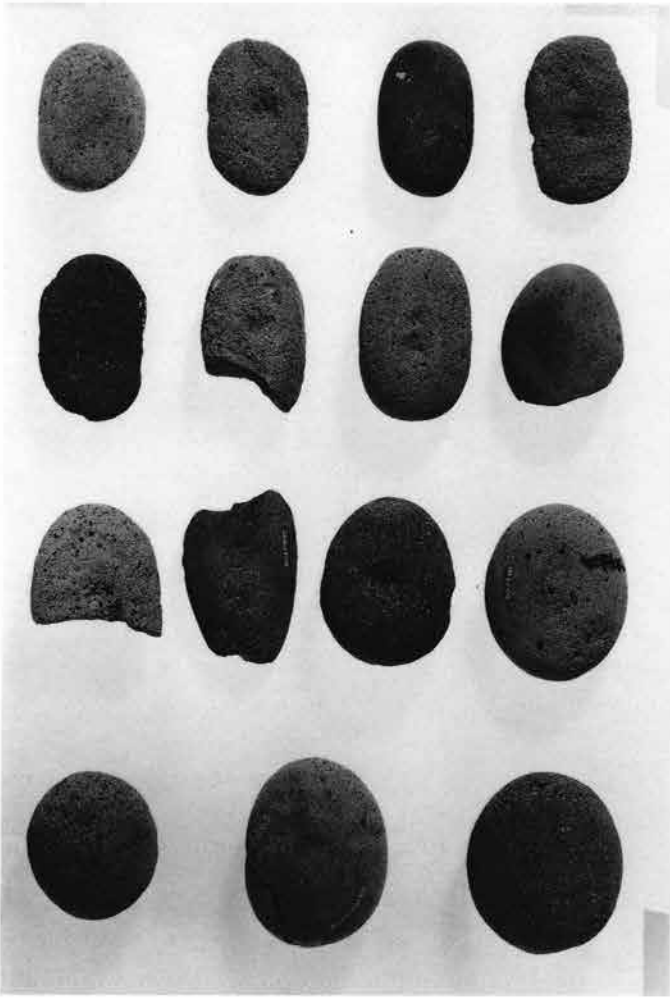
2 遺構外出土石器 打製石斧



3 遺構外出土石器 砥石・磨石・特殊石器



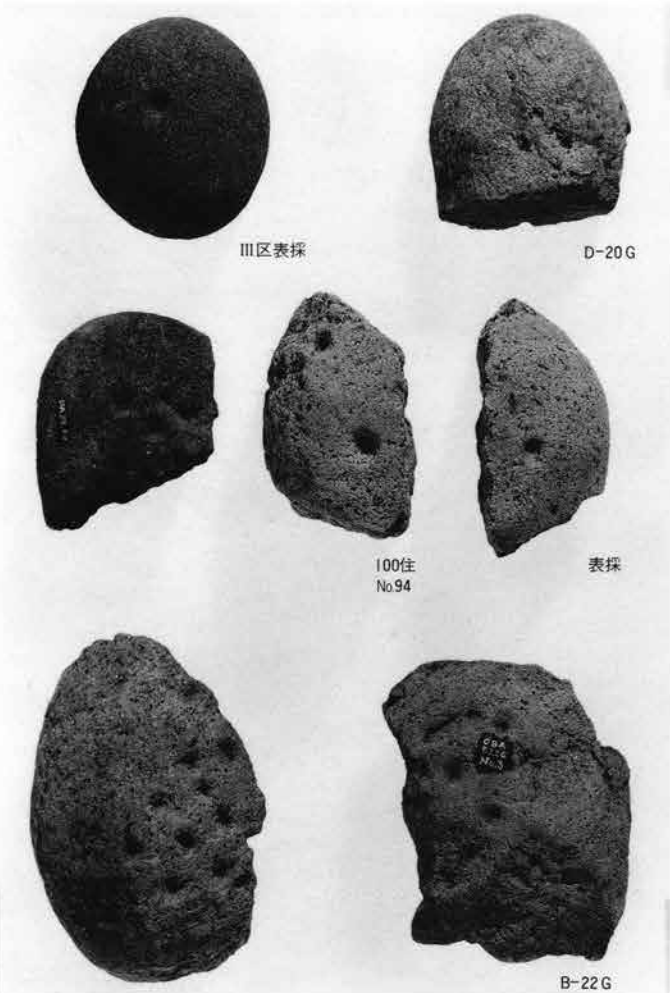
4 遺構外出土石器 磨石



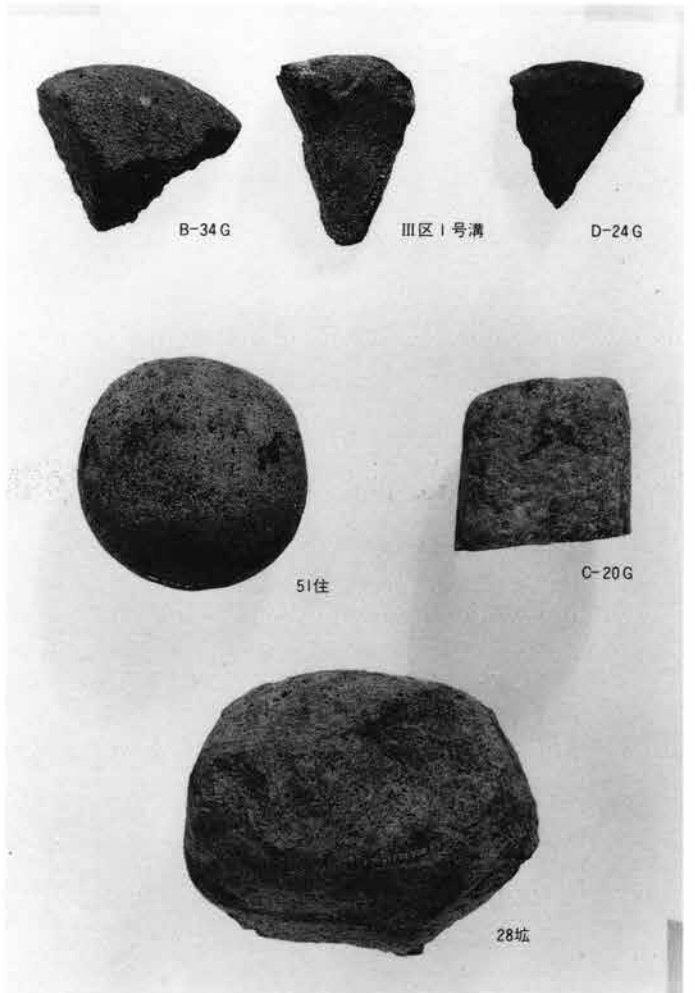
1 遺構外出土石器 磨石



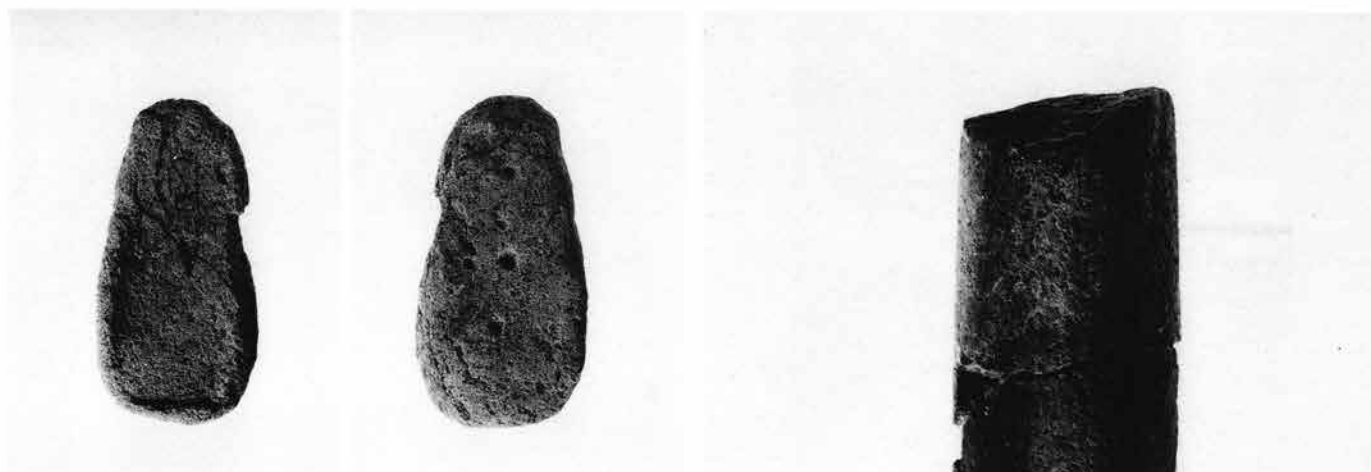
2 石皿



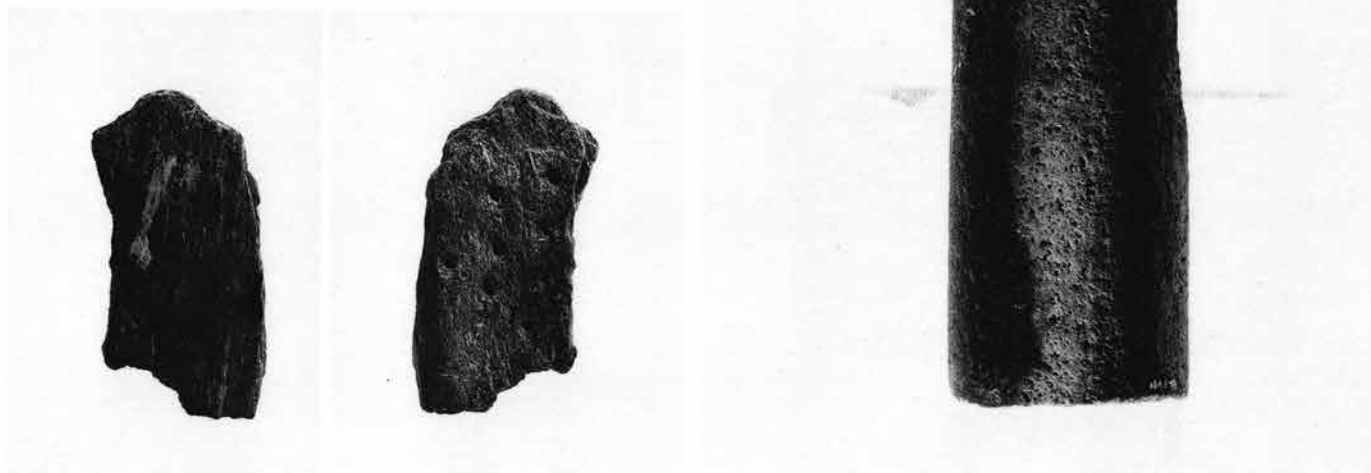
3 多孔石



4 石皿他

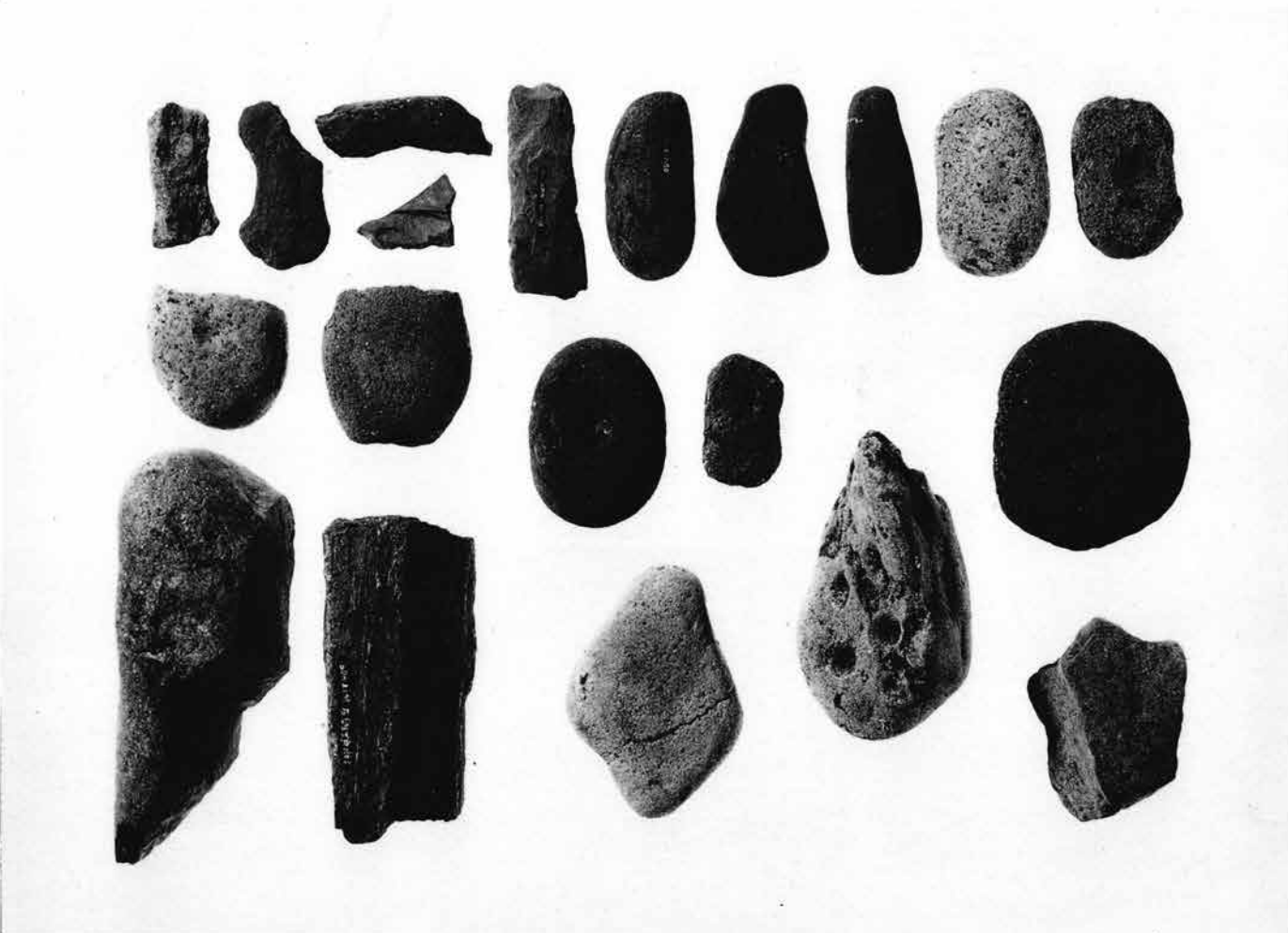


1 石皿 (C-23G)

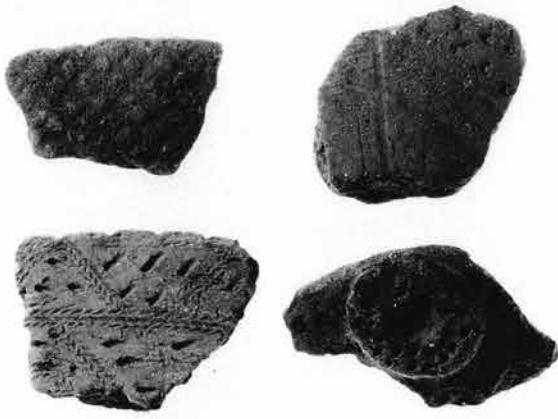


2 石皿 (5号住居址出土)

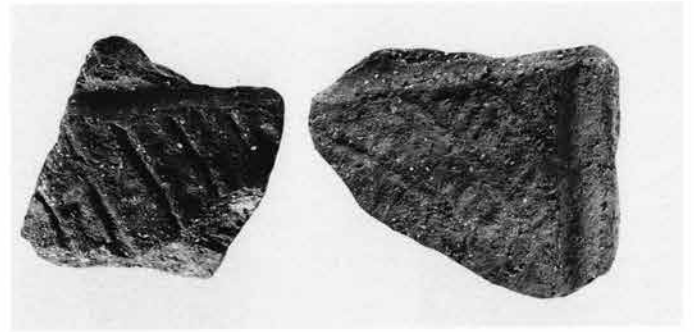
3 石棒 (B-29G)



4 21号住居址石囲い炉に使用されていた石柱と石器 (周辺出土石器を含む)



1 早期・前期の土器 グリッド出土



2 附加条第2種R+R
加曾利E3式古 B-24G



3 0段3条複々節RLRL
加曾利E3式 C-23G



4 附加条第2種LR+L
加曾利E3式(?) C-D-24G



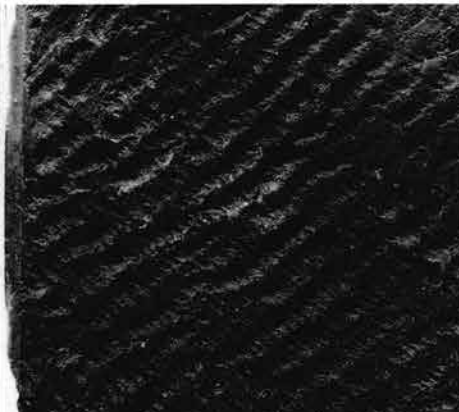
5 0段4条複節RLR
加曾利3式古 C-21G



6 直前段反撚LLR
加曾利E3式古 24号住居址



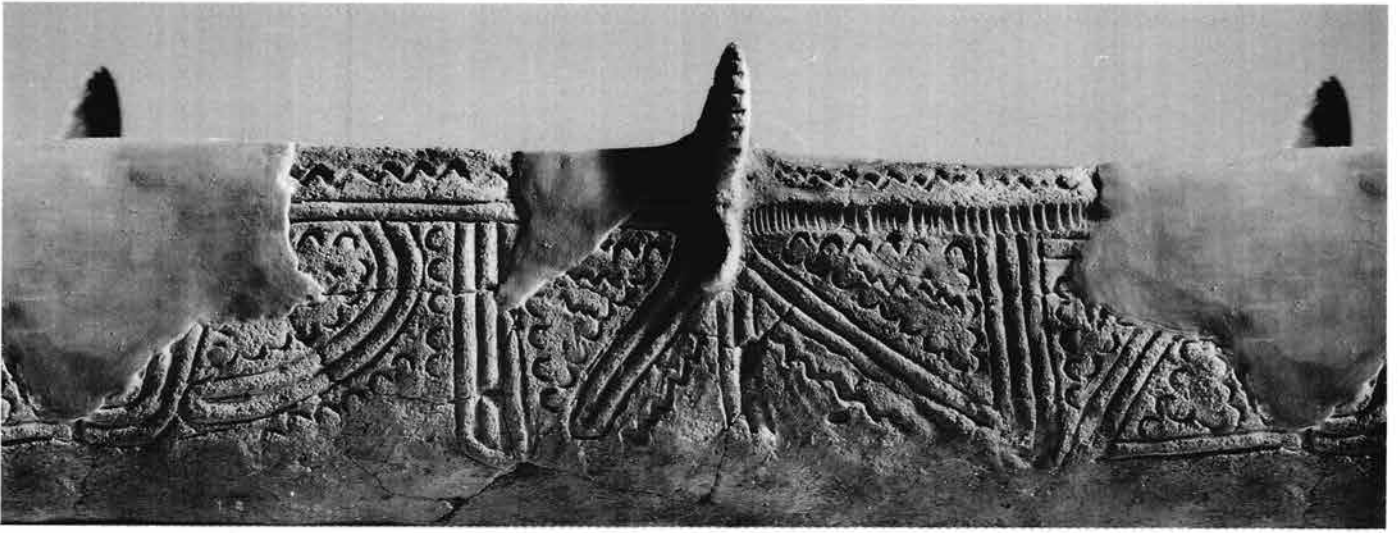
7 0段3条前々段反撚RLL
加曾利E3式(?) D-26G



8 同7(見かけ上は0段6条となる)
加曾利E3式古 24号住居址



9 0段4条RL
加曾利E3式 C-23G



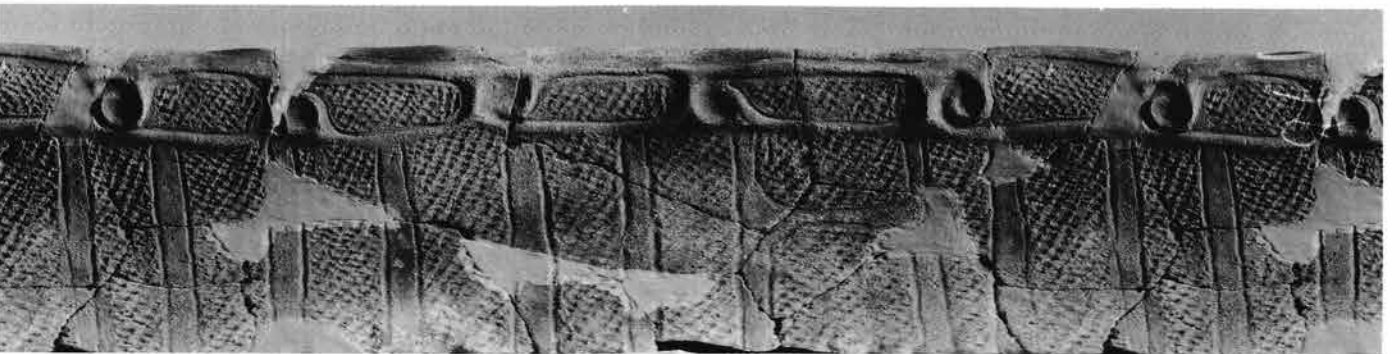
9号土坑



23号住居址 埋壺



120号住居址



C-25グリッド



108号土坑 埋設土器



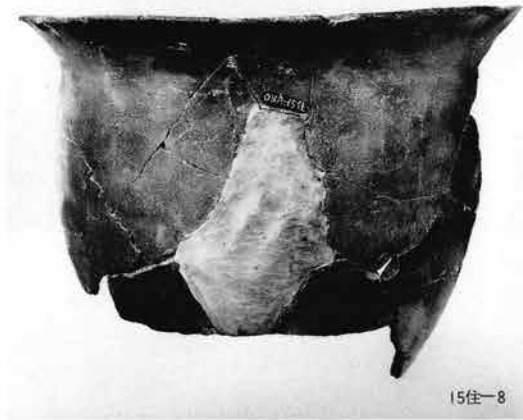
15住-2



15住-6



15住-5



15住-8



42住-4



43住-2



43住-3



42住-6



43住-5



43住-4



43住-6



65住-3



53住-3



65住-1



66住-2



66住-1



66住-7



66住-5



66住-9



66住-8



66住-6



68住-1



68住-2



68住-3



71住-10



71住-1



71住-2



71住-3



71住-4



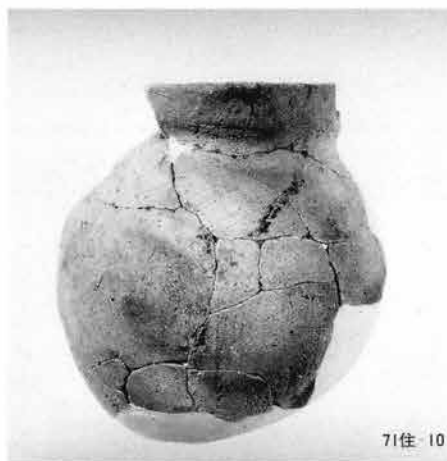
71住-6



71住-7



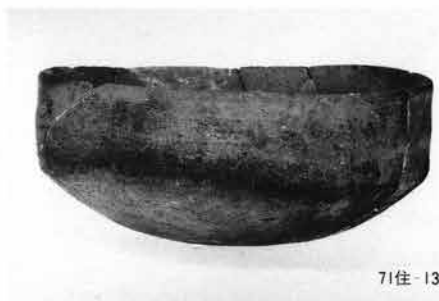
71住-5



71住-10



71住-14



71住-13



71住-18



71住-19



71住-17



71住-16



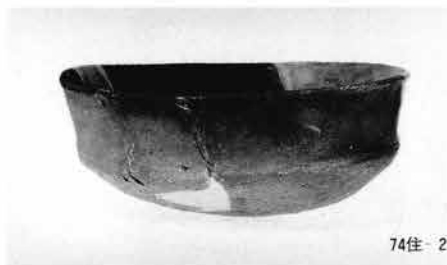
74住-1



74住-5



74住-7



74住-2



74住-3



74住-8



74住-4



74住-6



74住-10



74住-12



74住-13



74住-22



74住-19



74住-21



74住-14



74住-24



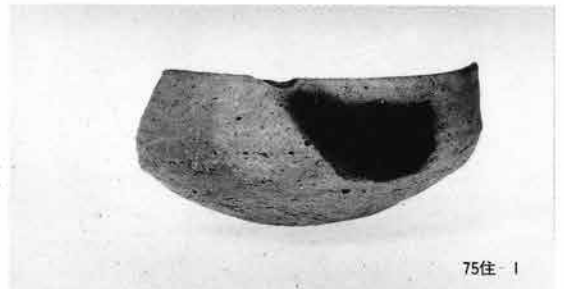
74住-30



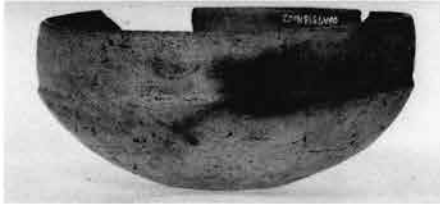
74住-18



74住-26



75住-1



75住-4



75住-5



75住-12



75住-11



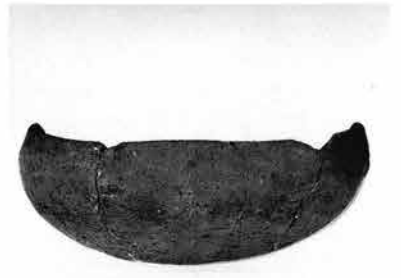
75住-13



75住-16



75住-17



75住-18



75住-7



75住-10



75住-19



75住-27



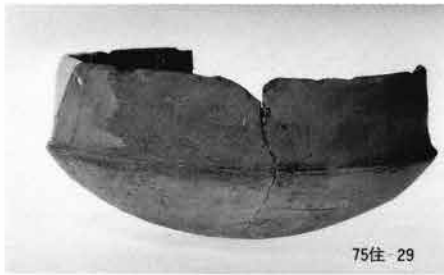
75住-23



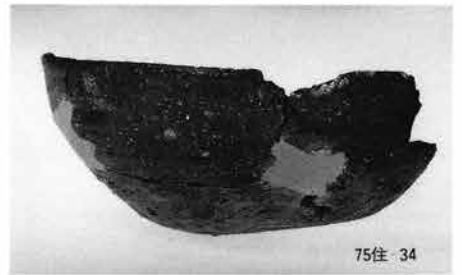
75住-32



75住-41



75住-29



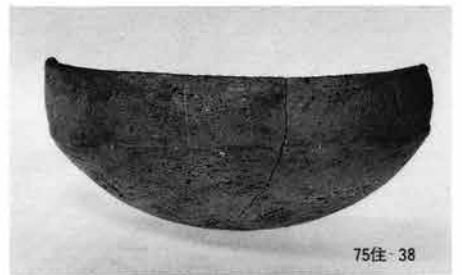
75住-34



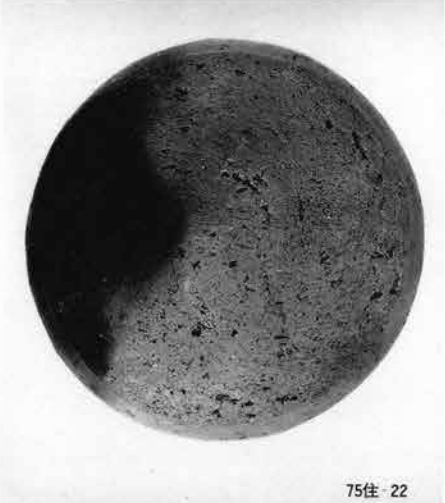
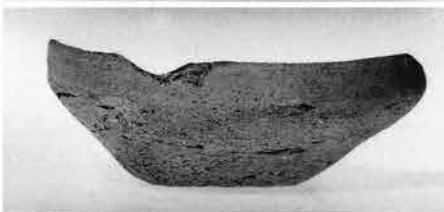
75住-40



75住-36



75住-38



75住-22



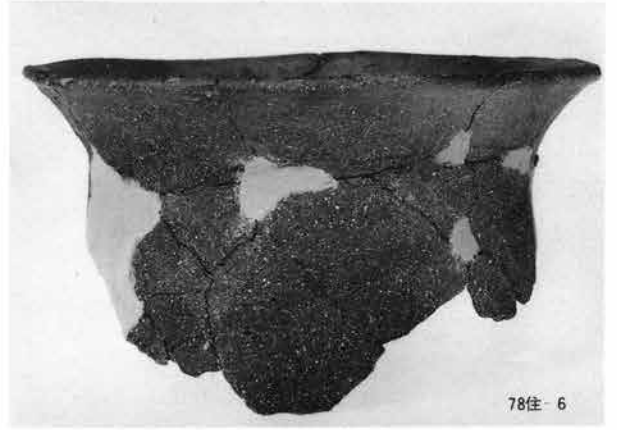
75住-30



75住-39



78住-3



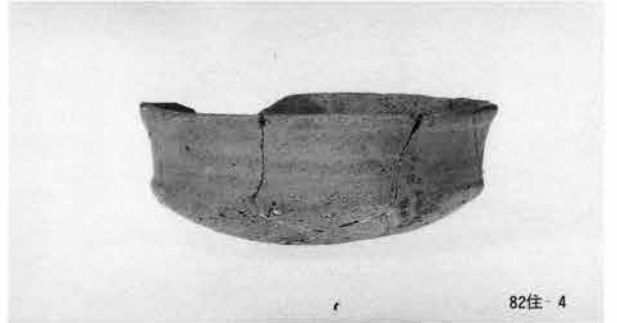
78住-6



81住-12



78住-1



82住-4



81住-1



82住-1



80住-3



81住-5



81住-6



81住-8



81住-11



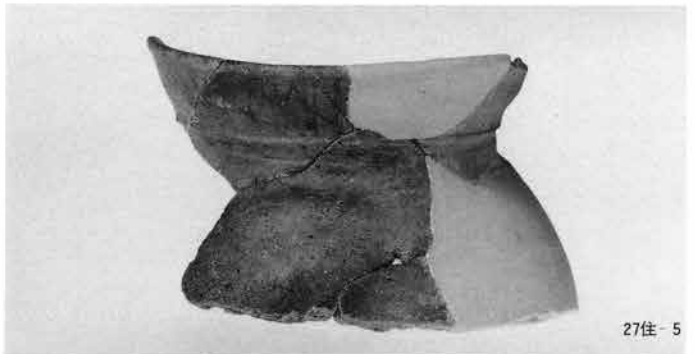
81住-7



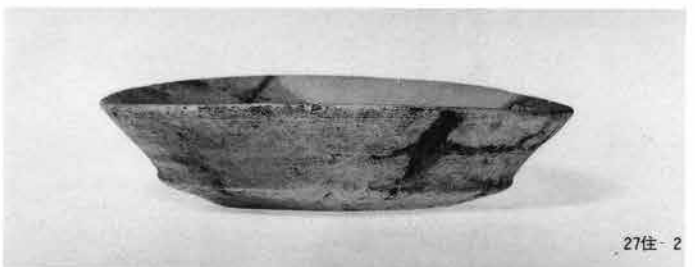
16住-5



27住-5



27住-5



27住-2



64住-1



64住-3



64住-2



64住-4



64住-8



64住-11



64住-13

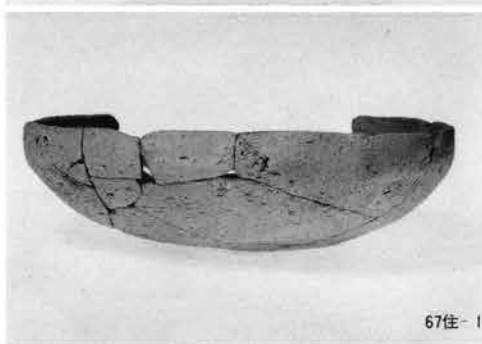


64住-14



80住-4

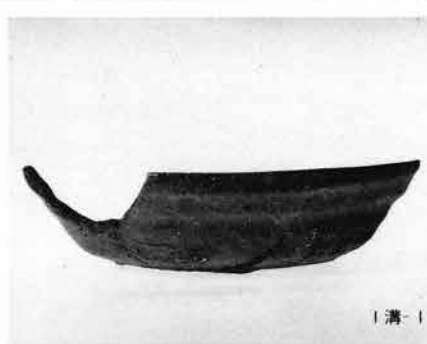
I溝-8



67住-1



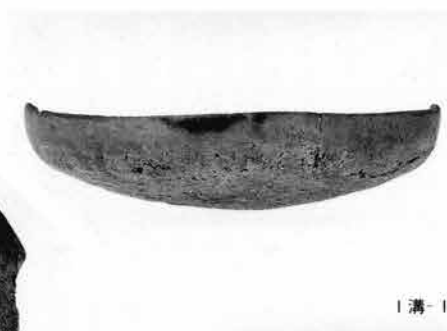
70住-2



I溝-1



80住-6



I溝-1



I溝-2



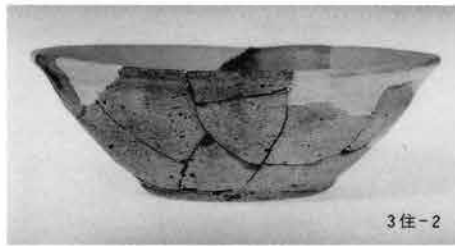
I溝-16



I溝-12



1住-2



3住-2



8住-1



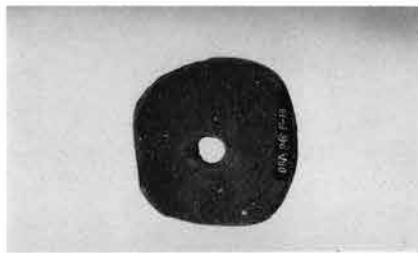
1住-3



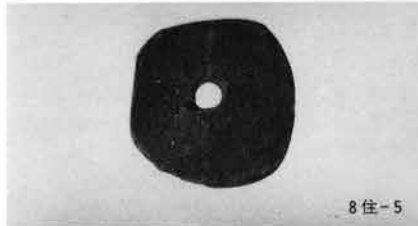
3住-3



7住



8住-5



8住-4



9住-1



10住-2



10住-7



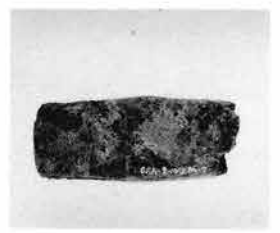
6住



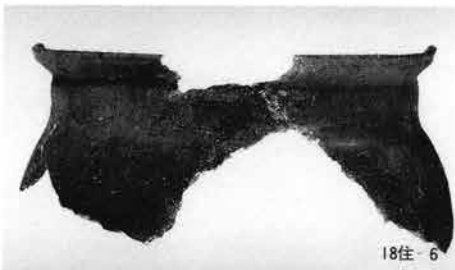
10住-3



10住-4



10住-8



18住 - 6



32住 - 1



34住 - 5



28住 - 7



32住 - 2



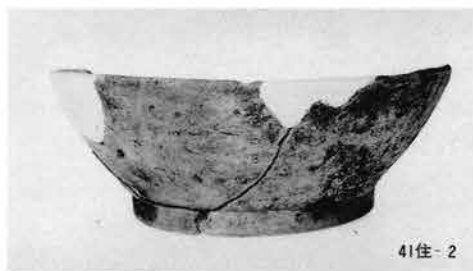
34住 - 8



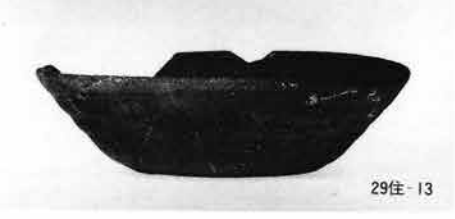
28住 - 6



40住 - 1



41住 - 2



29住 - 13



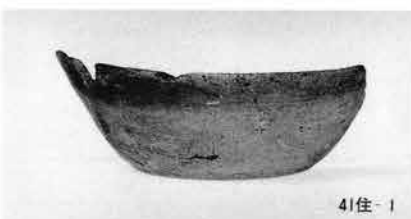
40住 - 2



41住 - 3



29住 - 9



41住 - 1



34住 - 12



38住 - 5



44住 - 2



38住 - 4



44住 - 1



45住-2



45住-9



47住-3



41住-4



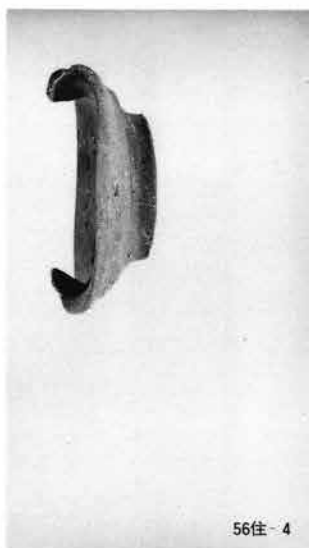
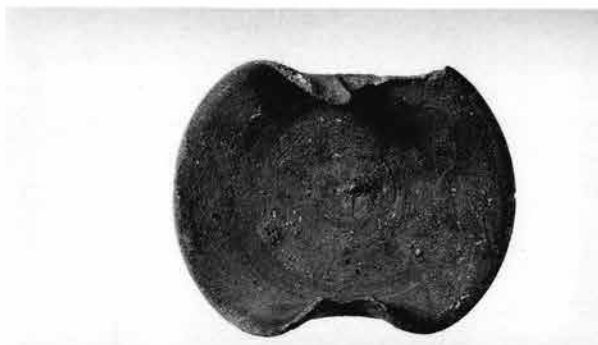
45住-11



51住-3



51住-5



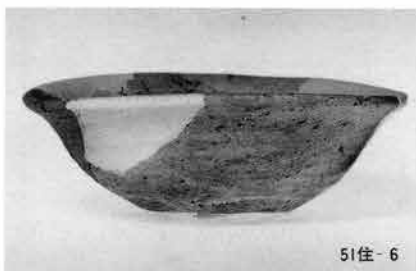
56住-4



55住-2



56住-3



51住-6



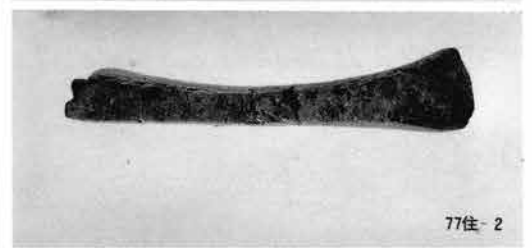
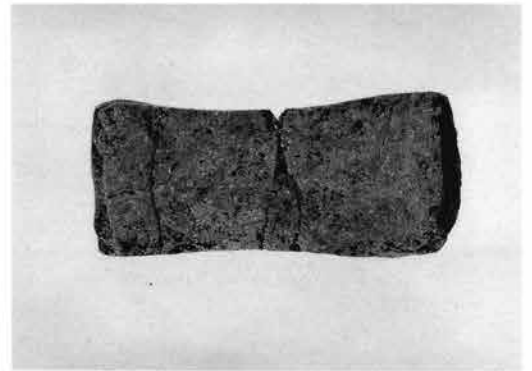
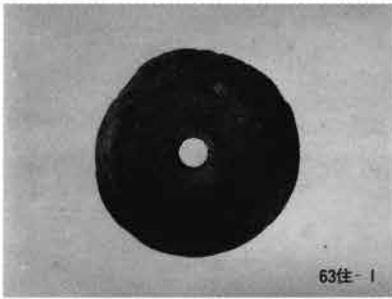
51住-10



56住-9



56住-7



小町田遺跡

国道122号(太田バイパス)道路改良工
事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II

印刷 昭和59年12月20日

発行 昭和59年12月25日

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話(0279)52-2511(代表)

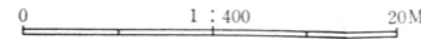
印刷／朝日印刷工業株式会社

小町田遺跡正誤表

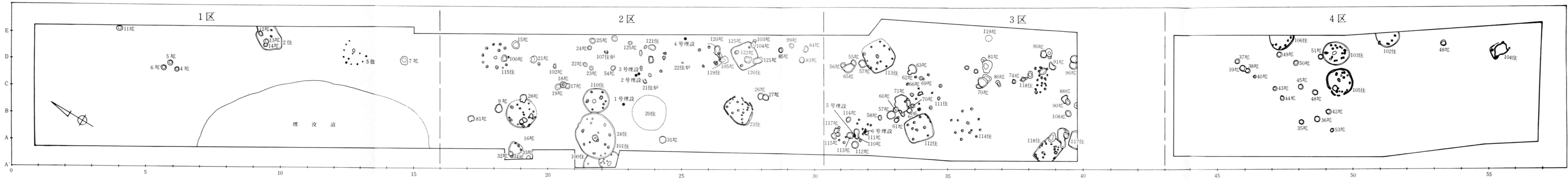
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

頁	訂 正 箇 所
例言 10	以下の学生発掘調査 → 以下の学生の発掘調査
P 164 1行目	多子石 → 多孔石
PL20- 2	31号土坑 → 102号土坑
" - 3	同2 崩落状況 → 103・104号土坑
" - 4	32号土坑 → 105・106号土坑
" - 5	33号土坑 → 108号土坑
" - 6	36号土坑 → 同5 一括土器出土状態
" - 7	38・39号土坑 → 110号土坑 (5号埋設土器と重複)
" - 8	41号土坑 → 111号土坑 (6号埋設土器と重複)
PL22- 1	同7 全景 → 51号土坑
PL24- 2	102号土坑 → 31号土坑
" - 3	103・104号土坑 → 同2 崩落状況
" - 4	105・106号土坑 → 32号土坑
" - 5	108号土坑 → 33号土坑
" - 6	同5 一括土器出土状態 → 36号土坑
" - 7	110号土坑(5号埋設土器と重複) → 38・39号土坑
" - 8	111号土坑(6号埋設土器と重複) → 41号土坑
PL47中列上から2つ目	120住 → 20住

小町田B遺跡 全体図



縄文時代



古墳～平安時代

